

---

# ガーディアン

崎浜秀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ガーディアン

### 【Nコード】

N8166A

### 【作者名】

崎浜秀

### 【あらすじ】

鬼獣を封印する力を持つ封術士の彩と、鬼獣を倒す力と封術士を守る力を持つガーディアン（見習い？）の守。変わった二人の織り成す変わったバトルファンジー？果たして、二人の運命は！

## 第一話 雨の中の少女

激しく降り頻る雨。

舗装された道路に無数の雫が落ち、音を立て弾けた。一つ一つでは小さな音も、一斉に音を立てればそれなりの音になる。

何層にも重なった灰色の雲は、所々がどんよりと漆黒色に染まりつつあり、まだ雨脚は強まりそうだった。辺りはまだ夕暮れだと言うのに、この雲のせいで夜のように暗く静まり返っている。時折、自動車が行道を通り抜け、水溜りを踏みつけ泥水を激しく撒き散らす。雨は次第に強まり、灰色だった雲もいつしかどんよりとした暗雲へと変わり、時折雲の中で青白い稲光がして、雷鳴を轟かす。

その雷鳴響く中、学校の屋上に一人の少女が居た。雨に濡れ、着ている服が体に張り付き、少しばかりふつくらとした胸とホツソリとした括れが引き締まって見える。肩口まで伸ばした黒髪は、水を吸い更に美しく艶立ち毛先から点々と雫が滴れる。大きな二重の目を閉じ、ふつくらとした唇を小さく動かす。細い腕には自分の身長ほどの杖を持っていた。その杖の頭には球体の水晶のようなものがあり、それが青白い光を放つ。

すると、暗雲から雷鳴が鳴り響き、少女の手にする杖に、青白い稲妻が落ちる。辺りが一瞬光に包まれ、すぐに元の暗さに戻る。少女はいつ移動したのか、杖から離れた場所に立ち尽くしていた。杖の頭の水晶は未だ青白い光をおび、微かに辺りから煙をあげている。だが、暫くすると、その水晶の光は収まり杖が床に倒れ、カランカランと、小さな音をたてる。

「逃げられた……」

独り言の様にボソツと呟いた少女はゆっくりと足を進め、寝転がる杖を右手に取る。まだ、少しだけ熱を感じるが、少女はそんな事

など気にせず、杖に息を吹きかけた。すると、杖は手の平サイズの大きさにまで小さくなり、少女はそれをネックレスの様に首に掛けた。

### 翌朝。

昨日の雨が嘘の様に晴れ、青々とした清々しい空が顔を出している。眩しいくらいに強い日差しに、照らされながら一人の少年が朝早く学校に登校した。まだ、校門も開いていない時間に。

身長160後半の少年は、誰も居ない事を確認すると、軽く扉に飛び乗り校内へと楽に侵入する。そして、すぐさまトイレに駆け込むと、ねぐせでボサボサになった髪を鏡を見ながらチヨイチヨイ整えてゆく。まだ眠いのか、その間も何度も欠伸を繰り返し、眠そうな表情を何度か見せる。

ある程度ねぐせを整えると、制服であるYシャツに着替え、何事も無かったかの様にトイレを後にする。まるで覇気の間じられぬこの少年は、足音も立てず静かに階段を上がり三階にある自分の教室に足を進める。

静まり返った廊下は、少し不気味だが少年は気にせず足を進める。そして、三階の一番端にある教室の前で足を止め、

「行き過ぎた」

と、小さく呟き回れ右をして、隣の教室へと入っていった。教室に入るやいなや、窓際の一番前の席に少女が座っている。不思議そうな表情をする少年は、足を止めポーツとした表情で彼女の事を見つめていた。ポケーツとする少年に気付く少女は、何か言おうとしたがその前にくしゃみをした。

「くしゅん！」

可愛らしいそのくしゃみを聞いた少年は、「ほっ」と、目を細めたまま呟くと、腕を組みながら自慢げに言う。

「風邪  ですな？  転入生」

「うっ！  そんな呼び方するな！  私は水島彩<sup>みずしまさや</sup>！  これで、自己紹介するの十回目位だよ！  ちゃんと覚えてくれなきゃ困るよ！  
ひのまもる  
火野守」

「なぜ、フルネームで呼ぶ……。  転入生」

「あーあ！  もう、いい加減に、転入生って呼ぶのやめー！」

少々息を荒げそう叫ぶ彩の音が、廊下中に響き渡る。反響する彩の声に耳を傾ける守は、反響が聞こえなくなってから、首を傾げ不満そうに口を開いた。

「なぜ、転入生と呼ばれたくない？」

「嫌なものは、嫌なの」

「何故、嫌なんだ？」

「さっきも言ったでしょ？」

少し苛立ちながらも、彩は無理やり笑顔を作り守を見据える。少々困った表情を見せる守は、欠伸をした後考えるのがめんどくさくなったのか、そそくさと自分の席へと向って歩き出した。のんびりとした動きで着席する守の姿を見て、呆れた様のため息を吐く彩は半笑いしながら言う。

「守は、こんな朝早くから学校来て、何するの？」

「へっ？  やる事なんて、一つしかないじゃん」

信じられないといった顔で彩の方を見る守の表情に、彩は少し驚

息を呑みその答えを待つ。暫し沈黙が続き、守が眠そうに欠伸をして机にうつ伏せになった。その行動に眉をピクピクと動かした彩は、学校中に響くような声で怒鳴った。

「あんたのやる事って、寝る事かい！」

その怒鳴り声に、守は呆れた様に言う。

「まだ、この時間学校に入っちゃいけないんだぞ。先生にバレたら指導食らうぞ。静かにしろ」

「うつ……。こつ言つ時はまともな意見を……」

「そんじゃあ、お休み〜」

守はそう呟くとそのまま眠りに就いた。そんな守を見つめる彩は、表情を引き攣らせながら、首からぶら下げる小さな杖に向かって話しかける。

「嘘よ！ 絶対嘘！ あんな奴がガーディアンだ何て信じないわ！」  
『何を仰るんですか！ あの方こそ、正真正銘、火のガーディアンです！』

「あんなに弱そうで貧弱そうな奴が、ガーディアンな訳無いでしょ！」

『そう言われましても……』

「良いから、他のガーディアンを探して！」

『ハア……。わかりました』

杖から少し困ったような声が聞こえた。だが、それはあくまで彩に聞こえる程度の声で、守からしてみれば完全に独り言なわけなのだ。だから、守は少々迷惑そうな表情を浮かべながら言った。

「転入生は、独り言が趣味なのですか？」

「なう！ 転入生って、言うな！ コラ！」

「まあ！ 近頃の若い子って、切れ易くて怖いわ！」

彩を馬鹿にする様な口調でそう言う守は、怯えた様な目をしながら彩を見つめた。ますます、守の事を変な奴だと思つ彩は、これ以上聞らない方がいいと判断し、無視する事にした。シーンと静まり返つた教室に、静かに聞こえる守の寝息を彩のくしゃみが掻き消した。

「くしゅん。うっつ。もう駄目……。昨日、雨に濡れたせいだよ。完全に風邪引いたかも」

机に倒れこむ彩は、ウトウトと眠りに就きそうになつたが、その瞬間、何か強い力を屋上から感じ目を見開いた。そして、首から提げる杖に向つて小さな声で言う。

「今の気配って！」

『はい。昨日、逃がした鬼獣です！』

「まさか、こんな早く戻つて来るとは思つても見なかつたね」

『彩様、気をつけてください！ あの鬼獣のレベルは相当なものですから』

「任せなさいって、この私を誰だと思つてるの！」

笑みを零し彩はそのまま席を立ち教室を後にした。そのすぐ後だ。守が欠伸をしながら目を覚ましたのは。その首には、剣のネットワークをぶら下げていた。

## 第一話 雨の中の少女（後書き）

どうも！ 崎浜秀です。

『ガーディアン』第一話、読んで下さりありがとうございます。

本来、色々設定とか考えてから書くはずだったんですが、何か今日は調子が良い！ とか思っちゃって、後先考えずとりあえず書いてちゃったみたいな感じの作品です。

まだ、他にも連載が二本あるのに、今連載して大丈夫だろうか？

と、何かと心配ですが、ガーディアンは、とりあえず二週間に一話ペースで投稿できたら良いかな？

まあ、この先どうなっていくか分かりませんが、次話までに細かい設定とかまとめておきます。

それでは、何か感想などありましたらお聞かせください。よろしくお願いします。



## 第二話 封術士と鬼獣とガーディアン

屋上に向ったはずの彩は、今静かな廊下を大騒ぎで走っていた。まだ、登校時間では無い為、誰も居ない廊下はとても静かで、彩の足音はやけに五月蠅く聞こえる。

それから、少し遅れて何かが廊下を駆け抜けるが、それが一体何なのかは分からない。ただ、分かるのはそいつが通った廊下の窓ガラスは音を立って崩れ落ちてゆく。

窓ガラスの割れる音に彩は大きな声を上げる。

「どう言う事よ！ ウィンクロード！ 何で奴のパワーが上がってるわけ！」

『そう言われましても』

右手に持った彩の身長程ある杖の頭にある水晶からそんな返事が返る。すると、彩は不満そうに表情を引き曇らせ先程より大きな声で言う。

「何でわかんないのよ！ あんた、何のために居るわけ！」

『私は彩様をサポートするためにですわ……』

「もういいから、奴がパワーアップした原因を探って！」

『わかりました。それでは、暫しお時間を』

その後、杖から声が聞こえず、彩はひたすら走った。その時だ。急に角から出てきた守と激突したのは。

「イタタタッ……」

守とぶつかり尻餅をついた彩は、お尻を右手で擦りながら守の方

を見た。仰向けに倒れる守は、頭を右手で擦りながら迷惑そうな表情をして、目を細めた。この時、杖を見られるとまずいとつさに隠そうとしたが、右手に持っていたはずの杖が無い事に彩は気付いた。

「あれ！ な、無い！ 杖が！」

「ンツ？ 杖って、あれの事か？」

眠そうな声の守が指差す先を見ると、電気を身に纏った狼の様な姿の化物が杖を銜えてコツチを見ていた。バチツ、バチツと、電気を弾く化物は、牙をむき出しにすると、杖をその場に置き彩と守の方を威嚇する。

落ち着いた様子の守は、廊下の窓ガラスが割れているのに気付く、彩の方を見て呆れた様に言う。

「転入生、学校に馴染めないからって、窓ガラス割る事ないじゃないか。それに、ペットまで連れ込んで」

「いい加減、その呼び方止めて！ それに、私はちゃんと馴染めます！ 何で窓ガラスを割るのよ！」

「ストレス解消？ じゃないの」

「あなた、私に喧嘩売ってるわけ？」

右拳を振るわせる彩に、微かに笑ってみせる守は、「まあまあ」と小さく呟いた。冷静さを取り戻した彩は、化物を見て悔しそうな表情をする。

「あ〜っ！ 何でこうなるのよ！ 大体、あんたがいきなり出てこなきゃ、こんな事には！」

「いや〜。急にトイレに行きたくなってき。アハハハッ！」

「笑い事じゃないのよ！ どうしてくれんの！」

笑う守の首を絞める彩は、明らかに殺意が見られた。

「グ…ぐるじゅっ！」

「あっ、ごめん。つい、殺意が……」

「かつ…ハア…ハア……」

苦しそうに息をする守は、首を右手で擦りながら彩の本性に驚いていた。化物と睨み合う彩は、間合いを詰めてくる化物に表情を引き攣らせ、守に言う。

「に、逃げるわよ！」

「逃げる？　ちょ、ちょっと待て！」

守の言葉すら聞かず、彩は守の手を引き走りだす。未だ、状況の理解できていない守は、廊下を走りながら彩に状況を詳しく教わった。

後ろから追いかけて来る化物が、鬼獣と呼ばれる特殊な力を持った化物である事と、彩がそれを封印する力を持つ封術士であると言うことを。そして、今大ピンチだと言う事も耳にした。

「あれ、転入生のペットじゃなかったんだな」

「だから！　その呼び方止めて！　私は　」

「今、ピンチなんだろ？　話は後にしよう」

「あんたね！」

そんな会話をしながら廊下を走り回る二人は、気付いていなかった。学校中の窓ガラスが割られているという状況に。そして、それに気付いたのは暫くたってからで、二人が鬼獣に追い込まれた時だった。

「なあ、一ついいか？」

「何？ 手短にお願い」

「なら、転入生、この窓ガラスどうするんだ？」

「はあ？ 今は窓ガラスより、ここから逃げる方法よ！」

完全に壁と鬼獣に挟まれ、逃げ場を失った為、彩は何とか逃げ場所が無いかと壁を手で触っていた。一方の守は迫り来る鬼獣を見据えながら、苦笑いを浮かべた。そして、次の瞬間鬼獣が守に向って駆け出した。それに驚き両腕で顔を覆う守だが、その時首から提げていた小さな剣のネックレスが輝き、鬼獣をなぎ払った。

吹き飛ばされた鬼獣は廊下を滑るように倒れこむと、ゆっくりと立ち上がり真っ直ぐに守を睨みつける。

驚いた様子の彩は、守の前に輝く小さな剣のネックレスに目をやり声を上げた。

「アーツ！ これ、サポートアームズじゃない！ やっぱり、あなたもガーディアンだったのね！」

「……。はい？ 何を言っているんです？ 転入生」

「何って、あなた、ガーディアンでしょ」

啞然とした表情を変えない守に、少々表情を引き攣らせる彩は不安そうに訊く。

「ガーディアンじゃないの？」

「そんなの知るわけ無いじゃないですか。転入生さん」

堂々とした口調でそう言う守の言葉に、言葉を失い愕然とする彩は意識が遠のきそうになった。そんな彩の体を支えた守は、呆れた様な表情で言う。

「転入生！ 大丈夫か！」

「ううっ！ もう、何なのよさつきから！ 転入生、転入生って！ 大体、ガーディアンでもないあんたが、何でサポートアームズなんか持ってるのよ！」

「なぜ、ここでキレる。第一、何だよそのサポートアームズって？」  
「それよ！ それ！ 首からぶら下げてるそれ！」

未だに光り輝く小さな剣のネックレスを指差す彩は、怒りの籠った声でそう言う。その言葉に不満そうな表情を見せる守は不貞腐れたような態度で言う。

「俺がネックレスぶら下げちゃ悪いのか！ 自分だつてぶら下げるくせに！ 大体これは、この前出かけた時に変なおっさんから貰ったんだよ！」

「変なおっさん？」

「ああ、黒いフードなんか被ったおっさんだよ。『これは、お前にピッタリのアームズだ』とか何とか言っちゃって」

「何で、簡単に貰っちゃうかな。大体、説明聞かなかったの？」

「何の説明だよ」

不満そうな表情でそう言う守は、目を細めて彩を見据える。その時、今まで黙っていた鬼獣が体から電気を放電させながら、守と彩に向って突進してくる。長い距離助走をつけて。体から放電する電気が、廊下に散らばるガラスをバチバチと砕きながら鬼獣は守達にぶち当たった。だが、鬼獣は辺りに電気を放出するだけで、体が弾き返される。何が起こったかも分からない守は目を丸くし彩を見て言う。

「あれ？ そういえば、転入生は封術士とか言う奴なんだろ？ 今

の内に封印しろよ」

「だから、無理だつて。杖が無いから」

「役に立たんな。転入生は」

「あんた、喧嘩売ってる？ つて、言うかあんたサポートアームズ持ってたんだから戦いなさいよ！」

「悪い。俺、平和主義者だから」

当然の様にそう言う守は自信満々に胸を張る。そんな事を言っている状況じゃないと、分かっている彩は怒りを堪えながら言う。

「あのね。この状況みて、平和主義者とか言ってる場合？ 言っ

ておくけど、今緊急事態なのよ」

「そう言われても、こいつの使い方わかんないし」

「念じればいいのよ！」

「念じるねっつ」

やる気の無い声でそう言った守は、心の中で念じる。すると、光を放っていた小さな剣が急に大きくなり、守の手に柄が握られていた。重々しいその剣を片手では持つ事が出来ずバランスを崩し前方に倒れる。倒れている守の姿を見つめる彩は思った。『終わった』と。

### 第三話 最強のサポートアームズ フロードスクウェア

前のめりに倒れると、剣の切っ先が廊下に激しくぶつかる。甲高く澄んだ音が廊下に響き、それが反響して返って来る。切っ先の当たった所は、少し欠け亀裂が走り破片が廊下に転がった。柄から思わず守は手を放し、剣がカランカランと音を響かせ廊下に寝転んだ。呆れた様のため息を付く彩は、右手を腰にあて左手の中指を額に当て「うっ」と、唸り声を上げる。

振り返る守は、目を細めてやや不満そうな表情を浮かべた。彩はため息をついた後、肩口まで伸びた髪を頭の後ろで束ねゴムでとめる。真剣な顔付きになる彩に、「おおっ」と驚きの声を上げる守に、何処からともなく声が聞こえる。刺々しく生意気な男の声。

『誰だ！ この俺を乱暴に扱うのは！』

「ンッ？」

不思議そうに首を傾げる守は、辺りをキョロキョロと見回し自分と彩、鬼獣の他に誰も居ない事を確認して、ふと足元に横たわる剣に目をやる。太い鍔の中心にある水晶が、先程までと違い、赤く輝きを放っており、守は洪い表情のままゆっくりと彩の方に顔を向ける。

堂々とした表情の彩は、まるで守が言いたい事が分かっているかの様に首を縦に振り、落ち着き払った口調で言う。

「今のは、その剣が喋ったのよ」

「マジですか？」

「うん。マジですよ。当たり前じゃない。私達をサポートする武器だから喋るに決まってるでしょ？」

「そう言われてもだんな転入生。この世で武器が喋って当たり前前って

ことはないんだぞ。うんうん。わかってる。転入生の言いたい事も分かってる。だから、俺は思うんだ。これは、きつと夢なんだと」

現実逃避する守は、一人でブツブツと言葉を並べる。そんな守では役に立たないと判断した彩は、守の足元の剣に向かって声を掛ける。

「あなた、名前はなんていうの？」

『何だ！ 人に名前を聞くとときは、自分から名乗るのが常識じゃないのか！』

「ムムツ……。サポートアームズなのに、何か生意気」

コメカミをピクリと一度動かした彩は、怒りを堪える様に歯を食い縛り、ニコニコと引き攣った笑みを見せる。両手は強く拳を作られプルプルと震えていた。それでも、この場を凌ぐためにはこのサポートアームズの力が必要だと、心を落ち着かせて言う。

「わ、私は水島 彩。一応、封術士よ。あなたの名前は？」

『俺は、フロードスクウエアだ。サポートアームズ最強の武器だ！ガハハハハッ！』

「ほ、本当！ 最強の武器なの！」

『当たり前だ。何せ、伝説のガーディアンマスターに創られた最初で最後のサポートアームズだからな』

その言葉に期待に満ち溢れた表情に変わる彩は、先程まで引き攣っていた笑顔が明るく嬉しそうな笑顔に変わっていた。両手を組み明るくねだる様な声を彩は出す。

「お願い。あなたの力を貸してほしいの」

『いやだ』



彩の言葉に、フロードスクウェアは即答する。固まったままの彩は、笑顔を見せたままフロードスクウェアに聞き返した。

「へっ？ 何ですって？ 私の聞き違いじゃなければ、いやだって聞こえたけど？」

「そう言ったんだ。大体、俺女に使われるのって嫌なんだよね。それに、もし使われるにしても、お前みたいな奴よりも、もっと美人で品のある人の方が」

「何ですって！ それじゃあ、まるで私が品がないみたいでしょ！ ふざけないでよね！」

遂に怒りを爆発させる彩は、大声でフロードスクウェアを睨み付ける。横たわったままのフロードスクウェアは、現実逃避する守に気付き落ち着いた口調で声を掛けた。

『おい。お前。この女をどうにかしてくれ』

「あゝっ。早く目覚めてくれ。俺、早く起きろ。寝てる場合じゃないだろ」

『オイ！ 聞けよ』

「ううっっ。何も聞こえない。うん。俺は何も見えないし、何も聞こえない。朝、転入生には会っていないな　ぐあっ」

殴られた。カ一杯、彩に。全ての怒りをぶつけるかの様に。守は頭を押さえたまま、「はうっっ」と、変な声を上げながら蹲った。その痛みに、守はハツとし、目を閉じ「痛くない、痛くない」と、小声で自分に言い聞かす。

そんな守を現実に取り戻す一撃を、彩がお見舞いした。蹲る守の後頭部に目掛け、彩の左足が振りぬかれたのだ。流石の守もその痛みで立ち上がり彩に向かって怒鳴った。

「何すんだ！ 転入生！ 痛いじゃないか！」

「あんたのサポートアームズでしょ？ どうにかしなさいよ」

「はい？」

守は惚けた様な声を上げ、彩の指差す先を見る。その先には横たわる剣が置いてあった。それを見た瞬間、守は廊下に前屈みに倒れ、妙な声を上げる。

「や、やっぱり、夢じゃなかったのか……」

「夢なわけないでしょ。とりあえず、そいつはあんたのだし、とりあえず、鬼獣は頼むわよ」

その言葉に、驚いた様に顔を上げた守は、すぐさま立ち上がり彩の方に体を向けた。そんな守の顔を見た彩は、不思議そうに首をかしげ「何？」と、可愛らしく言い微笑む。当然、剣など持った事のない守に、戦い方など知る由もなく、首を激しく左右に振り言葉を返す。

「待て待て。お、俺が戦えるわけないだろ？ 第一、この現代っ子の俺が、剣なんて持った事ある様に見えるか？ 見えないだろ。当然、俺に戦えなかって無理な話。分かってもらえたかな？」

早口でそんな言葉を並べる守に対し、確実にその話を聞き流している彩は、「うんうん」と、適当に相づちを打った後、ニコツと可愛らしく微笑み返事を返す。

「それじゃあ。お願いね」

「あの〜っ。聞いてました？ 転入生さん」

「うん。聞いてたよ。女の子に戦わせるわけにはいかないから、俺が戦うって。何て男らしいの。私、惚れちゃいそう」

「いや。そんな事一言も言っていないし、転入生に惚れられても困りもんだよ」

愕然としながらそんな事を呟く守は、結局彩の言う事も一つあると思い、横たわるフロードスクウェアの柄を握った。ため息を零し、フロードスクウェアを持ち上げようとした守だが、フロードスクウェアはピクリとも動かず、膝の位置までようやく持ち上がるくらいだった。

「フヌヌヌツ！ お、重すぎる！」

力が抜け、またフロードスクウェアがはげしく廊下に打ち付けられる。その瞬間に、『イタツ！』と、フロードスクウェアが叫んだ。それとほぼ同時に守は廊下に腰を落とし、「駄目だッ」と、声を上げた。

呆れる彩は、ため息を漏らしガツクリと肩を落とす。向かいに居る鬼獣は、体中の電気をその間も集め、次第にバチバチつと言う音が大きくなっていった。空も少しずつ明るくなり始め、町の方には薄らと朝日が見え隠れしている。

「このままだと、人に見つかっちゃうわね」

「見つかるとかまずいんか？」

「まずいに決まってるでしょ。あんな化物が学校で暴れてるのよ。」

大騒ぎになるでしょ？」

「まあ、それはそうだ」

のん気にそんな会話を交わす守と彩に対し、怒り心頭のフロードスクウェアは大きな声で怒鳴りつける。

『貴様！ この俺を乱暴に扱いやがったな！ この俺は、最強のサ

ポートアームズなんだぞ！」

「あ〜っ。わりっ。でも、最強の武器の割りに、一人では何も出来ないもんだな」

『な、なななんだと！ 貴様！ 俺を乱暴に扱っただけじゃなく、侮辱までするか！』

「侮辱って言うか、本当の事を言ったんだけどな。転入生もそう思うだろ？」

正論を口にする守に、彩も納得し「確かにそうだわ」と、呟き頷いた。怒りを露にし、フロードスクウェアは文句を言うが、守も彩もそれをただ聞き流した。そして、ゆっくりと守が立ち上がり、お尻をパンパンと二度叩き意を決した様に声を上げた。

「さて。片手じゃ無理だったし、ちよつとかつこ悪いけど、両手で持たせてもらいましょうか」

『ま、待て！ 俺は貴様なんぞに使われたく』

「一、二の、三！」

両手で柄を握る守は、カ一杯フロードスクウェアを持ち上げた。ようやく持ち上がったフロードスクウェアを、真っ直ぐ縦に構える守は歯を食い縛りながら「ニシシシ」と、笑い声を上げる。

そんな守を見ながら、彩は『あれ、両手持ち様の剣だし、両手で持つてもカツコ悪くはないんだけど』なんて、心に思いながら微妙に笑いを零した。

刃を中心に左右に分かれて見える鬼獣を見据える守は、電気を纏ったその姿に苦笑し恐る恐る彩に問う。

「あの電撃を食らうと、人は死ぬんだらうか？」

「そうね。まあ、普通は死ぬわね。きつと感電死するわよ」

「だよ……な」

小声でボヤキ、「アハハハッ」と引き攣ったような笑いを出す。首を傾げる彩はふと窓の外に目をやる。割れた窓ガラスから直視する事の出来るグラウンドを一人の少女が横断していた。黒くて腰まで届いているんじゃないかと思わせるほど長い髪をなびかせながら。

「ちょ、ちよつと！ ま、ままままずいわ！ 生徒が登校してきちゃったわ！」

「そつか。もうそんな時間なのか。それは、まずいな。って、皆川さんじゃないですか！」

「皆川さん？ 誰？」

「えーっ！ 皆川さんを知らないんですか！ 転入生は！」

驚いた様な声を上げる守は、振り返ろうとしたが目の前の鬼獣に目が行き、焦ったように言い切る。

「こんな事してる場合じゃない！ 早くこの場をおさめないと、俺が転入生と同じ様に不良だと思われてしまう！」

「私は不良じゃないわよ。第一、何で不良だと思われるのよって、この割れた窓見ればそう思うわよね。普通」

半笑いする彩は右肩を落として、割れた窓ガラスを見た。『流石にこれはやばいだろ』と、彩は心の中で密かに思った。

## 第四話 落雷

フロードスクウェアを真っ直ぐ構える守は、ジッと鬼獣を睨む。割れた窓から生暖かな風が入り込み、掲示板に張つてある紙が激しくはためく。そして、風が急にやみ静まり返る。嵐の前の様に静まり返り、目の前の電気を纏った鬼獣がゆっくり口を開く。バチバチと、大きな音をたてながら開かれた口には、小さな牙の様なものが数本並んでいる。

自分がこんな化物と戦うなんて思つても見なかつた守は、極度の緊張から何も考える事は出来ず、ただ真っ直ぐに鬼獣を見据えていた。息遣いは徐々に荒くなり、次第に目が霞み始めた。

『お前、戦いは初めてか?』

何の前触れも無くフロードスクウェアが声を掛ける。もちろん、この時代に剣などもって戦つた事がある訳も無く、守は当たり前のように言う。

「この時代に剣なんて持つた事ある奴の方が不思議だぞ」

『何! それでは、人間はどうやって鬼獣から身を守ってるんだ!』

「さあ? そもそも、鬼獣つてのが居る方が不思議なんですけど」

「

『何と言う事だ! この時代の人間は武器を持たぬと言うのか!』

「まあ、法律で決められてるから」

驚いた声を上げるフロードスクウェアに、落ち着いた声で返答する守。いつしか、守の息遣いも大分落ち着いて、視界もはつきりとしていた。そんな二人のやり取りに苛立つ彩は、右足で床を何度も叩いていた。その音はもちろん、守とフロードスクウェアに聞こえ

ていたが、全く焦る事は無かった。

守が落ち着きを取り戻した事に気付いたフロードスクウエアは、守にしか聞こえない小さな声で話をする。

『いいか。俺の言う通りに動け』

「うん。出来る限り、そう出来る様努力はする」

『良い返事とは言いがたいが、まあいいだろう。それじゃあ、まず奴に突っ込め』

「ほっ。奴につっこめか。わかった。よし、いくぞ！」

守がそう言うと、右手を柄から放し鬼獣に向って素早く突き出して大声で叫ぶ。

「何でやねん！」

辺りの空気が一瞬凍り付き、鬼獣の電撃も本の一瞬だが弱まった。すぐさま右手を引き、フロードスクウエアの柄を握り直す守は、苦しそうな表情を浮かべやり切った様に笑みを浮かべる。その瞬間、呆れたような声でフロードスクウエアが問う。

『今のは何だ？』

「今のが、ツッコミって言うのだ。あんな風で良い訳 無いよな」

『当たり前だ。それに、俺は突っ込めと叫びたはずだ』

「だから、ツッコミを」

『良いから突っ込め！』

力強いフロードスクウエアの言葉に、渋々守は走り出した。フロードスクウエアが重いため、思う様に走る事の出来ない守は、歯を食い縛り必死に廊下を駆ける。すると、電撃を纏う鬼獣が守に向って走り出す。と、同時にフロードスクウエアが言う。

『俺の言う呪文を唱えろ！』

「呪文？」

『いくぞ！ 我、地を司る者なり、揺ぎ無く佇む地を割き、今、汝を滅す！』

「え〜っ、我、地を司る者なり、揺ぎ無く佇む地を割き、今、汝を滅す」

守はフロードスクウェアに言われたとおりに呪文を言う。その呪文に、彩は耳を疑い驚いた様に叫ぶ。

「こんな所で、地系最強の術を出すつもりなの！」

そんな声は守とフロードスクウェアには聞こえていない。フロードスクウェアの刃を廊下に向けた守は、フロードスクウェアに言われた言葉を大声で叫びながらフロードスクウェアを廊下に突き刺す。

「地を割き喰らえ！ 地獄の牙！」

フロードスクウェアが廊下に突き刺さる。その瞬間、彩は思わず目を閉じたが、バチバチと電撃が走る音が響き、守の声が聞こえた。

「のわっ！」

何も起きていなかった。ただ、フロードスクウェアが廊下に刺さっているだけで、何もおきては居らず、電撃を纏った鬼獣は無傷で守と彩の間に立っていた。キョトンとした表情の彩は、何がどうなっているのか分からず、首を軽く傾げる。と、同時にフロードスクウェアが慌てた様子で叫んだ。



『ど、どうなってるんだ！ 何故、地獄の牙が発動しない！ まさか、貴様、呪文を間違えやがったな！』  
「人のせいですか……。どっちかって言うと、俺の方が死に掛けたんですけど」

微かにだが焦げ臭く、守の前髪が少し焦げている。きつと電撃が髪の毛を掠めたのだろう。そう考えると、身が震えた。目を細めフロードスクウエアを見据える守は、柄を握ると彩の方を見る。鬼獣越しに守の方を見る彩は、呆れ顔で言う。

「驚かさないでよ。本気であの術を使うかと思ってビックリしたんだから」

「いや」。コイツは使う気満々だったらしい」

『貴様！ 誰に向ってコイツなどと！』

フロードスクウエアがそう叫ぶ。その時、足音が廊下の奥から聞こえる。その足音にドキッとした守は「皆川さんだ！」と、小さな声で言うと、慌ててフロードスクウエアを廊下から抜き、構え直す。この光景を見られる前に、全てのかたをつける。そんな気持ちでフロードスクウエアを構える守は、唾を呑み込むと力強く廊下を蹴る。割れたガラスの破片を踏みしめる音が聞こえ、それに鬼獣が反応し振り返る。

だが、その瞬間にはフロードスクウエアが鬼獣目掛けて振り下ろされていた。鋭い刃に鬼獣は驚き全身の電気を、一気に放電する。フロードスクウエアが、激しく電撃とぶつかりあい眩い光が校舎の中を駆け巡る。守も彩もその光に目を塞いでいた。

「ウウウッ！」

「ガアアアッ！」

鬼獣の声が響くと、同時に雷鳴が町中に轟き稲妻が天高く上った。それは、傍から見れば、まるで学校に稲妻が落ちたかのようなだった。学校中の窓ガラスが砕かれ、屋上からは黒煙が立ち上っていた。

「ウウツ……………」

『ガハツ……………。貴様、この俺を……………』

掠れた声でフロードスクウェアがそんな事を呟く。その場に座り込んだままの守は、全身の力が抜けた様な感じで体がだるかった。制服は所々焦げているため焦げ臭い二オイが漂い、壁も床も天井も所々真つ黒にこげている。そのこげた廊下の向かいには壁に体を打ちつけたのか、壁にもたれて気を失っている彩の姿があった。彩の制服も微かに焦げている。

「う…………。じぬがとおもっだ」

立ち上がり衣服を叩きながらそう呟く守は、廊下に横たわるフロードスクウェアに目を落す。こいつ、どうしたら元に戻るんだ？などと、考えていると、悲鳴が聞こえた。

「キヤーツー！」

「今の声は、皆川さん！」

もう、考えている余裕も無く守は悲鳴のした方に走りだした。丁度、角を曲がり階段を下りようとした所に少女が一人すわりこんでいる。何が起こったのか分からないが、守は傍に駆け寄り声を掛けた。

「な、何があつたんです？」

「い、今、犬の様な姿の化物が……………」

「それって、さっきの……」

目を細め考えていると、背後からいきなり彩に殴られた。頭部を殴られ、意識を失いそうになった守だったが、それを持ち直し振り返った。ニコニコと笑顔を見せる彩の右手には小さくなったフロードスクウェアが元のネックレスの形に戻っていた。それを受け取る守は、不満そうな表情を浮かべると彩に近付き小さな声で言う。

「痛いじゃないか！ 転入生！」

「あのね。フロードスクウェアは、あなたのサポートアームズですよ。もつと大切にしないさい。それから、私とあなたの事は誰にも言っちゃ駄目よ！ 分かった」

「何故、言っちゃいかん？」

「決まってるでしょ？ 色々と面倒だからよ」

彩はそう言って、少女の方に顔を向け言う。

「凄い雷でしたね。窓ガラスも全部割れちゃって」

「今の……。雷なの？ でも、犬の様な化物が」

「見間違いよ。ほら、雷でビククリしてたただの犬が化物の様に見えるだけですよ」

「そうなんですか？」

「そうですよ。私、二組の水島 彩です。よろしく」

「二組ですか。私は一組の皆川 奈菜です」

この場面で自己紹介なんてするか？ と、守は思いながら二人を見ていたが、そんな事よりも、これを雷が落ちたと言って誤魔化せるだろうか？ と、不安が過ぎっていた。

## 第五話 後片付け

学校中大騒ぎになっていた。

朝のあの稲妻と、割れた窓ガラス、こげた廊下と天井。色々と騒ぎになるネタは多く、もちろんその時間校内に居た守と彩と奈菜の三人は、校長室に呼ばれ色々話を聞かれていた。その為、午前中殆ど授業は受ける事は無かった。

登校時間前に学校に侵入した守と彩は物凄く怒られ、一週間の奉仕活動を言い渡された。一方の奈菜は、ちゃんと登校時間内だったため、叱られる事も無くすぐ教室に帰される事に。暫く校長の説教を喰らった守と彩は、割れた窓ガラスの掃除をする羽目になった。

「はうっつ。何故、俺が窓ガラスの掃除を……」

「文句言っていないで、手動かしなさいよ！」

「これも、全て転入生のせいだ」

「うるさい！ 第一、私は転入生って名前じゃありません！」

グダグダと文句を言い全く手を動かさそうとしない守に、肩口に届く髪を後ろで束ねた彩が不満を言う。だが、そんな言葉など守は聞いていなかった。ため息を漏らし、「うっつ」と唸り声を上げガツクリ肩を落す守は、小さな声で呟く。

「あうっつ。完全に、不良だと思われた。……。もう、嫌われた」

……。学校なんて来る意味ないよ……。……」

完全に自信喪失している守には、何を言っても聞こえないと彩は判断し、一人手を動かしガラスを片付ける。黙々とガラスを片付ける事一時間、ようやく外に散らばっていたガラスを全て片付けた。

ほぼ一人で片付けを済ませた彩は、校舎の隅に蹲る守の姿を発見

し呆れた表情を浮かべた。その瞬間、胸の位置にある小さな杖から声が出る。それはウインクロードの声だ。

『彩様。どうかしたんですか？』

「うっん。別に。まさか、あいつが本当にガーディアンだったと思うとさ……。この先大丈夫かな？ って」

『大丈夫ですよ。彩様にはこの私がついております』

そのウインクロードの言葉に、微かに笑みを浮かべた彩はふと、守のサポートアームズのフロードスクウェアのことを思い出した。サポートアームズ最強の武器とか、ガーディアンマスターに創られたとか、拳句地系最強の術を使おうとした。結局発動はしなかったが、それでもフロードスクウェアが一体どんなサポートアームズなのか気になったのだ。

「ウインクロードに調べて欲しい事があるのよ。頼んで良いかな？」

『はい。彩様の言う事でしたら、何でも喜んで』

「ごめん。色々苦労掛けて。それじゃあ、早速だけど、守のサポートアームズの事なのよ」

『彼のサポートアームズですか。直接聞いてみた方がよいかと？』

「それが、今、ちょっと話せないのよ。色々ショックが大きかったらしくてさ。それで、あなたに頼みたい訳」

明るくそう言う彩に、少し間が空く。そして、意を決した様に明るい声でウインクロードが答えた。

『わかりました。でしたら、そのサポートアームズのお名前を聞かせてください』

「フロードスクウェアって言うの。調べるのにどれ位掛かる？」

『出来る限り、努力しますが、一、二時間ほど掛かるかと』

「そう。それじゃあ、お願いね」  
『はい』

静かになり彩はゆっくりと息を吐く。相変わらず落ち込んだままの守の方に足を進める彩は、ふと足を止めコツチに向ってくる人の少女と目が合う。それは、今朝あつた皆川 奈菜だった。

軽く頭を下げる彩に、奈菜が笑顔で駆け寄り彩の前で足を止めた。何しに来たんだろうと思う彩が首を傾げると、奈菜が彩の右手に持っていたホウキを掴み優しく可愛らしい笑みを見せながら言う。

「私も手伝うよ。私もあの現場にいたし、何だか私だけが罰を受けないのは何だか申し訳ないから」

「でも、皆川さんは、別に規則は破ってないでしょ？」

「ううん。そんなの関係ないよ。それに、二人よりも三人の方が早く終わるよ。あと、私の事は奈菜って呼んでいいよ。私も彩って呼ぶから」

「う、うん。わかった」

少しばかり奈菜に圧倒される彩は、引き攣った笑顔を見せそう答えた。その時、ほんの一瞬だが、彩は思った。めちやくちや可愛いと。

頭がボーツとする彩の前で、奈菜が誰かを探すように辺りを見回す。それから、暫くキョロキョロした後、彩の方を見て不思議そうな表情で訊く。

「あの〜。もう一人の方は？」

「もう一人。あ〜っ、あいつの事ですか？」

彩の指差す方には、もちろん落ち込み隅で蹲る守の姿があった。その守の姿を見るなり、「何かあつたんですか？」と、小さな声で

奈菜が聞く。全く自分が原因だと言う事に気付いていない奈菜に、  
「まあ、色々」と、彩は苦笑いを浮かべながら答えた。

奈菜は蹲る守に歩み寄った。守は地面に映る影で誰かが背後に立  
つたと気付くが、それが彩だと思い込み静かに口を開く。

「おりゃ〜……駄目だ……。もう……。完全に……。嫌われた〜……」

その守の言葉に首を傾げる奈菜は、『誰に嫌われたんだろう?』  
と、思いながら不意に彩の方に顔を向ける。奈菜の視線に気付いた  
彩が振り返り、奈菜と目が合うと、何故か軽く会釈してしまった。  
それは、奈菜も一緒だ。彩と目が合い、何だか反射的に笑みを浮か  
べ頭を軽く下げている。

守の方に向き直った奈菜は、気持ちを落ち着かせゆっくりと守に  
声を掛けた。

「どうかしましたか?」

「どうも、ごうも ……!」

その声に守が素早く振り返る。奈菜と一瞬だが視線がぶつかり、  
守はすぐさま立ち上がった。そして、頭で考える。『なぜ、皆川さ  
んがここに?』と。

立ち上がったまま動かない守を、心配してか、奈菜は「大丈夫?」  
と声を掛けた。だが、守の耳にその声は聞こえていない。返事が返  
って来ないことに更に心配になる奈菜は、守の右肩に手をやり軽く  
揺すりながら声を掛けた。

「あの〜。大丈夫?」

「ッ。……! のわっ!」

体を揺すられようやく気付いた。奈菜の顔が物凄く近くにある事

に。驚きのあまり変な声をだしてしまった守は、その場を二・三歩後退り引き攣った笑顔を奈菜に見せた。びっくりしたのだ。まさか、こんなにも近くで奈菜の顔が見られると、思っても見なかったし、ましてやこうやって話をかけてくるなんて思っても見なかった事だ。守の頭の中は完全に真っ白に。

そんな事とは知らず、軽く首を傾げる奈菜はすぐにニコツと笑みを浮かべる。その笑顔がまた守には殺人的だった。何かで胸を撃ち抜かれた様な衝撃に、守は一瞬意識が遠退いた。それを何とか踏み止まった守に、優しく笑みを浮かべながら奈菜が言う。

「私も、手伝うよ」

この時、ようやく守の思考が復活。そして、素早く脳内で計算される。

『皆川さんが手伝う　ガラスの破片を拾う　指切る　皆川さん怪我危険！』

計算された答えから、この作業が危険なものであると導き出し、この危険から奈菜を守る為にはどうしたら良いかと、守の思考がフル回転する。そして、導き出した。

『危険　自分が全部やる　ちよつとカッコいい？　皆川さん安全！』

考えがまとまり、守が我に返る。すると、奈菜が地面に落ちるガラスを手で片付けようとしているのが見えた。ここで、奈菜にガラスを拾われると、先程導き出した守の考えがパーになってしまう。だから、守はすぐさま叫ぶ。

「アアアアアアアッ！」

「エッ、ど、どうしたの？」

守の声に奈菜の動きが止まり、守の方に視線が向けられる。彩も



手を休め、守の方に顔を向けた。急に静寂が辺りを包み込む。まるでここだけ時間が止まった様に。

手を休めていた彩は、呆れた様に息を吐くと、そのまま片付けを再開する。ガラスの破片がぶつかり合う音に、ようやく奈菜も我に返りガラスを片付けようとした。

だが、それを守がとめた。

「み、みみ皆川さんは休んでください！ 俺が後は全部やりますから！」

「でも、私さつき来たばかりだよ。全然疲れてないよ」

「いいえ。ガラスで怪我したら大変です。女性にこんな仕事させられませんよ！」

守のこの言葉を遠くで聞いていた彩は、「私は女性じゃないのか！」と、小さな声で呟き、頬を膨らしながら守のことを睨んでいた。その後、奈菜は上手い事守に丸められ、手伝いに来たのに、手伝う事無く全て片付いてしまった。

## 第六話 屋上

朝も早く、守は何故か屋上に呼ばれた。

一応、登校時間の為、校門の方に多くの人の影がチラホラと見えている。その校門の向こう側には住宅街が広がり、車二台がやっと通れる幅の小さな路地が学校前の大通りに多く連なっている。この高校に通う大半がこの住宅街に住んでいる。まあ、受験動機はとりあえず家から近いからと、言うものが多数いる。結構、いい加減な連中が集まっているのだ。そして、守もその中の一人だった。

だが、この高校とて、そんなにいい加減な連中ばかりが集まっている訳ではない。他の県から受験をする者達もあり、意外と有名な高校でもある。学力も意外や意外かなりレベルが高いのだ。奈菜もこの高校を受けるため、親と別々に暮らしている。そんな奈菜を追いかけてこの高校を受験した者もいたが、殆ど虚しく散っていった。ついでに、守は奈菜と同じ高校に通いたくてここを選択したという理由もある。

ともあれ、屋上で立ちつくす守は、大きな口を開け欠伸をする。この時間帯はほぼ教室で寝ているため、頭がぼんやりしているのだ。そもそも、ここに呼び出した張本人は。

「ご、ごめん！ ね、寝過ぎした！」

今、ようやく屋上の扉を慌ただしく開き登場した。寝癖で何処かしらに跳ね上がった髪に、焦ってきたのか、ボタンの位置が一つずれている制服。拳句、スカートの下にはパジャマのズボンを着ている。そんな奇天烈な格好の彩に、守は目を細めて物珍しそうに呟く。

「ほつ。それが、今はやりのファッションな訳ですな？」

「ち、違う！ 違うに決まってるでしょ！ 急いできたから、ちよ

「と」

「ちよつと？ それの何処が？ ボタンはつけ間違えてるし、スカートの下にパジャマつて……。よく校門くぐれたな。俺なら恥かしくて学校辞めてるね」

「う、うるさいわね！ グチグチと！」

セカセカとボタンを付け直し、パジャマのズボンを脱いだ彩が、ようやく話を始め様とした時、その横を守が通り過ぎる。振り返る彩は屋上を後にしようとした守を呼び止める。

「ちよ、ちよつと！ 何処行くのよ！」

「もうすぐ、ホームルーム始まるぞ。ホームルームとか遅れると大変なんだぞ」

「えっ、それより、私の話を！」

「遅刻してきた水島が悪い。それじゃあ、話は昼休みにでも。そんなじゃ」

それだけ言い残し守は扉を開け屋上を出て行った。何かを言いかけた彩だったが、ムスツと頬を膨らまし怒ったようにため息を吐いた後、胸元にあるウインクロードに声を掛けた。

「さっきの話し、本当なんでしょ？」

『ええ。何度調査しても同じでしたから』

「そうよね。もう。大切な事なのに……」

そう呟くと同時に、ホームルーム開始のチャイムが鳴り響いた。

「あつ！」と、小さく声を上げた彩は、急ぎ屋上を後にした。

それから、時間が過ぎた。同じクラスだと言うのに、守と彩は一言も教室で喋る事も無く。まるで、二人が知り合いである事を悟られない様に、振舞っていた。だが、それは、守が授業中以外は寝て

いるというのが原因なのだ。

元々、彩の席は窓際が一番前の席で、守は廊下側から三列目の前から四番目。席が離れているため、守の起きている授業中は話す事は出来ない。休み時間に話そうとするが、すでに守は机に突っ伏して眠っているため、話す事は不可能。

それもあり、結局話しは昼休みにする事になった。もう一度、屋上へと呼び出された守は、右手に食堂で買ったサンドウィッチを持っていて、口にはカレーパンを銜えていた。モゴモゴと口に銜えたままのカレーパンを動かし、ポケットから携帯を取り出す。既に昼休みは大分過ぎるが、一向に呼び出した張本人が現れない。

「ふあ、ちふあくふえすふあ」（また、遅刻ですか）

カレーパンを銜えながらそう言う。すると、胸の位置にあるフロードスクウェアが、今起きたばかりなのか眠そうな声で言う。

『どうした？ 元気がないように見えるが』

「まあ、元気が無いのは当たってるかな。今日Bランチを食べる予定だったのに……」

『ふん。それで、その予定はどうしたんだ？』

「予定は狂わされた。封術士とか名乗る水島 彩に」

『お前、尻に敷かれるタイプだな？』

「俺はですね。待ち合わせで女の子を待たせたくないんですよ。分かりますか？」

『分からん。俺は女の言う事は聞かんからな。アハハハハッ』

大笑いするフロードスクウェアに、「そうですか」と、小さく呟いた守は右手に持ったサンドウィッチを口に銜えた。モゴモゴと口を動かしフェンスの方に歩み寄り、フェンスに背を預け腰を下ろした。右足を真っ直ぐ伸ばし、左膝を立てて座っている守は、サンド

ウィッチを食べ終え大きな欠伸をする。

『なあ、暇なら俺の刃を磨いてくれ』

「俺、剣の手入れなんてした事無いんで、やりかた知らない」

『適当に乾いた布なんかで磨いてくれるだけで良いからさ』

「布で磨いてて手切ったら痛そうだから、嫌だ」

『何だよ。磨くくらい良いだろ！』

急に大声で怒鳴るフロードスクウェアだが、守の方は別に気にはしていない様子だ。と、言うよりフロードスクウェアの言葉など聞いていなかった。のほほんと空を見上げ流れゆく雲を見送る。優しく頬を撫でる風が、少し寝癖のたった守の髪をユサユサと靡かせる。もうすぐ昼休みも終わりだというのに、一向に姿を見せることの無い彩。運動場や体育館で遊んでいた生徒達もすでに自分の教室に戻り始める時間。それでも、もう少し待てば来るだろうと、守は長に彩のことを待っていた。小さく欠伸をするフロードスクウェアは、『来ないな』と、何と無く呟く。軽く頷いた守は「何かあったかな？」と、心配そうな表情で言った。

時計台の針がカチツと音を鳴らしながら動く。すると、鉄と鉄が擦れ合い軋む音が微かに聞え、予鈴が大きな音で鳴り響いた。まさか、こんな近くで予鈴を聞く事になると思っても見なかった守は、両手で耳を塞ぎ予鈴が鳴り終わるのを待った。

予鈴が鳴り終わると、また鉄と鉄が擦れ合う音がしてカチツと、小さく音がした。塞いでいた耳を解き放った守は、まだ耳の奥でキンキンと音がしている。

「うっつ。耳が痛い……」

『凄い音だったな……。朝は静かだったのに……』

「昼休みの予鈴だけは大きな音にしてるんだって。先生が言ってた。何でも昔は音が小さくて遅刻する人が多かったからとか」

『ふ〜ん。お前は偉く余裕だが、良いのか?』

フロードスクウェアは落ち着いた様子の守にそう問う。少しは焦るんじゃないかと、思っていたが、その考えは軽く覆された。のん気に「アハハハハッ」と、声を上げ笑い出したのだ。何を笑っているんだと思うフロードスクウェアだったが、すぐに守が言葉を発す。

「な〜に。元々午後は授業を受けないつもりだったしいんだよ」

『サボりか?』

「サボりって言うなよ。午後は少しお前の扱い方を学ぼうと思ってるんだから」

『ふ〜ん。お前も一応ガーディアンとしての自覚があるのか?』

「いや。ガーディアンとか、そう言うのじゃなくてさ。水島一人に鬼獣とか言う化物と戦わせる訳には行かないだろ? 一応、あいつも女だし」

少し真面目な顔付きの守に、ちよつとフロードスクウェアは驚いた。マイペースでひ弱な奴だと思っていた守が、ガーディアンになる資格を十分に持ち合わせていた事に。

表情を和らげ深呼吸する守は、目を閉じ胸の位置にある小さくなったフロードスクウェアを右手に握り締め念じる。右手の指の隙間から微かに光が漏れ、フロードスクウェアが大きくなり、すぐに左手を柄に持つて行く。多少ふらつきながらも、何とか倒れずに踏み止まった守は、「ニシシッ」と食い縛った白い歯を見せ笑うと、ゆっくりと重々しいフロードスクウェアを構える。

「今日は、こけなかったぞ」

『お前、前より少し力が強くなったみたいだな』

「一応、あれから少しずつ筋トレしてるんだぞ。そりゃ力もつくさ」

『いや。筋肉とかじゃなく』

『!』

そこまで言って、フロードスクウェアは何かの気配を察知した。  
それは、間違いなくあの時の鬼獣の気配だった。

## 第七話 フロードスクウェアとウインクロード

「やっぱいい！」

彩の叫び声が屋上まで続く階段に響く。階段を蹴る音が響くが、ここは滅多に人が通らない為、誰もその事に気付かない。ついでに言えば、電気も殆ど点いてなく結構薄暗い。暫く階段を登った所で彩は苦しそくに膝に両手をつき俯く。息遣いの荒い彩に、ウインクロードは声を掛ける。

『大丈夫ですか？ 彩様』

「だ、大丈夫。ちよつと、疲れが……」

『疲れと言つよりも、食べすぎかと……』

「何？ ウインクロード」

『いえ……。何でもございませぬ』

少し困った様にそう呟いたウインクロードは、小さなため息を零した。顔を上げた彩は目の前に続く階段を見ながら、「うっ」と、唸り声を上げた後、渋々と言った感じで脚を進める。先程とは程遠いペースで脚を進める彩の耳に足音が聞える。この足音は、階段の上から聞え、階段を駆け下りているのか、徐々に近付いてくるのが分かる。

足を止めて誰が下りてくるか見届けようとした彩に、階段を駆け下りる守が衝突する。お互いぶつかりあい、後ろへと仰け反るが守は何とか倒れるのを踏み止まった。だが、彩は既に足に力が入らず、踏み止まれなかった。

「あつ！ エッ！」



天井が一瞬視界に映り、それが瞬時に真っ暗になる。鈍い音が耳に響き階段をすべり落ちているのだと分かる。だが、何故か痛みは無い。しかも、何か暖かいものが体を包んでいる様だった。徐々に視界に光が射し込み、声が聞える。

「大丈夫ですか！ 彩様！」

「そっちの心配より、コツチの心配をして欲しいんだがな！」

「何を仰います！ もし彩様に何かあったら！」

「んだよ！ コイツに何かあったらどうすんだ！」

「君達が喧嘩してもしようがないと思うんですが……。と、言うかここでもめている状況でしたっけ？」

のほほんとした口調で二人を宥める守は、立ち上がり彩を見下ろす。少し驚いた表情を見せる彩は、戸惑いながらも「あ、ありがとう」と言って、立ち上がった。だが、制服についた埃を落としていた守は、その言葉を聞いてなかったのか、「何か言った？」と、首をかしげた。眉を細める彩は「何でもありません」と、歯を食い縛りながら言い引き攣った笑顔を見せる。

制服の埃を払っていた守は、ふと思いつく。何故、急いでたんだっけと。右手で下唇を触りながら考え込む。ここまでの経緯を頭の中で巻き戻し、屋上でのフロードスクウェアの言葉を思い出す。

「又ワツ！ そうだった！ 水島、鬼獣が出たらしいぞ。しかも、この前逃がした奴が」

「鬼獣が？ そんなまさか。ウインクロードは何か感じた？」

「いえ。私は何も。フロードスクウェア殿の勘違いでは？」

「何を！ この俺が」

「でも、万が一って事もあるだろうし、一応さ」

のん気な口調の守は表情を緩めたままそう答えた。「そうねえ…

…」と、小さな声で呟いた彩は、胸を抱えるような形で腕組みをする。そんな彩の行動に、呆れたような声をフロードスクウェアが発する。

『娘。それで、男を誘惑しているつもりか？』

「 なッ！ だ、ただ誰が誘惑なんか！」

『貴殿は彩様を愚弄する気が！』

「 ？」

急に声を上げた彩とウィンクロードに、軽く首を傾げる守は目を細めた。ボーツとしていたため、フロードスクウェアの言葉を聞き逃していた守は、何をこんなに怒っているんだろう？ と、思いつつ右手で頭を掻き毟る。そして、胸の位置にいるフロードスクウェアに声を掛けた。

「あのさ。お前、何か変な事でも言った？」

『いや。変な事など言っていない。正直な印象を述べたまでだ』

そのフロードスクウェアの言葉に噛み付いたのはウィンクロードだった。今までに無いほど大きな声で怒りの声を上げる。

『守殿！ 貴殿のサポートアームズは、彩様を愚弄したのであります！ あなた様は、持ち主であります、何かきつい罰を与えくださいませ！』

「んにゃ〜っ。罰を与えろと言われてもですね……。困りましたなあ〜」

『何を困っている。別に悪い事をしたわけでもあるまい？』

「いんっや。お前が何を言ったかにもよる訳なんで、取り合えず謝りましょう」

相変わらず目を細めたままのんびりした口調で守がフロードスクウェアに言い聞かす。だが、フロードスクウェアは断固として謝るのを拒否する。困った様に腕を組み考え込む守は、何やら顔を俯ける彩に気付く。

『そう言えば、水島何も言っ来ないな』と、思いながら守はジッと彩を見つめると、一瞬彩と視線がぶつかった。すぐに目を逸らされたが、確かに目はあった。俺が何かしたかな？ と思う守は、取り合えず頭を下げる。

「ごめんなさい」

「な、何よ！ 急に」

「いや〜。何かよく分かんないけど、謝っとく」

『軽々しく、女に頭を下げるとは、情け無いぞ！』

フロードスクウェアが不満そうに声を上げる。だが、マイペースな守は頭を上げるなり、のんびりとした口調でフロードスクウェアに言い聞かす。

「ん〜っ。まあ、そんなだけどさ。やっぱり、今回は俺やお前に原因がある気がする。ここは、非を認めて潔く頭を下げ様じゃないですか。男は潔く無いと」

その「潔い」と言う言葉にフロードスクウェアが敏感に反応する。そして、『悪かった』と急に謝った。眠そうに欠伸をする守は、ふと思いつく。

「おおっ！ 忘れる所だった。水島、そろそろ教室戻った方が良さぞ。授業始まるから」

「戻った方が良いつて、守は戻らないの？」

「元々、午後は授業受けないつもりだったし、気になるだろ？ フ

ロードスクウェアが感じた鬼獣の気配が」

『でも、あれは勘違いなのでは？』

そう言うウインクロードに「ニシシシ」と、軽く笑い声を上げた守は頭の後ろで両手を組みながら答えた。

「備えあれば憂いなしって言うだろ？ 何事も用心に越した事はないさ。じゃあ。あつ、話は放課後、屋上で。今度は遅刻なさらない様に」

少々早口でそう言った守は、彩の返事を待たずして階段を駆け下りた。その守の言った言葉で彩は大切な事を思い出し、「あーっ！」と大きな声を上げ頭を抱え疼くまる。そんな彩にウインクロードは優しく言う。

『話すの忘れてしまいましたね。まあ、近くに鬼獣も居ない事ですし、心配は無いかと』

「そ、そうだよ。鬼獣とさえ戦わなきゃ大丈夫だよ」

『そうですよ。さあ、行きましよう。授業に遅れては大変ですから』  
「うん」

膝を抱えながら頷いた彩は、静かに立ち上がり小さなため息を吐き教室へと歩き出す。そして、自分の胸を見下ろして落ち込んだ様に、がつくりとうな垂れる。心配そうにそれを窺うウインクロードは、そんな彩に声を掛け様としたが、その前に彩が言葉を発した。

「私って、魅力無いか？」

『急にどうなさったのですか？ ハッ、まさか、先程のフロードスクウェア殿の言葉に気になさっているのですか？ 彩様は、十分魅力があります！ あの様な言葉気にせずとも！』

落ち込む彩にウインクロードは必死でフォローする。だが、この必死さに更に彩は肩を落す。

「そんなに必死になるって事はやっぱり……」

『そ、そんな事は!』

「いいよ。別に……。気にしてないから」

明らかに気にしている彩だが、こうなってしまうてはどっしりしようも無く、ウインクロードは黙り込んだ。その後、彩は重い足取りで教室へと向った。

## 第七話 フロードスクウェアとウィンクロード（後書き）

暫し更新が遅れてしまい、すいませんでした。ゴタゴタと立て込んでおりまして、こんな状態が続くと思いますが、気長に待ってもらえると思います。

## 第八話 晴天 割く 蒼い閃光

静けさ漂う校舎裏。日陰の為少し暗く、湿っぽい。この高校はすぐ裏手が森になっており、校舎裏には森に入られないようにと、高いフェンスが作られている。それは、殆ど二階に届くほどの高さで、まずこれを登って森に行こう何て考える奴は居ない。昔は、フェンスなど無くよく生徒がサボるために、森の中に入って行ったらしいが、その度に行方が分からなくなり、人さらいの森とも呼ばれている。それが、誠かどうかは今となっては分からない。

そんな人目のつかない校舎裏へとやってきた守は、ふと足を止め足元を見据える。暫く黙っていると、壁の向う側から声がする。ここは、丁度科学室の裏手に当たる。きつと何かの実験でも始めるのだろう、換気扇が五月蠅く鳴り響き、悪臭などが漂い始める。そう、ここは、実験で使う薬品の悪臭が、漂う所でも有名なところだ。その事を思い出した守は走り出す。

『どうした？ 立ち止まっていたかと思えば急に走り出して』  
「あの場所って、結構不良って言うか、怖い顔の人がタバコ吸う為に集まる場所なんだよ」

ニコニコとフロードスクウェアに説明する。あそこは、不良のたまり場としても有名で、恐喝・喫煙・拳銃酒を飲む者も居るとか。何で、そう言う連中がこの高校に受かったのかは不明だが、教師達はそれを見て見ぬフリをするため、普通の生徒達も近寄ろうともしない。守もその一人だ。そんな守に、フロードスクウェアは問う。

『それで、どうして急に走り出す。まさか、そいつ等が怖いのか？』  
「うん。まあ、非暴力主義の俺としては、あんまり出会いたくは無いかなあ」

そう言つて苦笑する守は、頭を掻きながら立ち止まる。科学室の裏手から随分と離れた守は、校舎裏の逆サイドまでやってきた。ここは、丁度トイレ裏で守はよくここから校舎に侵入している。ついでに、ここの掃除の担当は守のクラスだ。だから、守はいつもトイレの窓の鍵を開けたままにしている。そんなトイレの裏で立ち止まる守は、悩んでいた。それは、道が分かれているからだ。真っ直ぐ行けば運動場へとでる。左の坂道を下れば電力室にでる。電力室とは、この高校の電気を全て管理する所だ。その為、一応一時間交替で警備員が警備をする。流石にそこに行けばサボっているのがばれてしまう。そう考える守はボソツと呟く。

「さて、困りましたな。これは、どっちに行つてもサボりがばれてしまいますよ」

分かれ道で足を止め考え込む守は、運動場の方をチラリと見る。竹刀を持ち少しふつくらとした体型の教師（体育教師としては古典的な）が、ドスの効いた声で怒鳴りつけ、竹刀で地面を激しく叩く。目を細めて表情を引き攣らせる守は、半笑いを浮かべて「うん。無理」と、呟く。『何がだよ』と、軽い口調で言うフロードスクウエアは、微かに鬼獣の力を感じる。

守のクラスでは、只今数学の授業真っ最中。窓際一番前に座る彩は、ふと窓の外に目をやる。運動場で何度もグラウンドを走らされる生徒を、頬杖をつきながら見据える。静かな教室とは打って変わり、五月蠅く怒鳴り散らす声が運動場から響く。『大変そう』と、思う彩はふと教室内に目を向ける。後ろを見回すが、大半は睡魔に負けノックアウト。ちゃんと授業を受けているのは、意外と少ない。弱々しい感じの数学教師は、そんな生徒達を叱る事も出来ず、黙々と



教科書を読みながら黒板に公式などを書き出してゆく。

「私も、守と一緒にサボればよかったかな……」

ボソツと小さな声で呟く彩は、ため息を吐き机にうつ伏せになる。もちろん、この声が聞えたのはウインクロードだけだ。まさか、午後の授業一発目が数学だったなんてと、思う彩は眠そうに欠伸をする。そんな彩に、ウインクロードは聊か不満そうに言う。

『彩様。私はどうも、彼が嫌いです』

「彼つて。フロードスクウェアの事？」

微かに首を傾げ、そう呟く彩はウインクロードを右手に乗せて真っ直ぐ見つめる。小さな杖の頭についた水晶が光、ウインクロードの声が聞える。

『いえ。守殿です。確かに、階段から落ちた時は助けていただきましたが、元々はあちらがぶつかって来たせいで落ちた訳です。助けるのは当たり前かと。それに、フロードスクウェア殿をちゃんと管理できないなんて、ガーディアンとして最低です』

「何か、厳しくない？ 守に対して」

『いえ。私はいつもと変わりませんよ。それに、彼のせいで狼電（電気を纏った鬼獣の名前）を逃がしたんですよ！ 早く見つけて封印しなければ、何れ大変な事になりかねません』

「そつだよね。でも、あの時はどちらかと言えば、私の方が助けられた様な感じもするけど……」

鞘がそう言って俯いたその瞬間、稲光が眩く辺りを包み込んだ。直後に青い空に蒼い稲妻が一闪し、轟々しい雷鳴が鳴り響く。それと、同時に校舎内の電気が一瞬にして消える。流石に、眠っていた

生徒達もこの音に飛び起き騒ぎ出した。

「な、何だ！ 今の音！」

「落雷だ！ 雷が落ちたぞ！」

「エッ！ 嘘！ こんなに晴れてるのに！」

口々に窓際に集まる生徒達は、雷が落ちたと思われる電力室の方に顔を向ける。電力室の方からは、薄らと黒煙が上り、周りの木々から少し火の手が上がっていた。電力室の方に目をやる彩は、先程の稲妻の事を思い出し、鬼獣があそこにいる事を確信する。フロードスクウェアの言った事が正しかったと、ウインクロードは後悔するがすでに手遅れだ。席を立った彩は数学教師の目の前を通り過ぎ教室を出る。すると、数学教師が焦った様に言う。

「水島さん！ どちらに」

「すみません。ちょっと、トイレに……」

頬を赤く染め恥かしそうにそう言う彩に、数学教師は弱々しく「そうですね」と、言った。廊下に出ると、すぐ彩は走り出す。だが、ウインクロードを責める事は無く、すぐに鬼獣を封印できる様にウインクロードを大きくする。右手に持つウインクロードに、彩は少々表情を強張らせながら問う。

「ウインクロード。あの雷撃って、狼電のもので間違いない？」

『はい。あれは狼電のもので間違いございません。すみません。完全に私のミスです』

「いいのよ。気にしないで。それより、もしかすると、守とフロードスクウェアが会ったのかも知れない。急がないと」

『そうですね。今の彼等は戦力外。力を蓄えた狼電などと戦えばただじゃ済まされませんよ』

「あうっつ。私が待ち合わせに遅刻しなければ、こんな事にならなかったのに」

そんな事を叫びながら、彩は全速力で電力室に向った。

稲妻の落ちた電力室の前。黒く焦げつつある電力室の壁は、黒煙が上り窓は碎け散っている。周りの木々は少々燃えている所もあり、焦げ臭い。地面の所々が黒く焦げ黒煙が上がり、落雷の凄さを物語っている。そんな電力室から少し離れた場所にうつ伏せに守が倒れていた。ピクツと微かに指が動き、守が勢いよく顔を上げた。「ゲホツ、ゲホツ」と漂う焦げ臭いに守はむせ返りながらも、立ち上がりゆっくりと空を見上げる。

「ビックリだ……。まさか、こんなに晴れてるのに、落雷するとは……。恐るべき、鬼獣の力ですな」

『お前、案外冷静だな』  
「そんな訳無いですよ。膝なんて笑っちゃってますから。ハハハハハッ」

笑いながらそう言う守は何度か膝を拳で叩き震えを止める。落雷は突然の事で、間一髪でかわしたがフロードスクウェアに『危ない』と、言われなければ、多分守は丸焦げになっていただろう。そう考えると、恐ろしく足が震えて当然だ。少し焦げた制服の袖からは、微かに煙が上がっており、守はそれを見て更に身を震わす。

『しかし、あいつ。更に力を蓄えたみたいだな』

「はうっつ。怖えよ。俺、これで雷苦手になりそうです」

『そう弱気になるな！ お前には最強のサポートアームズ、フロードスクウェア様がついてるんだからな』

「最強と、自分で言っている所が怪しいんですが……。まあ、そう思えば結構心強いかも」

『さて、早速奴に罰を与えるとするか』

張り切るフロードスクウェアに対し、少し不安を過ぎらせる守。

そう思いながらも、フロードスクウェアを大きくし両手でしっかりと柄を握り締めた。少し、フラフラとする足元の守は、鬼獣を探す様に辺りを見回す。稲妻を落としたと同時に姿を晦ましたのだろう。

だが、フロードスクウェアが『まだ近くに気配を感じる』と、言っただけで探しているのだ。少々腰の引けた感じの守は「はうっつ。はうっつ」と、何度も口にしていった。そんな守にフロードスクウェアは呆れた様のため息を零し、この前とは違う呪文を守に言わせる。

「揺るげ大地。激しく揺らぎ喰らうは物の怪！ 鋭き眼で獲物<sup>まわて</sup>を捕らえ、喰らうがいい！ 地を這う大蛇！」

フロードスクウェアの切っ先を軽く地面に触れる様に突き立てる。静寂が辺りを包み込み何も起きない。目を細める守は、静かにフロードスクウェアを持ち上げ、のんびりとした口調で問う。

「今回も失敗ですか？」

『うむ。お前、また呪文を』

「間違えてない！ 今回は、ちゃんと言われた通りに言った」

『ならば、何故術が出ない』

「さあ？ もしかすると、俺にガーディアンとしての資格が無いんじゃない」

突然思いついた様にそう言う守だが、すぐに笑みを浮かべて「ごめんな。フロードスクウェア」と、軽く謝り頭を軽く下げる。そんな守に、フロードスクウェアは怒った様に声を上げる。

『何を下らん事を！　こうやって、俺をちゃんと扱えているだろ！』  
「術もまともに使えないし、こうやって持つてるだけなら誰でも出来るって言うか　」

『黙れ！　サポートアームズは、適合者が現れて初めて目を覚まし、適合者の念じる力により具現化する事が出来るんだ！　俺がこうして具現化していると言う事は、お前は俺の適合者で間違いないんだ』！

力強く守を説得するフロードスクウェアに、圧倒され守は「ごめん」と、小さく謝る。すると、フロードスクウェアは『男は安易に頭を下げるな』と、言った。それに対し、守は「ごめん」と、また謝った。呆れた様子のフロードスクウェアは苦笑したため息を漏らした。『本当にコイツが俺の適合者なのか？』と、思いながら。

## 第八話 晴天 割く 蒼い閃光（後書き）

お久し振りです。作者の崎浜秀です。

少し考えたのですが、『ガーディアン』は、毎週水曜日に更新する事にしました。更新日が曖昧だと、読者の方にも色々、迷惑を掛けると思ったので。

来週から、できれば次回予告なものやりたいなぁ〜なって（テレビじゃ無いんだから……）思っています。それでは、来週またお目にかかりましょう。

評価・感想など、感じたままに送ってください。お待ちしております。

## 第九話 スクープある所 報道部あり

静かに流れる風が、砂塵を舞い上げる。未だ、地面からは黒煙が立ち上り、近くにそびえる木々は、所々火の手が上がり空に火の粉を舞い上がらせる。そして、それはすぐさま騒ぎの元凶となる。それも当然。こんな清々しく晴れた日に落雷。しかも、それが電力室を直撃し木々が燃える。こうなれば、誰だって大騒ぎする。騒ぎに気付いた守は、すぐさまフロードスクウェアをネックレスに戻し茂みの中へと飛び込んだ。

すると、すぐ足音が響き、カメラのシャッター音が聞える。報道部の連中だろう。報道部とは、取り合えず校内で起きた事件や面白い事を新聞にするという、スクープ大好き生徒が集まって出来た部活動なのだ。一部では『人のプライベートを新聞に載せるなど問題だ！』と、言う声も上がるが、殆どの生徒がそれを楽しみにしているため、辞めさせられないといったのが現状だ。

「フフフフツ！ これは、特ダネよ！ 明日のトップはこれよ！」

妙に気合を入れる女子生徒は、現状の様子を素早くカメラのシャッターを押し写真に収める。大きな二重の目を眼鏡の下から輝かし、長く伸びた髪は頭の後ろでたくし上げ、前髪は邪魔にならない様に可愛らしいピンで留められている。激しく動き回る彼女は、何度もスカートをはためかせ、幾度と無く下着が見えそうになる。

そんな彼女の後ろに立つあんまりやる気のない女子生徒。髪は長めで、それを二つに分けお下げにしている。眠そうに欠伸をし目を細める彼女は、屈み込み右手に持ったカメラのレンズで、目の前で激しく動き回る女子生徒のスカートの下を写す。幾度と無くシャッターを切り、スカートからチラリと見える下着を何枚もカメラに収める。

「理穂。部長がこんなのトップに使ってくださいですか？」

やる気の無さそうな声でそう言う女子生徒は、欠伸をして眠そうに目を擦る。

「何を言ってるの！ 若菜！ 部長がダメと言っても、記事をすり替えてトップにするのよ！」

自信満々にそう言う理穂と呼ばれた女子生徒。目を輝かせ、いや、眼鏡を輝かせ胸の前には力強く握り締めた左拳が。だが、理穂の企む大きな野望はもろくも崩れ去る。背後に現れた男によって。

「あれ〜？ 理穂くん。今、何て言ったのかな？ 僕の聞き違いじゃなきゃ、記事をすり替えるって聞えたけど？ どう言う事かな？」

その声に固まる理穂は、引き攣った表情を浮かべ、恐る恐る後ろを振り返る。そこには、細々とした目で優しく微笑みを浮かべる男の姿。背丈は高く、顔立ちも良い。いかにも爽やか系と言った感じの男に向って、理穂は叫ぶ。

「ぶ、ぶぶぶ、部長！ どどどどどうしてここに！」

「事件の匂いを嗅ぎつけて？」

「流石は部長。まるで犬の様ですね」

やる気の無さそうな声でそう言う若菜は、理穂の足元に屈み込み堂々とスカートの下をカメラに収める。それに気付く理穂は、スカートを押さえ「何してるのよ！」と、怒鳴った。軽い身のこなしで理穂から離れた若菜は、はっきりと映し出された理穂の下着を見な



がら呟く。

「うーん。まあ、マニアには高値で売れるかも」

「ちょ、ちょっと！ マニアにはって、どう言う事よ！」

「怒る所が違う気がするよ。理穂君」

軽い乗りのコントを繰り広げる報道部を、茂みの中から窺う守は困った様に目を細める。このままでは、鬼獣が現れた時に戦う事が出来ないからだ。報道部の三人に被害が及ぶ事もあるが、一番の理由は。もし報道部の前で戦ってしまえば、それが絶対に明日の校内新聞の記事になってしまうからだ。それだけは、避けねばならぬと、策を練る守に、フロードスクウエアが真剣な声で言い放つ。

『まずいぞ！ 鬼獣があの人の方に近付いてる』

「そう言われてもですね。今、ここで戦っちゃまずいでしょ？」

『そんな事言ってる場合か！』

「いやいや。そんな事じゃないって。大切な事だぞ」

『あの人……。ガーディアンの仕事は鬼獣を倒す事だぞ！ 分かっているのか？』

その言葉に、少し考え込む守は、「フム」と、小さく声を出すと軽く頷きフロードスクウエアを具現化する。いつもながら、フロードスクウエアの重さに倒れそうになり、何とか踏み止まる守は、奥歯を噛み締め息を止めた。それは、フロードスクウエアを具現化した時、思わずふらつき、茂みを揺らしてしまったからだ。もちろん、その物音に報道部の三人が気付かないわけ無く、

「何、今、あそこで何か動いたわ！ これは、事件の匂いがするわ

！」

「うーん。そうだね。何気に漂うこの匂いは、確かに事件の匂い…

…」

「アタシには、焦げ匂いしか漂ってこないのですが？」

「フフフフツッ！ 特ダネをこのカメラでおさめて見せるわ！」

素早くコツチに向って走ってくる理穂の姿が、茂みの中からも見えた。まずいと、思った守はすぐさまフロードスクウエアを元に戻し、身を縮こませる。雑に茂みが掻き分けられ、バツと視界が明るくなる。そして、俯く守の頭の上で声が響く。

「な〜に、蹲っちゃってるの？ 一年二組 火野 守」

「ウツ……。何故、フルネームで……」

「当然、報道部ですから、何でも知ってるわ！ それで、ここで何をしているの？」

「イヤ……。落雷の現場を見に……」

そう言って、苦笑いを浮かべる守は、優しく微笑む理穂と目が合う。その時、守の胸の位置からフロードスクウエアが叫ぶ。

『来るぞ！ 伏せろ！』

「へッ！」

「イツ！」

稲光が辺りを包み込む。眩い光に報道部部长も若菜も目を閉じた。当然、守の目の前にいる理穂も目を伏せた。その瞬間、体を茂みに引き込まれ、目を閉じても明るかった筈の瞼の下が、暗がりになる。驚いた拍子に、理穂は思わずシャッターを押し、シャッター音が鳴るが、それは雷鳴とほぼ同時になったため誰も気付かなかった。もちろん、シャッターを押しした張本人も。地面に落雷が落ち、轟音が響く。岩を砕き破片が辺りに飛び散った。

辺りが静まり理穂は目を開く。茂みのすぐ傍から黒煙が上がり、

丁度、理穂の立っていた位置に雷が落ちたと思われる。そんな理穂の体の上に覆いかぶさる様な形で、守がうつ伏せになっていた。体を起こした守は、「ふっ」と、息を吐き理穂の方を見つめる。すると、理穂が少し怒った表情を守に向けていた。そして、守は気付く。右手のやわらかい感触に。と、その時、茂みを掻き分け部長と若菜がやってきた。

「大丈夫　ブツ！　な、何してるんだ！」

「これは、スクープです！　まさか、落雷騒ぎにまぎれて、茂みの中で！」

「ちよ、ちよっと！　待って、ちが　」

理穂が焦りながら若菜にそう言うが、時既に遅く、カメラはシャッター音を響かせていた。驚いた様子の部長は、顔を真っ赤にし、「特ダネだ」と、言いながら茂みから去り行く。理穂は追い駆けようとするが、未だに守が上に乗ってるため追う事が出来ない。

「理穂がこんなひ弱そうな子に襲われる何て！　キャハッ！」

「キャハッ！　じゃない！　って、あんたも、いつまで人の胸触ってんのよ！」

強烈な平手打ちが守の頬を往復した。

「うがっ！　いつてっ」

「ドサクサにまぎれて、人の胸触っておいて、何言ってるのよ！」

そう言い放ち理穂は頬を膨らましその場を後にした。真っ赤に手の平のあとが残る両頬を擦る守は、蹲り薄らと涙を浮かべる。フロードスクウェアはそんな守の顔を見ながら呆れながら言う。

『お前……。ドサクサにまぎれて変な事するなよ』  
「お前まで、そんな事言うか……。」

追い討ちを掛けられ、ショックで守は立ち直る事が出来なかった。もう、俺の人生は終わったと。そして、この事が確実に明日の校内新聞に載ると言う事に。

## 第九話 スクープある所 報道部あり(後書き)

ご無沙汰してます。 崎浜秀です。 先週の水曜日ぶりです。

今日は次回予告なんぞをやってみよう！ 何て張り切ってたんですが、必要？ 何て、考えました。 必要かどうかは、暫くやってみての読者の皆様の反応を見てから考えたいと思います。

それでは、早速、次回予告を！

### 【次回予告】

やってきました夜の学校！ 走る蒼い光と二つの黒い影。

初めて明かされる守の通う高校名(これ、あんまり関係なくねえ?)。

昼間のシヨックから立ち直れない守は、久々頭をフル回転！ 計

算。 計算。 また計算！

守の頭で出される最悪の答え。 それを解決する為、導き出されるその答えは一体 ！

と、まあ、こんな感じです。 何か……ビミョーな予告……。 取り合えず、来週のガーディアンもよろしくお願いします。

って、言つか予告必要ないかと…… (笑)

## 第十話 蒼い線香花火

随分と日がくれ、辺りは暗く静まり返る。月光は微かに町を照らし、信号はすでに赤く点滅する。何の音も聞えず、全く車が通る気配は無い。人の影も無く、どの家も殆ど電気が消え、皆が寝静まっている時間だ。街灯がいたる所に灯っているが、通るのは野良犬や野良猫程度で、時折通る人は千鳥足で酔っ払った人位だ。

そんな夜遅く。裏手を森に囲まれた大きな高校。名を『青桜学園』。校門は完全に閉じられ、校舎内の電気は全て消されている。グラウンドの中央には破れたネットを張ってあるサッカーゴール。その端には小さいながらもテニスコートが備えられている。少し離れた所には野球の専用グラウンドもあり、意外と広々としている。そのグラウンドを青光りするモノが駆け抜け、それを追う様に足音が二つ響く。一つは一生懸命といった感じだが、もう一方はまるで覇気を感じさせない。青光りするモノは、そんな二人を引き離し闇の中へと姿を消す。グラウンドの中央で立ち止まった二つの影は動かずにいる。

「ハア…ハア……。に…逃げ足…速すぎ……」

『大丈夫ですか？ 彩様』

「う…うん。大丈夫。それより……」

少し困った表情を見せる彩は振り返り、後ろに居る今にも死にそうな顔をしている守を真っ直ぐに見据える。何があったのか分からないが、落雷のあったあの時から可笑しいのは何と無く気付いていた。実は、あの時彩はあの場所に来ていた。報道部の人達が居たため、姿は見せなかったが、隠れて様子を窺っていたのだ。そして、落雷が落ちた時、報道部の部長と若葉を傷つけないため低級呪文で壁を作り、落雷の衝撃を消したのだ。

あそこで、何があったに違いないが、それは彩には予測も出来な

い。だが、守があれから少し様子がおかしいのは確かだ。何処か上の空と言つか、魂を抜かれた感じと言つ方が正しいかも知れない。

「ねえ、あなたやる気あるの？」

「えっ？ う…うん。あるよ……」

やはり何処か元気の無い感じの返事に、彩はため息を吐き暫し呆れた表情を見せるが、守は特に反応を示さず、ボーッとしていた。不満そうに口を尖らす彩は、守に背を向け小声でウインクロードに問う。

「絶対、おかしいわよ！ あの時、何かあったに違いないわ！」

「そっでしようか？ 私にはただやる気の無いだけの様にしか見えませんが？」

「いえ。午後の授業が始まる前まではあんなに張り切ってたのよ。それが、急に変わるなんて可笑しすぎる」

『彩様の考えすぎではございませんか？』

「いいえ。何か臭うわね。きつと」

彩はそう言つて右手の人差し指で眉間を触っている。

一方、肩を落しうな垂れる守は、呆然と立ち尽くし空を見上げていた。月の周りを取り巻く星々を見据える守に、フロードスクウエアが静かに口を開く。

『まだ、気にしてるのか？』

「気にしてる？ 何を？」

『あの事だよ。あの娘を襲った事だ』

「あ…っ。あれか……。って、言つか襲ってないんだって。大体、あの状況で襲える訳無いでしょ」

『まあ、確かにな。だが、向うはそうは思っちゃくれないな』

フロードスクウェアのその言葉に、更にうな垂れる守は「そうですねですよ」と、呟く。事故とは言え、理穂の胸を触った事は悪かったと思うが、流石に謝ってすむ問題じゃないだろうと守は思う。そして、頭の中で考えが働く。

『校内新聞に載る 校内の生徒に知られる もちろん、皆川さんにも知られ 『守君最低』といわれ 確実嫌われる』

一瞬で求められたこの計算の答えから、自分が確実に嫌われる事を悟る守は、蹲り頭を抱える。そして、「うっつ」と、呻き声をあげながらどうすれば、嫌われないで済むかを計算する。

『確実に嫌われる理由』皆川さんに知られるから 校内の生徒に知られるから 校内新聞が配られるから』

逆算したこの計算から、更に更に頭をフル回転させる守は答えを絞り込む。

『校内新聞 決定的瞬間の写真 消す 証拠不十分 ただの噂？ 皆川さんに嫌われない？』

考えが纏まった守は、顔を上げ目を輝かす。だが、すぐに頭を抱え唸り声を上げる。

「ダメだ〜！ そんな事しちゃまるでやましい事をしたみたいじゃないか！ うおっつ。何か、他に方法は」

『お前、大丈夫か？ あまりのショックで何処がおかしくなったか？ 大体、やましい事が無いなら別に気にする事無いだろ？』

半ば呆れ気味でそう言うフロードスクウェアの言葉に、守が顔を上げ、一瞬にして明るい表情に戻る。今まで感じられなかった覇気は、いつもの様に戻り、守の顔から笑顔がこぼれる。先程の状態から一瞬でここまで変わった守に、多少呆れながらフロードスクウェアは様子を窺う。すると、立ち上がった守が笑顔でフロードスクウェアに言う。



「ありがとう。そうだよ。やましい事が無いなら、気にする事無いんだ！ うんうん。あれはただの事故だったんだし、皆川さんだつてちゃんと理由を説明すれば、嫌われる事は無いよ！」

まるで、自分にそう言い聞かせる様な口振りの守に、フロードスクウェアは軽くため息を吐く。そんな時、何処からか焦げ臭いが漂い始めた。微かに漂うその臭いに、守は気付き辺りを見回す。何処から漂うのか分からないが、何処かが燃えているのはわかった。そして、これが鬼獣の仕業だと言う事も。彩の方に下がりつつ、守は彩に問いかける。

「臭うぞ。彩」

「そう。臭うのよ。絶対に、何かあったに違いないのよ。でも、一体あそこで何が」

「何かあったつて、決まってるじゃないですか。鬼獣が暴れてるんだよ」

「そう、鬼獣が　つて、あれ？　守。なんだかさつきと雰囲気がある……」

「何を言ってるんです。行くぞ。あんまり被害が大きくなるのはよくないですから」

「そ、そうよね。行きましょう」

微かに首をかしげた彩は、守と一緒に焦げ臭いのする方に向って走った。徐々にはつきりとしてくる黒煙の位置は、部室の並ぶ校舎脇の方からだ。間違いなく、そこに鬼獣が居ると二人は更に走る速度を上げ地を駆ける。校内に響く二人の足音は、交互に音を奏でた。

闇に浮ぶ蒼い光。それが見えると、二人は足を止める。肩口まで伸びた黒髪が、少々頬の方に向って風に煽られるため、彩は邪魔にならないようにそれを頭の後ろで束ねた。珍しく寝癖の立っていない

い守の黒髪も、少々だが風に靡く。迸る稲妻を体にまとう鬼獣は、青光りする体をこちらに向け威嚇するかの様に、稲妻は弾かせる。

「おっつ。蒼い線香花火みたいですね」

「何、のん気な事言ってるのよ。今夜で決着を着けるわよ」

「おっ。早速、あれを封印するんですか。それじゃあ。俺は少し離れた位置から」

のん気に笑いながらそう言った守が、その場を離れ様とした時、その右腕を力強く掴まれる。ピタリと動きを止める守は、目を細めゆっくりと彩の顔を見る。何と無く嫌な予感を感じた守だが、一応訊いてみる事にした。

「あのお。この手は、ナンデスカ？」

ちよつと、片言になる守に彩は即答する。

「時間稼ぎ」

「はい？ ごめん。ちよつと、よく聞えなかった」

「時間稼ぎするのよ。封印する為にはある程度、相手の体力を削らなきゃいけないし、私も念を練らなきゃならないんだから」

彩にそう言われた守は「やっぱり、こうなるんですか」と、小さく呟きため息を吐いた後、フロードスクウェアを具現化させた。いつもの様にフラフラと、前屈みに倒れそうになりながらも、フロードスクウェアを構える守は、真っ直ぐに青光りする鬼獣を見据える。

## 第十話 蒼い線香花火（後書き）

どうも。先週の水曜日振りです。崎浜秀です。

いかがですか？ 『ガーディアン』 楽しんでいただけているでしょうか？ 更新が週一と少ないですが、読者の方はどう思っておられるのでしょうか？

それで、先週から始まりました次回予告。ちょっと読者の様子を見て、これから先を考え様と思っていたら、あんまり反応が……。まあ、気にせず、今日も次回予告をやりたいと思います！

### 【次回予告】

蒼く輝く鬼獣を前に、守に告げられる「まともに戦おうと思うな」の一言！

その言葉に怒りを露にするフロードスクウェアに、遂にウィンクロードが告げるフロードスクウェアの本当の姿！

そして、結成された迷コンビ！ 次回『お前は俺のサポートアームズだ！ 結成！ 最低最弱コンビ（仮）』を、お届けしたいと思います。

ついでに、タイトルはあくまで仮です。途中、変更などあるかも知れませんが、ご了承ください。それでは、また来週の水曜日に会いましょう

第十一話 お前は俺のサポートアームズだ！ 結成！ 最低最弱コンビ

校舎脇の部室の前。広々としたその場所で、蒼く迸る鬼獣の体が映し出される。

ここは電灯も無く、暗いため鬼獣の体から放たれる蒼い稲妻が綺麗に煌く。だが、その稲妻は、時折弾けて、部室のガラスを割ったり、近くの木々に直撃して火を舞い上げたりしている。その鬼獣と対峙するのは大きく重量のある剣、フロードスクウエアを両手でしっかりと構える守だった。

流れ吹く風が砂塵を舞い上がらせ、守の前髪を微かに揺らす。恐怖や極度の緊張から、柄を握る手は汗ばみ、額からも汗が流れる。何度と無くこの鬼獣の稲妻を、目の当たりにしているため、中々前に足を踏み込む事の出来ない守は、チラツと、後ろに居る彩の方を見る。その守と目が合う彩は、思い出した様に言う。

「そう言えば、守は鬼獣とまともに戦おう何て思わないでよ！」

「エッ、でも、時間稼ぐんだらう？ 戦わないでどうやって時間を稼げと？」

「そこは、自分で考えて」

『待て！ 娘！ この最強のサポートアームズである俺に戦うなどは、どう言う事だ！』

怒声を響かせるフロードスクウエアに、迷惑そうな顔をする守。正直、フロードスクウエアの声は大き過ぎる。その為、間近で怒鳴り声を聞く守にとっては、物凄く迷惑だった。そんなフロードスクウエアに反論したのは、やはりウィンクロードだった。やたらと、興奮気味のウィンクロードは、カ一杯言い切る。

『黙れ！ 何が最強のサポートアームズですか！ 私の情報からで

すと、貴殿のランクはGランク！ 最強所か、最弱のサポートアームズなんですよ！」

「な、何を！ この俺を馬鹿にするか！ 大体、貴様の情報など当てるものか！ あんな鬼獣の気配も読み取れんポンコツが！」

ウインクロードの言葉に具現化された体をカタカタ震わせながら、怒鳴り散らすフロードスクウェア。柄を握る守の手に、その振動が伝わり倒れそうになるが、それを必死に堪える。

一方のウインクロードも、フロードスクウェアの『ポンコツ』の一言に怒りを露にし、彩の手から離れるかの勢いでフロードスクウェアに言い放つ。

「貴殿の様な、最弱のサポートアームズに、ポンコツを呼ばれる覚えはありません！」

「何だと！」

「まあまあ、もう止めよう。喧嘩しても仕方ないし」

「でもな！ 守！」

フロードスクウェアは守に何か言おうとしたが、それを守が制止言葉を続ける。

「フロードスクウェアの気持ちも少しは、分かる。でも、あれはよくないな。理由も聞かずに怒鳴るなんて。水島だって、俺等の事を考えてああ言ってくれたんだし」

「だが、俺は最強の」

「いや。今は違う。お前は最強のじゃなくて、俺のサポートアームズだ。火野 守の」

守はそう言い白い歯を見せ微笑む。その顔が、一瞬フロードスクウェアにはガーディアンマスターの顔に見えた。そして、守の言っ

た『俺のサポートアームズだ』と、言葉が心に響く。以前にも聞いた事のある言葉に胸が高まるのを感じるフロードスクウエアは、頭の中が真っ白になる。その時、地を駆ける音が響く。

フロードスクウエアに言葉を投げかけていた守は、鬼獣と対峙している事を思い出し視線を前に向けるが、そこに鬼獣の姿はない。両手でフロードスクウエアをしつかり握ったまま、守は辺りを見回す。

「水島。悪い。鬼獣見失っちゃった」

「見失ったじゃない！ 上よ！ 上！」

「へっ？」

彩の声で守は顔を上に上げる。すると、漆黒の空に浮んだ丸い月の真ん中で青光りする鬼獣の体はつきりと確認できた。この瞬間、守の脳裏にとても嫌な考えが過ぎる。そう、あの鬼獣がこのまま急降下したらどうしようかと。防ぐには、フロードスクウエアを上段に構えなければならぬ。だが、フロードスクウエアは重量で、今の守には相当荷が重かった。

「くっそ〜っ！ 重たいぞ〜！」

そう叫びながら、力を振り絞りフロードスクウエアを振り上げる守。頭上に掲げられる柄を握る両手。フロードスクウエアの刃は、守の背中を見据え剣先は地面を見据える。その光景は、上段構えと言うよりも、完全に振り上げただけの状態。もしフロードスクウエアを振るタイミングがズレれば、守は稲妻を体で受け止める事になる。そうなれば、確実に死を意味する。

「フロードスクウエア。死んだらごめん」

『何を、縁起の悪い事を。大体、折角お前のサポートアームズにな

つたのに、お前に死なれちゃ困る』

「そうですね。それじゃあ、いつちよ見せてやりますか！ 戦闘初心者のガーディアンと力を失った最弱のサポートアームズの最低最弱コンビの意地を」

『最低最弱か。まあ、それもいいだろう』

守が笑みを浮かべる。と、同時に稲光が辺りを青白く包み込み、鬼獣が勢いよく守目掛けて急降下する。歯を食い縛る守は力一杯フロードスクウエアを振り下ろす。振り下ろされたフロードスクウエアの鋭き刃が、急降下してくる鬼獣に一直線に向っていく。だが、鬼獣の体に刃が触れる事は無く、鬼獣を取り巻く稲妻に刃が弾かれ守の体ごと吹き飛ばされた。地面に鬼獣の爪が鋭く突き刺さり轟音を轟かす。これらの事は、ほんの一瞬の出来事で、彩には何が起こったのか分からなかった。

ただ、稲妻が守に向って落ち、それに向って守がフロードスクウエアを振り下ろす。そこまで、目で追えたがその直後、轟音が響き地面が砕け散り辺りを土煙が包み込んだ。砕けた地面の破片が、彩の足元まで飛んで着ており、彩は二・三後退り叫ぶ。

「エッ……。そんな……。ま、守が……。守が……」

『お、落ち着いてください！ まだ、守殿が死んだとは！』

土煙が風で消し飛び、そこには砕けた地面と堂々と四本の足で立ち尽くす鬼獣の姿だった。黒く焦げた地面から、黒煙が薄ら上り守の姿は確認できない。衝撃の光景に、思わず、ウインクロードを落として、両手で鼻と口を覆う彩。薄ら涙が滲む彩は大きな声で叫ぶ。

「マモルーツ！」

その叫び声に、何処からか「何、叫んでるんですか？」と、のん

気な守の声が聞いた。我が耳を疑う彩は、涙を拭くと辺りを軽く見回す。すると、地面を何かが抉った様な跡があり、それは、鬼獣の今居る場所から真つ直ぐ続いている。もしや、思う彩はその跡の先に目をやる。すると、暗くて見えなかったが、大木の根元の方に微かに人の影が見える。立ち上がりこちらに向ってくる影は、やはり守で衣服が少しこげていた。

「はひっつ。死ぬかと思った。マジで」

「コツチは、死んじゃったかと思って、泣いちゃったじゃない！」  
「いやっつ。意外に死なないもんですな。アハハハハッ！」

大笑いする守と、守が生きていた事に安心して笑みを零す彩。完全に、鬼獣の事など忘れていた様だった。そんな二人の姿に鬼獣は怒りを覚えたのか、体を取り巻く雷撃をぶつけ合つと、アチコチに雷撃と飛ばす。流石にこれでは笑っているわけにも行かず、彩はウインクロードを手に取り叫ぶ。

「すっかり、忘れてた。それじゃあ、守。もう一度時間稼いで、封印準備するから！」

「ふへっつ。またですか……。って、言うか水島さんは、今まで何してたんですか？」

「う・る・さ・いっつ！ いいから、時間稼ぎしなさい！」

彩の声に思わず「はい！」と、返事をしてしまった守は、足早に鬼獣の前に立ちフロードスクウェアを構える。なぜ、ああも守が女に弱いのかフロードスクウェアは気になった。これも、女には優しくと言う守の信念なのだろうと、自分で答えを出したフロードスクウェアは守に言う。

『さて、もう一度最低最弱コンビの意地を見せるか』



「そうですねっ。でも、あれ、物凄く怒ってますん？」  
『ンッ?』

守に言われ、フロードスクウエアも鬼獣を確認する。歯を力強く噛み締め、牙をむき出しにしながら放電する鬼獣の姿に、微かに半笑いするフロードスクウエアは『悪い。今回、お前死ぬかもな』と、小声で呟く。守には聞き取れず、「へっ? 何? 何?」と、フロードスクウエアに何度も聞き返したが、フロードスクウエアは何も言わない。それが、更に守の心に恐怖を生んだ。

**第十一話 お前は俺のサポートアームズだ！ 結成！ 最低最弱コンビ（後書き**

どうも。一週間ぶり登場の崎浜秀です。今回のガーディアンは如何だったでしょうか？ 楽しんでもらえているのなら、光栄です。それでは、早速次回予告に……。

**【次回予告】**

鬼獣にもう一度立ち向かう最低最弱コンビ。守とフロードスクウエア。

悪戦苦闘の中、遂に鬼獣を封印しようとする。だが、その最中に気付く。鬼獣の体の異変に。

次回『鬼獣封印 残された罪悪感（仮）』を、お届けしたいと思います。

すみません。こんな変な次回予告。必要ないんじゃないかって思ったら、メッセージください。そしたら、止めようと思ってるんで……。

## 第十二話 鬼獣封印 残された罪悪感

暗闇に浮ぶ青白い光を放つ鬼獣。走る稲妻は時折弾け、地面を叩く。

そんな鬼獣と向い合う守。重量のあるフロードスクウエアを持つ守の肩は、ズキズキと痛みを伴う。それは、先程弾き飛ばされた時の衝撃のせいでもある。

表情を引き攣らせる守は、歯を食い縛り真っ直ぐに鬼獣を見据える。そして、目を閉じ、静かに呼吸を整える。心を沈め、辺りの音に耳を傾けた。稲妻の走る音。風が流れる音。木々が揺れ擦れ合う音。全ての音が頭の中を駆け巡り、一瞬にして静まり返る。心が静まったのを感じ、ゆっくりと目を開く。

少し守の目付きが変わった様に、フロードスクウエアは見えた。その為、言葉をかける事が出来ず、ジッと守の事を見据える。あんなにやる気を感じられなかった奴が、こうも秀囲気が変わるか、少々疑問に思うフロードスクウエアだが、直後守が地を蹴ったのに気付く。

『お、オイ！ 守！ 何突っ込んでんだ！』

「ジツとしてて、また、あの落雷みたいの喰らうのは嫌だろ？」

『そうだけど、突っ込んで同じだろ！』

「まあまあ。どうせ、時間稼ぎなんだ。それに、俺等が突っ込んでれば、水島は襲われないですよ？」

先程の真剣な面持ちが、一瞬で無邪気な笑顔に変わる。唐突な変わり様に、聊か呆気にとられるフロードスクウエアだが、すぐに笑う。突如笑い出すフロードスクウエアを振りかぶる守は、大きな声で叫んだ。

「何、笑ってんだよ！」  
「グギャ！」

鬼獣に向って振り下ろされたはずのフロードスクウェアは、空を切り地面に剣先を打ちつけた。鈍く短い金属音が響き、地面が砕ける。剣先が少々地面に突き刺さっていた。「イツ」と、小さな声を上げた守は、鬼獣の姿を探す。

「守！ 早く地面から抜けよ！」

「はふっつ。無茶言うなよ。フロードスクウェア。お前、少しダイエツトが必要だ」

少々不満を漏らす守は、のん気な口振りだが、フロードスクウェアには見えていた。青白く光を放つ鬼獣が、守の真上に居ることを。その為、「早くしろ！」と、守を急かすが、既に肩の痛みも限界の守は、力が入らず地面に刺さったフロードスクウェアを抜くことが出来ない。

焦るフロードスクウェアに、「ごめん。やっぱり無理っぽい」と、笑みを浮かべ呟く守にフロードスクウェアは大声で叫ぶ。

「真上だ！ 真上に、鬼獣が居るぞ！」

「へっ……。マジ？」

笑みを引き攣らせながら守は、素早く上空を見る。真つ黒な空に浮ぶ青白く輝きを放つ鬼獣。だが、少し様子がおかしい。まるで、守の事を相手にしていない様で、視線はこちらを向いていない。その事に気付いた守は、その視線の先を冷静に分析する。そして、導き出した。奴の狙いを。

視線を落す守は、両手で力一杯フロードスクウェアの柄を引く。地面が軋み亀裂が生じる。首筋から太い血管が浮ぶ。守が無理をし

ていると気付くフロードスクウェアは言い放つ。

「おい！ 無理すんな！ お前は、俺を置いて逃げればそれで済む  
だろ！ 早くここから逃げろ！」

「違うんだよ！ 元々、あいつは俺等の事なんて、相手にしちゃい  
ない！ 最初のは単なる威嚇射撃みたいなもんだ！ 狙いははなっ  
から ！」

そこまで訊いたフロードスクウェアも狙いに気付く。その刹那、  
守の頭上で青白く輝いていた鬼獣が漆黒の空を翔る。綺麗に蒼い閃  
光が空に真っ直ぐ線を引き、彩に向って突っ込んでいく。全身の力  
を振り絞る守は、その瞬間、ふと閃く。それは。

「後は任せる！ フロードスクウェア！」

「ウアアアアアッ！ 覚えてるよ！ マーモール！」

具現化を解き小さなアクセサリに戻ったフロードスクウェアを、  
守は力一杯投げた。それは、真っ直ぐ彩に目掛け飛んで行く。蒼い  
閃光が彩に向って落下してきたその刹那、小さくキラリと刃が光り  
を放った。

それからは、全部一瞬の出来事だ。勢いよく落下する蒼い閃光が、  
小さなアクセサリとぶつかり合う。その途端、辺りを照らすかの  
様な眩い光を放つ。それはまるで、朝日が顔を出したかの様だった。  
そして、その光りの中で響く。爆音に近いほど大きな雷鳴が。

その雷鳴は、学校から、町中に広がり、寝静まった学校の近隣の  
家々の明かりが次々と点灯していく。だが、その時には既に、眩い  
光も轟く雷鳴も消えており、辺りはいつもと何も変わらない。その  
為、皆夢だと思ってもう一度眠りに就くのだった。

右腕でその光を遮ぎった守は、辺りに吹き荒れた爆風に髪をボサ

ボサにされ、土埃にむせた。吹き飛ばされそうにもなったが、それは何とか堪えたのだ。

そんな時、地を滑る様に鬼獣の体が吹き飛ばされ、夜空に煌きながらフロードスクウエアは茂みの中へと消えていく。その間、フロードスクウエアは『し〜び〜れ〜た〜』と、震えた声で叫んでいたが、それは誰の耳にも届かなかった。

呆然と立ち尽くす守は、横たわった鬼獣を見据え少し可哀想に思う。それは、体中傷だらけだったからだ。まるで、何かに襲われた様な、そんな風に見える。今にも息絶えそうで弱々しい鬼獣に、守は歩み寄る。そんな守の方に顔を向ける鬼獣は、威嚇するように歯をむき出しにする。

「守！ 下がって！ 封印するから！」

「ちょ、ちよつと待ってくれないか？」

『何を仰るのですか！ また、暴れてしまいます！』

厳しい口調でウィンクロードがそう言うが、守はそれを無視し鬼獣の前に屈みこむ。そして、そつと鬼獣の体に触れる。多少だが電気がパチパチと、弾けるが、先程の様に強い稲妻ではない。

今にも息絶えそうで、弱々しく上下する腹。それから、触って初めて気付く。この鬼獣の皮膚は焼け爛れている事に。それ程まで、体を取り巻く稲妻の威力が凄かったのだろう。苦しそうな鳴き声をあげる鬼獣に、暫し悲しげな瞳を見せる守は、目を閉じ静かに口を開く。

「そつか。苦しかったんだな。だから、俺等に何とかして欲しかったんだろ？」

「クウウウウッ……」

「気付いてやれなくてごめんな」

そう呟く守は、俯き目に涙を浮かべる。そんな守を見据える彩は、「守……」と、小さく呟き具現化されたウイנקロードに目を落す。すると、杖の頭にある水晶が軽く輝きウイנקロードの声が聞える。

『彩様。私達は封術士。やる事は、一つです』

「でも……」

『それが、私達の仕事です』

「……」

静かに俯き、ポケットから、携帯ほどの大きさのカードフォルダーを取り出した。フォルダーを開けると、カードの束が入っており、茶色の背表紙に白色の線で星型が描かれ、その中心に『封』と漢字が書かれている。それを、一枚取り出した彩は、右手の人差し指と中指の間に挟んでカードを持つと、ジツと目を閉じ集中力を高める。心を無心にする彩は、暫くして目をゆっくり開きジツと鬼獣を見据える。その鬼獣に寄り添う守の表情に、暫し唇を噛み締め心を鬼にして呪文を唱える。

「我は、封術士！ 名は水島 彩。我が名の下に物の怪を封ずる事を許可す！」

その言葉に守はハツとする。そして、叫ぶ。

「水島！ お前！」

「封印！」

ほぼ、同時だった。守が叫ぶのと、彩が叫ぶのは。そして、直後、守が触れていた狼電の体が粒子となり、彩の右手に持つカードへと吸収されていく。その粒子は、青白く煌きながらカードの中へと消えていった。無論、狼電の姿はもうそこにはない。

地に両手を着き俯く守。指で地面を力強く抉る守は、歯を食い縛り目を伏せる。彩の持つ右手のカードには、狼電の姿が描かれていた。それを見つめる彩は、「これで、よかったのよね？」と、呟く。それに、ウインクロードは『はい』と、小さな声で呟いた。

静かに立ち上がる守は、俯いたままフラフラな足取りで彩の方に向って歩いてくる。そんな守の顔を、彩は見ることが出来なかった。何故か、罪悪感があったのだ。これが、封術士の仕事なのに、何故か。胸が苦しくとても辛かった。そんな事を思っていると、守が彩の横を通り過ぎる。その時、チラリと見えた横顔。それは、少し恐かった。今まで見た事の無いくらい。

茂みの中へと歩みを進めた守は、闇の中で光るフロードスクウェアを拾い、首にかける。まだ、痺れているのかフロードスクウェアは言葉を話さず黙ったまま。

フロードスクウェアを首にかけた守は、静かに茂みを出る。その際、草の葉が擦れ合いザワザワと音を立て、その音だけが静まり返ったその場に響いた。



## 第十二話 鬼獣封印 残された罪悪感（後書き）

こんばんは。 崎浜秀です。 また、こんな始まり方の後書きですが、読者の皆様に謝りたい事が……。

それは、今まで更新できなかつた事です。 本当、すいませんでした。 それですが、スランプからボチボチ立ち直っているのですが、更新の方はこの先も遅れると思います。

実は、今度とある小説大賞に小説を送りたいと思っております、そっちの方を優先的に進めたいと思っております。

僕のような未熟者が送っても落ちるのは目に見えてますが、一応小説家になるのが夢なんで今の内一度は挑戦しておこうと思つた次第です。

本当、読者の皆様には申し訳ないとしか、言いようが無いです。 また、いつ更新するかは不確かなため、次回予告はしません。 ただ、一ヶ月二度くらい更新出来る様努力します。

### 第十三話 夕焼け空を見上げて

あれから、数日が過ぎた。

その後、守の事が校内新聞に載る事は無かった。それ以上に大きなスクープが、その次の日に見つかったから。部室の窓が割られ、地面には何かの爪痕と黒焦げた跡。それから、あの落雷に襲われた時、たまたま理穂がシャッターを切ったその写真に写っていたのだ。青白く輝く鬼獣の姿が。その事が大々的に記事にされ、もう守が理穂を襲ったと言うそんな話は報道部から消え去っていた。ついでに、報道部は今もその謎の生き物を探しているとか。

放課後の教室に一人残る彩。もう、空は夕色に染まりつつあり、綺麗なオレンジの空と青い空が二層にくっきりと分かれて見える。そんな空を頬杖を突きながら見据える彩は、ふとため息を漏らす。誰もいない教室内に響く彩のため息は、少々大きく聞こえる。少し悩みがあった。いや、実際には少し所じゃない。

その悩みと言うのは、守との事もある。あれから、一度も話をしていない。その為、報道部の新聞の事とか、鬼獣の事とか話したいことは沢山ある。だけど、守に話し掛けるタイミングが中々つかめない。と、言うより完全に避けられている様だ。例えば、傷ついてたとしても、鬼獣を封じるのが封術士の仕事。可哀想と言えど、仕事は仕事なのだ。

また、ため息を漏らす彩は、机に突っ伏して籠った声で叫ぶ。

「あ〜っ。何で、こうなっちゃうのかな〜っ」

顔を上げ、机の上に両手を重ね合わせて置く。暫し俯いたまま机を見据える彩は、背中を丸め机に置いた重ね合わせた両手の上に顎を置き目の前の壁を真っ直ぐ見つめる。そして思う。自分は一体何

をしているのだらうと。そう思うと、やはりため息が毀れた。

夕暮れの空を見上げながら、守は岐路を歩む。ガードレールを左手で叩きながら、のんびりとした足取りで足を進める守は、十字路の信号機の前で止まる。車が目の前を行き交うのをジッと見据える守は、静かに息を吐く。信号が青に変わり足を進めると、守の横を何人もの人が追い抜いていく。別に皆が早く歩いている訳じゃない。守が遅すぎるのだ。信号を渡りきると、信号が点滅しすぐに赤に変わる。その時、守は思い出した様に呟いた。

「あつ。向うだった……」

そう呟いた守は、すぐに青に変わった歩道をゆつくりと歩き出した。その後も、何度も渡る信号を間違えながら、ようやく細い道の続く住宅街に辿り着く。ギリギリ二台通れる位の道幅の住宅街を歩く守は、後ろから何人もの人に抜かれていた。高校生や中学生と学生ばかりに追い抜かれ、時々自転車に乗ったおばさんも通る。何人に抜かれても全く気にせず、マイペースに足を進める守は、T字路を真っ直ぐ進んだ後足を止め振り返り呟く。

「間違えた……」

道を引き返しT字路を曲がった守。いつも以上に家に帰るのが遅い。いつもは二十分位で、家に着くが、今日は信号を間違え、道の間違えと行ったり来たりでかれこれ、一時間ぐらいいたつ。流石に呆れてしまったフロードスクウェアは、渋々と守に声を掛けた。

『オイ。最近、ちょっと、おかしかったが、今日はいよいよやばくなったか?』

「なんですか？ そのいよいよやばくなつたかつて？」

不満そうにそう言う守は、首にかけたフロードスクウェアを右手で掴み、目視する。すると、壁際を歩いていた守は、そのまま電柱へと激突した。これには、フロードスクウェアも笑うしかないと言った感じで、『ハハハ……』と、呆れた様な笑い声を響かせた。蹲り少々赤くなつた額を押さえる守は、目を細めてフロードスクウェアを見据え、「イテエ……」と、小さく呟く。

『お前が、前見て歩かないからだ』

『でも、お前が声掛けるから……』

『人のせいにするな』

「エーッ。でも、フロードスクウェアは人じゃないですし……」

語尾をフロードスクウェアに聞えない程度の音量で言つたつもりだったが、フロードスクウェアに全て聞えていたらしく、『なんだつて？』と、少し恐い声で聞き返された。もちろん、守は惚けた。半笑いを浮かべながら。また、すぐに足を進めた守は、住宅街に唯一あるコンビニの前を通りかかった。四、五人のガラの悪い学生と少し気弱そうな眼鏡を掛けた一人の学生がいる。ガラの悪い連中は、制服のボタンを全開に開き、下から着ているシャツが見えている。しかも、髪は金髪から赤など色鮮やかな髪をしている。とてもじゃないが、関わり合いにはなりたくない感じを漂わす。

暫し足を止め、遠くからその光景を見据える守は、ふと小さくため息を吐く。流石に見てみぬフリは出来ない。タバコを吸つたり溜るのは別に構わないけど、流石に人様に暴力振るつてお金を盗るだなんて、許せるはずが無い。目を細めてもう一度ため息を吐く守は、渋々と言つた感じで、そのガラの悪い学生達の方に歩み寄つた。

「おい！ 金だせよ！」

五人の中で、一番体格がでかく、制服の下に真つ赤な布地の中央に、白で不気味なドクロの絵が描かれたシャツを見せるリーダー格の男が、気弱そうな眼鏡を掛けた学生の右肩を強く叩く。眼鏡の学生の体は、後ろに弾かれ、壁に背中をぶつける。その衝撃で、眼鏡がずれるが、すぐに学生は眼鏡を掛けなおす。意外と几帳面だ。少し恐がる様な素振りを見せる気弱な学生は、尻のポケットから財布を取り出し千円札を二枚出す。

「い、今、これだけしか……」

「ハア？ ふざけんなよ！ てめえ！」

髪を真つ赤に染め後ろ髪を長く伸ばした男が、横から眼鏡を掛けた学生に掴みかかる。「ヒイツ！」と、小さく声を上げる眼鏡の学生は、制服を掴む男の手を咄嗟に両手で掴む。驚きのあまり、勝手に体が反応してしまったのだ。そんな眼鏡の学生の腕に光る金のブレスレット。変わったデザインのブレスレットで、五センチほどの長さがあり、幅は眼鏡の学生に合わせた感じだろう。そして、丁度中間部分の所にオレンジ色の水晶の様な物が輝く。そのブレスレットに興味を示す真つ赤な髪の学生は、眼鏡の学生の腕を掴むとブレスレットを無理やり奪おうとする。

「や、止めてください！ こ、これは！」

「五月蠅い！ 金がねえなら、これで簡便してやるって！」

「あゝ。あつ、君達、止めないか。よってかかって、恥かしいと思わないんですか？」

無理やりブレスレットを奪おうとする真つ赤な髪の学生に、背後からそう言ったのは、守だった。暫し呆れた様な顔を向ける守の方

に、「はあっ？」と不服そうな声を上げて五人のガラの悪い学生が一斉に顔を向ける。しかし、間近で見ると……マジ恐い。と、思う守は、冷や汗を掻きながら、苦笑いを浮かべて言い放つ。

「お金を人から奪うだなんて、恥かしいとは思わないんですか？  
大体　ウガッ！」

殴られた。カ一杯。周りにいた他の三人の男に。しかも顔を。一瞬視界が真っ暗になり、よろめいたのが分かった。それでも、守は倒れるのを踏み止まり立ち尽くした。だが、その後の記憶は曖昧だ。結局、一発目の不意打ちで殆ど意識が朦朧としていた為、正直言うとも何も覚えていない。ただ、気付いた時にはガラの悪い学生はいなくなっていて、コンビニの横のゴミ捨て場に、ボロボロになった眼鏡の学生と一緒に寝かされていた。もちろん、財布からお金は抜き取られていた。

「ハゲウゝツ。大丈夫ですか？　見ず知らずの学生さん」

頬や臉を腫らし、アチコチ擦り切れ血を流す守は、フロードスクウェアがあるのを確認しながら横に寝かされる眼鏡の学生に声を掛ける。右臉は結構腫れていて、殆ど目が開けられず視界は狭まっていた。口の中には血の味が広がっているが、水を買ってお金も無い為、守は口の中の血を吐く。そんな守に、眼鏡をかけた学生が返事を返す。

「ウウツ……。す、すいません。巻き込んでしまつて……」  
「いえいえ。首を突っ込んだのは自分からですから」

微かに笑って見せるが、すぐに口の中が痛み上手く笑う事も出来なかった。制服についた埃を払う守は、「それじゃあ。次から気を

つけてください」と、告げ歩き出す。フラフラとした足取りで。やはり、まだ意識ははっきりしていない様だ。足が地に着いていないと、言う感じだった。

『お前、弱すぎるぞ』

フラフラの守に声を掛けたのは、無論フロードスクウェアだ。物凄く呆れた口調で、守を少し馬鹿にしている様にも聞える。そんなフロードスクウェアに、「俺は、非暴力主義なんです……」と、弱々しく言う。全くもって説得力の無い守の姿に、フロードスクウェアは呆れた様に笑い声を上げる。

フラフラと歩く守の後姿を見据える学生は、掛けていた眼鏡を外し胸ポケットに入れる。その際、学生の腕のブレスレットに埋め込まれた水晶が一瞬光り、

『そろそろ、無駄に殴られるの止めたらどうだ？ 大地』

と、声がする。それに対し大地と呼ばれた学生は、右手で髪を掻き揚げ目付きを変える。その顔付きは先程とは違い、雄々しく男らしい顔付きに変わっていた。そして、軽く笑みを浮かべ堂々とした声で返事を返す。

「知ってるだろ？ グラットリバー。俺が群れる連中は相手にしないって。でも、まさか意外な所で、会っちゃったな」

『あれが、火のガーディアン？ 何か弱そうだな。しかも、まるつきし力感じねえし』

グラットリバーと呼ばれたブレスレットが、口の悪い言葉を連呼

するが、大地はそれを制止楽しそうに笑みを浮かべながら、「ガー  
ディアンとしちゃ、合格じゃんか」と、言う。呆れた様のため息を  
漏らすグラットリバーは、『あれで、合格なのか？』と、ボロボロ  
でフラフラと歩く守の方に視線を送りながらそう言った。



### 第十三話 夕焼け空を見上げて（後書き）

お久し振りです。 崎浜秀です。

『ガーディアン』もやっとの事で、十三話……。

更新が遅くて、本当に申し訳ないです。数少ない読者の皆様、本当に迷惑おかけしております。

次の更新がいつになるか分かりませんが、今月中に更新したいと思っています。

## 第十四話 一時の静けさ 全ての始まり

沈みかけた夕日を見ながら校門を出た彩。目の前に広がる住宅街が全てオレンジ色に見える。これも、夕日のせいだろう。暫し校門の前で立ち尽くす彩は、ため息を漏らし俯く。その彩の横を何人も生徒が追い越してゆく。殆どが部活生。内半分は文化系の部活動に所属している者達だ。文化系の部活の殆どが、この時間帯に部活動を終える。唯一、終らないのは報道部だけ。多分、運動系の部活動よりも遅くまで残っている。それだけ、今はネタに困っているらしい。あの化物騒ぎから、ありとあらゆる学校で起きる事件を調べまわっているとか。すでに、報道部ではなくなっている気も……。そんな報道部の事など、どうでもいい彩は、肩を落としゆっくり歩き出す。やはりあの事を悔やんでいるのだろう。この所、この調子で元気が無い。その事がウイנקロードは心配だった。だが、なんと声を掛ければいいのか分からず、ただ見守るだけだ。肩を落とし元気の無い彩に、背後から明るい声が呼びかける。それは、美しく心に響く様な清らかな声だった。そんな清らかな声の主は、奈菜だ。

「さくやちゃん。今から帰り？」

彩の隣まで、小走りで駆け寄った奈菜は、可愛らしい笑みを浮かべ彩を見る。少し暗い気持ちだった彩だが、無理に笑みを作り奈菜に「うん」と、小さな声で答えた。すぐに元気が無い事が分かるが、奈菜は微笑んだまま「じゃあ、一緒に帰ろう」と、明るく言う。正直、一人にして欲しかった。だが、折角の誘いを断る事も出来る訳が無く、彩は一緒に帰る事にした。

暫く沈黙が続く。横に並び歩く彩と奈菜。並ぶと彩の背丈の低さが際立った。元々小柄な体格だと言う事もあるが、少し俯き気味の

為より小さく見える。微笑む奈菜は、楽しそうに軽い鼻歌を歌う。俯く彩は頭の中でひたすら考え事をする。完全に奈菜と一緒だという事など忘れて。

信号が赤に変わり、二人の足がようやく止まった。車が行き交い微かに風が吹き、奈菜の腰まで届く黒髪が、フワツと舞う。毛先まで綺麗に真っ直ぐ整った黒髪は、風が止むと何事も無かった様に綺麗に整った。

「何か、考え事？」

不意の言葉。それは、考え事をしていた彩を、現実へと引き戻した。すぐに答える事の出来ない彩。多少、困惑していた。今まで沈黙を守り続けていた奈菜が、急に声を掛けてきたから。その為か、先ほどから言葉になっっていない声ばかりが出ている。

「あう、あえ、その……」

「ごめんなさい。急に声かけて。まさか、そんなに驚くと思わなくて……」

あまりの彩の慌て様に、奈菜は不意に声を掛けた事を謝る。彩も何か言わなきゃと、焦りながら言う。

「鬼に、気に？ 木にならないで！」

その場がしらける。流石にこれには彩も我に返り、あまりの恥かしさに赤面する。耳まで真っ赤にした彩の姿に、口を押さえくスクスと笑う奈菜。笑われ更に顔を真っ赤にする彩は俯き顔を隠そうと必死に努力する。

「フフフ……。大丈夫だよ。もう少し落ち着いて」

「あうっつ。ご、ごめん……」  
「でも、久し振りだね。こうやって話すのって。あの落雷事件以来かな？」

あの時の事を思い出す奈菜は、何故か楽しそうだった。確かにア  
レ以来、彩は奈菜と話した事は無かった。別々のクラスと言う事も  
あり、廊下ですれ違う事はあっても、わざわざ足を止めて話す事な  
どあるわけが無い。それに、元々奈菜とそんなに親しい間柄でもな  
いと、彩は思っている。でも、奈菜は違う。

「何だか、少し元気ないね」

「そ、そう？ あっ…青に変わった……。行こっ」

信号が青に変わり、彩は微かに作り笑いを浮かべ歩き出す。それ  
に、少し遅れて奈菜が歩き出し横に並ぶ。渡り終えると、奈菜が足  
を止め、数歩前で彩も足を止める。どうしたのだろうか、振り返る  
彩に笑みを浮かべる奈菜は、

「ごめん。私、ちょっと寄りたい所があるんだけど、付き合っても  
らってもいい？」

「寄りたい所？ 私は別に構わないよ」

「それじゃあ、行こっ」

楽しそうに笑みを浮かべ、彩の腕を引く奈菜に、着いて行く彩は  
ふと胸元で揺れるウィンクロードの水晶が点滅しているのに気付く。  
それは、まるで何かの合図の様だった。立ち止まる彩。すると、奈  
菜の手が彩の腕から離れる。足を止める奈菜は、ゆっくり振り返り  
彩に呼びかける。

「彩ちゃん？」

俯く彩は、何も言わない。そんな彩にもう一度呼びかける。

「彩ちゃん。どうかした？」

「ご、ごめんなさい。ちょ、ちょっと用事が出来たの。だから……。その……」

申し訳ないと思う彩は、言葉に詰まる。そんな彩に、笑みを浮かべる奈菜は、優しく声を掛ける。

「用事なら、しょうがないよ。また、今度付き合ってね」

その笑みにキュンとする彩は、頭を深々と下げ奈菜に背を向け走りだした。そして、首から下げたウインクロードを手取る。杖の頭についた水晶が軽く光るが、それは、彩にしか見えない。そして、ウインクロードの声も、彩にしか聞えない程小さい。

『急いでください！ 狼電と違い、奴は凶暴です！』

「分かってる！ けど、私一人じゃ……」

『何を言っているのですか！ 彩様には私がついております！』

「そうだけど……。ウインクロードは、戦闘には不向きだから……」

微かに笑みを浮かべそう言う彩に、『ですが！』と、大きな声を上げたウインクロードだったが、その後の言葉が出てこなかった。「ごめんね。ウインクロード」と、彩は呟きその後、二人は言葉を口にしない。それぞれが、自分の不甲斐なさを知っているから。

街中を駆ける。行き交う人々の間を抜けながら。肩口まで伸ばした黒髪が激しく乱れ、制服も若干だが乱れ始めていた。だが、そんな事を気にしている猶予は無い。既に時は迫っていたのだ。町中に人々の悲鳴がこだまするその時が。

そうとも知らず、走り続ける彩は、赤に変わった信号で足止めをくらっていた。変わったばかりで、まだ当分青になる気配の無い信号の前。苛立ちを隠せずにいる。そんな彩を信号待ちする人達は変な目で見ると。それだけ、苛立っているのがヒシヒシと伝わってくるのだらう。

そんな時だった。向かいのビルの横に少しだけ姿を見せる巨大デパートの五階が、爆音と共に窓ガラスを突き破り、真っ赤な火柱が横に一瞬突き出た。誰もが皆驚き、悲鳴を上げる。その時の衝撃で、そのデパートの隣のビルの屋上にそびえる看板は、中心が陥没し鉄板がめくれ上がっている。しかし、被害はこれだけではなかった。付近を歩く人々は、頭の上にガラスや砕けたコンクリートが降り注ぎ、さらにはその場を走る自動車のフロントガラスに碎石が直撃し、他の車を巻き込んだの玉突き事故までに発展する。

砕けた窓から上がる火の手は、黒煙を舞い上げ更に勢いを強めていく。流石に驚いた様子の子の彩は、信号が青に変わったのを確認して大急ぎで走り出す。もちろん、警察や取材陣が集まる前にデパートに着かなければアウト。もう、デパートに入る所の騒ぎじゃなくなってしまう。

「ど、どうしよう！ このままじゃまずいよ！ ウィンクロード！」  
『落ちて着いてください。彩様。火猿かえんは、まだ本格的に活動を開始した訳では無い様です』

「それじゃあ、これから、更に被害が広がるって事？」

『そう考えるのが、妥当かと……………』

「そんな……………。何でよりによって火猿なのよ……………」

眉間にシワを寄せ、少々目を細める彩はぼやきつつも目的の場所へと急ぐ。呆然と立ち尽くす人々の合間を抜ける彩。この後起こる壮絶な戦いの幕開けだとも知らず。

## 第十四話 一時の静けさ 全ての始まり（後書き）

こんばんは。 崎浜秀です。

ずいぶん、長い間更新していませんでしたが、ようやく更新できました。 読者の皆様すいません。

物語はまだ始まりに過ぎませんが、読者の皆様に楽しんでいただける様な話の展開にしていきたいと思っております。

## 第十五話 火猿の狙い

燃え盛るデパート。

柱は炎上し、ありとあらゆる物が燃え上がる。そんな中に、浮ぶ  
一体の化物。

体は炎に包まれて、太くガツチリした腕と、分厚い胸板。ゴリラ  
の様な顔付きの化物は、火の海と化したその場所に止まり、あたり  
を見回す。

そこに、響く床を叩く音。

化物はその音のする方に体をむけ静かに口を開く。

「この程度で奴等は姿を見せるのか？」

低くドスの聞いた声に、燃え上がる柱の奥から返事が返る。

「ああ。奴等は来る。お前の気配とこの爆音に気付いて」

落ち着きのある澄んだ声に、体の炎を更に激しく燃やす化物。  
それに対し、落ち着きのある澄んだ声がもう一度聞える。

「慌てる必要は無い。それに、もうすぐ傍まで着ている」

「すぐ傍か……。待ちきれないぜ……」

「後の事は任せるぞ。火猿」

「ああ。任せる」

火猿と呼ばれた化物がそう返事を返すと、柱の奥に見え隠れして  
いた影が一瞬で消えた。



一階食品センターには、彩の姿があった。何とかデパート内に侵入したのだ。

既に誰もおらず、静まり返っている。彩は暫く一階を探索し、何もないことを確認してから二階へと上がってゆく。

『彩様。気をつけてください。まだ、火猿とは距離がありますが、いつ襲ってくるか分かりませんから』

「分かってる。だから、こうやって一階一階慎重に調べてるんじゃない」

『ですが、私は何か胸騒ぎがしてしょうがありません』

ウインクロードがそう言うと同時に天井が砕け落ちた。

「キヤツ！」

破片が彩に襲い掛かった。防ぐ事も出来ず、破片を全身に殴打する彩は、床に倒れ込んだ。

天井には大きな穴が開き、そこから真っ赤に燃える火猿が降り立つ。瓦礫を踏みしめ、倒れている彩を見据える火猿は、更に全身の炎を強めドスの利いた声を響かせる。

「封術士だな。ようやく来たか。待っていたぞ」

『彩様！ 気を確認に！』

「……大丈夫。これくらい ツ！」

激痛が右足を襲う。その痛みに表情を歪める彩は、右手で右足を押さえた。生暖かなベツトリとしたものに右手が触れる。そして、それが血である事に気付いた彩は、右足から大量の失血をしている事にここで初めて気づく。

破片で殴打した時に切れたのだろう。ズキズキと軋む様な痛みを

伴う右足を庇う様に、彩は立ち上がり火猿と距離をとる。右足から流れ出る血は、床を真っ赤に染め今も尚止まる事を知らない。

そんな彩の姿を見るなり、火猿は不適に笑みを浮かべる。そして、瓦礫を踏み砕きながら一歩一歩と彩の方へと歩みを進めた。

「手傷を負ったみたいだな。ガーディアンも無く、手傷を負った封術士など、敵ではない」

『彩様！ 来ますぞ！』  
「分かつてる」

彩はしっかりと両手でウインクロードを構える。すると、火猿が勢いよく駆け出す。瓦礫は火猿に力強く駆られ木っ端微塵に砕け宙を舞う。

そして、ウインクロードを構える彩の体に衝撃が走った。

「ウッ！」

何が起こったか全く分からない。ただ、凄まじい衝撃がウインクロードを握る彩の両腕に襲い掛かり、地に足を踏ん張る事も出来ず、体は宙を舞っていた。

床に何度も体を打ちつけ、ようやく勢いが止まる。ウインクロードを握ったままうつ伏せの状態の彩は動かない。床には点々と血痕だけが残っていた。

『さ……彩様……大丈夫ですか？』  
「……………」

ウインクロードの声に、返事は返ってこない。封術士として鍛えられているとは言え、彩は女。アレだけの衝撃を体に受け動けるはずは無い。それに、あの一撃で既に体はボロボロだった。

『彩……様……』

小さく呟くウインクロードだが、奥から聞える足音に声を張り上げる。

『彩様！ しつかりしてください！ 目を覚ましてくだされ！』

「まずは、一人目だ」

足音と共に聞える火猿の声。徐々に近付いてくるのは明らかだ。

『彩様！ 彩様！』

ウインクロードは何度も彩の名前を呼ぶ。だが、反応は無い。このままでは、彩が危ないと焦るウインクロードは、徐々に冷静さを失いつつあった。

近づく足音が急に止む。歩みを止めたのだろう。だが、それにしては、辺りに火猿の体の炎が見えない。隠れているのだろうか？ そんな事を思うウインクロードだが、その視界に微かに捉えた。燃え上がる火の粉を。

「フハハハハッ！ 俺様の炎で焼き尽くしてやる！」

不適で低い笑い声。ドスの利いた鋭い怒声。徐々に浮かび上がる巨大な火の玉。それは、螺旋を描き進み、炎は球体を保ち更に大きくなる。

そして、その火の玉の背後に微かに見える火猿の顔が、不気味だった。何も出来ないウインクロードは、自分の無力さを知った。所詮、サポートアームズは扱ってくれる者が居なければ何の役にも立たないと感じる。

大きくなりつつある火の玉は、辺りを明るく照らす。

「結局、奴は現れずか……。まあいい。また、別の封術士を襲えば済む話だ」

「 ！ 貴様！ まさか、初めから彩様を！」

「勘違いするな。俺様達はそんな低レベルの封術士など相手にしない。貴様等を襲ったのは、奴をおびき出すためだ。まあ、奴も貴様等の様な低レベルな封術士は助けに来ない様だがな。フハハハハ……」

火猿の笑い声だけが響く。そして、「死ね」と、火猿が叫ぶと同時に、火の玉が渦動しながら向ってくる。何も出来ず死を覚悟するウインクロードだったが、何か黒い影が彩の前に立ちはだかった。迫り来る炎が、その人物を映し出す。

黒く足元まで届くコートを羽織、頭にはフードを被っている。薄っぺらのコートは、軽く浮き上がり、頭に被るフードがふわりと吹き上がった。フードのしたから現れた赤と茶が複雑に混ざり合ったボサボサの髪。火の玉の光りではつきりと見える男の顔は、凜々しく大人びている。体付きもガツシリしていて、背丈は一八〇後半位だろう。

コートを纏う男はスツと右手を前に出し、左足を引く。大きく開かれた袖口からゆっくりと右手が現れる。微かに薬指に輝く真つ赤な水晶のはめ込まれた小さなリング。手首にも少し細めのブレスレットがチラつく。そのブレスレットにも蒼い水晶が煌いていた。

「炎を喰らえ」

優しく穏かな声でコートを纏う男の右手が巨大な火の玉に触れるや否や、赤く輝く水晶のついたリングに吸収された。一瞬で消え去った火の玉が残したのは焦げ臭いだけで、後は何も残っていなかった。

た。右手を前に出したまま蒼い瞳で、薄らと見える火猿の姿を見据える。

薄らと浮ぶ火猿の口元に白い歯と鋭い牙が二本ぎらつき、涎が滴れた。

炎が消え去り、辺りは多少薄暗くなり、先ほどまではつきり見えていた男の顔が全く見えなくなる。微かに見えるのは、茶色の髪と混ざり合っている赤い髪だけ。何とか男の顔を見ようとするウインクロードに、男の穏やかな声が言う。

「水島に仕えしサポートアームズ。名をウインクロード」

「な、なぜ、私の名前を！」

驚きを隠せないウインクロードは、そう聞き返す。もちろん、驚いたのには理由があった。それは、ウインクロードにその男との面識が無いと言う事だ。通常、サポートアームズの名を知るのは、その他のサポートアームズと、その適合者、そして接触したガーディアンと封術士のみ。だが、この男にサポートアームズ存在を感じない。それに、封術士やガーディアンとは違う何か不思議な力を、ウインクロードはその身に感じていた。

「守る者と封じる者。一つでは何の意味も持たない。サポートアームズとて、一人では何も出来ない。それと同じだ。守る者が居て、初めて封じる者の力が発揮できる。そのことを忘れるな」

その言葉がウインクロードの胸を打つ。今、その事を自分自身が実感していたから。

男は手を翳す。ウインクロードと彩の方に向けて。口元が微かに動く。何か呪文を言っている様だった。だが、どんな事を口にしていいのかウインクロードには聞えない。それどころか、男の手の平から光りが放たれ、視界を遮られた。

## 第十六話 彩の友達

真つ白な蛍光灯。

目を開くとそれが、眩しく映る。

彩はベッドの上に寝かされていた。真つ白なカバーの掛かった布団をかぶせられて。フカフカのベッドの感触に、目を覚ましたばかりにも関わらず、自然と瞼が落ちてくる。一体、いつ以来だろう。こんなに心地よい気持ちになったのは。

朦朧としていく意識の中、耳に聞える足音。廊下の方から、複数聞える。明らかにこの部屋の前で、足音が止み磨ガラス越しに何人かの黒い影が映る。そして、勢いよく戸が開かれ流れ込む様に多数の人々が入ってくる。

それには一瞬にして目が冴え、驚きの声を上げる。

「えっ、ななな何？」

上半身を起こした彩は、入って来た人達を見て、安心したように息を吐く。入ってきたのは、同じクラスの女子生徒達。皆、彩の友達だ。いや、みんなではない。彩の友達に紛れ、報道部がチラホラ見えた。何等かの情報が、報道部の耳に届いたのだろう。

呆れる彩に、初めに声を掛けたのは、手前に居たオレンジブラウンに染めた髪を二つわけのお下げにした少女だった。お下げは肩に掛かり胸の位置まで髪は伸ばしてある。右目の目尻の辺りには、小さな黒子があり、それが可愛らしい。背丈は彩よりも低く、体型もホツソリとしている。所謂、幼児体型と言う奴だ。

「だ、だ大丈夫？ もう、心配したよ！ 朝のホームルームで、彩ちゃんに怪我したって聞いて！ もう、もう、心配で、授業何て、全く耳に入らなかつたんだよ」

普通の人よりも少し高めの少女の声に、背後から鋭い口調の声が割り込む。

「唯香ゆいかは、いつだって授業は耳に入いって無いだろ？ 彩のせいにするなよ」

「でもっ。本当の事だよ。智夏ちなつちゃん」  
「嘘付け」

鋭い口調の智夏は、左手で唯香の頭にチョップを入れる。「はうっ」と、頭を押さえる唯香が屈むと、綺麗な小麦色の肌をした智夏の姿が見える。別に日焼けをしたわけじゃない。生まれつきそんな肌の色をしている。でも、そんな小麦色の肌は美しく、奈菜と同じ位の人気を集めている。だが、人気を集めている理由は肌が美しいからだけではない。キリツとした目にふつくらとした唇、それで居てサラリと滑らかで艶のある黒髪が、智夏の魅力を引き立てている。それに、背丈も高く胸も普通の人よりふつくらしている。それも、魅力の一つだ。

「で、どう。調子は？ まだ、傷が痛む？」

唯香の時とは打って変わり、優しい口調の智夏。それに対し、首を横に振る彩は笑みを見せ答える。

「うん。もう大丈夫。傷も全然痛まないよ」

「そう。良かった」

「ぶっ。あたしと扱い違うんですけどっ」

不満そうな表情でベッドの淵に顎を乗せる唯香は、上目遣いで彩を睨む。そんな唯香に苦笑いを浮かべ困り果てる彩に変わり、智夏

が左手でチョップを浴びせる。鈍い音が響き、唯香は頭を押さえてベッドの淵から消えていった。

他にも、真面目で優しい美人委員長、真弓<sup>まゆみ</sup>。マイペースでのんびりやの望美<sup>のぞみ</sup>。いつも明るくスポーツ万能、梨奈<sup>りな</sup>。冷静で少し冷たい零<sup>れい</sup>の四人が居た。

真弓は、髪を肩口まで伸ばし、それを後ろで束ねている。その髪は下手にいじったりしていないため、とても綺麗な漆黒色をしており、風に吹かれると滑らかに揺れる。ただ、少し真面目すぎるため、男子からは全く声を掛けられないが、真弓はそんな事全く気にしていない。

望美は、腰まで届く長い紺色の髪をしている。生まれつき、そんな髪の色をしているらしく、黒髪と殆ど色が変わらない為、本人も全く気にしていない。パツチリした二重で、笑うと出来る笑窪が愛らしい。ノホホンとした見た目に対し、実は運動神経抜群と、凄いギャップを持っている。

梨奈は、黒髪をショートカットにし、いつも胸に晒しを巻いている。足が長く、背丈も高い。少し男勝りな所があり、男女共からずかれている。勉強の方は苦手で、テストも学年で下位の方。それでも、体力測定ではトップの成績を残している。

零は、髪を茶髪にして肩の後ろ位まで伸ばしている。切れ長の目をしており、そのせいで冷たい印象を感じさせる。実際は、そんなに冷たくは無いが、冷静に物事を言うため、人には冷たく見られがちだ。顔付きは可愛らしいので、男子からの評判はいい。

「それで、何であのデパートにいたの？」

少し冷やかな口調で、零が聞く。この質問に対する答えを、彩は既に考えていた。

「買出しだよ。色々と必要でしょ？」



「そつだよ。零ちゃんは、買出し以外にデパート行く?」

唯香が当然の様な口振りで、彩の答えに賛同する。だが、冷やか克冷静な零の眼差しが、彩の胸に突き刺さる。そんな零の視線に氣付いた望美は、のんびりとした口調で問う。

「どうしたの? 何か、怖い顔してるけど?」

「別に……。本当に、買出しなのかな? って……」

「買出しじゃなかったら、何しにデパート行くんだよ。なあ」

ハキハキとした明るい声で梨奈は笑う。その笑い声で、その場も一気に明るくなり、笑い声が次々と起きる。それに釣られる様に、彩も笑う。だが、零は笑っていない。まだ何か怪しんでいるのだから。

「でも、良かった。怪我也大した事無くて」

ニコツと笑みを見せる真弓が、軽く彩の肩を叩いた。すると、体に激痛が走り彩は身を縮めた。

「イツ……」

「ご、ごめん! だ、だだ大丈夫?」

真弓が焦りながらも両手を合わせて必死に謝る。

「真弓ちゃんは馬鹿力だから はっつ!」

そう言いかけた唯香のデコに、真弓の平手打ちが決まった。

「誰が、馬鹿力よ!」

「うっつ……。ほら、馬鹿力じゃ はぐう！」

もう一発平手打ちをデコに受けた。額を押さえたまま蹲る唯香の前に、立ちはだかる真弓は、右拳を震わせながらももう一度問う。

「誰が、馬鹿力なの？」

「まあまあ、落ち着けて真弓」

「暴力は、よくないん違う？」

智夏と望美が、真弓を宥める。二人に宥められ、冷静になる真弓は、「ごめん」と、唯香に小さな声で謝った。それに対し、唯香は当然と胸を張っていたが、智夏に頭を無理やり下げさせられた。

「な、なにをするのよ！ 智夏ちゃん！」

「お前も悪いんだよ。ちゃんと謝れ」

「えっつ！ だって……」

「だってじゃない！ ほら、ちゃんと謝るの！」

「うっつ。ごめんなさい……」

渋々と言った感じで、唯香は謝る。

暫く、そんな風な楽しい会話が続く。ただ、零だけは楽しそうじゃない。鋭い眼差しですつと彩を睨んでいた。

「それじゃあ、あたし等そろそろかえるわ」

「そうだね。もう、こんな時間だし……」

ハキハキとした梨奈に続き、のんびりした望美が笑顔でそう言う。

「今日は、ありがとう。お見舞い着てくれて」

「お礼なんていいよ。うち等友達なんやから」

「そうそう。望美の言う通りだ。私達友達なんだし、見舞いに来るのは当たり前だって」

智夏にそう言われ、彩の心は少し傷んだ。こんなに大切にしてくれる友達がいるのに、自分は隠し事をしているのだから。

苦しかった。だが、これを知られば、きっと彼女達にも被害が及ぶ。そう彩は考えた。だから、何もいえなかった。

「じゃあ、今度は学校であいましょう」

「うん……。学校でね」

病室を出て行く真弓に手を振る。一瞬で静かになった。誰も居なくなつたから。残つたのは、静けさと胸の苦しみ。それと……  
報道部一名。

ポーツとする彩は完全に忘れていた。この報道部の事を。

「あ、あの……」

扉の近くに居た報道部。眼鏡を掛けていて背丈の低い。オカッパ頭の男子生徒。

彼が、一步踏み込むとその瞬間、勢いよく戸が開かれた。ガン、と鈍い音が室内に響き、「あっ！」と、言う彩の声が聞える。

「だ、大丈夫か！ みずし……。うおっ！ き、君、だ、だだだ大丈夫か！ 一体誰に！」

扉を開いたのは守だった。そして、扉に顔面を殴打した報道部は鼻血を出して気を失っていた。その様子を呆れた様子で見っていた彩は、「あんただよ」と、言って苦笑いを浮かべた。

## 第十七話 仲直り

妙な空気の流れる病室。床には眼鏡を掛けたおかつぱ頭の報道部が気を失っている。激しく顔を強打した程度で、他には外傷はない。ただ、鼻血だけが流れている。

静まり返った病室のベッドに横たえる彩は、椅子に座る守の顔を見られずにいる。やはり、あの時の事をまだ引きずっていた。一方の守は真剣な面持ちで彩の顔を見つめている。その突き刺さる視線に、彩は更に目を背ける。

その沈黙を破ったのは、意外にもフロードスクウェアだった。

『オイオイ。話あんならとつととしろよ。俺はこういう沈黙って言うのが苦手なんだ』

「う、うるさいぞ！ フロードスクウェア。物事には、タイミングって言うものがあるんだから」

『何がタイミングだ。ただ黙ってるだけで、タイミングもくそもあるか！』

フロードスクウェアのその言葉に、守は「うっ！」と変な声を上げる。ゴチャゴチャもめる守とフロードスクウェアの二人に対し、落ち着いた様子のウインクロードが声を上げる。

『あなた方は、何しに来たんですか？ 彩様は絶対安静なんです。騒ぐなら出て行っていただきたい』

『何だと！ 心配して見舞いに来てやったのに！』

『誰が、来てほしいといいました？ あなた方に来てもらわなくても結構です』

『くっそー！ ふざけんな！ 守、帰っぞ！ 大体、俺は見舞いなんで』

守がフロードスクウェアの言葉を遮った。

「喧嘩は止そう。俺達は喧嘩に来たわけじゃない。今日は話をしに来たんだから」

『そうだけだよ。俺はどうも奴とは馬が合わん!』

『私だってそうです。あなたの様な野蛮で嘔吐きなどは、そりが合いません』

『誰が、嘔吐きだ!』

怒りの声を上げるフロードスクウェアに、更にウインクロードが大声を張り上げる。両者の揉め合いに呆れた表情を見せる守と彩。さすがにため息しかでないと、言った様子の守は首から下げているフロードスクウェアをとり、ウインクロードと共に机の引き出しへとしまった。

『お、おい! 守! な、何しやがる!』

『こ、ここから出してください! 守殿!』

「君達うるさいから、話が終わるまでそこに居て」

『うるせえ! 出せ! この野郎!』

ワーワーと騒ぐフロードスクウェアとウインクロードの声を無視して、守は彩の顔をじっと見据える。またしても沈黙が続く。開かれた窓からは風が流れ、白いカーテンが緩やかになびく。

全く守の方に顔を向けない彩に、目を細めながら守は聞く。

「あのですね。どうして、目を逸らすんですか?」

「……」

何も答えない。頬を膨らす守は、不満そうな声で聞く。

「まさか、あの日の事怒っているんですか？　そもそも、あれは…」  
「別に、怒ってる訳じゃない！　ただ……」

なにやらモゴモゴと言う彩に、守は眉間にシワを寄せる。そんな守の顔を見ようともし無い彩は、右手の人差し指と左手の人差し指をイジイジとしていた。モジモジとしている彩を見据える守は、両手で頭を掻き篋り叫ぶ。

「あーっ！　もう、何だよ！　言いたい事あるならはつきり言え！」  
「何よ！　言いたい事なら、沢山あるわよ！　でも、でも……」

その先が言葉にならない。口に出そうとするが、狼電を封じた時の守の顔が脳裏に浮かび、うまく言葉にする事が出来ない。ただ、謝りたいだけなのに。目には涙がにじみ、いつ零れ落ちてもおおかない。そんな彩の頭に守は右手を乗せて優しく声を掛ける。

「俺は、別にあの日の事を怒ってなんか無い。ただ、納得がいかなかっただけ。後からフロードスクウェアに聞いたよ。あれが封術師の役目で、ああしないとあの鬼獣死んでたんだって。俺、何も知らなかったからさ」

申し訳無さそうな表情を見せる守は、彩の顔を見てニコツと微笑む。久しぶりに見た守の笑顔に、彩は自然と涙を流していた。それに驚いた守は、慌ててその場を離れる。

「な、なな何泣いてるんですか！　ち、ちょっと、お、俺が泣かしたみたいじゃないですか！」  
「ご、ごめん。安心したら、涙が……」

「うっつ。お、女ってわからない……」

目を細め呆れた様に守はそうつぶやいた。

それから暫くし、彩もフロードスクウェアもウインクロードも落ち着き、ようやく本題へと入る事になった。先に本題を切り出したのはもちろん、守の方だった。

「それで、今回の鬼獣って、そんなにやばいんですか？」

『やばいとか、そう言う次元の問題ではございません。火猿は、火を司る鬼獣の一人で、そのランクはおよそSクラスと呼ばれています。古代五大鬼獣の一人炎将の生まれ変わりとも言われております』

「フムムツ……。今の話の中に、色々と初めて耳にする言葉ばかりが並んでますな」

『“古代五大鬼獣”と“炎将”だな。俺も、聞いた事無いけどな。また、でたらめだろ？』

ウインクロードの事を馬鹿にした口調で、フロードスクウェアはそう言った。だが、いつもの様にウインクロードが反論してこない。それどころか、沈んだ声で不安そうに答えた。

『私も、これがデタラメであってほしいと願ってます』

さすがにこのウインクロードの口調には、フロードスクウェアもやばい雰囲気を感じた。暗い雰囲気になりかけたその時、守が静かに口を開く。

「それにしても、よく助かったよな。そんな化物と戦って」

軽く微笑んでみせる。その守の言葉に、彩は首を傾げ顎に右手を添える。

「それがさ。私よく覚えてないのよね。あの時何がどうなって助かったのか」

「何じゃそりゃ。それじゃあ、気付いた時にはここに居たって言うのか？」

「うん。ウインクロードもあの時の事を詳しく覚えてないらしいのよ」

「ふうん。不思議な事もあるもんですな」

腕組みをし落ち着いた口調でそう言う守は、考え込む様子にうつむく。そんな守に彩が緊張した面持ちで問う。

「それで、あのデパート事件は、どうなったの？」

「あれなら、ただのガス爆発って事になったらしいぞ。まあ、それが妥当の判断だけだな」

「そっか。ガス爆発って事になったの。よかった」

ホッと息を吐く彩。そんな彩に不意に守が問う。

「そう言えば、水島って、どこに住んでるんだ？ 先生が言ってたけど、お前寮で暮らしてる訳じゃないんだって？」

「エッ！ あ、そ、その……」

「ンツ？ どうしたんです？」

口籠る彩に腕を組んだまま、守は視線を送る。暫し沈黙が続き、守が微かに首を傾げた。それと同時に、ウインクロードが口を開く。

『実は、彩様は』

ウインクロードの言葉に、守は驚いた。実は、彩は一人ホテルを



点々として暮らしていたらしい。青桜学園に来てずっと。彩が青桜学園に来て、一ヶ月程たつが、その間ホテルを取るお金がよくあったものだ。複雑そうな表情を見せる守は、少々呆れた様のため息を吐き言葉を継げる。

「水島。何で寮借りなかったんですか？ 普通借りるでしょ？」  
「借りられたのなら、最初から借りてたわよ！」

怒りをぶつけるかの様に怒鳴る彩に、苦笑いを浮かべる守。そして、ため息を吐いたのはロードスクウエアだった。何だか呆れたと言う感じで、深い深いため息。それは、一瞬にして病室内を静まり返らせる。静まり返った病室に響くのは、廊下から響く足音と話し声。

その沈黙にため息を漏らし、右手で額を押さえる守は、目を細めて彩の顔を見る。そして、恐る恐る問う。

「入院代はあるんですか？」

「うん。ギリギリ」

「ギリギリって事は、もうホテルに泊まるお金は無くなるんじゃないか？」

守の言葉に彩は黙り込み、表情は一段と暗くなる。その表情を見ただけでわかる。もう行くあてが無いのだと。頭を抱える守は悩んだ。彩が困っているが、自分に何が出来るだろうか。

第十七話 仲直り（後書き）

遅くなってすみません。

次からもっと早く更新できるように頑張ります。

## 第十八話 守の母

「と、言うわけで、暫く家に泊めさせてあげたいワケで……」

ここは、守の家。そして、守の目の前には、エプロン姿の美しい女性が立っている。この人が守の母親だ。長い黒髪、白い肌、優しく微笑みかける目。引き締まったウエストに対し、これでもかと言わんばかりに突き出た胸。その前には、細い腕が組まれている。表情は少々困った様子で、かすかに笑みを浮かべていた。

「お願いします。ほら、困った時は助け合わなきゃでしょ？」

「でもねえ……。子猫や子犬ならわかるけど……。女の子を拾ってくるなんて……」

「ち、ちがー！」

守の体を撥ね退け、母親が守の後ろに居た彩の右手を握り締める。たじろぐ彩は、苦笑いを浮かべ守の母親の顔を見る。キラキラと潤んだ瞳が、真っ直ぐと彩の瞳を見つめる。その瞳がとても愛らしく、何かを訴えかける様だった。

「あ、あの……」

「いいのよ。何も言わないで。あたしにはわかる」

「えっ、あの……」

「大丈夫よ。守が、何をしたかわからないけど、いつまでも家に居てもいいから」

「ち、ちよっと！ な、何言ってるんだよ！」

母の言葉にあせる守は、すぐさま母の言動を止める。このままだと、ある事無い事勝手に口走ってしまいそうだからだ。あまりの迫

力に圧倒され言葉も出ない彩は、苦笑を浮かべるだけだった。

その後も、守の母親に圧倒される彩を、何とか救い出した守は、足早に二階へと上がった。それから、彩を部屋に連れて行くと戸を閉め、静かに息を整え謝る。

「ごめん。うちの母さん、少し変わっててな……」

「ま、まあ、面白いお母さんで良いんじゃない」

苦笑いを浮かべる彩に、守も苦笑いで返す。

部屋にはベッドと机が一つずつ。タンスに棚、クローゼット。その他にも色々小物の多いその部屋は、まるで女の子の部屋の様だった。

「ここ、守の部屋なの？」

「まさか。そんなはず無いでしょ。第一、何で俺がこんな女っぽい部屋なんだよ」

「じゃあ、ここって？」

「姉さんの部屋。まあ、今は使っていないし、問題ないと思うから、気兼ねなく使ってくれていいからさ」

「うん。そのつもり」

彩はすでにバッグの中の荷物を取り出して、部屋を自分色に染めていた。呆気にとられていた守は、ため息を吐き部屋を後にする。

すると、胸の位置から声がした。フロードスクウェアの。

『良かったのか？ あいつらを家に連れてきて』

「別に、困る事も無いだろ？ それに、困ってるのに見捨てるのはなあ」

『いや……。そう言う事じゃなくてな……』

「さて、俺は勉強でもするか」

伸びをする守は、そう眩き笑みを浮かべながら自分の部屋へと向って歩き出す。そんな守に、フロードスクウェアは『おい、人の話を聞け』と、怒鳴った。だが、守は全く聞き耳を持たず、自分の部屋へと向う。その後も、フロードスクウェアに色々といわれたが、完全に無視を続ける守だった。

一方、隣の部屋では、彩が着替えを始めていた。ベッドに置かれたウインクロードは、そんな彩を黙った見据える。制服をハンガーへと掛ける彩は、ふと何かの視線を感じたのか、振り返り言い放つ。

「ウインクロード。まさか、着替え覗いてないでしょうね？」

『ま、まさか！ そんなはしたないマネ、私がするはず……』

「そうだよね。ごめん。変な事言つて」

そう謝った彩は、制服の下に着込んでいたTシャツを脱ぐ。下着だけになった上半身。その背中には、大きく痛々しい傷痕が残されていた。何かに斬られた様な深い傷痕。それを見るたび、ウインクロードは胸が痛んだ。そして、思う。『もっと、私に力があれば』と。

そんなウインクロードの視界が急に暗くなる。気づくと、目の前には彩の姿があった。目尻を吊り上げた彩の姿が。すぐに怒っている事に気付いたウインクロードは、何も言えず苦笑した。

「何、着替え覗いてんのよ！ 何が、はしたないよ！」

『い、いや……。こ、これは……』

「言い訳するわけ？ 見苦しいわよ！」

『いや、ですから……』

ウインクロードがそう言い掛けた時、部屋の戸がノックされた。

部屋に響く澄んだ音と共に、守の声が戸の向こうから聞こえる。

「ご飯出来たけど、お風呂から先に入る？ 一応、湯は沸かしてあるけど」

「覗かれるの嫌だから、守がご飯食べてる時にお風呂入るよ」

戸の方に顔を向けて、そう言う彩に戸の向こう側から呆れた様子の守の声が返ってくる。

「いや〜。覗かないって……。興味無いし……。皆川さんならともかく、水島はな……」

そうぼやいたのが部屋の中に聞こえた。何と無くムカついた彩は、力強く戸を開く。急に戸が開かれ驚いた表情を見せる守に、ニコツと軽く笑みを見せた彩は怒声を響かせた。

「守のバカー！ あっち行けえ！」

「な、何だよ！ いきな　ぐぼっ！」

それ以上、守に発言を許さず、右ストレートを顔面にもらった。それと同時に、戸は乱暴に閉められ、バタンと、大きな音をたてた。戸の向かいの壁に頭部を打ち付けた守は、首を振り朦朧とする意識をはつきりさせる。何を怒っているのか分からず、右手で頭を摩る。守は首からぶら下げるフロードスクウェアに話しかける。

「なあ、俺。何か悪い事言っただかな？」

『さあな。俺にや、女の気持ちは分からん』

「そうだよな。お前に分かるはず無いよな」

『何だ。その言い草は。まるで、俺が女心が分からん様な口ぶり』

「実際、わかんないだろ？ 違うか？」

その守の言葉に、『むぐっ』と、言葉を呑むフロードスクウェア。とりあえず、守はもう一度戸をノックする。だが、返事は無い。やはり怒っている様だった。その為、守はそのまま戸の向こうにそのまま話しかける。

「ごめん。一応、謝っておく。別に、怒らせるつもりは無かったんだけど……。傷付けてごめんな。それじゃあ。俺、ご飯食ってるから、先に風呂に入って良いからさ。母さんは水島と一緒にご飯食べたかったらしいけど、気にしなくていいからさ」

それだけ告げ、守は戸の前を後にした。

一階のリビングへとやってきた守は、静かに椅子に座りテーブルに突っ伏した。そんな守の姿をキッチンから窺う守の母は、優しい声で問う。

「さっき、凄い声が響いてたけど、喧嘩したの？」

「いや……。喧嘩って言うより、俺が何か悪い事言っただけで……。何が悪かったのかはさっぱりだけど」

「そう。それで、ちゃんと謝った？ 自分が悪いと思ったら、すぐに謝らなきゃ駄目よ」

「謝ったよ。一応だけど……」

顔を上げ複雑そうな表情を見せる守に、料理を皿に盛ってキッチンから出てきた守の母は、それを守の前に置く。守は箸を取り、手を合わせると「いただきます」と、小さく呟きお椀を左手に持つ。そんな守の向かいに座る守の母は、ニコッと笑顔を見せると優しい声で言う。

「あら。彩ちゃんもご飯？」

「んっ？」

守は母の言葉に箸を銜えたまま振り返る。そこには、私服の彩の姿があつた。初めて見る彩の私服姿に、暫し硬直する守は思わず箸を落としてしまった。そこで、我に返つた守は、焦りながら落とした箸を手取る。

「今、彩ちゃんの方も入れてくるから、守の隣にでも座つてて」

「あつ、す、すいません」

「いいのよ。ゆっくりして」

守の母はそう言い優しく微笑みキッチンへと入っていった。恥ずかしそうに守の隣へと座る彩は、守の方に少し背中を向ける形になる。暫しボーツとする守に、背を向けたまま、彩が恥ずかしそうに言う。

「な、何よ。ジロジロ見ないでよ」

「いや……。私服姿って、新鮮だな」

「うっさい！ こっち見るな！」

「はぐっ！」

殴られた。今回は左ストレートで。それと同時に、椅子と一緒に守は床に倒れた。バンと、大きな物音を響かせた。背中を強打し、その痛みを「いつてえー！」と叫び声がこだまする。それから遅れて、「何するんだ！」と、守の声が響き、「こっち見るな！」と、彩の澄んだ声が響いた。そんな二人の姿をキッチンから見つめる守の母は、楽しそうにっこりと微笑んだ。



## 第十八話 守の母（後書き）

あけましておめでとうございます。新年早々、更新と、言うわけで挨拶をさせていただきました。

去年は、ほぼ更新されていないという状況だったので、今年はなるべく更新出来る様努力したいと思います。

今年も、『ガーディアン』ともどもよろしくお願いいたします。

## 第十九話 首無し死体

静けさ漂う夜の町。夜空に浮かぶ、月暈げっうん美しい満月が、町並みを薄らと照らす。

どの家もすでに明かりが消え、車など滅多に通らない。優しく吹き抜ける風は、微かに塵埃じんあいを舞い上がらせる。音も無く誰一人道を歩いていない。

そんな静けさ漂う町の裏路地では、闇に隠れ無数の影達が集まりつつあった。それは、一塊になり形を整えてゆく。街頭の無い裏路地に集まった影が、みるみる化け物の姿へと化して行く中、裏路地の先から乾いた地を叩く靴音が響く。その足音に姿を整えた化物が振り返り叫ぶ。

「クツ！ 赤眼の死神め！」

視線の先には、街頭の光を背にした赤い瞳の少女が立っていた。三日月形の細い刃が彼女の頭上に横に真っ直ぐかざされている。その先には長い柄があり、その女性の両手に伸びている。暗くて表情は良く見えないが、長い黒髪が腰の位置まで伸びているのは分かった。

「あら……。私も少しは有名になつたみたい」

靴音と共に聞こえてくる美しい声。大人びていて、清らかなその声に対し、刃と柄の間にある緑の水晶が輝くと、ガラガラした声が口悪く言い放つ。

『そりゃ、俺様は珍しーサポートアームズだからな。有名になるのは当たり前だぜ！』

「珍しいからって、有名になるとは、限らないぞ」

化物の背後に聳える塀の上から雄雄しい男声が聞こえる。すぐに振り返る化物。もちろん、こちらも暗くて表情は見えない。だが、右手に輝くブレスレットに化物の表情がこわばる。そして、震えた声で言う。

「お、お前は、死神の封術師！」  
「残念。逆だよ」

塀の上でニコツと少年が笑う。それと同時に、化物の首筋にヒヤリと冷たいモノが触れ、闇の中で閃光が走る。真っ赤な血飛沫が壁に飛び散り、化物の頭が飛ぶ。上空に飛ぶ化物の顔は、みるみる人の顔へと戻る。それを見た少年は、ため息を吐き少女に言い放つ。

「今回もハズレだ」

「そう」

「そうって、それだけかい！」

「次、行くわよ」

少女は大鎌を消して、街灯のある方へと歩きだす。「ちよ、ちよつと！」と、叫ぶ少年は急ぎ塀から飛び降りる。そんな少年にブレスレットの水晶が光り、声がする。

『今回も、相変わらずずっとここだな』

「うるせえ」

少年はそう言い、少女の後を追った。

早朝の学校は、どのクラスもまだ人が少なく静かだった。もちろん、それは守のクラスも例外ではない。守と彩の他に、四・五名生徒がいる程度で、皆自分の席に座って静かにしている。守はいつも通り、机に伏せて寝息をたて、彩は勉強をしている。ノートにシャープの芯を走らせ、カツカツと音を鳴らせた。静かな教室には、その音が少し大きく聞こえる。

そんな静寂を破ったのは、廊下から響く足音だった。激しく慌ただしいその足音に、寝息をたてていた守も目を覚ます。目を細めて迷惑そうな表情を浮かべ、教室の入り口に目をやる。すると、戸が勢いよく開かれ大きな音を起てた。教室にいた誰もが驚き目をそちらに向けた。

そこには、息を荒げ額から汗を流す一人の男子生徒がいる。焦っていたのか、髪の毛が随分と乱れ、制服のボタンは全開で、中から着ているＴシャツが丸見えだった。そんな落ち着きの無い男子生徒は、教室内をキョロキョロと見回し、守の顔を見ると足を進めた。

「おい！ 大変だぞ！」

「そう。それは大変だ。それじゃあ、オヤスミ」

「ああ。オヤスミ …… って、何でそうなんだよ！」

机に伏せた守に大声で怒鳴る。耳を押さえながら顔を上げる守は、その男子生徒を迷惑そうな目で見据えた。そして、ため息を吐き聞く。

「あのさ。猛君<sup>たける</sup>。物凄く、迷惑なんですけど？」

「それより、これ見ろよ！」

猛と呼ばれた男子生徒は、机に持っていた新聞紙を広げる。呆れた様子の守は、「俺の話は無視ですか？」と、小さく呟いたが猛には聞こえていなかった。机いっぱいに広げられた新聞紙を眺める守

は、ビッシリ詰められた細かな字に目を細めた。

「なあ……。これは、何のマネだ？」

「ここ、ここ。ここ、見ろよ！」

「お前は、ニワトリか？ コッコ、コッコと……」

「はあ？ 何言ってるんだ？ って、それより、ここだって！」

あまりにもしつこい猛に、守は渋々とめんどくさそうに新聞の記事に目をやる。そこには、『首無し死体 これで、5件目』と、デカデカと書かれていた。これは、最近こちら一帯を騒がしている事件だ。守もチヨクチヨクニュースで、それを耳にしていたが、特に興味は無いため聞き流していた。それを、まさか猛の口から聞かされるとは、夢にも思ってた守は複雑そうな表情を浮かべる。

「で？ 何」

「な、何だって？ オイオイ……。お前、マジで言ってるの？」

「……猛君。俺の事、馬鹿にしてる？」

目を細めて猛の顔を見据える守。その視線は鋭く猛の胸を貫く。

「はうつ！」と、声を上げる猛は、二、三步後退し、後ろの席にぶつかった。机の脚が床に引き摺られ、嫌な音を教室内に響かせる。

その音に、教室にいた生徒の視線が守と猛の方に向けられた。

ため息を吐き、右手で頭を搔く守は不満そうに言う。

「で、何が言いたい」

「これは、きつと報道部が出した新聞に載っていた化物が絡んでいると、俺は思う。お前は、どう思う？」

「俺は……。眠いと思う」

目を細めたまま、欠伸交じりにそう言う守。呆氣にとられる猛は、

右手で額を押さえ軽く首を振りながら、「お前に話した俺が馬鹿だった」と、呟いた。そんな猛を見て含み笑いを浮かべる守は、新聞をたたみ机に突っ伏した。

ガツクリと肩を落とした猛は、新聞紙を右手に持ちゆつくりと自分の席へと足を進める。そんな守と猛のやり取りは彩の方まで聞こえていた。勉強をしていた彩は、手を止め考え込む。何だか嫌な胸騒ぎがしたのだ。

「ウインクロード。これって、鬼獣の仕業じゃないよね？」

小声でウインクロードに問う。それに対し、胸の位置に下がる杖のアクセサリーの小さな水晶が、薄ら光を放ちウインクロードの小さな声が聞こえる。

『鬼獣の仕業にしては、聊か不に落ちない点が幾つか……。それに、鬼獣がワザワザ、体だけを残すでしょうか？』

「……だよな」

シャーペンの頭を下唇に当て、そう呟く。不安そうな彩の顔にウインクロードはボソリと呟く。

『不安なのでしたら、私が調べましょうか？』

「出来る？」

『出来る限りの事は調べたいと思います』

「そう。ありがとう」

『いえ。これが、サポートアームズである私の仕事ですから』

水晶の輝きが消えウインクロードの声が聞こえなくなる。何か情報を集めに行ったのだろうか。何も起きなければ良いと、彩は願った。そして、その願いが届いたのか、何事も無く午前中の授業は終わ

った。変わった事などは一切無い。ウインクロードからの連絡も無く、彩は一人屋上から町を見渡す。何も感じない。鬼獣の気配などは。やはり、今朝感じた胸騒ぎは。と、その時屋上の扉が開かれた。軋む金具の音に、「誰！」と叫び彩は瞬時に振り返る。

そこに立っていたのは守だった。左手にビニール袋、右手に牛乳を持ち、口にはハムトーストを銜えている。そんな守の姿に、呆れた様にため息を吐く彩は軽く睨みをきかせながら問う。

「何か用？」

「モゴモゴ……」

口にハムトーストを銜えている為、喋ることの出来ない守は、目を細めて左手に持ってビニール袋を彩の方に投げた。放物線を描き彩の方へと飛ぶ。「えっ、えっ」と、驚きの声を上げ、彩はそのビニール袋を手を取った。

「な、何すんのよ！ いきなり！」

怒鳴る彩に対し、ようやくハムトーストを食べ終えた守が牛乳を飲んでから答えた。

「お金ないんだろ？ 一応、パン買っておいたから」

「あ、ありがとう」

「それより、首無し死体は鬼獣の仕業じゃないよな？」

ボサボサ頭を掻きながら守が問う。ビニール袋の中を覗き込む彩は、「あつ、牛乳もある」などと、声を上げて嬉しそうに微笑む。完全に守の言葉など聞いていない様子の彩に、半ば呆れる守は軽くため息を吐き彩の方に歩み寄った。

## 第十九話 首無し死体（後書き）

大分、遅くなりました。本当に申し訳ないです。

毎度毎度、更新ばかり遅れてしまい……。しかも、その度にこんな文面を……。本当、申し訳ないです。以後気をつけます。



## 第二十話 科学室裏の密会

平凡でいつもと変らぬ昼休み。薄暗く人気の無い科学室裏で、不穏な空気が流れていた。複数の不良が集まり、何かコソコソとしている。元々、ここは不良のたまり場。不良が集まっているのは、別に気にならない。ただ、コソコソとしている所がいつもとは違う。それに、誰にも聞かれない様にと、小さな声で話をしていた。

そんな不良達を壁際に隠れてみている者が居た。それが、報道部一年、鳥山 理穂だ。まだ、鬼獣を追い記事にしようとしている。それが、どうしてここに繋がったかは不明だが、理穂はまだ知らない。自分が今、とても危険な事に首を突っ込んでいるのだと。

眼鏡を額の所に引っ掛け、カメラを片手に不良の方を窺う。何を言っているのか聞こえない為、身を乗り出す理穂。

「ムムムツ。聞き取れない！」

が、それが、仇となった。不良の一人が、理穂に気付き叫ぶ。

「誰だ！」

「やばっ！」

理穂はすぐに体を捻り逃げ様とした。だが、すぐに何か壁の様なモノに激突し、しりもちをつく。「いった〜っ」と、声を上げる理穂は目の前に人が居た事に気付いた。その男は黒のスーツ姿の男で、この学校の科学の教師でもある、武中 博人だった。

彼は、今年この青桜学園に赴任してきた教師で、科学の先生にしては顔立ちがよく女子からの人気も厚い教師だ。きつと、不良の事に気付いてやってきたのだと、思った理穂はすぐさま立ち上がり武中の後ろに隠れる。

「武中先生！ この角を曲がった所に不良が！」

「不良……ですか？」

「はい！」

力強くそう述べると、そこに不良の一人が飛び出す。不良と武中の目が合う。すると、不良は礼儀正しくお辞儀をして、丁寧な口調で言う。

「お待ちしておりました！ どうぞ、こちらです」

「えっ？」

驚く理穂。何が何だか分からなくなってしまう。振り返り、ニコッと微笑む武中は「どうしました？」と、理穂に問う。頭が混乱する理穂だったが、これだけは分かった。逃げないといけないという事を。だが、体が動かない。

「どうしました？ 鳥山さん」

「ど、どうして……武中先生が……」

「フフフツ。そんなに怯える事はありませんよ。彼等は、私の僕しもへです。そして、あなたもその仲間入りですよ」

微笑んだ武中は不良に合図を送る。すると、軽く会釈をし、理穂の方へと歩き出す。微かに首を横に振る理穂は、震える声で悲鳴を上げた。

金網に凭れ欠伸をする守は、のんきにパンを頬張る彩を見据える。何でもおいしそうに食べる彩の顔を見てみると、買ってきて正解だったと思えた。そう思うと自然と笑みが毀れてしまう守。その守の

顔にフロードスクウェアが呆れた声で呟く。

『女を見てニヤニヤしていると、気持ち悪いぞ』

「に、ニヤニヤなんてしてないぞ！ 変な事言うなよ」

『実際、ニヤニヤしてたぞ。それとも、あれがお前のいつもの顔なのか？』

「うっ……」

言い返す事が出来ず、口籠る守に彩の視線が突き刺さる。フロードスクウェアと話して気付かなかったが、彩がこちらをジッと見つめて不思議そうな顔をしていた。その視線に、顔を真っ赤にする守は、大慌てで声を張り上げる。

「な、何でも無いぞ！ 俺は何にも」

「キヤアアアアアッ！」

「！」

悲鳴がどこからか聞こえた。すぐに立ち上がる守と彩は辺りを見回す。そんな守と彩の二人に、守の胸の位置からフロードスクウェアが叫ぶ。

『おい！ この気配は鬼獣だ！』

「鬼獣？ でも、派手な爆発とか、大きな音なんて聞こえなかったぞ？」

『俺が、そんな事知るか！ だが、確かに感じた。少しだけだが』  
「少し？ どう言う事？」

不思議そうな表情を見せる彩に、フロードスクウェアも少し困ったような声で答える。

『本当に僅かだ。あの悲鳴が聞こえるほんの一瞬だけ』

「それじゃあ、今は何も感じないの？」

『ああ。全く感じない。不思議なくらいだ』

「つて、事は鬼獣は消えたのかな？」

『さあな。ただ気配を消しているだけかもしれないが、これほどまで気配を感じないとはな』

のんびりと会話をする彩とフロードスクウェアに、ため息を吐き呆れた表情を見せる守。そんな守の方に、彩は顔を向ける。すると、守は真剣な表情で言う。

「あのな……。のんびり話してる所悪いんだけど、急がなきゃならんらろ？」

「そ、そうだった！ 守！ 行くわよ！」

先程の悲鳴の事を思い出し、慌てながら彩は走り出した。屋上を出て行く彩の背中を見据え、ため息を漏らす守は額を右手で押さえ、「悲鳴の聞こえた方に行く階段はこっちなんだけど……」と、呟いた。この声が聞こえたのはフロードスクウェアだけで、彩は気付かないままそのまま消えていった。

『呼び止めなくて良かったのか？』

「うん……。まあ、遠回りだけど一応たどり着けるから大丈夫だよ。さあ、俺らは先に行つてよう」

『そうだな。急いだ方がいいな』

守は彩の行った方とは逆の階段から屋上を後にした。その後、引き返してきた彩が「ま、待ってよ！」と、叫びながら守の後を追った。

悲鳴を上げた理穂の口を塞ぐ不良。口を塞がれながらも、もがく理穂は両腕をバタバタと振り回す。暴れる理穂を見据える武中は、「ふふふ……」と笑い左手を顎に添える。

「困りましたね。こつも暴れられては……」  
「ぐうぐうっ！ 暴れるな！ ツ！」

理穂の口を押さえていた不良は、理穂に手を噛まれ手を離す。理穂はすぐに武中と不良から離れた。怯えた目をする理穂は、震える唇を噛み締め、武中を睨む。手を噛まれた不良は、蹲り理穂の方を睨み叫ぶ。

「てめえ！ 俺らが、女だからって手加減しないとったら大間違いだぞ！」

「まあまあ。中山君。落ち着きなさい」

冷静な口調の武中は、ニコニコと笑みを浮かべ理穂の方に一歩足を進める。膝が震え思つように動けない理穂の逃げ場を塞ぐ様に不良たちが移動する。逃げ場を失い、目に涙を浮かべる理穂。声を出したくても恐怖で口が開かない。

ニコニコと笑みを浮かべる武中は、スツと理穂に手を伸ばし、「さあ、私の手をとりなさい」と、優しく囁く。その声が理穂の脳を刺激し、何故か右手をスツと武中の方へと差し出していた。意識は殆ど無く、理穂の頭はぼんやりとかすむ。そんなぼんやりとした理穂の頭にハッキリとした雄雄しい声が響いた。

「気を確かに持て！ 惑わされんな！」

「へっ？」

その言葉で我に返った理穂は、武中へと差し出していた右手を引き数歩後退る。「チッ！」と、小さく舌打ちをする武中は辺りを見回し「誰だ！」と、叫んだ。すると、角を曲がった所から堂々と一人の少年が入って来た。眼鏡をかけ、前髪を下ろし気弱そうな面持ちの少年。その右手首にはブレスレットがきらめいている。

「んだ！ てめえ！」

不良の一人が少年を睨みつけ威嚇する。それに、臆す事無く歩みを進める少年は、眼鏡を外し胸ポケットにしまう。それから、右手で前髪を静かに掻き揚げる。その掻き揚げられた前髪の下から現れた目は、鋭く威圧感のある目付きだった。その目に、怯む不良達は唾を呑み込みジリジリと後退する。

不良達の合間から見えるその少年の姿を目にした理穂は、安心してせいか涙があふれ出ていた。唇は振るえその場に座り込む理穂は、両手で顔を覆い泣きじゃくる。だが、すぐに武中が理穂の首根っこを叩き意識を失わせる。そんな武中を見据える少年は、誰かに話掛ける様に言葉を走らせる。

「奴が本体で間違いないな！ グラットリバー！」

その少年の声に、ブレスレットに付いた水晶が輝き、『ああ。間違いないぜ』と、明るい声が響いた。その声に、武中はハッと驚いた表情を浮かべ、「サポートアームズ！」と声を上げる。だが、その顔に焦りは無く、不適な笑みを浮かべていた。

## 第二十一話 大地とグラットリバー

鈍い音が科学室裏から聞こえる。重々しい鈍い音。それに遅れ、何か地面に倒れる音も聞こえてきた。複数の不良達が地面に横たわり、その中心にブレスレットをした少年が立つ。息一つ乱れず、軽く右腕を回す。すでに残ったのは二人。武中と不良一味のボス中山。その二人を睨みつける少年は、聊かつまらなそうに欠伸をする。それに対し、ブレスレットの水晶がオレンジの光を放つ。

『真剣にやれ。逃げられんぞ』

「うるせえーな。正体は掴んだんだ。逃げられても、また捕まえりやいいだろ」

『はあ〜っ。これだから、お前とは組みたくないんだ』

「おい！ それが、主人に対する言葉遣いか？」

不満そうにブレスレットを見据える少年に、水晶が光また声がする。

『あ〜っ。うるさい、うるさい。どうしてこうも、俺の適合者は変わり者ばかりかな……』

「そりゃ、お前が変わり者だからだろ？」

『人を変人呼ばわりか！』

「変人を変人と言って何が悪い？ あっ、そっか。お前人じゃないか」

『大地！ てめえ！』

「んだ！ やんのか！ グラットリバー！」

急に口喧嘩を始める二人。そんな二人は気付いていない。すでに武中と中山がいなくなっている事に。そして、今の光景が何を意味

するかを。

そんな口喧嘩をして数分後、足音と声曲がり角の方から聞こえてくる。それに気付いたのはグラットリバーで、それと同時に武中と中山のいない事にも気付く。

『しまった！ 奴らがないぞ！』

「なっ！ まあいいや。しょうがない、行くか」

『そもいかんみたいだぞ』

「ンッ？」

その言葉に振り返る大地。その視界に守と彩の二人の姿が映る。彩は横たわる理穂を抱え込み大地の方を真っ直ぐに見据え、守は首から上げたフロードスクウエアを右手に握る。その目には力が籠っており、大地を睨みつけていた。その目に不服そうに顔を顰める大地は、静かに体を守達の方に向ける。そんな大地に守は問う。

「お前がやったのか？」

「そっだ。それがどうかしたか？」

「ならお前が！」

『待て！ 守、こいつは、サポートアームズを持ってるぞ！』

守の右手の中からフロードスクウエアの声が聞こえる。その声に彩は思い出した様に「あっ！」と、声を上げる。その声に驚いた守はすぐに振り向く。その目は聊か迷惑そうな目で、その目に彩は慌てながら叫ぶ。

「あんた！ 黒木 大地！」

『オヤオヤ。そう言うあなたは、水島家のお嬢様。何故、あなたがこちらに？』



グラットリバーが口を挟むと、大地が笑みを浮かべる。不思議そうな顔をする守は、大地と彩を交互に指差す。何が何だか分からず、頭が混乱する守は、「ハフッ」と変な声を出しながら目を回した。そんな守に呆れた様なため息を吐くフロードスクウェア。こいつは何をやっているんだと、言わんばかりに視線を送る。その視線に守も気づき「はっ！」と、小さな声を上げ大地の方を見る。

「誰だか知らないが、いくらなんでもこれはやりすぎだ！」

『守！ 俺達、一度こいつに会ってるぞ！』

「うえっ！ う、嘘だ！ 俺はこんな奴に　！」

大地の腕に煌くブレスレットに、守も気付いた。それは、以前何処かで見えた事がある。それが、どこでなのか思い出す為、記憶をたどる守は、暫し瞼を閉じ眉間にシワを寄せる。「ムムムツ」と、難しそうな声を出す守に、フロードスクウェアが呆れた様に言う。

『お前が助けてやった眼鏡の男がいただろ！ 忘れたのか？』

「はは〜ん。そう言えば居たな……。でも、こんな奴じゃなかったぞ？」

『んな事分かってるさ！ だが、あのブレスレットは間違いなくあいつのだ』

「奪われたとか？」

『それは無いだろ。あいつ喋ってるんだから』

「はっ！ そ、そうか！」

驚いた様な声を上げる。呆れた様に『ハハハ……』と、笑うフロードスクウェアはため息をもらした。真剣な表情をする彩は、胸元にチラつくウィンクロードを握った。視線をぶつけ合う彩と大地の二人に、グラットリバーが含み笑いをしながら言う。

『二人して、何をそんなに見詰め合ってるんだ？』

「グラットリバー……。別に見詰め合ってるんじゃない。これは、睨み合ってるんだ」

『睨み合ってるねえ……。どっちも一緒だろ？』

「意味が違うだろ？ 意味が」

『どうでもいいが、そろそろそこを通してほしいのですが？ 水島家のお嬢様とその付き人』

相変わらず、嫌味な口調のグラットリバー。それに対し、フロードスクウエアが反論する。

『人を馬鹿にしゃがって！ 守！ 斬れ！』

「いや……。それ、犯罪なっちゃいますから……」

『でも、こいつらがこの人達を、こんなにしたんだぞ！』

「まあ、そうだけどさあ……」

右手で頭を掻き複雑そうな表情を見せる守は、振り返り彩の方を見る。怖い顔をしている彩に、言葉をかける事も出来ず守は渋々大地の方に顔を向ける。こっちはこっちで、全く守を相手にしていない様子で、彩を睨み返している。そんな二人の間に板ばさみにされている守は、何処か複雑な心境だった。そんな守を他所に、大地と彩が言葉を交わす。

「あんたがどうしてここに居るのよ！」

「何でって……なあ」

『この町に鬼獣の気配を感じて来た。それだけだ』

生意気な口調のグラットリバーに、殺意を覚える彩だが、そこは堪え拳を震わせる。それに気付いた大地に、口元に笑みを浮かべ更に言葉を続ける。

「いや〜っ。しかし、こんなにも鬼獣が野放しになってるとはねえ」  
「なっ！ ふざけんな！ こっちはこっちで忙しいのよ！」

「その割りに、そっちのガーディアンもお嬢様のサポートアームズも、随分と能力値が低いじゃないですか。特に、そっちのガーディアンは最低だね」

「んだと！ ふざけんな！ 誰が最低だ！」

「お前だ。お・ま・え」

馬鹿にする様にそう言うグラットリバーに、「ウガアアアッ！」と、声を張り上げフロードスクウエアが暴れだす。フロードスクウエアを握る守の右手は小刻みに奮える。それを必死で抑える守は、「アバレルナ！」と、なぜか片言で叫んでいた。そんな守とフロードスクウエアを見据える大地は、鼻で笑い馬鹿にする様に言い放つ。

「ガーディアンが、サポートアームズもろくに管理できないとは、情けないねえ」

「フロードスクウエアは物じゃない。管理とか言っな」

「ほ〜っ。言っじゃないか。そうでなきゃな。流石は火のガーディアン」

笑みを見せそう言う大地。それに対し、守は目を細めて、「今は馬鹿にされてたのかな？」と呟くと、「当たり前だ」と、フロードスクウエアが答えた。「だよな」と、小さく呟く守は額に青筋を立てる。怒りを滲ませる守に気付いたのか、グラットリバーが言い放つ。

「やめとけよ。喧嘩じゃ大地にや勝てねえ。って言うか、掠りもしねえよ」

「なら、俺を具現化しろ！ 守！ 八つ裂きにしてやる！」

その言葉に守の怒りはスーッと引く。何をムキになっていたんだろ。と、思う守は静かに息を吐き落ち着きを取り戻す。

「あゝ。もうやめましょう。サポートアームズを持っていると、言う事は君もガーディアンか、封術師って事でしょ？ 仲間内でもめてもねえ」

「もし、俺がこれを奪ったのだとしたら？」

「それは無いでしょ。サポートアームズは適合者にしか使えないはずだし、それに、あんた悪い人には見えないからさ」

感心した様な表情を見せる大地だったが、軽く笑みを浮かべると、「人を見た目で判断するのは、よくないぞ」という。大地を睨む彩も「そうよ！ あいつは！」と、叫ぶがすぐ守に言葉を止められた。

「それより、ここに居る人たちをそのままにするのは良くない。君には責任を持って彼らの手当てをしてもら……」

振り返った守だったが、そこには誰もいなかった。啞然とする守に対し、胸元でブラブラと揺れるフロードスクウェアが、『素晴らしい演説だが、あいつならとくに逃げたぞ』と、告げた。眉間にシワを寄せる守は、微かに瞼を震わせ「フガアアアッ！」と、大声を轟かせた。

## 第二十二話 守の母と彩

放課後、すでに生徒のいない教室に守と彩の姿があった。開かれた窓からは、グラウンドで部活動をする生徒の音が、風に乗って聞こえてくる。そんな活気溢れる部活生達とは打って変わり、教室に残った守と彩の間には、険悪なムードが漂っていた。

そして、この全ての原因は、昼間出会った少年、黒木 大地のせいだ。机の上に伏せ右足を震わせる守。一方の彩も机をシャーペンで何度も叩いていた。両者のイライラが同時に頂点に達したのか、ほぼ同時に立ち上がり叫ぶ。

「くっそ！」「あの馬鹿！」

守の席の椅子は勢いで倒れ、彩の机は立った勢いで前方に倒れる。この二つの倒れる音が重なり、更に大きな音が教室に響く。その大きな物音は廊下まで響いた。守も彩も少し息を荒げ、思いのままに叫ぶ。そんな二人を見据えて呆れるフロードスクウェアは、ため息を吐いた。

その後、思う存分叫んだ二人は落ち着きを取り戻し、自分達の行いを恥じた。冷静に考えると、叫び声は部活生達に丸聞こえだと、知ったからだ。よくよく考えると、いろんな人にその声は聞こえているし、物凄く恥ずかしい事だった。きつと、明日には笑いものになるだろう。そう思うと、やめとけばよかったと思う。

耳まで赤くして教室を出た守に、数分遅れて彩が教室を後にした。この順番に教室に出たのは理由がある。フラフラとブーツとしながら帰る守は歩くのが遅い。その為、彩が普通のペースで歩いてても、守に追い付く事が出来るのだ。

だが、この日は違った。いくら歩いても守の姿は見えず、結局彩は必死に走り、家の前でようやく守の姿を捉えた。

「ちよ、ちよつと！ 守！」  
「何だよ！」

少々乱暴な口調の守に、彩は圧倒された。その為、その後には言うとした言葉を呑み込み足を止める。彩の表情に守は、落ち着きを取り戻し、「ごめん」と、小さな声で謝った。それに対し、「だ、大丈夫」と、彩は申し訳無さそうに言う。二人の間に妙な空気が流れ、ギクシャクとする。そんな二人の間に入ったのは、守の母だった。丁度、玄関が開かれ、「あら？」と、明るい声がする。

「二人して、そんな所で何してるの？」

ニコヤかな笑みを浮かべる守の母は、外に出てくるなり、彩の方へと小走りで移動する。母の妙な行動に、守は目を細め呆然とする。それを尻目に、守の母は嬉しそうに彩の右手を両手で握り話を始める。

「今日は、彩ちゃんの好きな物作ってあげるわ。何がいい？」  
「いえ……な、なんでも……」  
「駄目よ」。ほら、何でも言つて。私が知ってる物だったら、何でも作るから。ねえ、ねえ」

ニコニコとはしゃぐ守の母に、苦笑する彩は目で守に助けを求め。守も何とか助け舟を出そうとするが、何度も言葉を遮られた。その為、守は両手を合わせて申し訳無さそうに頭を下げた。困った表情を見せる彩は、『えーっ』と、言いたそうな口をする。しようがないので、守は口パクで、「適当に言っていよいよ」と、言つたつもりだったが、彩には「自分で何とかしろ」と、言っている様に見える。

そんな二人のやり取り何て気付くわけも無く、嬉しそうな微笑を見せる守の母。その眼差しに、彩は根負けし、ついに口を開く。

「そ、それじゃあ、ハンバーグで……」

「ハンバーグ？ 和風？ 洋風？」

「いや……」

「任せます」と、言いつもりだったが、守の母の眼差しに自然に「和風で……」と、言ってしまった。その途端、表情が更に明るくなり、「それじゃあ、一緒に買い物行きましょ」と、無理やり右手を引いて歩き出した。逆らう事も出来ず、彩は守に助けを求めながら消えていった。

その光景を見据える守は、合掌し瞼を閉じ静かに頭を下げた。

「すまん。俺には何も出来ん」

『お前の母さんは凄いな』

首から下げられたフロードスクウェアが半笑いしながらそう言う。顔を上げた守は、表情を引き攣らせながら苦笑し、静かに門を開きドアノブに手をかける。そんな守にフロードスクウェアが話しかける。

『ほつといていいのか？』

「ほつとくも何も、俺にはどうする事も出来ないからさ」

『だが、帰ってきてから騒がれるぞ』

「それは……。もう覚悟してる」

『苦労するな』

同情する様にフロードスクウェアはそう言う。その言葉に、守もガツクリ肩を落としたため息を漏らして家の中に入っていった。

自分の部屋へと戻った守は、私服に着替え椅子に座りノートを広げる。その光景にフロードスクウェアは勉強をしているのだと、静かにしていると、守がシャーペンを回しながら声を掛けた。

「なあ、サポートアームズって、大体幾つ位あるんだ？」

「さあな。サポートアームズは、元々幾多の封術師とガーディアンが自分専用にした物だからな……。今じゃ、造る奴もいないが、昔は一人に二つも三つも持つてる奴がいたけどな」

懐かしそうにそう語るフロードスクウェアに、「だから、どの位あるんだよ」と、フロードスクウェアを見ながら言う。その言葉に、イラツと来たのか、フロードスクウェアは少々乱暴な口調に変わる。

「何だよ。おめえ、勉強するんじゃないのか？」

「勉強？ 誰が、そんな事言ったよ？」

「だって、ノート広げてるじゃないか」

「これは、勉強する為に広げたんじゃないよ。俺って、色々知らない過ぎるだろ？ 封術師の事とか、ガーディアン、サポートアームズの事。それに、鬼獣の事。だからさ、知らなきゃいけない気がするんだ」

「ふん。まあ、そう言うのに興味持つ事は良い事だと思うが……」

何かを言いかけたフロードスクウェアだったが、廊下を走る足音に言葉を止める。乱暴で大きな足音に、守は表情を引き攣らせ、素早く椅子から立ち上がり窓を開く。窓から脱出を試み様としたが、それより早く部屋の戸が開かれた。ドアノブが壁に激突し、大きな物音を起てその音に守は恐る恐る振り返る。そこには、目尻を吊り上げた彩が立っており、窓の淵に右足を乗せる守に僅かに笑みを浮かべながら問う。



「あら。どちらにお出かけ？」

「いや……。ちょっと、散歩に……」

「窓から？」

「いや……。そ、その……」

焦る守に、『諦める』と、フロードスクウェアがため息交じりに呟いた。その言葉に守は、涙を浮かべながら「う、うん」と、小さな声で呟く。その声は、フロードスクウェアにしか聞こえなかった。逃げるのを諦め、窓の淵から足を下ろし床に正座する。覚悟を決めたのだ。そして、守は怒鳴られ、暫く正座したまま長々と文句を言われた。別に彩は守の母の文句を言ったわけじゃない。守に対しての文句を言ったのだ。延々と文句を言われた拳句、足が痺れて守はその後も暫く動けなかった。その為、ベッドにうつぶせに倒れたままフロードスクウェアに問いかける。

「なあ……。俺、何か悪い事したか？」

『単なる八つ当たりだろ？ 気にするなっ』

「に、したって、酷すぎるだろ？ 二時間も拘束するなんて……」

『全くだな。俺がお前だったら、完全にぶち切れてるな』

「お前は、短気過ぎる……。短気は損気って言葉知らないのか？」

うつ伏せになったまま、フロードスクウェアにそう言うが、怪訝そうな声で『んな、言葉知らん』と、ぼやいた。言うだけ無駄だといった表情を浮かべる守は、枕に顔を埋め「うっ」と、声を漏らした。

## 第二十三話 賑やかな夜の街

犬の遠吠え響く夜の街。足音無く二つの影が路地を駆け抜ける。首から提げたアクセサリーが、上下に激しく揺れ、そのアクセサリーに付いた水晶が、街灯の光を浴び煌く。夏だと言うのに、肌寒い夜風が、二人の髪を優しく撫で、美しく靡く。

交差点を右に曲がり、大通りに出た二人は、呼吸を整え何事も無かったかの様に静かに歩き出す。人通りも多く、まだ賑やかなその通りは、沢山の店が立ち並んでいた。人ごみにまぎれた二人は、静かに行き交う人々を見据える。長い黒髪の少女は、すれ違う人一人の顔を丁寧に確認してゆく。一方、凛々しく鋭い目付きの少年は、困った表情を浮かべ右手で頭を掻く。その腕には美しいブレスレットが煌いていた。

一通り、通りにいる人の顔を見た少女の方が、少年の方に歩み寄り怪訝そうな表情を浮かべながら問いかける。

「それで、この中からどうやって探すの？」

冷やかな声。冷たい視線。その二つに、ニコやかな笑みが重なり、少年の胸を鋭く貫く。引き攣った笑みを見せる少年は、右手の人差し指で頬を掻き、首を傾げる。特に表情を変えるわけでもなく笑みを浮かべたままの少女は、少年と同じように首を傾げてみせる。

「あら？ 首を傾げてどうしたの？ 悩み事？ 相談に乗るわよ」

「い、いや……その……」

戸惑う少年は、額から薄ら汗を流し焦りを見せる。それは、少女のニコやかな笑みに隠された、怒りに近い感情を体全体に感じていたからだ。そんな戸惑う少年に、腕につけたブレスレットに付く水

晶が輝き声が聞こえる。

『大地。圧倒されてるな』

低音の声に大地と呼ばれた少年は慌てて、ブレスレットを押さえる。そして、辺りをオドオドと、見回して小さな声で言い放つ。

「ば、馬鹿！ 他の人に聞かれたらどうすんだ！」

『こんなに人が多いんだ。話しても気付かれんדר？』

堂々とした口調に、大地は息を荒げながら言う。

「グラットリバー！ そう言う問題じゃないんだよ！」

『へいへい。顔に似合わず小心者だな』

「誰がチキンだ！」

『俺は、小心者って言ったんだ。大体、何で俺が鶏肉の話をしなきゃならん』

自信満々のグラットリバーに、右手の人差し指で頭を搔きながら呆れた様に呟く。

「あのさ……。英語で小心者をチキンって言うんだよ」

『なっ！ チキンって、鶏肉じゃなかったのか！』

驚きの声を上げるグラットリバーに、自信満々に胸を張る大地。そんな二人の会話を横で聞く少女は、呆れた様のため息をつき首を左右に振る。すると、胸元で揺れるアクセサリーに付いた小さな水晶が輝き、ガラガラの声が聞こえる。

『お前も大変だよな。馬鹿共相手によ』

口の悪い声に、口元に僅かに笑みを浮かべた少女は、右手で髪を撫でながら答えた。

「あら。そう言うあなたも、あの二人といい張り合いよ」

『んなつ！ 俺様が、あの馬鹿共と！』

「フフフツ。あなたには分からないわね」

意味深な笑みを浮かべ、右手で口を押さえ静かに笑う。

それから、数十分後、彼らはビルの屋上にいた。街の眩い明かりを見下ろし、行き交う人たちを見据える。長い髪が風に吹かれ、柔らかに揺れる。その数歩後ろに立つ大地は、腕組みをしたまま少女の背中を見据えていた。

「ここは、静かだな」

ボソツと呟く大地。同じ街なのに、全く違う街にいる様な気がした。

『しかし、人は騒ぐのが好きだよな。どうして、夜位静かに出来ないものか……』

「別に全ての人が、騒ぐのが好きって訳じゃないさ。ホンの一部の奴らだけさ」

含み笑いをしながらそう呟く大地に、今まで黙っていた少女が口を開いた。

「そう考えると、人も鬼獣と変わらないわね」

「どう言う事だ？ 優花<sup>ゆか</sup>」

「人も鬼獣も悪い事するのはホンの一部の奴らだけって事」

含み笑いを浮かべながらそう呟く優花は、首にぶら下げたアクセサリーを具現化する。大きな三日月形の刃を優花の頭の上に翳し、長い柄は優花の横に立てられた。大きな鎌。これが、優花のサポーターームズだ。

『今日の獲物はどいつだ？ 俺様は、暴れたりないぜ』

『キファードレイ。相変わらず、口が悪いな』

『ああっ？ グラットリバー、てめえ、俺様に口答えか？』

口の悪いキファードレイに対し、グラットリバーは呆れた様にため息を吐く。それに続く様に大地もため息を吐いた。冷やかな視線を送る優花は、静かに息を吐き首を横に振る。そんな優花の方へと足を進める大地は、街灯の光を見下ろしながら呟く。

「さて、狩人は狩りへと出かけますか」

「あら。珍しいわね。今日は元気が無いみたい」

『いつも俺様が活躍するから、凹んでるだけだろ！』

『黙れ！ お前と俺のパートナーを一緒にするな！』

怒鳴るグラットリバーを、馬鹿にする様に笑うキファードレイ。それが、グラットリバーの感に触り、怒りがこみ上げてくる。その時だった。空に蒼い閃光が走ったのは。雲の中を駆け巡る様に光る蒼い閃光を見上げる優花は呟く。

「来た様ね」

「それで、どうするんだ？」

「雷には土でしょ？ だから、お願いね」

「はあ？ お願いって、まさか俺がやんのか？」

驚いた声を上げる大地は、目を皿の様に丸くして優花を見据える。ニコツと笑みを浮かべる優花は、「駄目？」と、ガラにも無く可愛らしく呟く。それが、以外で何とも可愛らしく、大地も断るに断れなくなってしまうた。

その為、渋々とグラットリバーを具現化する。すると、大地の右拳にクワガタの顎の様な形の爪が装着されていた。結構、大きな形のその物体を、青光りする雲に目掛けて構える大地は、両足で地面を踏みしめ呟く。

「目標捕捉。さて、一発で捉えろよ」

『俺を誰だと思ってるんだ？ 一発ありや捕捉してやるさ！』

「もしもの時の援護準備してようか？」

「大丈夫だ。一発で捕捉できるって言ってるし」

「あら……。そう」

優花は面白く無さそうに呟くと、不服そうに空を見上げる。右手を構える大地は、奥歯を噛み締め息を静かに吸う。ばきつばきつと岩が碎ける音が響く。だが、それは岩が碎ける音ではなく、大地の右拳に装着された、あの爪が大きく開かれていく音だった。

「いつけ！ 百足の牙！」

そう叫ぶと同時に、凄まじい衝撃が右腕を襲い、そのまま右肩を突き抜けていく。踏みとどまる両足は、僅かに後方に引き摺られ、大地の表情がこわばる。右手から飛び出した具現化したグラットリバーには、鎖で大地の右手と繋がれ、そのまま雲の中へと消えてゆく。

雲を切り裂くグラットリバーはその視界に蒼い光を放つ物体を捉えた。

『見つけたぜ！ 捕獲する』

そう叫ぶとスピードを上げ、その物体へと迫る。そして、ついにグラットリバーの牙がその物体に喰らいついた。その途端、『クツ！ き、貴殿は！』と、声がある。と、同時に勢いよく鎖が引かれ、その物体とグラットリバーが雲の中から引きずり出される。

「よし！ 捕獲したぞ！」

『チツ。俺様の出番は無しか』

「私達の出番はこれからよ」

『ああっ？』

ふてぶてしくそう呟くキファードレイ。ニコヤかな笑みを浮かべたままの優花は、大鎌の柄を握り軽く構える。グラットリバーが地面に雲から引きずり出した物体を叩きつけ、元のブレスレットに戻る。

風塵舞う中、現れたのは、電気を身に纏った狼電だった。だが、その首元には水晶がぶら下がり、それが光ると同時に声がする。

『まさか、貴殿方が関わっているとは、思っても見ませんでしたよ。赤眼の死神殿』

「あら。久し振りに会ったのに、随分な言い方ね」

「俺とグラットリバーは昼間に会ったけどな」

『そのおかげで、獲物は逃がしたけどな』

「それじゃあ、彩にもあつたの？」

首を傾げ大地の方に目を向ける。苦笑いを浮かべる大地は「まあ、お嬢様は相変わらず、怖い目で睨んでたよ」と、呟き右手の人差し指で頬を掻く。そんな二人を睨みつける狼電は、電気を放電し威嚇を続ける。

## 第二十四話 消えた彩

静けさ漂う夜のビルの屋上。青白い光を放出する一体の獣。それと対峙するのは二人の男女。大地の腕のブレスレットに煌く水晶と、優花の持つ大鎌に煌く水晶が、青白い光を浴び不気味に光る。

威嚇する様に牙をむき出しにする狼電。その身に纏った電気がバチツ、バチツと弾けて、壁や地面を傷付ける。大地は軽く振り返り、優花の方に顔を向け、「どうする？」と、小さく呟いた。それに対し、優花は大きく鎌を振り翳し答える。

「もちろん、大人しくさせるわよ」  
「やっぱりな」

苦笑いを浮かべる大地はその場を素早く退く。と、同時に振り翳される大鎌が、風を切る音と共に振り下ろされた。すると、裂く様な音と共に烈風が狼電の体を襲う。弾ける電気を掻っ切る風。時折、大きくバチンと音が聞こえたかと思うと、狼電の体にスツと赤い鮮血があふれ出していた。

烈風に踏みとどまる事が出来ず、狼電の体は軽々吹き飛び鉄格子に体をぶつける。すでに体中傷だらけの狼電を見据える優花と大地。そんな二人に狼電は口を開く。

『あなた方が、首狩りの犯人ですか……』  
「首狩りって……。それじゃあ、俺達悪い事してるみたいだな」  
『実際、人の首を切ってるんです。悪い事じゃないですか』

狼電の声は、ウインクロードの声だった。そう。狼電の体には、今ウインクロードの意識が入り込んでいたのだ。大鎌を軽く構えたままの優花は、静かにため息を吐き答える。



「まさか、それを調べる為だけに、私達をつけていたわけじゃないでしょうね？」

「それ以外にあなた達を調べる理由はありません」

「オイオイ。まさか、まだ根に持ってたんじゃないの？ こいつら」

「まあ、役立たずのサポートアームズじゃしょうがないさ。鬼獣も野放しなんだからだ」

キフアードレイとグラットリバーの二人が続け様にそう言う。静かに体を起すウインクロードは、歯を食い縛り電気を放電する。と同時に優花の持つ大鎌が横一線に閃光を閃かせた。鋭い風の刃が、ウインクロードを襲い、鉄格子ごとその身を裂いた。その瞬間、狼電の姿をしたウインクロードは消え去り、静けさが残った。

「相変わらず、容赦ねえ……」

「あら。いや〜ね。あれでも、手加減したのよ。フフフ……」

大鎌は元のアクセサリに戻り、右手で口を押さえたまま優花は笑う。苦笑する大地は、「あれで手加減したのかよ」と、呟き、グラットリバーが「加減を知らないみたいだな」と、半笑いを浮かべながら答えた。

火野宅の二階の一室。風呂上りの彩がバスタオルを髪に巻いたままベッドの上に座り込んでいる。その前にはウインクロードが寝かされ、彩は何かを静かに待っている様だった。小さな杖のアクセサリの頭についた水晶に、光が戻る。それは、ウインクロードの意識が戻った証だった。

『す、すいません。結局ばれてしまいました』

「そう。それじゃあ、あの二人で間違いないのね？」

『ええ。しかし、何故あの二人が無差別に人を？』

「さあ？ でも、言える事は、油断は出来ないって事」

眉間にシワを寄せる彩は複雑そうな表情を浮かべる。一方のウィ  
ンクロードも、大地と優花の事について色々と考えていた。そんな  
ウィンクロードに彩は困った様に聞く。

「この事は、守にも伝えた方が良いかな？」

『守殿にですか？ 今はまだ伝えない方が良いのでは？ 彼とてま  
だ心を許せる者ではありません』

「でも、一応私のガーディアンだし……」

『今は彩様を守るガーディアンですが、それは、その場しのぎ。イ  
ズレは、もつとちゃんとしたガーディアンを探さねば』

その言葉に彩は少し悲しげな表情を浮かべ、「そうだよ」と、  
呟いた。

一方、その隣の部屋では、守がベッドに横になっていた。僅かに  
足が痺れて動く事の出来ない守は、眠そうに欠伸をしながら枕に顎  
を埋める。枕の横に寝かされるフロードスクウェアは、そんな守を  
見据えてつまらなそうに言う。

『なあ。暇だ』

「そうだな」

『何か、面白い話はないのか？』

「無いな。ってか、寝る。うるさい」

目を細めそう怒鳴る守は、枕に顔を埋め耳を塞ぐ。その行動に、

『なっ！　そ、そんなに俺が迷惑か！』と、叫ぶが、守の耳には届かなかった。その後は、諦めたのか、大人しくなるフロードスクウェア。

暫くして、ようやく守が枕から顔を上げる。それから、静かに息を吐きフロードスクウェアを机の上に置き、部屋の電気を消した。暗い部屋の天井を見上げ、昼間の事を考える。大地があそこで何をしていたのか、あの鬼獣の気配はなんだったのか、様々な考えが頭に過り、複雑に混ざり合う。

「はうっ。結局、あいつらは何なんだ〜！」

そう叫びながら守は枕に顔を埋めた。それから、暫く色々と考えたが、いつしか眠りに付いていた。随分と時間が経ち、守は目を覚ました。戸の方から廊下を軋ませる足音が聞こえたからだ。怪訝そうな表情を見せる守は、目を擦り体を起す。廊下を軋ませる足音は、次第に聞こえなくなった。きっと階段を下りたのだろう。

欠伸をする守は、机に寝かされたフロードスクウェアを手に取り首からぶら下げる。宙に浮く感覚で、フロードスクウェアも目を覚まし、迷惑そうに口を開く。

『何だ？　まだ、外は暗いじゃないか』

「悪い。起したみたいだな」

『起したみたいだな、じゃないだろ……。何かあったのか？』

眠そうな声のフロードスクウェアに、戸の方に近付いた守が静かに答える。

「いや。足音が聞こえたからさ……」

『足音？　って、事は泥棒か？』

「足音たてる間抜けな泥棒がいるか？」

『いるんじゃないか？ 世界は広いからな』

フロードスクウェアにそう言われ、呆れた様に目を細める守。確かに考えてみれば、この世界一人位は、足音を起てる間抜けな泥棒がいる事もあるだろうと思ったのだ。腕組みをする守は、「うーんと、唸り声を上げる。すると、玄関の方から重々しい鉄の擦れる音が聞こえてきた。それは、鍵の開く音で、泥棒が堂々と玄関から出るだろうか」と、守は不思議に思う。

「なあ、泥棒が、玄関から堂々と出ると思う？」

『いや。それはないだろ。第一、本当に泥棒か？』

「いや……。泥棒って言ったのはお前だろ？」

『ンツ？ そうだっけか？』

とぼけるフロードスクウェアに、目を細める守はため息を漏らし戸を開け廊下へ出る。そして、隣の彩の部屋の方へ足を進めた。何故か気になったのだ。

『どうかしたのか？』

「いや……。もしかすると、出てったのって彩じゃないかって」

『どう言う事だ？』

「ただ、何と無くだよ」

笑みを浮かべる守は、彩の部屋の戸をノックする。返事は無い。寝ているのか、分からない為、静かにドアノブをまわす。鍵は掛かっていない。その為、守はゆっくりと戸を開く。すると、ベッドには誰も折らず、彩の姿は何処にも無い。部屋へ入った守は、部屋を見回し大慌てで廊下へと飛び出す。

「やっぱり、水島だ！」

『でも、何であいつがお前に黙って出て行くんだ？』

「それは、分からない。でも、何か嫌な予感がする。急ごう」

守はそう言い静かに廊下を駆け階段を下りる。そして、小さな声で「いつてきます」と、言い外へと飛び出した。もう、彩の姿は無く、彩が何処に向ったのかも分からない。それでも、守は道を走りだした。

## 第二十五話 暗雲 雷撃 疾風 炎

夜の街を駆ける一つの足音。乾いた道路を叩く靴の踵が、音を響かせる。ボサボサの黒髪は、風を受け更に乱れ、衣服も随分と乱れていた。額から流れる汗は、首筋を流れ衣服を湿らせる。口の中が乾き、自然と息が上がっていた。右手で汗を拭い、前かがみになりながら呼吸を整える。

そんな守の首にぶら下がるフロードスクウェアは、落ち着いた様子で守の顔を見据える。焦りが窺える守の表情に、フロードスクウェアは静かに口を開く。

『もう少し落ち着けて。焦っても始まらないぞ』

「分かっているよ。俺だって……」

『じゃあ、落ち着いて考えてみる。小娘の行きそうな場所を』

「水島の行きそうな場所？」

腕組みをして考える守は、首を捻り唸り声を上げる。だが、よく考えると、守は彩の事をよく知らないと、思う守はため息を漏らし咳いた。

「悪い……。俺、あいつの事よくわかんねえ……」

『……。だろうな。俺も、そうじゃないかって思ってた』

その言葉に守は目を細め、イライラとした目付きで首にぶら下がるフロードスクウェアを見据え、「お前……」と、咳く。軽く『ハハハ……』と、笑うフロードスクウェアに、深いため息を吐き守は首を左右に振る。

それから暫く、守は走り回った。不吉な予感を脳裏に過らせながら。

ビルの屋上に階段を上がってくる足音が響く。その足音に黒髪を揺らす大地と優花。誰が来るのか分かっているのか、大地は口元に微かに笑みを浮かべた。ニコヤかな表情を浮かべる優花は、胸の位置に揺れるキファードレイを具現化させる。それと同時に、鉄の扉が真っ赤に光り、金具を弾く音と共に鉄の扉が大地と優花の方に飛んでくる。それを、右手で受け止めた大地は、そのまま床に叩きつけた。その右腕は、具現化されたグラツトリバーがコーティングされていた。その為、鉄の扉も軽々受け止められたのだ。

「随分と手荒い歓迎ね」

笑みを浮かべたまま優花が聞く。その声に、壊れた扉の奥から姿を現した彩が肩口まで伸ばした黒髪を揺らしながら口を開く。

「何しにこの街に来たの。ここは、あなた達の管轄外のはず」

「あら、私と大地は本部の指示で、ここに来たのよ」

「本部の？　なんで、本部が……」

『てめえが、鈍間で役立たずだからだろ。キャハハハハッ！』

キファードレイが甲高い声で笑う。呆れた様な表情を見せる大地は、静かにため息を吐き優花の顔を見る。優花も一瞬困った表情を浮かべたが、ニコヤかな笑みをもう一度浮かべ彩の方を見据える。怖い顔をする彩は、両手に具現化されたウインクロードを握られており、カードフォルダが開けっ放しになっていた。

『オイオイ。あつちはすでに戦闘態勢に入ってるみたいだぜ』

「どうする？　優花」

「……どうしましょうっ？」

そう言いながら、優花は笑顔でカードフォルダを開く。その行動に目を細める大地は、「やる気満々じゃねえか」と、呟くが、それはグラツトリバーにしか聞こえなかった。

カードフォルダに手を伸ばす彩と優花。彩の取り出す一枚のカードには、狼電の姿が映り、そのデータが事細かに表されている。それを、杖の頭にある水晶に翳す。すると、水晶がそのデータを読み取り、雷撃が水晶の中に迸る。

「雷鳴は轟き、雷火は一瞬。大気を揺るがし、大地を貫く！」

「大地」

「はいはい……」

大地は右拳を引き、静かに息を吐く。その間に優花はフォルダからカードを一枚取る。そのカードには、巨大な鳥獣の姿が映っており、“風鳥”と名前が書かれている。それを、刃と柄境目にある水晶に翳す。カードのデータが水晶に読み取られ、風が水晶の中を渦巻く。

彩は鋭い眼差しで大地と優花を見据え、ウインクロードを振り翳す。空には暗雲が立ち込め、それが禍々しく渦巻き、その中で青白い閃光が光る。

「天を裂く雷撃！」

翳されたウインクロードの水晶から、青白く迸る雷撃が眩い光りを一瞬夜の空に輝かせ暗雲の中へと消えてゆく。それから、少し遅れ暗雲の中から轟々しい雷鳴が腹の底を揺るがす様に鳴り響く。

突然の稲光と雷鳴に、町中は一時大騒ぎになる。もちろん、街を



走り回る守も、その雷鳴と稲光に足を止め暗雲の方を真っ直ぐに見据え、フロードスクウェアに話しかける。

「まさか、あれって、水島の仕業じゃないよな？」

『いや……。あれは……。封術師の術だな。下級の呪文とは言え、ありやまずいぞ』

「まずいって……」

『ウインクロードは基本性質が、水だ。もしあの小娘がこの術を使ったとなると、自分自身にもダメージを受ける事になるぞ』

落ち着いた口調のフロードスクウェアに、守は慌てた様子で口を開く。

「ど、どうして、それを先に言わないんだよ！ 急がなきゃまずいじゃないか！」

『いや、だからまずいって言うてるだろ』

「こんな所で、のんびりしてる場合じゃない！ 急ぐぞ！」

『急いで間に合えば良いけどな』

「間に合わせるんだよ！ 絶対に！」

守は停めてあった自転車にまたがり、力強くペダルを踏む。チェインの軋む音だけが街に響いた。

だが、そんな守の心配を他所に、翳されたウインクロードを勢よく振り下ろす。それと共に、轟く雷鳴が唸りをあげ、眩い光が辺りを包み込む。そして、夜の空に蒼い一筋の光が走った。

轟々しく激しい音が町中に広がり、ビルの屋上が眩く光る。爆発音がその後聞こえ、暗雲がその波動で一瞬でかき消された。

「うっ！」

落雷したビルの上では、衣服の裾を焦がした彩の姿があり、その周りには薄らと黒煙が舞い上がっていた。そして、その奥に無傷の大地が右手を翳した姿があった。右手は黒く艶やかな物質にコーティングされ、その指先からは鋭い爪が生えている。その右手の周りには、僅かに青白い稲妻が走り、バチツバチツと音が聞こえる。

『いでっつ。無茶させんなよ！』

「イツ……。俺に言うな。優花にやらされてんだから」

『だからっつてな……』

「そこ、どいた方が良くいわよ」

背後から聞こえる冷たい優花の声に、大地は振り返り「ぎよっ」と、声を上げる。大鎌の刃の周りに、風が渦巻き鋭く甲高い音の響かせていた。それが、優花の長い黒髪を揺らし、目付きが鋭く変る。

「透明な鱗は、触れるものを引き裂き、疾風の如き速く敵を喰らう」「ゲツ！ 逃げるぞ！」

素早い動きでその場を退く大地。そして、優花の視線の先には、座り込み動けない彩の姿が映る。だが、そんな事お構い無しに、キファードレイを振りあがる。

「全てを裂け！ 疾風の牙！」

風を纏ったキファードレイが刃を輝かせ振り下ろされる。空を一閃すると同時に、刃を取り巻く風が渦動し、口を開いた龍を描き、その鋭い牙が彩に襲い掛かる。

「うっ！」

目を背ける彩。風は轟々しく重々しい鈍い音を辺りに響かし、大気を激しく揺らす。だが、彩の元に流れる風は緩やかで、頬を優しく撫で黒髪をフワリと靡かせる。その時、起きた爆風は、大地と優花の体を吹き飛ばし、床を激しく揺らした。

「クッ！」

「イツ……。誰だ！」

床を転げた大地は、睨みをきかせ吹き荒れる風の中を見据える。床に幾つモノ傷を残す風が徐々に弱まり、一人の男の姿があらわになった。足元まで長い黒いコートに、頭にはフードを被った男。裾は風に激しく揺れ、フードの隙間から見える赤と茶の複雑に混じった髪が、風を浴び微かに揺れる。

その男の顔を、彩は確認できない。だが、ウイנקロードはその後ろ姿に見覚えがあった。その為、驚いた声を上げる。

『あ、あなたは！』

「な、何？ 知り合い？」

『いえ、その』

「風を呑み込め！ 炎舞衝！」

コートの袖から見える右手の薬指に煌く赤い水晶のはめ込まれたリングが光る。そして、まだ勢いの残る風を、炎が一瞬にして呑み込む。燃え盛る炎は、そのまま優花の方へ一直線に向う。

「うっ！」

「優花！ くそ！ 間に合わん！」

「フロードスクウェア！」

『任せろ！』

向かい来る炎の前に飛び出す守は、両手用の大きな刃の剣を振り翳す。赤い水晶が煌き、振り下ろすと同時に、炎を一刀両断し水晶の中へと吸収する。消え去る炎の奥に立つ男を真っ直ぐ見据える守は、ふとフードの奥に見える顔に見覚えがあつた。だが、声をかける前に、男は「戦う相手を間違つな」と、告げ屋上から飛び降りた。

## 第二十六話 朝

夜が明けた。

いつも通りの時間に目を覚ます守は、眠そうに欠伸をする。

殆ど寝る事が出来なかった。色々と気になる事がありすぎて。

結局、あの屋上に現れた男が誰なのか、その場にいた誰も知らなかった。確かに、守には面識があったし、記憶の片隅にあの男の姿が残っていた。それが、いつ出会ったのかは不確かで、薄らとなので、本当にあの男なのかも分からない。

寝不足の為、ぼんやりする守は、ウトウトとしながらベッドから立ち上がる。その際、足元がふらつき転倒する。その音が部屋中に響き、棚の上に置かれていたフロードスクウエアが目覚ます。

「なッ！ だ、大丈夫か？ お前！」

「だ…… 大丈夫」

半笑いを浮かべそう答える守は、ゆっくりと立ち上がり、棚の上のフロードスクウエアを首にかける。心配そうにするフロードスクウエアは、静かに口を開く。

『あのさ。無理しない方がいいぞ』

「大丈夫……。フロードスクウエアが心配する事じゃないって」

無理に笑ってみせる守は、制服に着替えると鞆を持ち部屋を出た。フラフラした足取りで階段を降りる守は、大きく欠伸をすると首をポキポキと鳴らしリビングへと入っていく。

「おはよう。今朝は随分と騒がしかったけど、どうかした？」

優しい笑みを見せる母親に、苦笑する守は右手で頭を掻きながら答える。

「ベッドから落ちただけ。大した事ないよ」

「そう。なら良いけど。無理しちゃだめよ」

「うん。分かってるよ。それより、水島は？」

リビングを見回し、彩がないのに気付いた。その問いに、母親は困ったような表情を見せる。その母親の表情に首を傾げる守は、椅子に腰掛け鞆を床に置く。ご飯を茶碗によそう母親は、表情を変えぬまま答える。

「それが、今朝は早く学校へ行つたみたいなの。朝食も食べないで、大丈夫かしら？」

その母親の言葉を聞き、「ふん」と、素っ気無い返事を返す守は、茶碗を受け取り箸で一口ご飯を口に運ぶ。そして、そのまま箸を銜えたまま動かなくなった。暫く沈黙が続き、時計が時を刻む音だけがリビングに響く。

それから、随分と時間が過ぎ、ようやく守の手が動く。茶碗と箸をテーブルに置き、ニコツと軽く笑みを浮かべ、「ご馳走様」と言い立ち上がる。この行動に母親は何も言わず笑顔を向ける。

「いつてらっしやい。怪我しない様にね」

「小学生じゃないんだから、怪我何てしないよ。それじゃあ、行ってきます」

笑顔で返事をした守は、鞆を持ちリビングを後にした。リビングを後にした守を見て、「フフツ」と、笑う母親は、「男の子は父親によく似るわね」と、呟き嬉しそうに後片付けをしていた。

家を出た守は、急ぎ足で学校へと向う。胸元で揺れるフロードスクウエアは、そんな守に迷惑そうに声を掛ける。

『おい！ もっとゆっくり歩けよ！ こっちはまだ眠いんだよ！』

「はいはい。そうですか。こっちは急いでるんだよ。少し我慢しろ」  
『我慢しろってな……』

「まあ、学校着くまでの辛抱だよ」

『何で、今日は急いでんだよ。いつものんびりなのに……。こっちの都合も考えるよ』

少し怒った様な口調に、申し訳無さそうに「ごめん」と、守は謝った。すると、フロードスクウエアは少し静かになった。素直に謝られると、何だかこっちも調子が狂う。その為、フロードスクウエアは静かになったのだ。

暫く走り学校が見える位置まで来た守は、赤信号で立ち止まっていた。少し落ち着かない様子の守に対し、背後から落ち着いた様子の声が聞こえる。

「そんなに急いで、どうしたの？」

「エッ？」

振り返ると、そこには昨夜、ビルの屋上で会った少女優花がいた。長い黒髪を微かになびかせ、落ち着き払った目付き。短いスカートから伸びる脚は細く長い。首から下げられたアクセサリーに付いた水晶が日の光を浴びキラリと輝く。

怪訝そうな表情を見せる守は、軽く身構え距離をとる。一応、昨夜の事を忘れたわけじゃない。その為、体が自然とそうさせたのだ。

「そんなに、警戒しなくても」

「昨日の事は忘れたわけじゃない！」

「あら。あれは、彩の方から仕掛けてきたのよ」

穏やかな目つきの優花に、警戒していた守は表情を和らげる。そんな守に優花はニコヤカに笑みを浮かべ言う。

「信号、変ったわよ」

守の横を通り過ぎる。体の向きを変え、道を渡る守は優花の横に並ぶ。不思議そうな表情を見せる優花は、暫く黙って歩く。その横に並んで歩く守も、沈黙を守り腕組みをしている。何かを考える守に、優花に代わってキファードレイが言い放つ。

『てめえ、何堂々と昼間からストーカーしてんだ！ 気持ち悪い！』

キファードレイの声に、素早く反応したのはフロードスクウェアだった。守をバカにされた事に、怒るフロードスクウェアの怒声が響く。

『ざけんな！ 誰がストーカーだ！ こっちは聞きたい事が山ほどあるんだよ！ 黙ってる』

『んだと！ 弱小のサポートアームズが！』

『誰が弱小だ！ 調子にのんな！』

二人の声に、歩道を歩く人達は、変な顔で守と優花の方を見ている。それを、特に気にする素振りすら見せない守と優花。二人ともこの状況に慣れているのだ。だが、流石にこのまま騒がれるのはまずいと思った守は、胸元にぶら下がるフロードスクウェアを右手で握り呟く。

「やめる。フロードスクウェア」



『けど!』

守の右手の中から籠ったフロードスクウェアの音が聞こえる。その声は守にしか聞こえない。取り敢えず、辺りを見回す守は、近くに喫茶店を発見する。

「あのさ。フロードスクウェアの言うとおり、聞きたい事がいっぱいあるんで、あの喫茶店で話をしたいんですけど?」  
「それって、今じゃないと駄目?」

冷たく冷静な眼差しを向ける優花は、暫し考える。冷静に色々考えた結果、優花は軽く了承する。

「そうね。あなたには、お礼も言わなきゃいけないし、色々言う事もあるんで。いいわよ」

『オイオイ。こんな優男とお茶すんのか? お前も軽い女だな』

「フフツツ。そうかしら? 私はタイプよ。彼みたいな子は」

「なっ! な、なななな」

優花の言葉に慌てる守は耳まで赤くし、口をパクパクとする。ニコニコと悪戯っぽく笑う優花は、一足先に喫茶店へと入っていった。「うっ」と喉から声を出す守は、半泣き状態でフロードスクウェアに聞く。

「俺、からかわれてんのかな?」

『いや……。本気かも知れんぞ。意外に……』

「間違ったかな? 誘う人? やっぱ、男の方にした方がよかったですか?」

『もう誘ったんだ。さっさと行くぞ!』

フロードスクウェアに説得され、守は渋々と喫茶店へと入った。先に入った優花は、すでに椅子に座り守の事を待っている。肩を落とし重い足取りで優花のいる方に進む守は、優花の向かいの席に座る。そんな守の顔を見る優花は、ニコツと軽く笑みを浮かべた。

「あら。隣りに座ってもいいのよ？」

「い、いいや……。け、結構です……」

「まあ、可愛い反応。大地だったら、すぐ怒鳴るわよ」

「は、ハア……」

暫し圧倒される守は、戸惑いながらもそう返事する。女性と喫茶店などに二人つきりで来た事の無い守は、やや緊張した表情を見せていた。そんな守の緊張を解そうとしているのか、ハタマタからかっているのか、優花は「フフツ」と、軽く笑いかけていた。

## 第二十七話 封術師とガーディアンの関係

静かな喫茶店で、向かい合って座る守と優花。

気まずそうな表情を浮かべる守は、俯いたまま優花の顔すら見ようとしない。

一方の優花は、ニコニコと笑みを浮かべたまま黙っている。

沈黙が続く中、ウェイターが注文をとりに来る。

「ご注文の方は？」

ウェイターの方に顔を向ける優花は、メニューに軽く目を通して答える。

「それじゃあ、コーヒーとレアチーズケーキ。お願いするわ。あなたは？」

優花はメニューを守に差し出す。メニューを受け取った守は、一通りメニューに目を通した。

「じゃ、じゃあ、コーヒーだけで」

「コーヒー二つにレアチーズケーキお一つですね」

「ええ。よろしくね」

優しい笑みを浮かべそう言う優花に、ウェイターは軽く頭を下げて去っていく。ウェイターがいなくなり、また静まり返る。

その後も沈黙が続き、注文の品が二人の前に届く。守は角砂糖を二つコーヒーに入れ、ミルクを加えてスプーンでかき混ぜる。それを目にした優花は、コーヒーをブラックのまま口に運んだ。

「そのままの方が美味しいわよ。深みがあつて」  
「あんまり、苦いのは……」

守はそう返事を返し、コーヒーを口に運んだ。まだ苦かつた為、一口目で表情が歪む。そんな守の表情に、楽しげに優花は微笑む。

「砂糖が足りなかった？」

「うっ……。それより、そろそろ本題に……」

コーヒーカップを皿の上に置き、「そうね」と呟く。唾を呑む守は、静かにフロードスクウェアをテーブルの上に置き、静かに口を開く。

「まず、初めに聞きたいのは、封術師とガーディアンの関係について。封術師は、鬼獣を封じる力があるのに対し、ガーディアンは鬼獣を倒す為の力がある。両方共、サポートアームズと言う同じ武器なのに、どうして全く異なる力なのか。知ってる事があれば教えてほしいんです」

先程と打って変わり、真剣な面持ちの守に、暫し優花の表情も変わる。先程までの笑みは無く、冷たい視線に、表情もやや冷やかだ。まさか、守がこんな質問をしてくるとは、優花も思つてはいなかった様だ。

もちろん、フロードスクウェアも守が、こんな事を考えているとは思つても無く、驚きのあまり言葉を失っていた。

暫し、沈黙が続き、優花がコーヒーを口に運んだ後答える。

「どうして、それを知りたいと思つたの？」

「水島から封術師とガーディアンのを聞いた時から、少し疑問に思つてたんです。何で二つの力が全く同じものじゃないのかって」

「そう。なら、あなたなりの答えも出てるんじゃない？」

鋭い眼差しが守をジツと見据える。一応、守もそれなりの答えを出していた。ただ、それが合っている自信は無い。それに、確証も無く、それは守の推測でしかない。

その為、少々控えめな声で答える。

「これは、俺の推測ですが、元々封術師とガーディアンは、敵対していたんじゃないですか？」

「敵対？ どうしてそう思うの？」

コーヒを口に運び、少々驚いた様子の声で問う。フロードスクウェアは、質問に答えるつもりが無さそうな優花に不満そうに言い放つ。

『チヨット待て！ さっきから質問してるのはこっちだ！ 答える気は無いのか！』

フロードスクウェアの声が喫茶店に響く。ウェイターやマスターが妙な表情を浮かべている。それもそのはず、今店内にいるのは守と優花の二人だけ。どこから、その声が聞こえてきたのか、疑問に思ったのだろう。

知らん顔する守は、フロードスクウェアを右手で握り話を進める。

「俺が、そう思ったのは、鬼獣です。鬼獣と言う生物は一体何なのかを考えた時、ふと一つの仮説が生まれました」

右手の人差し指を立て、顔の前に持つてくる。それに対し、興味津々に優花が身を乗り出す。その際、互いの顔の距離が近付くが、話に集中している守は全く慌てる素振りすら見せず、言葉を続ける。

「俺の立てた仮説。それは、鬼獣と言う生物を生み出したのは封術師で、サポートアームズを生み出したのはガーディアンだと言う事です」

「ふん。それじゃあ、あなたは、封術師が鬼獣を使いガーディアンを攻め、ガーディアンはサポートアームズでその鬼獣を退治していたと、言うわけ？」

テーブルに両肘を寄せ、手を組み合わせる優花は軽く首を傾げる。まさか、守がここまで考えているとは、優花自身思っても見なかった。それに、優花も守の立てた仮説に、興味があった。

そんな守の考えに驚いたのは、サポートアームズの二人も同じだった。自分達が作られたのは、適合者のサポートと言う事だけだと思っていたからだ。

一呼吸置く守は、静かに息を吐き、のんびりとコーヒを一口飲み、更に言葉を続ける。

「いえ。ガーディアンはその名の通り、守護者。彼らは、サポートアームズを用いて、何かを護っていた。そして、封術師は鬼獣を操り、それを奪おうとしていた。それが、一体何なのかは、わかりません」

腕組みをする守は俯く。だが、その守の仮説を否定する様に、キアードレイが口を挟む。

『フツ。下らん仮説だぜ。第一、てめえの言ってる事には、矛盾がありまくりだ。まず、封術師とガーディアンは、今現在共に鬼獣と戦っているんだぜ。それに、俺様達サポートアームズは、ずっと昔っから生きてんだ。そんな事があったなら覚えてんだよ！』

「そうね。確かに、矛盾が多いわね」

キファードレイの言葉に、頷く優花。だが、表情一つ変えない守はカップに入ったコーヒーを飲み干し、自信満々に言い放つ。

「俺の仮説はまだ続いてます」

「そう。ごめんなさい。途中で口を挟んで」

「いえ。お気になさらず」

軽く会釈する二人。一方のフロードスクウェアとキファードレイは、呆れてため息を漏らす。何だか、二人の堅苦しい言葉遣いに疲れ始めていた。

それに、二人は話に夢中で気付いていないが、すでに学校は始まっている。多分、もう一時間目は終わりに近付いているだろう。その事を、フロードスクウェアは守に伝えようと努力したが、言葉にする事が出来なかった。

真剣な表情を見せる守は、息を整え言葉を続ける。

「俺の推測では、ガーディアンは戦いに敗れ、全滅した。と、考えてます」

「それじゃあ、今いるガーディアンは？」

「以前、フロードスクウェアに、サポートアームズは幾つあるのか聞きました。その時、フロードスクウェアは昔は自分で造って、幾つももっている者がいたが、今は造る奴がいないと、聞きました。それは、何故か」

その守の力説に、優花も力が入る。

「サポートアームズを造る技術が絶えたから？」

「はい。そう考えるのが妥当でしょう。ガーディアンがサポートアームズを造り、その技術が絶えたとなれば……」

「今いるガーディアンは、形だけのガーディアン？ と、でも言いたいの？」

「はい。そう考えると色々な所が繋がるんですよ」

堂々とそう説明する守に、優花は急に笑みを浮かべ指摘する。

「それじゃあ、今現在鬼獣がいるのはどうして？ ガーディアンとの戦いに勝利したなら、鬼獣を生み出す必要は無いんじゃない？」

「うっ……。た、確かに……」

「結構、面白かったけど、詰めが甘いわね」

ニコツと笑ってみせる。「うっっ」と、声を上げる守は眉間にシワを寄せ、難しい顔をする。だが、納得できない様子で、ブツブツと言いつ守は、背もたれに凭れ腕組みをし考え込む。

頭の中で張り巡らされる単語と単語を、一本の鎖で繋げ様と様々な可能性を編み出す。そして、いろんな仮説を立て、自分自身での仮説に対し疑問を投げかける。

小さな声でブツブツと言う守の方を、楽しげに見据える優花はレアチーズケーキを口に運ぶ。甘酸っぱさが口の中に広がり、その味に優花も自然と笑顔になる。キファードレイはそんな優花を見て呆れた様に口を開く。

『相変わらず、甘い物には目が無いな』

「あら。別に甘い物が好きな訳じゃないわよ。ただ、チーズケーキが好きなだけ」

嬉しそうにレアチーズケーキを口に運ぶ。『そうかい』と、怪訝そうに呟くキファードレイは、つまらなそうに欠伸をして、眠りに就いた。静けさの戻る喫茶店には、清らかな音楽だけが静かに流れていた。



## 第二十八話 優花の赤い眼

二時間目 数学の授業。

数学教師の岩村は、黙々と黒板に数式を書いてゆく。生徒の顔すら見ず、黒板と教科書だけを交互に見ながら。

弱々しい顔つきの岩村は、天然パーマでダサイ眼鏡を掛けている。その為、生徒からもバカにされ、今では生徒と話す事も出来ず、色々と職員の間でも問題になっている。

それはそうと、今回も半数が眠りについていた。相変わらずこの様子にため息を漏らす彩は、ぼんやりと窓の外を見る。澄んだ空に薄らと浮かぶ白い雲。グラウンドでは、生徒達が楽しそうにサッカーをしていた。そんな光景を目にする彩は、詰まらなそうな表情を見せ、深々とため息を吐く。

「今日は、元気が無いわね」

「へっ?」

急に声を掛けられ、声が裏返る彩。そんな彩を見て、「くくくく」と、隣の席で口を押さえて笑う真弓。ムスツとした表情を見せる彩は、膨れっ面のまま眉間にシワを寄せる。

そんな彩の顔を見据える真弓は、ニヤニヤと意味ありげな笑みを浮かべながら口を開く。

「あらら。もしかして、愛しの彼氏が居なくて寂しいの?」

「な、何よ。愛しの彼氏って……」

少し頬を赤く染める彩に、「はは〜ん」と、意味ありげな声をだす真弓。その声になにやら嫌な予感を脳裏に過らせながら、彩は息を呑み込む。

そして、彩の嫌な予感が的中する。

「何言ってるのよ。私達、知ってるんだよ。彩が火野と付き合ってるの」

「うえっ！ な、ななな何、言ってるの？ わ、私が、何で守と…」

「なぐに誤魔化してるのよ。もう、分かってるんだから。昼休み良く二人で屋上いるの見掛けるし、帰りもよく一緒にいるじゃない」「フエエエツ！ 嘘、嘘！ 何で知ってるわけ！」

そう口にした彩はハツとして、両手で口を塞ぐ。しかし、手遅れだった。ニヤニヤと不適な笑みを浮かべる真弓が、「へっつ」と、関心した様な声をだす。やられた。完全なる誘導尋問に、引っかかってしまったのだ。

赤面し顔が燃える様に熱くなった彩は、俯き視線を逸らす。その行動に確信する真弓はゆっくり口を開く。

「こつも簡単に誘導尋問に引っかかるとは、彩も大した事無いわね」「うっつ。うるさいよ！ もう、授業に集中してよ！」

「またまた。ごまかしちゃって」「別に、誤魔化してなんかいません！ それに、守とは家の方向が一緒なだけです！」

「本当かなぐ。目茶目茶あやしーんだけど」

疑いの眼差しを向ける真弓に、引き攣った笑みを浮かべる彩は身を僅かに引いていた。意外と、こつ言う時勘が冴え渡る。その為、迂闊に反応すると、何かと勘づかれてしまう。

彩もその事に気をつけ、極力リアクションしない様に心掛けていた。だが、それはあくまで、彩の思い込み。実際は物凄く分かり易いほどの動揺が窺えた。

そんな彩の動揺っぷりが可笑しく、真弓は口を両手で塞ぎながら笑いを堪える。

「クツクツクツクツ。焦りすぎ……」

「あ、焦ってなんか無いもん！」

「まあまあ。隠さなくてもいいって」

茶化す様にそう言う真弓は、笑みを浮かべながら彩の顔を見ていた。ムスツと頬を膨らす彩は、「もー知らない！」と、言い放ちソツポをむいた。

青桜学園のすぐ近くの喫茶店。

店内に流れる美しいメロディーを聞きながら、話を進める守と優花の姿があった。

困惑した様子守は、納得がいかない様子で口を開く。

「ちょ、ちょっと待ってください！ それじゃあ、昨夜の事は、水島が先に仕掛けたんですか！」

「そうよ」

口元に笑みを浮かべたまま、優しく答える優花。だが、その言葉には暖かさなど無い。突き放した様な、冷たい言葉だった。

混乱する頭を整理する守の代わりに、フロードスクウェアが質問する。

『それでは、やはりあの雷撃は』

『そう……。彩の仕業よ』

『まあ、あんな雷撃俺様には全く効かないけどな！』

ガラガラでガラの悪い声のキファードレイが、そのまま大笑いする。呆れた様のため息を漏らす優花は、そんなキファードレイを鞆の中に突っ込み、「ごめんなさいね」と、守とフロードスクウェアに謝る。しかし、困惑する守にはその言葉は聞こえておらず、フロードスクウェアが、『気にする事はない』と、静かに答えた。そして、更に言葉を続けた。

『何故、あの小娘はお前達を攻撃した？ 同じ封術師だろ？』

「私と大地は、彩に嫌われているのよ」

『嫌われている？ 何故だ？』

「私と大地が、彼女の一家を殺したからよ」

深刻な面持ちでそう言う優花。その言葉に、困惑していた守の表情が一変する。

「どう言う事ですか！ それは」

真剣な表情。鋭い眼差し。握った拳の甲には血管が浮き出て、力が入っているのが良く分かる。表情を変えない優花は、そんな守の目を真っ直ぐに見据えたまま口を堅く閉じていた。そして、その優花の黒い瞳が、徐々に赤く染まってゆく。

色鮮やかで明るいその赤い瞳に、驚きを隠せない守。当たり前と言えば、当たり前前の反応だ。初めて見た者は誰もが、驚き怪訝そうな表情をする。こんな事には、慣れている優花は少し笑みを浮かべ口を静かに開く。

「驚いた？ 初めは皆驚くのよ」

「その眼は……」

「呪い……の様なモノかしら？」

『呪い……だと？』

「そうよ」

不思議そうな声のフロードスクウェアにそう答えた優花は、鼻から息を吐き俯く。

「この眼は、私が四歳の時にある男によって付けられた呪い……」

『ある男？ そいつは一体……』

「さあ？ その男の顔を私は知らないわ。そもそも、その当時、私は視力を失っていたから」

『視力を……失っていた？ それは……一体……』

「私、生まれた時から眼が見えなかったの」

まるで他人事のような素振りで話す優花に、ようやく正気に戻った守が口を開く。

「何だか、他人事のように聞こえますが？」

「そうね。昔の事だからかしら？」

そう言うと、「フフフフツ」と、含み笑いを浮かべる。相変わらず笑うと可愛らしく、女の子っぽい優花に、ちよっぴりトキメク守は、視線を逸らし問いかける。

「でも、今は見えてるんですよね？」

「ええ。この赤い眼の呪いを受けたと同時に、眼も見える様になったわ。ただ、初めて見た光景は、思い出したくも無い程悲惨なものだったけど……」

表情を曇らせる優花を見て、不思議そうな顔をする守。普通、初めて世界をその眼で見る時、感動するものじゃないかと、思ったからだ。そんな疑問を抱きながら守は、口を開く。

「人の過去は詮索しません。俺も人にあれこれ過去を詮索されたくないの……」

「そう。私も、自分の過去を詮索されるのは、嫌なの」

「それでは、話を戻しましょう」

「そうね」

そんな二人のやり取りに、『お前ら、人と距離を置くタイプだと、フロードスクウエアが呟いた。そんな声など聞こえていない守と優花は、真剣な表情をしていた。呆れたため息を漏らすフロードスクウエアは、『ハハハ……』と、小さな声で笑った。

## 第二十九話 彩と優花と大地

二時間が経過　。

未だ喫茶店で話を続ける守と優花。“ガーディアンと封術師の関係”から始まり、“優花の赤い眼”“フロードスクウェアの属性”“封術師・ガーディアン育成学校の話”と、続き最終的によろやく“彩の過去”へと話は移った。

今までの話で、守の分かった事は、ガーディアンと封術師の関係はもつと詳しく考える必要があると、言う事。優花の赤い眼は、あの男による呪いである事。フロードスクウェアの基本属性は火である事。そして、封術師とガーディアンを育成する学校がある事などなど。

結局、全ての話の詳しい所は省かれていたが、少しはガーディアンの事を理解した守だった。

そして、話は彩の過去の話へ　。

「それで、どう言う事ですか？　あなたと、あの黒木君が彩の一家を殺したって？」

『大分、話題がそれたが、よろやく本題にたどり着いたな』

守の言葉に皮肉交じりでそう呟くフロードスクウェア。する事が無く暇だったのだから。だが、そんなフロードスクウェアの言葉を守は、完全に無視した。

「詳しく聞かせてください」

『俺を無視するか……』

「いいわ。元々、その話をあなたにも聞かせようと思っていたから」  
『あんたも、俺を無視か……』

合間合間にフロードスクウェアの声が聞こえるが、守も優花も全く相手にしない。その為、フロードスクウェアは一人でモゴモゴとぼやきながら、最終的には静かに眠りに就いたのだった。

そんな事とは知らず、守と優花は真剣な面持ちで話を進めていた。

「あなたは、知らないだろうけど、水島家は代々続く水を司る最高位の封術師の家系なの。そして、そのお嬢様が、彩よ」

「それじゃあ……。水島って、凄い力を持つてるのか？」

「そうね。水の性質の術なら、鬼獣の力を借りなくてもある程度は使いこなせるはずよ。それに、火の属性の弱い鬼獣程度なら、一瞬で封じる事も可能だと思うわよ」

落ち着いた様子で淡々とそう話す優花。だが、守は何処か不に落ちない。と、言うのも、まだ一度も彩が水の性質の術を使った所を見ていないからだ。それは、鬼獣との相性もあるのかも知れないが、まだ一度も使っていないと、言う事が引っかかっていた。何故、使わないのか……。と、言う疑問を抱きつつ、優花の話は進む。

「そして、私と大地の家系は、水島家を護るだけに存在する家系。例え、この身を犠牲にしても、水島家の人だけは護れと叩き込まれたわ」

「それって……」

「従順な下部の様なものよ。あなたには、分からないでしょうね。私と大地の辛さは……」

悲しげな表情を見せる優花に、表情を曇らせる守。そんな過去があったなんて、知らなかったからだ。彩と優花と大地の間にこんな関係があったなんて、ここで聞かなきゃきっと分からなかっただろう。

少し二人の間に重々しい空気が流れたが、優花はそのまま話を進



めた。

「それで、私と大地は育成学校に入ると同時に、彩の護衛を命じられた。そして、学校でも家でもいつも一緒に行動をさせられた。それでも、楽しかった。彩といた三年は……」

「それが、どうして……」

「はめられたのよ。全て……」

「はめられた？ どう言う事ですか？」

聊か話が見えて来ないため、そう聞く。何がどうなっているのか、全く理解できない。それが、顔に出ていたのか、優花が申し訳無さそうに口を開く。

「ごめんなさい。もう少し詳しく話した方が、いいみたいね」

「す、すいません……」

「一年前よ。私と大地がはめられたのは……」

その後、守が聞かされた話は、あまりにも悲しい彩の過去の話だった。

全ては、一年前に遡る。まだ、彩が封術師になる前に。

一足先に封術師になった優花と、ガーディアンに成り立ての大地。二人は、相変わらず彩の護衛を勤めていた。

『お前、何の為にガーディアンになったんだ？ いつまで、こんな事してんだよ』

「うるせえ……。おめえに関係ないだろ」

『オイオイ……。せっかくガーディアンになって、サポートアームズの俺を手に入れたんだろ？』

「黙ってる！ うるせえな！」

右の手首に煌くブレスレットにそう怒鳴る大地。正直、大地ももうこんな仕事には嫌気がさしていた。ガーディアンに成り、ようやく鬼獣を退治できると思っていたのに、まさか、こんな仕事をさせられるとは、大地自身思ってたなかった。

やる気無く椅子に座る大地に対し、落ち着き払う優花は静かに読書をしていた。首にはネックレスがかけられ、胸元で鎌形のアクセサリーが揺れる。

『くーっ！ いつまで、こんな所でジツとしてんだ！ 俺様は暴れたんねえ！』

「……………」  
『俺様は、戦いてえーんだ！ さっさと具現化しろ！』

眩い光りが辺りを包み、具現化されたキファードレイが廊下に転がる。あまりにうるさいので、優花が具現化したのだ。しかし、そのまま廊下に寝かせたまま読書が続ける。自分では動けないキファードレイは、廊下に転がったまま大騒ぎする。

『くおらー！ てめえ！ 何やってんだボケエ！』

「……………」  
『おい！ うるせえぞ！』

『黙れ！ クソがき！』

「だ、誰がクソがきだ！ 喧嘩売ってんのか！」

彩の部屋の前の廊下で大揉めする大地とキファードレイに、呆れるグラットリバーはこの大騒ぎの中、静かに読書する優花に關心する。

そんな騒ぎの中、部屋の扉が勢い良く開かれた。ドアの前に立つ

大地は、勢い良く開かれた扉に顔を打ちつけ後方に倒れこむ。あまりの痛みに、顔を押しさえる大地は蹲ったまま怒鳴る。

「イッター！ いきなり何しやがる！」

「うっさい！ 人の部屋の前で騒ぐな！ こっちは、明日試験なんだから、静かにしろ！」

『ケツ。試験だとよ。てめえ何か受かるかよ』

その言葉に、彩の中でプツンと何かが切れる音がする。

「ふん。自分じゃ動けないのに、そんな事言っちゃうんだ」

不適な笑みを浮かべる彩は一度部屋に戻る。そして、数分後部屋から出てくる。大きな金槌を手にとって。その事に、気付いていたのか、優花は本に目を向けたまま言う。

「彩ちゃん。壊さない程度にね。これから、色々役にたって貰わないといけないんだから」

「分かってる。ちゃんとして手加減するから。ねえ」

誰に対しての“ねえ”だったのかは不明だが、その後キファードレイの悲鳴が廊下にこだましたのは、言うまでもない。

「あゝあ。すつきりした」

満面の笑みを浮かべる彩は、背筋を伸ばし軽く伸びをする。それと同時に、本を読み終えたのか、優花は本を閉じ椅子から立ち上がった。そして、キファードレイを右手で握ると、そのまま具現化を解き、元のアクセサリーへと戻す。それを首にかけて優花は、彩の方に視線を向け、ニコツと笑みを浮かべた。

「どう？ 気は済んだ？」

「うん。もう、頭ん中すつきり爽快って感じだよ」

「フフフツ。でも、明日試験なのに、頭の中がすつきりなのは、どうかしら？」

「はへっ？ あっ！ そ、そうだった！ 明日、試験だった！ こんな事してる場合じゃなかった！」

優花の言葉に慌てふためく彩は、大慌てで部屋へと戻り机に向き合っていた。そんな彩の後ろ姿を見据える優花は、軽く笑みを浮かべると、静かに扉を閉めた。そして、大地の方へと視線を向け、真剣な表情で言う。

「行くわよ……大地」

「ああ。妙な客が着ちまつてるようだからな」

大地はそう呟き指の骨を軽く鳴らした。

### 第三十話 最悪の過去

右手に具現化したグラットリバーが、艶良く黒光りしていた。その周りには、狼電が二体、水獅すいしが二体、土蟹どかいが二体。計六体の鬼獣が横たえていた。死んでいるわけでは無い。ただ動けなくなるまでボコボコにされたのだ。

夜の静けさ。夜の冷たい風。夜空に浮かぶ月暈げつうんは、リングの様に美しい円を描き、地上を優しい月光で照らす。カサカサと揺れる木々の枝から無数の葉が舞い落ちる。その葉の一枚が、大地の目の前を通過し、ヒラヒラと狼電の体の上へと落ちた。

狼電の体に落ちた木の葉は、体から放電される電気を浴び、蒼い火花を散らし灰と化した。風によって灰は微量の粉へと崩され、紺色の空へと溶け込んでゆく。

「案外、呆気なかったな」

『オイオイ。油断すんなよ。他にも隠れてるかもしれないぞ』

「どんな鬼獣が来ても、俺がチャツチャと片付けてやるぜ！」

威勢の良い大地に対し、何処か納得の行かない様子の優花は、鋭い眼差しのまま腕を組み大地の背中を見据える。そんな優花の視線に気を良くする大地は、振り返り左手を腰にあて誇らしげな表情を浮かべた。だが、優花の真っ赤な瞳に真っ直ぐに見つめられ、その誇らしげな表情は、徐々に不安に染まる。

「な、なあ……。俺達何かミスったか？」

突然の大地の問い掛けに、『アアツ？』と、不服そうにグラットリバーが声を上げた。まるで、こいつは何を言っただと、言いたげな声のグラットリバーに、大地は小声で言い放つ。

「見てみるよ。あの顔……。何か、怒ってるみたいだぜ」

グラットリバーに優花の顔を見せると、「なあ」と、小さな声で同意を求めた。確かに、何処か難しい表情を窺わせる優花に、グラットリバーも何故か心配になった。何処かで自分がミスをおかしているんじゃないかと。その為、もう一度大地と一緒に鬼獣との戦いを思い返す。

数分後。

何度も思い返したが、結局何処にも目立ったミスは無い。鬼獣の攻撃は受けなかったし、鬼獣はほぼ一撃で仕留めた。的確に急所を突き。他にミスがあつたとすれば、大地が一人で鬼獣を倒してしまつたと言う事。だが、それ位で怒るだろうか？ そう考える大地に、不意に優花が声を掛けた。

「そこに居ると、危ないわよ」

「うえっ、ああ。悪い……」

慌ててその場を退く。具現化されたグラットリバーを元に戻し、少し離れた場所から優花の方を見据える。具現化された大鎌キファードレイを持つ優花の姿は、まるで命を狩る死神の様に見えた。それは、優花のサポートアームズであるキファードレイが、大鎌と言う形の武器だからそう見えるのかも知れない。だが、本当はあの赤い眼がそう見せているのだ。それだけ、不気味なのだ。

「行くわよ。キファードレイ」

『よつやく、暴れられるぜ！』

「我、汝等を封じる者也。司るは風。流れる風に吹かれ、汝等を封

ずる」

開かれたカードフォルダから素早く六枚のカードを宙に散りばめる。宙に投げ出された封と描かれたカードは、風に吹かれ静かに揺れ、ヒラヒラと落下する。振り翳されたキファードレイの水晶が、僅かに光りを発しそれぞれのカードが一体一体の鬼獣に、細い糸の様な風を緩やかに伸ばす。ウネリ混ざりあう風の糸は、それぞれの鬼獣の体に螺旋を描き、徐々に鬼獣を光りの粒子として、カードへと吸収していく。

額に薄ら汗を滲ませる優花。一回で六体の鬼獣を封じるのは初めての事で、体力の消耗が激しかった。翳されたキファードレイは、小刻みに震え、優花の体力の限界を悟った。

『てめえ！ ふざけるな！ 俺様は暴れ足りねえ！』

「うっ……うるさい……。しゅ……集中できない……」

奥歯を噛み締め、必死に耐える。宙に舞った六枚のカードは、不安定な優花の精神に共鳴するかのように、小刻みに震えだす。鬼獣に伸びる風も徐々に安定を失い、鬼獣をカードに取り込む速度が急激に落ち込んだ。

その様子に気付いた大地は焦り声を張り上げる。

「優花！ 無理すんな！」

『てめえは黙ってる！ この程度の鬼獣をいつべんに封印できねえで、これから封術師としてやってけるか！』

「なっ！ 何言ってるんだ！ 適合者が力尽きても良いのかよ！」

怒声を響かせる大地の方に顔を向ける優花は、その赤い眼の奥に強力な鬼獣の気配を感じた。それは、ここにいる鬼獣の気配とは比べものにならない程大きなモノで、一瞬にして優花の精神は打ち砕

かれた。

その為、宙を舞っていた六枚のカードは、取り込む途中だった鬼獣を解き放ち、地面に静かに落ちた。苦しうに呼吸を繰り返す優花は、両膝を地に落とし俯いたまま、静かに胸を上下に動かす。

「大丈夫か！」

駆け寄る大地が、優花の肩に右手を乗せ声を掛けた。だが、返事はない。

「おい！ 確りしろ！」

両肩に手を乗せ、激しく揺らす。すると、ようやく優花が返事を返した。

「ハア！ くう……大地。急いで、上位クラスの封術師とガーディアンを呼んできて」

「はあ？ どう言う事だ？ こんな雑魚に、上位クラスの連中を呼んだら上から大目玉喰らうぞ」

「今は、そんな冗談を言ってる場合じゃない！ 急いで！ 奴は、私達の手には負えない……」

怯えた様な目をする優花に、大地もただ事じゃないと察した。

「わかった。すぐ呼んでくる。お嬢様の事は任せるぞ」

「この命に代えても彩は護ってみせる」

その優花の言葉に僅かに頷いた大地は、急いで封術師やガーディアンが集まる施設へと走った。闇へと消えてゆく大地の姿。聞こえるのは路地を蹴る大地の靴の踵の音。その音も消え、静まり返る。



蹲る優花は、静かに立ち上がり呼吸を整える。キファードレイはそんな優花の姿を目にし、バカにした様な口調で言う。

『簡単にへばってんじゃねえよ。それでも、俺様の適合者か？』

「来る……。行くわよ……」

優花はキファードレイを構える。現在、フォルダには鬼獣の封印されたカードが無い。そもそも、優花が封術師となったのは、つい最近だ。普通なら、学園を卒業すると同時に、一枚の契約カードを渡されるが、優花はまだ渡されていない。その為、現在使える術は低級クラスのものだけだ。

果たして、低級クラスの術でどれ位持つだろうかと、考える優花だがそんな余裕はすぐになくなった。

背筋がゾクゾクとする様な声が、聞こえたのだ。辺り一体を圧迫するような殺気は、木々を激しくざわつかせ、地は僅かに震わせる。

「グフフフツ……。ここが……。水を司る最強の封術師の家か……」

声が聞こえ、空から人型の影が大木の上に降り立つ。月光を浴び、その姿が徐々にだが明らかになる。その姿はまるで人の様だが、色が無い。無色な訳じゃない。夜空と同化している為、そう見えるのだ。

『何だ！ あいつ！』

「うっ！ うっ……」

『優花！』

突然苦しみだす優花。意識が薄れ、その中でキファードレイが必死で名前を呼ぶ声だけが聞こえた。そして、その奥で謎の音が聞こえる。

「我が、赤い眼を受けし者。我が命に従い 殺せ！」

その声で完全に優花の意識は無くなった。そして、意識が戻った時、優花はその手に血に染まったキファードレイを握っていた。真っ白な壁に血飛沫が飛び散り、いたる所に血痕が残されている。優花の衣服は返り血を浴び赤く染まり、手にも顔にも血がベッタリと付いていた。

### 第三十話 最悪の過去（後書き）

ガーディアンを愛読してくださる皆さんこんばんは。作者の崎浜秀です。

最近、全く更新しない日々ばかりで、ご迷惑おかけしています。今回、ようやく第三十話を迎えました。なのに、物語の方はイマイチ発展していない。ついでに言うと、最近バトルがありません。そろそろ、大きな戦いでも書かなきゃと焦っています。

長くなりましたが、読者の皆様、これからもガーディアンと、守と彩の二人を見守ってください。

### 第三十一話 謎の少女 命土とライドフォルド

「それじゃあ！」

話の途中で守が口を割る。静かに息を吐く優花は、コーヒを口に運ぶ。

「そう。私は無意識の中で、彩の一家を殺害したのよ」

落ち着いた口調の優花は、カップを皿の上に置く。落ち着く優花に対し、戸惑いを隠せない守。何が何だかわけが分からなくなっていた。優花が彩の一家を殺害したと、言う事実だけは呑み込めた。ただ、何故そんな事をしたのか、良く分からなかった。それは、フロードスクウェアも同じで、不思議そうに聞いただす。

『無意識と言う事は、体が勝手にと言う事か？』

「そう。まるで誰かが乗り移ったみたいだつて、大地は言ってた」  
『誰かが乗り移った様？ もしや、その眼が原因か？』

何と無くあの眼に見覚えのあったフロードスクウェアは、恐る恐る問いかける。軽く頷くだけの優花は、眼を伏せる。不思議そうな表情をする守は、腕組みをして「うん」と唸り声を上げる。

そんな守を見据える優花は、静かに立ち上がった。いきなりの事にキョトンとした表情を向ける守に、愛らしい笑みを見せる優花は鞆を右手に持ち静かに答える。

「今日は、楽しかったわ。あなたとお話できて。今度会う時はお互いどうなっているかしらね」

「はい？ それって」

「そろそろ行くわ。一応、学生だから授業はきちんと受けなきゃ行けないから」

「はあ……」

「そうそう。お礼まだだったわね。昨日はありがとう。それじゃあ。またどこかで」

それだけ言うと優花はレジへと向った。その際、鞆からキファー・ドレイを取り出し、首へかけ直す。そんな優花の背中を見据える守は、軽く首を傾げると、さっきの言葉の意味を考える。“今度会う時はお互いどうなっているかしら”と、言うチョット意味深な言葉の意味を。

『おい。守』

「んっ？」

突如聞こえた声に我に返った守。その声は、首にぶら下がったフロードスクウエアのものだった。視線を落とす守は、ゆっくりとフロードスクウエアを手に取り小声で話しかける。

「何だよ。いきなり」

『何だよじゃない。時間大丈夫なのか？ 学校始まってるけど』  
「へっ？」

驚きのあまり声が裏返る。そして、慌てて立て掛けられていた時計へと目をやる。すでに時は二時間目の終わりだと告げており、守は驚き慌てて立ち上がる。苦笑するフロードスクウエアは何と無くこつなる事を予測していた。一つの事に集中すると、周りが見えなくなると言う守の癖を分かつつあったからだ。

慌ててレジへと向う守は、財布をポケットから取り出す。その際、椅子に躓き転倒する。小銭が床に散らばり、静かな店内に小銭の落

ちる音が響く。慌てて小銭を拾う守に、呆れた様に『何してんだ？』と、フロードスクウエアが呟いた。

唸り声を上げながら、守は小銭を拾い集める。そんな時、喫茶店の扉が清らかな音を立てて開かれた。小銭を拾う守は、そんな音にふと顔を上げる。

そこには、長い茶色の髪の少女が立っていた。背丈は守と同じ位だろう。真っ黒なワンピースを着ていて、表情は逆光の為見ええない。そんな茶色の髪は光を浴び金色に見え、鋭い目が守を鋭く見下す。その目を真っ直ぐに見据える守は、何か不思議なオーラを感じた。それがなんなのか、守本人にも分からないが、殺気だったものではないのは、確かだった。

「何か？」

沈黙を破る少女の声。少しばかり刺々しく見下した様な口調。

「すみません」

取り敢えず謝る守は、そのまま床に広がる小銭を手で拾う。そんな守の姿を少女が鼻で笑うのが聞こえた。それに対し、フロードスクウエアが何かを言おうとしたが、すでに守の手の中に握られ言葉を発する事は出来なかった。足音が守の横を過ぎ、席へと移動する。足音が聞こえなくなつた時、ようやく守は小銭を財布に戻し立ち上がり、会計を済ませた。

『何で、ガツンといわないんだ！』

喫茶店を出て暫くして、フロードスクウエアがそんな事を口にする。その口調から、怒っているのが良く分かった。だが、守は不思議そうな表情をしたまま、フロードスクウエアに話掛ける。

「なあ、さっきの人、どこか変じゃなかったかな？」

「はあ？ 変なのはお前の頭たる？」

「そうなんだよ。僕の頭が……って、何でそうなるんだよ」

「それが、突っ込みと言う奴か。初めて会った時以来だな」

「どうでもいいよ。昔の事は忘れようよ」

苦笑いを浮かべる守は、以前の事を思い出し深々とため息を吐いた。ため息を漏らした守に対し、半笑いを浮かべるフロードスクウエア。呆れて笑う事しか出来なかったのだ。気落ちする守とフロードスクウエアは、静かに会話もしないで学校に向った。

先程まで守達がいた喫茶店。店内は相変わらず清らかなメロディが流れ、静かなムードが漂っていた。客は守と入れ違いで入って来た少女一人。店員はその少女の方に足を進め、注文をとりに行く。

「ご注文はお決まりでしょうか？」

「それじゃあ、あなたの命でも貰おうかしら」

「へっ？」

思わず聞き返す店員に、微かに笑みを浮かべる少女は右手で店員の首を掴む。いきなりの事に驚き戸惑う店員だが、骨の碎ける音と同時に店員の体は力なく崩れる。それをカウンターで見ていた店長は、その光景に腰を抜かしその場に動けなくなっていた。静かに立ち上がった少女は、店員の体から魂を抜き取り床に放り投げる。

「不味いわね。一般の人間の魂など、この程度か……」

不満そうな表情を見せる少女は、口をモゴモゴ動かし静かに喉を

鳴らす。暫く辺りを見回す少女に、何処からともなく声がする。

『命土<sup>めいど</sup>。分かっているのか？ 俺達の仕事は』

「分かっているわよ。ライドフォルド。封術師、ガーディアン<sup>ガイアン</sup>の抹殺。サポートアームズを奪う事」

『なら、何故』

「うるさいわね。あたしにはあたしのやり方があるのよ」

めんどくさそうにそう言い退ける命土は、長い髪をたくし上げ、耳が髪の下から姿を見せる。その耳には小さな金色の水晶のついたピアスが輝いていた。

『まあ、お前なりのやり方があるなら、文句は言わないが、なるべく一人でいる所を狙え。封術師とガーディアンが一緒にいると厄介だからな』

「あたしは、そんなの関係ないわ。一人でも二人でも」

『そんな事を言っていると、すぐに消されるぞ』

「ライドフォルド。あんたあたしに消されたいわけ？」

ムスツとした表情を見せる命土は、静かに喫茶店を後にする。もちろん、店長もその他の店員も皆魂を命土に食われて亡骸となっていた。この事はすぐにニュースになり、全国へと報道された。

“首の骨を砕かれた遺体複数”と、言う言葉と一緒に。



## 第三十二話 静かで平和な昼休み

三時間目が始まる前。教室にのんびりと守が姿を現した。休み時間の為、生徒達は皆騒ぎあっている。その間を通り抜ける守は、自分の席に着くと大きな欠伸をして机に伏せた。急な眠気に襲われたのだ。頭の中がポーツとして、顔を伏せるとすぐに意識が遠くなくなった。

そんな守の方を見据える彩は、深いため息を吐き俯く。昨夜、結局あの後にも一言も話す事が出来なかった。守も何も聞かなかつたし、彩としては複雑だった。その為、ため息が自然と漏れた。

「はあ〜っ……………」

「どうした、どうした。ため息なんてらしくないぞ」

「智夏……………」

ニコやかな笑みを浮かべ声を掛ける智夏に、沈んだ声で返事を返す。その声に、不満そうな表情を見せる智夏は、彩の頭を両手でクシャクシャにする。

「キヤツ！ な、なにをするのー！」

「うるさい！ ウジウジ悩むな！」

「な、悩んでなんか無いよ！」

頬を膨らして否定する彩に対し、隣の席でニヤニヤと笑みを浮かべる真弓が話しに乱入する。

「フフフッ。いとしの彼がすぐ寝ちゃったから寂しいんでしょ？」

「ち、違うもん！」

「ソツ？ いとしの彼って……………あれの事？」

腕組みをする智夏が、チラリと目線と守の方へと向ける。すると真弓は「そうそう」と、嬉しそうに笑みを浮かべながら頷く。慌てて否定する彩だが、その慌てっぷりが更に怪しかった。それを見て笑う真弓と智夏。可笑しくてたまらなかった。

ムスツと頬を膨らましソツポを向く。苦しそうに腹を押さえる真弓は、目に涙を浮かべながら彩に声を掛ける。

「ごめんごめん……。しかし、あんたはからかいがあるわね」「フンッだ！」

「あゝあ。怒らせちゃったよ」

智夏が笑いながら真弓の肩を叩く。まるで、真弓が悪いと言っている。

「ちょ、ちょっと！ 私が悪いみたいにしなさいよ」

「いや。実際、真弓が悪いでしょ？」

「って、あんたねえ……」

真弓が額に青筋を立てる。そんな中、のんびりとした口調の望美が、のんびりとした足取りで二人の前にやってきた。のんびりと笑みを浮かべ、明るい声で聞く。

「どうかした？ 青筋なんか立てて」

「望美くっ。聞いてよ。智夏の奴が、彩を怒らせたのは私だって言うのよ」

望美に泣き付く真弓に、智夏は「あつ！ 卑怯だぞ！ 望美を引き込むなんて！」と、叫ぶ。完全に話は違う方向へと流されていつている。その為、呆れた様な表情を見せる彩は、ため息を吐き目を

細めた。

何故か二人に巻き込まれた望美は、笑みを浮かべたまま真弓と智夏顔を交互に見る。何の話をしているのか、まだ分かっていない様だった。

「ど、どうしたの？ 二人とも。喧嘩はよくないよ」

「喧嘩じゃないよ。一方的に智夏が」

「ちょ！ 真弓！」

「きゃっっ」

「あんだ、そんなキャラじゃないだろ！」

智夏の鋭い突っ込みに、望美が「そうだね」と、のんびりと吹き軽く笑う。それが、恥ずかしかつたのか、真弓は急に赤面し「うるさい！」と、叫んだ。もちろん、彩と智夏は「あんだがうるさいよ」と、ツッコミを入れた。

静かに笑う望美に、真弓は「笑うな」と耳まで赤くして叫ぶ。

その後、三人は真弓をバカにする様に笑った。

時間はアツという間に過ぎ、昼休み。

今日は彩一人教室に残っていた。いつもなら、守と屋上で昼食を食べるが、今日は流石に一緒には。複雑の心境のまま、彩は机に顔を伏せる。空腹で頭がおかしくなりそうだった。今朝はご飯を食べ損ね、昼はお金が無い。その為、只今飢え死にしそうだった。

「うっっ。お腹が」

『確りしてください！ 彩様』

「……駄目。もう……限界」

目の前がグルグルと回り、思考回路がどうかかなりそうだった。そ

んな時だ。彩の頭にビニール袋に入ったパンがぶつけられたのは。だが、その中にはパックの牛乳も入っており、その角が彩の米神に直撃したのだった。

「いったーい！ 誰よ！ 一体！」

顔を上げた彩の前にいたのは、牛乳をストローで飲む守だった。目が虚ろで、物凄く眠そう。そんな守は、軽く欠伸をすると、眠そうな声で言う。

「水島の方。屋上で待ってたけど、来ないから届けにきた」

「あ…ありがとう」

「んじゃま、誰か来る前に立ち去ります。あつ、それから、さっきのは面白かった」

守はそれだけ言い残すと、フラフラと教室を出て行った。米神を押さえる彩は、守の言った“さっきのは面白かった”と、言う言葉に疑問を抱きつつ、少し胸をときめかせていた。こんなに、守が力ツコよく見えたのは、多分初めてだ。

何と無く嬉しくて、笑みを零す彩はビニール袋の中からパンを取り出す。クリームパンと蒸しパンが一つずつ入っていた。お腹が空いていた彩は早速クリームパンを袋から出す。

そして、被り付こうとしたその刹那、背後から視線を感じ恐る恐る振り返る。すると、教室の後ろの戸の方から真弓、智夏、望美の三人が入ってくる。一部始終を見ていたのだろう。真弓と智夏は不適に笑みを浮かべ、望美はいつもと変らぬ笑みを浮かべていた。

「見たわよ。優しい彼ね。購買所で一番人気のフワフワ蒸しパンを買ってくるなんて」

「全くだ。昼間っから熱いね」

「ち、違っつてば！ そんなんじゃないんだって！」  
「フフフツ。そんな言い訳……言っていいわけ？」

冷たい風が吹き抜ける。面白くも何とも無いギャグに、彩も智夏も啞然とするしかなかった。望美はニコニコと笑っていて、あんまり真弓の言ったギャグの意味を分かっていない様だ。意外だが真弓はこう言っつまらないギャグが好きで、時々こう言っ風に辺りを寒がらせている。

「そのくだらないギャグとか止めるよな」

「くだらなく無いわよ！ 面白いじゃない！」

「いや……。全く笑えない」

「智夏の言っ通りだよ」

呆れた様にそう言っ彩は、苦笑し首を左右に振る。その態度に真弓が目を細め顔を近づけてきた。あまりの迫力に仰け反る彩は、「な、なに？」と恐る恐る聞く。ニヤツと笑みを浮かべる真弓は、彩の胸を右手の人差し指で突き言っ。

「話を逸らそうったつて、そうは行かないわよ。フフフフツ」

「フフフフツじゃない！ つて、そもそも話を逸らそう何てしてないし！」

「まあまあ、お代官様。そう言わずに」

「誰が、お代官様じゃ！ つてか、そのお代官様の意味は何だ！」

大騒ぎをする彩。茶化す真弓。そして、それを見て笑っ望美と智夏。

平和で静かな昼休み。こんな風に皆と笑える事が、彩にとっては嬉しかった。この時が、ずっとずっと続けばいいと、心のどこかで願っていた。だが、そんな時間も長くは続かないと、この時の彩は

知る由も無かった。

### 第三十三話 屋上での一時

静かな昼休み。屋上では守が昼寝をしていた。腹の上に置かれたフロードスクウェアは、守が呼吸する度に上下に動いている。彩にパンを渡した後、守はずっとここで眠っているのだ。ぼんやりと大きな青空を見据えるフロードスクウェアは、黙って辺りの気配を探る。

ウインクロード、グラツトリバー、キファードレイ。それぞれのサポートアームズの気配の中に、時々違うサポートアームズの力を感じた。だが、それが何処からなのかははっきりと分からない。ただ、その力の強大さだけは分かった。そして、絶対に守をそいつに近づける訳には行かないと、思った。

そんな時、大きな鐘の音が響いた。腹の底まで響く様なその音に寝ていた守も飛び起きる。その反動で、フロードスクウェアが床に転がった。

『いって〜！ 何しやがる』

「い、ごめん！」

目覚めたばかりの守は、床に転がるフロードスクウェアを右手に取り謝る。まだ眠そうな表情をする守は、フロードスクウェアを首に掛け立ち上がった。まだ眠り足りないのか、立ち上がると同時にふらつき倒れそうになる。

『オイオイ。大丈夫か？』

「何とか……」

『何とかじゃないだろ。こんな状態で、鬼獣とか来たらどうするんだ？』

「ん〜っ。まあ、何とかなるよ……きつと」

半笑いの守に、『大丈夫かよ』と呟くフロードスクウェアは、心配そうにため息を漏らす。フロードスクウェアの心配を他所に、大きな欠伸をする守は屋上から立ち去ろうとした。その瞬間、屋上の扉が開かれ、守はその開かれた扉に額をぶつけた。

「はうつっ！」

「あっ」

ゴンツと言う音の後に、守の声と一緒にそんな声が聞こえた。蹲り額を押さえ苦しむ守に、扉の向こうにいた人が優しく声を掛ける。

「大丈夫ですか？」

「うつっ……。もう駄目です」

顔を上げる事無くそう答えた守だが、ふとその声に聞き覚えがあり顔を上げる。そして、守の目に一人の少女の顔が映し出された。それは、守の憧れの皆川 奈菜の顔だ。一瞬で頭の中が真っ白になり、胸がざわめき鼓動を早める。

あまりの衝撃的な事に、守の思考は完全に停止。ついでに意識も停止した。その為、体が後方へと静かに倒れていく。

「エッ！ だ、大丈夫ですか！」

いきなり倒れた守に驚きを隠せない奈菜が、慌てて守の体を起す。だが、それは逆効果だった。憧れの奈菜の急接近に、視界は狭まり遂には真っ暗になった。

暫くし、守は意識を取り戻した。傍には奈菜が座っていて、守が目を覚ますと嬉しそうに微笑んでみせる。



「目が覚めました？」  
「ッ！」

驚きのあまり飛び起きた守は、すぐに奈菜との距離をとる。そのままの距離だと、また思考回路が停止してしまう可能性があったからだ。脈が速い。完全に動揺していると、自分で分かるほどだ。キョトンとした表情をする奈菜は、軽く首を傾げ、右手を可愛く顎に添える。その行動が守の胸を貫き、意識を失いそうになった。だが、それを必死に堪え意識を保つ。

「な、ど、どうしたんですか？ もう昼休み終わりですよ」

「うん。そうだね」

「授業が始まりますよ？」

「大丈夫！ 一時間位サボったって」

ニコツと笑みを浮かべる。その愛らしい笑みが、本当に可愛く守は見とれてしまった。だが、すぐに我に返り言う。

「いや。駄目だよ！」

「でも……。次の授業自習だから……」

「自習でも授業は授業だよ」

「火野君って、結構真面目なんだね。あんまり学校で見かけないから、てつきりサボってるんだと思ってた」

その言葉に守はショックを受けていた。まさか、奈菜にそんな風に思われていたなんて、思っても無かったからだ。落ち込む守は、両肩を落としたドンよりとした空気を振りまいていた。それに気付く気配の無い奈菜は、笑顔を振りまき楽しそうに言う。

「火野君はどう思った？ 私って、真面目で何でも出来る様に見

えるかな？」

「エッ？ そ、そりやまあ……。と、言うより実際なんでも出来るわけですから」

「ううん。そんな事ないよ」

首を左右に振る奈菜は、小さくため息を吐く。そのため息に気付いたのはフロードスクウェアだけだった。いつもの守なら、すぐに気付くだろうが、すでに守に冷静さなど無い。その為、奈菜の小さなため息にすら気付かなかった。

「私にだって、苦手な事は沢山ある。人には言えない秘密だってある。何でも出来る完璧な人なんて存在しないんだよ」

「ううん。でも……」

そこで守は言葉を止め振り返る。それに攀られ奈菜も振り返った。二人の背後には一人の教師が立っている。キツチリとした服装に整った髪の子。不適に笑うその男は、社会科の教師大沢 信夫だった。大沢は生徒指導も担当していて、生徒から大分嫌われている先生だ。

「授業が始まると言うのに、こんな所で何をしている？」

「別に……ただ話しているだけですよ」

穏やかに返事を返す守は、両腕を広げバカにした様に首を振る。

正直、守も大沢は嫌いだった。何かと守に突っかかってくるからだ。呆れた表情を見せる大沢は、守と奈菜の顔を順に見ると、いやらしい笑みを浮かべる。その笑みに守は背筋をゾツとさせ、軽く身震いした。

「そんな事を言って、本当は不純行為でもしようとしてたんじゃないのか？」

「へっつ。それじゃあ、先生にとって屋上は不純行為をする所なんですか？」

ゆっくりと立ち上がる守は、大沢の方に体を向け軽く笑みを浮かべる。心配そうに守の顔を見据える奈菜は、立ち上がると守を止め様とした。だが、それより早く大沢が言葉を発した。

「フツ。口だけは達者だな」

「いえいえ。先生程じゃないですよ」

笑みを浮かべる守は真っ直ぐに大沢の目を見据える。僅かに大沢の目元が震え、額に青筋が浮き出ていた。完全に怒っている様だ。だが、奈菜の顔をチラツと見て、その怒りをかみ殺し口を開く。

「皆川。君は教室に戻れ。もうすぐ授業が始まる」

「あつ、はい。で、でも、火野君は……」

「こいつには話がある。大体、君の様な優秀な生徒が、こんな出来損ないと……」

そんな事をばやく大沢に、反論しようとした奈菜を守が止めた。そして、耳元で囁いた。

「大丈夫。俺の事は心配ないって」

「でも……」

「さあ」

ポンと奈菜の背中を押す。そのままトントンと歩いて行く奈菜は、心配そうに守の方に目をやるが、守はニコニコと笑みを浮かべ軽く右手を振って奈菜を見送った。守としては、もっと長く奈菜と一緒にいたかったので、見送るのは辛かった。だが、これもしょうがな

いと諦めたのだ。

奈菜が大沢の横を通り過ぎ、屋上を去っていった。大沢は、階段を下りていく奈菜が見えなくなるのを確認すると、扉を閉じ静かに守の方に目をやる。落ち着いた様子の守は、笑みを消し真剣な表情へと変る。

「俺に話ってなんですか？」

「調子に乗っている様だな。火野」

「そうですか？ 先生こそ、少し凶に乗りすぎじゃないですか？」

微動だにしない守のその言葉に、怒りを表面化に表す大沢は、ネクタイを緩め歪んだ笑みを見せる。その瞬間、フロードスクウェアが、殺気と共に鬼獣の気配を感じた。その為思わずフロードスクウェアは声を出す。

『守！ 鬼獣の気配だ！』

「なっ！」

驚きを見せる守は、目付きを変える。

### 第三十四話 ガーディアンを辞める！？

殺気を漂わせる大沢は、不適に笑みを浮かべると、両手を広げる。すると、大沢の体を真つ黒なオーラが覆いこみ、体が徐々に変化していく。胸板が厚くなり服が裂け、肩幅も腕周りも十倍近くも大きく大きくなっていった。そして、下半身も強化され、足は床を砕き、脛も太股も筋肉で強化されていた。

「私をバカにした事を後悔するんだな。火野」

大沢の声とは思えない程濁った声。変わり果てた姿。もうこれを見て大沢と分かる奴はいないだろう。そんな大沢の姿に、悲しげな表情を見せる守に、フロードスクウェアは静かに尋ねる。

『どうする？ 戦うのか？』

「……………」

その問いに守の返事はない。ただ俯き下唇を噛み締めていた。何と無くだが、フロードスクウェアには守の気持ちを読み取れた。だが、強気な姿勢でフロードスクウェアは言い放つ。

『お前はガーディアンだ。確りしろ。他の人達に被害が出る前に、奴を始末するぞ！』

「なあ…………。大沢が、鬼獣なのか？ それとも、鬼獣に操られてるだけなのか？」

『それは…………』

何か言い難そうなフロードスクウェアの代わりに、大沢の背後から答えが返ってくる。

「前者が正解だ。こいつは既に鬼獣と化した」  
「誰だ！」

大沢が振り返ると同時に、その首に鋭い牙の様なモノが触れ、大沢の首を刎ねた。一瞬の事だった。大沢の頭が跳び、その切り口から血が飛び散り、体は静かに崩れ落ちる。そして、その崩れ落ちた大沢の体の向こう側には、右手に具現化されたグラットリバーを武装した大地の姿だった。

堂々として、冷酷な眼差しを向ける大地と守の視線がぶつかる。睨み合う二人の間に不穏な空気が流れる。だが、フロードスクウェアとグラットリバーにはどうする事も出来なかった。

「何故……何故、殺した」

「鬼獣を倒すのは、ガーディアンとして当たり前的事だろ？」

「くっ！ 大沢先生はどうなるんだ！」

怒声を響かせる守に対し、冷たい視線を送る大地はバカにした様に言い放つ。

「既に、鬼獣に魂を食い尽くされて、人間じゃねえよそいつは」

「だからって！」

「うぜえな……」

「なんだと！」

いつに無く感情的になる守。そんな守に力強い声で大地は言う。

「うるせえってんだよ！ 所詮、お前はガーディアンじゃねえんだ！ 邪魔するなら、今ここで排除する！」

『やめておけ。こんな奴如きに本気になるな』

グラツトリバーの声に大地も我に返り、具現化を解く。そして、守に背を向け歩き出す。その背中を見据える守は、拳を震わせ奥歯を噛み締める。

静かに屋上を後にした大地は、階段をゆっくりと下る。

『少し言い過ぎじゃないか？』

「うるせえ。あれ位で駄目になる様なら、今すぐにガーディアンを辞めてもらう。命を落とす前にな」

ため息交じりにそう呟いた大地は、少し悲しそうな瞳で空を見上げた。呆れた様な笑いをするグラツトリバーは、『だったら、直接そう言えよ』と呟く。軽く首を振る大地は「俺が、そんな事言うガラに見えるか？」と半笑いで答えた。

屋上に残された守は、フェンスに凭れ掛かり空を見上げる。何の為にガーディアンになったのかと、考えていた。そして、暫く考えた後に、全てが嫌になり守は呟く。

「もう……辞めよう……考えるのも……戦うのも……」

『なっ！ 何言ってるんだ！』

驚き戸惑うフロードスクウェアの声に、守は目を伏せ僅かに笑みを浮かべてため息を吐く。そして、微かに首を振り答える。

「俺、何の力も無いのに、誰かを守るなんて……」

『何弱気になってんだ！ お前には俺がいるだろうが！』

「お前が凄くても、俺は何にも出来ない。ガーディアンとしての戦い方も、何も分からない」

『それじゃあ、彩はどうなるんだ？ お前、彩のガーディアンになるんじゃないのか？』

真剣な口ぶりのフロードスクウェアに、守はため息を漏らす。確かに、最初は彩を一人で鬼獣と戦わせると危ないと思い、ガーディアンになった。だが、守にはガーディアンとしての知識が無さ過ぎる。元々、ただの高校生だったのだから。

それに、ガーディアンは沢山いる。別に自分がやらなくても、他に強い人がきつと彩のガーディアンをやってくれるだろう。そう言う思いが守の中にはあった。その為、弱気な口調でフロードスクウェアに言う。

「悪い……。やっぱり、俺には出来ないよ。フロードスクウェアを手に入れたのだから、たまたま。元々、俺なんかが手に入れて良い物じゃなかったんだよ」

『お前……本気で言ってるのか？』

「ああ。だから、俺とお前のコンビも解散だ」

『ふざけんな！ 俺にはお前が必要だ！ お前以外の人間に使われるつもりは無い！』

必死に怒鳴るフロードスクウェアだが、既に守の心は決まっており、揺るぐ事は無かった。静かに首に掛けられたフロードスクウェアを取り、ゆっくり床に置く。そして、微かに笑みを浮かべ、歩き出す守にフロードスクウェアは叫ぶ。

『お前は、それでいいのか！ 彩にはお前が必要なんだぞ！』  
「……………」

返事をしないで足を進める守。そんな守にもう一度叫ぶ。



『お前の目の前で、誰かが傷付いてもいいのか？ また、彩や他の人達が鬼獣に襲われてもいいのか！』

その言葉に足を止める。そして、両拳を小刻みに震わし、静かに振り返る。

「誰かが鬼獣に襲われて、傷付くのなんて、俺だって見たくない。でも……俺には、誰かを守る事なんて出来ない。そんな力……俺には無いんだから」

『なら、力をつければいい。強くなればいい。お前が誰も傷付けさせない様に。お前も俺もまだまだ強くなる。だから……』

フロードスクウェアがそこまで言った時、スピーカーから緊急アナウンスのお知らせをする音が聞こえた。そして、その後に男の声がある。優しそうな男の声が。

只今より、ゲームを始めたいと思います

その放送に学園内は騒然となる。特に職員室は、「誰が、こんな放送をしているんだ！」と、大騒ぎになっていた。その他の教室でも、生徒達はザワメキ、「一体何をするんだらう？」と、疑問を抱くものもいた。

それでは、早速ゲームについての説明をしたいと思います。尚、一度しか説明しないので、聞き逃さぬ様心がけてください。万が一聞き逃すと、死ぬ恐れがありますので

その言葉に、更に学園内が騒然となった。この言葉が本当の事なのか、ハタマタ嘘なのか。一人一人の声が合わさり大きな音へと変わり、放送の音が届かなくなる。その為、次の放送を聞いたのは、ほ

んの一部の者のみだった。

この学園のある三箇所特殊な爆弾を仕掛けてあります。爆発までは後三時間。それまでに、この学園にいる私と、私の忠実なる下部を探し出してください。尚、このゲームに参加できる者は……恐らく、自分達自身が良く分かると思いますが。それと、何の力も持たない弱者共は、命を落としかねませんので、教室を出ない事をお勧めします

ここで放送は終わった。もちろん、この放送が終わった途端、教室内では騒ぎがおきた。教室を出ようと暴れる者。それを止め様とする者。恐怖に震える者。人それぞれだが、このゲームの趣旨を理解した者達は、一体誰がこのゲームの参加者なのかと、疑いの眼差しを向けていた。

### 第三十四話 ガーディアンを辞める！？（後書き）

お久し振りです。読者の皆さん。ガーディアンをご愛読ありがとうございます。  
うございます。

感想なども頂き、本当に嬉しいです。これからも、よろしく願  
いします。

### 第三十五話 行動開始

放送が終わり、各々が動き出す。

屋上から教室に戻る途中の大地と、図書室から教室に戻る最中の優花。二人はすぐに鬼獣の仕業だと気付き、行動を開始する。

三階コンピュータ室横の階段にいた大地は、急ぎ一階へと走り出す。理由は一つ。放送室へと行く為だ。校内放送が行えるのは放送室と職員室のみ。教師が沢山いる中で、放送を行うわけではない。だから、放送室に奴がいると読んだのだ。

階段を二段飛ばしで降りる大地は、奥歯を噛み締める。

「くそっ！ こんな事なら、さっさと奴を殺しておくべきだった！」

『焦るな。まだ、三時間ある』

「まだじゃねえ。三時間しかないんだ。急がねえと……」

『焦れば焦るほど、相手の思う壺だ』

冷静なグラットリバーの言葉に、大地は小さく舌打ちをして、「そんな事分かってる！」と怒鳴った。

一方、図書室の前にいる優花は落ち着きゆっくりとその脇にある階段を下りる。鬼獣の目的はなんなのかと、考えていた。わざわざ、爆弾を仕掛けたのは何故か、考えていたのだ。こんな手の込んだ事をして、鬼獣に何のメリットがあるのかと、不思議だった。

「鬼獣の目的……」

『ああ？ 鬼獣の目的？』

胸元で揺れるキファードレイが口を挟む。

『そんなもん決まってるだろ？ 人間達を喰らう事だろ？』

「本当に、それだけ？」

『なんだ？ 他にどんな理由があるってんだ？』

不思議そうに尋ねるキファードレイに、渋い表情を浮かべる優花は、静かに口を開く。

「封術師とガーディアン抹殺とか……」

一瞬その場が凍りつく。そして、キファードレイが笑いながら答えた。

『それはねえ。奴らにとつて、封術師とガーディアンは天敵だ。そんな奴らに自ら手を出すはずねえ』

「そうかしら？ 私が鬼獣だったら、邪魔な者から消していくけど？」

サラッと恐ろしい事を口にする優花に、言葉も出ないキファードレイは、黙り込んでしまった。

時を同じくして、屋上。

床に置かれたフロードスクウェアと守が向かい合っていた。風が優しく吹き、守のボサボサの髪を揺らす。目を伏せる守は、俯き動かない。フロードスクウェアは、そんな守に問う。『どうする……』と。

奥歯を噛み締め、拳を震わせる守。フロードスクウェアの言葉の重さをその身に感じていた。だが、どうしても身体は動かない。

『どうした？』

「俺が行って、何になる。どうせ、足を引つ張るだけだろ？ なら、あの二人に任せておけば」

『ふざけんな！ お前はいつから、そんなに腑抜けになった！ いつから、そんなに弱い人間になったんだよ！』

胸に突き刺さるフロードスクウェアの言葉。そんなフロードスクウェアに、守は笑顔で答える。

「俺は、元から弱い人間だよ。何の力も無い弱い人間……」

『だったら何だよ。初めから強い奴なんていない。それに、俺達は、最低最弱コンビだろ？ 強くなるのはこれからだ。それに、奴らにバカにされたまま、引き下がれるか！』

「……結局、バカにされたのが気に食わないだけ？」

妙に落ち着いた口調でそう呟く守は、静かにフロードスクウェアの前に歩み寄り、右手でフロードスクウェアを拾う。そして、首に掛け直し静かに息を吐き、静かに答える。

「わりい。何だか、ブルーになってた。でも、何だか吹っ切れたよ。そうだよな。俺らは、最低最弱コンビだもんな。今出来る事を全力でやるっ！」

『ああ。それでこそ俺のパートナーだ！』

笑みを浮かべる守は、静かに屋上を後にする。

一階購買所隣りの階段を降りてきた大地は、足を止め廊下の奥を見据える。その目の先には放送室が見えるが、そう易々とここを突っ切る事は出来ない。なぜなら、大地のすぐ手前には校長室、その

隣りは職員室となっており、保健室、放送室と繋がる。その為、大地の所から放送室に行く為には、職員室の前を通らなければならぬと言ふ事になる。

「くっ……。面倒な造りの学校だな」

『いや……。普通じゃねえか？ これ位』

「普通じゃねえ！ 可笑しいだろ！」

グラットリバーに怒鳴る大地。何故、キレているのか分からず、苦笑いするグラットリバーに、大地は腕組みをして言い放つ。

「どうしたらいい？」

『何が？』

「何がじゃねえ。ここをどうしたらいい？」

『普通に行けばいいだろ？』

そう答えたグラットリバーだが、大地は呆れた様に首を左右に振った。妙にムカつくこの行動に、グラットリバーは微かに怒りを感じた。

ため息を漏らす大地は、身を屈め慎重に廊下を進みだす。職員室にいる先生達に気付かれぬ様、静かにゆっくりと。もちろん、声も出してはいない。そんな大地を見守るグラットリバーだが、何かの殺気を感じ叫ぶ。

『大地！ かわせ！』

「！」

グラットリバーの声で顔を上げた大地の前に、鋭い刃が振り下ろされた。咄嗟に右に身体を転がし、刃をかわす大地はそのまま中庭へと転げていった。静かに身体を起す大地は、グラットリバーを具

現化し廊下を見据える。

「見事な身のこなしです」

男の声がしたと思ったその刹那、頭上から剣を持った男が振ってくる。大地は奥歯を噛み締め飛び退く。だが、振り下ろされた刃は長く、大地に向って勢い良く降りる。

「チツ！」

甲高い金属音が響く。振り下ろされた刃は、大地の右腕に受け止められていた。大地は目の前にいる男を真っ直ぐに睨み、剣を弾く。体勢が崩れ、男は二・三步後退する。大地は目付きを変え低い声で言い放つ。

「誰だてめえ」

「私は人影とかげの分身。と、言っても私の力は本物です。手を抜いていると……死にますよ」

不適に笑みを浮かべそう言う男に、大地は冷や汗を掻く。妙な威圧感を全身に感じていたからだ。それに、全く気配も感じなかった。右手のグラットリバーも、妙な感じに静かに口を開く。

『気をつけるよ。こいつ、全く読めない』

「ああ。分かっている。でも、ここじゃあ目立つ」

「大丈夫ですよ。殆どの生徒・教師には眠ってもらってます」

剣を軽く振る男が、二人の会話に入ってきて来た。大地はその男の言葉に目を細める。



「どつ言つ事だ」

「何がですか？」

「この生徒と先生に眠ってもらっているって事だ」

「ああ、その事ですか」

のん気な口調の男は、ニコツと笑みを浮かべると静かに答える。

「購買・食堂の料理に睡眠薬を投与させて頂きました。あなた方にとつても、私達にとつても戦闘を見られるのは、実に不愉快でしょうから」

笑みを浮かべる男に、大地は右手を引く。それと同時に、男も剣を下段に構え左足を引く。

「行きますよ」

「行くぞ！」

二人が同時に言葉を発し走り出す。二人の距離が縮まり、大地が右手のグラットリバーを振り抜く。二つに分かれた牙が、男に向つて飛び出す。だが、男は微かに笑みを向け剣を振り下ろした。二つの牙の間を叩かれ、地に落ちる。

『くつ！ 大地！』

「分かつてる！」

地に落ちたグラットリバーを引き、右手に戻す。しかし、それより先に男の剣が大地へと突き出された。ズブツと鈍い音が聞こえ、鮮血が宙に舞う。

### 第三十六話 鬼獣の目的

血が地面に落ちる。

腹部に突き刺さる鋭い刃は背中から突き出て、その切っ先からは血が滴れる。

右頬を僅かに掠めた剣は、力なく男の手の中から落ちた。

「貴様……」

「油断してたのはお前の方だな」

右手に戻ったグラットリバーの刃が短音を鳴らせ、男の腹部から抜かれた。血が飛び散り男の体が後方へとよろめいて行く。

右頬に僅かに血を滲ませる大地は、立ち上がりグラットリバーの具現化を解く。

「まったく、危なかったぜ」

『頬斬られてるけどな』

「うっせえ。掠めただけだ」

『まあ、そう言う事しておくよ』

大地とグラットリバーの足元に横たえる男の体は消滅する。元々、人影の分身だった為、消えたと思われる。鼻から息を吐く大地は、男が消えると頬の血を左手で拭い中庭を後にし、職員室前へとやってきた。

これから、どうするかを考える。多分、放送室には誰もいない。さっきの男は人影本体を放送室から逃がす為の時間稼ぎだろう。だが、念の為にと大地は放送室へと足を運んだ。やはり、誰もいなかった。

「いるわけ無いよな……」  
『それで、どうするんだ？』  
「どうするって……」

ため息混じりにそう呟いた大地は、腕組みをして右手の人差し指で右の眉毛を掻く。どうもこころも無いだろうと、思っていた。正直、放送室以外に敵のいる場所なんて分からなかった。欠伸をするグラツトリバーは、眠そうな声で大地に問い掛ける。

『なあ、ジツとしててもしょうがないだろ？ 優花と合流した方がいいんじゃないか？』  
「ふっつ。そうだな……。取り敢えず優花を探すか……」  
「その必要は無いわ」  
「へっ？」

変な声を上げると同時に大地は振り返る。落ち着いた様子で大地を見据える優花の姿を目視する大地は、半笑いを浮かべ、右目を細めた。呆れたと言っか、正直ビックリした。気配も足音も無く背後に現れたのだ、驚くほかにないがあるだろうか。  
そんな大地を見据える優花は、軽く首を傾げると不思議そうな表情をする。すると、大地は目を逸らし焦り口を開く。

「こ、これから、どうする？」  
「手分けして本体を探す」  
『オイオイ……。本体を探すって、簡単に言うけど、結構大変だぜ？』

驚いた声のグラツトリバーに対し、いつもと変らぬ口調で優花は答える。

「他に何か良い方法があるかしら？」  
『それは……』

返す言葉も無い。その為、グラットリバーは黙り込んでしまった。呆れて引き攣った笑みを見せる大地は、ため息を漏らす。流星に優花の言った方法以外に良い方法も思い浮かばず、大地はそれに従う事にした。

「それで、俺は何処を探したら良い？」

『下水でも探したらどうだ？』

「キフアードレイ……。ふざけてる場合じゃねえだろ？」

呆れた様な口振りの大地に、キフアードレイは『チッ』と、小さな舌打ちをする。その声が聞こえた優花だが、気にする事無く大地の方に目を向けた。その時、初めて気付く。大地の右頬から血が出ている事に。

だが、大地が何も言っていない為、優花はその傷について何も聞くつもりは無かった。その為、話を進める。

「それじゃあ。校舎はあなたに任せる。私は外の施設を回ってくるから。それから、彩の事……」

「分かっている。なるだけ、彩の方に鬼獣は行かせない様にするって」

「そう……。それじゃあ、お願いね」

「ああ。優花も気をつけるよ」

優花は中庭を突っ切って向こう側の校舎から外へと出て行った。そんな優花の後姿を見送った大地は、暫し悲しそうな表情を浮かべ、深いため息を漏らす。右腕のグラットリバーはその大きなため息に、怪訝そうな声で尋ねた。

『何だ？　ため息なんて』

『うるせえな。俺だつてため息の一つ位吐きたい時があるさ』

『ふ〜ん。まあ、別にどうでもいいけどな』

全く興味が無さそうにそう呟くグラツトリバーに、苦笑いを浮かべる大地は、取り敢えず一階を探索する事にした。

屋上から三階へと降りてきた守は、静まり返った廊下にふと首を傾げる。あんな放送があつた後なのに、誰一人騒ぐ者がいないのは不自然だと思つたのだ。腕を組み難しい表情をする守を、フロードスクウェアは不思議そうに見ていた。何をそんなに考え込んでいるのだろうと、疑問を思い浮かべるフロードスクウェアだが、それを口にはしなかつた。

そして、只今守の頭の中には色々な事が駆け巡っていた。

“鬼獣の目的” “校内放送” “静かな校内” “校内に仕掛けられた爆弾”

この四つの言葉が守の頭の中でグルグルと回る。

何故、校内放送を使つたのか？　本当に校内に爆弾が仕掛けられているのか？　もし、そうだとしたら、何故それをワザワザ封術師やガーディアンに教える様な事をするのか？

様々な疑問を自分なりに解き明かしていく守は、一つの答えを導く。

「なあ、フロードスクウェア」

突然の呼びかけに、フロードスクウェアの返事が遅れる。

『ンツ？　何だ突然』

「俺、思つただけで、これって、陽動じゃないか？」

『陽動？』

不思議そうにそう呟くフロードスクウェア。何を根拠にそんな事を言うのか分からなかったからだ。

『何を根拠にそんな事を言うんだ？』

ストレートにそう問うフロードスクウェアに、守は少し困った表情を見せ答える。

「根拠は無いです。でも、今回のやり方は何だか変だと思って……」  
『お前……。はっきりと言いな……。』

「でも、変でしょ？ ワザワザ、校内放送を使ってまで、爆弾を仕掛けたので、俺を倒しに來いだなんて……普通、言います？」

妙な喋りの守に圧倒されるフロードスクウェアは、『そ、それもそうだな』と、返事をした。その返事を聞くなり、守は更に言葉を続ける。

「そもそも、校内放送を使う意味が分からない。それに、爆弾を仕掛けたって放送するのも可笑しいです！」

『まあ、興奮するな。俺が思うに今回の鬼獣は、挑戦的だって事でいいんじゃないのか？』

「違いますよ。挑戦的な鬼獣だったら、自ら姿を表すはずですよ。それに、わざわざ爆弾を仕掛けたなんて放送しないで、爆発を起して俺達を挑発する方が有効的じゃないですか？」

何と無く説得力のある守の言葉に、フロードスクウェアも少し納得した。以前あった、デパート爆破事件の様に、突然爆発を起した方が、封術師もガーディアンも焦るはず。そう考えると、守の考え

も強ちハズレではないのかもしれないと、フロードスクウェアは思った。

だが、その考えを否定する様な言葉が、階段の下から聞こえてきた。

「面白い考えだが、それは違うぜ」

その声に戻り返った守は階段を上がってくる大地と目が合った。そして、守の第一声は、「大丈夫ですか？」だった。切れた右頬から大分血が流れていたからだ。

大地もその事に気付いたのか、左手で血を拭い何事も無かったかのような表情を見せる。実際、傷はそんなに深いものではなかった。だが、血が次々と溢れている為、痛々しく見えるのだ。

「それって……」

『襲われてちよつとな』

「まあ、気にするな。これ位なら、全く問題は無い」

当然と言わんばかりに強気な口調の大地に、グラットリバーは『強がってんじゃねえよ』と、小さな声で呟く。誰もその声を聞き取る事は出来ず、話は進む。

『それより、さっきのはどういう意味だ？』

「さっきの？ ああ……お前らの考えが間違っているって奴か」

『そうだ。否定するからには、何か考えがあるんだろうな？』

やけに食って掛かるフロードスクウェアに、困った表情を見せる守は、優しくフロードスクウェアに言う。

「まあまあ。落ち着いて落ち着いて」

『なっ！ 落ち着いてじゃねえだろ！ お前の考えを否定されてるんだぞ！』

「いや……。別にいいんじゃないかな？ 何の根拠も無かったんだし」

その声はフロードスクウェアには聞こえておらず、『ああ？ 何か言ったか？』と、フロードスクウェアは聞いた。半笑いを浮かべる守は「何も言っていないよ」と、答えて軽くため息を漏らした。



### 第三十七話 襲われた教室

三階で揉める二人。正確に言えば、揉めているのはフロードスクウェアと大地だ。

フロードスクウェアを宥める守は、苦笑いを浮かべながら大地の方を見る。ムスツとした表情の大地は、腕を組んだまま背を向けていた。呆れた表情を見せる守は、取り敢えずこの雰囲気はどうにかしようと、声を掛ける。

「それで、詳しく教えてくれませんか？ 否定する理由を」

守の言葉に背を向けていた大地が振り向く。眉間にシワを寄せる大地は、怪訝そうな目を守に向ける。そんな大地に苦笑いを浮かべる大地は、守の顔を指差すと力強く言い放つ。

「いいか。奴らにとって、ここにいる人間は、人質だ」

「……人質？」

「ああ。奴にとって人間は、最高の獲物であり、その中でも封術師やガーディアンは必ず抜けて旨い食い物なんだよ」

自信満々の大地の説明だが、どこか納得の行かない様子の守。右手を額に当て、渋い表情をする守は、少々不思議そうに大地に尋ねる。

「あの……。その鬼獣が人間を食い物にしてるなら、何故人質にする必要があるんですか？」

「あの……。さっきの説明を聞いてたか？ 奴らにとっては人間の中でも封術師とガーディアンを喰らいたいんだよ」

「ですから、封術師やガーディアンを狙うなら、何故ワザワザ人質

をとる必要があるんですか？ と、俺は尋ねてるんです。そもそも、これじゃあ二度手間じゃないですか！ 爆弾を仕掛けるのだってそうだけど、学校にいる封術師やガーディアン全員を敵に回して」

守の反論に一步後退する大地。それほどまでに迫力のある表情をしていたのだろう。目付き、顔つき、態度。全てが堂々としていて、自分の考えが間違っていないといっている様だった。

グラットリバーも、普段の守からは感じられ無かった迫力に、聊か驚きを隠せなかったが、すぐに口を開く。

「確かに爆弾を仕掛けたり、大地や優花、お前や彩の四人全員を敵に回したが、奴の獲物は完全に俺達四人に絞られた事になる。実際、邪魔な教師や生徒は睡眠薬で寝かされているらしいからな」

「ヘッ？ い、今なんて？」

「ソツ？ 睡眠薬で寝かされているって……」

この時、グラットリバーは守と同じ疑問が生まれた。「何故、生徒や先生を睡眠薬で寝かせたのか」と、言う疑問が。初めは人質が逃げない様にだと思っていたが、元々奴らは人間が主食。ならば、逃げ出そうとした奴を喰らってしまえばそれですむ話。それをしないで、睡眠薬を使ったと言う事は、生徒・教師どちらに見られたくない理由があるのか、それとも見られているとやりにくい事でもあるのか。どちらにしても、とてつもなく嫌な予感がしていた。

そんな時だ。どこかで窓ガラスの割れる音が響いた。そして、その音に続く様に悲鳴が轟く。

「キヤーツ！」

その悲鳴に守と大地の表情が変わる。そして、フロードスクウェアとグラットリバーが同時に叫ぶ。

「鬼獣だ！」

既に守と大地は走り出していた。その悲鳴が彩のものだと守も大地も気付いたからだ。すぐに教室に辿り着いた二人は、教室の戸を勢い良くあける。

「な！ 何だこれ！」

教室内には、多くの生徒が倒れていた。睡眠薬の効果だろう。だが、教室内には争った形跡が幾つが残っていた。外側の窓が割られ、破片が辺りに散らばっている。机なども大破している物があり、怪我をしている人も何人か見えた。

その中に、真弓や智夏、望美の三人の姿があった。三人とも所々から血を流している。そんな三人に駆け寄る守は、教室を見回し彩がいない事に気付く。

「水島は？ 水島は何処に？」

「すまない……。油断した……」

智夏が右肩を押さえながら守に言う。その言葉に智夏の方に目を向ける。

「何があつたんですか？ 犬神さん」

「いきなり外から窓を割られて……。化物が……。それで、彩を連れて行かれた」

「それじゃあ、水島は？」

「多分、屋上だ。上の方に向ったから……。イツ」

痛みに智夏が表情を歪める。守は「無理しないで下さい」と、智

夏に言うと立ち上がる。そして、入り口にいる大地の方に体を向けた。守と大地の視線がぶつかる。すると、大地は早く出て来いと首を軽く振った。そんな守に、後ろから真弓が言い放つ。

「何処へ行くつもり！」

「何処つて……助けに……」

「ちよつ、あんた死ぬ気！」

驚いた声の真弓。それも当然の反応だ。そんな真弓に守は微かに笑みを浮かべて言う。

「大丈夫ですよ。死ぬ気はありませんから」

その守の言葉に唾然とする真弓は、額に青筋を立てると大声で叫ぶ。

「ふざけないで！ あんた、化物相手に何か出来ると思っててるわけ？」

「何も出来ないにしても、何とかしなきゃいけないでしょ？ 水島をほつとく訳には行かないし」

少し照れ笑いを浮かべる。緊張感の無さに怒りを見せる真弓が更に怒声を響かせた。

「あんた、言ってる意味分かってんの！ ば、化物なのよ相手は！」  
「そ、それは、十分分かってます。でも、三人が怪我してまで助け様としたのに、男の俺が何もしないのは、変でしょ？」

もっともらしい事を述べる守が、もう一度照れ笑いを浮かべる。その守の態度に呆れてしまう真弓は、何だか守に怒鳴るのがバカら

しくなった。その為、ため息を漏らし左手で額を押さえる。

「大丈夫ですか？」

頭を押さえる真弓に、心配そうに守が尋ねる。表情を引き攣らせる真弓は、額に青筋をもう一度浮かべ、噛み殺した様な声で言う。

「大丈夫よ……。全然平気……ッ！」

右手を振ろうとした真弓は、右腕に走った痛みに蹲る。慌てて真弓に駆け寄る守は、真弓の右手を掴むとポケットからハンカチを取り出す。

「ほら……。痛むんじゃないですか……。ちゃんと病院に行った方がいいと思いますよ」

ハンカチで右腕の傷口を縛る。すると、痛みには真弓は表情を強張らせた。それほど、酷い傷ではないにしても、ちゃんと医者に見てもらったほうがいいと、守は思ったのだらう。だが、その考えを否定する様に、真弓が言い放つ。

「こんな傷は、唾付けとけば治るわよ」

「何だか、おじさんみたいな事言うね」

「だ、誰がおじさんよー！」

望美にそう怒鳴る。そんな真弓に、「動かないで下さいよ」と、守が言う。「ごめん」と謝る真弓は、少し恥ずかしそうに顔を赤く染めていた。

「よし」と、守の小さな声が聞こえ、守がスッと立ち上がる。そして、軽く微笑む。

「それじゃあ。必ず後から病院に行ってくださいね。あと、教室から一步も出ちゃ駄目ですよ。まだ化物がウロウロしてるかもしれないから！ いいですね？」

小さな子供に言い聞かせる様な口調の守の額に、智夏の鋭いチョップが上手い具合に決まる。特に音も無く、痛みだけが守の額に残り、額を押さえ守は蹲った。そんな守を見下ろす智夏は少し怒った様な表情を見せ口を開く。

「子供じゃないんだ。言われなくてもそれ位分かる」

「ウゝッ……。それなら、何も殴らなくても……」

そこまで言った時、もう一度智夏のチョップが頭を捉える。「はぐっ！」と、守の変な声が聞こえ、静かに守が顔を上げる。少々ムスツとした表情の智夏に、守はうつすらと涙を浮かべながら聞く。

「何するんですか」。暴力反対ですよ……」

「まだ言うか！」

無音でチョップが守の額に直撃する。「ふぎゃっ」と、またしても変な声を漏らす守。今度は、額ではなく、顔を殴打したのだ。顔を押さえる守は、眼を潤ませながら真っ直ぐ智夏を見据える。

そんな小動物の様な守の眼に、望美が助け舟を出す。

「やめなよ。暴力はよくないよ。それに、怯えてるよ」

相変わらずマイペースな口調の望美の声に、智夏は「これは、暴力ではない。愛のムチだ！」と、もう一度守にチョップを当てる。「ぎゃっ！」と、悲鳴を上げる守は、蹲ったまま思う。『何故、今

チヨツプされたのか』と。

### 第三十八話 鬼獣襲来

校舎を出て体育館へ向う途中の優花は、ガラスの割れる音に足を止め振り返る。校舎の三階、窓際の教室。そこは彩の教室だ。嫌な予感が脳裏に過る優花は、視線をそこに向けたまま二、三步足を進める。

彩に何かあったのではないかと、不安になる優花は体育館に行くのを止め、校舎へと引き返そうとした。その刹那、割れた窓ガラスから一体の鬼獣が現れ、腕の中に彩を抱え屋上へと駆けていくのが見えた。割れた窓ガラスの破片が、地上へと落ち澄んだ音を響かせ砕ける。

彩を抱えた鬼獣を見た優花の瞳は、見る見る鮮やかな赤色に変る。

『久し振りに赤い眼の死神だな』

「急ぐわよ」

キファードレイを全く相手にせず、走り出そうとした優花の前に、一体の鬼獣が現れた。黄色の地肌に黒の斑模様を描かれている。そして、鋭い眼球が真っ直ぐに優花を見据え、裂けた口の合間から鋭い牙が無数見えた。その牙は、鋭利で何でも一噛みで噛み切ってしまういそう程だ。体長は二メートル以上。引き締まった筋肉が表面にはつきりと窺える。

細かな砂塵が風に舞い、優花と鬼獣の周りを包む。周りに人の気配は無い。その為、優花はキファードレイを瞬時に具現化する。すると、優花の周りを風塵が舞い、渦巻く。鋭く鋭利な刃が優花の頭の上に翳され、長い柄の尻が地面に触れる。

「キファードレイ」

『ああ、豹風。属性風の鬼獣だ』



「そう。一撃で決める」

右足を引き、キファードレイの鋭い刃を地面スレスレに構える。柄を両手で確り握り、赤く染まった瞳で豹風を睨み付けた。優花と豹風の視線が激しくぶつかりあい、両者の間に流れる風塵が更に勢いよく舞い上がる。

そして、遂に両者が動き出す。風塵が真つ二つに裂け、豹風の右腕が現れる。鋭い爪が三本。それを確認しつつ、優花は後方に飛び退く。

「がっつ！」

風塵を裂いた豹風の三本の爪は、優花を捕らえられず、地面を抉った。僅かに地響きを起し、爪が地面を裂く音が不気味なほど響き渡る。

綺麗に三つの爪痕が残され、地面には爪痕から亀裂が数本走っていた。

それを見ても、表情を変えない優花は、地面スレスレに構えたキファードレイの刃を勢いよく振り上げる。その風で地面に亀裂が走り、砂塵が二手に別れ舞い上がった。三日月型の刃の切っ先が、豹風の顎に伸びる。

「うがっ！」

大口を開き、牙をむき出しにする豹風は、両足で地を蹴ると、一瞬にして後方に十メートルも飛び退く。その脚力は凄まじく、先程まで豹風が立っていた場所は砕け窪んでいた。両者の距離が離れ、再び静寂の中対峙する。

『チツ、あの野郎！ すばしっこい！』

「そうね……。骨の折れそうな相手ね」

『このままじゃ、あの鈍間を助けられないぞ!』

「大地に任せるしかないわね。全力で行くわよ」

静かに息を吐く優花は、目付きを鋭くし、カードフォルダから一枚のカードを抜く。そして、キファードレイの刃と柄の間にある水晶に、それを翳す。カードの情報が水晶の中へと流れ込み、赤い光を放つ。

「炎は大地を貫き燃え上がる」

静かにそんな事を口にする。すると、刃を炎が包み込む。

「がつつ?」

キファードレイの刃を高々と翳し、刃先を豹風の方へと向ける。そして、その刃を振り下ろし、叫ぶ。

「蜿蜒・火柱!」

切っ先が地に突き刺さる。すると、地面を貫き火柱が右へ左へとうねりながら豹風に向って近付いていく。

『燃え尽きな!』

キファードレイの声が響き、火柱が遂に豹風の足元から吹き上がる。轟音が辺りを包み込み、炎が豹風の体を覆いこむ。黒い影が炎の中で大きく揺らぎ、蠢く。その影を真っ直ぐに見据える優花は、キファードレイを持ち上げると、すぐに構えなおす。

『低級呪文くれえで、倒せるわけねえな』  
「ええ。次は少し強いのをぶつける」

真剣な眼差しを変えない優花は、カードフォルダからもう一枚カードを抜く。そのカードには、全身を針の様な毛に身を包んだ小動物の姿が映っていた。人差し指と中指の間にそれを挟み、優花は静かにキファードレイの水晶に翳す。

「我、汝を封じし者。今一度、汝の体を解き放つ。我の矛となり戦え！」

優花の足元に風が渦巻き、風塵が舞い上がる。右手の人差し指と中指の間のカードは、光をおび、一瞬にして解き放たれた。

「鬼獣召喚！ 炎蝟えんい」

カードは優花の手から消え、優花の前にカードに描かれていた鬼獣の姿が現れる。小さく刺々しい毛並みの弱そうな鬼獣が。

屋上へと向かい走る守と大地は、四階で一体の鬼獣と対峙していた。ヌルヌルの表皮に大きな口。牙や爪などはなく、長い舌が口の中から見えた。体格は守と大地と同じ位で、弱々しい姿に見える。守も大地も既にフロードスクウェアとグラットリバーを具現化していた。

鋭い爪の形のグラットリバーと、両手専用の大剣のフロードスクウェア。二つが並ぶと狭い廊下が更に狭く感じる。その為、鬼獣の近くに立つ大地は、渋々と守に言う。

「てめえ、先に行け！ ここは俺がやる」

大地のその言葉に守は軽く頷く。

「分かりました。ここはお任せします！」

「任せる。絶対に彩お嬢様を傷付けるなよ。分かってんな」

「俺がついている。安心しろ」

「お前の力が無いから逆に心配なんだよ」

「なんだと！」

グラツトリバーの言葉に、怒声を上げる。そんなフロードスクウェアを苦笑しながら宥める守は、大地の方に背を向け階段の一段目に右足を掛けた。そして、背中を見せたまま口を開く。

「俺等では、彩を救う事は出来ません。だから……」

「心配すんな。俺もすぐに追い付く。それまで、時間を稼げばいい」

「何処まで稼げるか分かりませんが、出来るだけの事はします」

「死ぬなよ。ヤバイと思ったら逃げる。誰かの命を救っても、自分の命を救えない様では意味が無いからな」

心配そうなグラツトリバーの声に、大地は少し驚いた。こんなに他人の心配をしたグラツトリバーを初めて見たからだ。

守は、僅かに口元に笑みを浮かべる。そして、振り返り右手の親指を立て、大地の方に突き出す。

「大丈夫です！ 俺の脚では鬼獣から逃げるのは不可能ですから！」

「って、何自信满满々でそんな事言ってるんだよ！」

笑う守にフロードスクウェアの鋭い突っ込みが決まる。そんな守とフロードスクウェアの様子に、呆れたため息を漏らすグラツトリバー。だが、大地は大声を張り上げ笑う。

「ナハハハハッ！」

『な！ 何が可笑しい！』

「確かに、人間の俺達が鬼獣の足から逃げるなんて殆ど無理な話だ」

フロードスクウェアの言葉にそう言い退ける大地は、視線を守の方に向けて真剣な表情で口を開く。

「だがな。逃げる事が不可能なら、どうすれば逃げられるか考える。俺達鬼獣と戦う者は、力だけじゃない。知能も必要だ。分かったな」

力強い大地の言葉に、守は白い歯を見せ笑みを浮かべると、「忠告ありがとう！」と言って背を向け階段を上り始めた。

その言葉を鼻で笑う大地は、視線を鬼獣の方に向け、グラットリバーの切っ先を真っ直ぐに鬼獣の方へと伸ばした。

「後輩のガーディアンが怪我をする前に、こいつを倒して後を追うぞ」

『ああ。チャツチャと終わらせようぜ相棒！』

大地とグラットリバーは互いに士気を高め合う。

### 第三十九話 悪とは何か？

静けさ漂う屋上。一体の鬼獣が、右肩に意識の無い彩を担いで仁王立ちしていた。

尻から生えた長く太い尻尾が、何度か軽やかに動く。そして、徐々に体が人間の姿へと変ってゆく。尻尾は縮み、体の色も肌色へと変化する。黒髪がユラユラと揺れ、完全に人間の姿になった。その姿は、科学教師の武中だった。

白衣に身を包んだ武中は、乱暴に彩の体を床に落とす。彩は完全に意識を失っており、何の反応も示さない。そんな彩を見下す武中は、薄ら笑いを浮かべ静かに舌なめずりをする。目の前にある極上の獲物に、武中の涎は止まらなくなっていた。

「クツクツ……。す、少し位なら、食っても大丈夫だろ？」

薄ら笑いを浮かべたままそう呟く武中は、乾いた唇を舌で舐め、ゴクリと生唾を呑む。そして、武中の手が彩の両肩へと伸びた。だが、その時遠くの方から微かに声が聞こえた。

「水島に触れるな！」

その声のする方に顔を向ける。向かいの校舎屋上の出入口。そこに守の姿があった。右手で首からぶら下げたフロードスクウェアを握り、眼を凝らし武中の方を見据えている。

二人が暫く対峙し、ようやくお互いの事を認識した。守は武中が鬼獣なのだと悟り、武中は守がガーディアンだと悟る。そして、武中が守の方に大手を広げ声を張り上げた。

「フハハハハッ！ まさか、君がガーディアンだったとはね……」

全く驚きモノだよ」

「俺も驚いたよ。あんたが鬼獣だったなんて……」

大分距離のある二人は、少々大声で会話する。だが、その声が誰かに聞かれる事は無い。屋上には守と武中、後意識の無い彩の三人しかいないのだから。

堂々とする武中は、向かいの校舎にいる守の方に向かって前進し、薄ら笑いを浮かべて問いかける。

「君に私が倒せるのか？」

その問いに、守は一度眼を伏せる。そして、フロードスクウェアを具現化すると同時に、眼を見開き鋭い眼差しで武中を見据え答えた。

「あなたが悪ならば、俺は問答無用であなたを斬る」

真剣な眼差しの守に、突如武中が笑い声を噴出す。

「ブツ！ ハハハハッ！ 君に私が悪かどうかなど決める事が出来るのか！」

笑いながらそう叫ぶ武中。視線を静かに下の方に落とす守は、ゆっくりと息を整える。何をするつもりか分からないが、いつもと様子が変だと気付いたフロードスクウェアは小声で声を掛けた。

『おい！ 何をするつもりだ？』

その質問に息を吐き出した守が、柄を力強く握り締め答える。

「俺は、俺自身が守るモノの為に戦う。これ以上人を傷つけさせたりはしない」

『お前、何言ってるんだ？』

質問の答えになっていないと、フロードスクウェアが不思議そうに聞く。だが、その言葉は守の耳に届いておらず、守は既に走り出していた。

ここから向かいの校舎まで、繋がっているが、向こうに行く為には遠回りをしなくてはならない。その為、守はそのままの勢いでフェンスを蹴上がると、中央にある渡り廊下の上へと着地する。流石のフロードスクウェアも、これには驚き慌てふためく。

『うおい！ な、何してんだお前！ 正気か！』

返事を返さぬまま渡り廊下の上を駆ける守は、もう一度フェンスを蹴上がり武中目掛けて、フロードスクウェアを振り下ろす。だが、武中はそれを軽々とかわす。フロードスクウェアは勢い良く床を叩き割り、亀裂が広がる。落下する速度も加わり、普段の何倍もの力が出たのだ。もちろん、フロードスクウェアの痛みもいつもの何倍にも膨れ上がっていた。

『ぐおっ！ いったーな！ 少し優しく扱え』

「ごめん。外した」

立ち上がりそう言う守に、フロードスクウェアが怒鳴る。

『ごめん外したじゃない！ 大体、地面に頭をぶつけた時点で外したのは分かってるんだよ！ もう少し丁寧に扱えよ！』

「すまん。それは約束できん」



フロードスクウエアの言葉に即答する守。呆気にとられるフロードスクウエアは、一瞬対応に遅れるが、すぐに守に言い放つ。

『な、何だ！ どう言う意味ださっきの言葉は！』

「イマイチ、剣の使い方が分からないんです。だから、暫くは」

そこまで言っただけで守がフロードスクウエアを振り上げる。守の言葉に慌てるフロードスクウエアは、『ま、待て！』と叫ぶが、時は遅し。武中目掛けて走る守は、勢い良くフロードスクウエアを上から下へと振り抜く。『ギャアアアッ』と、フロードスクウエアの悲鳴が聞こえ、武中が刃をかわす。そして、もう一度フロードスクウエアが床を叩く。

『うがつ！』

「くつ！ また、外した」

視線を武中の方に向けたまま守はそう呟く。呆れた様に首を振る武中は、守をバカにした様な眼で見据える。

「残念ながら、君は私に勝てない。いや………それどころか、君の攻撃は私には届かない。絶対に」

自信満々の武中の言葉に、守はゆっくりとフロードスクウエアを持ち上げる。

「あんな事言われてるぞ。フロードスクウエア」

『俺に言ったんじゃないかって、お前に言ってるんだよ！』

怒りをぶつける様にそう言い放つフロードスクウエア。聊か渋い表情を見せる守は、「そうなんですか？」と怪訝そうな眼で、フロ

ードスクウェアを見ながら答える。呆れるフロードスクウェアは、  
『お前な……』と静かに呟いた。

そんな二人の姿を見据える武中は、僅かにイライラを募らせる。  
目の前の食事を邪魔され、拳句にこんなふざけた奴が相手。イライ  
ラがたまるのも無理は無い。守もフロードスクウェアもその事に気  
付いておらず、あーだこーだと揉めていた。

『お前は、乱暴すぎるんだ！』

「けど、現代っ子に剣を扱えと言うのは不可能ですよ」

『うるせえ！ んなの、俺が知るか！』

「あのですね……。もっと丁寧に扱って欲しいなら、もっと軽くな  
ってください！ 重すぎて動き難いんですよ！」

『お、重すぎてだと！ 大体、それはお前の気持ちの問題だろうが  
！』

「はあい？ 気持ちの問題？ そんなわけ無いでしょ！ 大体、気  
合入れて重量が軽くなるなら、皆やってますよ！」

大揉めの守とフロードスクウェアは、完全に武中の事を忘れてい  
た。だが、この直後すぐに武中を思い出す事になる。

「だから……！」

守の言葉がそこで止まり、体が宙に投げ出される。宙に舞う守の  
視界に微かに見えた。長く太い尻尾を撓らせる武中の姿が。そして、  
気付く。腹部に感じる痛みに、自分が殴られた事を。

床に激しく落ちた守は、背中を打ちつけ口から僅かに血を吐き出  
す。

「ぐはっ」

床が衝撃で僅かに窪み、亀裂が幾つも走った。床に落ちた時の痛みで、フロードスクウェアの柄を放してしまった為、フロードスクウェアはフェンスの方まで飛ばされている。痛みに表情を歪める守は、二・三度咳をして、体をゆっくり起す。だが、武中の右足が起き上がるうとする守の胸を押し、床へと押し付ける。

守の胸を踏み付ける。亀裂が更に広がり、軋む音が聞こえる。床が軋んだのか、守の骨が軋んだのか分からないが、その音は徐々に大きくなっていく。苦痛に呻く守は、両手で武中の足を掴む。だが、武中は更に力を加える。圧迫され、息が苦しくなり、武中の足を掴む力が緩み、静かに床に腕が落ちる。それと同時に、遂に床が崩れた。

## 第四十話 相性最悪

四階で鬼獣と戦闘する大地。

相手のヌルヌルとした体に悪戦苦闘していた。拳は当らず、刃も効かず、大地の体力だけが削られていた。その間、その鬼獣が動いたのは、一度だけ。それも、大地が攻撃を外し、バランスを崩した時に、右拳を振り抜いただけだ。当りはしなかったものの、その拳を振った時に起きた風は、大地の体を弾き飛ばす程だった。

「くっ……。何だ……。こいつ。攻撃が当らねえ……」

「チツ！ もっと早く気付くべきだった！ こいつ、水蛙津すゐあつだ！  
打撃系の俺達とは最悪の相性だ」

押し殺した様な声のグラットリバーに、大地の表情も険しくなっていた。

そんな時だ、隣りの校舎から轟音が響き、屋上から何か落ちてきたのは。轟音に気付いた大地は、窓越しから隣りの校舎を見据え、気付く。天井が崩れた事に。もしかやと、思う大地。彩か、守に何かあったのではないかと思っただ。

その為、すぐにそっちに向おうと走り出したが、そんな大地の足に水蛙津の長い舌が巻き付き、その場に倒れこむ。顔から床に倒れた大地は、体を起すと身を震わせ水蛙津の方に顔を向け叫ぶ。

「てめえ！ 何しやがる！」

鼻血が薄らと流れた。その事に気付いたグラットリバーは、ため息を吐き大地に言う。

『おい。鼻血出てるぞ』

「ああつ？ 鼻血？ そんなの今は関係ないだろ！」

そう言いながらも、大地は右手で鼻血を拭う。そして、引き攣った笑みを浮かべ、水蛙津の方へと右足を一步踏み出す。額に見える青筋から、大地の怒りが内面から溢れているのが分かる。もちろん、水蛙津もその大地の放つ怒りのオーラに気付いており、先程までのボーツとした顔つきが少し変り、目が大きく開かれていた。

「あんまり、調子にノンなよ……。打撃が効かないからつてよ……」  
「ゲコゲコ……」

小さな鳴声が聞こえる。これが、水蛙津の声だ。自分に大地の攻撃が効かない事を思い出したのだろう。自信に満ち溢れた表情を見せ、一步大地の方に足を踏み込む。その自信に満ち溢れた水蛙津の表情が、更に大地の怒りを増幅させる。

米神を震わせる大地は、一度グラットリバーの具現化を解き、もう一度具現化する。先程とは違う形。細かい棘の様なモノが、沢山拳の先に生えており、痛そうだ。それを握り締める大地は、不適に笑みを浮かべる。

「さて、この荊トゲも、その体で弾く事が出来るかな？」

『大地！ 分かっているとと思うが……』

「心配するな。すぐに終わる」

グラットリバーの心配を他所に、大地は力強い声でそう言い放つ。そして、右拳を引き、左足を一步踏み込み力を加える。

「伸びろ！ 荊の道！」

大地は腰を回転させ、右拳を力強く突き出す。すると、グラット

リバーが水蛙津に向って伸びる。その際、グラットリバーと大地の拳は、棘棘の荊で繋がっていた。

水蛙津は、それが危険だと気付いたのか、すぐさま口を開き、水を吐き出す。勢い良く発射された水の弾が、滑走するグラットリバーに直撃した。だが、その勢いは止まらず、水蛙津に向ってゆく。

「ゲコッ！」

慌てる水蛙津は、体を捻りグラットリバーを右にかわす。すると、大地が僅かに笑みを浮かべた。

「撓れ！」

その声と同時に、大地は右拳を左へと振り抜く。すると、真っ直ぐ伸びるグラットリバーが、大地と繋がる荊に引かれて、大きく左へと傾く。もちろん、二人を繋ぐ荊も左へと動き、水蛙津の方へと向っていく。

「ゲコッゲコッ！」

完全に不意をつかれ、驚きの声を上げる水蛙津に、荊が触れ、グラットリバーが水蛙津の体に荊を巻きつけていく。ヌルヌルする水蛙津の体を諸共せず、棘が体に食い込み血が滲み出る。

「げ、ゲコッ！ ゲコゲコッ！」

締め付けていく荊に苦しみ、声を上げる水蛙津に、大地は更に力を込め、右拳を引く。荊が水蛙津の体を更にきつく締め付け、血が吹き出る。

「終わりだ！」

大地がそう叫び、右拳を力いっぱい引く。だが、その手に、手応えがなく、グラットリバーだけが戻ってくる。グラットリバーが大地の右拳とぶつかり、衝撃が大地の肩を襲う。

「ぐっ！」

奥歯を噛み締め、痛みを耐えた大地は、水蛙津の方を真っ直ぐに見据える。体から血を流す水蛙津だが、その傷が徐々に塞がっていく。まるで、今まではワザと術を喰らっていたと言っている様だった。

「どうなってんだ……」

「あいつ、水圧で荊を押し退けやがった」

「そうか……。それで、締め付けられていたのを解いたのか……」

納得する大地は、右腕をもう一度引く。だが、その瞬間に水蛙津の口から長い舌が勢い良く伸ばされる。それに気付いた大地だが、反応が遅く、水蛙津の下が首に巻きつく。

「グッ！」

「大地！」

首を締め付けられる大地は言葉を発する事が出来ない。締め付けがきつくなり、大地の意識が遠退き始める。微かに頭の中にグラットリバーの声が聞こえていたが、それも徐々に聞こえなくなっていく。

大地の右手に装着されるグラットリバーは、大地の力が弱くなっていく事に気付く。その為、大声で大地を呼ぶ。

『おい！ 大地！ 確りしろ！』  
「うつつ……あつ……」

薄れ行く意識の中で、大地がグラットリバーの方に視線を向ける。そして、右目を軽く閉じすぐに開く。何かの合図をしている様だった。グラットリバーはその合図を理解したのか、していないのか、急に黙り込む。

両膝が床に落ち、大地の体が床に崩れる。水蛙津は、弱っていく大地の姿を目視し、一歩ずつ近づく。とどめを刺す為だろう。

『くっ！ 近付くな！ 俺の相方は殺させねえ！』

水蛙津が大地に近付くとグラットリバーがそう叫ぶ。それが、合図だった。

床に倒れる大地が首に巻かれた水蛙津の舌を左手で掴む。その瞬間に、水蛙津の舌の力が緩み大地の首に巻きつく舌が解ける。ゆっくりと立ち上がる大地は、不適に笑い出し顔を水蛙津の方に向ける。

「フフフフツ……。残念だったな。今までののは、全部芝居だ」  
「ゲコツ！」

その場を飛び退こうとした水蛙津だが、大地が舌を引きそれを阻止する。

「オイオイ。逃げるなよ」

舌を引かれ、前方へと体勢の崩れる水蛙津に対し、小さな声で大地は呟く。



「お互い、楽しもうぜ」

と。背筋が凍りつく様なその声に、水蛙津は恐怖を感じその場を逃げ出そうと必死になる。だが、舌を掴まれている為、水蛙津に逃げ場など無い。その為、大地はゆっくりと右拳を引き力を込める。

『この一撃で終わらせてくれよ。俺も疲れたし、上の連中が気になるからな』

グラットリバーが大地の耳元で囁く。大地も微かに笑みを浮かべて、ゆっくりと答える。

「分かってるさ。この一撃で、消滅させてやるって」

「ゲコツ！ ゲコツ！」

喚く水蛙津だが、最後に優しく微笑んだ大地は、「喚くな」と真剣な表情で呟き、遂に右拳を振り抜く。棘の着いた拳が水蛙津の顔面に食い込む。それと同時に、大地は舌を掴んでいた手を放し、そのまま水蛙津を床へと叩き付けた。完全に顔を潰された水蛙津は、動かなくなり、暫くすると光となりグラットリバーの水晶の中へと吸収された。

「ふっっ……。ようやく片付いたか……」

グラットリバーの具現化を解き、大地は汗を拭った。

『今回は、大分苦戦したな』

右の手首に輝くブレスレットのグラットリバーがそう言うと、大地は軽く首を左右に振り余裕の表情を浮かべて言い放つ。

「誰が苦戦したって？ 所詮は下級の鬼獣だ。あんなのに苦戦するかよ」

「その割りに、俺に臭い芝居までさせやがって」

「はあ？ オイオイ。あんな下手な演技で、俺の足を引っ張りそうになったのは、何処の誰だ？」

「ふ、ふぎけんな！ 誰が下手な演技だ。俺の演技は完璧だったぞ」！

上擦ったグラットリバーの声に、大地は「はいはい。そう言う事にしておくよ」と、呟き歩き出す。すると、グラットリバーは「ふ、ふぎけんな！」と大声で怒鳴った。だが、大地は全く相手にする気はなく、隣りの校舎へと足を進めるのだった。

## 第四十一話 炎蝟対豹風

屋上から響く轟音。

それは、優花の脳裏に嫌な予感を過らせる。だが、それを表情に出さず、優花は真つ直ぐに炎の中の豹風に目を向けていた。

そんな時、足元から幼い子供の様な声が聞こえる。

「今回の獲物は、あいつか？」

その声の正体は、先程優花が召喚した炎蝟<sup>えんい</sup>だった。小さな体に、刺々しい毛並み。非常に弱々しく見えるその鬼獣は、優花の顔を真つ直ぐに見上げている。優花はその鬼獣の目を真つ直ぐに見据え、小さく頷き答えた。

「そうよ。だから、今回もあなたの力を貸してほしいの」

この言葉に炎蝟は嬉しそうな表情を見せた。久し振りの獲物。そして、久し振りに吸った外の空気。炎蝟の気分は最高潮に達しており、寝ていた毛並みが全て立ち上がり、刺々しさを増していた。鋭い毛並みは長い針のようで、その一本一本が薄らと炎を纏っている。

そして、ようやく豹風の体を包んでいた炎が消えた。所々が黒焦げているが、殆ど無傷の豹風。やはり、低級呪文ではダメージを与える事は出来ない様だ。最初から分かっていた事だが、実際に目にするると結構辛いものだった。低級呪文と言っても、優花にとっては鬼獣の力を借りないと扱う事の出来ない呪文。それが全く効果が無いのは、本当に辛い。

「ウガアアアッ！」

大気を震わす程の豹風の声。それは、地面を砕き細かな破片を優花の方に飛ばす。優花の体にもその声が出す波動がヒシヒシと伝わった。制服のスカートがその波動で大きく靡き、優花の腰まで届く長い黒髪も大きく揺れる。

優花の前方に立つ炎蝟は、地に四本の足で力強く踏み止まる。波動が全身の刺々しい毛並みを逆撫でする。

「豹風か……。懐かしい相手だな」

不適な笑みを浮かべる炎蝟は、軽く身を震わせる。それに気付いた優花は、キファードレイを翳し、静かに口を開く。

「震えてるわよ」

「フツ……武者震いだ。安心しろ」

『武者震い？ 本当は、こええんじゃねえのか？』

キファードレイの口の悪い言葉に、炎蝟は鋭い眼差しをキファードレイに向ける。その瞳の奥に見える真っ赤な炎が、キファードレイを臆させた。言葉を失うキファードレイに代わり、優花が口を開く。

「体は鈍っていない？ 久し振りだけど」

「大丈夫だ。俺の体は、今まで以上に絶好調だ」

「なら、安心ね。いざと言う時は力を貸すわ」

その言葉に、炎蝟は僅かに首を振り答える。

「力など借りぬ。安心しろ」

「そう。でも、油断しないで」

「油断などしないさ。見ている」

豹風の声が収まり、風が止む。波動で地面は崩れ、足場は最悪なものへと変っていた。対峙する炎蝟と豹風。足元に風塵を舞い上がらせる豹風に、毛に炎を纏う炎蝟は、静かに闘志を燃やす。

豹風と睨み合う炎蝟は、微かに右前足を一步踏み込み、威嚇する様に牙をむき出しにする。二本の長い牙と無数の小さな牙をむき出しにして、声を荒げる豹風。それに対し、短い牙しか持たぬ炎蝟は、声は発しないで毛並みだけを逆立て威嚇する。

「ガウウウウッ！」

豹風が地を蹴る。後塵が舞い、破片が宙を飛ぶ。そして、鋭い爪を小さな炎蝟へと振り下ろす。下りて来る爪を見上げる炎蝟は、ギリギリまでその軌道を見据える。優花は既にその場を飛び退き、まだ動かない炎蝟に叫ぶ。

「炎蝟！」

豹風の爪が完全に地面に突き刺さった。炎蝟の姿は何処にも無く、キファードレイは啞然とした様子で口を開いた。

『あの野郎！ 逃げ遅れやがって！』

「誰が逃げ遅れたって？」

キファードレイの言葉に、豹風の背後から炎蝟の音がする。地面を砕いた豹風の右手が上がる。そこに炎蝟の姿は無く、瓦礫だけが円形に窪んだ中央に集まっていた。豹風の背後に立つ炎蝟は、余裕の表情を見せる。ホッとする優花は、炎蝟の方に目を向け叫ぶ。

「遊んでないで、早めに勝負を決めて」

優花の言葉に呆れた様に首を振る炎蜩は、不適に笑みを浮かべて口を開く。

「なぐに。少し遊んだら」  
「ガアアアアッ！」

叫び声と同時に、右拳が振り下ろされた。完全に不意を突かれた炎蜩は、避ける事が出来無かった。地響きと共に地面の砕け散る音が轟く。亀裂が無数に広がり、碎石が飛び散る。突然の事に驚く優花とキファードレイは、言葉を失っていた。

地面に減り込んだ豹風の右拳。ピクリとも動かず、炎蜩の安否は不明だ。その為、優花はカードフォルダから、瞬時にカードを抜くもう火のタイプの鬼獣は持っていない。その為、その手に取ったカードは風鳥のカードだった。今持っている優花のカードの中で、風鳥は風属性で一番強い鬼獣だ。この鬼獣は、優花の切り札でもあった。その為、極力使うのを控えている。

そんな風鳥のカードをキファードレイの水晶に翳す。白い光が水晶の中に輝き、風が三日月型の刃を包み込む。風塵が足元に舞い、強風が優花の周りを取り巻く。長い髪が風で浮き上がり、制服の裾もユラユラと揺れる。

『制服でこいつを使うのは、色々と問題あるだろ』  
「そんなの気になっている場合じゃないでしょ。それに、どうせ誰も見て無いから」

真剣な顔つきでそう言う優花は、スカートが捲れるが全く気にしない。そんな事を気にしては、鬼獣とは戦ってられないのだ。風の勢いが増し、更に優花の髪を逆立てる。真っ赤な瞳を豹風の背中に向ける優花は、静かに呪文を唱え始めた。

「透明な鱗は、触れるものを引き裂き、疾風の如き速く敵を喰らう」

その呪文に豹風は気付いたのか、優花の方へと顔を向ける。優花とキファードレイの周りに渦巻く風に、豹風は雄叫びを上げた。風をかき消すかの如く発せられる波動は、幾重にも優花の体に襲い掛かる。

奥歯を噛み締める優花は、右足を踏み込むと、キファードレイを振り上げた。波動で後方に仰け反りそうになる。それを右足に力を入れ、必死に踏み止まる優花は大口を開き叫ぶ豹風に向かって叫ぶ。

「全てを裂け！ 疾風の牙！」

波動を体に受けながらも、キファードレイを振り下ろす。風を纏う三日月形の刃の切っ先が地に触れる。すると、キファードレイの刃を包んでいた風が、地を抉りながら豹風の方へと向っていく。轟音が響き、地が揺れる。風は鋭い音を響かせ、大口を開いた龍の形へと変化した。

「グガアアアッ！」

豹風は叫び龍と化した風に向って走り出す。そして、右手を大きく振り翳した。風が鋭く伸びた爪に集まり、更に大きく鋭い爪に変化する。風音が辺りを包み込み、その合間に地面が抉れる音が微妙に聞こえた。風の龍と豹風の距離が縮まり、豹風の右手が振り下ろされた。風を纏った爪が、激しく風の龍と衝突する。

「ガアアアッ！」

豹風の爪が風の龍と接触すると同時に、凄まじい衝撃波が轟音と

共に起きた。身構える暇の無かった優花は、その衝撃波を受け吹き飛ばされる。

「キヤッ！」

吹き飛ばされた優花は、何度も地面に叩き付けられ、数十メートル行った所でうつ伏せに倒れていた。全身傷だらけで、制服も土で汚れている。赤い瞳はすでに元の黒い瞳に戻っており、キファードレイもネックレスへと戻っていた。

「大丈夫か？ 優花」

「ええ……。大丈夫よ」

傷口から血が溢れる優花だが、平然とした表情のままゆっくりと立ち上がった。舞い上がった塵が、ゆっくりと地に落ち、微音を奏でる。そして、薄らと立ち込める砂塵が徐々に晴れていく。

息を呑む優花。既に出せる力は出した。これで、豹風が立っていれば、優花は死を待つ事になる。そう、優花にはもう鬼獣と戦う余力は残されていなかった。初めの低級呪文、炎蝟の召喚、そして先程の上級呪文。これらの術を使った優花に、体力など残っている訳は無い。

そんな優花は、必死で目を凝らし砂塵を見据える。そして、その瞳に一つの影の姿が。



## 第四十二話 決着

漂う砂塵の中央に見える影。

体中に痛みを走る優花は、肩で息をし影を見据える。そして、愕然とし地に両膝を落とした。それは、砂塵の中央に見える影が、明らかに豹風の影だったからだ。結局、優花の渾身の一撃は、豹風に届かなかったのだ。

俯き右手を地に着く優花は、苦しそうに呼吸を繰り返す。すでにキファードレイを具現化する力は残っていない。その為、キファードレイは優花の首にぶら下がったまま、何も出来ずに居た。何も出来ない自分に苛立つキファードレイは、言葉を発し様としない。

そんな二人の方に足音が静かに近づく。小さく足を引き摺る様な足音が聞こえ、弱々しい声が二人の耳に届いた。

「何………している？」

その声に顔を上げる優花は、驚き声を上げる。

「え、炎蝟！」

そう。優花の前に立っているのは、傷だらけで血塗れの炎蝟だった。

『て、てめえ、生きてやがったのか！』

「言っただろ……。俺の体は……。今まで以上に……。絶好調だと」

炎蝟は右前足を引き摺りながら一步前に進む。豹風の攻撃を受けた際、右前足を痛めたのだろう。

しかし、先程砂塵の中に見た影は、間違いなく豹風のものだった。

豹風と炎蝟は体格差があるのだ、見間違えるはずは無い。それじゃあ、さっきの影は……。そう考えた時、優花は表情を強張らせ、視線を先程の影の方へと向けた。だが、そこには豹風の姿などは無い。

「どうした？ 主よ」

表情の硬い優花に不思議そうに問いかける炎蝟。痛む体にムチを打ち、立ち上がる優花は辺りを見回し答える。

「豹風の姿が無い……」

「心配ないだろ……。奴も、あれほどの術を喰らったんだ。暫くは動けないだろう」

『チツ……。逃げられたって事かよ』

「それで、良かったんじゃないか？ 主も余力は無い様だし、俺も既に消えかかっているからな」

そう言う炎蝟の体は、薄らと色あせていた。そして、体から白煙が昇る。

「悪かったな。今日は、何の役にもたてず……」

「気にしないで。私も何も出来なかったから」

「今度奴と会った時は、もう一度俺を召喚しろ。次は必ず倒す」

そこまで言って、炎蝟の体は光となり、カードへと戻った。炎蝟のカードがヒラヒラと地に落ちる。疲労の見える優花は、体の痛みに耐えながら、炎蝟のカードを手に取った。そして、それをカードフォルダにしまうと同時に、優花はその場に座り込んだ。膝が震え言う事を聞かない。

『大丈夫か？』

「平気……。少し休めば……」

『じゃあ、後は大地次第ってわけか……』

「そうなるわ……。私に戦う力は殆ど残ってないから」

静かに息を吐く優花は、屋上の方に視線を送った。

四階の廊下では、瓦礫に埋もれた守が、大地によって助けられていた。

「おい！ 大丈夫か！ 何があった！」

「ぐっ……。ごめん……」

表情を引き攣らせながら、守がそう呟いた。体中が痛む。特に腹部はズキズキと痛みが疼く。ゆっくりと体を起す守は、立ち上がりフラフラとした足取りで屋上へ向おうとする。そんな守の右腕を掴んだ大地は、鋭い目付きで守を睨み言う。

「おい！ その体で何処に行くつもりだ！」

俯いたままの守は、大地の手を振り払う。そして、苦しそうな呼吸をしながら答える。

「俺は……。屋上へ行く」

「ばっ、バカか！ 何考えてんだ！」

守の言葉に驚く。ボロボロの体で屋上へ行っても、鬼獣にやられるのは目に見えていた。だが、守の眼差しは力強く、強い決意があふれ出ている。グラットリバーはその眼差しの奥に、一人の男の顔が浮かんだ。その人物が誰なのかは不明だが、自分にはとても大切

な人の様に感じた。頭の中がポーツとするグラツトリバーは、暫し時を忘れ黙り込んだ。

大地の手を振り払った守は、すぐにフラフラの足取りで歩き出し、静かに口を開く。

「上で……フロードスクウェアが待っているんです。俺が……戻ってくるのを……」

目付きを悪くする大地は、すぐに守の傍に駆け寄りもう一度、右腕を掴む。今度はその腕を首に回し、守の体を支え一緒に足を進めた。大地の行動に、少々驚く守だったが、すぐに笑みを浮かべ、「ありがとう」と呟いた。ムスツとした表情をする大地は、「言うておくが、これは貸しだからな」と照れくさそうに言う。

屋上に取り残されたフロードスクウェア。具現化は未だ解けておらず、フェンス際で寝かされたままだ。武中はそんなフロードスクウェアに歩み寄り、不適な笑みを浮かべる。そんな武中の表情を見据えるフロードスクウェアは、静かに問う。

『貴様の目的は何だ？ なぜ、あの娘を襲う？』

フロードスクウェアの問いに、肩を揺らし笑う武中はフロードスクウェアを見据えて答える。

「奴は、生け贄だ。水を司る最高位の封術師の血を、我らが主が求めている」

『我らが主？』

「おっと、少々喋りすぎたかな」

そう言うと、武中はフロードスクウェアの柄を右手で握る。だが、フロードスクウェアの重量に、腕が上がらない。右腕に太い血管が浮き上がる。僅かに床からフロードスクウェアが持ち上がるが、そこまでが限界で、武中の手が柄から離れる。

薄らと汗を滲ませる武中は、小さく舌打ちをするとフロードスクウェアを踏みつける。汚い足で踏み付けられるフロードスクウェアは、微かに身を震わした。

「貴様……。その足を退ける……」

「フツ……。役立たずのサポートアームズが……」

「誰が、役立たずだ！」

フロードスクウェアが叫ぶ。すると、刃が真つ赤に染まり、灼熱を帯びる。その熱に足を退ける武中は、フロードスクウェアから距離を取ると。熱気がフロードスクウェアから立ち込め、カタカタと微かに震えた。

驚きを隠せない武中は、ゆっくりと後退し微かに身を震わせる。以前にもこんな光景を武中は見ていた。だが、それは遙か昔。まだ、ガーディアンマスターの生きていた時代に見たものだ。すでにガーディアンマスターが死に絶えたこの時代で、こんな光景を目にすると、武中は思ってもいなかった。

「き……貴様……一体……」

「我が名は……フロードスクウェア。ガーディアンマスターが創りし、最初で最後の最強の武器……」

「ま……まさか！ そんなはずは無い！ 奴は死んだ……はず　うぐっ！」

武中の腹に刃が突き刺さる。そして、それが鮮血と共に背中から突き抜ける。刃に付着する血が、焼ける臭いを漂わせ蒸発してゆく。

言葉にならない声を発する武中は、右手を真つ直ぐに伸ばし、目の前にいる者の左肩を掴む。

「グフツ……。貴様……。いった……。い……。なん……。なん……。だ」

吐血し微かな声でそう言う武中の腹から刃が抜かれた。その途端、血が傷口から吹き出て、武中の両膝が床に落ちる。腹部を両手で押さえる武中は、体内から溢れる生暖かな血をその手に感じゆっくりと床に倒れた。そんな武中の頭上には一つの影が。胸元に煌く水晶は赤く鮮やかで、そいつの口元が微かに緩み白い歯を見せた。

## 第四十二話 決着（後書き）

更新が遅くてすみません。

それから、感想・評価をくださった皆さん。ありがとうございます。  
す。

なるべく、早めに更新出来る様頑張ります。これからも、よろしく  
お願いします。

## 第四十三話 赤い眼の男

屋上へと足を踏み込んだ。守と大地の二人の視界には、一人の男の姿が映った。黒の足元まで届くコートに、頭にはフード。そのフードから見える赤と茶の混ざった髪は、風で静かに揺れていた。

フロードスクウェアは、その男の前で床に突きたてられており、男の着ているコートは少しばかり焦げ痕が残っている。そして、ここに鬼獣・武中の姿は無かった。何があつたかは分からないが、この男が倒したと言つのは確かだろう。その証拠に、彩は無傷のまま床に倒れている。

「あ…あいつ！」

その男を見るなり、大地が声を上げる。大地の声に、男は振り向く。赤く光る男の瞳。それは、優花と同じ瞳だった。

「あ、あれって！」

『優花と同じ瞳だ！』

「てめえ！ 一体何者だ！」

肩に掴まる守を突き飛ばした大地は、右足を踏み込むと同時にグラットリバーを具現化する。具現化されたグラットリバーは、中指の付け根の方から細長い針の様なモノが突き出していた。これは、相手の急所を的確に突く為の武器だが、大地にそれだけの技術は無い。その為、大地はこれは相手を殴る為に使っている。

大地に突き飛ばされた守は、フェンスの柱に右肘をぶつけた。表情を歪め、「くっ！」と小さな声を守は吐き出す。そんな守に目も暮れず、大地はグラットリバーの針の先を男に向ける。



「その眼の事……優花の事……ここで全部吐いてもらおうぞ！」

大地の力強い言葉に、フードを被ったままの男は、右手を大地の方に向ける。大きく開かれた裾口から、右手があらわになった。薬指には赤い水晶の付いたリングが輝き、手首には蒼い水晶の付いたブレスレットが煌く。右手を開いたまま、男は大地の方に眼をやり、静かに口を開く。

「すまんが、俺は何も知らん」

「そんなはずあるか！ 前回と言い、今回と言い、何故俺達の周りに現れる！ 大体、その赤い眼は」

大地がそこまで言った時、視界から男の姿が消えた。そして、耳元で男の声がする。

「俺は……何も……知らん」  
「なっ！」

驚く大地だが、男の左手で頭を触れられると、そのまま意識を失った。何らかの力を使ったのだろう。床に倒れこんだ大地の右手のグラットリバーは、具現化が解けブレスレットに戻る。何が起こったのか分からないグラットリバーは、男に対し怒声を響かせた。

「貴様！ 大地に何をした！」

「すまん。グラットリバー。お前の主には暫し眠ってもらおう。俺も力を使いすぎた。今の状態ではまともに相手は出来んからな」

男が微かに笑みを浮かべたのが分かった。そして、守の方に顔を向け左手を向ける。

「すまんが、お前にも眠ってもらおう」  
「その前に、聞きたい事があります」

その言葉に動きを止める男は、フードを更に深々と被り、押し殺した声で問う。

「何だ？」

不思議そうな表情をする守は、とりあえず体を起し口を開く。

「その赤い眼は……一体」

「さっきも言ったが、これは俺にはわからん」

「じゃあ。何故、俺達を助けるんですか？」

「……」

沈黙する男は、フードの上から頭を搔くと、静かに息を吐く。何やらめんどくさそうな態度の男に、怪訝そうな表情を見せる守。そんな守の視線に負けたのか、男が渋々と言った感じで口を開いた。

「俺にも、目的がある。今は言えぬが、その内お前達もそれに気付くだろう。それから、フロードスクウェア……。あれは……」

そこまで言っつて、男は軽く首を振った。

「いや。今はまだ良いだろう。だが、気をつける。あれは、お前の思っている程生易しいサポートアームズじゃない」

「それって……どういう意味ですか？」

「何れ気付く。それまでは……」

男の左手が守の頭に触れた。その瞬間、守の意識は遠ざかった。

すると、床に突き刺さったフロードスクウェアの具現化が解け、ネツクレスに戻る。静かに息を吐く男は、ゆっくりとフロードスクウェアの方に足を進めた。ここにあるサポートアームズ達は意識が無いのか、声がしない。フロードスクウェアも、グラットリバーも、ウイングロードも、誰一人として口を開かなかった。

男はフロードスクウェアを右手に取り、それを守の右手に乗せる。反応は無い。完全に意識を失っている。それを確認し、男は左手の裾に手を入れた。そして、蒼い水晶の付いた指輪を取り出し、中指にはめる。水晶が微かに光を放ち、男は左膝を床に落とし、右手を静かに床につける。

「全てを癒せ」

ボソツとそう言うと、中指にはめられた指輪の蒼い水晶が光を放つ。そして、床に波紋が広がる。それが、校舎全体へと広がり、学園全体へと広がった。波紋が学園全体に行き渡ると、学園内に居た者全ての意識を奪う。それから、破壊された壁、割れた窓ガラス、黒焦げた地面、傷付いた者。全てを癒し修復する。

修復が始まり、男は静かに腰を上げた。額には大量の汗が吹き出で、疲れが表情に出ている。息を整える男は、右手でフェンスを掴み体を支えていた。

『今日は、術を使いすぎだ』

突如、何処からとも無く突き放した様な口調の声がする。その声に対し、左手で頭を押さえる男は、微かに口元に笑みを浮かべ答えた。

「仕方ないだろ……。ゴノーレフォスト」

『仕方ないって、マスターは無茶し過ぎだって』

先程と違い、子供っぽい声が明るい口調で言い放つ。それに、先程の声の主ゴノーレフォストが失笑しながら答える。

『シエイドネリアは何もしていないから、そういえるんだ。こつちの身を考える』

微かに男の右手の薬指に付いた指輪の赤い水晶が光る。それが、ゴノーレフォストだ。一方、右手首にあるブレスレットに付いた蒼い水晶が光、先程の子供っぽい声が返ってくる。

『何よ。私だって、少し位戦いたいんだから!』

『二人とも。静かに! 誰かに聞かれてたらどうするの!』

今度は美しい女性の声が、ゴノーレフォストとシエイドネリアを注意する。その声に、苦しそうな笑みを浮かべるマスターと呼ばれていた男は、弱々しい口調で言う。

「すまない……。ファイリーラン……」

『いえ……それより、お体の方は?』

中指にはめられた指輪の蒼い水晶が輝く。眼が虚ろになる男は、微かな声でファイリーランにだけ聞こえる声で何かを告げる。唇が僅かに動き、ファイリーランが光を放つ。

『分かりました。では、早速』

そう言うと、中指にはめられた指輪の蒼い水晶が青白い光を放ち、男の体を水が覆う。そして、その姿をかき消した。

皆が眼を覚ました時、全てが終わっていた。怪我の治療。校舎の

修繕。全てが終わり、何事も無かったかの様だった。まるで、全てが夢だったと、思わせている様だ。

そして、夕暮れ時、守は屋上で目覚めた。

「うつつ……あれ？」

体の痛みが無い事を不思議に思う。確かに全身に痛みを伴っていたはずだった。しかし、今は全く痛みは感じず、傷すら消えている。全く何が起こったか分からない守は、首を傾げオレンジ色に染まる空を見上げた。夕日が既に沈みかけており、反対側の空には薄らと月が見えている。

ぼんやりと守は空を見上げ、固まっていた。右手には何故かフロードスクウェアが握られ、あの後一体どうなったのかと、考える。

そして、あの男は一体何者なのかと 心の中で問いかけた。

## 第四十四話 トレーニング開始

いつもと変わらない静かな朝。

静かな路地には、まだ人氣が無い。そんな路地にテンポのいい足音が響く。厚着の格好をした守がランニングをしていたのだ。誰もいない路地を、一人で黙々と一定のリズムを刻みながら。

あの事件以来、守は毎朝ランニングをする様になった。結局、あの時守は何も出来なかったからだ。自分の不甲斐無さを痛感した。だから、守は体を鍛える事にしたのだ。今まで以上に。

「ふっ……ふっ……」

一定の呼吸法をキープし、守はランニングを続ける。額から溢れる汗は、頬を伝い顎へと流れ雫となり滴れた。

走る事数十分 守は神社の前で足を止める。月下神社と呼ばれ、この町では最も古い歴史のある神社だ。この町には他に三つの神社があるが、ここが一番古いと言われている。だが、三つの神社の中で、最も美しい神社なのだ。

そんな神社の下にいる守は、長い階段を見上げ「ふへっ」と、妙な声をだす。その声に反応したのは、胸元で揺られていたフロードスクウェアだった。

『ランニングは終わりか？』

不思議そうなフロードスクウェアの言葉に、守は腕を組み答える。

「いや……。まだ、終わりじゃないけど……」

『それじゃあ、さっさと終わらせてくれ。毎朝毎朝、こんな早くから起されちゃ堪らんからな』

眠そうに欠伸をするフロードスクウェアに、守は呆れた表情を見せた。そして、月下神社の階段を駆け上る。激しい揺れに驚くフロードスクウェアは、声を上げた。

『な、ど、何処に行く気だ？』

『まあまあ。気にすることは無いさ』

『き、気にするに決まってるだろ！ もう少し寝かせろ！』

「授業中にいつも寝てるだろ？ それに、少し位トレーニングに協力しろよ」

守の言葉に不思議そうな声でフロードスクウェアは聞く。

『何だよ協力しろって？ ランニングするだけだろ？』

「何言ってるんだよ。そろそろ本格的にお前の使い方を覚えるって、話を昨日しただろ？」

『あゝあ。そんな事を言っていたな。それと、これ何の関係があるんだ？』

不思議そうな口調のフロードスクウェアに、守は笑みを浮かべながら答える。

「何だよ。知らないのか？ 修行と言ったら神社は定番じゃないですか。アハハハッ……」

のん気に笑う守に、呆れた様な笑い声を吐くフロードスクウェアは、『普通は山だろ？』と、小さく言った。その小さな声を聞いた守は、怪訝そうな表情を浮かべて、「山って、仙人じゃないんだから」と、首を振り言う。その言葉に、呆れた様に『そうかい』と、呟いたフロードスクウェアは、大きな欠伸をし静かになった。

階段を上り切った守は、腰を伸ばし静かに息を吐く。木々に囲まれ、鳥の囀りが聞こえる程静まり返っていた。真つ赤な鳥居を潜った守は、冷たい空気を吸い込んだ。草木のいい香りに、守は笑みを浮かべる。

「ん〜ッ。懐かしいな〜」

神社内を見回す守は、二つ並んだ狛犬を撫でていた。広々として  
いる境内は、人気も無く葉音が微かに聞こえている。もう一度深く  
深呼吸をする守は、「よし！」と小さな声を発し、辺りを警戒して、  
人目につかない場所に移動した。

月下神社の近くの茂みの奥。具現化されたフロードスクウェアを、  
真つ直ぐに構え精神統一する守の姿があった。眼を閉じ、静かに口  
から息を吐く。耳に聞こえるのは、鳥の囀りと揺れる葉音、そして  
風の流れる音。全ての音が消え、頭の中にフロードスクウェアの声  
だけが聞こえた。

『まずは、上段構えから始める』

「おう！ 頼む」

守はフロードスクウェアの指示に従い、重いフロードスクウェア  
を何度も振るった。上から下へ、下から上へ、右から左へ、左から  
右へ。何度も繰り返し行われた。体の動かし方、足の移動の仕方、  
踏み込み方など、様々な事をフロードスクウェアに叩き込まれた。  
もちろん、これだけの事を叩き込むのに、二週間は掛かった。

守は毎朝のトレーニングの疲労からか、授業以外の時間は殆ど眠  
っていた。と、言っても守はいつも授業以外の時間は寝ている為、  
誰も怪しむ者はいない。実際、彩も守がトレーニングをしている事  
を知らなかった。



「あんたの彼氏は、休み時間は毎回寝てるわね」

何だか不服そうな真弓は、机に伏せて寝ている守を真つ直ぐに見ていた。そんな真弓に対し、苦笑いを浮かべる彩は、「だから、彼氏じゃないってば」と、軽く否定する。だが、それを聞くつもりも無い真弓に、小さな体の唯香が眠そうに欠伸をしながら問う。

「ねえ……。火野君って、本当に彩ちゃんと付き合ってるの？」

「そりゃもう、アツアツよ」

「ちよっと、真弓……。嘘は良くないだろ？」

明るくハキハキとした口調の梨奈が、真弓を注意する。真弓は黒髪を揺らし、梨奈の方に顔を向けた。そして、不服そうな表情で答える。

「嘘じゃないって！ 何言ってるのよ梨奈」

「付き合ってるって証拠でもあるの？」

梨奈と違い少し冷やかな口調の零が、鋭い目付きで真弓を見る。

一瞬、ドキッとした真弓は、「そ、それは……」と、口籠った。零のあの眼で見られると、何故かドキッとしてしまう。口籠る真弓に、零は何も言わずにトボトボとその場を去っていった。きつと、図書室にでも向ったのだろうか。

呆然とする真弓は、零の背中を眼で追い、教室から出て行くのを確認してから、彩達の方に顔を向け呟く。

「神出鬼没だよね」

と。その言葉に微かに首を縦に振る梨奈と唯香も、呆然とした表

情を見せていた。一人苦笑する彩は、三人には聞こえない様な小さなため息を吐く。そして、窓の外をボーツと見ていた。そんな彩に、梨奈が心配そうに聞く。

「どうかしたか？ 彩。チョット元気無いみたいだけど」

「へっ？ そ、そんな事無いよ」

「そうかな？ あたしも、元気無さげに見えるけど？ それって、気のせい？」

唯香が少し高めの声でそう言う。無理に笑ってみせる彩は、「本当に、何でも無いって」と言うが、真弓が力強い目付きで彩の眼を見て言う。

「彩！ 悩みがあるなら、心にしまわないで、私等に相談しなよ」

「う…うん。悩みがあったら、相談するよ」

そうは言ったが、実際相談するなんて事は出来ない。彩の悩みは封術師の事だからだ。そんな事を真弓達に相談できるわけは無い。それは、守にも相談できない事。守に相談した所でどうにかなる様な問題ではないからだ。その問題は、自分自身で解決しなければならぬ事なのだ。

それから、彩は真弓、梨奈、唯香と他愛も無い話を楽しんだ。

その頃、青桜学園の校門前には、一人の少女の姿があった。長い茶色の髪を風に揺らし、黒いワンピースの少女。その耳にはキラリと金色の水晶の付いたピアスが見えた。そのピアスから、強い殺気が放たれ、青桜学園中にそれが広がる。この殺気に学園内にいる全てのサポートアームズが気付いた。

『これで、良かったのか？』

「ええ。これで、良いわ」

少女は鋭い眼差しで校舎を見据え、口元に微かな笑みを浮かべた。

## 第四十五話 殺気を放つ者

殺気が学園内に広がった。

真弓達と話していた彩は、その殺気を感じ取った。背筋が凍りそうな程恐ろしい殺気に、内心穏やかではなかったが、真弓達が一緒な為、それを表情には出さない。

一方、守はその殺気に気付く事が出来なかった。毎朝のトレーニングの疲れのせいもあるが、それ以前に、守には殺気など気配を感じる技術は備わっていない。だが、フロードスクウェアは違う。殺気も感じる事が出来、尚且つ、その殺気を放つモノの強さまでも感じ取ってしまった。

以前にも感じた圧倒的な強さのサポートアームズの気配。そして、そのサポートアームズの近くから湧き出る禍々しい気配。それは、きっとそのサポートアームズの持ち主のものだろう。

今の守では到底足にも及ばない。その為、フロードスクウェアは堅く口を閉ざし、守を寝かしたままにしていた。

屋上で寝ていた大地は殺気に飛び起き、右腕のグラットリバーに目をやる。グラットリバーも聊か真剣な声で大地に言う。

『今までに感じた事の無い殺気だ。気をつける』

「ああ。分かってる。鳥肌が立つ位恐ろしい殺気だ」

『ただ、気になる事が……』

少々小さな声でそう呟くグラットリバーに、大地は不思議そうな表情をする。そして、静かに問う。

「何が気になるんだ？」

『いや……。その何ていうのか……。』

「何だ？ はつきりしないな？」

『俺もはつきりとは、わからないが、サポートアームズの気配を感じるんだ』

「サポートアームズの気配？ それじゃあ、殺気を放ってるのは、封術師か、ガーディアンなのか？」

『それが……。俺にもわからん』

その言葉に呆れた表情を見せる大地は、首を軽く左右に振りため息を一つ。そんな大地の態度に焦るグラットリバーは、早口で答える。

『な、何だよ！ お前、俺をバカにしてるだろ！』

「別に。役にたたないな。って思っただけだ」

『う、うるせえ！ そもそも、俺は探索タイプのサポートアームズじゃないんだ。詳しく分かるはずないだろ！』

「まあ、そうだな。取り合えず、行けば分かるだろ」

大地はそう呟き屋上を後にした。

その頃、優花は校舎を出て、グラウンドに来ていた。既にそこから校門前の少女の姿が見える。不適に微笑み優花を真っ直ぐに見据える少女は、茶色の髪を揺らしながら静かに前進してきた。

優花の瞳が、少女が近付くにつれ赤く変化する。ピリピリと緊迫した空気が漂う。鋭い眼差しを向ける優花は、胸元で揺れるキファードレイを握る。そして、静かに問う。

「あなた……。何者？ 鬼獣でも……。人間でもない」

「流石は、赤い眼の死神さん……。と、でも言っておきましょうか？」

嫌味っぽい口調の少女は、耳のピアスに触れる。二人の視線が激

しくぶつかり合う。

「あたしは、命の土と書いて命土。そして、これがあたしのパートナー……」

命土が触れていたピアスが眩い光を放ち、一瞬にして剣へと変る。細く長い柄に、鋭く尖った刃。少女の背丈程のその剣は、どちらかといえば刀に近い形をしている。

禍々しい殺気を帯びたその剣の柄頭には金色の小さな水晶がはめ込まれてた。そして、それが微かに光を放ち、何処からともなく声がする。

『ようやく、俺の出番か』

低音の声。それは、背筋をゾツとさせる位おぞましい声だった。

「あたしのパートナー。ライドフォルド。見ての通り、原形は剣よ」「そう。別に興味ないわ」

優花はそう述べキファードレイを具現化する。長い柄の大鎌。それを右手に握り、真っ直ぐに命土を見据える。柄と刃の間にある緑の水晶が綺麗に光り声がする。

『ライドフォルドだと？ そんな名前、聞いた事ねえな』

「知らないのも無理は無いわ。ライドフォルドが出来たのは、あなた達が出来る更に前よ。あなたが知らなくて無理は無いわ」

『俺様よりも先に出来て、名前も知られていないと言う事は、大した事無い奴らしいな』

嫌味を言う様な口調のキファードレイを、「フツ」と鼻で笑うラ

イドフォルドは、バカにした様に言い放った。

『貴様の様な下級な武器と一緒にするな』

『んだと！』

声を荒げるキファードレイに、命土は不適な笑みを浮かべる。

「全く、口が悪いのは、どのサポートアームズも同じね」

『何が言いたい！ 小娘が』

「あなたごときのサポートアームズに、小娘扱いされる覚えは無いわね」

『くっ！ 貴様！』

命土の挑発で、頭に血の昇るキファードレイは、カタカタと体を震わせていた。黙っていた優花は、静かにキファードレイを構える。そんな優花の姿を見るライドフォルドは、不適に笑う。

『俺達とやりあつつもりか？ 止めておいた方が身のためだ』

『ふざける。俺様が貴様に負けるわけねえ』

『随分と、大口を叩くじゃないか。それじゃあ、負けた時のシヨックが大きいぞ』

『黙れ！ 今すぐ貴様をねじ伏せてやる！』

キファードレイがそう怒鳴る。一方、優花は落ち着いた様子で、命土の動きを観察していた。ライドフォルドを一向に構えようとしない命土は、静かに口を開く。

「あなた、知っているかしら？ この世界に何人のガーディアンマスタールがいるのかを」

「……………」

命土の言葉に聊か渋い顔をする優花は、首を傾げ答える。

「ガーディアンマスターは、世界に一人しか存在しないはずよ」

「違うわ。元々ガーディアンマスターは五人存在したのよ」

「五人？」

「そう。火のガーディアンマスター、水のガーディアンマスター、雷のガーディアンマスター、土のガーディアンマスター、風のガーディアンマスターの五人」

命土のその言葉に、怪訝そうな瞳を向ける優花。命土の言っている事が本当なのか、不明だからだ。それが、もし本当だととして、今それを話す理由も分からない。一体何が目的なのか分からず、命土を更に睨み付ける。

「そう怖い顔をする事も無いんじゃない？ まあ、いいわ。話を聞く気は無いみたいだし、そろそろ始めましょうか？ 殺し合いを」

そう言つと命土の目が変化する。恐ろしく殺気立った鋭い目に。  
。その瞬間、優花とキファードレイは、体中に押し掛かる重圧を感じ取った。重々しく、押し潰してしまいそうな程の重圧を。



## 第四十六話 頼れる背中

グラウンドに刃音が響き、微かに火花が散る。幾度、刃がぶつかり合ったのだろうか。グラウンドには無数の足跡が残り、所々に抉られた痕が残っていた。微かに舞う砂塵は、すぐに風にかき消され、優花と命土の姿がはっきりと映る。

息を荒げる優花。命土と刃を交えて五分程しか経っていない。押し掛かる重圧から、体力の消耗が激しかった。それに、命土の無駄の無い波状攻撃について行くので精一杯だ。

「フフフツ。随分と疲労してますね」

不適に笑みを浮かべる命土には、余裕が窺えた。優花は全力だと言うのに、何故あも余裕なのか不思議だった。そこまで、力の差があるのだろうか？ と、不安になる。それに、この重圧。これが、優花の体の動きを鈍らせていた。

「ハア…ハア……」

『呼吸が荒いぞ！ 確りしろ』

「分かってる……」

少々俯き加減になる優花は、上目遣いで命土を見据える。汗も掻いていなければ、呼吸も整っていた。そして、嫌味に笑みをこちらに向ける。

奥歯を噛み締める優花は、柄を握り締めた。そんな優花に、命土が静かに口を開く。

「悔しいですか？ しかし、そう悲観する事無いですよ。これが、あたしとあなたの力の差です」

『ふざけるな！ 貴様などに』

キファードレイが怒鳴る。だが、キファードレイ自身分かっていた。自分とライドフォールドの力の差を。まさか、ここまで差があるとは、キファードレイ自身知らなかった。そして、思う。『何故、これ程の能力を持ったサポートアームズが、今まで名を知られてなかったのか』と。

ライドフォールドを構えなおす命土は、切っ先を地面に付けると静かに呪文を口にする。

「地を抉り獲物を捕らえる。握りつぶせ。土の爪」

地に触れるライドフォールドが地面に突き刺さる。優花とキファードレイは瞬時に察知した。身の危険をだが、優花が避ければ、校舎に当たってしまう。その為、優花には避けると言う選択肢は残されていなかった。

『優花！』

「ここまで……ね」

ボソツと呟いた優花は、キファードレイの具現化を解き静かに息を吐いた。地が優花の方に向かって陥没していく。まるで何かを抉っている様に。そして、優花の目の前で地面が突起し、土が大きな手となり優花へと振り下ろされた。

だが、その手は優花に届く前に碎け散る。

「あら……邪魔が入ったわね」

『チツ……。面倒だな』

命土は不適に笑みを浮かべ、ライドフォールドはめんどくさそうに

ため息を漏らす。

優花の前には男が背を向けたまま立っていた。それが誰か気付くまで時間が掛かったが、優花は静かに口を開く。

「大地……」

「遅くなった。それより、諦めんのが早いんじゃないか？」

背を向けたまま顔を微かにこちらに向け笑みを見せる。そんな大地の背中がいつもより大きく見えた。そのせいか、少しだけ頼もしく見える。ほんの少しだけだが。

含み笑いを浮かべる優花は、「そうね……」と呟き、もう一度キファードレイを具現化する。そして、小さな声で言う。「ありがとう」と。しかし、その声は大地には聞こえてなく、大地は真っ直ぐに命土をにらんでいた。

「あいつ、何者だ？ それに、あの手に持つてる物って……」

『間違いない！ あれは俺らと同じサポートアームズだ！』

「だが、何で奴が？」

不思議そうな表情を見せる大地は、首を傾げ呻き声をあげる。そんな大地に、優花は静かに答えた。

「何者かは、分からない。けど、私達の敵である事は確かよ」

『そうだな。しかし、珍しくキファードレイが大人しいな』

「しょうがないさ。全く歯がたたなかつた訳だからな」

笑みを浮かべたままそう言う大地に、『なんだと！』とキファードレイが怒りを込め言い放つ。すると、大地は右手の親指を立て、「まだ、元氣じゃねえか」と明るく微笑んだ。

大地を見据える命土は、ライドフォルドを構える。その行動に大

地と優花も各々サポートアームズを構えた。空気が一瞬に変わる。先程よりも更に重々しい重圧が、大地と優花に押し掛かった。

「くっ………すげえー重圧………」

「気をつけて。来るわよ」

「ああ。分かっている。それより、ちゃんと当ててくれよ」

「ええ。外さない様努力はするわ」

優花はそう言い、カードフォルダから風鳥のカードを取り出す。

『時間を稼ぐ。だが、出来る限り早く頼むぞ』

『フッ。俺様を誰だと思っっている。五分もあれば十分だ』

「ンッ？ 五分なのか？ 十分なのか？ どっちだ？」

『……大地。ここはボケる所じゃないぞ』

「なっ！」

『取り合えず、いくぞ』

「お、おう」

少々赤面させながら、大地は命土を見据える。右拳に武装されたグラットリバーは、黒く艶よく光っていた。右手を軽く握る大地は、素早く地を蹴る。それに合わせる様に命土も地を蹴った。

「あたしを楽しませてよ。ガーディアン」

命土がライドフォルドを振り下ろす。鋭い刃が閃光を閃かし大地に向う。だが、大地は右手で軽々と刃を受け止める。そして、命土に顔を近付け口を開く。

「てめえ、何者だ。何故、俺等を襲っ」

「それを聞いてどうするつもり？」

命土は無理矢理大地の体を押し退ける。小さく舌打ちをする大地は一旦距離を取り、体勢を整えた。砂塵が足元に舞い、緊迫した空気が流れる。右手を軽く握る大地は、何か違和感を感じた。それが、何かは分からないが、不気味な感じがした。

「グラツトリバー」

『ああ。何か変だ』

「一体なんだと思う？」

『さあな。ただ油断は出来ないな』

グラツトリバーにそう言われ、大地は力強く右手を握り「ああ」と答えた。

『命土。手を抜く事はないだろ？』

「フフツツ……。いいじゃない。楽しもう。お互い久し振りの獲物なんですから」

『だが……』

「心配ないわ。飽きたらすぐに終わらせるから」

『それならいいんだが……』

不適な笑みを浮かべる命土はライドフォルドを構える。

大地と命土の視線がぶつかり合い、火花を散らす。そんな中、大地の後方では優花が精神を集中していた。

『急げよ。時間稼ぎもそう長くもたねえ』

「分かっている。だから、静かにしている」

目を閉じ意識を集中する優花は、静かに口を動かす。何か呪文の様なものを口に行っている様だが、はっきりとは聞こえない。

睨み合う大地と命土。右手に力を込める大地は、摺り足で左足を前に出し静かに息を吐き出す。来ると、気付いたのだろう。命土はゆっくりとライドフォルドを下段に構え、地スレスレに切っ先を置く。緊迫した空気が辺りを包み込み、二人の間を静かに風が流れた。ギシギシと軋むグラツトリバーは、更に硬度を高めていく。その為、指先が次第に鋭くなり、表面は更に艶やかになっていく。もちろん、命土もライドフォルドもそれに気付いていた。だが、気にはしていない。例え硬くなっても、斬る自信があるのだろう。

『えらく余裕だな』

「な」に。こつちとしてはありがたい限りだ。隙が出来るからな」

笑みを浮かべる大地は左手で右手首を握ると、「いくぞ」とグラツトリバーに言い放つ。グラツトリバーは『いつでもいいぜ』と返事を返す。それと同時に大地は地を駆ける。

## 第四十七話 祈ってるだけでは救えない

激しく火花が散る。正面からぶつかりあうグラットリバーとライドフォルド。黒く艶やかなグラットリバーの表面が、火花と一緒に僅かに欠ける。素早く飛び退く大地は、一定の呼吸を保ちながら、命土を真っ直ぐに見据えていた。

あの落ち着き払った表情。まだ何処か余裕の見える態度。何れにせよ大地には余力を残している余裕は無かった。

「グラットリバー。大丈夫か？」

『……ウツ。やべえな。あの刃の切れ味は、ちつとばかりかき削しいぜ』  
「そうか……。だが、俺達に考えてる時間はねえ。少しでも長く時間を稼ぐぞ」

『分かってるぜ。相棒！』

口元に笑みを浮かべる大地は、左手で右手首を掴むと、額に血管を浮き上がらせながら雄叫びを上げる。

「ウオオオオオオッ！」

右腕に太い血管が浮き上がり、グラットリバーが軋み始める。荒々しい地響きが起き、地が僅かに揺れ動く。大地の足元には小さな亀裂が幾つもあり、小さな音を立て崩れ落ちる。

「一体、何をやる気かしら？」

冷静に大地の様子を見据える命土は、表情一つ変えずライドフォルドを構えず立ち尽くしていた。

地の底から響く様な地響きは、轟々しく音を荒げていく。その音

は次第に学校中に広がり、校内は大騒ぎになっていた。

「あれって……うちの生徒じゃない？」

「ヘッ！ ほ、本当だ！ こ、これはスクープよ！」

教室に居た報道部の鳥山 理穂は、カメラを持ちすぐさま教室を出る。他にも興味本位で校内から出てくる者は沢山居た。もちろん、教師たちもその中に含まれている。遠くで聞こえる生徒達の騒ぎ声。それに、大地が気付いていないわけは無い。

『くっ！ このままだと、周りの生徒も 』

「分かってる！ だが、今の俺に出来る事はこれしかないだろ！」

『確かに、そうかもしれないが……』

「なーに。大丈夫だ。いざとなれば、この身を犠牲にしても他の生徒は守る」

『大地……』

心配そうな声のグラットリバーだったが、すぐにいつもの調子の口調に戻る。

『 だな。お前は体だけは丈夫だからな 』

「うっせえ！ 体だけは余計だ」

そんな会話をする大地とグラットリバーを、教室から見据える彩は小さく呟く。

「何やってんのよ……バカ」

と。そして、心配そうに手を組んでいた。

教室は外に比べ静かだ。彩の他に教室に残っているのが、守だけ



だからだ。他の生徒は外の戦いの野次馬をしに行つたか、次の授業の美術室に行つたかどちらかだろう。既に予鈴はなつた。真面目な連中は既に教室を移動して当然だ。

『……彩様』

ウインクロードの心配そうな声。二人の無事を祈る様に、彩は両手を握りかたく瞼を閉じる。本当は、二人の事を怨んでなど居なかつた。彩だつて、あの事件の事は全て人から聞いていた。優花が自分の意思でやつたわけじゃないと言う事も、その事で苦しんでいる事も。でも、優花や大地を前にすると、どうしても正直になれない自分が居た。そして、ついついあんな態度をとってしまうのだ。

かたく閉ざされた瞼の間から、薄らと涙がこぼれる。怖かつた。大切な人が傷付くのが。そして何より、大切な人が居なくなつてしまふんじゃないかと、言う事が。

「祈ってるだけじゃ……何も救えないぞ」

突然の声に、組んでいた手を解き涙を拭いて振り返る。ボサボサの髪に眠そうな顔つきの守がそこには立っていた。いつもの様にのん気に欠伸をし、右手で頭を掻く守は真っ直ぐに彩の目を見据えている。

「う、うるさい！ べ、別にあんな奴ら」

そこまで言つて言葉が詰まる。いや、守の目を見た瞬間に言葉を詰まらされたのだ。いつもと違う怒りの籠った目。まるで彩に訴えかける様な目。『本当はわかつているんだろ？』と、言いたげで、『助けたいんだろ？』と、言っている様な守の目に、彩は何も言う事が出来なかつた。

「いい加減……意地張るなよ。 水島」

『あ、あなたに何が分かるって言うんですか！ 彩様は 』  
「家族を殺されたんだろ？」

「な、何で守が……」

驚いた様子の彩に、「前に風見さんに聞いた」と、守は静かに言った。そして、真剣な顔つきで更に言葉を続ける。

「彼女。言つてたよ。水島といた三年間楽しかったって……」

「嘘よ！ だったら……だったら何で一年も私の前から姿を消してたのよ！」

『その理由はお前が一番よく分かってるんじゃないか？』

フロードスクウェアが口を挟む。その言葉に戸惑う彩。どうしても理由が分からなかった。一年も会いに来なかった理由が。そんな彩に代わり、ウインクロードが答える。

『理由など簡単です！ 罪悪感があったからです！ それ以外に理由などありません！』

「ウインクロードの言っている事もあるかも知れないけど……。本当の理由はそうじゃない」

『それ以外にどんな理由があるというんですか！』

ウインクロードの言葉に一度目を伏せた守は、真っ直ぐに彩の目を見据え直し静かに口を開く。

「本当の理由は 恐怖だ」

「きょう……ふ……」

オウム返しの様に聞き返す彩は、何処かボンヤリとしていた。そんな彩に代わりもう一度ウインクロードが怒鳴る。

『何故、彼らが彩様に会うのに恐怖を感じるんですか!』

「なら、ウインクロードは感じないのか? 自分が無意識の内に大切な人を傷つけるかも知れないとしたら」

守のその言葉にウインクロードはハツとする。優花が無意識で彩の家族を殺してしまった事を思い出したのだ。そして、守の言いたかった事を理解し、自分が間違っていたのだと気付いた。

押し黙る彩とウインクロードを見据える守は、小さく息を吐くと落ち着いた様子で口を開く。

「それに、風見さんは今も苦しんでいる。水島の家族を殺した事や、自分の呪いの事、何より水島と仲直り出来ない事を一番苦しんでいる。だから」

優しく微笑む守は右手を差し出し言う。

「俺達であいつらを助けよう。そして、あの二人と仲直りするぞ! ついでに、気付かせてやろう。もし呪いで水島を襲っても、大丈夫だって ぐおっ!」

殴られた。彩の渾身の右ストレートで。

「な、何すんだ! いきなり!」

「最後のはどう言う意味よ! 私が襲われても大丈夫だって!」

「そ、それは」

急に頬を赤くする守は、恥ずかしそうに右手で頭を掻く。その態

度に無性に腹が立った彩は、もう一発右ストレートを守におみまいした。左頬を思いつきり殴られた守は、後方によるける。そして、左頬を押さえながら涙目で彩の顔を見ていた。

「何よ。言いたい事があるならハッキリ言いなさいよ！」

「だ…だから……」

何やら言い辛そうな守は俯き口をモゴモゴとさせる。そんな守を見かねたのか、フロードスクウェアが呆れた口調で彩に言う。

『小娘。お前も鈍感な奴だな』

「な！ 何よ！ 大体、何であんたにそんな事言われなきゃなんないのよ！」

『そうです！ 何故、あなたに鈍感呼ばわりされなきゃならないのですか！』

『相変わらず、うるさいな。最近、メッキリ出番が少なくなったと思ってたのに。本当、うるさいな』

そんな事をばやくフロードスクウェアに、『そんな事、今は関係無いでしょ！』と、ウィンクロードが怒鳴る。ムスツとした表情をしたままの彩に、深呼吸を二・三度繰り返した守は、意を決した様に口を開く。

「風見さんが暴走した時は、俺とフロードスクウェアが守ってやるからさ！」

顔を真っ赤にする守はそれだけ言って彩に背を向ける。そんな守の言葉の意味を悟った彩も、耳まで真っ赤にする。そして、恥ずかしさを隠す様に大声で怒鳴った。

「う、うるさい！ 大体、今のあんたで優花をとめられるわけ無いでしょ！」

「はぐつ！ 水島……痛い所を……」

凶星を突かれ落ち込む守は、机に両手を付き小さくため息をついた。そんな守に、いつの間にか教室の入り口に移動した彩が明るく笑みを浮かべながら言う。

「ほら！ 行くわよ！ 弱いとは言え、あんたは私のガーディアンなんだから！ 能力が無い分はその体を張って守りなさいよ！」

「はいはい。分かってますって……。弱いなりに頑張るさ」

守はそう呟き彩の方へと歩きだした。そんな落ち込んだ守の様子に、フロードスクウエアは微かに笑い、『尻に敷かれてるな』と呟く。だが、その声は誰にも聞こえなかった。

## 第四十八話 舞い上がる疾風の龍

地が大きく揺らぐ。大地を見据える命土は、静かにライドフォルドを構える。待っているのに飽きたのだろう。

一方、大地の右腕はグラットリバーに侵食されていた。初めは手の甲までだったグラットリバーの体が、現在は大地の二の腕まで黒い硬質の物体で覆っている。額に浮き出る青筋が、はち切れんばかりに浮き出していた。グラットリバーの表皮が黒く艶立ち、更に硬化していく。

「うぐっ……」

『大丈夫か？』

「心配……すんな……」

大地はそう言い、グラットリバーに無理に笑みを浮かべる。引き攣った大地の笑みを見たグラットリバーは、心配だったが何も言わなかった。大地の右腕をグラットリバーが完全に侵食した時、命土が一瞬にして大地の目の前に姿を現した。

「ごめんなさい。あなたと遊んでいるほど暇じゃないの」

「くっ！」

『大地！』

「ああ。わかってる！」

命土が不適に笑みを浮かべ、ライドフォルドを振り抜く。鋭い刃が大地に迫るが、それより先に大地の黒い右腕が刃を受け止める。澄んだ刃音が辺りに響き、地の揺れがおさまった。ぶつかり合うグラットリバーとライドフォルドに、波動が伝わりライドフォルドごと命土の体が弾かれる。

『グツ！ 何だこいつ！』

弾かれたライドフォルドがそう叫ぶ。それと同時に、大地が右腕を命土に向って振り出す。振り抜かれる大地の右腕は、命土の服を掠めた。ギリギリで後方に飛び退いた命土は、ライドフォルドを構え直し鋭い眼差しを大地の方に向ける。

「両手が痺れる」

『野郎……。何て硬さだ』

「さつきよりも頑丈になったわ」

『ああ。だが、弱点はある。そこを突くぞ』

「ええ。わかったわ」

命土はそう言うと、もう一度大地に向っていく。

呼吸の荒い大地は、少し前屈みになり右肩を落としていた。右腕には力が入らず、ぐったりとしている。表情を歪める大地は、肩で息をしながらグラットリバーに問う。

「後……。どれ位……。もつ？」

『まだ、完全じゃないんだ。これが限界だ』

「ざけるなよ……。まだ、時間をかせがねえーと……」

悔しそうにそう言う大地だが、既に体も限界だった。右腕を包んでいたグラットリバーは、徐々に引っ込んで行き、静かに具現化が解ける。弾ける様に具現化の解けたグラットリバーに、不適に笑みを浮かべる命土は地を蹴り大地へ迫った。

「限界の様ね！」

「だま」

大地がそこまで言った時、前方で澄みよい刃音が聞こえ、命土の叫び声が轟く。と、同時に周囲に集まる生徒達がザワメク。

「何あれ？」

「つてか、ダサッ！」

「今時、あんなカツコの奴いねえよ」

と、様々な声が漏れる中、命土の声が響く。

「誰！ あんた！」

その声に大地は顔を上げる。すると、命土の前に立ちほだかる妙な格好の少年が目に入った。カラフルなワイシャツを着ており、髪の毛はヘアーワックスでオールバックにしている。今時、あんな髪型の奴などいないと、思っていた大地は驚き、呆然としていた。

一方、命土も驚いていた。カラフルなワイシャツに、オールバック、そして、口にはマスクをし、色つき眼鏡を掛けている。どっからどう見ても怪しい奴にしか見えない。だが、両手には確りと大剣の柄が握られ、それがサポートアームズである事も明白だった。

『何とか間に合った様だな』

「……………」

『とつとと行くぞ』

「……………」

何も言わず、少年は頷く。そんな少年は大地の方に体を向けると、右手を柄から放し親指を立てたまま大地の方に突き出した。その瞬間、大地はその怪しい少年が守であると悟った。そして、微かに笑みを浮かべて呟く。



「後は……任せたぜ……後輩」

と。そして、大地は意識を失った。そんな大地の下に駆け寄る一人の若者。これまた、奇怪な服装に、アフロ頭、サングラスを掛けている。どちらにしても怪しいに事に代わりは無く、周囲に集まった生徒がまた、ザワメク。

「こ、今度はアフロ！」

「な、なな、何でアフロ！」

「ソツ？ でもあのアフロ、何処かで見た事が……」

そんな生徒達の声聞き流し、その若者は大地の横に座り込む。そして、胸の位置で揺れるアクセサリーを右手で握る。静かに息を吐き、右手を開く。すると、右手に若者と同じ大きさの杖が現れ、頭の水晶が青く輝く。

「水は全てを癒す、毀れる水滴は優しく暖か、滴れよ！ 蓮はすの葉の雫」

若者が杖を大地の体の上に翳すと、頭の水晶が光を放ち一滴の雫が零れ落ちた。落ちた雫が大地の体に触れると、波紋を広げる。目立った外傷の無かった大地の体に変化は無いものの、その雫は大地を癒した事は間違いなかった。その証拠に、額から溢れていた汗がスツと引いている。

「こっちは、大丈夫です。後はお任せしますよ！」

「……」

「わかった」

静かに頭を下げる守に代わって、フロードスクウエアがそう返事を返した。このアフロの若者は、彩だった。ついでに、このアフロは演劇部から借りてきたカツラだ。

力を集める優花は、そんな彩と守の正体に気付いていた。もちろん、気付いたのは二人がサポートアームズを具現化してからだ。具現化されたサポートアームズと同じ形状の物は少ない。その為、すぐにフロードスクウエアとウィンクロードだとわかったのだ。

『チツ……。今回はあの二人に助けられたな』

『まだ……。安心は……。出来ない』

『そうだな。だが、これで十分時間が稼げる』

『ええ。今の内に……。力を……』

優花は更に意識を集中する。キファードレイに集まる力は、風となり刃の周りを渦巻く。

守を睨み付ける命土。守も息を呑み、真っ直ぐに命土の目を見据える。両腕に押し掛かるフロードスクウエアの重みに耐え、守は静かにフロードスクウエアを下段に構えた。呼吸を整える命土は、ライドフォルドを構えなおすと、静かに口を開く。

「ライドフォルド。次の一撃で終わりにするわよ」

『チツ！ ダメだ……。ここは退くぞ！』

「な！ 何を言ってるの！ あたしは……」

『いいから退くんのだ！ この人数では明らかにフリだ！』

「たかが四人じゃない！ この位なら」

『バカ！ よく見る！』

ライドフォルドがそう叫ぶと同時に、優花の音が響く。

「風塵舞い上げ鋭き刃と化し、汝、我をも切り裂かん」  
「守！ すぐに下がって！」

彩は優花の呪文を聞くなり、守に向ってそう指示する。守は振り返り、コクリと頭を下げると、その場を離れた。これで、優花の対角線には命士の姿しか無い。振り上げられたキファードレイの刃が不気味に輝き、取り巻く風を圧縮する。

「全てを喰らい尽くせ！ 疾風の龍！」

優花がキファードレイの刃に圧縮された風を、一気に解き放つ様に横一線に振り抜く。すると、圧縮された風が暴風と化し、見る見る龍の姿にvari対角線上の命士に向って突っ込む。地を抉る轟音、唸る風、舞い上がる砂塵。それらが、辺り一帯を呑み込む勢いで広がる。周りに集まっていた生徒達も、その舞い上がる砂塵に顔を隠す様に背を向け、守と彩も目を凝らしその行方を見守っていた。

迫り来る龍。その迫力は凄まじく、真正面でそれを見据える命士は、動く事が出来ない。それは、下手に動くとおの龍に呑み込まれてしまいそうだったからだ。

『クツ！ こいつは……ヤベエ……。もう逃げる事はできねえぞ』  
「うるさい……わかってるわ。こんなもの、正面から受けてあげるわ！」

ライドフォルドを構えなおす命士は、これを正面から受け止める意思を固めた。そして、不適に笑みを見せ、迫り来る龍に突っ込んでゆく。

『や、やめる！ 命士』

ライドフォールドがそう叫ぶが、既に遅かった。振り上げられたライドフォールドは、一直線に龍に向って振り下ろされていた。振り下ろされた刃が龍と衝突し、その瞬間龍の形を保っていた風が辺り一帯を吹き飛ばすかの勢いで、爆発を起した。爆音が轟き、爆風が広がる。周囲一帯を砂塵が覆い尽くした。

弾けた土が荒れ果てたグラウンドに落ちる音が微かに聞こえるだけで、後は何も聞こえない。しかし、地面には無数の血痕が残っていた。それが、命土のものである事は言うまでも無い。

## 第四十九話 喫茶店の四人

青桜学園近くの喫茶店。

少しばかり険悪な雰囲気の四人組。

窓際に座る守は緊張した面持ちで、険悪な雰囲気の中苦笑いを浮かべる。そして、考える。この状況を打開する術を。

その隣りに座る彩は、眉間にシワを寄せムスツとした表情を見せ、向かいに座る大地の顔をジツと見つめていた。何から話せば良いか分からず、頭の中で色々と考えていたのだ。

彩の向かいに座る大地は、眉間にシワを寄せる彩の顔を、目を細めて見据える。何故、こんなに睨まれているのかと、考え悩む。どうすればいいのかと。

一方、守の向かいでは、優花が落ち着いた様子でメニューを眺めていた。少しだけ残念そうな表情を見せる優花は、メニューを置くと深々とため息を吐く。目的だったモノが無かったのだろう。

この沈黙の中、四人のサポートアームズである、フロードスクウェア・ウインクロード・グラットリバー・キファードレイは大人しくしている訳も無いがみ合いを続けていた。

『んだとこの野郎！ 一回助けたくれえで調子のんな！』

キファードレイの荒々しい口調に、ウインクロードが皮肉たつぷりの声で言い返す。

『フツ……。強がりばかりですね。私達が来なければ、あなた方は』

『何だ何だ？ 仲直りの為に集まったんじゃないのか？』

ウインクロードが言い終わる前に、フロードスクウェアが口を挟

んだ。その言葉に、彩の右の眉がピクツと動く。それに連鎖する様に大地の右手の中指がピクツとする。眉間にシワを寄せたままの彩は、プクツと頬を膨らすと、唇と尖らし不満そうな表情を、横にいる守に向けた。

彩の視線に気付いていた守は、微かに視線を逸らし絶対に彩と目を合わせない様になっている。今、目を合わせれば何を言われるか、分からないからだ。そんな守の制服の裾を、テーブルの下で掴むと、大地や優花にばれない様に引っ張る。

流石の守も、渋々と顔を彩の方に近づけ囁く

「何？ ってか、水島さん。仲直りするんじゃないんですか？」  
「うるさいわね！ それが出来ないから助けを求めているのよ」  
「何で、俺に助けを求めるんですか！ 第一、俺関係ないでしょ？  
何で俺までこの気まずい中に……」

少し涙目の守は、首を振り両肩をガツクリと落とす。そんな守の肩を掴む彩は、激しく体を前後に揺さぶり小声で怒鳴る。

「あんた！ パートナーでしょ！ どうにかしなさいよ！」  
「や、やめ、や ツー！」

突如、彩の手が守の肩から離れる。その瞬間、後方へと投げ出された守は、後頭部を窓ガラスに激しくぶつけた。鈍い音に彩・優花・大地の「アツ」と言う声が混ざり合う。頭部を押さえ悶える守の姿に、彩・優花・大地の三人は啞然とし、硬直していた。

「う……う……」

苦しむ守の姿に誰一人言葉を掛けない。掛けないと言うよりも、掛ける言葉が見つからないと言う方が正しかったのかもしれない。

沈黙の中、守の呻き声だけが聞こえ、三人の表情は引き攣っていた。そんな中、初めに守に声を掛けたのは、首からぶら下がるフロードスクウェアだった。

「お、お前、大丈夫か？」

「だ…だ ……大丈夫そうに見えますか！」

フロードスクウェアの言葉に突如叫ぶ守。だが、その声が頭をズキズキとさせ、もう一度守は蹲った。その行動に半笑いを浮かべる彩と大地に対し、楽しそうに優花が微笑んだ。

「フフフツ……。面白い人ね」

「！」

その言葉に、彩と大地は驚き、優花の方へと顔を向け疑いの眼差しを向ける。そんな視線を気にせず、優花は体を前のめりにし、守の頭を撫でながら、「痛い痛いのとんでいけ〜」と、楽しげに言う。恥ずかしそうに顔を真っ赤にする守は、「うっっ……止めてくださいよ！」と叫び、涙目で優花の顔を見た。それが、更に優花の心を燦る。

「んん〜ん。可愛い！ やっぱり、大地と違って、守君は可愛いわね」

「なっ！」

「嘘ッ！ 優花って……」

表情を引き攣らせる大地と彩の二人は、少々体を仰け反らせながら優花と守の方を見ていた。優花があんな表情をする所を、彩も大地も初めて見た。そして、優花が守の様な子がタイプなのだと、この時初めて知り、驚き呆然としていた。

そんな彩と大地は顔を近づけると、コソコソと話を始める。

「優花が、あんな風に笑ってるの初めて見た」

「お、俺もだ……。まさか、あんな一面があるとは……」

二人はもう一度優花の方へと顔を向ける。そして、「意外だ」と声を揃えて言う。そんな二人の視線に気付いていないのか、優花は嬉しそうな目で守を見つめ、「フッフッフ」と楽しそうに笑う。それが、女の子っぽく可愛らしく、彩も大地も少しだけ優花に見とれていた。

頭部を押さえたまま恥ずかしそうにする守は、優花の可愛い笑顔を見る事が出来ず、赤面しながら俯いていた。そして、隣りの彩に助けを求める様に、チラチラと視線を送るが、彩は全く気付く気配は無い。それどころか、大地に顔を近づけヒソヒソと話をしているのが見えた。

「優花って、変ってるわよね？」

「そ、そうだな……。少し人より感性が違うんだろ？」

「そう言う問題かな？　そもそも、守の事を可愛いだなんて……可笑しいわよ」

彩と大地のヒソヒソ話に、グラットリバーが口を挟む。

『いいんじゃないか？　優花ならあれ位の優男の方がお似合いだと俺は思うぞ』

その言葉に、「えーっ」と、否定的な声を上げる彩は、首を左右に振りながら、右手を顔の前で激しく振る。

「無い無い無い。ありえない。絶対に無いー！」



『何、ムキになって否定してるんだ？ まさか 』

『私もグラットリバー殿の言う通りだと思います』

「ムツ……。珍しいな。ウインクロードとグラットリバーの意見が合うなんて」

「そうね……。確かに珍しい」

疑いの眼差しを胸元で揺れるウインクロードに向ける彩は、そつと右手でウインクロードを持ち上げる。薄らと光を放つアクセサリの頭の水晶に、真っ直ぐに視線を送った。首を軽く傾げる大地は、右手首のグラットリバーに視線を落とし、静かに問う。

「なあ、何してるんだ？ 彩の奴」

『さあな。俺に聞くな。それより、お前はどっ思うんだ？ 優花と守の事』

「ど、どっつて……」

大地は守と優花の方に顔を向ける。一緒にいる時には見せた事無い、優花の笑顔に大地は何故か胸が痛んだ。きつと、自分が不甲斐無かったのだろう。長い間一緒にいたのに、優花をあんな風に笑わせる事が出来なかったのが。

いつも、優花が辛い思いをしているのには、薄々気付いていた。だが、大地は何も出来なかった。慰める事も、その思いを和らげる事も。辛い気持ちに気付いていたのに、手を差し伸べられず、優花はずっと孤独の中にいたのだ。

そんな事を考えると、守なら優花の辛い気持ちを和らげてくれるんじゃないかと、少なからず思った。そして、グラットリバーに答えを返す。

「俺も……。似合っていると……。思う。あいつなら」

「バカーッ！」

「ふがつ」

何故か彩が左フックを大地に見舞う。鈍く重々しい短音が聞こえた。右頬を打ち抜かれた大地の顔は、大きく左に振られ、体が椅子から投げ出される。そして、そのまま床へと激しく倒れこむ。静まり返った喫茶店内の客の視線が、横たわる大地へと向けられた。守も優花も、何も起ったのか分からず、不思議そうな表情で大地と彩を見ていた。

床に倒れたまま動かない大地は、拳を小刻みに震わせる。そして、立ち上がり彩の方に顔を向け、「何すんだ！」と、怒鳴った。だが、その瞬間に彩の右のショートアップパーが、大地の腹部を抉り、大地はすぐに大人しくなった。

## 第五十話 報道部

青桜学園の片隅。

様々な部の部室となつている二階建ての建物。その二階の右端の部室から、妙な奇声が発せられる。

「キエエエツッ！」

何とも不気味な奇声に、運動部の面々は奇妙な表情をしながらその部室を見上げていた。ユニホーム姿に丸刈りの野球部員三年、田島 真吾は身震いをさせ視線を静かに落とし言う。

「うっつ。寒気がするな」

「全くだよ……」

それに答えたのは、その隣りに居た同じく野球部員三年の金子 浩平だった。まだユニホームに着替えてはおらず、カバンを肩に担いでいる。結構真面目な奴だ。深々とため息を吐く野球部の二人は、もう一度だけ二階の右端の部室を見上げ、苦笑いを浮かべる。

「報道部の連中、この時期なると見境無いからな」

「全くだ……。田島も気をつけるよ。報道部に、今変なネタを掴まれたら、即記事にされるぞ」

「ああ……。そうだな。しかし……」

田島は迷惑そうに目を細め、両肩を落とすと、「最近、報道部荒れてるよな」とボソツと呟いた。金子は、その言葉に何度も頷き、「事件の真相が掴めないからだと、少しだけ呆れた感じで答えた。

「んーもう！ どうなったのよ！」

部室内に響く理穂の怒声。先ほどの奇声もこの理穂が発したものだ。少しだけ散ばった部室に、複数の生徒。その中に部長の姿があった。相変わらず、細々とした糸目の部長は、少しだけ困った表情をしていた。

「理穂く〜ん。頼むから、部室を散らかすのは止めてくれよ」

のん気な部長の言葉に、理穂がキレる。

「何のん気な事言ってるんですか！」

激しく机を叩く理穂。痛々しく鈍い音に、その場に居た皆が思う。『うわっ、痛そう』と。もちろん痛かった。その為、理穂の目には薄らと涙が浮かんでおり、それを必死に我慢する様子の表情が窺える。

啞然とする部長は、鼻から静かに息を吐くと、少しだけ右に体を傾けた。凄く面倒臭そうな部長は、やる気の無さそうで眠そうな眼をした若菜に視線を向ける。長い髪を二つ分けのお下げにしている若菜は、時々そのお下げにした髪を触り、カメラのフレームを覗き込む。

何をしているのか、理解に苦しむ所があるが、この場を収める為に、部長は静かに口を開く。

「それじゃあ。時間も無いし、各自で記事を纏めようか」

「ちよ、ちよっと待ってよ！ 部長！」

「タメ口禁止だよ」

のんびりとした口調の部長に、ムスツとした表情を見せる理穂は、眉間にシワを寄せる。その表情に、聊か困った表情を見せる部長に代わり、大人っぽく可憐な女性、楠木くすのき 恭子が言う。

「ダメよ。女の子が、眉間にシワを寄せちゃ」

長くウェーブの掛かった茶色の髪を揺らし、理穂の眉間に右手の人差し指を当てる。その行動に理穂は更にムスツとした表情をする。楠木はこの報道部の副部長で、エースである。エースと言うのは、トップ記事を扱っていると言う意味だ。ついでに、理穂と若菜の二人は隅の方の目立たない所の記事を担当している。だが、すぐにトップの座を奪おうと、理穂は考えていた。

「もういいです！ 行くわよ！ 若菜」

「エーッ……。何故、アタシが……」

迷惑そうな表情をする。当然と言えば、当然だ。だが、有無を言わず、理穂が若菜に顔を近づけ静かに言う。

「行くわよ」

少しだけ怖い理穂の顔に、渋々と若菜は「分かりました。一緒に行きましょう」と、了承した。殆ど脅されたという感じだったが、正直、若菜は理穂と一緒に居る事が好きだった。理穂と居れば、色々面白い事に遭遇するからだ。それに、何かとスクープを見つける事が出来るかも知れないと、若菜自身思っていた。

部室を飛び出し、校内をうろつく理穂と若菜。やる気の感じられない若菜は、カメラのフィルター越しに様々な風景を眺めていた。そんな若菜の前を歩く理穂は、深々とため息を漏らす。

「はづ〜っ……。どうしよう……これから」

「計画性無さ過ぎですよ。そもそも、楠木先輩が居る限り、トップ記事は無理ですよ」

「うるさいな〜」

額に掛けていた眼鏡を下ろし、鼻に掛ける。首から提げるカメラを手に持ち、辺りを見回す。あれつきり、一度も鬼獣を写した事はない。だが、理穂は鬼獣の正体を探る為、色々調べていた。しかし、何の手がかりも掴めていないのが現状だ。

「う〜っ……」

肩をガツクリ落とし、不満そうな表情の理穂。校内を歩き回ったが、結局何も見つからず、何故か電力室前に来ていた。ここで初めて鬼獣の姿を写真に写したのだ。と、言ってもそれは偶然だった為、一体何が起こったのかは理穂自身分からなかった。

ポーツと空を見上げる理穂は、先日の光景を思い出す。オールバツクの男とアフロの男の事。

実際、あれは変装した守と彩だったが、皆あれは二人とも男だと思っ込んでいる。もちろん、理穂自身もあれは男だと思っっていた。

「はあ〜っ……あの時の四人組の正体さえ掴めればな〜」

「四人組と言うと、先日のグラウンドを破壊した四人の事？」

「そう。そもそも、あの四人組は何？ 人間なの？」

「アタシに聞かれても、答えられませんよ」

欠伸交じりの声に、仕方なくため息を漏らす理穂。そんな理穂に、不意に若菜が問う。

「あの子に聞けば？」

「あの子？」

「そう。理穂を襲った」

その言葉を言い終える前に、理穂が慌てて口を開く。

「ば、ばばば、馬鹿な事言わないでよ！　だ、ただ、だい、だい、第一、わ、わわ、私はおそ、襲われてなんか！」

あまりの慌てっぷりに、聊か呆れた表情の若菜は、面倒臭そうに座り込む。そして、チラチラとミニスカートの下から見え隠れする理穂のパンツをカメラに収める。そんな事とは知らず、慌てまくる理穂は、力一杯否定している様だが、若菜はどうでも良かった。

ある程度時間が過ぎ、ようやく落ち着きを取り戻した理穂に、若菜はつまらなそうに欠伸を一つしてから言う。

「マニアには高く売れる」

「だ、だから、マニアにはって、どう言う事よ」

少しだけ頬を赤く染める理穂が、怒声を響かせる。すると、若菜は先程の話へと戻す。

「理穂、覚えてない？　あの理穂が襲われた日の事」

「だ、だから、襲われてないって言ってるでしょ！」

面倒臭そうな表情を一瞬見せた若菜だが、すぐに疲れたようなため息を吐き話を進める。

「それは、どうでもいいです。それよりも、あの時あの子は明らかに理穂を守った様に見えた」

「なら、何で襲つてるとか言つつのよ」

「その方が面白いからですよ」

「あんた、意地が悪いわね。まともな大人になれないわよ」

皮肉っぽく理穂は言ったが、若菜は全く気にしていない様に反論する。

「記者なんて、まともな人がやる仕事じゃないわよ」

「イヤ……そんな事ないでしょ？」

「そうかな？ アタシ的にはそうだと思うよ。人の秘密とか、芸能人のプライベートとか追い掛けて記事にして世間の眼に晒しちゃうんですもの。まともな人がやる仕事じゃないでしょ？」

疲れた様なため息を吐く若菜は、首を左右に何度か振る。少しだけムスツとした表情を見せる理穂は、「そうかも知れないわね」と、不機嫌そうな声で言い放った。



## 第五十話 報道部（後書き）

祝・五十話！！ 祝・連載一周年！！

知らぬ間に、連載始めて一年が過ぎました。

一年……色々ありました。でも、まだ五十話しか進んでないんですね。頑張らなきゃ。

結構、読んでくださる人が居る様で、僕も更新するのが楽しみです。

しかし、本当に楽しんでもらえているのかと、不安になる事もあり、作者の独り善がりになっているのでは？ と、思うこともあり  
ます。

それでも、必ず完結させるつもりです。まだまだ長くなるかも知れませんが、これからもよろしく願います。

## 第五十一話 月下神社

彩が大地と優花の二人と仲直りして数日が過ぎた。

鬼獣も暫くは姿を見せず、平穏な日々が続く。そんな間も、守は朝のトレーニングを欠かさず、月下神社で行っていた。

「うりゃッ!」

『踏み込みが甘い!』

「フンッ!」

『振りが遅いぞ!』

月下神社の敷地の森に、守の威勢の良い声と、フロードスクウェアの厳しい口調の音が響く。始めた頃に比べると、幾分鋭い風音を鳴り響かせる。勢いの良い太刀風が、落ち葉を舞い上げた。

「ハア…ハア……」

具現化されたフロードスクウェアを元に戻した守は、タオルで汗を拭き呼吸を整える。重量のあるフロードスクウェアを、三十分も振り回す事が出来る様になったのは、チョットは成長したと言う証拠だろう。

まだ肩で息をする守は、顔を上げ空を見上げる。少しだけ冷たい朝の風が、汗で湿った頬を優しく撫でた。

「はふっっ……疲れた……」

『疲れたって……。お前、三十分しか動いてないぞ』

「あのな……。その前にランニングを二時間もやったんだぞ……」  
『やりすぎだな。休みだからって、調子に乗るからだ』

フロードスクウェアが当然だろうと、言いたげな声でそう言うと、守は困った様な表情を見せ、ボソリと言う。

「最近、誰かに監視されている気がするんですよ。特に昼休みと放課後。だから、休みの日と朝しかトレーニングが出来無いんです！」

「気合入ってるね。守君」

「はいっ！……ンッ？」

突然の声に返事をした守だが、その声はフロードスクウェアの声ではない事に気付いた。恐る恐る振り返った守の視線に映ったのは、巫女の格好をした望美だった。驚き慌てる守は、口をパクパクとし、妙な行動をとる。

穏やかな笑みを浮かべる望美は、守の慌てぶりなど、気づいていない様だった。その為、のんびりとした口調で、守に問う。

「他にも声がした様な気がしたけど、守君の他に誰がいるの？」

「い、いない。いないよ！俺以外誰もいませんよ！」

「そう？ うん……。確かに他にも声が聞こえたんだけど？」

不思議そうに首を傾げる望美は、持っていた竹ぼうきに体重を掛ける。冷や汗を掻く守は、引き攣った笑みを望美の方に向け、何とかこの場を誤魔化そうと口を開く。

「の、望美さんこそ、こんな所で何を……しかも、そんな格好で」

「ンッ？ 守君、知らなかった？ ここ、私の家だよ」

「へッ？」

意外な言葉に呆然とする守は、ふと望美の苗字を思い出し叫ぶ。

「うおっ！ そ、そうだ！ 望美さんの苗字って、月下じゃないか

！」

「そうだよ。中学も一緒だったのに、忘れてたの？」

「いや……。同じクラスになった事ありましたっけ？」

「酷いな。三年間同じクラスだったのに」

可愛らしい笑みを見せたままそう言う望美に、守は「そうだった」と、小さく呟き右手で額を押さえる。確かに、守は望美と中学三年間同じクラスだった。それに、何度も隣りの席になった事もあり、幾度か言葉を交わした事もあった。しかし、その当時暗く女子生徒と滅多に話さなかった守にとっては、曖昧な記憶でしかなく、あまり思い出せるものではない。

複雑そうな表情を見せる守は、腕組みをして必死に望美との事を思い出そうとする。色んな記憶を探るが、結局何の思い出も見つからなかった。

「ゴメン……。中学の時の事、あんまり覚えてない……」

「多分、そうじゃないかって、思ってたから、大丈夫だよ」

微笑む望美にそう言われ、胸に何か鋭いものを突き刺された様な錯覚を覚える。そんな守に優しくのんびりとした口調で望美は言う。

「中学の時の守君って、女子とはあんまり話さなかったから。それに、授業中以外、殆ど寝てたから」

「うん。言われてみれば……」

中学の時から、少しだけ変わった性格をしていたのだ。授業はちゃんと受けるが、休み時間は寝る。給食時間は、とりあえずボーツと食事をし、掃除時間はボンヤリと掃除をする。と、言った様に、存在感に欠ける人物だった。きつと、同じ中学の奴に守の事を聞いても、覚えている奴は少ないと、守自身も思っている。

「でも、守君変わったね」

「……そうですか？ 基本、中学と一緒にですよ。休み時間は寝て、昼休みはボンヤリ過ごして」

高校での行動を思い出しながらそう言う守を見て、クスクスと望美が笑う。突然の事に困惑する守は、少しだけ頬を赤く染める。何だか恥ずかしかった。そもそも、女性とこんな二人きりになるという状況だけでも、緊張するのに、巫女の格好をした望美の姿に、更に緊張していた。

頭の中が徐々に真っ白になりつつある守は、この場を何とか切り抜けようと考ええる。しかし、考えれば考えるほど、思考は停止する一方だ。そんな守に助け舟が来た。

「望美ッッ」

男の声が、望美を呼ぶ。声質からすると、三十代後半から四十代前半位の男の声だと思う。きつと、望美の父親辺りだと、守は推測する。そして、胸中で呟く。『助かりました。ありがとうございます』と。

守の気持ちなど全く気付いていない様子望美は、少し残念そうな顔をし、軽く微笑んだ。

「ゴメンね。父が呼んでるから、行くね」

「う、うん。全然気にしないでいいですよ。行って上げてください」

守は自然と早口になる。正直、これ以上一緒に居ると、本当に思考回路がショートしてしまいそうだったのだ。そうだとも気付かず、望美は少しだけ名残押しそうな顔をして、歩き出す。

ホッと胸を撫で下ろす守は、両肩の力を抜き頂垂れる。そんな時、望美の声が戻ってきた。

「そういえば、守君」

戻ってきた望美の声に、焦った守はオドオドと周辺を走り回る。それを見た望美は、「トレーニングですか？」と、不思議そうに聞いた。トレーニングでは無かったが、守は激しく頷き、「う、うん。トレーニング」と答え、引き攣った笑みを見せ走り回る。

「凄いな。本当に、気合入ってるね」

「う、うん。体、鍛えたいから」

感心する望美に、無理に笑ってみせる守は、その場凌ぎにそんな事を口走った。その言葉に、いち早く反応する望美は、嬉しそうに満面の笑みを見せ口を開く。

「体、鍛えるなら、いい所教えてあげるよ」

「へっ？」

意外な言葉に唖然とする守は、言葉を発することも出来なかった。もちろん、守が言うよりも先に、望美ののんびりとした口調が、先に言葉を発したからだ。

「智夏ちゃんの家って、道場やってるんだよ。剣道とか、柔道とか、色々やってるみたいだから、体鍛えるのには最適だと思うよ。私連絡しておくから、この後行ってみるといいよ」

守が拒否する暇も無く、望美はその場を走り去って行った。漠然とする守は、そんな望美の後ろ姿を見送り、「俺に拒否する権利は……」と、呟く。それが、聞こえていたのだろう、フロードスクウェアは小さな声で『無いな』と、言い放った。

## 第五十二話 パートナー

月下神社でのトレイニングを終えた守は、家へと帰宅していた。トレイニングでの疲れと、ジリジリと地を照らす日差しに、少しだけふらつく守は、水を飲む為にリビングへと移動する。

「お帰り。何処行つてたの？」

リビングに入ると、ソファアに座りアイスを片手に持つ彩がいた。ここは守の家なのに、随分と寛いでいる彩に、聊か理不尽さを感じる守だったが、気にせず返答する。

「チョットそこまでですよ。それより、母さんは？」

「うん。チョットそこまでだつて」

「チョットそこまでと言う事は、買い物かな？」

「多分、そうだと思うよ。買い物カゴ持ってたから」

その言葉に守は目を細める。そう思うなら、初めから買い物に行つたと言えと、思ったがそんな事口が裂けても言えなかった。ため息を漏らす守は、コップ一杯の水を飲み、フロードスクウェアをテーブルの上に置く。アイスを銜える彩は、そんな守の行動を不思議そうに見つめていた。

「な、何？ ジロジロと見て……」

「守って、あんまり自分の事話さないよね」

「何ですか、急に」

目を細める守は、少しだけ警戒した様に彩を見る。何を警戒しているのか分からない彩は、不満そうな表情を見せると、不服そうな

声で言う。

「そんなに警戒しなくていいじゃない。別に問いただして居るわけじゃないんだし」

「娘。他人の過去を知りたがるのはよくないぞ」

「別に知りたがってるわけじゃないけど……」

少しだけ困った様な顔をする彩。自分でも悪い事だと思ったのだろう。そんな彩をウィンクロードがフォローする。

「彩様は、守殿を心配なさっているのです」

「心配なら、人の過去を知りたがってもいいのか？」

「別にそんな事は……」

「なら、もうこの話はなしだ。誰でも知られたくない過去はある」

やけに説得力のあるフロードスクウェアの言葉。確かに誰もが皆知られたくない過去を一つ位持っている。守も 彩も 。

暫く沈黙が続いた。時を刻む音だけが聞こえ、静かに時が過ぎる。しかし、すぐに守が口を開いた。明るくいつもの様にマイペースな口調で。

「俺もアイス食べたい」

暑さに我慢が限界だったのだろう。そう呟くと、守は冷蔵庫へと向った。冷凍室を開けた守は、少しだけ浮かれ気分中で中を覗く。鼻歌混じりで冷凍室をあさる守だが、暫くして鼻歌が止み冷凍室が閉められた。

「どうかしたのか？」



テーブルに置かれたフロードスクウェアが、異変に気付いたのか、守に声を掛けた。その声に彩は守の方に顔を向ける。そして、守の顔を見て彩は驚き、表情を引き攣らせた。

「ど、どうしたの？ そ、そんな顔して……」

『何かあったのですか？』

気になったのか、ウィンクロードも話に加わる。その時、守はその場に崩れ落ち、床に両手を着くと、暗い守の声が聞こえた。

「ううっ……。俺の……。俺のアイスが……」

『ま、まさか……』

守の言葉を聞いたフロードスクウェアが声を震わせる。その声は彩とウィンクロードにも聞こえた。その為、啞然とした様に守の事を眺めている。彩の冷たい視線を浴びる守だが、愕然と落ち込む守には全く効果はなかった。

「アイス一つで、あそこまで落ち込めるとは……」

『本当に、あの人をガーディアンに選んでよかったのでしょうか？』

「……不安だよ。私も」

彩とウィンクロードは改めて後悔した。守をガーディアンに選んだ事を。

暫く時は経ち、落ち着きを取り戻した守は風呂へと向った。その間、リビングには彩とフロードスクウェアとウィンクロードの三人だけが残った。テーブルの上のフロードスクウェアは、大きな欠伸を一つ。一方、ソファーに座る彩は首からぶら下げた小さな杖のアクセサリーを右手に持ち静かに口を開く。

「最近、毎朝出掛けるけど、何してるのかな？」

『気になるのですしたら、調べますが……』

「でも、さっき過去を詮索するなって言われたから……」

フロードスクウェアには到底聞こえてはいないが、コソコソと話しているのは分かった。

『ヒソヒソと密談か？ それなら、俺に見えない所でやるんだな。目障りだ』

荒々しい口調でそう言い退けるフロードスクウェアに、噛み付いたのはウィンクロードだった。

『何ですか！ 別にあなたには関係ない事でしょ！』

怒鳴るウィンクロードの言葉を無視するフロードスクウェア。両者の気迫が激しくぶつかりあっているのが、何と無くだが彩にも分かった。その為、困った様に苦笑いを浮かべ、両者の争いを止めようと立ち上がる。

「まあまあ、お互い仲良くしようよ。パートナーなんだし」

『言っておくが、俺は守のパートナーだが、お前等のパートナーではない』

「守が私のパートナーなんだから、そのパートナーのあんたは、私のパートナーでもあるって事でしょ？」

『……？』

彩の言っている事をフロードスクウェアは理解してはいなかった。元々それほど賢いサポートアームズではない。その為、遠回しな言い方などは、大分理解するのに時間が掛かるのだ。

混乱するフロードスクウェアを横目に、こっそりとリビングを後にした彩は、静かに二階へと上がった。

「もう。ウィンクロードは、すぐにフロードスクウェアと喧嘩しないでよ。お互い命を預け合うパートナーなんだから」

『申し訳ありません……。ですが』

「ですが、じゃない。お互いを信じ合わなきゃ。私は守を信じる。

だから、ウィンクロードも」

「俺が、どうかした？」

彩が言い終わる前に、背後から突如守の声がした。

「へっ？ ま、まも」

驚き素早く振り返る彩だが、焦りから右足を踏み外した。

「キヤッ！」

彩は悲鳴を上げると同時に瞼を硬く閉じる。

『彩様！』

「水島！」

守とウィンクロードの声がほぼ同時に聞こえ、それと同時に階段を滑り落ちる鈍い音が響き渡った。その音にリビングに残されたフロードスクウェアも気付き声を上げる。

『どうした！ 何かあったのか？』

先程はあんな言い方をしたが、実際はフロードスクウェアも彩達

の事を気に掛けているのだ。しかし、フロードスクウェアの声に返事は無かった。

『何があつたんだ？ 一体……』

不思議に思つたフロードスクウェアだったが、動く事も出来ない為、静かにそう呟いた。

「あうっ……」

階段の下では、守が妙な声を上げていた。

「だ、大丈夫？」

守の体の上で体を起した彩が、心配そうに守の顔を見下ろす。咄嗟に守が庇ってくれたのだ。体を張って。その為、守は背中を激しく階段に強打していた。

「ううっ……。どうでもいいけど……重い」

「ふえっ！ ご、ごめん！」

彩は大慌てで守の上から退く。痛み顔に顔を歪める守は、ゆっくりと体を起す。すると、風呂上りでまだ湿った黒髪の先から、雫が数滴零れ落ちた。首から掛けていたタオルを手に取る守は、呆れた様に目を細め、髪の毛を拭きながら静かに口を開く。

「怪我は……無い……みたいだね」

「う、うん。そ、それより、大丈夫？」

少し頬を赤く染める彩は、恥ずかしそうに尋ねた。特に表情を変

えるわけでもなく、落ち着いた様子の守は、右手で軽く頬を搔きながら答える。

「全然平気。体は鍛えてるから、これ位なら問題ないよ。それより、何処も怪我して無いよな？」

「う、うん」

「なら、良かった。それより、気をつけてくれよ。打ち所悪いと、結構危ないんだから」

守はそう言い立ち上がると、首の骨を二、三度ポキポキと鳴らし、大きな欠伸を一つ。そして、面倒臭そうな目をして歩き出した。そんな守の背中を見据える彩は、初めて会った時に比べて、その背中が大きくなった気がした。

## 第五十三話 僅かな綻び 見えざる亀裂

街の中心部。

多くの高層ビルの建ち並ぶその一角で、建設中のビルがあった。

現在、奇妙な事件が続き、工事は滞っている。作業員が数名、何かに切り裂かれ、重症を負うと言う事件があったのだ。怪我をした人達は、突如突風が吹き、何かする鋭いモノが体を切りつけたと言っている。専門の人の話では、ただの鎌鼬かまいたちの仕業だというが、そう頻繁にそんな現象が続くとは思えない。その為、大地と優花の二人は、その建設中のビルの一階に居た。

右膝を立て座り込む大地は、右手首のブレスレットを左手で掴み、軽く手首を回す。冷静な面持ちの優花は、大地をチラツツと見て、キファードレイを具現化する。柄が長く、大きな三日月型の刃。それを軽く脇に立てる優花は、息を吐き静かに目を閉じすぐに開く。すると、その瞳が赤く輝き、鋭い目付きに変わる。

「行くわよ」

「ああ。いつでもいいぜ」

靴紐を硬く結んだ大地は、静かに立ち上がり、右手の骨をボキボキと鳴らした。刃と柄の間にある緑の水晶は、薄らと光を放つとキファードレイのガラガラ声が聞こえる。

『微かに気配が漂っているぜ。氣い引き締めろよ』

「キファードレイに言われなくても分かっているさ」

大地は軽く微笑むと、グラットリバーを具現化する。具現化されたグラットリバーは、右手を覆い黒く艶やかに光を反射する。右手の甲に煌くオレンジの水晶を見据える大地は、軽く右手を握り締め

ると、何度か頷き口を開く。

「うん。順調だな。前回の戦いで欠けた所があったが、再生されているな」

『当たり前だ。これでも、全力で治癒したんだぞ。感謝しろ』

「ヘイヘイ。分かっているって。そんじゃま、狩人出陣！」

「その必要な無い様よ」

「ヘッ？」

優花の言葉に変な声を上げる。すると、奥の方に巨大な影が映った。黄色い地肌に黒の斑模様が入った鬼獣。それは、以前優花が学校で戦った鬼獣、風豹だった。あの戦いで負ったと思われる傷痕が残っている。

威嚇する様に牙を剥き出しにする風豹は、鋭い眼球で優花と大地を睨み付け、全身の毛を逆立てる。大地は右目を細めると、呆れた様にため息を吐き、優花の方へと体を向けた。

「手負いの相手だぜ。どうするよ」

「関係ない。全力で行くわよ」

「全力ねえ〜。別に優花一人で十分だろ？」

『おい！ 大地！』

面倒臭そうな大地にグラツトリバーが怒鳴った。

「わーってるて。やるこた〜ちゃんとやるさ」

『お前な……』

少しだけ呆れた様なグラツトリバーは、大きなため息と漏らした。一方、優花は不満そうな目を大地に向け、静かに口を開く。

「いいのよ別に。イヤなら手伝わなくて」  
「んだよ。イヤとは言ってねえだろ。ただ、俺が居なくても」  
『大地!』

グラットリバーの怒鳴り声が響く。少々驚いた様子の大地は、目を丸くしてグラットリバーを見た。微かに光を放つ右手の甲の水晶そして、グラットリバーの声が聞こえる。

『大地。お前、本気でそんな事』  
『いいわよ。私一人でやるから……。大地は帰って』  
『おい! 一人でやるって』  
『うっせえ! やる気のねえ奴が居たって意味はねえんだよ!』

キファードレイが荒っぽい口調でそう言い放った。その言葉に、『クツ』と、グラットリバーは悔しそうな声を吐く。眉間にシワを寄せる大地は、不機嫌そうにキファードレイを睨み付け、一歩歩み寄ると怒鳴り声を撒き散らす。

「てめえ、さっきの言葉もういつぺん言ってみろ!」  
『何度でも言つてやるぜ! この役立たずが!』  
「んだと! 自分じゃ何も出来ねえくせに!」  
『止める! 大地!』  
「キファードレイ。行くわよ」

静かに優花がキファードレイに言う。軽く『おう』と呟いたキファードレイを、優花は構え直し、カードフォルダから炎蜃のカードを抜く。そして、目を閉じ静かに囁く。

「我、汝を封じし者。今一度、汝の体を解き放つ。我の矛となり戦え!」



優花の足元に風が渦巻き、砂塵が舞い上がる。そして、炎蝟のカードは強い光を放つ。

「鬼獣召還！ 炎蝟」

優花の手からカードが消える。そして、優花の足元に小さな体の炎蝟が姿を現した。針の様な毛を覆う炎は、赤く光を放ち、白煙を吹かしている。やる気は十分そうな炎蝟に、キファードレイを構える優花が静かに問いかけた。

「今回は、大丈夫そう？」

「任せる。全てを焼き払ってやろう」

「それは困るわ。焼き払うのは、鬼獣だけにして」

「フン。いいだろう」

「今回は油断しないでよ」

「分かっている。手は抜かん！」

炎蝟は毛を逆立てると同時に、地を蹴る。素早い身のこなしの炎蝟を見失う豹風は、狙いを優花に定めたのか、優花に向って直進してきた。優花はそれを予測していた為、キファードレイを振り上げる。そして、射程距離に豹風が足を踏み入れると同時に、素早くキファードレイを振りぬいた。直進する豹風の左脇腹に、大鎌の鋭い切っ先が食い込んだ。だが、豹風はそれを諸共せず、右腕を振り上げる。

「うがあああつ！」

『チツ！ 優花！』

「分かっている。炎蝟！ お願い」

「今回は、本気で焼き払うぜ！」

炎蝟が反転し、右腕を振り上げた豹風の背中に向って走り出す。全身の逆立った毛が炎を放出し、炎蝟の小さな体が火の玉と化す。燃え上がる炎蝟の体は、更に高温の熱を発し、炎蝟の通った道筋が黒く焦げていく。

「猛火の炎で焼き払ってくれる！」

「行くわよ！ キファードレイ！」

『ああ、いつでもいいぜ！』

優花は両手に力を加え、豹風の体へと刃を押し込んでいく。すると、刃の刺さった所から僅かに風が漏れ始め、その風がキファードレイの刃を包み込んでいく。風が徐々に柄にまで伝わり、優花の両手に触れる。奥歯を噛み締める優花は、キファードレイの刃が抜けない様に確りと力を込めていた。

「うっ……」

『優花！ 踏み止まれよ！』

風に押され、キファードレイがカタカタと揺れる。優花の細い腕には、血管が薄らと浮き、激しく揺さぶられていた。元々、優花はパワーで勝負する様な戦闘タイプではない。その為、いつ弾き飛ばされても可笑しくない状況だった。

「ウガアアアッ！」

優花が柄を握る手に力を込めると、豹風が悲鳴に近い雄叫びを上げる。しかし、それと同時に更に優花の両腕に負担が掛かり、キファードレイが小刻みに揺れ始めた。限界が近付きつつある中、ようやく炎蝟が豹風の背中へと激突した。

「ぐおおおっ！」

「燃え尽きるおおおっ！」

体を丸める炎蝮は、そのまま回転し、炎に包まれた針の様な毛で豹風の背中を抉る。豹風の苦しむ様な声が響き、背中からは煙が上がり始めた。燃えているのか、挟まっているのか分からないが、苦しむ豹風は、振り上げた右手を静かに地面に落とす。その瞬間、優花はキファードレイを脇腹から抜き、静かにカードフォルダからカードを抜き、目を伏せ意識を集中する。

緩やかな風が足元から吹き上げ、優花の服が大きくはためく。腰まで届く長い黒髪は、緩やかに靡き、優花を美しく見せる。微かに動く優花の唇。そして、キファードレイが叫ぶ。

『炎蝮！ もういい、下がれ！』

「チツ、仕方ない。後は任す」

豹風の体を弾き、空中で体を元に戻した炎蝮は、体から光を放つと、カードへと戻った。それと同時に、優花の目が開かれ、赤い瞳が豹風を捉える。

「我、汝等を封じる者也。司るは風。流れる風に吹かれ、汝等を封ずる！」

カードを宙に投げると、吹き上がる風がカードをユラユラと舞い上がらせた。キファードレイの水晶が微かに光を放ち、無記入のカードから糸の様な細い風が豹風へと伸びる。弱りきった豹風の体を、風が包み込むと、カードへと引き込む様に豹風の体を引いていく。

「封印！」

優花が力強くそう叫ぶと、風に包まれた豹風の体がカードへと吸収された。無記入だったカードに、豹風の姿とデータが描かれ、ヒラヒラと地面へと落ちる。肩で息をする優花は、キファードレイの具現化を解き、静かにカードを拾いカードフォルダへとしまった。

第五十三話 僅かな綻び 見えざる亀裂（後書き）

約二ヶ月ぶりの更新。

長い間待たせてすいませんでした。

まだ読んでくれる人が居るのか心配です。

待つていてくれた人。ありがとうございます。

まだまだ誤字脱字が目立ち読みにくいかも知れませんが、これからもよろしく願います。

期待している人が居るか分かりませんが、期待に応えられる様に頑張りたいと思います。

## 第五十四話 ボロボロの守

休み明けの月曜。

相変わらず、守は朝のトレーニングを欠かさなかった。

月下神社。望美の実家であるその神社の一角で、具現化したフロードスクウェアを振るう。摺り足で右足を一步踏み込み、両手で力一杯横一線に振りぬく。足元には砂塵が舞い、凄まじい太刀風が砂塵を呑み込む。

静かにフロードスクウェアの具現化を解いた。彼は一時間近く重量のあるフロードスクウェアを振り続けた為、両肩を落とすと静かに息を吐き出す。

「はうっっ……。ダメだ……。腕が……。上がらない」

疲労から腕に力の入らない守は、その場に寝そべり動かなくなつた。木々の葉の合間から見える青い空。それが、朝日を浴び眩しく輝いて見える。風で揺れる木々の葉が、何枚か枝から離れユラユラと地に降り立った。少しだけ冷たい風が地面に沿う様に流れ、それが守の体を冷やす。

『だらしないぞ守。この程度で根をあげている様じゃな』

「しょうがないよ。俺、現代っ子だし、別に特別体を鍛えてたわけじゃないんだから」

『その割りに、昨日は結構いい動きをしてたじゃないか』

「その割りに、俺の顔は何でこんなにボロボロなんだろうな」

守はフロードスクウェアの言葉を真似する様にそう言つと、軽く左手で額に触れた。ほんの少しだけ腫れた右目の上に、額の左側には大きめのバンソウコウを張っている。もちろん、体中アチコチに

痣があるが、服を着ている為ソレが目立つ事は無い。

額の傷に触れる守に、胸元のフロードスクウェアは哀れみの言葉を掛ける。

『しかし、女にこつもボコボコにされると、へこむな』

「うつ……。ま、まあ……」

昨日の事を思い出し、目を細めた。その後、望美に言われた通り、智夏の道場に行った。その道場が、また立派で守なんかを踏み入れて良いものなのかと、思わせるほどだ。もちろん、道場の前に居た智夏に、歓迎され無理矢理道場の中へと引き込まれた守は、その後智夏に色々と手合わせさせられた。

柔道から始まり、空手、合気道、弓道、剣道、様々な武術の手合わせをされ、その結果守は全てにおいて惨敗を喫した。柔道では何度も投げ飛ばされ、空手では凄まじい蹴りを浴びた。合気道では、何が起ったか分からず、弓道は例外だ。一番酷かったのが、剣道で初めは互角に渡り合ったが、最終的には一方的にやられてしまった。

そんな事があり、現在守の顔は傷だらけなのだ。体がズキズキと痛み、朝のトレーニングはいつも以上に辛かった。母も彩も何があったのか分からず、心配していたが、何とか誤魔化したから大丈夫だろう。

額を押さえる守は、苦しそうにため息を吐くと、疼く体の痛みに耐えながら静かに体を起した。

「また、日曜に行かなきゃ……」

『しかし、お前の話では、現代では武器を持つ者が居ないと聞いていたが、あの娘中々の身のこなしだったな。あれは相当の手練だな』

そのフロードスクウェアの言葉に、茂みの向こうから望美の声が

聞こえた。

「だって、智夏ちゃんあの道場の師範代だもの。当たり前だよ」

茂みから現れた制服姿の望美が、いつもの様に微笑みを守に向ける。驚く守は、すぐさま立ち上がり、望美から距離を取った。少しだけ不思議そうな顔をする望美だが、すぐに笑みを浮かべる。

「さつき、別の人の声もしたけど……」

「ひ、独り言だよ」

「独り言？ けど、大分守君とは声質が違ったけど……」

そこまで言った時、望美は初めて守の顔を見た。傷だらけの顔に、驚く望美は口を右手で覆い、心配そうな声で言う。

「どうしたのその顔？」

「いや……。どうもこうも、昨日道場で……」

「道場って……智夏ちゃんにやられたの？ 酷いやられた……」

「ごめんなさい。私のせいで」

「いえ……全ては俺が弱いからですから……気にしないでください」

そう言い笑う守に、何度も頭を下げる望美。笑みを零す守は、「俺は、全然平気だから」と、優しく言った。そんな守に申し訳無さそうな表情を見せた望美は、小さく頷き気合を入れる。

「ううん。こう言う事ははっきりしなきゃ！ 私がちゃんと文句言っておくから任せておいて」

「いや……いいよ。余計にこじれそうだし」

「んっ？ 大丈夫！ 心配しないで」



守の最後の言葉は聞き取れていないらしく、望美は力強い言葉で守を励ます。困った表情を見せる守は、呆れた様に半笑いを浮かべると、小さくため息を吐いた。だが、それは望美には聞こえていなかったらしく、気合を入れ直しその場を去っていった。

呆然と立ち尽くす守は、もう一度小さくため息を吐くと、胸の位置で揺れるフロードスクウェアに目を落とす。小さな水晶が僅かに輝くと、フロードスクウェアの声が聞こえた。

『しかし、あの娘には驚かされるな』

『まあ……』

『のんびりしているかと思えば、物凄く行動が早いと来た』

『うん……そうだね。でも、そのギャップが良いって人もいるから』

『お前はどうかんだ？ その辺のギャップは？』

フロードスクウェアの質問に、腕を組む守は、考え込む様に首を傾げる。暫く考え込む守は、難しい顔を見せると、静かに口を開く。

「俺は……特に気にしないかな？」

『だろっな。お前はそう言うタイプだろっな』

「んっ？ うわっ！ そ、そうだ！ 早く帰らなきゃ！ 遅刻だよ

……」

ふと時間に気付いた守は、慌てて立ち上がる。落ち着いた様子のフロードスクウェアは、小さな声で呟く。

『今頃か……』

「な、何だよ。気付いてたなら、教えてくれよ」

『何だ。聞こえたのか？』

不満そうなフロードスクウェアの声に、目を細める守は「聞こえ

てたよ」と、呟く。しかし、すぐにこんな事をしている場合ではないと、慌ててその場を後にした。啞然とするフロードスクウェアは、そんな守の胸元で大きく揺れている。

神社から立ち去る守の後ろ姿を見守る望美は、少しだけ嬉しそうな笑みを見せると、胸の前で小さくガッツポーズを見せ「ファイト」と、小さく呟いた。

大分人通りの多くなった道を駆け抜け、ようやく家に戻ってきた守は、玄関で汗だくのまま倒れこんでいた。

「ハア…ハア……」

「お帰りなさい守。お風呂にする？ ご飯にする？ それとも、私？」

のん気な口調でジョークを言う母は、長い髪を頭の後ろで確りと留め、可愛らしいエプロン姿で守を出迎えた。疲れ切っている守には、その母のジョークにすぐにツッコミを入れることが出来ず、暫し沈黙が漂う。大分間が空き、残念そうな顔をする母は、小さく鼻から息を吐いた。その後、守の荒々しい呼吸だけがその場に聞こえ、母も不思議そうに首を軽く右に傾げる。

そこに、丁度二階から彩が降りてきた。見慣れた制服姿に、右手にはカバンを持っている。髪は綺麗に整えられ、以前より若干伸びた前髪を上げて、デコを丸出しの彩は、可愛らしく笑みを浮かべる。疲れていた守は、一瞬だが誰だか分からなかった。それ程、前髪を上げた彩が新鮮だったのだ。

そんな守の視線に気付いたのか、嬉しそうな含み笑いを見せる母は、その場を静かに去っていった。呆然とする守は、暫し目を丸くしていたが、ゆっくりと目を細めると静かに口を開く。

「水島……」

「な、何よ」

若干の間が空く。

階段の上の彩は、少しだけ緊張した面持ちで守の顔を見つめる。腕を組み、右手を顎に添える守は、僅かに頭を上下に動かすと、ボソッと呟いた。

「結構、デコが広いんだな」

「なっ！」

何を言われるのかと、少しだけ期待していた彩は、その言葉に愕然とし、米神がピクツと動いた。怒りがこみ上げ彩は、俯き拳を握ると、勢い良く階段から飛ぶ。

「お、おい！」

「この馬鹿！」

「又ガツ！」

鈍く痛々しい音が家中に響き、モノが倒れる音がその後に続く。綺麗なフォームで放たれた彩の跳び蹴りが、守の顔にクリーンヒットしたのだ。吹き飛んだ守は、壁へと後頭部を強打し、その場に蹲った。顔面と後頭部の両方に痛みが走り、蹲る守は右手で顔を覆い、左手で後頭部を押さえる。打ち所が悪かったのか、鼻から血が流れ、床へと落ちた。

文字通り、悶絶する守を尻目に、彩は足早に家を出て行き、蹲ったままの守は、一つ学習した。『デコが広い』と言う言葉が、彩には禁句だと言う事を。

## 第五十四話 ボロボロの守（後書き）

あけましておめでとうございます。

今年初の更新です。

最近、更新が滞っています。が、頑張りたいと思います。

面白い展開になっているのか、自分でも分からなくなってきました。が、面白くなる様に努力したいと思います。

今年もどうぞ、よろしくお願いいたします。

## 第五十五話 守と大地

静かな昼休み。守はいつも通り、屋上にいた。

顔には大きな青タンがある。これは、今朝彩に跳び蹴りされた時のものだ。この傷が一番痛い。正直、昨日の智夏とのトレーニングでの傷よりも、痛む。その為、午前中の授業は殆ど頭に入っていない。

寝そべり空を見上げる。床はヒンヤリとしていて気持ちが良い、結構体の傷は癒せた。あまりの気持ちよさに、ウトウトとする守は、大きな欠伸をすると、右手で目を擦る。

『オイオイ。大丈夫か？ このまま眠るんじゃないぞ』

「ん……分かってるよ……ふあ〜っ」

もう一度欠伸をする守は、体を起す。眠そうな守は、髪を掻き揚げると、そのまま髪を乱暴に掻き毟る。

「ウガーツ！ ネムツ！ 超眠い」

『な、何だ何だ？ 眠気で頭が可笑しくなったか？』

「全くだ。眠気如きで、何壊れかかってんだよ」

「又オツ！」

突然の声に、壊れかかっていた守は、喉の奥から出した様な声を発し振り返る。そこには、前髪を下ろし黒縁のメガネを掛けた大地が立っていた。普段との風貌の違いに、一瞬誰だか分からなかった守は、首を右に捻る。だが、すぐにピーンと来て、笑みを見せ口を開く。

「初めまして。転入生ですな」

「違う」

笑顔の守に即答する。

「それじゃあ、隣りの  
「  
違う！」」

今度は守が言い切る前に大地が怒鳴る。米神付近に僅かに青筋が見えた。苦笑する守は、一度胸の位置で揺れるフロードスクウェアに目を落とす。すると、フロードスクウェアも小さな声で返答する。

『怒ってるぞ』

「みたいだね」

『変なボケをカマスからだ』

「いや……。ウケルと思っただけど……」

『残念だが、受け入れられなかったらしいな』

「俺も、全力を尽くしたんだけど……残念だよ」

「なあ……もういいか？」

守とフロードスクウェアのヒソヒソ話に、呆れ顔で大地が間に入る。流石に待ちくたびれたのか、黒縁のメガネを外し、右手で前髪を掛け上げ守を睨んでいた。大地の視線に苦笑する守は、立ち上がりお尻をはたく。

そんな二人の行動を影から観察する二人組みが居た。

赤縁のメガネを額に掛け、カメラを首からぶら下げる鳥山 理穂と、黒髪をお下げにした山中 若菜の二人だ。長い髪を頭の後ろでたくし上げている理穂は、前髪は邪魔にならない様にピンで留めており、気合十分だった。一方、若菜の方は相変わらずやる気が無さ

そつで、購買所で買ったカップラーメンを食べている。

「ちよつと！ 張り込みと言つたら、アンパンでしょ！」

隣りで麵を啜る若菜の方に顔を向ける理穂は、左手に持ったアンパンを見せ付けた。呆れた様に目を細める若菜は、手を休め一言。

「コレハ、張り込みデハアリマセン」

何故か片言の若菜に、たじろぐ理穂は顔を守と大地の方に向けた。

「これだつて、立派な張り込みなんだから」

「そう思つてるのは　ズズズツ。理穂だけですよ」

口に麵を頬張る若菜は、理穂の横顔を真つ直ぐに見つめる。

守の事を調べれば良いと、言い出したのは若菜だつた為、少しだけ理穂の事が心配だつた。理穂は、事件の事を調べる為なら、自分の体の事など全く気にかけない。現に、ここ最近理穂はまともな食事もして無いし、睡眠時間だつて短くなつていた。その証拠に、少しだけ顔色が悪く、目の下に隈が出来ている。

こつなる事は分かつていた。その為、若菜はあの発言をした事を後悔していた。

「ふっつ……」

「何よ。ため息なんて」

「別に何でもありません。それより」

「シツ！ 守じゃない方がこつちに来る！」

鼻先に人差し指を立てる理穂は、息を殺す。突然の事に、若菜も咄嗟に息を殺してしまつた。金具が軋みながら、非常口が開かれる。

先程理穂が言った通り、大地が屋上から出て行ったのだ。

壁に凭れ掛かる理穂は、ホッと肩を落とすと、大きく深呼吸をした。静かに息を吐く若菜は、呆れた様に両肩を落とし目を細める。

大地が去り、一人残された守は大きな欠伸を一つ。睡魔にウトウトとする守は、静かに息を吐きその場に座り込む。

『大丈夫なのか？』

フェンスに凭れ掛かる守に、フロードスクウェアが心配そうに声を掛ける。少しだけ驚いた守だったが、すぐに笑みを見せると、落ち着いた声色で言う。

「大丈夫だよ。少し眠いだけだから」

『いや……そっちなじゃなくて、さっきの話の事だ』

「さっきの　ああ、黒木君の」

先程の大地の話の思い出した守は、一瞬困った表情を見せたが、すぐに微笑み右手で頭を掻いた。呆れるフロードスクウェアは、ため息を漏らし静かに話し掛ける。

『いいのか？　簡単に承諾したみたいだが……』

「別に断る理由も無いし、気にする事ないって」

『お前な……。ちよつとは警戒しろよな』

「黒木君は仲間なんだし、警戒する必要なんて無いよ」

全く警戒心の無い守に対し、呆れ果てるフロードスクウェアは小さくため息を吐いた。こんな気楽な奴がパートナーで、この先大丈夫だろうか、少しだけ不安になった。だが、こんな守だからこそ、



フロードスクウェアも信頼しているのだ。

だからと言って、警戒を怠るのは色々と問題で、守が警戒しない分は、フロードスクウェアが補っている。その為、フロードスクウェアは既に理穂と若菜の存在に気付いていた。もちろん、守に知らせるつもりは無い。あの二人が守に危害を与えないと知っている為、気になどしていなかった。

「ふあ〜っ……。今日も無駄足だったかな……」

突如両肩を落とし落ち込む守を、不思議に思うフロードスクウェアは、気になった為すぐに声を掛ける。

『どうしたんだ？ 急に』

そんなフロードスクウェアの言葉に、暗い表情を見せる。先程とは明らかに違うその表情に、フロードスクウェアはただ事ではないと思ひ、息を荒げ口を開く。

『何かあったのか？ 辺りに鬼獣の気配は無いが？』

大慌てで辺りの気配を探るフロードスクウェアに、呆然とする守は、小さく肩を揺らし笑うと、いつもとチョット違う寂しそうな笑みを浮かべる。

「違う違う。そうじゃないよ」

『そうじゃないって、どういう事だ？』

「いやな。屋上にいれば、また皆川さんに会えるかなって、淡い期待をしてただけで、やっぱり今日も会えなかったなっさ」

その言葉に愕然とするフロードスクウェアは、言葉を失っていた。

そして、大慌てした事と、守を心配した事を後悔し、深いため息を漏らした。

笑みを浮かべる守だが、フロードスクウェアから返答が来ない。不思議に思った守は、首を傾げると、フロードスクウェアを右手に持ち声を掛けた。

「フロードスクウェア？」

『うるさい。俺は寝る！』

「怒って　　るみたいだな」

半笑いを浮かべる守に対し、フロードスクウェアから返答は無い。もちろん、守もこれ以上フロードスクウェアを怒らせない為に、黙る事にした。

静かに息を吸い、立ち上がった守は、ズボンのポケットに手を突っ込みフェンスの向こうに見えるこの街の風景を見つめる。いつも見るこの風景が好きで、この街が好きで、この学校が少しだけ好きだった。

## 第五十六話 夕暮れに染まる空

放課後。

いつもの様に静まり返った教室。そこに、守の姿は無かった。既に帰ってしまったのだろう。

自分の席に座ったままの彩は、守の席をジッと見つめながら頼杖をついていた。今朝の事を謝ろうと思っていたが、結局今日も学校では一言も言葉を交わさなかった。ここの所中々学校で話す機会が無い。真弓達がからかうせいもあるが、それ以前に守が教室で寝ている時間が増えた。授業開始時は起きているが、終了間際になると眠りにについている。放課後もホームルームが終わるとすぐに姿を消す。休みの日も朝から出掛けて、昼に帰ってきたと思えば、すぐにどこかに出掛ける。一体何をしているのかも教えてくれない。その為、彩は不安だった。一人だけ何も知らずにいるという事が。静かに深々とため息を吐く彩は、渋々とイスから立ち上がる。イスの足が床を擦り、嫌な音を響かせた。聞きなれた音の為、全く気にとめない彩は、右手にカバンを持つと、前の出入口から教室を出た。と、同時に声を掛けられる。

「あつ！ 彩ちゃん」

突然の声に体をビクツとさせた彩は、素早く振り返る。

「な、奈菜ちゃん……。ど、どうしたの？」

「教室出たら、丁度彩ちゃんが出てくるのが見えたから」

満面の笑みを浮かべる奈菜は、何だか嬉しそうに見えた。そんな奈菜の笑顔が、とても眩しく見え、自然と彩は俯いていた。俯いた彩の顔を覗き込む奈菜は、少し心配そうな表情で彩に問う。

「何かありました?」

「エッ? ベ、別に何にも無いよ。どうして?」

「今日はチョット元気が無いみたいだから……」

心配そうな奈菜の視線に、少しだけ無理に笑ってみせる彩は『以前にもこんな事があったなあ』と、思う。そして、何かと落ち込んでいる時に奈菜に会う事を不思議に思った。確か以前も守との事で悩んでいる時に会ったのだ。

不思議そうな表情を見せる奈菜に気付いた彩は、この場を誤魔化そうと頭を働かせる。そして、いいアイデアが浮かび、微笑みながら明るく口を開く。

「一緒に帰りましょう! この前は、色々あって一緒に帰れなかったから」

その言葉を聞くなり、嬉しそうに笑みを浮かべる奈菜は、胸の前で両手を組み答えた。

「うん。一緒に帰りましょう。この前は話せなかったから、今日は沢山話せるね」

「そうだね。今日は、沢山話せそう」

「じゃあ、この後、私の部屋に来ない?」

突然の申し出に戸惑う彩は、オロオロとし始める。その行動が面白かったのか、奈菜は口を右手で押さえながら笑う。奈菜に笑われ、更に恥ずかしさが増す。完全に赤面する彩は、思考回路がショートしたのか、頭から湯気を吹かし俯いたまま動かなくなった。流石の奈菜も、それにはビックリし、大慌てで彩に声を掛ける。

「さ、彩ちゃん！　だ、大丈夫？」

「フエ……ふえいきれす……」

きつと「平気です」と、言っているのだろう。それを理解した奈菜は笑顔を見せ、「じゃあ、行こうか」と歩き出した。

それから随分と歩いた。呂律が回らず、混乱していた彩も、暫く歩いている内に、ようやく元に戻った。気がついた時には、校門を出て寮のある方へと足を進めており、奈菜が楽しそうに話をしていった。一体、どんな話をしていったのか、良く覚えていない。頭が混乱していたからだろう。

その後、落ち着きを取り戻した彩は、奈菜の話を聞きながら相槌を打っていた。話の内容は殆ど学校の話で、クラスの事、友達の事、授業の事、色々とな菜は話していた。何だか、溜め込んでいたモノを全て吐き出している様に感じ、彩は静かに口を開く。

「何か、悩んでる事でもあるの？」

不意を突いた彩の言葉に、奈菜の声が途切れる。不思議に思った彩は、横を歩く奈菜に顔を向けた。いつもの笑みはそこには無く、辛く切なそうな表情をしている。今まで奈菜がそんな表情をしている所を見た事が無かった彩は、戸惑い言葉を失う。

そんな彩に気付いたのか、奈菜が彩の方に顔を向けニコツと笑みを浮かべる。だが、それは先程まで見せていた笑みと違い、少しだけ寂しそうな瞳を見せていた。

夕日の見える屋上。

そこに一つの影があった。

夕日を背に足元から伸びる長い影。それが、非常口の方まで伸びている。

青桜学園の制服。白のワイシャツに、黒のズボン。足元にはカバンが置かれ、逆光を受け髪が茶色く輝いていた。その髪が穏やかな風に静かに揺れ、胸にぶら下がるアクセサリーが、一瞬だけ煌いた。「待たせたな」

低く雄雄しい声と共に、非常口が軋む音が響く。振り返ると、男が一人非常口の前に立っていた。黒い髪が夕日を浴びて、オレンジ色に輝く。男の方も同じく青桜学園の制服を着ており、ワイシャツの第二ボタンまでを開けていた。

二人の間に漂う沈黙。それを払う様に、二人の間に穏やかな風が吹き、前髪だけを揺らす。そして、フェンスの方に背を向ける男が口を開いた。

「それで……。話って何です？」  
「……………」

返答は無い。それに対し、首からぶら下げているアクセサリーが光を放ち声とする。

『お前、何を企んでいる。事と場合によっては』  
『寄せ。フロードスクウェア。単に話をするだけだよ』  
『守！ 少しは』  
『大丈夫だよ。心配しなくても』

守はそう言うと、笑みを浮かべた。すると、非常口の方に立っていた男が静かに口を開く。

『悪いが、お前に話す事は無い』  
『おい！ 大地。どうする気だ！』

「グラットリバー。お前は黙ってる」

大地は右拳を握ると、左手で右手首のブレスレットを握り、それを顔の前に持つて行く。すると、グラットリバーが具現化され、大地の右手を黒い硬質な物質が包み込んだ。艶やかに光を放つ大地の右手が、ゆっくりと開かれる。

乾いた音を鳴らす大地の右手。その甲に輝くオレンジの水晶が、夕日を反射する。

向い合う二人の視線がぶつかりあう。大地は腰を低く落とすと、右足を摺り足で前に出し、呼吸を整える。一方、守は表情一つ変えず、大地を真つ直ぐに見据えていた。

『守！ 早く具現化しろ！』

見かねたのか、フロードスクウェアが声を上げる。だが、守は表情を変えぬまま静かに答えた。

「俺に戦う意思は無い」

『何！ お前、状況を分かっているのか？』

怒声を響かせるフロードスクウェアに対し、守は落ち着いた様子で、首からぶら下がるフロードスクウェアを右手に握る。

「落ち着けフロードスクウェア」

『お前な……。この状況で落ち着いていられるか！』

「すぐ熱くなると、冷静な判断が出来なくなるぞ」

『のんびりしてたら、敵に命を絶たれる』

意見の分かれる守とフロードスクウェアを他所に、大地が一気に間合いを詰め右拳を振り抜く。黒く艶やかに輝くその拳が視界に入

つた守は、右手に力を込め一瞬にしてフロードスクウェアを具現化する。

拳から溢れる光と共に、柄が手の中に現れ、鏢と刃が瞬時に姿を現す。大きく幅の広い刃の腹が、大地の右拳を受け止め、鏢の中心の赤い水晶が輝き、フロードスクウェアの声が聞こえる。

『何が目的だ！ 小僧！』

「黙ってる。すぐに終わらしてやる」

『なんだと！』

大地の言葉に食って掛かるフロードスクウェアだったが、直後大地の前蹴りが守の腹に決まり、守の体制が崩れた為言葉を呑んだ。

『大丈夫か。守』

「大丈夫……全然平気」

腹部が痛み体勢が少々前屈みになっている守は、苦しそうにそう答え大地の方を見据える。前蹴りを入れた後、距離を取った大地は、もう一度腰を低く落とした姿勢で守を睨んでいた。



## 第五十七話 激突！そして、新たな敵

夕日に色に染まり行く中、屋上では金属音だけが響く。

素早く軽快な足音が、縦横無尽に駆け巡り、鋭い風音を聞かせたかと思うと、少々鈍い金属音が聞こえる。

防戦一方の守は、素早く動き回る大地を目で追いつつ、攻撃に備えて優位な形でフロードスクウェアを構えていた。黒い瞳が右へ左へと素早く動き、確りと大地の動きを捉える。そして、大地が右手を振り抜くと同時に、最小限の動きで身を引きフロードスクウェアの平で受け止めていた。

二人の攻防は次第に激しくなり、時折火花が散り突風が吹き始めた。

そんな二人の戦いを、物陰に隠れて覗いている二つの影があった。報道部の鳥山 理穂と山中 若菜の二人だ。守を尾行して屋上に隠れていたが、まさかこの様な状況に出くわすとは思っても居なかった。

その為、理穂はシャッターを押すのも忘れ、二人の戦いに見入っていた。

「う……嘘でしょ！ な、何、アレ！」

驚きから震える理穂の声。それに対し、落ち着いた様子で若菜が返答する。

「彼らが、あの時の戦っていた人と見て間違いないみたいですね。理穂」

「じゃあ、じゃあ、遂に真相に」

「まだですよ。実際にあの化物は出てきてませんから」  
「うっ……」

若菜の言葉に、表情を引き攣らせた。確かに、鬼獣の姿を見ないと、本当に守があのお鬼獣と戦っていたのか、分からないからだ。

息を呑み、真剣な眼差しを守の方に向ける理穂は、嬉しそうに目を輝かせていた。一方、若菜は怪訝そうに眉間にシワを寄せている。

「理穂。速めに、ここを出しましょう」

「エッ！ な、何言ってるのよ！ こんなチャンス滅多に無いんだから！」

「それはそうだけど……。あんまり危険な事に首を突っ込むと」  
「命を落とすぞ」

若菜の言葉を遮り、男の声が聞こえた。ゾツとする様な声に、理穂と若菜は動きを止める。瞳孔が開き、脈が早まる。息が苦しくなり、振り返る事すら出来ずに居た。恐怖から体が自然に震え、殺される錯覚する。

「そんなに怯える事無いよ。キミたちに、危害を加えるつもりは無いから」

穏やかな声だが、何処か冷たい印象を与える声に、返答する事は出来なかった。

守と大地の攻防が途切れる。

両者とも大分疲れが見え始めていた。肩で息をする守は、フロードスクウェアを何とか構え、確りと大地を見据える。

一方、大地も肩で息をしているが、前傾姿勢を保ったままいつで

も攻撃に転じられる様にしていた。

「ハア…ハア……」

『大地。そろそろ良いだろ？』

「ま、まだだ……」

『何も、そこまでする必要はないだろ？』

「俺は、アイツの本気が知りたい。そうじゃなきゃダメなんだよ」

真剣な大地の顔に、グラットリバーは諦めた様に黙り込んだ。右手をブラブラと揺らす大地は、呼吸を整え守を睨む。その視線に、守も気付きフロードスクウェアを構え直す。

『来るか』

「多分、今度ので最後だと思う」

『全力で来ると言う事か？』

「うん。そうなると思うよ。俺等も、全力で行く」

『まあ、妥当な考えだ』

フロードスクウェアの皮肉った言葉に、守は返答しなかった。既に意識を集中していたのだ。いつもの穏やかな表情は消え、真面目な表情を見せる守は、ゆっくりと息を吐き、フロードスクウェアの柄を固く握り締めた。

対峙する二人の合間に流れる空気が変わる。緊迫した空気の中、吹き抜ける生暖かい風。両者の髪が緩やかに揺れる。守が右足を摺り足で前に出す。前傾姿勢を取る大地は、更に腰を低くすると、右手を床につける。

風が止む。それと同時に二人が動く。大地は右手で床を押し、両足で更に床を蹴り加速する。一方、守はフロードスクウェアを中段に構え、右から左へと流れる様に振り抜いた。それと同時に、大地も右拳を振り抜く。

完全にフロードスクウェアとグラットリバーが、一直線に並び交錯する直前、男の声が響いた。

「そこまでだよ！ ガーディアン諸君」

その声に瞬時に動きを止める守と大地。フロードスクウェアとグラットリバーが、ぶつかると寸前でピタリと止まっていた。真剣な表情を崩さない守と大地は、静かに武器を下ろす。そして、声のした方へと顔を向けた。

塔屋の上に備え付けられたタンクの上に立つ男。奇抜な衣装に、灰色の髪。そして、青白い肌。何処か、不健康そうなその男は、目を隠すほど伸ばした前髪を掻き上げると、ゆっくりと笑みを浮かべる。

「仲間割れの最中、悪いね。僕は死電<sup>しでん</sup>。キミたちを殺しにきたよ」

笑顔でそんな事を述べる死電を大地は睨む。

「誰だ？ 何故、俺等の事を知っている」

「ヤダな。当然だろ？ だって、キミ等は、僕等にとって、敵なんだから」

死電は不適に笑みを浮かべると、右手の人差し指に填めた指輪を見せる。その指輪の水晶が黄色い光を放つと、刺々しい声が聞こえた。

『ヴハハハッ！ さつさと俺を具現化しろ！』

「落ち着け。僕は、命土と違って、ちゃんとした作戦があるんだよ」  
『作戦だと？ んなもの、必要ねえな』

「そう言うな。完璧に奴等を叩きのめす為さ」

死電とサポートアームズの話し声を聞き、守と大地は表情を更に引き締めた。

一方、落ち着いた様子のフロードスクウェアとグラットリバーは互いに話を始める。

『あやつ……。全く気配が無かった』

『ああ。あれほど、完璧に気配を消せるサポートアームズがあったのか？』

驚きを隠せないフロードスクウェアとグラットリバーは、その目で死電のサポートアームズを見据えた。そのリングの形は盾を模っており、その中心で輝く黄色の水晶は、更に光を放つ。

『フツ。流石に、俺の強さに気付いたみたいだな。下等なサポートアームズ共！』

『へエ〜ツ。一応、お前の強さの分かる奴も居るんだな』

『当然だろ？ 俺はずば抜けた戦闘能力を持っているんだからな』

威張るサポートアームズに対し、大地は「フツ」と鼻で笑うと、右手を握り締めた。

「てめえが、誰だろうが、俺には関係ねえ。真剣勝負の邪魔をすんじゃないやねえよ！」

『止める！ 大地！』

大地をグラットリバーが止め様と叫ぶが、既に大地は走り出していた。そんな大地を見下す死電は、右手を翳すとサポートアームズが光を放つ。眩い光と共に、姿を現す一体の鎧。それは、胸に黄色の水晶を宿していた。

それが何か分からないが、大地は気にせず突っ込み、右拳を振り抜く。だが、その拳は空を切り、代わりにその鎧の拳が大地の腹を抉った。

「グッ」

「黒木君！」

駆け寄ろうとした守に、死電が叫ぶ。

「動くな！ こいつらがどうなっても良いのか？」

死電の言葉に動きを止める。すると、塔屋の裏から理穂と若菜が姿を現す。

「エッ！ キミ達は」

「クッ……。人質と言うわけか……」

腹部を押さえる大地は、苦しそうにそう呟く。

「こつちも、人質を取るつもりは無かったんだけどね」

「ごめんなさい！ わ、私達」

涙を浮かべる理穂が全てを言い終える前に、守が俯きながら言葉を挟んだ。

「要求は何だ！」

「要求？ 決まってるだろ。サポートアームズを渡せ」

真顔でそう言う死電は、右手を差し伸べた。その言葉に、苦笑する大地は、怒りの籠った声で返答した。

「ふざける！ てめえに渡すもんは」  
「分かった。それで、二人は助かるんだな」

大地の言葉を遮り、守がそう言い放った。その言葉に、「お前、何言ってるんだ！」と、大地は叫んだが、守は返答せず、フロードスクウェアの具現化を解く。そして、ネックレスを取り、ゆっくりと右手でフロードスクウェアを空高く放り投げた。

## 第五十八話 不測の事態

高らかと宙を舞うネックレス。

小さな剣のアクセサリーが、夕日を浴びて輝く。

フロードスクウェアは何も語らない。守の事を信用していたし、これが最善の方法だと、フロードスクウェアも思っていた。

死電の手の中に、アクセサリーが納まった。

俯き拳を握り締める大地は、守の方に顔を向ける。怒りの籠った表情の大地は守に歩み寄り、襟首を掴むあげた。

「てめえ、自分が何したかわかってんのか！」

「ああ……。分かってる」

落ち着いた様子の守の言葉に、大地は更に怒りをぶちまける。

「てめえはバカか！ 奴等が素直に人質を返すはずねえだろ！」

『止める！ 大地！』

グラットリバーの言葉も聞かず、大地は守を殴った。吹き飛ぶ守は、フェンスに背中を打ちつける。口角が切れ血が流れた。俯いたままゆっくりと立ち上がると、大地の目を真っ直ぐに見据える。

「俺は、誰も傷付けたくない。この戦いに、関係ない人を巻き込みたくない」

「だからって、自分の武器を渡して何になる！」

「全く彼の言うとおりだよ。馬鹿なガーディアン君」

不適な笑みを浮かべ守を見据える死電に、守も静かに視線を向ける。二人の視線がぶつかり合い、死電が右手を向けると、人差し指



を立てサポートアームズに命令した。

「僕等が、人質を返すわけないだろ？ やれ。レイアースト」

『皆殺しだ！』

『大地！』

「分かつてる！」

大地は右拳を握り、戦闘態勢に入る。そんな大地にレイアーストと呼ばれた、鎧型のサポートアームズが突っ込んできた。腰を低く構える大地は右拳を脇下に構える。拳の中が微かに光を放つ。

『大地。一発限りだぞ』

「ああ。分かつてる。一撃で粉碎する」

『ヴハハハハッ。一撃で粉碎だと？ 笑わせてくれるぜ！』

鉄音を響かせるレイアーストの足音。それに紛れ、もう一つ足音が大地の背後から響く。

「黒木君！ そのまま動くな！」

「うるせえ！ てめえの うがっ」

守が大地の背中を蹴り宙に舞う。レイアーストの頭上を越え、守は一直線にタンクの上に立つ死電を見据える。二人の視線が完全に合わさり、死電が不適な笑みを浮かべた。サポートアームズを持たないお前に何が出来る、と言いたげなその顔に、守は右手を硬く握り目付きを変える。

「行くぞ！ フロードスクウェア！」

「フッ。何を馬鹿な事を。お前のサポートアームズは」

『守！ 一気に叩き切れ！』

守の右手からフロードスクウェアの音が響き、光が放たれた。そして、守の手から具現化されたフロードスクウェアが現れる。鋭く大きな刃が、夕日を浴び美しく輝く。

「うおおおおっ！」

全身全霊を込め、フロードスクウェアを振り下ろす。落下速度も加わり、刃が勢いよく落ちる。

「クッ！」

驚きのあまり、反応の遅れた死電の左肩に、僅かに切っ先が触れ服を裂いた。そして、勢いそのままにタンクまでを真っ二つに裂き、水が大量にタンクから溢れる。

舞い散る水飛沫。塔屋の上に着地した守は、フロードスクウェアの切っ先を地面ギリギリで止め、水飛沫の合間に見える死電を睨む。裂かれた服の合間から見える細く白い体には、薄らと血が流れ出していた。その死電も、水飛沫の合間から守を睨みつけている。

「どう言う事だ……なんで、アイツがフロードスクウェアを持っているんだ？ 確かに、あの時……」

この状況で先に口を開いた大地。その場に居た誰もが思った疑問だった。レイアーストですら、その場で動かずに守の事を見据えていた。

水飛沫を浴びながら静かに立ち上がる守はフロードスクウェアを持ち上げ、中段に構える。切っ先を自分の方に向ける守に、死電は静かに問う。

「貴様……どうやってそれを……」

「お前の持っているのは、ただのネックレスだ。守はいざと言う時の為に、必ず二つネックレスを首に掛けてんだよ。しかも、俺と似た形状のアクセサリーがついている奴を」

「クツ……。貴様は、こう言う事が起きる事を予測していたと言うのか！」

怒りに右手に握っていたネックレスのアクセサリーを砕く。真剣な表情を崩さない守は、静かに息を吐き答える。

「不測の事態に備えて置くのが、本当の策士と言うモノだ。残念だけど、俺は人質を取る様な卑劣な策士には負ける気はしない」

「グウツ……。ふざけるな！ 貴様如きに」

怒りを滲ます死電は、凄い形相で守を睨む。一方、守も真剣な眼差しで死電を見据えていた。二人の睨み合いが続き、辺り一帯が水浸しになる。守の濡れた髪の前から雫が滴れた。その雫が守の目の前を通過する直前、死電の姿が消える。だが、その動きは全てフロードスクウェアが捉えていた。

「守！ 上だ！」

「なっ！」

「フロードスクウェアは、相手の気配をすぐに探れる」

守は中段に構えたフロードスクウェアで、空に舞う死電を切り上げる。咄嗟に身をよじり、刃をかわす死電だが、切っ先が右頬を掠めた。皮膚が裂け、血が僅かに溢れる。表情を歪める死電は、守から距離を取る。

先程の戦いとはまるで別人の守の動きに、大地は驚きを隠せなかった。的確な太刀捌き、軽快な動き。全てが鋭かった。

「アイツ……。アレが本気ってわけか？」

『あの様子だと、この先もドンドン伸びるぞ』

「そうだな……。俺の見込み通りだ。うかうかしてられねえな」

『そう思うなら、俺達は奴のサポートアームズを叩くぞ』

「ああ。最初から全力で行くぞ！」

大地は右拳を握り締めると、更に力を込める。パキツパキツ、とグラツトリバーの黒い表面が、徐々に大地の右腕を侵食し、鋭く硬質に変化していく。

その音にレイアーストも気付く。瞬時に振り返るが、その瞬間に視界が真っ暗になり、頭に激痛が走る。

「わりいな。とつとと終わらせてもらっぜ！」

『グツ！ 下等なサポートアームズ風情が！』

『分かって無いな。下等なサポートアームズでも、扱っ者次第で何倍もの力を発揮するんだよ』

グラツトリバーの言葉が、レイアーストの頭に響く。

『黙れ！ 何が使う者だ！ 能無し共め！』

「往生際が悪いんだよ！」

暴れるレイアーストの頭を、更に強く握る。メキメキと、レイアーストの頭が軋む。

「クツ！ 戻れ！ レイアースト！」

『チツ……………』

舌打ちと同時にレイアーストが消え、死電の指へと戻る。それと

同時に死電の髪が静電気で逆立つ。何か異変を感じた守は、すぐさま塔屋から飛び降りると、理穂と若菜の元に駆け寄る。

「早くここから逃げてください。とにかく遠くへ」

「で、でも」

「分かりました。行きますよ理穂」

「エッ！ ちよ、まだ話す事が」

「そんな事を言ってる状況じゃないです。今は言う通りに」

納得の行かないと言う様子の理穂の腕を引き、若菜は屋上を後にした。

それを確認した守は、静かにフロードスクウェアを構え直し、ゆっくりと塔屋の上に立つ死電に目を向けた。

『これからが、本番だぞ。分かってるな守』

「うん。分かってる」

紫の電流が死電の周りで弾ける。額に浮き出る青筋。そして、右手の人差し指のリングが、その電流を吸収し、眩く光る。先程までとは比にならない力に、守も大地も表情を歪めた。

## 第五十九話 剣と盾

緊迫した空気に、守と大地は息を呑む。  
弾ける電撃の音。

それが、徐々に広がっていく。  
空にはいつしか暗雲が螺旋を描き、その中で雷鳴が鳴り響く。

「やべえな……」

表情を引き攣らせ笑う大地。流石にこれはお手上げといった感じだ。

一方、守の方は真剣な眼差しで暗雲を見据えていた。時折稲光が見える。そして、雷鳴が轟く。だが、守は表情を変えず、ゆつくりとフロードスクウェアを下段に構える。

「おい。何するつもりだ」

「大した事じゃないよ。避雷針って奴かな？」

「避雷針？ ……まさか！」

「悪い。フロードスクウェア。お前の事は忘れないから」

「うおい！ ふざけんな！ 何で俺が、避雷針なんかに！」

守はその言葉を無視して、ゆつくりと呼吸を整える。

「オイコラ！ 人の話を」

「フロードスクウェアは人じゃないから」

「そ、そうじゃなくてだな！ もっと、他に方法があるだろ！」

「無い！ 覚悟を決めるんだ！」

「ふざけんなよ！ 俺だってあんな落雷直撃したら、どうなるかわかんねえんだぞ！」

そう叫んだフロードスクウェアに、守は「そうか」とだけ小さい声で言うと、静かに呼吸を整える。やはり、意思は揺らがない様だ。その為、フロードスクウェアも意を決した。

『分かった。もう何を言っても無駄な様だ。心の準備をする時間を』

『もう無理。すぐ落ちてくるから』  
『んなっ！』

驚くフロードスクウェアを他所に、死電が高笑いと一緒に口を開く。

「フハハハッ！ この稲妻が落ちた時、貴様らは僕の本当の強さを知る！」

辺りが光に包まれ、雷鳴が轟く。紫の閃光が空を二つに裂き、轟音が鳴り響いた。瞬時にフロードスクウェアを空に放る守だが、落雷はそれを避け守達の後方へと吸い込まれていく。

「なっ！ 何故、落雷が！」

突然の事に驚く死電。その一方で、安心している者もいた。

『た、助かった……』

フロードスクウェアだ。落雷が逸れたお陰で、無傷で床に突き刺さった。

「まったく、何で俺等が後輩の手助けをしなきゃならん」

『仕方ないだろ。雷と相性が良いのは、土の属性の俺等なんだ。それに、避雷針は俺等の役目だろ』

「避雷針ね……。まあ、別にいいんだけどな」

呆れた口調の大地は、目の前に立つ守の背中を真っ直ぐに見据え、口元に微かに笑みを浮かべた。

大地の行動に驚く素振りも見せない守は、床に刺さったフロードスクウェアの柄を握ると、フロードスクウェアにしか聞こえない声で言う。

「行くぞ。全力で」

『おま、まさか！』

何かを言おうとしたフロードスクウェアの言葉を聞かず、守は刃を抜き走り出す。軽快な足音。それは徐々に加速し、塔屋の手前で右足を踏み込むと同時に、全力で床を蹴った。勢い良く飛び上がる守は、その目でジッと死電を見据える。互いの視線が交わり、互いの動きがスローに映った。

振り上げたフロードスクウェア。

掲げるレイアースト。

二つの水晶が輝き、二つの声が混ざり合う。

「裂け！ フロードスクウェア！」

「防げ！ レイアースト！」

振り下ろされたフロードスクウェア。

具現化されたレイアースト。

両者が激しくぶつかり合い、激しい衝撃波が全てを吹き飛ばした。空を覆う暗雲が一瞬にして外へと弾かれ消滅。そして、眩い夕日が辺りを照らす。



吹き荒れた暴風に、大地は顔を顰め左腕で顔を庇う。

「クツ！ 何て衝撃波だ……」

『どうなった？』

「分かん」

大地がそう言うと同時に、フェンスに何かがぶつかると音が響く。風が治まり、フェンスが不気味な音を立て軋む。

大地は左腕を下ろし、顔を上げた。そして、塔屋の上に佇む男の姿に、表情を引き攣らせる。

「チツ……」

『ヤバイな』

大地の視線の先には、死電が立ち尽くしていた。右手に現れた妙な形の盾。それが、レイアーストの本当の姿だ。傷一つないレイアーストの姿に、死電は静かに声を上げる。

「フハハハッ！ 見たか！ 僕の力を！」

「残念だけど……キミの負けだよ」

大地の背後から聞こえた声。これは、間違いなく守の声だ。

驚き振り返った大地の視界に入ったのは、壊れかけたフェンスにぶら下がる守の姿だった。右腕から流れる真っ赤な血が、指先から零れ落ち、左手だけで必死にフェンスを掴んでいる。

握力が徐々に失われ、苦痛の表情を見せる守。その様子に高笑いする死電が大声で叫ぶ。

「フハハハッ！ 僕の負けだって？ そこでぶら下がる事しか出来ないキミに何が出来るって言うんだい？」

『オイ！ 上だ！』  
「上？」

死電が上に顔を向けると、真っ直ぐにフロードスクウエアが落下してくる。切っ先を真下に向け、加速するフロードスクウエアに、死電は咄嗟にレイアーストを振り上げた。落下スピードが加わり、激しく二つがぶつかり合う。

鈍い鉄音が響き、血が滴れる。

『グツ……な、何故……』

翳されたレイアーストを中央から貫いたフロードスクウエアの刃は、死電の右肩に突き刺さっていた。驚き困惑する死電の右手が、レイアーストから放れる。そして、静かに両膝が床に落ちた。

右肩に押し掛かるフロードスクウエアの重量が、刃を右肩へと更に減り込ませていく。苦痛が激痛に変わり、死電は左手でフロードスクウエアの柄を握る。

「クツ……ウウツ……」

『足掻けば足掻く程、食い込んでいくぞ』

「ふざける……な！」

無理にフロードスクウエアを抜いた死電は、そこで初めてフロードスクウエアの重さに気付き、その場にフロードスクウエアを落とす。レイアーストの具現化が解け、亀裂の入ったリングがフロードスクウエアの横に転がる。

「ふ……ふざけやがって……」

『死……電……退く……ぞ』

「ああ。分かってる」

「んな簡単に逃がすかよ！」

フェンスにぶら下がっていた守を引き上げた大地が、右手を握り締め眉間にシワを寄せ死電を睨む。右腕を左手で押さえる守は、乱れた呼吸のまま死電の方に目を向ける。

漂い始める沈黙。吹き抜ける生暖かな風。静まり返った辺りには、風音しか聞こえなくなっていた。不穏な空気に、辺りを警戒する大地は、小さな声でグラットリバーに問う。

「な、何だ。この威圧感……」

「奴の仲間か？ それとも……新手か」

「どっちにしろ、俺達には不利って訳か……」

「ああ。そうなるな」

グラットリバーの冷静な判断に、大地は動きを制限された。

現状では、こちらが圧倒的不利と言う状況で、大地は頭をフル回転させる。守の事、フロードスクウェアの事、対峙する死電の動き。全ての事を考える大地は、慎重に事を運べる為にまずフロードスクウェアを回収する事を考えた。

その時、何処からともなく鋭い風音が聞こえてくる。それが、大地と守の横を通り過ぎたかと思うと、塔屋の上に立つ死電の体が吹き飛ぶ。血が飛び散り、死電の姿が塔屋の後ろへと消えていく。

守と大地は何が起こったのか分からず、呆然としていた。一方、フロードスクウェアには、一部始終がハッキリと見えていたが、それを口にする事はなかった。

## 第六十話 監視役

呆然と立ち尽くす大地。

目の前で起きた事に、終始戸惑っていた。

一方で、落ち着いた様子守は、床に転がるフロードスクウエアを回収し、ホッと息を吐く。誰も怪我をせずに済み、安心したのだ。

『嬉しそうだな』

「えっ？ そう？」

半分テレながらそう口にした守は、右手で頭を掻く。

真剣な表情の大地は、今起きた事を分析する。死電を貫いたモノは何か、そしてもう一つの消えた気配はなんだったのか、色々と考えた。だが、結局大地一人では何の考えも浮かばず、考えるのを断念した。

「くっそーっ……。一体、なんだったんだよ！」

『さあな。だが、もう一つの気配は敵では無さそうだな』

『そう決め付けるのは、懸命じゃないな』

突然、フロードスクウエアが話に割り込んだ。不思議そうな表情をする守と、大地は目があった。全く何も知らないと言わんばかりの眼差しに、流石の大地も啞然とした表情を見せる。

「お前……。何も感じなかったのか？」

「感じなかったって？ そりゃ……。強いとは感じましたけど……」

「そう言う意味じゃなくてだな」

『守は気配を感じ取る能力は無い』

そう言ったのは、フロードスクウェアだ。呆れた顔をする大地は、右手で頭を押さえると、頭を左右に振った。

「お前、それでよくガーディアンが勤まるな」

馬鹿にした口調。それは守にも分かった。だが、別に怒りはしない。実際、守自身ガーディアンとして無能だと知っていた。その為大地に口答えする気が無ければ、文句を言うつもりもない。

しかし、フロードスクウェアは違った。自分のパートナーを馬鹿にされる事は、耐え難い屈辱だった。

『貴様！ 守を馬鹿にすると』

「馬鹿にしたらどうする？ 殴るか？」

『ふざけ』

『止めておけ。やるだけ虚しくなるぞ』

「そうだよ。俺も聞いてて辛いしさ……」

守とグラットリバーに宥められ、フロードスクウェアも少々大人しくなった。守とグラットリバーは大きいため息を漏らし、この状況にあきれ返っていた。

何とか逃げ延びた死電の右肩からは、血が滴れていた。先程、飛んできたモノが突き刺さった痕も確り残り、そこから血が溢れている。

苦痛の表情を見せる死電は、赤い屋根の上に足を下ろすと、荒々しい呼吸で口を開く。

「クツ……。何者だ……。一体」

『死電！ 前だ』

「！」

死電はレイアーストの声で気付く。屋根の上にもう一人人が居る事に。黒の足元まで隠すロングコートを羽織るそいつは、フードを深々と被り顔を隠していた。背丈は高く、艶のある黒髪がフードから見え隠れしている。その奥に見えるキリッした目が、真っ直ぐに死電を見据える。

緊迫した空気が流れ、死電の表情が僅かに強張った。状況を把握したのだ。それでも、不適に笑ってみせる死電は、強い口調で言い退ける。

「クフフフツ……。誰だが知らんが、そこを退け」

「……」

「怖くて、口もひら」

『逃げろ！ こいつはやべえぞ』

「何？」

レイアーストの声に不思議そうな顔をする死電だが、その言葉の意味をすぐに理解した。目の前の者は、右手に少し変った脇差を握っている。その刃の付け根には黄色の水晶が輝いており、それがサポートアームズである事を示していた。

傷を負う死電は、今戦うのは懸命ではないと、分かっていた。だが、何故か負ける気はしない。それは、相手のサポートアームズが具現化しても脇差程度だからだ。

不適に笑みを浮かべる死電は、ゆっくりと立ち上がると、右手のリングに左手を添える。すると、光と共にレイアーストが具現化された。

「フハハハッ。その程度のサポートアームズで、この僕に勝てると思っていたのか！ 行け、レイアースト！」

強気な死電の言葉に対し、レイアーストの反応は無い。動く気配の無いレイアーストに、苛立ちを見せる死電は大声で怒鳴る。

「何してるんだ！ さつさと奴を」

『黙れ！ お前には分からないのか！ 奴の』

『戯言はすんだか？ 我のマスターは気が短い。そろそろ終いにしたいのだが』

突然、低音の声が渋く淡々とした口調で、死電とレイアーストの会話に割り込んだ。一瞬にしてその場が凍り付き、ロングコートを着た者がゆっくりとサポータームズを、顔の前に持つてくる。

空気が変わった。刺々しく突き刺す様な緊張感に、死電もレイアーストも動く事が出来ない。放たれる重圧に呑み込まれる死電とレイアーストは、呼吸が苦しくなり膝を落とした。

「かはっ……。な、何だ……」

「災いは根から断ち切る」

フードの下から凜と堂々とした声が聞こえる。

『我を開放せよ』

「今解き放つ。汝の力」

その声と共に、顔の前に構えられた脇差が輝きを放つ。まるで具現化される時の様な眩い光に、死電は目を疑う。そして、死電の目の前で、それは変化を遂げる。鋭く透き通った刃に、金色に輝く鍔。装飾品の様な美しさの刀が構えられる。

押し掛かる重圧に押し潰されそうになりながらも、死電は立ち上がりレイアーストの具現化を解く。瞬時に危険を察知したのだ。

「逃げる！ 死電！ 俺等はこんな所で」

「分かっている！ 今」

「逃がさん」

「我が牙からは逃れられぬ」

サポートアームズの言葉と同時に、刃が一閃。そして、何事も無くサポートアームズは元の位置に構え直された。

死電には傷一つ無く、斬られた形跡は無い。もちろん、死電も斬られた感触や痛みなどは無かった。恐る恐る体に触れてみるが、やはり無傷だ。

「ふ…ふはは…フハハハハッ！ 驚かしやがって！ 何が、逃られぬ…だ…」

声が途切れる。そして、血が舞う。何が起こったのか分からず、死電の体が崩れる。視界が可笑しい。いつの間にか、コートを着た者を見上げる形になっている。呆然としてみると、コートを着た者の唇が僅かに動く。何かを言っている様だが聞き取れない。いや、聞く事も出来ず、意識は飛んだ。

崩れた死電の体が光となり、サポートアームズに吸収される。残されたレイアーストは、ゆっくりと屋根の上に落ちた。

「クツ！ 何故、貴様がそれを」

「セイバー。これは、どうしたらいい？」

凜とした声が右手に持った刀に尋ねる。セイバーと言うのが、このサポートアームズの名の様だ。原形の脇差へと戻ったセイバーは、独特の低く渋い声で答える。



『我等の仕事は、監視役。本来、この様に手を下してはならぬ掟になっっている』

「考え方が古い。今は今。昔は昔よ」

その言葉に対し、間を空ける。特に怒っている様子も無く、ただ何かを考えている様な感じで、すぐに淡々とした口調で口を開く。

『古いか……。随分長く生きたから……。そう言われても仕方あるまい。しかし、我等の仕事は今も昔も変わらぬ監視役。下手に手を出し正体を知られれば命取りになりうる』

「かもね。だからこそ、今まで友人が傷付いても我慢していた。けれど」

『言いたい事は分かる。だが、我々はあくまで監視役。それだけ忘れるでない』

「分かってる」

ボソツと呟くと、レイアーストを回収し、その場を退いた。その姿はすぐに見えなくなり、風のように消え去ってしまった。

第六十話 監視役（後書き）

大分遅くなりました。すいませんでした。  
次の話が早く更新できるよう頑張ります。

## 第六十一話 謎の男

街は夜の静けさに包まれた。

暗がりの街道を歩む彩は、小さく深々とため息を吐く。

奈菜から色々相談された。胸の中に溜め込んだものを吐き出す様に、奈菜は悩みと想いを彩に話してくれた。けど、彩は何も答えず、現在に至る。

「はあ……」

もう一度ため息を漏らし、夜空を見上げた。煌く星を見ながら、右手で前髪を掻き揚げ、そのまま額を押さえる。

『どうかしましたか？ 彩様』

「うん。私、ダメだなって……」

肩を落とし大きくため息を吐く。そんな彩を励ますようにウィンクロードは焦りながら答える。

『な、ななな何を仰っているんですか！ そんな事ありませんよ』

「気を使わなくていいよ」

『そ、そんなつもりじゃ……』

少し暗い表情の彩は、もう一度ため息を吐いた。

その時、前方で黒い影が動き、ウィンクロードがそれに気付き彩に知らせる。

『彩様！』

「何？ どうしたの」

「随分と平和ボケしているな。水島のお嬢さん」  
「誰！」

声のする方へと顔を向ける。街灯の向こう側に黒い影が一つ。彩よりも少しだけ背丈が高く見え、肩幅も広い。それに、低音の凛々しい声からして、男だと分かる。しかし、彩に聞き覚えの無い声だった。

警戒を強める彩は無意識に胸元で揺れるウインクロードを握り締める。瞬時に具現化出来る様、黒い影から視線は逸らさない。だが、男が動く気配は無く、淡々とした口調で言葉を告げる。

「時は満ちた。五大鬼獣の力は目覚め、全ての鬼獣が集う」

『五大鬼獣の力が目覚めたとは、どう言う事ですか！』

「それよりも、鬼獣が集うってどう言う事！ 何処に集まるって言うの！」

ウインクロードの問いを掻き消す彩の声。しかし、その声に返答は無い。

苛立つ彩は奥歯を噛み締めると、素早くウインクロードを具現化する。眩い光が路地を照らし、彩の背丈程の杖が手の中に現れた。杖の頭に付いた水晶が青白く光を放つ。

『あなたが何者かは存じませんが、詳しい話を聞かせてもらいますよ』

「力づくで……か？ 止めておけ。死ぬぞ」

「あなたがね！」

彩の背後から別の声が轟き、疾風が地を駆ける。彩の両足の間を抜け、ミニスカートがはためく。と、同時に闇に隠れる男を風の刃が襲う。黒い影が風の刃を受け、粉々に砕けた。しかし、すぐに元

の形に戻り、男の高笑いが響く。

「クフフフツ……。止めておけと言っただろ？ 無駄に終わるだけだ」

「無駄かどうかは、俺たちが決める」

声と共に男の足元から炎が炎上する。やがて炎は男を覆いつくす。激しく燃える炎に、驚きを隠せない彩に、背後から声が掛けられた。

「大丈夫、彩」

「う、うん。大丈夫。それより、何で優花がここに？」

「彩や守君と話があって」

「グアアアアッ！」

叫び声が聞こえ、彩と優花の視線が先ほどの男の方へと向けられた。

「炎蝟！」

「言っただろ？ 無駄だと」

炎上していた炎は消え、そこには男が仁王立ちしていた。右手には炎を放出していた炎蝟が、首を掴まれ動きを拘束されている。優花の手持ちでは上位の強さを誇る炎蝟が、こつも簡単にやられ、優花自身も少し焦っていた。

姿すら見る事の出来ないその影に、奥歯を噛み締める優花は、キファードレイを掲げると、勢い良く振り下ろす。

もう一度疾風が地を駆け、鋭い刃が男に襲いかかる。しかし、全く避ける気配も見せない男はゆっくりとした口調で告げる。

「懲りない奴だ。それほどまでに知りたいか？」

「力の差を！」

男が左手を前へと突き出す。その瞬間、爆風が風の刃を呑み込み、路地を破壊しながら優花と彩へ向って直進する。舗装された道路が次々と碎け捲り上がり、路地を挟む塀すらも呑み込み轟音を辺りに轟かせた。

だが、爆風は彩と優花の手前で消滅し、無残な傷痕だけを残す。力を差を見せ付けられ、呆然と立ち尽くす二人。

既に男の姿は無い。

『一体、何者だったのでしょうか？』

「封術師やガーディアン同类じゃないって事はハッキリした」

『んな事より、早いとこずらかった方がいいんじゃないか！』

「そうね。この状況で人に見られるのはまずいわ」

優花はそう言いキファードレイを元に戻す。彩も少し遅れてウインクロードを元に戻した。破壊された塀と路面を見て、苦笑する。もしこの状況で人と会ったら、何て言い訳したらいいんだろう、と考えると笑うしかなかった。

その時、背後から足音が聞こえる。

『彩様！ 人です！』

「へッ？ ひ、人？」

「まずいわ。急いで」

「又オツ！ 何だこりゃ！」

彩と優花が逃げ出す前に、そんな声が響いた。何と無く聞き覚えのある声に続き、もう一つ聞き覚えのある声が聞こえる。

『こんな所で、テロは考えられんな』

「つてことは」

『鬼獣だろうな』

「鬼獣がこんな所で暴れるものですかね？」

『鬼獣達にも色々と考えがあるんだろ？』

「そうですね。俺にはとてもそうとは思えんが……」

「あんた等……知ってて無視してるわけ！」

遂に彩が怒鳴る。その声に対し、驚いた声で返答が返った。

「おおっ！ 水島さんじゃありませんか！ こんな所で会うとは奇遇ですね」

「まーもーるー！ あんた、一体いつからそこに居たのよ！」

「いつからって……そりゃ、力づくで……かつて、所からですよ」

「それって……ほぼ、初めからじゃない！」

笑みを浮かべる守の頬に、彩の鉄拳が入った。

「はっつー！」

痛々しい鈍い音と共に、守の呻き声が聞こえる。苦痛に蹲る守は、左頬を摩りながら彩の顔を見上げた。鬼の様な形相をする彩に、守は怯えた笑みを浮かべ「すいませんでした」と、小声で謝る。しかし、怒りが収まらないのか、彩が拳を鳴らし一歩守に歩み寄った。そこで、ようやく優花が口を開く。

「よしなさい。彩」

「けど」

『そうです。彼はガーディアンなのに』

「だから、それは」

「うるさい！ 言い訳は聞かないわよ！」

「はっつ」

頭を叩かれた。

頭を押さえる守は、優花の方に目をやり静かに口を開く。

「風見さん……。ちゃんと話してくれたんじゃないんですか？」

「ごめんなさい。まだ話してないのよ」

「な、何？ 何の事？」

彩は話が見えず、守と優花を交互に見る。困った様な表情を見せる優花は、何処から話すべきか迷っているらしく、腕を組んだまま小さく息を吐く。一方で守は呻き声を上げながら立ち上がり、不満そうな表情で彩を見据える。

しかし、そこでパトカーのサイレンの音が響き、三人はその場を一目散に逃げ出した。それから、守の家の近所にある公園へと逃げ延びた。

「あうっ……。今日は散々な日だ」

『全くだな』

「つて、それは、私のセリフよ！」

「散々殴ってそれはないでしょ？」

「何、もう一発殴りたい？」

「いえ……。結構です」

笑顔で拳を鳴らす彩に、怯える守は即座にそう答えた。呆れた様なため息を吐くフロードスクウエアは『尻に敷かれるなよ』と、呟く。しかし、その声は守には聞こえていなかった。

ようやく落ち着いた頃、話が進められた。優花が彩と会うより先に守と会っていた事。優花の指示で守が姿を現さなかった事。全てを彩に話した。



「う、ごめん！」

今までの事を謝る彩。 散々殴っておいて、ゴメンで済むと思っ  
ているのか、とフロードスクウェアは思ったが、守の場合はそれで済  
んでしまうのだ。それが、フロードスクウェアには理解できず、も  
う一度深いため息を吐いた。

## 第六十一話 謎の男（後書き）

こんばんは。作者の崎浜秀です。

読者の皆様に募集したい事があります。

それは、“鬼獣”の名前です。色々と考えているのですが、いいアイデアが浮かびません。

それで、読者の皆様の力を貸してください。よろしく願いします。

## 第六十二話 信頼関係

夜の公園。

夏だと言つのに冷たい風が吹く。

砂塵が舞い、ブランコが揺れる。その度に錆びれた鎖が軋む。

外灯が園内を照らし、その光りに虫達が寄る。

静けさ　それが園内を包み込み、同時に険悪な雰囲気醸し出していった。

だが、その静寂は破られる。突然響いた声によつて。

「エッ！ 何で！ 何でよ」

彩の声だ。

突然の優花の言葉に、彩があげた悲鳴の様な声だった。

守も話を聞いた時に驚いたが、すぐに事態を理解した。頭の中で色々な事を整理する守に対し、感情的になる彩が問い詰める様に言葉の口にする。

「ねえ。どうして、優花と大地が本部に戻るわけ！」

「本部の決定よ。それに、私と大地は人影を追って来たただだから」  
「で、でも……」

寂しそうな表情を見せる彩。それもそのはずだ。優花は元々彩の目標の人だった。仲直りも出来、ようやく封術師としての事を学べると思った矢先だ。納得できるはずも無かった。

そんな彩の頭を右手で撫でた優花は、優しい笑顔を見せ口を開く。

「大丈夫。あなたは強いわ。それに……彼も居るでしょ？」

優花が守の方に顔を向けた。だが、彩は不服そうに唇を尖らす。

「優花は守の事、気に入ってるみたいだけど……。正直、私はあんまり……」

「彩……。もつと彼を信じなさい」

真剣な眼差しが彩を真っ直ぐに見据える。彩はこの優花の目が苦手だった。心の中を見透かしている様で。

優花から目を逸らし、守の方へと視線を向ける。

こちらの声が聞こえていないのか、右手を顎に添えたまま動かない。考え事をしているのだろう。

小さくため息を吐く彩は、優花の方へと視線を戻し、不安そうな声で聞く。

「どうして、そこまで信頼してるの？」

優花の目を真っ直ぐに見据える。興味があった。優花がそこまで守の事を高く評価する理由に。

初めは守の事がタイプなのかと、思っていた。だが、それが違うと言う事に、最近になり気付いた。大地も「優花がアイツに惹かれるのは、何か特別な理由があるはずだ」と述べており、彩もその大地の意見と全く同じだった。

「ふうう……。彩……。それ、本気で言ってるの？」

「へッ？」

意外な返答に声の上擦る。

優花が息を吐きながらゆっくりと瞼を閉じ数秒後、今度はゆっくりと瞼が開く。だが、その目付きは瞼を閉じる前とは違い、鋭く怒りの滲んだ目だった。

一瞬、脳内に電流が走り、それに連鎖する様に体が硬直する。これが初めてかも知れない。優花が彩に対して、怒りを滲ませたのは、どうして怒っているのか、彩は分からなかった。

その彩に、優花は厳しい口調で言う。

「分かっているはずよ。封術師とガーディアンの関係は」

「わ、分かっているよ。それは……でも！」

「でもないわ。封術師とガーディアンはお互いを信じあえなきやダメよ。ガーディアンは封術師を護る為に命を張り、封術師はガーディアンを援護しつつ鬼獣を封じる。その意味をちゃんと分かっているの？」

厳しかった口調が、やや和らぐ。別に優花も怒りたくて怒っているわけではない。多くの経験から、彩よりも封術師とガーディアンの関係の大切さをよく知っていた。だから、彩には知っていて欲しかったのだ。

「ゴメン……。優花」

「いいのよ。私も強く言い過ぎたわ」

彩の頭を優しく撫でる。

そして、一呼吸空けてから、ゆっくりとした口調で言い聞かせる。

「彩。信じなさい。彼を」

「うん……分かった。けど、私と守だけで、大丈夫なのかな？」

「大丈夫よ。彼はあなたが思っている程弱くないわ。それに」  
「それに？」

オウム返しに聞き返す彩に、優花は嬉しそうに微笑みながら答える。

「それに、私が惚れた人だから……キヤツ！ 言っちゃった」  
「……」

今まで見せた事の無い女の子の様な言動を見せる優花に、啞然とする彩は小さくため息を零した。

本気で言っているのか、冗談なのか分からない為、彩は引き攣った笑みを浮かべ優花を見る。恥ずかしそうに体をモジモジさせており、それが冗談では無いのではないかと、疑ってしまいたくなる。

「優花さ……。それって、何処まで本気？」

恐る恐る尋ねてみた。すると、

「何処までって」

間が空き、優花が恥ずかしそうに俯く。

「全て本気よ」

「……冗談でしょ？」

引き攣った笑みを浮かべたまま彩が尋ねる。だが、優花の返事は変わらない。

「冗談なんかじゃないわ。守君を見てるとね、胸の奥がキュンってなるの」

「嘘……でしょ？ 優花……本気で、守みたいのがタイプなわけ？」

彩の問い掛けに優花は僅かに頷いただけだった。

困惑する彩。まさか、本気で優花が守の事を。

思考が上手く働かず、暫く放心する。

考え込む守と、放心状態の彩に、照れている優花。この三人の光景は、夜の公園では異様に見え、傍から見れば可笑しな三人組にか見えないだろう。

それにいち早く気付いたのはフロードスクウェアで、三人に聞こえる程大きなため息を吐いた後、

『お前ら、馬鹿だろ』

呆れた口調で述べた。

その言葉で我に返る三人。そして、いち早く声を上げたのはウィンクロードだった。

『さ、彩様を馬鹿呼ばわりするとは！ 無礼にも程があります！』

『馬鹿に馬鹿って言って何が悪い』

『なっ！ 何ですか！ それは』

『あーあ。うるせえな！ てめえら』

やる気の無い声。キファードレイの声だ。ウィンクロードと違って、怒っている様子は無く、相変わらずの荒々しい口調で言い放つ。

『てめえらはうるせえんだよ。少し黙ってる！』

『んだと』

『やめるよ。フロードスクウェア。見つとも無いぞ』

『けど』

『けどじゃないよ』

フロードスクウェアは言葉を呑み、小さく舌打ちをした。しかし、その舌打ちは誰にも聞こえる事無く夜空へと消えた。

ウィンクロードもキファードレイも、フロードスクウェアと同じ

様に、持ち主に宥められ大人しくなる。特にキファードレイは逆らう事無く、静かになった。

「話が少し逸れたけど、守君。暫くの間、彩の事お願いね」

「ちよ、ちよっと！ 優花！」

期待に満ちた視線を守に向ける優花に、彩は恥ずかしそうにそう叫んだ。その声に含み笑いを見せる優花は、彩をあやす様に頭を撫でた。完全に子供扱いの優花に、頬を膨らす彩は「もう知らない」と、ソツポを向いた。

そんな二人のやり取りに思わず守は笑ってしまった。

「プツ、フフフツ……」

「な、何よ！ 何が可笑しいわけ！」

「い、いや……な、何でも無いよ」

彩と優花に背中を見せる様にして笑う。可笑しくて仕方なかった。まるで本当の姉妹の様だったからだ。同じ歳なのにそう見えた事が可笑しく、肩を震わし必死に笑いを堪えた。

「な、何だわけ！ 一体」

「フフフツ……。私は何と無く分かった気がするわ」

「エツ？ 何何？ どういうこと？」

気になると言わんばかりに優花に詰め寄る彩に、「フフフツ」と楽しげに笑い、

「気にしない事よ」

「エツ？ で、でも」

「さあ、そろそろ帰るわ。暫く会えないけど、頑張つてね。二人と



も  
」

話を逸らす様にそう述べた優花は、守の方に顔を向け愛らしく微笑んだ。この日、初めて見せる様な可愛らしい笑顔だった。

## 第六十二話 信頼関係（後書き）

月一の更新ですいません。

努力しているのですが、どうも上手い具合にいきません。

読者の方には迷惑をお掛けしています。気長に待ってもらえると、  
ありがたいです。

## 第六十三話 異変

夜が明け、いつもの朝が訪れる。

何も変わらないハズのいつもと同じ朝。

だが、早朝ランニングをする守は、何処か違和感を感じていた。ピリピリと肌を刺す様な空気。それが、そうさせているのかも知れない。

一方のフロードスクウェアも街の異変に気付いていた。複数の鬼獣の気配。それに混ざって微かに感じる強いサポートアームズの気配。どれも守の力では到底及ばない程の力を持った者達だ。

昨夜の話から、鬼獣が集う場所はこの町で間違いない様だ。だが、何故この町なのかは不明だ。特別な力を持つ土地の様には思えないが、もしそうだとしたら、何故大地と優花の二人を本部へと戻す必要があったのか。様々な疑問に頭を悩ますフロードスクウェアに、不意に守が声を掛けた。

「なあ、何か変じゃないですか？」

『変？ どうしたんだ急に？』

「いや……。何か、町中ピリピリした空気が漂ってるって言うか……。息し辛い」

『そ、そうか？ 俺はあんまり気にならないがな』

こう言う時の守の勘の鋭さは、群を抜くものがある。気配を探れる奴よりも優れている為、フロードスクウェアとしては不安だった。自分から危険な場所に知らず知らずに突っ込んでいそうだからだ。

ランニングを続ける守はいつもの様に月下神社の石段を登る。その時、フワッと石段の上から冷たい風が吹き抜ける。冷気とも言えるその風に、守は足を止めた。ボサボサの黒髪が冷気に撫でられしなやかに揺れる。

「変じゃないか？」  
『んっ？ どうした？』  
「可笑しいよ。変だつて」  
『何言つてん ツ！』

突如襲う強烈な殺気に、言葉が途切れる。身の危険を瞬時に感じ、  
大声で叫ぶ。

『守！ 逃げろ！』  
「へっ？ な」  
「貴様はガーディアンか？」

突然の声。艶かしくも鋭い女性の声に、守の体も硬直する。気付いてしまったのだろう。彼女の放つ殺気と禍々しい憎悪に。  
動く事の出来ない守の視界に映る。長く美しい白髪に真っ白の死に装束。まるで雪女を見ている様だった。凍える様な淡い蒼の瞳が、守の事を真っ直ぐに見据える。

「私は氷神<sup>こりかみ</sup>。貴様は」  
『守！ 俺を具現化しろ！』  
「守？ そうか。あなたが火野 守か。ならば話が早い。私に付いて来い。あなたに話がある」  
『話……だと？ ふざけた事を ツ』

氷神の鋭い眼差しにフロードスクウェアは言葉を呑んだ。今まで戦ってきた奴等とは明らかに次元の違う殺気。幾らフロードスクウェアでもその殺気に逆らう事が出来なかった。

向い合う守は目の色を変え、ゆっくりとした口調で問う。

「あなたがやったんですか？」

「……勘が良いな。だが、私ではない」

「な、何の事だ？」

状況が把握できない、と言わんばかりにフロードスクウェアが言葉を挟む。だが、守はそれに返事を返さず、拳を握ったまま氷神を睨んでいた。

二人の視線は対照的とも言えた。感情を剥き出しの守の眼差しと感情すら凍り付かした冷たい眼差しの氷神。両者の対峙は続く。数十秒 数十分 どれ位の時間が経ったのかは定かではない。だが、それは突然起きた。

『な、何だ！』

「クツ！ 始まったか……」

地響きと共に爆音が轟く。風がザワメキ、木々が囁く。町で起きている事を全て伝えるかの様に。

町のあちこちで火の手が上がり、黒煙が立ち上る。崩壊する建物、逃げ惑う人々、襲い来る鬼獣。平和に見えた町は一瞬にして悪夢の様な光景へと変貌し、人々の悲鳴と血飛沫が飛んだ。

悪夢の様な光景の中に、大地は居た。血塗られた壁、漂う異臭、不気味な獣の遠吠え。全てが町を狂わす。それでも尚正気を保つ者。それは限りなくゼロに近い人数だった。

「クソツ！ な、何だつてんだ！」

『落ち着け大地。まずは優花と合流するんだ！』

「うるせえ！ そんな状況じゃないだろ！」

右腕のブレスレットを握ると険しい表情を浮かべ奥歯を噛み締めた。

人が死ぬのを見るのは初めてじゃなかった。鬼獣と戦う以上、人の死に直面する事は日常茶飯事と言ってもいい。それでも、こんなに多くの人が血を流し、苦しむ光景を未だかつて見たことが無かった。

「グラットリバー！」

叫ぶと同時にグラットリバーを具現化した。オレンジ色の水晶が手の甲に輝き、艶やかな漆黒の手が鋭く煌いた。

「モード黒金！」

モード黒金 対電気に優れグラットリバーの初期原形。最も硬質な物質で構成され、武器でありながら盾の役割も果たせる大地のお気に入りでもあった。

腰を落とし姿勢を低くする大地は、右手をゆっくりと地に下ろす。鋭利な指先が僅かに地に触れたその瞬間、大地はそのまま右手で地を搔つ切り駆ける。コンクリート地面が裂け、爪痕がくつきりと残された。

「グラットリバー 捕捉しろ」

『無茶言つな！ そもそも、俺は大勢を相手に戦うのには不釣り合いなんだぞ。ここは優花か、お嬢様のどちらかと合流して』

「ダメだ！ んな事してる暇は無い。それに……」

言葉が途切れ、大地の拳が空を一閃する。地を駆ける狼電。その頬に漆黒の拳が減り込み、血飛沫を吐き地面を転がる。大地の一撃、それが周囲に散ばる他の狼電の怒りを買う形となった。

完全に囲まれ、青白い光りが全ての狼電と共鳴する。

「それに、見せたくないんだ……」

『見せたくない？』

「ああ。無様な俺の姿は」

弱気な言葉に複雑そうに歪んだ笑みを浮かべる。グラツトリバーがその笑みに込められた意図を理解するまでそう時間は掛からなかった。だが、声を発するより先に眩い光りが辺りを包み、轟音が大気を裂く。

「グアアアアアッ」

大地の叫び声が眩い光りの中から響き、轟音へと掻き消された。

「私は、ゼロの使いです」

長い沈黙を破ったのは氷神だった。鋭い目付きとは裏腹に、美しく丁寧なお辞儀。それは、守に対して敵意は無いと言う表れだった。戸惑いながらも守は理解する。彼女が悪ではないと。だが、フロードスクウエアだけは警戒を解かなかった。押し殺してはいる様だが、その体から染み出す僅かな殺気を感じとっていたからだ。

警戒を解くと氷神は顔を上げる。二人の視線がぶつかり、それと同時に氷神が口を開く。

「あなたに話がある」

「俺に……話？」

「騙されるな！」

凜とした声と共に、守の横を褐色の肌の女性が駆ける。見慣れた青桜学園の制服に身を包んだ彼女は、美しい漆黒の髪を揺らし、その手には女性には似つかわしくない刀を握っていた。

その声、その後姿に守は見覚えがあり、

「犬神さん！」

思わず叫んだ。

犬神 智夏 彩の友であり望美の大親友でもある彼女は、刀の柄を握り締めると、右足を踏み込み刀を振り抜く。

全てを見据える。足の踏み込み、腕の振り、刃の入る角度。全ての動きを視野に捉えていた。

「遅いです」

氷神が体を仰け反らせ刃をかわす。切っ先が僅かに氷神の白い髪を掠め、美しい白髪が宙を優雅に舞う。

「チツ」

小さな舌打ちが響き、連動するかの様に前傾姿勢から突きを見舞う。だが、軽快な足捌きを見せる氷神にこの刃が届く事は無く、僅かに右脇の下をすり抜けてしまった。体勢を崩した智夏は、左手を地に着くと無理な体勢から右手だけで刀を振り抜く。

しかし、氷神には全てを読まれていた。一連の細かい動き全てを、その眼は捉えていたのだ。足の踏み込み方から腕の振り抜き方、僅かな視線の動きまでもを見透かしていた。



## 第六十四話 狼電

住宅街の複雑な通りを駆ける少女。

髪は黒く肩口で毛先が激しく揺れる。淡い青の布地に濃い青のチエツクの入った青桜学園指定ミニスカートが揺れ、胸元の大きなリボンが呼吸に合わせて上下に動く。

水獅・風蛙屍かざあしが地上を駆け回り、火虫ひちゅう・燕雷えんらいの群れが空中を滑空する。

少女は背後を気にしながら、首からぶら下げたネックレスを握り小声で問う。

「ウインクロード、守の居場所は分かった？」

可愛らしい澄んだ声が、少し厳しい口調で尋ねると、ネックレスの杖型のアクセサリーに付いた小さな水晶が光りを放ち、少々低めの真面目そうな声が聞こえる。

『強大な邪気と大勢の鬼獣の気配で正確な位置は分かりませんが、僅かにフロードスクウェア殿の力を感じます。しかも、邪気を中心付近に……』

「何でそんな所に……」

呆れた様のため息を漏らす少女は、十字路を右に曲がり身を隠す様に壁際に凭れ掛かる。地を駆ける鬼獣は十字路を直進し、少女の存在に気付いていない様子だった。いや、多分少女を相手にすらしていないのかも知れない。

呼吸を整える少女はポケットから携帯を取り出すと、小さなため息を吐いた。

「あつてっ……。今頃、守の携帯番号知らない事に気付くななんて……  
パートナー失格だよ」

『何を言ってるんですか！ そんな事ありませんよ！ 彩様！』

声を荒げるウインクロードに、彩と呼ばれた少女がニコリと微笑んだ。

「ありがと。いつもゴメンね」

不意の言葉にウインクロードも戸惑い、しどろもどろになる。

『い、いえ。そ、そんな事は……。わ、私は当然の事を……』

後半は聞き取れなかったが、随分と動揺しているのが分かった。それが面白く、彩は口元を隠してクスクスと笑い、ウインクロードを優しく握る。手の中から静かに光りが溢れ、杖型のアクセサリーが具現かされた。

背丈程の大きな杖。頭には青白い水晶が煌き、美しい姿を見せ付けた。空を裂く様に杖を回転させる彩は、小声でぼそぼそと何かを呟き、顔をゆっくりと閉じる。水晶が薄気味悪く点滅し、空中に円を描く。

「汝、我に従え。私の供となりて、障害となるモノを払え！」

左手でカードフォルダーを開き、一枚のカードを取り出す。青白い雷撃を身に纏う狼電の絵柄の入ったカードを。

「召喚！ 狼電！」

高らかと響く声と共に光りが水晶から溢れ、左手に取った狼電の

カードが光りを放出し、消滅すると同時に狼電が姿を現した。体に深い傷痕が残った雄雄しい体格。他の狼電と違う赤黒い瞳を僅かに動かし、彩の顔を見上げ、大きく裂けた口をゆっくりと開き牙をギリりと光らせた。

「ガルルルツ！」

『相変わらずの様で……。本当に大丈夫なのですか？ 言う事を聞かない鬼獣などを召喚しても……。私は心配ですよ』  
「貴様に心配される程、私は落ちぶれていない」

低い擦れた声が返答し、鋭い眼差しがウインクロードへと向けられる。だが、その事よりも、その声の主に驚き彩もウインクロードも同時に声を上げた。

「喋れたの！」

『喋れたのですか！』

重なった二人の声に、呆れた表情をする狼電はじと目で彩とウインクロードを見据え、ふてぶてしくため息を漏らした。それがあまりにもワザとらしく嫌味っぽいため息だった為、彩もウインクロードも無性に怒りが込みあがってきた。

だが、揉めている場合ではない為、怒りを堪え淡々とした口調で話し始める。

「力を貸して欲しいわ。って言うか、貸しなさい」  
「断る」

背を向け即答した狼電は、右前足を舐め毛繕いを始めた。無然とする彩は右手に握ったロッドに目をやると、小声で問う。

「何あの態度は？ いつもあんな感じなわけ？」

「え、ええ。まあ、相変わらずと言った所です。これでは全く使い物になりません」

「フツ……。まるで道具を扱う様な口振りだな。まあ、貴様らにとつて鬼獣など道具に過ぎんか？」

「あなたなど」

「やめて！ ウィンクロード」

狼電の言葉に反論しようとしたウィンクロードを制止し、彩は小さくため息を零してジツと狼電の背中を見据え言う。

「私達は別にあなた達を道具だ何て思っただけ。ただ、力を貸して欲しいの」

「力を貸して欲しい？ なら、何故私達を封じる？ 何の為だ？」

私達が何をした？」

「ふざけた事を！ あなた方はむやみに人を襲い、命を奪う！」

「それは、人間も同じだ。私達の住処を奪い、自然を破壊する。それが原因となり、鬼獣は力を暴走させ町で人々を襲う。私もそれとなら変わらない。人間が起こした害を受け、力が暴走した。その結果がこの体の傷だ」

体に刻まれた傷を見せ付け、怒りをぶちまける様な口調。人間を怨み、封術師を憎む。そんな眼差しが彩を睨んだ。だが、彩はその目を受け入れ、真っ直ぐな瞳で見つめ返す。赤黒い瞳と、漆黒の瞳が視線を交えたまま動かない。

沈黙が辺りを支配する。町で暴れる鬼獣達の雄叫びや、逃げ惑う人々の悲鳴だけが聞こえてきた。流石に狼電も状況を悟り、小さなため息を吐き視線を下ろす。

「分かった……。今日の所は手伝ってやろう。だが、今日だけだ」

擦れた声の返答に、彩も笑顔を向け、

「ありがとう」

『それより、これからどうするおつもりで？』

「取り敢えず、守と合流。それから町で暴れてる鬼獣を」

「止めておけ。お前等では相手にならん。行くだけ無駄だ」

低音の大人びた男声が前方から聞こえ、彩と狼電がすぐさま視線を向けると、そこに男が居た。背丈は高く身は細い。刈り上げた黒髪に、楕円の薄いサングラスで目を隠していた。黄色の布地に赤と青で装飾されたアロハシャツを着込み、左手の人差し指に赤い水晶の付いたリングが輝く。

「誰だ？ 貴様は」

「俺の事は、その出来損ないにでも聞いたらどうだ？」

『その様な愚弄を』

『お前も、出来損ないのーつだ。ウィンクロード』

女の子らしい可愛い声が、嫌味ったらしい口調でウィンクロードの発言を止めた。その声を、ウィンクロードは良く知っており、その口調からそいつが怒っている事も瞬時に判断する事が出来た。

対峙するだけでピリピリと伝わる異様な威圧に、彩とウィンクロードは圧倒されていたが、狼電だけは臆す事無く一歩前へと足を踏み出す。

「誰かは知らんが、私は今、非常に機嫌が悪い。邪魔をするなら相手をしてやってもいいが、命を落とすかも知れんぞ」

「下級の鬼獣無勢が、調子に乗っている様ね」

「クツ！ あんたも来てたの」

振り返ると、そこに少女が居た。彩よりも小柄で色白、腰まで届く群青の髪は美しく、風に靡く度に毛先が輝いて見え、その合間から見え隠れする耳には金色に近い黄色の水晶の付いた十字架の形のイヤリングが煌く。それが、彼女のサポートアームズだった。

彩もウィンクロードもそのサポートアームズの名を知っており、その力の凄さも彼女の強さも嫌と言う程知っていた。

「元気そうだけど、ここからは早く消えて」

「ここは私の担当よ。あなたの指図は受けないわ」

「人が親切で言ってるのに、そう言う態度は良くないぜ」

男の方がそう言うと、少女が軽く頷き右手でイヤリングに触れと、眩い光りが彩と狼電の視界を遮り、不気味な物音だけが聞こえた。

## 第六十五話 黒い壁

落雷により破壊された高層ビルの窓ガラスは、破片となり地上へと降り注いだ。破片のそれぞれが光りを反射し、煌びやかに輝いた。降り注いだガラスは地面にぶつかり弾け、清らかな音色を奏でる。

黒焦げ砕けた歩道。はち切れ変形したガードレール。全てが落雷の衝撃を物語っていた。砕けた歩道の中央には黒い塊だけが残され、他には何も残っておらず、黒煙だけが舞い上がる。周囲を囲う狼電はそれを確認すると、足早にその場を立ち去った。

「危なかったな」

綺麗な男の声と共に、瓦礫の上に大地が落下する。衣服は所々が黒く焦げ、髪はボサボサに乱れていた。煤にまみれた顔を拭いたその右手は、未だ具現化状態を保つグラツトリバーの姿もあった。

肩で息をする大地は黒光りする右手を高らかと振り上げ、人差し指を立てると大声で怒鳴る様に言葉を告げる。

「テメエが何でここに居る！」

「助けてもらってその口の利き方はないだろ？」

先ほどの綺麗な声。その主が地上へと降り立った。背中には白銀の翼を持ち、整った顔立ちが更に際立ち、金髪の髪が全ての女性を魅了する。漆黒のスーツは足の長い彼に似合い、首元で緩んだワイシャツのボタンの隙間から見える胸板が、少しだけ色っぽく見えた。だが、男の大地にとってそんな事はどうでも良く、怒りに満ちた目で真っ直ぐに少年を見据え、怒鳴る。

「うるせえ！ テメエがどうしてここに居るのか聞いてんだよ！」

「相変わらずギャーギャーと五月蠅いね。キミは。大体、俺が来た理由も分かっているはずだろ？」

「んだと！」

拳を握る大地に対し、無防備に立つ男。

沈黙と睨み合いが続き、静かに時が流れる。ジリジリと間合いを計る大地は、腰を屈めると左足を引き前傾姿勢をとった。右手がパキパキと異様な音を奏で、大地の表情が苦痛に歪む。

「その体で、アレを使うのは良くないと思うよ」

「うるせえ！ テメエの指図は受けねえ！」

「止めなさい！ 大地」

突如響く優花の声。それが、大地の行動を静止する。湧き出す感情を押し殺し振り返った大地は、優花の方に顔を向けるが目を見ず押し殺した声で問う。

「優花！ どう言う事だ。こいつが来てる事を知ってたのか！」

「誰かが来る事は知ってたけど……。まさかあなたとは思わなかったわ。久遠 達樹君」

赤い瞳が真っ直ぐに久遠 達樹を睨み付けた。爽やかに笑みを浮かべた達樹は、両手を広げると嬉しそうに歩みを進める。

「久し振りだね。ここでキミに逢えるとは俺は幸せだよ」

「そう。私はあまり逢いたくは無かったわ」

「つれないな。俺とキミの仲じゃないか」

「あなたにそこまで気を許しているつもりは無いわ」

冷たく感情の籠っていない声色に、達樹が歩みを止める。そして、



優花の頬に優しく触れると、口付けをするんじゃないかという程顔を近づけた。真っ直ぐに目を睨む優花は、頬を触れる達樹の手を払うと、

「私に気安く触れないで。私に触れていいのは、私が認めた人だけ」

「フツ……。俺は、キミに認められていないのかな？」

「あたりめえだろ！ おめえの様な奴、優花に近付くんじゃネエ！」

キファードレイが遂に乱暴な口を開く。その言葉に達樹は不適に笑い背を向け歩き出した。大地と優花の視線を受けながらも、落ち着いた態度の達樹は、右手の薬指に緑色の水晶が付いたリングを填める。リングは輝きを放ち、綺麗な女性の声が響く。

「久し振りに見る顔があるわね。どういう了見かしら？」

「ウィーリス。悪いけど、二人を町の外へ」

「なっ！ ふざけんな！ 何で俺達が町の外に！」

「分かったわ。それじゃあ」

大地の言葉も虚しく、風が大地と優花の体を覆った。薄い膜が張り、球体へと変化する。抵抗を見せ様としない優花に対し、達樹を睨み付ける大地は、右手を振り上げ風の膜を殴りつけた。何度も何度も、その拳が砕け様とも力一杯に。

だが、風の膜は一方的にグラツトリバーの黒衣を剥ぐ様に削り取っていく。破片が飛び散り、具現化が解けむき出しとなった大地の拳が風の膜に触れ血を噴出す。

「クソ！ クソ！」

「止める！ 大地！」

「クソオオオオッ！」

振り下ろした拳が弱々しく風の膜を叩き、両膝を落とし頭を風の膜に押し当て拳を震わせた。怒りと悔しさに涙を流す。また、彩を守る事が出来ない事を。そして、また奴が全てを。

優花と大地を見送った達樹は、二人の姿が見えなくなったのを確認し、ゆっくりと右耳にイヤリングを付ける。黄色の水晶が不気味に輝き、老いた擦れた声が聞こえてくる。

『用件は分かっている。直ちに準備を開始する』

「ああ。頼む」

『承知した。これより、半径五キロ四方を覆う』

言葉を言い終えると、水晶が強い光りを放つ。それが合図だったのか、突如町を覆う黒い障壁。それは、陽の光りすらも遮り、町を闇に包み込んだ。

町の外へと追いやられた大地と優花は、黒の障壁が町を包み込むと同時に、風の膜から開放された。血と涙がポツポツと地面に落ち、押し殺した大地の呻き声だけが優花の耳に届く。長い間一緒に居るが、大地が涙を流す所を見るのは初めてだった。

その場の誰もが口を閉ざし、沈黙が続く。

目の前に広がる黒い障壁を見上げる優花は、いつの間にか元に戻った黒い瞳を伏せると、小さく息を吐き拳を握った。その拳から僅かに殺気を感じたのはキファードレイだけで、誰一人優花の怒りを知る者は居ない。

「グラットリバー……。モード黒金だ」

『分か』

「止めなさい！ 大地」

グラツトリバーを具現化しようとしたが、それを優花が止めた。理由は明らかだが、それでも大地は強行する。

「グラツトリバー！」

「大地！」

二人の言葉が交錯し、静けさが戻った。グラツトリバーは何も答えず、キファードレイも言葉を発せず、この場を見届ける。

静かに腰を上げた大地は、もう一度拳を握ると、俯いたままグラツトリバーに呼びかけた。

「グラツトリバー！ 早くしろ！」

「分かった」

「止めなさい！ グラツトリバー、分かるでしょ！」

大地を止めるのが不可能を悟ったのか、次はグラツトリバーに言い聞かせた。だが、グラツトリバーにその言葉に従わず、堂々とした声で答える。

『俺の志は大地と共にある。例え、どんな結末が待っていようとも』

低い声が終わる前に水晶が光りを放ち、大地の右手を包み込む。

しかし、光りが収まった時、そこにあつたのは不完全な黒金の姿だった。手の甲だけを包み込んだ黒の物質。指先は完全に肌を露出し、甲を覆う物質も僅かに亀裂が走っていた。

不完全な具現化にも関わらず、大地は左手で右手首を掴むと、その拳に力を込める。呻き声に近い大気を揺るがす雄叫びが、僅かに手の甲のオレンジの水晶を不気味に輝かす。

「うぐっ……」

激痛が腕を襲う。

そして、グラットリバーの黒い物質が、大地の腕を侵食し始めた。通常よりも数倍の速さで肘までを呑み込み、膨張する様に腕が膨らんでいく。その腕は既に原形を留めておらず、指先から伸びる鋭い爪の様なモノが、僅かに地を抉っている。

手の甲の亀裂。それは腕全体へと行き渡り、黒の物質に大きな窪みを生み出し、脆く崩れてしまいそうな姿を窺わせていた。

その侵食は止まらず、肩を越えても尚大地の体を貪り食う様に首へ上り、顎先まで食いつくそうとしていた。

刹那、咆哮が響く。大気を震わせ、地を砕き、目の前の黒い障壁にすら波紋を広げた。

## 第六十六話 現状報告

『現状を報告する』

低音の凜々しい男声が、漆黒のフードの下から聞こえた。

黒いドーム型の上に立つ男の足元で揺れるフード付きコートの裾から、使い古した黒の革靴が姿を見せる。それと同時に、先程の声が言葉を続けた。

『現在、住宅地にて水沢 彩と思われる人物が、男女二人組みと交戦中。二人組みの様子から、車 円まどかと林 竹尚たけなおと思われる。月下神社の石段付近には比嘉 守と犬神 千佳が氷神と思われる女と交戦中だ』

「……………」

言葉が終わり、大きく開いた裾口から薬指に赤い水晶の付いたりング、手首に蒼い水晶の付いたブレスレットを付けた右腕が現れ、人差し指で額をポリポリと搔いた。

「あのかな……………」

『何だ？』

「間違い過ぎだ」

『間違い？ 何をだ』

驚いた様子の声に、呆れた様にため息を吐き、頭を押さえたまま淡々と答える。

「まず、水沢じゃない。水島だ。水島 彩。それに、車じゃなくて、胡桃くるみ。比嘉じゃなく、火野。千佳じゃなくて、智夏だ」

『何！ あれでチカと、呼ぶんじゃないのか？』

驚愕する声に対し、もう一度深々とため息を吐き、男は俯く。その男に同情する様に、赤い水晶が光り、穏やかな男の声が聞こえる。

『ロツジエツガスに偵察を頼んだのが間違いだっただな』

「ああ。俺とした事が……」

『マスター！ ロツジエツガスに失礼ですよ！』

手首の蒼い水晶が光り、綺麗な女性の声が聞こえた。それに、マスターと呼ばれた男が眼を細め小さく息を吐く。

「しかしだな……」

『それより、これからどうする？』

ロツジエツガスと呼ばれた先程の声の主が、会話に割って入った。空気が読めないのか、空気を読まないのか分からないが、ロツジエツガスはマイペースに言葉を続ける。

『鬼獣は青桜学園に集まっている。あそこに何かがあると見ていいのだから』

『あゝ……分かってるよ。んな事さ。でも、私達もこの外じゃない。どうしようもないよ』

子供っぽい女の子の声がコートの内側から響き、マスターは腕を組み考え込む。全ての現状と自分の置かれた状況。今するべき事を、全て考える。頭の中で色々なモノが動き出し、思考が走り出す。

月下神社鳥居前。犬神 智夏と氷神のやり取りが続いていた。

睨みを利かせ、ジリジリと間合いを計る智夏は、艶やかな黒髪を揺らし、しなやかな褐色の腕で刀を振り上げる。風塵が舞い上がり、風が氷神の美しい白髪を撫でた。

そんな二人を止め様と守が間に入った。

「止める！ 犬神さん！」

「退け！ 火野！」

左手で突き飛ばされ、バランスを崩した守を、氷神が両手で支えた。

「大丈夫か？」

「あ、ありがとうございます……」

「いや。私はお前を傷つけるなど、命を受けている」

氷神が表情を変えずそう述べ、守からそっと手を放す。不服そうな表情の智夏は、右手に持った刀を下ろすと、拳を振るわせたまま俯いた。怒りを堪える様に奥歯を噛み締める智夏は、刀を鞘に収め頭を下げる。

「すまん」

「いえ。この様な状況で、疑うなど言う方が悪いんです。しかし、この件に関して、私どもは全く関与しておらず、この現状を調査し原因を消去する。それが、私にあてられた命でもあります」

淡々と感情の籠らない口調で話す氷神に、静かに顔を上げた智夏は、ゆっくりと息を吐く。そんな智夏を見据える守は、空を見上げ状況の変化を悟った。

空を覆う黒い壁。それが、何か守には全く検討もつかなかったが、町に不可解な現象が起きている事だけは分かった。

真剣な表情で空を見ていると、智夏の怒りを殺した声が聞こえた。

「あの化物は何だ？ それに、お前達は……」

「私はあくまでゼロの使い。現在、あなた方に危害を加えるつもりもありません」

「ゼロの使い？ ゼロって誰よ」

「私の尊敬する人……と、言っておきます」

氷神は冷やかにそう述べると、静かに視線を守の方へと向けた。だが、守は二人など見ておらず、首からぶら下げたネックレスと話をしていた。その姿に、すぐに氷神を異変を察知し、胸元から小さな水晶を取り出す。青白い光りを放った水晶から、澄んだ少年の声が聞こえた。

『強い反応があります。多分、この現象を起こした張本人だと思われます。どういたしますか？』

「……取り敢えず、今は動きを見ます。目的を探らなくては……」

『承知しました。それでは、動きがあり次第お知らせします』

そう告げ光りが消えた。

各々が何かを考える様に黙り込む中、守はハッと顔を上げると、本堂に向かって走り出した。智夏もその行動で、元々の目的を思い出し守の後に続き本堂へ向う。

鳥居を潜った先は、まるで氷河期の様な寒さだった。全てが凍り付き、冷気が漂う。息を吐けば、それが凍り付く様に白く変わる。宝石の様に煌く氷の中に、無傷に埋まる本堂。所々に人の姿もあり、守の脳裏に最悪のイメージが焼きつく。

「くっそ！」



両膝を落とす、拳で地面を殴った。鋭い氷が拳を裂き、鮮血が薄らと流れる。遅れてやってきた智夏もまた、守と同じ様にその光景に驚愕し、呆然と立ち尽くしていた。頭の中が真っ白になり、瞳孔の開いた瞳がゆっくりと左右に動き、氷の中に一人の少女の姿を探す。幼い頃からの親友である月下 望美のその姿を。だが、そこに探している少女の姿は無かった。

「そんな……。望美……」  
「何？　どうかしたの？」

嘆きボソリと呟いた智夏に、背後からそんな言葉が聞こえた。のんびりとした独特の口調に、聞き覚えのある可愛らしい声。その声に驚いたのは智夏と守だけではなかった。

「な、何で……」  
「どうかしました？」

ニコツと笑みを浮かべた望美と氷神の目が合った。氷神は見ていたのだ。月下神社が凍り、その中に望美の姿が会った事を、はつきりと覚えていた。その女が何故、ここに無傷でいるのか、その疑問から氷神の頭は混乱する。

一方で、望美が無事だった事に心から安心する守は、僅かに顔を綻ばせ笑みを見せ、智夏は嬉しさのあまり望美に抱きついていていた。

「どうしたの？　苦しいよ。智夏ちゃん」  
「良かった……。ホント良かったよ」  
「よしよし。怖かったね」

子供をあやす様に頭を優しく撫でる望美は、拳から真っ赤な液を垂らす守の方へと眼を向けた。そして、胸の位置で揺れる赤い水晶

の付いた剣のアクセサリーを見据える。

視線に気付く訳も無く、フロードスクウェアは水晶を僅かに光らせ、小声で守に告げる。

『今分かるだけの現状報告をする』

「現状報告？ お前にそんな事が出来たんですか？」

感心した様な馬鹿にした様な、そんな言葉遣いに、フロードスクウェアが聊か不満そうな声で返答する。

『馬鹿にしてるのか？ ハッキリ言って、俺はあいつよりも状況把握能力は高いと、自負している！』

「……………ああ。ウインクロードの事ですか」

『他に誰がいる？』

「いえ…………。他の人と比べるのは、良くないと思いますよ」

やや冷静な口調の守に、不貞腐れた様なぶつすりとした口振りですフロードスクウェアが言葉を続けた。

『現状報告だ。出来損ないと小娘が交戦中だ。相手は誰か分からないが、サポートアームズを持っているのは確かだ』

「水島さんが？ 交戦中ですか…………」

悩む様に腕を組む守は、やけに落ち着いていた。大地や優花もいると、安心していたのだろう。その安心をフロードスクウェアの一言が掻き消した。

『お前、のんびりしている場合じゃないぞ。この空間に、あの二人はいないぞ』

「エッ！」

『エッ、じゃないだろ。あの二人はこの空間内にいないんだよ。お前とあの小娘だけなんだよ』

他人事の様に突き放した声のフロードスクウェアに、驚き口をパクパクさせる守は、素早く屈み込みフロードスクウェアを右手に持ち、押し殺した声で問いただす。

「ど、どどどど言う事だよ！」

『俺に聞くな。だが、あの二人の気配が無いのは確かだ』

「や、ややややばいじゃないですか！ それじゃあ」

『そうだな。こんな所でのんびりと油を売ってる場合じゃないな』

「何他人事みたいな事言ってるんですか！」

焦る守は「どうしよう、どうしよう」と、何度も口走りながらオドオドと瞳を右往左往させる。頭を両手で抱え蹲る守は、ブツブツと小声で呟き始めた。脳内では様々な情報が交錯し、自分のすべき事を一つ一つ明確にしていく。

## 第六十七話 遠距離攻撃

脳内で様々な情報と色々な考えが巡る。

今置かれた現状。彩の事。これからの事。月下神社を凍り付けにした理由とその犯人。この現象を引き起こした人物。そして、その目的。鬼獣達の異常発生。

全ての事柄を一つに結びつける様に少しずつ冷静に分析していく。

『彩が一人で戦闘中+優花と大地の不在+町は鬼獣だらけ』

この事から、現状が最悪である事だけは明確で、同時に彩の身の危険を案じる。しかし、現状で守が動く事は出来なかった。何故なら、現在氷神や智夏・望美の三人と一緒にだからだ。氷神は良いとして、全く鬼獣と無関係の智夏や望美の二人を巻き込む訳には行かなかった。

それに、まだ気になる事があり、その場を離れる事が出来ないのだ。

「くっ……どうしたら……」

唇を噛み締め表情を強張らす。焦りと不安が頭の中をひしめき合い、上手く考えがまとまらない。それ所か、悪い方へ悪い方へと考えが進んでしまう。そして、最悪のケースが脳内に導き出される。

いつもの冷静さを失っていると、フロードスクウェアは薄々気付いていた。表情が硬く、額から流れる汗が焦りをあらわしていた。

普段の守なら冷静に何らかの策を講じるはずだが、その余裕すら無い様に見えた。

「守君？」

「……………」  
「ねえ、守君？」  
「……………」

呼びかけに反応しない守に、望美が軽く首を捻る。その瞬間、守の頭を鞘に収まったままの刀で智夏が殴りつけた。

「アウウウウツ……。い、痛いじゃないですか！」

「痛いじゃないですか！ じゃないだろ。望美が何べんも呼んでんのに」

「いいよ。智夏。別に大切な用じゃ無いし。守君もゴメンね。智夏が」

「い、いや。コッチこそゴメン……」

軽く頭を下げる。頭では分かっていた。自分が冷静さを失っている事を。だが、どうしても焦りだけが守の冷静さを削ぎ取っていく。そして、冷静な判断が下せないまま、時間だけが過ぎていき、守は一人孤立する。智夏の声も望美の声も全てを遮断し、自分の世界へ入ってしまった様に黙り込んだ。

瞼を閉じれば闇が広がる。その闇の中で守の思考だけが光りの線となり張り巡らされた。冷静さを欠いた守の思考では、どれが無駄でどれが大切な情報なのかすら判明する事が出来ず、その先にある重要な事にすら気付く事が出来て居なかった。

座り込み長考する守を見据える三人。

左手に持つ刀を腰の位置に沿え、凜とした姿勢を続ける智夏。その横には学校へ行く準備が万全だったのだろう、と思わせる見慣れた青桜学園の制服を着込んだ望美。そして、離れた場所に美しい白髪に、真っ白な死に装束を纏った氷神。

美女三人の視線を受ける守だが、全く気付く様子も無く眼を閉じブツブツと独り言を呟く。

「なあ、大丈夫か？ アレ」

心配そうな口調で智夏が望美に尋ねた。

「うん。チョット心配だね。あんな守君、初めて見たよ」

相変わらずのマイペースな口調だが、何処か不安が見え隠れする。望美は中学三年間、守と同じクラスだった為、智夏よりも守の事を良く見ていた。だが、こんな守の姿を見たのはこの時が初めてだった。

望美の戸惑いを智夏も瞬時に悟り、静かに望美の肩に手を当てた。

「大丈夫だ。アイツは……」

「ウン……分かってる。けど」

「信じよう」

智夏の声のトーンが沈んでいた。不安があったのだろう。突然こんな事が起きてしまえば誰だってそうなってしまう。

そんな二人の状況も観察しながら、氷神は静かに足を進め、胸元から小さな水晶を取り出し握り締めた。青白い光りが拳から溢れ、氷神の右手に真っ白な美しい刃を持った刀が姿を現す。

氷神のその行動に目の色を変えた智夏は、腰の位置に構えた刀の柄を右手で握り、左手の親指で鏢を弾く。鞘と鏢の合間に薄らと光りを放つ鋭い刃を覗かせ、いつでも刀が抜ける様にしていた。

「ヴェル。準備は？」

『いつでも行けます。方角は』

「方角は分かってる。距離はどの位？」

『距離はおおよそ八十から百メートルだと思われます』

「到達時間は？」

『十秒も無いかと……』

「そう……」

小さく呟いた氷神は地を駆ける。座り込み考え込む守の方へと向つて、白刃の刀を低く構えながら一直線に。だが、その前に一人の少女が立ちはだかる。長い黒髪を揺らし、腰の位置で構えられた刀を鞘から抜く。褐色の肌に真っ直ぐな黒い瞳が氷神を見据える。

二人の距離が縮まり、智夏が両手で刀を握ると切っ先を氷神の方へと向けた。一触即発の空気が漂う中、智夏が氷神に叫ぶ。

「刀に乗れ！」

「……………」

智夏の言葉に無言で頷いた氷神は、地を蹴り真っ直ぐ向けられた刀の峰へと飛び乗り、それとほぼ同時に、智夏が氷神の体を押し上げる様に刀を振り上げた。タイミングを合わせ峰を蹴った氷神は、空へと高らかに舞う。

「数は？」

『十数撃だと思われませう』

「そう。なら全て切り落とす」

刀を真っ直ぐに構え、意識を集中する。

「ハアッ！」

白刃が振り下ろされると、冷気が吹き荒れ無数の氷の刃が空を滑走し、それが何かと激突して激しい爆発を起こした。白煙が散ばり真夏の空に粉雪を舞い散らせる。

『氷神様！ 別の方角からも数撃』

「距離は？」

『計測不能ですが、すぐそこまで』

ヴェルの言葉が言い終える前に、数本の氷柱状の物体が空から降り注ぎ、氷神の体を襲う。

「くっ！」

『氷神様！ この下は！』

「わ、分かっている。だが、これでは……」

視線を落とすと、無防備な守の姿があった。氷柱状の物体は守を目掛けて牙を向ける。氷神もそれを追う様に落下していくが、そのスピードに追い付く事が出来ない。間に合わない、と思ったその時、轟々しい雷鳴と共に閃光が迸る。

氷の破片が飛び散り、守もようやくそこで目を覚まし平然とした表情で辺りを見回した。その横にスツと着地した氷神は白の装束の裾を揺らし、安堵の表情で守の事を見据える。一方の智夏と望美も、安心した様に息を吐き、二人で顔を見合わせた。

冷たい氷の欠片が降り注ぐ中、静かに立ち上がった守は氷神の色白の顔を見据え、小さく頭を下げる。

「すみません。ご迷惑をお掛けして」

「いえ。あなたを守る事もゼロからの命だ」

それが当然の様な口振りの氷神は、先程の閃光が飛んできた方へと眼を向けた。守もその視線でそちらに目を向け、驚きの声を上げる。



「おおっ！ お前！」  
「……………」

無言で立ち尽くす一体の鬼獣。全身に深い傷痕を残した勇ましい体格の狼電は、ゆっくりと守の方へ近付き、赤黒い瞳で顔を見上げる。その際、隣りに居る氷神を暫し気にする様な眼をしたが、ゆっくりと口を開く。

「今すぐ貴様のパートナーの下へ行け。私ではあやつらの相手は不利だ」

擦れた声が辺りを静寂に包んだ。

## 第六十八話 白翼の少女

沈黙。

長い長い沈黙。

驚きの表情。それは、正しく狼電に向けられたモノで、氷神以外の皆は眼を丸くし、守にいたっては口をパクパクと動かしていた。一方で、何を驚いていると言わんばかりの表情を見せる狼電は、守の横の氷神に眼を向ける。二人の視線が僅かな時間だが合わさった。だが、何を語る訳でも無く、氷神は背を向け歩き出す。その背中を見据える狼電に、口をパクパクさせる守が言葉を放つ前に、瞳を輝かせた望美の方が先に口を開いた。

「智夏う。ワンちゃんが喋ってるよ」

「あ、ああ……そ、そうだな」

狼電に駆け寄り頭を撫でる望美は智夏の方に眼を向ける。刀を持つ手を震わせ、守の事を気にしながら狼電の方へと足を進め、望美の隣りに座り込み左手で狼電の顎を撫でた。フカフカの毛並みと、手に伝わる感触に表情を綻ばす智夏は、ウツトリした瞳で狼電を見据え、

「か、可愛い……」

と、小さく呟く。その表情にいつもの凜々しい智夏の面影は無く、一少女の顔だった。そんな智夏の顔を嬉しそうに微笑みながら見据える望美は、狼電の背中を摩り顔を守の方へ向ける。慌ただしくその場でオロオロとする守が、その視線に気付いたのは大分後になってからだ。

嬉しそうに顎を撫でる智夏に、視線を向ける狼電は擦れた渋い声

で静かに言葉を告げる。

「私は犬では無い」

「喋る犬……。欲しい……」

「貴様、人の話を」

「ハウウウツ！ 愛おしいなあ」

包み込む様に狼電を抱き締める智夏。そのふくよかな胸に顔を埋める狼電は、敏感な嗅覚に僅かに程よい石鹸の香りを嗅ぎ取った。野生で生きてきた狼電にとって初めての香りに、過剰な反応を見せ、暴れ智夏の腕を振り切り間合いを取った。

突然暴れだし自らの腕を振り切った犬、もとい狼電にショックを隠せない智夏は悲しげな瞳を向けたまま放心していた。大好きな犬に拒否された事が相当ショックだったのだろう。目尻に僅かながら何か透明なモノが煌いていた。

瞳を潤ませる智夏の頭を撫でる望美は、子供をあやす様に言葉を掛ける。

「だいじょ〜ぶ。大丈夫だよ。ちよつと、怖かっただけだよ。別にちいーちゃんの事を嫌いになつたわけじゃないからね」

「うつつ……そ、そう……なのか？」

潤んだ瞳で望美を見つめる。そんな二人のやり取りを黙って見据える狼電は、不意に視線を守の方へと向けた。目が合い、狼電が訴え掛ける様に鼻筋にシワを寄せる。苦笑する守は、ゆっくりと視線を外そうとしたが、その眼差しが痛々しく胸に突き刺さり断念した。

「あ、あの……」

「あつ、守君もワンちゃんとふれあい？」

「いや……そうじゃなくて……」

眼を細める守が困った様に息を吐くと同時に、二つの声が響く。

「来るぞ！」

「来ます！」

狼電の乱暴な口調と、氷神の丁寧な口調。両者の対照的な言葉と同時に、空に複数煌くモノが見えた。それが何かを推測するのは簡単で、狼電も氷神も身構える。無数の氷柱が四人と一匹に迫り、氷神が刀を振り上げた。

「ふん！」

冷気が刃となり氷柱を破壊。しかし、数本の氷柱が冷気の刃をすり抜け迫る。智夏の目付きが一瞬変わるが、それより先に雷撃が宙を裂いた。花火の様に美しい閃光が空を彩り、氷の粉が優雅に降り注ぐ。

あまりの美しさに見とれてしまう守だったが、すぐに我に返り空に浮かぶ一つの影を見据える。美しい白翼を生やした見慣れない制服を着た少女。整った顔つきや体型から見て、守達と同一年に見えるが、この辺りの高校に通っては居ない様だ。

そんな事よりも、問題は背中から生える白翼。アレは一体何なのかと、疑問に思う守はある事に気付き視線を伏せ、顔を見る見る赤く染めた。

「あ、あのー。実に、言い難いのですが」

「パンツ丸見えダナ」

守が言うより先に、狼電がそう述べる。耳まで真っ赤にする守は、慌てて両手を交錯させ、

「み、見てないですから！ ぼ、僕は全く見てないんで、早く降りてきてください！」

「今更、そんなに否定してもさ」

「そうだよ。見たなら見たで、大した問題じゃないもんね」

じと目の智夏に対し、能天気な発言の望美。そんな守の言葉でようやく事の重大さを悟ったのか、赤面しながら少女は大声で叫ぶ。

「う、うるさい！ こ、これは、見せてるのよ！ べ、別に見せたからって、減るもんじゃないし！」

「の割りに頬が赤いな」

「言われて見れば……そうだね。やっぱり、男の子に見られるのは恥ずかしいのかな？」

「お前は恥ずかしくないのか？」

「うん。守君はどう思う？」

「えっ、あの、その」

突然の望美のフリに焦る守は、返答に困りアワアワとろたえている。守に女性への免疫が無いと言う、意外な発見をした智夏は、腕を組みながら「ふん」と、頷き望美に何かを囁いた。すると、頬を赤らめながら慌てた様に望美が叫ぶ。

「ち、違うよ！ そ、そんなじゃないよお。それに、守君には彩が居るんだから！」

後半は少し怒り気味の望美に、イジワルな笑みを浮かべながら、智夏は守の方に目を向けた。

「うっ、うっ」と唸り声を上げながら、思考回路を完全にショートさせた守は、プスンプスンと頭から湯気を上げている。そん

な守には既に上空を舞う少女の事など、考えている余裕はなかった。一方、表情を崩さない氷神は、刀を下段に構え真っ直ぐに少女の顔を睨む。彼女から放たれる異様な空気を肌にかけていた。まるで自分と同じ、鬼獣上がりの様だが、彼女は守と同じガーディアンに見えた。どこかがオカシイ。だが、何処が？ 頭が困惑する氷神に、足元から擦れた渋い声が響く。

「考えるな。考えるだけ無駄だ。今、起きている事だけを見る」

「貴様、やはり」

「話している時間は無い。私は一刻も早く奴を」

「私を無視するなあああっ！」

幼い子供の様な声が響き、無数の氷の矢が降り注ぐ。思考回路がショートしていた守はその声に意識を戻し、咄嗟にフロードスクウェアを具現化する。意として行ったものかは分からないが、具現化と同時にフロードスクウェアは炎を纏い、降り注ぐ矢を全て焼き払った。

「ウオツ！ な、なんですかこれは！」

驚きの声を上げる守。当然と言えば当然だ。突然、刃が炎に包まれたのだ、驚かない方が不思議である。その一方で、守以上に驚いているモノも居た。フロードスクウェアだ。まさか、自らの身を炎で包むなどと、思っても居なかったのだらう。驚きに言葉を失っていた。

目を丸くする望美と智夏は、守の両手に持つ大剣に目を向ける。

両刃の大剣は鋭く刃を煌かせ、その姿を威風堂々と見せ付けた。

「火野……お前」

「手品師だったの？」

「違つだろ！」

マイペースな望美の言葉に、思わず智夏は突っ込んだ。不思議な事は沢山あるだろうが、質問など受け付ける余裕の無い守は、一言だけ述べた。

「ゴメン。話は後でするから。今は」

『来るぞ！ 守！』

落ち着きを取り戻したフロードスクウェアが叫び、宙を舞う少女が両手を翳す。両手に集まる冷気が白い霧を生み出す。それが、少女の姿を隠し氷の塊が次第に姿を見せ始め、少女の声が響く。

「皆凍つちやえ！」

天高く響いた声と共に、氷の塊が空から落ちた。

## 第六十九話 晃と愛

疾風が地を駆け、氷が弾ける。

何が起こったのか理解する間もなく、飛び散った破片が地面に叩き付けられ砕け散った。清らかな音が次々と奏でられ、冷氣だけを残し氷は消滅する。

眉間にシワを寄せる氷神は、素早く振り返り守の背後に迫る者を見据えた。その視線に続く様に狼電・守・智夏・望美の順に振り返る。静かに階段の向こうから姿を現す一人の少年。大人びた落ち着いた顔つきに、白髪混じりの綺麗な赤黒い髪。そして、髪の間から覗く赤みを帯びた黒い瞳が、穏やかに皆を見据える。

この少年も制服を纏っているが、この辺りの学生ではない様だ。氷神は刀の柄を力強く握り締め、智夏は僅かに摺り足で右足を一步退く。両者の殺気立った眼に、困った様な笑みを見せた少年は、両手を顔の横まで上げると、

「あーっ……。僕に戦う意思は無いんだけど……」

「コオオオラアアアッ！ ふざけた事言ってんじゃないわよ！ あんた！」

上空を飛ぶ少女が怒鳴る。

目を細める少年は呆れた様に両肩を落とすと、少女の方に目を向けた。

「あのさ。言い難いんだけど、そろそろ降りてくれるかな？ キミは恥ずかしく無いんだろうけど、僕は凄く恥ずかしいよ」

「な、何が恥ずかしいのよ！ 大体、あんた来るのが遅いのよ！」

「残念ながら僕はキミと違って空を飛べない。故に、空を飛んで下着を見せびらかすキミとパートナーだと言う事が凄く恥ずかしい」



右手で顔を覆い首を振ると、少年の白髪混じりの赤黒い髪が流れる様に揺れた。耳まで顔を真っ赤に染める少女は、黒みの強い紺色のシヨートボブの髪を僅かに逆立て声を荒げる。

「うるさい！ バーカ！ あ、あんたなんか、パートナーだ何て思っ  
てないわよ！ ポケッ！」

「はいはい。分かった。分かったから、取り敢えず降りて来い。愛まな」  
「……………」

赤面する愛と呼ばれた少女は、無言のまま上空から少年の横に降り立った。背中に生えた大きな白翼が消え、右耳に小さな羽根のイヤリングが現れ、その中心で緑の水晶が煌く。そして、美しい大人びた女性の声が言葉を紡ぐ。

『あ。い。ごめんね。愛ちゃんが迷惑ばかりかけて』

「いえ。もう大分慣れたよ」

苦笑する晃と呼ばれた少年を、横目で睨んだ愛は仏頂面で守達を見据える。と、言うより氷神一人を真っ直ぐに睨んでいた。その視線に氷神も眼差しを真っ直ぐに愛の方に向ける。

一方で、警戒する智夏は腰の刀に手を掛けると、右肩を晃の方へと向け左手の親指で鐳を弾く。鞘から僅かに見えた刃が一瞬煌き、晃が慌てて弁解する。

「あつ。僕ら、あなた方と争う気はありません！」

「ば、馬鹿！ あんた何言ってるのよ！ こいつらここを凍り付けに」

「その現場を見たのか？ どうせ、また早とちりだろ？」

「は、早とちりじゃないわよ！ だ、大体、そこに居るのは白髪の

女は人間じゃないわ！」

早口でそう述べる愛に対し、呆れ顔の晃はため息混じりに問う。

「セイラ……」

『ええ。晃の言う通り、ワタクシ達は見てないわ。でも、彼女が人間じゃないのは確かよ』

「ほ、ほら！ 私の言った通りでしょ！」

「でも、半々だろ？ ったく、第一に僕らはこんな事をしに来たわけじゃないだろ！」

少しだけ声に怒気が含まれ、晃の眉が聊か吊り上っていた。

そんな晃に先程のセイラと呼ばれた美しい大人びた女性の声が返答する。

『愛ちゃんだって、悪気があった訳じゃないわ』

「悪気があって、こんな事をしてもらっては困るがな」

セイラの言葉を遮る様に狼電がそう述べ、同時に体内の電気を表面上に放出する。弾ける雷撃に、眉間にシワを寄せる愛は、カードを一枚取り出す。だが、それを召喚する前に晃がカードを没収する。

「あつ！ 何すんのよー！」

「これ以上ややこしくしない！」

「なっ、や、ややこしくって何よー！」

「この現状を見て、ややこしくないとと言えるか？ そもそも、僕等がここに来たのは」

「あのさ、私達の事無視するの止めてくれないか？」

業を煮やし智夏がそう延べ、遂に刀を抜く。慌てて両手を振る晃

は、

「ま、待って！ ほ、本当、僕等に戦意は無いんだって！」

「そっちの娘はそうは見えんか？」

フロードスクウェアがようやく口を開く。その声に突如晁の手に、細身の白刃の剣が姿を現す。刃の付け根に緑の水晶が輝き、低い声が聞こえてきた。

「久しいな。フロードスクウェア。貴様が人間に使われているとはな。昔のお前ではありえない光景だな」

「知り合いですか？」

「知らん」

「あんな事言ってるけど、本当に知り合いか？ キルゲル」

不思議そうな晁に、キルゲルと呼ばれた剣が静かに答える。

「フツ。相変わらず、都合の悪い事は忘れる様になっているんだな」

「都合の悪い事？ 残念ながら、俺に都合の悪い事など無い」

「ならば、その体に刻んでやろう」

「や、止める！」

突然、白刃の剣が天を突き、守に向って振り下ろされる。刹那、閃光が閃き金属音が波音を広げる。

「邪魔が入ったか」

間合いを取った晁の右手でキルゲルがそう述べると、鋭い眼差しの氷神が白刃の刀の切っ先を晁の方に向け、闘争心むき出しの声で問う。

「どういつつもりです。返答次第では」

一旦間を空け、目を伏せる。そして、次の瞬間殺気を帯びた獣の様な瞳を晃の方に向け、

「殺しますよ」

『殺す？ フツ……面白い！ やれるモノなら、やってみる』

「止める！ キルゲル！ 僕等はこの事をしている暇は」  
「私など相手にならない、そう言いたいのですか！」

晃の言葉にそう言い返し、氷神が刃を振るう。だが、晃の右手は不自然な動きを伴いながらキルゲルで力強く刃を返して行く。重々しい衝撃が腕に伝わり、氷神の表情が一瞬歪む。しかし、休まず立て続けに何度も刀を振り抜く。

『鋭い切り込みだが、倍の力で打ち返せば、そちらが先にくたばるぞ』

「クツ！」

「止める……つて……言ってるだろ……」

表情を顰める晃の額から、大量の汗が滲む。そんな晃の背後で、不適に笑みを浮かべる愛は、人差し指と親指を立て、指鉄砲を作ると「ヴァン」と声を張り上げた。刹那、青白い光りが指先から打ち出され、守の方へと飛ぶ。

体が危険だと咄嗟に判断したのだろう、無意識にフロードスクウエアを振り下ろしていた。刃に何かがぶつかり、冷気が僅かに頬を撫でた。

「いい判断ね」

「止める！ 愛！」

「あら。良いじゃない。もうあなたの相棒が喧嘩吹っ掛けたんだから」

「ダメだ！ 僕等は」

「無駄口を叩いているとは余裕だな」

確かにだが、氷神の口調が変わった。冷たく感情など完全に消えており、殺人鬼の様な冷酷な眼差しが晃を貫く。

「クツ！ 何でこんな事に！」

『クハハハッ！ 楽しもうぜ！ 相棒』

キルゲルの高笑いだが、氷神の振るう刃に触れたと同時に止む。

「私をなめるな。氷結粉碎」

氷神が呟くと同時に、刃から氷結していき最後には晃をも氷の中へと包み込んだ。

## 第七十話 推測

完全に晃が凍り付き、冷気が漂う。

氷神の右手に握られた刀、ヴェル。切っ先から付け根まで薄らと氷が張り、柄の先の青白い水晶が薄く光る。

『氷結完了』

幼く低い男声が聞こえ、氷神が小さく息を吐く。白い吐息が溢れ、ゆつくりとヴェルを下ろした。

『大丈夫ですか？』

「ええ……」

腕が重い。奴と刃を交えた所為だろう。表情には出さないが、疲労が見て取れた。

守と対峙する愛は、横目で氷神の方へ目をやると、薄らと口元に笑みを浮かべる。その笑みに気付いたのは、対峙する守だけで他の誰も気付く事は無かった。いや、正確には気付くより先に異変が起きたのだ。

『フフフツ……』

「！」

突然の笑い声に氷神が振り返る。氷に亀裂が走り、白い湯気が噴出す。そして、ガラスの割れる様な澄んだ音が辺り一帯に広がった。驚きを隠せない氷神とヴェルは完全に言葉を失い、ただ呆然と立ち尽くす。

二人の表情を馬鹿にする様に、甲高い笑いが響き渡る。

『フハハハッ！ あの程度で我をどうにか出来ると思っていたのか？』

「僕の方は軽い凍傷なんだけど」

『その程度すぐに回復するだろうが！ 細かい事気にしてんじゃねえ』

「あのな……。僕も一応人間なんだよ。細かい事じゃないんだよ」

不貞腐れた様な表情の晃は、右腕を押さえそのまま具現化を解いたと、言うより無理矢理抑え込んだ様な、そんな風に見えた。そんな晃の様子に、不満を垂れたのは愛だった。

「おい！ 何、具現化解いてんだよ！」

「く・ちょ・う。また、乱暴になってるぞ」

「うるせえ！ とつとと具現化しやがれ！」

乱暴な口振りの愛にため息を漏らした晃は、右手で頭を抱える。それから守や智夏、望美の居る方へと体を向け、深々と頭を下げた。完全に戦闘態勢に入った状態の智夏は、腰の位置に刀を構え真っ直ぐに晃を見据える。一方、守も闘志は見せないモノの、いつでもロードスクウエアを振り抜ける様に、両手に力を込める。

「貴様、分かっているのか？ 今はこんな事をしている場合じゃない」

「でも、この状況を何とかしなきゃ……。それに、水島さんなら何とかなる……と、思う」

聊か不安だったが、守は強い口調でそう答え、ゴクリと唾を呑み込んだ。額から溢れる汗が首筋を伝い服がべたつく。張り詰めた緊張感の中、守の思考が僅かに正常に動き始めた。焦りが消え、全て

の情報が正確に脳内を巡る。そして、一つの答えを導いた。

「フロードスクウェア。頼みがある」

『珍しく男らしい声だな』

「あーっ……。この際、面倒だから言っておくけど、そう言う変な事言うの止めてくれ。まるで俺がオネエ系だと思われるじゃないですか」

『まあ、細かい事を気にするな。取り敢えず、何だ頼みって?』

軽い無駄話を挟んだが、守は真剣な表情で口を開く。

「このドーム状の中心に何かがあるか調べられますか?」

『調べられない事も無いが、俺はそう言うのには不向きだ。奴と違つてな』

語尾が僅かに強調された。それにより、守は小さく息を吐き、眉間にシワを寄せ困った様に言う。

「あのですね……。こんな時になんですが、いちいちウインククロードの事を持ち出すのは止めていただけじゃないでしょうか? 話が進みません!」

いつも以上に丁寧な言葉遣いに、守が本気で怒っていると気付き、フロードスクウェアはオドオドした口調で返答する。

『わ、悪かった。取り敢えず話を続けてくれ』

「……」

妙に間が空き、疑いの眼差しを向ける守が、小さくため息を漏らす。そのため息が何を意味するがフロードスクウェアにはサッパリ



分からないが、何と無く呆れている事だけは分かった。

「で、出来るんですか？ 出来ないんですか？」

『お前、何か怖いぞ。何か不満でもあるのか？』

「ええ。不満だらけですよ。それより、話を前に進めましょうよ」

ニコニコと笑顔を見せるが、その目が笑っていない。明らかに怒っている。そして、フロードスクウェアは悟った。次、話を脱線させると、酷い事になりかねん、と。

危機感を募らせながら、フロードスクウェアは先程守の言った言葉を思い出す。『このドーム状の中心』と、言う言葉に疑問を抱く。

『なあ、何で中心を調べるんだ？ 普通は、出現点だろ？ 俺の見

た感じ、これは中心が出現点ではない様だが？』

「うん。そうみたいですな」

『何だ？ 知ってたのか？』

「うん。なんだろう。はっきりとじゃないけど、力の波長みたいなモノが」

『見えるのか？』

「まさか。見えるわけ無いでしょ」

自信満々に即答した守は笑みを浮かべた。呆れた様にため息を吐いたフロードスクウェアだったが、内心驚いていた。視覚で感知したのではなく、空気の変化をよって自然と力の波長を感じ取った事に。天性の才能なのだろう。

感心するフロードスクウェアだったが、状況を思い出し話を戻した。

『それで、何で中心だと思ったんだ？』

「そうですねえ。現状を整理すると、そこに行き着いたって事です

ね

『と、言つと、既に中心が何処か検討はついているのか?』

「ああ。俺の推測が正しければ、中心は青桜学園」

『青桜学園? 何で、そこだと?』

不思議そうに問う。すると、守の表情が一層真剣になる。

「俺が思うに、今この町で起こっている事は、全て一つに繋がっているはず」

『そりゃ、そうだろう。鬼獣の大量発生も、この空間もそいつの作業だろうからな』

「それだけじゃないよ。今の俺等の状況も、水島さんの事も」

『こつなる事も全て計算されているのか?』

「そう言う事になる。それも、全てに意味がある」

『意味がある?』

オウム返しに聞き返すと、守が更に言葉を続ける。

「まず、風見さんと黒木君の事。この町を出る事を知っていたか、何らかの力で追い出したか。俺は後者だと思っている」

『だろうな。こんな鬼獣だらけで、自ら町を出る事は考えられないな』

「そう。それが鬼獣を集めた理由」

『それじゃあ』

「ああ。目的は俺達ガーディアンや封術師の足止め。そして、強い鬼獣の気配を隠す事。これは憶測に過ぎないけど、あの男の言葉が本当なら」

『五大鬼獣か……』

小さく呟くと、守が静かに頷く。

「その可能性が一番高い」

『でも、何の為に五大鬼獣を？』

「分からない。でも、何かをするつもりなのは、分かっている」

『今、こんな事をしている場合じゃないと言う訳か』

「そう。この状況を作った理由がそれだ。この月下神社を凍らせ、その異変に気付いた者をここに集めた。恐らく理由として氷神の様な人間じゃない者が偵察に来る事を知っており、争わせる事が目的だと思う」

『なら、ソイツは俺達の事や氷神の事を知っている人物って事か』

驚くフロードスクウェアに僅かに頷くと、奥歯を噛み締め拳に力を込め答える。

「少なくとも氷神の組織のメンバーではないのは確かだ」

『それじゃあ……』

「ああ。俺達と同じ組織　ガーディアンか封術師のどちらか」

『同胞に敵がいるとは、信じがたいがな』

苦笑すると、守は小さく頷き、

「俺もそう思いたいよ」

と、小さく呟いた。その目は悲しみを宿している様にフロードスクウェアには見えた。

## 第七十一話 五大鬼獣 集結

一つの影が青桜学園の第一校舎の屋上へと降り立った。

大きな翼を静かに折りたたみ、小柄な背中へと仕舞う。艶やかな毛並みの金髪が揺れ、グリーンの瞳が煌く。小学生の様な小柄な体格に、幼い顔立ちから明らかに子供である事が分かる。

眉間にシワを寄せる少年は、小さな体を精一杯伸ばし、フェンス越しに黒い膜に包まれた町を見回す。空を覆う鬼獣に、地を這う鬼獣。どれも数は無数。だが、誰も青桜学園へとは侵入してこない。その光景を見据え、少年が不適に微笑むと、後方に二つの影が浮かぶ。

一つは大柄の獣の様な影。太い二の腕に分厚い胸板。真っ赤な髪は刺々しく逆立ち、顔立ちはその体に相応したゴツゴツとした顔だった。口元の鋭利な二本の牙が血を欲する様にギラめく。

その横に立つもう一つの影は隣りの男とは正反対で、細身でスーツを身に纏っていた。美青年と言う言葉が似合う美しい顔の右半分を黒い前髪が僅かに覆い、その奥に不気味に輝く金色の瞳が微かに見え隠れする。

「見てよお。空が暗いよ」

明るく子供っぽい声が二人に向けられる。巨漢の男は腕を組み声に答える気が無いのか、ソッポを向く。その態度に隣りに居た青年が苦笑いを浮かべながら、少年に言葉を掛ける。

「風童<sup>フウドウ</sup>。あれは空が暗いんじゃないよ。この町を包み込んでいるドームが黒いんだよ」

丁寧に説明する青年に対し、不貞腐れた様に頬を膨らす風童と呼

ばれた少年は、両手を腰に当て振り返ると、目尻を吊り上げ可愛げのある口調で文句を言う。

「んな事知ってるよお！　ボクの事馬鹿にしてるだろお！」

「そんな事無いよ」

作った様な笑みを見せる青年は、子供をあやす様な口振りで風童に言葉を掛ける。それが、風童は嫌いだっただ。その為、暫し仏頂面で青年を睨みつけ威嚇を続ける。だが、最終的に風童が根負けする形でその場は丸く収まったのだった。

「それで、水嬌すいけうと燃土ねんどはどこなんだよお」

「私達なら、既にここに居ます」

不満そうな風童の声に返答したのは、か細く弱々しい女性の声。それに振り返ると、二つの影があった。

一つは声同様、か細い体つきの女性。美しい銀色の髪を頭の後ろで確りと留めており、肌艶の良い綺麗な顔立ちを一層美しく際立っている。だが、その眼は何処か切なそうな眼をしていた。

一方、もう一つの影は年老いた男性の様で、顔に複数のシワが刻まれている。髪も白髪が黒髪から見え隠れしており、分厚いレンズのメガネ越しに見える淡いブラウンの瞳が三人を見下す。

二人の姿に笑顔を見せる風童は、はしゃぐ様に右手を大きく振る。

「水嬌、燃土。遅かったねえ」

無邪気な笑みを向ける風童に、水嬌と呼ばれた女性が僅かに眉を顰め、怪訝そうな眼で風童を見据える。その視線が痛々しく、風童は怯える様に青年の背後へと隠れた。

「どうして、隠れるのです？」

「いや……水嬌さん。眼が怖いよ」

「私の眼は普段通りです」

「そ、そう……」

距離を置いた様な冷めた口振りの水嬌に、青年は苦笑する。青年もまた、水嬌を苦手としていた。ここに居る皆そうだ。水嬌とは一つ二つ壁を隔てている。その為、苦手意識としているのだろう。しかし、彼女の方は全く問題など無い様に、静かに口を開く。

「皆さんそろった様ですが、私はまだ眠いのです」

「ワシも、暫くは人里から離れたかったのじゃがな」

「燃土さん。その喋り方だと、年寄りみたいだよ」

「ワシはお前さん達よりも、百年は長く生きとる。十分歳じゃよ。フオツフオツフオツ」

大らかに笑う燃土に、青年が微笑んだ。やはり何処かぎこちない作った様な笑みだった。その場の誰もが相手に気を許さず、終始けん制し合っている様にも見える。

そんな中で、ドスの利いた低い声が、四人へと質問を投げかけた。

「で、貴様らを眠りから解いたのは誰だ？」

「相変わらず、せつかちじやのう。火猿は」

「うるせえ。ジジイ！ 俺様はイライラしてんだ！ とつとつ質問に答える！」

怒鳴り散らす火猿の髪が炎の様に揺れた。刹那、火炎弾が空中に無数表れ、燃土を集中砲火する。

盛大な爆発音と爆風が辺り一帯に広がり、黒煙が周囲を包み込んだ。いつの間に燃土から離れたのか、水嬌は何事も無かったかの様

に膝を抱え座り込んでいた。慌てた素振りも見せず、ただ無関心な眼で足元をジーツと見つめている。他の者達もそうだった。まるで、何も起っていないかの様に、静かに時を待つ。

不適な笑みを浮かべる火猿は、真つ直ぐに黒煙の方を見据える。爆風は既に納まっており、黒煙だけが立ち上っていた。瓦礫の崩れる音が聞こえ、皆が顔を上げ黒煙の方に眼を向ける。すると、そこから無傷の燃土が姿を見せた。

「フオツフオツフオツ。相変わらず、乱暴じゃな」  
「テメエも、腕は鈍ってねえ様だな」

あの火炎弾をどの様にして防いだのかは不明だが、火猿の口振りから燃土が何かをした事は確かだった。

膝を抱える水嬌は、そんな二人のやり取りに、興味など無く口を押さえ欠伸を一つして、青年の方に言葉を掛ける。

「電鋭<sup>でんえい</sup>。取り敢えず、話を進めてください」

突然の言い分に驚く青年は、水嬌の方に顔を向け早口で言う。

「ちよ、ちよつと！ 水嬌さん！ 何で、私が話を」  
「火猿はガサツ、燃土はマイペース、風童は子供」  
「子供って言うな！」  
「この場を仕切れるのは、あなたくらいです」

合間に風童の声が入ったが、軽くスルーした。そして、電鋭も気付かず反論する。

「だったら、水嬌さんが仕切ってくれよ」  
「嫌よ。面倒だし、私はそう言うのには向いてないんです」

「結局、面倒を押し付けたいだけなんだよ」

風童が頭の後ろで手を組みながら笑顔でそう言うと、力の無い弱々しい眼力で水嬌が睨んだ。水嬌も特に相手にする気は無いらしく、そのまま視線を床へと落とす。

啞然と立ち尽くす電鋭は小さくため息を漏らすと、火猿、風童、燃土、水嬌の順に顔を見据えると、もう一度ため息を吐く。両肩を落とし渋々と言う様に口を開く。

「それじゃあ、まず何から話せばいいかな？」

「まずは、現状じゃないかなあ？」

「現状よりも、テメエ等の封印を解いた奴だ。ソイツを教えろ」

「じゃから、そんな事が分かっていれば、こんな所に集まりやせんわい」

それぞれが言い合う中で、水嬌だけが無言で様子を窺っていた。この中で一番頭の回転が速いのが、彼女だ。既に彼女の中でなんらかの答えが出ているのだろうが、自らの考えを滅多に口にしない。だが、この日は違った。静かに立ち上がると、真っ直ぐに火猿を見据え口を開く。

「あなた、アレはどうしたの？」

「な、何だ！ 急に！ それに、今アレは関係ねえだろ！」

突然の事に動揺したのか、火猿が声を荒げる。視線が集まり、皆の目の色が変わる。

「まさか、アレを紛失したのか？」

「いや、紛失した……と、言うより」

「奪われたと言う訳ですね」



やや厳しい口調で水嬌が問いたですと、観念した様に火猿が頷いた。その後、何かを話すわけでもなく、各々が何かに納得したかの様に頷く。

「僕等がここに集まった理由がはっきりしたね」

「ああ。でも、問題は」

「アレを持った奴をどうやって見つけるか、ですね」

「フォツフォツフォツ。そんな事簡単じゃろう？」

「手っ取り早く、皆殺しにすりゃいい」

不気味に笑った火猿の言葉に返答は無く、各自一斉にその場から姿を消し、青桜学園の屋上には無数の亀裂が走った。

第七十一話 五大鬼獣 集結（後書き）

お久し振りです。 崎浜秀です。

『ガーディアン』をご愛読ありがとうございます。

本当、久し振りにあとがきを書きますが、最近の『ガーディアン』はどうなんでしょう？ と、不安に思います。

作者の僕がこんなじゃダメなんだろうけど、凄く不安です。

最近、表現方法も単調だし、何よりここに来て登場人物多すぎ！と、思っています。今回、五大鬼獣まで出したわけですが……。

今後も面白くなっていく様に努力していくつもりですが、ここは直した方が良くと思う事がありましたら、メッセージでも下さい。よろしく願います。

## 第七十二話 無力さと悲しき過去

自らの無力さ。

それを知ったのはあの日、まだガーディアン見習い、所謂育成学校通称アカデミーに通っている時の事だ。

当時十四歳だった俺は、アカデミーでも一位、二位を争う程のガーディアン見習いだった。ガキの頃からガーディアンになる為に、色々させられたのだ。そうでなくては困る。家の家系は代々ガーディアンになると言う決まりがあるらしく、俺にもその宿命と言う奴が訪れたと言うわけだ。

別にガーディアンになるのがイヤだったわけじゃない。俺も幼い頃からガーディアンに憧れていたから。だが、一つだけ不満はあった。家に代々課せられたもう一つの宿命、水島家の護衛と言う自由極まりないモノだ。

「あーあ……。何で、俺があんなガキのお守りをしなきゃなんねえんだよ」

「ダメだよ。大地君。そんな事言っちゃ」

「けどよ。もう卒業試験なんだぜ。もう少しお前と……」

当時、俺には付き合っている娘が居た。名前は倉崎 冬子<sup>フユコ</sup>。冬に生まれた子だから、冬子と名付けられたと、冬子は笑顔で教えてくれた。出会いは、アカデミーに入学した日。数人に絡まれている所を助けたのがきっかけだ。しかし、その時彼女には「暴力は行けません」と、助けられたのに説教を喰らったのを覚えている。

「もう卒業なんだね……」

「試験に受かれば、だけどな」

「うーっ……。試験の事は言わないでよ」

黒縁の眼鏡越しに潤んだ目が俺の顔をジッと見つめる。

「どうしよう……。私、落ちちゃったら……」

「大丈夫だつて。まあ、気楽にやれつて」

「もう、他人事だから、そう言えるのよ。大体、私は大地君と違って実践の成績は良くないから……」

彼女もガーディアン見習いだつた。見た目通り、運動が得意と言ふ訳ではない為、実践の成績は下から数えた方が早い程だが、その他の成績では上位に食い込む勉強熱心な所がある。だが、このアカデミーの卒業試験は筆記ではなく、実践の方がメインになっていた。

「うっ……、どうしよう……」

「心配すんなつて。何かあったら俺がカバーしてやるから」

彼女の肩に腕を回し、額をコツンとぶつけた。

「もーっ。大地君のパートナーは風見さんでしょ？ ちゃんと風見さんをカバーしなきゃだめだよ」

「エーッ。でも、俺、アイツの事よく知らないしさ……。教室でも誰とも話さないし、それにあの赤い眼……。気色悪いだろ？ 何で俺のパートナーが最初っからアイツなんだよ」

俺はこの時、優花の事を全く知らなかった。ただ代々水島家を守る家系と言っただけで、優花との接点など全く無いに等しく、水島家のお嬢様を護衛する命を授かるまで存在すら知らなかった。

「はあく。憂鬱だぜ、毎日毎日、あんなのと一緒に居るのは」

「そうかな？ 私は風見さんの事、尊敬するよ」

「尊敬？ まあ、戦闘の出来る封術師って所はすげえと思うけどさ、やっぱりあの赤い眼がなあ」

「もう、そんな事言っちゃダメだよ」

「分かった分かった。まあ、卒業試験頑張ろうぜ」

俺の言葉に彼女が微笑んだ。

「うん。一緒に卒業出来るといいね」

彼女がそう言って駆け出した。俺は彼女に軽く手を振り、彼女も俺に手を振り返した。そして、最後にもう一度明るく微笑んだ。

卒業試験。

簡単に言えば、学校側が用意した鬼獣を時間内に封じるか、倒すと言う単純なもの。もちろん、鬼獣もそれほど強く無い下級クラスの鬼獣ばかり。成績上位の俺にとっては楽勝でしかない。しかも、パートナーはあの風見 優花だ。下級クラスの鬼獣では話にならないだろう。

森を詮索する俺は、欠伸をし後ろを振り返る。視線の先にはあの女が居る。何を考えているか全く分からないが、取り敢えずパートナーとなったわけだ。話し掛けないわけにはいかない。

「で、どうだ？ 鬼獣の気配とか感じるか？」

「いいえ。全く感じない」

「そっか。近くに鬼獣はいないっぽいし、少し休むか？」

「……」

優花は無言で俺の顔を真っ直ぐに見る。やっぱり、何を考えてんのかわかんねえ。ため息を吐き、俺は木の根に腰を下ろした。する

と、優花も隣りに腰を下ろし、小さくため息を吐く。

「なあ、何でお前は封術師になろうと思ったんだ？ やっぱり、家の決まりか？」

「違う。私は、やらなきゃ行けない事がある。その為には力が必要だから……」

「ふ〜ん。やらなきゃ行けない事……ねえ」

「あなたは、どうしてガーディアンに？」

優花が不意に質問する。答えは簡単だった。

「家の習わしだな。別に俺はガーディアンなんてどうでもいい。例えガーディアンになっても、水島家を守る為に働かなきゃ行けないんだぜ。全く、誰がんな決まりを考えたんだか。お前も、結局のところ水島家を守らなきゃいけないんだろ？」

「そうね……。でも、私は好きよ。あの子と一緒に居るのは」

「まあ、別に嫌いじゃねえけど、俺的にはもっと彼女と一緒に過したい訳だよ。この青春時代を」

「青春時代？」

不思議そうに尋ねる優花に、俺は大手を広げ大袈裟に語る。

「そつ。青春は一度きりの短いモノ。ソイツは今しか味わえない特別なモノなのさ。お前には分からないかな？」

「……。あなたに彼女が居たのがビックリだわ」

「はあ？ 俺的にはお前が久遠と付き合ってるって言う方が、不思議だね。あの成績トップでモテモテの久遠とさ」

「……………」

その言葉に彼女が押し黙り、眉間にシワを寄せる。表情が険しい。

いつも落ち着いた感じ優花がこれ程表情を変えたのを、俺は始めてみた。

「彼は……危険よ」

「何だよ突然」

突然彼女が発した言葉に声が裏返る。真っ赤な瞳が俺を見据え、彼女が勢い良く立ち上がり走り出した。俺は何も聞かず、優花の後を追う。彼女の瞳が赤くなったと言う事は、近くに鬼獣が居ると言う事。さっきの話は気になったが、今は目の前の鬼獣に集中する事にした。

走り出して数分。優花が足を止め、俺もゆっくりと足を止めた。

「何だよこれ……」

そこは既に森では無くなっていた。木々は吹き飛びただの平地と化していた。こんな事ありえない。下級鬼獣にこんな力を持った奴はいない。ましてや、ここに居る封術師やガーディアンにここまで破壊力を持った者は居ない。

眼を疑いたくなるこの光景に、優花が静かに空を見上げる。刹那、上空から何かが勢い良く地面に落ちた。衝撃が広がり土煙が舞う。

「何があつた？」

「分からない。でも、危険な感じがする」

「危険って……」

俺はその時土煙の中に冬子の姿を見た。だが、それはもう

「冬子！」

「あつ！ ちょ、チョット待って！」

優花の制止の言葉も聞かず、俺は走った。土煙の中に。土煙が舞う中で、俺は必死にその姿を探す。だが、見つかったのは。

「冬子……とう……」

彼女の体を抱き締める。その体から血が零れ落ちた。彼女に既に息は無く、俺は涙を零した。何で冬子が……。拳を握り締め、力一杯に叫んだ。

「久遠 達樹！ 出て来い！」

怒声に返答は無い。俺は知っていた。冬子のパートナーが久遠である事を。だから、安心してた。奴なら冬子も安全だと。

「クッ……久遠！ 出て来い！」

その声に、何処からか翼の羽ばたきが聞こえ、

「すまない……黒木」

「どう言う事だ……」

「倉崎の事は残念だよ。俺が目を離れた際に居なくなって……。まさか、一人で鬼獣に挑むなんて思ってなくて……」

これは嘘だ。冬子は人一倍チームワーク、パートナーとの信頼関係の大切さを分かっていた。だから、俺は

「嘘よ……。彼女がそんな事するはずがないわ！」

俺が怒鳴るより先に優花の怒鳴り声が響いた。驚き振り返ると、



優花の赤い眼から涙が溢れていた。そして、優花は更に言葉を続ける。

「彼女は私に言った。パートナーを信頼する事を。そして、ガーディアンと封術師がお互いに助け合わなきゃいけない事を。それを教えてくれた彼女が、自ら個人行動を取るはずが無いわ！」

俺の言いたかった事を彼女が全て言ってくれた。だが、その言葉を馬鹿にする様に久遠が口を開く。

「ギャーギャーギャー騒ぐな。自分の命も守れない奴に、ガーディアンになる資格は無いね」

「な…なんだと……」

「聞こえなかったのか。自分の命を守る力の無い奴に、他の者を守る事は出来ない。力の無い奴がいるだけ邪魔なんだ」

奴は冬子の全てを否定した。冬子の考え方も、冬子のガーディアンと言う夢も、全てを。怒りが湧き上がり、奴が憎くてしょうがなかった。そして、俺は胸の奥である決意をし、静かに冬子の体を地面に寝かせ立ち上がった。

「テメエだけは」

「止めとけよ。キミ達二人掛りでも、俺に傷一つつけられないからいくぞ……。グラットリバー」

『んっ？ 何だ。卒業試験は終わったのか？』

ポケットから出したブレスレットを右手首に付けると、寝惚けた様にグラットリバーが返答した。だが、周囲の空気にすぐに試験中だと気付いたのだろう。声を張り上げる。

「ま、待て。まだ試験中じゃないか！ 試験中は試験用の武器以外は禁止されてるはずだろ」

「うるせえよ。もう、試験なんてどうでもいい……アイツを……殺す」

「お、オイオイ。何物騒な事言ってるんだ？ 考え直せ。お前はガーディアンになるんだろ？ そうあの子と約束したんだろ？」

その言葉に下唇を噛み締めた。約束？ もう冬子は死んだ。約束なんてどうでもいい。どうせ、俺にはガーディアンになる理由なんてないんだ。ここでどうなるうとも。

完全に自暴自棄になっていた俺に、優花の平手打ちが飛んだ。一瞬、何が起ったか分からなかったが、俺の前に優花が立っていた。

「確りしなさい。今ここで彼に手を出したら、あなたはもうガーディアンになる資格すら失われるのよ」

「じゃあ、どうしろって言うんだ！ 冬子は……冬子は！」

「私だつて辛い……。でも、あなたがここでガーディアンになるのを諦めたら、彼女は悲しむ。私は彼女に頼まれた。パートナーとしてあなたを支える事を。そして、あなたを立派なガーディアンにする事を……」

俺は握っていた拳を下ろした。いつの間にか、奴はそこから姿を消していた。そして、何食わぬ顔で、卒業試験を突破し、アカデミーを卒業した。俺と優花は卒業試験の事を協会に話したが、結局事故と言う事になった。

だが、もうあんな思いはしない。

俺は全てをこの拳に賭ける。

「ウオオオオッ！」

叫び、グラツトリバーが俺の体を侵食する。膨れた右腕、鋭く尖った指先。俺がいつも使う黒金とは形状も異なり、激痛が腕を襲う。だが、痛みなど俺には関係ない。

拳を握り締め、大きく振りかぶる。激痛に奥歯を噛み締め、全身全霊を込め勢い良く拳を振り抜いた。黒い壁に拳が触れ、破裂音が辺り一体に広がった。

## 第七十三話 侵入

爆発音が響き、黒い膜に大きな波紋が広がる。

だが、波紋は水面に広がる様に徐々に薄れ消えてしまった。

土煙が消え、大地の姿が現れる。壁には傷一つ無く、代わりに大地の右腕を包んでいた黒い物体が砕け、血が大量に流れ出していた。肩が外れた様に右腕が力なくぶら下がり、手首から静かにプレスレットが落ちる。

カランと乾いた音が響き、オレンジ色の水晶が光りを失った。それとほぼ同時に、大地の体が膝から崩れ落ちる。届かなかったのだ。大地の全力がこの壁には。分かっていた事だった。それ故に、止める事の出来なかった自分が許せなかった。

「ゴメン……私には何も……」

悔しそつに奥歯を噛み締める優花は、静かに拳を握り締めた。

『どうすんだ？ このまま、何もしねえつもりか？』

「……考えるわ。何をすればいいかを……」

『そんな余裕があるのか？』

「うるさい……。少し黙ってて」

『俺様が黙ってて、いいアイディアが浮かぶのか？』

「うるさい！」

つい怒鳴ってしまった。苛立ちが彼女を追い詰めていく。考えがまとまらず、焦りが更に優花を追い詰める。

「クッ……」

『諦めるんだな。テメエには何も出来ねえよ』

「諦めない。彩は助ける。絶対に奴の思う様にはさせない」  
『無駄だ。テメエは無力。この壁をどうやって壊すつもりだ？』

その声に言葉を呑む優花は、眉間にシワを寄せる。大地の全力で壊せなかった壁を、優花がどうやって壊せると言うのだ。奥歯を噛み締める優花は、静かにキファードレイを具現化する。最大呪文を使えば風穴位開けられるだろうか。そんな事を思いながら、カードフォルダに手を掛けた。

「止めておけ。同属性では打ち消されるだけ、ましてや土属性のサポートアームズで攻撃を仕掛ける何て自殺行為だ」  
「……………」

無言で声のする方に目を向けた。静かに空から降り立った男は、足元まで隠すコートを着て、頭からフードを被っている。合間から見える赤と茶の混じり合った髪がチラホラ見え、その奥に僅かに赤みを帯びた瞳が優花を見据えた。

怪訝そうな目を向ける優花は、具現化したキファードレイの刃を下段に構え、切っ先だけを男の方へと向ける。刃と柄の間に輝く緑の水晶が悪態を吐く。

『テメエ、邪魔すんじゃないやねえ！』  
「邪魔じゃない。手を貸しに来た」  
「手を貸しに？ どういう事」

疑いの目を緩めない優花は、右足をスツと前に出す。警戒する優花に、困った様な素振りを見せる男は、右耳からピアスを外し、それを優花へと投げた。左手でそれを受け取った優花は、相変わらず鋭い視線を男へ向けている。

右手で頭を掻く男は、静かに口を開く。

「それは、俺の作ったサポートアームズだ。適合とか関係なく使える代物で、効果は強化。具現化とか出来ない代わりに、その人の持つサポートアームズをサポートする特殊型だ。属性は土。硬化タイプのグラットリバーとなら、相性は良いだろ？」

「これを、くれると？」

「ああ。名前は後からソイツに訊いてくれ」

「……………」

まだ信用出来ないと言う目で男を見据えていると、小さくため息を零す。

「キミは疑り深いな。まあ、それの方が良いかも知れないがな。んじゃ、これでどうかな？」

男がそう言うと、赤と茶の混じった髪の毛の奥に真っ赤な目が映し出された。その目を見た瞬間、背筋にゾワツと寒気が過り、優花の瞳も自然と赤く染まった。

「キミと同じ、赤い眼だ。これが、何かもう分かっているだろ？」

「……………。そう。あなたも……………」

「信じて貰えたかな？」

ニコツと笑みを浮かべと、赤かった眼が元に戻る。彼の場合、鬼獣とか関係なしに目を赤くしたり出来る様だ。取り敢えず警戒を緩める優花は、左手に持ったピアスを大地の右耳に付けた。オレンジの水晶が僅かに輝き、低音の音が聞こえる。

『名はロツジエツガス。汝の名は？』

「私は優花。彼が大地」

『そうか……。今よりマスターを大地と認証する』

その言葉の後にロツジエガスと名乗ったピアスの水晶が眩く光りを放った。これで、大地が彼のマスターと言う事になるのだろう。不思議そうな目をする優花に対し、落ち着いた様子の男は黒い壁に触れる。

「これが、黒障壁か……。実物を見るのは随分久し振りだよ」

「知ってるのこれ……」

「ああ。以前にもこんな事が起きたからな。まあ、あの時はまだ未完成の代物だったけどな」

真剣な面持ちで障壁を見上げ、静かにそう口にした。以前とはいつの事なのか、不思議に思う点は幾つかある。だが、優花はそれを問う事はしなかった。

壁に触れる男の手がスツと離れる。赤い水晶の付いたリングが薄らと輝き、声が聞こえた。

『今回ののは、チツと骨が折れそうだな。俺の力でも穴を開ける程度しか出来ない』

「そうか……。なら、俺は中には入れないわけだ……」

『そうなるな。その二人が唯一の頼りと言う事だ』

「幾分、危険な賭けになりそうだな」

渋い表情を見せる男は、ふと優花の方へと目を向けた。そして、顎に右手を添えたまま暫く考え込む。中がどういう状況なのか分からないし、その中に二人を行かせるのは、多少抵抗があった。やはり危険な場所に突っ込むなら、まず自分からの方がいいが、それも出来ない状況。慎重に事を考えなければならぬ。

「さあて、困ったな」

『悩む必要あるのかな？』

幼い声が突如聞こえた。苦笑してみせる男は、その声の主であるブレスレットに目を落とし口を開く。

「あのなあ。俺も一緒に中に行くなら別だよ。けど、今回は状況が状況なの」

『けど、誰かが行かなきゃ行けないんだし、考える事無いって』

幼い声にそう言われ、男はもう一度息を吐く。確かに誰かが行かなければならない。そうなってくれば、彼ら二人を行かせる他無いのだ。選択の余地など無い為、渋々と言う感じで男は優花に言う。

「悪いが、そいつを連れてこいつの中へと行ってもらうぞ」

その言葉に優花は眉間にシワを寄せる。

「行くのは構わないけど、どうやって？ それに、こんな状況の大地じゃ戦力にならない」

「まあ、それは俺が何とかしよう」

男はそう言い、懐から取り出した蒼い水晶の付いたリングを右手の中指に填める。蒼い水晶が鮮やかに光り、優しい女性の声が聞こえて来た。

『マスター。話は聞いてました。早速』

「ああ。悪いなフィীরラン。頼むぞ」

静かに大地の傍に歩み寄った男は、右手を大地の胸へと下ろす。



蒼い光が大地の体を包み、傷の酷い右腕を癒す。流れ出す血が止まり、傷口が塞がる。再生、それがフィリーランの能力だ。

傷がある程度修復した所で、光りが消える。マスターと呼ばれていた男は、深く息を吐きゆっくりと腰を上げた。

「これ位で十分だろ。後はグラットリバーの方だが、出来るか？」

『問題はありません。マスター』

「そうか。じゃあ、頼む」

そう呟き亀裂の入ったブレスレットに手を翳す。蒼い光りが今度はグラットリバーを包み込む。その神秘的な光りが、優花の目に焼きついていった。あれが水属性の真骨頂なのだろう。

ゆっくりと光りが薄れ、ブレスレットの傷が消える。光り輝くオレンジの水晶は、またあの声を取り戻していた。

『んんっ……。あなたは……』

「目が覚めた様だ。それじゃあ、後は彼が目覚めるのを待ちたい所だけど、俺は彼に色々と目の仇にされている様なんで、彼が目覚めます前に、キミ達を中へと送り込みたいと思う」

『送り込むって、一体どうするつもりだ！』

グラットリバーの声に、男が穏やかに微笑んだ。キファードレイの具現化を解いた優花は、大地の体を持ち上げ、ゆっくりと立ち上がった。そんな二人に目をやり、地面に転がるグラットリバーを手に取った男は、先ほどの質問に答える。

「この壁は風属性で出来ている。これを破るには、これと同等の優勢属性」

「火の属性が必要と、言う事？」

「そう。だが、現段階でコイツを破壊できる様な力を持つサポート

アームズは存在しない。そこで、俺の持つ火のサポートアームズで風穴を開ける。そこからキミ達は中に入れてもらう。と、言う形になるかな」

説明を終えた男に対し、グラットリバーが口を開く。

「原理は分かったが、こいつの壁はそこまで高いレベルの力なのか？」

「手早く言えば、こいつは古代の代物って事だ。説明は終わりだ。そろそろ準備を始めるぞ」

男が黒い壁に右手を添え力を込める。すると、傷一つ無かった黒壁に真っ赤な炎が広がった。額に汗を滲ませる男は、ようやく一人入れる程の大きさまで広がった穴が塞がらない様に力を込め続け、目で優花に合図を出す。優花もそれに気づき、会釈する様に頭を下げると、グラットリバーを受け取り中へと入っていった。

## 第七十三話 侵入（後書き）

更新が滞ってしまい、申し訳ありません。

今日から気分新たに頑張って更新していきたいと思っています。

目標は一日一話！！

多分無理だと思いますが、なるべく二日に一回は更新できる様頑張ります。

これからも、『ガーディアン』をよろしく願います。

## 第七十四話 消え行く気配

黒い壁の向こうは殺伐のしていた。

漂う血の臭い。

人々の死の叫び。

町に転がる血肉。

獣臭さと異臭に絶句する優花は、顔を顰め腕で鼻を押さえる。こんな光景を見たのは久し振りだ。生臭く一生嗅ぎたく無い臭いでもあった。

目を開けば瞳が血の様に真っ赤に染まる。鬼獣の放つ気配が色となり視界へと漂う。自分だけが別世界に居る様な錯覚すらしてしまう。

眉間にシワを寄せ、奥歯を噛み締める。何故、こんな状況になってしまったのか。怒りと後悔が心境を騒がせた。一体、派遣された封術師とガーディアンは何をしているんだと、周囲を見回す。

所々に封術師とガーディアンの気配を感じる。本部にも何らかの形でこの町に鬼獣が集まる事が知らされていたのだろう。複数の力を感じる。しかも、どれも強力なサポートアームズを持っている者だ。だが、その力が次々と失われていく。一つ、また一つと。

何が起っているのだろうか。疑問が脳裏を過り、また一つの気配が消えた。野放しになった鬼獣に、消えていく封術師とガーディアンの気配。ここで間違いなく何かが起こっている。そう判断した優花は、大地を担ぎその場を移動した。自分が今するべき事を把握していたからだ。

近くの建物に身を潜め、外の様子を窓から窺う。また、一つ気配が消滅。それと同時に、不気味な程強い殺意の様な気配をその目に感じた。だが、ほんの一瞬の事で、すぐにそれは消えた。

「何………今のは………」

『ねえねえ。何かあったの?』

不意に幼い声が優花の耳に入った。静かに右手首に目を落とす。そこにあの男からのプレゼントであるブレスレットが蒼い水晶を光らせていた。

『私、シェイドネリア。よろしく〜』

「……………よろしく。私は」

『優花、だよ。さっき聞いてたもん』

「そ、そう……………」

へへへへッ、と無邪気に笑うシェイドネリアに、苦笑する。子供は少々苦手だった。と、言うより子供と接した事が一度も無く、どう接すればいいのか分からなかったのだ。あの男は『キミなら彼女の力を百パーセント引き出せる』と、言って穴が塞がる瞬間に、このブレスレットを投げ渡した。どんな力を持っていて、どんな性格なのかも分からなかったが、この会話で性格は幾分分かった。

「あなたの能力を教えてください?」

『いいよ。教えてあげる』

子供の様に本当に無邪気な対応が新鮮に思えた。

『んとね、何から知りたい?』

「……………。取り敢えず、私との適合性だけど」

『大丈夫。私もロツジエツガスとおなじで、適合性とか関係ないから。安心して。へへへへッ』

自慢げに笑う。すると、大地の右耳でオレンジの水晶が光り、低音の音が聞こえてきた。

『俺も、適合性は関係ない。もしよければ、力を』  
『うるさい！ 優花は私のマスターだ！ ロッジエッグスは近付  
いちゃダメ！』

ロッジエッグスに対し幼く可愛らしい声で文句を言うが、何が  
いけないと言わんばかりにロッジエッグスは口を開く。

『ウム……。何故だ？』

『うう〜っ……。どうしてもだよ！ 空気読んでよ！』

『……………』

言っている意味を理解したのか、していないのか、ロッジエッグ  
スは『フム』と小さく呟き大人しくなった。そんなロッジエッグス  
に対し、不満をダラダラと小声で述べるシェイドネリアは優花の視  
線に気付くと、『へへへへッ』と無邪気に笑った。

『あのね。私、初めてなんだ。マスター以外の人に使われるの』

『マスター？ さっきの彼の事？』

『うん。マスターは凄いだよ。私達を製造してくれたんだから』

『そう。でも、どうして適合性に関係なく使えるの？』

『う〜ん。難しい事は分かんないけど、具現化能力が無いからとか  
何とか』

曖昧な返答に、優花は仮説を立てる。

適合性と言うのは元々、そのサポートアームズを具現化する力。  
具現化さえ抜けばサポートアームズは誰にでも仕える代物。と、言  
う事は何の為に具現化能力が必要なのか？

理由の一つは、誰かが故意的にそうした。何らかの理由があり、  
自分以外の誰にもそれを使わせない為。そう考えるのが、妥当だ。

もう一つ理由があるとすれば、それは相手の不意を突く為。普通一般に見れば、普段のサポートアームズは何の変哲も無い飾り物に過ぎない。疑われず武器を持ち込む事が出来ると、言うわけだ。

イマイチ、不に落ちない点が幾つか在るが、優花は考えるのを諦めた。今、そんな事を考えても現状を解決出来るとは思えなかったからだ。

小さくため息を漏らすと、心配そうな声でシェイドネリアが尋ねる。

『あの〜……。もしかして、私って迷惑？』

「エッ、ううん。そんな事無いわよ」

『本当に？』

不安そうなシェイドネリアに優花は微笑んで見せた。その顔に安心したのが、シェイドネリアは『へへへッ』と、照れ臭そうに笑う。すると、キファードレイが訝しげな声で問う。

『和んでいる様だが、状況を分かってんのか？』

『あうっ。そうだったよ。これから、どうしよう？』

「まずは、状況を確認しなきゃいけない。ここで何が起っているのか……」

『そう言えば、ロツジエツガスが、マスターに言われて中を探索したみたいだけど……』

シェイドネリアが思い出した様にそう告げると、優花が視線をロツジエツガスの方へ向ける。しかし、返答は無い。暫く間が空き、優花が不思議そうに首を傾げると、同時にロツジエツガスが口を開く。

『どうしたのだ？ 急に沈黙した様だが？』

『お前、話を聞いてなかったのか？』

今まで沈黙していたグラツトリバーが呆れ気味に尋ねると、『何がだ？』と不思議そうに答えた。三つのため息が零れ、視線がロツジエツガスに集まる。だが、何事も無い様な素振りで、のんびりした態度のロツジエツガスに、シェイドネリアが怒った様に言う。

『話し聞いてたのかよ！ 現状についてだよ！』

『それは、分かっている。だから、それが何だと言うのだ？』

何が言いたいと、言っている様な口振りのロツジエツガスに対し、冷やかな口調でグラツトリバーが聞く。

『意味は分かっているよな？』

『何の意味だ？』

『言ってる意味に決まってるだろうが！』

『もういいわ……。シェイドネリア。覚えてる分だけでいいから教えてくれる？』

諦めた様に優花がシェイドネリアにそう尋ねると、『うん。分かった』と素直に答え、ゆっくりと思い出す様に口を開く。

『えつとね……。確か、彩って人が、二人組みと交戦中で、誰かと誰かが氷神って人と戦ってるとか……。ゴメン。名前は出てこないんだ……。』

『いいわ。ありがとう』

『つたく、役にたたねえ連中だ』

『うつつ、うつつつ……。』

キファードレイの言葉に泣き出してしまつシェイドネリア。



『ごめんなさい。ごめんなさい。わ、私、私』  
「いいのよ。気にしないで。大体の予測はついたから」  
『でも、でも……』

何かを言おうとシェイドネリアだが、言葉を呑んだ。これ以上優花を困らせたくなかったのだ。そんなシェイドネリアの気遣いに、優花は優しく笑みを浮かべた。すると、シェイドネリアは嬉しそうに『へへへッ』と、声を震わせながら笑った。

## 第七十五話 美学

ビルが倒壊する。

巨大な火の玉があらゆる建物を破壊する。ガラス片が瓦礫と共に、地上に降り注ぐ。

轟く爆音、広がる火の手。雷鳴、暴風、地響き。それらが、中心から外側へと広がっていく。

外壁のすぐ傍の建物に隠れている優花と大地はまだ安全そうだが、しかし、いつまでもここに居るわけにはいかない。彩の事が心配だ。大地が目覚まし次第すぐにも多彩の方へと行くつもりだった。

その為、様々な情報をシェイドネリアから聞き、戦略を練る。元々戦略を考えるのは得意な方ではなかった。能力はあつたし、大抵の鬼獣にも引けをとらないと自負していた。己の能力を過信しているわけじゃない。幼い頃からの経験上、どんな状況でも最善の対処が出来る様、体に刻み込まれていた。それは、戦略を立てるよりもはるかに効率の良い、優花と大地の戦闘スタイルだった。

だが、今回は違う。優先する事がある。それは、彩の無事を確認する事と護衛。相手の目的が分からない以上、彩の護衛と言うのは最も優先しなければならぬ事だった。それほど、協会にとって水島家の血と言うのは重宝されている。優花にとってそんな理由はどうでも良い。これ以上大切な人を失うのは辛い。ただそれだけだった。

考え込んで数分が過ぎた頃、窓から眩い光りが差し込み、雷鳴が大気を裂く。

『何だ？』

『敵襲………？』

グラツトリバーの声にロツジエツガスが答えた。険しい表情を見

せる優花は小さく息を吐き、キファードレイを握り締める。気持ち  
を落ち着かせる為、小さく深呼吸をすると、ゆっくりと立ち上がった。

沈黙の中で、グラットリバーが僅かに水晶を輝かせ、

『大丈夫なのか？』

と、問う。微かに微笑む優花は、キファードレイを具現化する。  
大型の鎌が右手に現れ、刃の付け根に水晶が煌く。赤い眼の死神。  
正しくその名にふさわしい風貌に、グラットリバーも息を呑む。

いつ以来だろう。優花の殺気を帯びた赤い眼を見たのは。僅かな  
がらグラットリバーも恐怖してしまう。

赤い眼光をグラットリバーに向けると、静かに告げる。

「大地が目を覚ましたら彩の方に行きなさい」

『な、何言ってるんだ！ お前、分かってるだろ！ 今、外に居るの  
は』

「分かってる。分かっているからこそ、あなた達は彩の方に行くの  
『勝ち目の無い戦いだな。行っても犬死だな』」

淡々とロツジエツガスが言うと、沈黙がその場を包み込む。分か  
っているのだ。相手がどれ位の力を持っているのかも、今の優花に  
は勝てない事も。それでも、それを口にしていなかったのに、ロツ  
ジエツガスは容赦なく言葉を続ける。

『まあ、初めから死ぬつもりなら話は別だがな』

『ロツジエツガス！ それ以上優花を馬鹿にすると、私が許さない  
わよ！』

『俺は思った事を口にしていただけだ。自らの力量も知らずに飛び  
込むのは馬鹿のする事だ』

『てめえ、ふざけた事ぬかしてると、ぶっ飛ばすぞ！』

キファードレイが声を荒げると、相変わらずの口調でロツジエツガスは答える。

『お前がどう思おうが勝手だ。だが、俺は指示には従つつもりは無い』

『もう、あんたの言ってる事は良くわかんないよお！』

『要約すると、俺達も戦う。そう言いたいんだろ？』

面倒臭そうにグラットリバーがそう言うと、『そう言う事だ』とロツジエツガスも納得した。啞然とするキファードレイとシェイドネリア。結局、今までの話はなんだったのだと、内心思っていた。しかし、それを口にするより先に、優花が部屋を出た。その時、グラットリバーには僅かに聞こえた。

「ありがとう」

と、言う弱々しい声が。

静まり返った部屋でグラットリバーとロツジエツガスは大地の目覚めを待つ。刻々と時を刻む音を聞きながら。

建物から出た優花は、大鎌を右手で回転させる。車が燃え上がり、地面が黒焦げ砕けていた。散乱する焦げた肉片が異臭を漂わせる。鼻を摘みたくなるニオイだが、優花は全く動じる事無く、目の前に浮かび上がる影を見据えた。

細身のスーツ姿の青年。整った美しい顔立ちに、金色の瞳が優花を見る。顔の右半分を隠す黒髪が風に揺れ、雷撃が青年の周りで弾けた。生きている様に弾ける雷撃が、優花を威嚇するかのごとく周

囲の壁を破壊する。

その雷撃とは裏腹に、穏やかな笑みを浮かべる青年は、大手を広げてから丁寧にお辞儀をした。

「初めまして。麗しきお嬢さん。私は電鋭。サポートアームズを持つあなたに聞きたい事がある」

「私もあなたに聞きたい事があるわ」

「何でしょう？ 答えられる事なら、答えましょう」

穏やかに答える電鋭に、回していた大鎌を止め右脇に下ろすと、周囲を警戒する。まだ周囲に敵がいるかもしれない。そう思えばこそその行動だったが、電鋭は清々しい口振りで言う。

「私以外居ませんよ。安心してくれ」

『その言葉を信用しろってか？ ふざける。敵の言う事を信用出来るか！』

「ふうん。まあ、信用出来ないのはわかるね。けど、あなたも早く話を進めたいのでは？」

笑顔の裏に殺気を漂わせる電鋭に、柄を握る手に力が入る。唾を呑み込み、視線を強く持ったまま静かに大鎌を構えた。右足を摺り足で前に出し、右手は柄の上の方を、左手は柄の下の方を握る。三日月型の刃が不気味に光り、赤い眼光が電鋭の金色の目を睨む。

鋭い眼差しに、やれやれと言う様に首を振る。迸る雷撃が一箇所に集まり、一つの物体を生成していく。

「私の扱う雷撃は特別で、自らの意思を持っている。それは、あなた達の使うサポートアームズのように。でも、それとは別次元の代物なんだよ」

何処かワザとらしく微笑む。生成に時間が掛かるのか、まだ形の整わない雷撃を見据え、優花はどうするかを考える。

今飛び込めば一撃与える事が出来るだろうか？  
もしそれが成功したとして、その後どうする？

奴はどんな武器を生成している？

間合いはどれ位？

脳内に様々な言葉が繰り返される。戸惑いが焦りを生み、判断力を鈍らせる。

その場を動く事の出来ないまま、雷撃に変化が起きた。棍の様に長い柄が生成され、その両端に牙の様に鋭利で太い刃が突き出る。両方の牙が雷撃を纏い、切っ先でバチツと一回弾けた。

「久し振りだ。これを使う何て……」

『聞かせてもらうぜ！ てめえらがここに現れた理由を！』

「私達が現れたのは呼ばれたから。今度はあなた達に答えてもらう。あなたはアレ知っているか？」

「アレ？ 何の事？」

何を言っているのか分からず、思わず聞き返してしまう。その反応を予期していたのか、軽く頷きながら嘘っぽく微笑み、槍を握る。

「何も知らないみたいで安心したよ。あなたの様な麗しい方を手にかけるのは、私の美学に反するんで」

「何を言ってるのか、良く分からないわ」

「そうだな……。分かり易く言えば、武器を退いて欲しい」

「断るわ。どんなに力量の差があっても、退くわけには行かない」

暫し沈黙する電鋭は、小さく息を吐くと、困った様な表情を見せ

た。

「もう一度言う私の美学として、女性には手を出さないと決めているんだ。退いてはくれないか？」

「断る。何度も言わせないで」

睨みを利かせる優花は、摺り足で一歩前に出ると、電鏡も渋々と槍を構えた。

## 第七十六話 最弱

轟く咆哮。

飛び交う雷撃。

漂う黒煙。

焦土する路面。

折れ曲がる電柱。

息を潜める三つの影。

空中を舞う一人の少年。

挟られた路面へと足を下ろした少年は、静かに辺りを見回す。

「あれれ？ 何処に行ったのかな？」

子供の様な幼い声と背丈。その背丈には似合わないブカブカの衣服に身を包んだ少年は、ゆっくりと歩みを進める。瓦礫を踏みしめる少年は、ふと顔を上げた。

「あーあ。つまんねえ。ハズレ引いちゃったな」

大声でそう言う少年は、右手を上げ目の前の家を一軒吹き飛ばした。残骸が散乱し、土煙が舞い上がる。膨れっ面の少年は周囲を見回し、一度ため息を吐く。呆れた表情を見せ、もう一度大声を張り上げる。

「何だよ。隠れるばかりが、テメエらの組織の教えかよ。それともボクみたいな子供にすら怯える事しか出来ないのか？」

少年の言葉が身を隠す三人の胸に突き刺さる。



「ふざけた事言いやがって」

楕円型の薄いサングラスを掛けた少年がそう言つと、腰まで届く群青色の髪まどかの少女が答える。

「単なる挑発。そんなモノに乗る必要はない」

「でもよ、円まどか」

「それより、彩の方はどうなっている？」

円まどかと呼ばれた少女が群青色の髪を揺らし振り返る。視線の先には肩口まで伸ばした黒髪の少女が居た。手には背丈程の大きさの杖を握っている。ボロボロの制服は円まどかとの戦闘によるモノで、少しばかり呼吸が荒い。

「大丈夫そう」

「んな事はどうでもいいだろ？　これからどうすんだよ」

「やる事は決まっている。奴を倒す」

「倒すつて、五大鬼獣だぞ。無謀だろ」

弱気な少年の声に、円まどかは冷やかな視線を送る。常に冷たい態度の円まどかだが、今回は更に冷たい視線だった。その為、少年は僅かに身を退き、引き攣った笑みを浮かべる。サングラス越しに見ても、円まどかの切れ長の目は怖い。特に淡い蒼の瞳が何ともいえない。

僅かな恐怖に身を縮こませ、少年は彩の方へと目を向けた。すると、左手の人差し指に填めたリングの赤い水晶が輝き声をする。

『ねえ、お兄ちゃん。どうするつもりよ』

「ど、どうするつて、戦うっきゃねえだろが」

可愛らしい女の子の声に、そう返答すると、更に言葉が返って来

る。

『あのさ。あたし等、何しにここに来たか覚えてる？』

『まあ、覚えてない事も無いけど……』

『もう。はつきりしてよお兄ちゃん！』

『しかたねえだろ。決定権は俺にはねえんだからよ』

少年がそう言うのと、少女の声が小さなため息を漏らした。そんなやり取りを見ていた円は、右耳にぶら下がった十字架のイヤリングに触れる。

「エディ。どう思う」

『あら。まどちゃんから話しかけてくれるなんて、珍しいわね』

「エディ。その呼び方は止めてって、いつも言ってる。いい加減にして」

『細かい事を気にしちゃダメよ。それに、まどちゃんだって、私の事ちゃんと呼んでくれないし、良いじゃない』

エディの言葉に円は小さくため息を吐くと、群青色の髪を右手で撫でた。

急に静けさが戻り、円が少年の方に鋭い眼差しを向ける。少年もその眼差しに気付き僅かに頷く。

「武明、準備しろ」

「分かってる。セルフイ。行くぞ」

『あいあい。行くよ』

少し投げやりな返事をするセルフイは水晶から数本の鉄杭を生み出す。それを地面に散りばめ、一本一本を確認する様に手に握る。重さ、長さ、太さ、全てを統一し、その内の一本を地面に突き刺す。

残りの鉄杭を持つと、円まどかの方に目を向ける。無言のままイヤリングに触れた円まどかは、

「時間を稼ぐ。五分で終わらせろ」

「ったく、無茶苦茶言っつな……」

「文句を言ってる暇があったら、とつとと行け」

円まどかはそう言うと、立ち上がり駆け出す。その刹那、金色に近い黄色の水晶が輝き不気味な鉄音を響かせ、円の両手に純白のグローブが姿を現す。甲には十字架が模られ、煌びやかに輝く。

「エディ。モード銃」

『ええ。何なりと』

純白のグローブが形を変え、真っ白な銃が両手に一丁ずつ現れる。その円まどかの声に、背丈の低い少年が気付く。不適で楽しげな笑みが少年の顔に浮かび、差し出した右手に風が圧縮される。

「やっと出てきた。遅すぎるよ。て、言うかお前一人でいいのか？」

「貴様の様なガキ相手ならあたし一人で十分だ」

「ムウウウツ。自分だってチビのくせに、人をガキ扱いするな！」

「ムツ！ 貴様にチビ呼ばわれされる覚えは無い」

円まどかは引き金を交互に引く。甲高い銃声のリズム良く交互に聞こえ、弾丸が無数打ち出された。銃口から硝煙が上がり、円まどかが静かに息を吐く。すると、幼い声が不満げに言う。

「もう。何だよ。いきなり撃って来るなんて酷いじゃないか」

「チツ……」

「何だよ。舌打ちしたいのは、コッチだよ。まあ、いいや。それじ

やあ、始めようか。五大鬼獣が一人。風童様が相手してやるからさ」

風童と名乗った少年の右手には、圧縮した風が渦巻き、その中で放たれた弾丸が舞っていた。それを見て、僅かに眉間にシワを寄せた円は、銃を下ろしクスツと笑う。

「何がおかしいのかな？」

不満そうに風童が問うと、円の手から銃が消えグローブへと戻る。純白のグローブで二度手を叩くと、円は冷たく笑う。群青の髪が揺れ、ふくよかな胸も揺らす。視線の先に見える風童に、淡い青の瞳を向け、右足で思いつきり瓦礫を踏み潰した。

「流石、五大鬼獣と呼ばれるだけはある」

「へへへッ。そうだろ。ボクは強いんだから」

「強い？ 勘違いしない方がいい。貴様は五大鬼獣の中で最弱。その強さはあたしよりも劣る」

風童の右の眉がピクツと動き、表情から笑みが消える。眉間にシワを寄せ、真顔で円を見据える風童は、右手に圧縮していた風を解き放つ。風の中に浮かんでいた弾丸が、手の平に転がる。それを軽く握り締めると、暴風が風童の体を包む。金色の髪が逆立ち、ブカブカの服が暴れ狂う。

「ボクがお前に劣る？ 舐めるなよ。人間。お前なんて軽く捻り潰してやるよ」

「フン。出来るのか？」

円の言葉と同時に風童が指で弾丸を弾く。弾かれた弾丸は一直線に円へと向う。刹那、円は不適に笑みを浮かべると、

「モード双剣」

純白のグローブが輝き、真っ白な刀身の細い二本の剣が現れ、弾丸を弾く。火花が散り、弾かれた弾丸が地面に減り込む。

「あたしに弾丸は利かない」

「あつそ」

風童が手の平の弾丸を地面へ零す。だが、風童を取り巻く風がそれを浮遊させ、同時に弾丸に不規則な回転を加える。手首を中心に双剣を回す円は、その様子を窺いながらジリツと右足を前に出す。靴の先が瓦礫を蹴り、積もった瓦礫が崩れ落ちる。

それが合図だったのか、風童と円の二人が同時に動き出す。

左手を持った剣の切っ先が地面を抉り火花を散らせ、右手に持った剣は空を裂く。鋭い風音が聞こえ、右手の剣が何度も空を往復する。行き交う刃をバックステップで避ける風童は、右手を翳すと、瞬時に風を圧縮する。

「うぜえよ」

声と同時に圧縮された風が膨張する。そして、円の目の前で、巨大な爆発音を轟かせ、爆風を辺り一帯に広げた。

## 第七十七話 炎

土煙が舞い上がり、瓦礫が降り注ぐ。

乾いた音がまばらに聞こえ、瓦礫の崩れる音が響く。

静かに吹き抜ける風が土煙を吹き飛ばし、その中に居る人物が姿を見せる。右手には剣が握られ、切っ先が深々と地面に突き刺さっていた。吹き飛ばない様に咄嗟にそうしたのだろう。

円形に窪んだ地面は波状に抉れ、周囲の木々も爆風で折れている。

「ゲホッ、ゲホッ」

漂う土煙の中で僅かに聞こえた咳払い。黒髪が揺れ、地面から刃が抜かれる。真っ赤な水晶が煙の中で輝く。

一方で瓦礫が崩れ落ち、中から一人の男が姿を見せる。巨体に野獣のような眼光がギョロリと動く。体を覆う赤い毛が威嚇する様に逆立ち、裂けた口元からむき出しの二本の牙からドロリと液体が落ちた。隆々とした腕が地面から抜かれ、鋭利な爪があらわとなる。

「何ですかアイツは……」

『さあな。ただ、ヤバイニオイがプンプンする』

「今まで感じた事無い位やばい気がしますよ」

苦笑するのは守、その前に佇む火猿は不気味な笑みを浮かべ、静かに息を吐き出す。

「何人が逃げたが、まあいい」

「ヴァーン！」

女性の声が響き、青白い光が火猿の右肩を直撃する。一瞬にして

凍り付けになる右肩。だが、火猿の顔には笑みが浮かぶ。口からは白い吐息が漏れ、右肩の氷が僅かに欠ける。

「邪魔するなよ。今、忙しいんだよ」

厳しい口調に似つかわぬ可愛らしい声が響き、火猿の鋭い眼差しがゆっくりと声の方に向けられた。そこにいたのは、指鉄砲を構える愛で、その指先には青白い光が灯り、微弱ながら冷気が漂う。

足元を吹き抜ける冷風が、周囲の温度を僅かに下げているが、それよりも火猿の体から発せられる熱が高温の為、周囲から湯気が上がっていた。凍り付いた月下神社も融け始め水が地面に溜まっている。

額から溢れる汗を拭う守は、愛の方を横目で見る。今の所異変は無い。怪我はしていないと判断し、守は安堵の表情を見せた。しかし、フロードスクウェアはあくまで厳しい口調で言葉を告げる。

『安心していている場合じゃないだろ。この状況は最悪だぞ』

「分かってますよ。でも、良かったじゃないですか。怪我がなかったんですから」

『何をのん気な事を……。言っておくが、この先は他人の事を考えている時間など無いぞ。自分の事だけを考える』

念を押す様にそう告げるフロードスクウェアに対し、守は優しく微笑む。

「ありがとう。でも、そう言うわけにもいかないだろ」

笑みが消え、真剣な眼差しが火猿を見据える。柄を握る手から伝わる鼓動で、守の緊張状態が良く分かった。平然を装っているが、やはり相当緊張している様だ。

静かに息を吐き、呼吸を整える愛も同じ様に守の方に目を向けた。逃げ遅れたのか、それとも逃げなかったのか、どちらなのか判断が出来ず、愛は左手で右目を押さえる。

「クツ……」

『どうしたの？ 愛ちゃん。まさか、右目が疼くの？』

「違う。イライラすんのよ。足手まといが……ノコノコと……」

奥歯がギリツギリツと軋み、左手の爪が皮膚に食い込む。血が僅かに流れ、涙の様に頬を伝う。右耳で揺れる小さな羽根型のイヤリングが突然消え、愛の背中に巨大な白翼が現れる。それと同時に大入びた女性の声が周囲に響き渡った。

『貴方は退きなさい。ここはワタクシ達が引き受けます』

白翼が羽ばたき、愛の体が宙に舞う。風が吹き荒れ塵が舞い上がる。突風に吹き飛ばされそうになりながら、守は愛の方へと目を向け、火猿も愛を睨む。

二つの視線を浴びながら、空高く舞い上がる愛の右手には、いつの間にか銃が握られていた。淡い蒼い色の銃が鉄の擦れる音が聞こえ、指が引き金を掛かる。僅かに蒼い輝きを放つ右目が、照準を映し出し、それに合わせる様に銃口を動かす。

『標準は合わせた？』

「ええ。合わせた。次は？」

『後は、引き金を引くだけ。姫、頑張つてな』

のんびりとした口調に子供っぽい声。それに静かに頷くと、一呼吸置いてから引き金を引く。破裂音が周囲に轟き、大気を振動させる。微かな振動が地上にいた守と火猿にも届いた。それと同じくし



て、火猿の胸板から血飛沫が上がり、鈍い音が響く。

衝撃が火猿を襲うが、微動だにせず僅かに左の眉が動き、口元に笑みが浮かぶ。むき出しの牙がその笑みを一層不気味に見せ、愛は背筋が凍り付く。

飛び散った血が発火し、火猿の周りを炎が包む。その中央に佇む火猿が右腕を上げると、愛に向って人差し指を向ける。

「うるさいハエだ。消えろ」

『守!』

「分かってる!」

フロードスクウェアの声に、守が走り出す。切っ先が風を斬り、刃が炎を纏う。

『愛ちゃん!』

『姫! 逃げなきゃやばいって!』

「……」

沈黙する愛。その異変にいち早く気付いたのはセイラだった。あの目と笑みが完全に愛を恐怖させ、我を失わせた。精神的に危険な状態に、セイラは焦る。この状況で火猿の攻撃をかわす事は出来ない。それ所か、このままでは具現化された白翼を制御できず、地上に落ちる。現に翼の先が消えかかっていた。

『愛ちゃん! 確り』

「無駄だ。諦めろ」

囁き声と同時に背後に現れた一つの影が、愛の体を地上へと蹴落とした。爆音が響き愛の体が地面へと叩き付けられた。衝撃が広がり、土煙が舞う。驚き足を止めた守は、愛の方へと体を向ける。

土煙の中で仰向けに倒れる愛。美しい白翼が弾けて消えた。その白翼がクッションとなったのだろう。目立った外傷は見えない。一安心する守だがその背後で不気味な声が聞こえる。

「二人まとめて死ね」

『守!』

フロードスクウェアの低い声が掻き消される程の轟音が周囲を包み込み、灼熱の炎弾が地面を抉り迫る。

振り返る勢いそのままにフロードスクウェアを振り抜く。切っ先がいち早く炎弾に触れる。鉄球の様な硬さの炎弾は、守の体を刃ごとと押ししていく。全体重を掛け何とか踏み止まる守だが、その熱に意識が朦朧とする。

『確りしろ! ここで踏み止まらないと』

「無駄だ! 無駄だ! とつとと灰と化せ!」

地を蹴った火猿が炎弾をその大きな拳で殴る。衝撃が炎弾を伝い守の体へと襲い掛かる。

衝撃により守の体は後方へと吹き飛び、同時にフロードスクウェアも手から離れた。守は愛の隣りに落ち、フロードスクウェアはそこから五メートルほど離れた所に突き刺さる。

熱により朦朧とする守は、その場で体を起すと手探りでフロードスクウェアを探す。視点が定まっておらず、ただ手だけが空を切る。その間も迫り来る炎弾が、地面を抉る音を轟かせ目前に迫っていた。

動く事の出来ない愛と、意識の朦朧とした守。両者共に炎弾を防ぐ術は無かった。

## 第七十八話 氷の神

咆哮と共に一筋の閃光が大気を裂いた。

爆音が轟き、黒煙が上る。

その光景を見上げる氷神は、静かに息を吐く。その吐息が白く染まり、冷気が周囲を取り巻く。長い白銀の髪が揺れ、凍える様な淡い蒼色の瞳が目の前に立ちはだかる者を見据える。色白の美しい顔立ちがキリツと引き締まり、刀身の細い白刃の刀を相手に向けた。

対峙するのは老人。表情の読み取れない小ジワだらけの顔に、レンズの太い眼鏡の奥で淡いブラウンの瞳が煌く。口元に浮かぶ余裕の笑み。氷神など相手にならん、とでも言っている様だ。

摺り足で間合いを取る氷神と違い、身動き一つ見せない老人。恐ろしく静かで、緊迫した空気の中睨み合う。

その沈黙をガラガラの擦れた声が破る。

「又シ。何の為に戦う。人でも無い又シが戦う意味など無いじゃろ？」

「私には私のすべき事がある。人か人じゃないかは問題ではない」

「分からぬな。又シ程の力があれば何れ五大鬼獣と呼ばれる事になるじゃろうに」

首を左右に振り否定的な言葉を告げる老人に、氷神は表情を変えず答える。

「そんなものに興味は無い。私の崇拜するのはゼロのみ」

「ゼロ……とな。誰かは知らぬが、余程の人脈があるようじゃな」

「無駄話は止そう。私は気が長いほうじゃない」

目付きが鋭く変わり、右足を踏み込む。白刃が鋭く空を裂く。老

人は軽く上半身を退け逸らし刃をかわす。続け様に刃を振るうが、老人はその場を殆ど動く事無く、上半身の動きだけで刃をかわし続けた。

老人とは思えない機敏な動きに終始戸惑う氷神。やはり五大鬼獣ともなれば、この程度では刃がかする事も無い。そう判断した氷神は、ステップを変え左足で地を蹴り、そのまま上段蹴りを見舞う。表情を変えぬ老人は、上半身を大きく仰け反らせ蹴りをかわす。すると、氷神が僅かに笑みを見せ、続け様に回し蹴りを放つ。驚いた様子も見せない老人は、この攻撃を予期していたのか、バックステップで距離を取る。

「甘すぎじゃ」

「それで、かわしたつもりですか？」

不適な言葉と共に鋭い閃光が空を貫き、老人の右肩に刃が深々と突き刺さる。いつの間にか左手に持ち替えた刀が、左足を踏み込むと同時に突き出されていた。だが、その感触に違和感を感じ、刃を抜きその場を離れる。

眉間にシワを寄せる氷神に対し、穏やかに笑う老人。傷口から血が噴き出る事も無く、何事も無かった様に再生していく。息を呑む氷神は、摺り足で右足を前に出すと、刀を構えなおす。

「ヴェル」

『奴の体ですが、物理攻撃を無効化している様です』

「無効化？」

『はい。しかし、詳しい原理は分かりません』

「そう。分かったわ」

氷神はそう述べ、視線を老人へと向けた。

先程の攻撃で分かった事は、物理攻撃が効かない事と相手の属性。

奴の属性は土。これははつきりとしている。しかし、どう言う事だ。土属性と言えば物質硬化が基本。それが奴には全く無い。むしろ軟化している様に思える。

焦りを隠す様に深々と息を吐く氷神は、その視線を更に強くした。鋭く強い眼差しに、老人は大らかに笑い、静かに口を開く。

「動揺している様じゃな。まあ、無理も無いかのう。ようやく届いた刃も無駄じゃったんだからのう」

のんびりしたマイペースな口調に、氷神も静かに答える。

「流石、五大鬼獣最強と謳われるだけはある。気配のコントロールも、その老人の芝居も完璧です」

「芝居をしとるつもりは無いんじゃないかな」

しわくしやかな顔で笑う老人に対し、氷神が感情の読めない冷たい表情を向ける。潤んだ唇が僅かに動き小声で言葉を紡ぐ。冷気が足元から漂い、白煙が氷神の体を包み込んでいく。

「私にはすべき事がある。貴様に構っている程暇じゃない」

白い吐息が喋る度に漏れ、右手に持った刀の刃が氷結していく。それと同じ現象が、左手でも起こる。両手が凍り付き、美しい二本の透き通った刃が生み出された。白煙が薄れ、その奥から姿を見せる。額に青白い角を二本生やし、柔らかな唇の奥に煌く小さな牙。鮮やかな白銀の髪の本一本が、針の様に鋭く刺々しい。

鬼の様な風貌の氷神。これが、彼女の本来の姿なのだろう。静かに吐き出した吐息が凍り付き、粉雪が舞う。

「その姿……氷牙鬼か……」

「その名はとうの昔に捨てた。今の名は氷神」

「フムフム。氷神……。氷の神。実にお似合いの名じゃな。その両手の刃も、実に又シの名に似合っとする」

「貴方は、何を言っている？」

表情は変えず問う。すると、変わらぬ余裕の表情を見せ老人は答える。

「人の名に意味がある様に、鬼獣の名にも意味がある」

「それが、どうしたと言うのですか」

「又シの元の名、氷牙鬼。その名を捨てたのは、又シが力を失ったからじゃな。そして、新たな氷牙鬼が生まれた」

「……何を言っているのですか？」

僅かな氷神の表情の変化に、老人は確証した。自分の考えがほぼ当たっている事を。

それを踏まえた上で不適に笑い、自らの力を解放する。地面が軋み、地響きが起きる。地面がひび割れ、空気が圧迫される。さつきまでの気配とは桁違いの重苦しい重圧が氷神の体を襲う。これが、本来の力なのだろう。

そして、老人の肉体にも変化が現れる。膨張し、十倍以上も膨れ上がり、引き締まった鋼の様な肉体があらわになった。顔も既に原形をとどめておらず、バケモノの様に鋭い牙を剥き出しにしている。全身を襲う張り詰めた空気に、氷神は思わず後退してしまう。圧倒的な力の差を感じていた。

「臆したか？ 今の又シがワシと対等だと思わぬ事だ」

擦れ声が一層濁った声。その声に共鳴する様に、周囲の壁が崩れ落ちる。

劣勢に立たされた氷神は、右腕を顔の前に運ぶと、静かに口を動かす。

「……ヴェル」

誰にも聞き取れない程の小さな声に、氷の刃に埋められた刀の水晶が光る。

『私の命は氷神様と共にあります。例えこの身が砕け様とも、私はあなた様を守って見せます』

「すまない……。私の力が及ばぬばかりに……」

もう一度小声で答え、右手を下ろす。両方の刃を静かに構え、ゆつくりと顔を上げる。その淡い蒼の瞳が見据えるバケモノ。その圧倒的な力に立ち向かう為、氷神は静かに息を吐く。更なる冷気が漂い、足元はいつしか氷が張っていた。その氷が次第に広がる。

「行きます。全力で」

「ワシも全力で受けよう」

両者の視線が一瞬交わり、刹那に消える。地面に張った氷が澄んだ高音の音を立て砕け、地面が破裂音を轟かせ砕け散る。甲高い音が次々と聞こえ、火花が複数散る。それに遅れて凄まじい衝撃波が広がった。次々とつぶれる地面。破壊される塀。爆音が次々と轟き、土煙が舞い上がる。血肉が裂ける痛々しい音と鮮血が飛ぶ。

## 第七十九話 キルゲルと水嬌

足音が一つ。

草を踏みしめ、地を駆ける。葉が揺れ動き、そよ風が抜ける。

どれ位走ったのか分からないが、足音が次第にゆっくりなり、動きを止めた。

呼吸が荒く、両肩がゆっくりと上下する。

「何処へ行くつもりです」

か細い声が尋ねる。その声に返答は無く、ただ荒い呼吸が続く。束ねられた美しい銀色の髪が揺れ、切なげな眼差しが真っ直ぐ向けられた。

返事が無く沈黙が続き、風を切る鋭い高音が響く。表情を変えず少女は左手を前に出すと、静かに告げる。

「無駄な戦いにエネルギーを消費したくありません」

『無駄な戦い？ フン。我にとっては無駄じゃねえ』

少女の声に、濁った声が答えた。しかし、その声に少女は目を細め、

「貴方に言っただけじゃありません」

そう述べると、濁った声が更に言葉をつむぐ。

『わりのが、今は私の体だ。私の好きにさせてもらおう』  
「話の分からない人です……」



呆れた様にため息を吐き、頭を左右に振る。そんな少女を一蹴する様に、濁った声が言い放つ。

『我は人間じゃねえ』

「そうでしたね。しかし、何故貴方が生きていますのです。キルゲル」

少女の声に仁王立ちする晃。赤い瞳が不気味に輝き、赤黒かった髪が次第に白みを帯びていく。右頬に奇妙な文様が走り、右腕を風が包み込む。轟音が轟き、風が渦巻く。右手に柄が生成され、徐々に刃が姿を現す。刀身の細い刃は美しく輝き、取り巻く風が綺麗な音色を奏でる。鏢は無く変わりに刃の付け根に緑色の水晶が輝く。

「それが、今の貴方の姿ですか。また、随分と風変わりましたね」

『それは、お互い様だ。あの時の小娘が、まさか五大鬼獣にまで成長してるとはな』

「昔とは違う。貴方を殺す事など容易い事です」

『やってもらおうじゃないか。今も昔も我の方が上だと見せ付けてやるっ』

風が一層強まり、木々がしなる。暴風の中でも表情一つ変えない少女は、衣服の裾を揺らしながら佇む。

銀色の髪が激しく揺れ、少女が右手を握る。拳から水滴が零れ、地面にぶつかり弾けた。弾けたその瞬間、一瞬だけ世界が止まる。その妙な感覚にキルゲルもすぐに気付く。

『貴様……何をした！』

「さあ。何でしょう」

落ち着いた口調。冷やかな目。吐き出される息。そして、拳からもう一度水滴が垂れる。地面に水滴が弾け、また時が止まった。ほ

んの一瞬だが、それが全ての感覚を狂わせる。

吹き荒れる風の流れが変わり、渦巻く風が激しくぶつかり合う。風が荒れ狂い刃の様な傷を地面に刻む。地面が欠け、石が砕ける。宙を舞う木の葉は跡形も無く消え去り、晃の体に複数の傷が刻まれていく。傷口が赤く滲み、赤い雫が風に混ざる。

奥歯を噛み締めるキルゲルは、右足を踏み込むと静かに唇を動かす。声は風の音で掻き消され、少女には聞こえなかった。しかし、異変を肌を感じ、目の色を変える。

直後、キルゲルの視線が少女に向けられ、美しい刃が煌びやかな線を描く。風の流れが変わり、少女の頬から血が吹き出る。少女は眉間にシワを寄せ、怪訝そうな表情を見せた。

「何をしたんですか？」

『自分で考える』

「そうですか……。分かりました。もう、貴方の自由はありません」

彼女がそう述べると、水滴がもう一度地面に落ちた。瞬間、波紋が広がりキルゲルの体が動きを止める。同時に吹き荒れていた風も止み、周囲を静寂が包み込む。

突然の事に困惑するキルゲルだが、確信していたのか目付きを鋭くし低音の声で問う。

『これで、我を拘束したつもりか？』

「さあ？ どうでしょう」

『フン。貴様は分かっている。我の力量を』

「分かっているのは、あなたの方です」

少女の言葉にキルゲルが異変に気付く。

『貴様……。まさか』

「そのまさかです。あなたには暫く眠って頂きます」

『ふざけるな！ 貴様』

「おやすみなさい」

囁き声と共に雫が拳から零れた。それが地面に弾けると、キルゲルの視界は突如闇に包まれ、晃の体が静かに崩れ落ちる。右手に現れていた剣が消滅し、全てが元に戻る。そよ風が吹き、草木が揺れる。

落ち着いた表情に、切なげな眼差し。長く息を吐き、ゆっくりと歩みを進める。

静かに体を起す晃は、少女の方に視線を向け口を開く。

「キミは 誰？ キルゲルと親しげだったけど……」

「私は水嬌。五大鬼獣の水の名を受ける者」

「水の名……と、言う事は水を司るって事だね」

「貴方の名は？」

「僕は桜嵐あつらん 晃。それで、キルゲルとはどう言う関係で？」

晃の問いに、水嬌の表情が曇る。とても嫌そうな表情の為、晃も焦る。

「あ、あの、その。別に、言い難いならいいですけど」

「別に、言い難いわげじゃないです。ただ、知らない方が良い。あなたにとっては辛いかも知れないから」

「辛い事？」

「それより、あなた方はこの現象に關与しているのですか？」

切なげな眼差しで水嬌が見据える。二人の視線が交わり、晃が軽く首を傾げた。

二人の間に沈黙が生まれ、静かに時が過ぎる。一分が過ぎ様とし

た頃、複雑な表情を見せながら晃が言う。

「この現象は、鬼獣の仕業じゃないの？ 僕はてつきり力のある鬼獣がやったものだと思ってたんだけど」

「鬼獣が扱うモノにこの様な結界術はありません」

「それじゃあ、誰が？」

不思議そうな表情をする。水嬌は変わらぬ表情で答えた。

「私の考えでは、この現象は封術師の仕業だと考えてます。以前にもこの様な現象がありました」

「以前？ それって……」

「その時は町が一つ消滅するほどの巨大な力が暴発し、大勢の死者が出たそうです」

淡々とした口調の水嬌に対し、表情を強張らせる晃。水嬌の話が本当ならば、更に多くの死者を出す事になるし、この町だって消滅する。そして、この中に居る晃達も同様だ。顔面蒼白の晃は、オドオドと視線を左右に揺らす。

事の重大さに気付いたのだろうと、水嬌は押し黙る。晃が落ち着くまで待つつもりだった。だが、怯える様に震える晃の口から出た言葉は、意外な言葉だった。

「や、ややややばいぞ……。昨日出された課題まだ終わってない……。こ、殺される……。完璧に殺される！」

瞳孔が開き恐怖に怯える。啞然とする水嬌が、小さなため息を漏らす。事の重大さを全く分かっていない様だ。

「あなた、分かってるんですか！ この状況を！」

苛立ちから声が大きく言葉が荒い。そんな水嬌に負けじと、晃も声を荒げ言い返す。

「何言ってるんだ。これは重要な事なんだよ。あ、あの人の課題は必ずなんだ。もし忘れたら」

カタカタカタと、壊れかけのロボットの様に震えだす。

そんな晃の姿に、諦めた様のため息を吐き、冷やかな視線を向ける。そして、冷酷な口調で言い放つ。

「消えなさい。事の重大さが分かっていないなら、今すぐ消えなさい」

それだけ言うと、水嬌が消える。水のように蒸発してしまったのだ。体の震えを止め、真剣な表情を見せる晃は、静かに息を吐き、右手に剣を出す。美しい刃の付け根。そこに煌く緑の水晶が不気味に輝き、濁った声が静かに聞こえる。

『わりいな。あんな芝居させて』

「いや。良いつて。いつも助けてもらってるし。それより、彼女とはどういう関係？」

『無駄な詮索は止める』

「分かった。それじゃあ、行くぞ」

『ああ。気をつけるよ。奴は強い』

キルゲルの言葉に頷き、晃はまた走り出した。

## 番外 登場人物紹介（前書き）

登場人物が多くなってきましたので、ここで登場人物の紹介をして欲しいと要望がありました。

そこで、簡易な登場人物紹介を書いたわけですが、初めての事では分からない事ばかりです。

ちなみに携帯の方には見辛いかも知れませんが、別にこんな見なくて良いと言う方は、飛ばしてください。

分かり難いかも知れませんが、これで勘弁してください。

## 番外 登場人物紹介

登場人物が多いと言う事で、ここらで簡易な登場人物紹介をしたいと思います。

まず初めに、主要キャラクターの四人を。

### 火野 守

この物語の主人公。マイペースな性格をしている。

青桜学園に通う高校一年生。クラスは二組。部活動はやっていない。運動神経は良い方に入り、成績の方も割と良い方。学校では殆ど寝ている為、特に目立つ事は無い。

母との二人暮らしだが、一応父は生きており、仕事で家を空けている。ちなみに四つ年上の姉も一人いる。家族の仲は良い。

ガーディアンとしての訓練を受けてない為、戦闘に置いては全くの素人。その為、日々特訓中。

### フロードスクウェア

初代ガーディアンマスターが製造した最初で最後のサポートアームズ。

現在は守のパートナー。自称最強のサポートアームズで、今は能力を失い最弱となっている。

性格は怒りっぽく、乱暴に扱われるのを嫌う。

属性は火。具現化時は両手用大剣。通常時はネックレスとなっている。水晶の色は赤。

### 水島 彩

一応、この物語のヒロインです……多分。

青桜学園に通う高校一年。クラスは守と同じ二組。部活はやってない。運動神経も勉強もそこそこ。青桜学園に入学時、手続きに不

備があり、現在守の家に居候中。

水を司る最高位の封術師の家系で、水属性の呪文なら最上位の呪文でも簡単に使える。それ故、水島家は代々黒木家と風見家の両家に守ってもらっていた。

性格は一途で真面目だが、少々自分勝手な部分のある天然さんです。

#### ウインクロード

水島家に代々伝わるサポートアームズ。

探索能力に優れているが、戦闘には不向き。完全に封術師向けのサポートアームズとなっている。

性格はしっかり者で、疑り深い。

属性は水。具現化時は大柄の杖。通常時はネックレスになっている。水晶の色は蒼。

#### 黒木 大地

土を司るガーディアン。

青桜学園へと編入してくる。学年は一年。クラスは四組。運動神経抜群だが、学校ではダメ生徒を熱演している。

家は代々続くガーディアンの家系の為、大地もガーディアンに。母はガーディアンとして鬼獣と戦い命を落とし、現在は父と兄の三人家族。

性格は熱血系の変人さん。

#### グラットリバー

大地のサポートアームズ。

適合者には変人が多く、大地もその一人。具現化時の形状を変えられるが、適合者が中々見つからないと言う難点があり、最盛期よりも能力は落ちている。

性格は悪ぶっているが真面目。



属性は土。具現化時はグローブ。通常時はブレスレット。水晶の色はオレンジ。

風見 優花

風を司る封術師。

青桜学園へと編入。学年は一年。クラスは五組。元々勉強は好きな方で、成績はトップクラス。運動神経も抜群だが、学校では目立たない様になっている。

幼い頃は視力を失っていたが、何者かの手によって赤い眼を授けられ目が見える様になる。初めて見た光景は悲惨なモノだったと言う。その目の所為で育成生時代に『赤い眼の死神』とあだ名を付けられ、その名で鬼獣にも恐れられている。

性格は冷静で物静か。

キファードレイ

優花のサポートアームズ。

死神の使っていた大鎌じゃないかと言われている。大きさの割に軽量で、女の優花が片手で軽々を振り回す事が出来る。

性格は荒っぽく口が悪い。

属性は風。具現化時は大鎌。通常時はネックレス。水晶の色は緑。

以上が主要四人とサポートアームズです。続きまして、青桜学園の生徒を紹介していきましょう。

皆川 奈菜

青桜学園一年。クラスは一組。部活には入っていないが、保健委員をしている。その為、放課後は保健室によくいる。性格は優しく明るい。

成績優秀、スポーツ万能で非の打ち所が無い。男女共から人気がある。可愛いと言うより綺麗と言う言葉が似合うが、笑顔は天使の

様に可愛いと男子は言う。  
入学して既に十数人に告白されているが、本人には好きな人がいる。

鳥山 理穂

青桜学園一年。クラスは五組。報道部所属。性格は熱血系でしつこい。

成績は中の中。運動神経もまあ悪くは無い。いたって普通の女子高生。目は悪くないのに眼鏡を所持。記者と言えば眼鏡だと、本人は言う。

山中 若菜

青桜学園一年。クラスは三組。報道部所属。性格はやる気の無いのんびり屋。

国語の成績だけは良く他は殆ど赤点。運動神経も微妙らしい。カメラマンとして写真を収めているが、その殆どが女子のパンチラ。それを裏でさばいていると言う黒い噂も。

赤川 真弓

青桜学園一年。クラスは二組。学級委員長で生徒会に所属。性格は真面目でダジャレ好き。

成績はもちろん良い方で、運動神経もそれなり。彩の友達で、良く彩をからかっている。恋沙汰に関しては勘が鋭い。

犬神 智夏

青桜学園一年。クラスは二組。剣道部所属。責任感が強い性格をしている。

家が道場で、その師範代もしている。彩の友達で、小麦色の肌が印象的。現在、守の鍛錬に付き合っているが、一方的にボコボコにしている。守と望美とは同じ中学。

月下 望美

青桜学園一年。クラスは二組。弓道部所属。性格は素直でマイペース。

家が神社で時折巫女の格好をして境内を掃除している。彩の友達でのんびりとした独特の間を持った喋り方をする。中学時代の守を知っている。

上野 唯香

青桜学園一年。クラスは二組。帰宅部。性格はお調子者。

成績が悪く、運動神経は人並。彩の友達で童顔の幼児体型。本人はそれをコンプレックスにしている。だが、何故か周りに集まるのはスタイルの良い友達ばかりで、困っている。

山口 梨奈

青桜学園一年。クラスは二組。陸上部所属。性格は明るく元気。

体力測定はトップクラスだが、勉強はまるつきしダメ。彩の友達で元気印となっている。走るのが好きで、底なしの体力と周囲から言われる程。

冬矢 零

青桜学園一年。クラスは二組。美術部所属。性格は冷静で勘が鋭い。

記憶力が良く成績は優秀。運動は苦手。彩の友達だが、あまり自分から話しかけない。暇な時はスケッチブックに絵を描いている。

以上。青桜学園の生徒でした。女性キャラばかりではありません。基本的に彩の友達ばかりで、守の友達が存在が……。

続きまして、謎の組織の面々を。

命土めいど

ある組織の一員。女性。

ガーディアンや封術師と同じ様に、サポートアームズを持っている。人の魂を喰らう。凄まじい殺気を放つ。

ライドフォルド

土属性のサポートアームズ。

具現化すると柄が細長い刀に近い剣になる。通常時はピアス。水晶の色は金色に近い黄色。

死電しでん

命土と同じ組織の一員。男性。汚い手を使う頭脳派タイプ。

レイアースト

雷属性のサポートアームズ。

具現化すると盾や鎧に変わる。通常時は指輪。水晶の色は黄色。

氷神こいじん

ゼロと言う人物に使えている。女性。

冷静で戦闘能力も高い。風と水の属性を持っており、氷を扱う。元々好戦的ではなく、平和を好む。ゼロの命で守と彩を見守っている。

ヴェル

氷神のサポートアームズ。氷の属性を持つ。

具現化すると白刃の刀へと変わる。通常時は水晶のまま。水晶の色は青白い。

とりあえず、以上が今出ている謎の組織のメンバーでしょうか。

あんまり要らない紹介でしょうか？ まあ、いいとして次は最近登場したキャラ達の紹介です。このキャラ達の事は現在詳しく書けないので、本当に簡単な紹介になります。アシカラス。

桜嵐 おしづるん  
晃

突然、現れた謎の少年。

守達と同じくガーディアンだと思われる。

キルゲル

晃のサポートアームズ。

属性は風。具現化時は片手用の鐔の無い剣。

雪国 まな  
愛

いきなり守達に攻撃を仕掛けてきた謎の少女。

二種類のサポートアームズを持つ封術師。

セイラ

愛のサポートアームズ。

属性は風。飛行型のサポートアームズで具現化時は翼。通常時は

イヤリング。

ヴィリー

愛のサポートアームズ。

属性は水。具現化時は自動式拳銃。

林 たけあき  
武明

彩の知り合いの封術師。

良く名前を間違われる。

セルファイ

武明のサポートアームズ。  
属性は火。具現化時は杭。通常時は指輪となっている。

胡桃くるみ 円まじか

彩の知り合いのガーディアン。

エディーフエイリス（通称エディ）

円のサポートアームズ。

属性は雷。様々な武器へと具現化出来る。通常時は十字架のイヤリング。

以上です。すいません。手抜きだと思わないで下さい。この面々はストーリー上、これ以上は紹介できない状況となっております。本当、すいません。

続いて、五大鬼獣の紹介を。

火猿かえん

火を司る最上位の鬼獣。

荒つぱく戦闘本能に忠実。人の姿になるのを嫌い、戦闘時は常に本来の姿で戦う。

風童かぜどう

風を司る最上位の鬼獣。

まだ幼く見え、五大鬼獣の中では最年少。子ども扱いされるのを嫌う。

電鋭でんえい

雷を司る最上位の鬼獣。

女性には手を出さないと云う自分なりの美学をもっている。変わり者。

水嬌すいせう

水を司る最上位の鬼獣。

五大鬼獣の中では最も平和的。無駄な戦いを好まず、なるべく話し合いで解決しようとする。

燃土ねんど

土を司る最上位の鬼獣。

五大鬼獣の中で最も長くその座を死守している。

以上が五大鬼獣でした。凄いキャラが多いですが、後少しなのでお付き合いください。

久遠 達樹

大地と優花と因縁を持つ男。

パートナーなしの封術師。戦闘能力はガーディアンより上。色々謎が多い。

ウィーリス

達樹のサポートアームズ。

属性は風。移動タイプで、形状は翼。

謎の男

サポートアームズからマスターと呼ばれる男。

漆黒のフード付きロングコートを身に纏っている。自分でサポートアームズを製造している。神出鬼没のこれまた謎の多い人物。

ゴノーレフォスト

謎の男のサポートアームズ。

属性は火。具現化出来ず、通常は指輪となっている。

フリーラン

謎の男のサポートアームズ。

属性は水。具現化は出来ない。通常時は指輪。

シェイドネリア

謎の男のサポートアームズ。

属性は風。具現化できない。通常時はブレスレット。

ロツジエツガス

謎の男のサポートアームズ。

属性は土。具現化できない。通常はピアス。

以上。登場人物紹介でした。

登場人物が多くてすいませんでした。



## 番外 登場人物紹介（後書き）

登場人物紹介をしたわけですが、分かってもらえたでしょうか？  
不安です。

登場人物が多くなってしまい、本当にすいません。

これからも頑張っていくので、よろしく願います。

## 第八十話 降臨（めざめ）

刃が空を切る。

もう何度目だろうか。その大きな三日月型の刃が空を切ったのは。切っ先がコンクリート片を真つ二つに裂き、地面を砕く。

軽快なバックステップを見せ付ける電鋭。右手に握られた両端に刃の付いた槍を回し、慎重に間合いを測りながら一定の距離を保つ。優花もまた電鋭との間合いを測り、少しずつ距離を縮めていく。徐々に刃が電鋭に迫る。

刃を振る度に鋭い風音が鳴り、疾風が吹き抜け電鋭の黒髪が揺れる。

赤い瞳が電鋭を見据え、三日月型の刃が地面を抉り切り上げられた。切っ先が僅かに電鋭の前髪を掠める。黒髪が二人の間に散り、穏やかな金色の瞳が優花を見据える。

刹那、いつしか向きが変わった刃が電鋭に向って振り下ろされてきた。予測していた事だったが、あまりにも速い切り替えしに、電鋭の反応が遅れ、諦めた様に目を伏せる。右手に持った槍で受け止める気が無いのか、静かに左手で右目を覆う髪を掻き揚げた。

甲高い乾いた音が周囲に響き、柄から伝わる振動が体中に駆け巡る。

『えっ、えっ、エエエエツ。ど、どうなってるの！』

『野郎。消えやがった』

驚きの声を上げるシェイドネリアとキファードレイ。確実に刃が当るはずだった。しかし、そこに電鋭の姿は無い。切っ先が触れる直前、その姿が煙の様に消えた。突然の事に困惑する二人に対し、優花は冷静だった。

地面に刺さった切っ先を抜く。地面が碎け乾いた音が僅かに聞こ

えた。口から吐き出される吐息が荒い。流石に疲れていた。あれだけ大鎌を振ったのだ、疲れて当然だ。だが、結局一発も当らなかつた。これが、五大鬼獣。普段戦っている鬼獣とは天と地の差だ。動きのキレも、堂々たる態度も、その隠された能力も。全てが規格外だった。

「ハア…ハア………」

「お疲れの様で。そろそろ、武器を退いてもらえると嬉しいな」

「ハア…こ、こと……わる」

眼差しは強く電銃を見据える。小さくため息を漏らす電銃は、静かに首を振り槍を地面に突き刺す。そして、大きく手を広げ、

「どうして、分かってももらえないのだろう。私は、あなたの事をこんなにも想っているのに……」

甲高く大声で述べる。

その声に、シェイドネリアは震えた声で言う。

『うつつ……寒気が……』

『ケツ。何が想っているだ』

『何処にでもいるんだよね。ああいう台詞吐く奴って』

シェイドネリアとキファードレイの率直な意見に、電銃が微笑む。背筋に走る寒気に、優花は一歩足を引く。

空気が変わる。その瞬間を優花は肌を感じた。今まで大らかだった電銃のオーラに、僅かに殺気が込められる。遂に本気になったのだろう。そう確信し、優花も意識を集中する。周囲に気を配る優花は、ふと気付く。先程まで地面に突き刺さっていた槍が消えた事におかしいと思うが、それよりも電銃の動きに目を向ける。何をす

るつもりなのか分からないが、とても嫌な予感がする。

「フフフツ……。私は知ってる。あなたがどうして退かないかを」  
「……何の！」

言葉を言い終える前に、優花は言葉を呑む。奴の目的は初めから。

「それじゃあ。消えてください」  
「止め」

スツと右手を上げると、雷光が空を裂く。眩い光が全てを消し去り、轟音だけが周囲を包む。眩い光に瞼を閉じた優花の耳に、ビルの崩壊する音が微かに聞こえた。全ての音が鳴り止み、暫しの時が過ぎる。電鋭が近くに居るのか分からないが、優花はまだ瞼を閉じていた。

風が優しく髪を撫で、瓦礫の崩れる音に体がビクツと反応した。恐る恐る瞼を開く。瓦礫が山となり目の前に広がる。

膝から崩れ落ちる優花は、両手を地に下ろし両肩を小刻みに震わせた。大地が居たはずのビルも藻屑と化し、全てを失った。そのシヨックは大きく、優花は戦意を失う。その視線の先に、割れたイヤリングが一つ転がっていた。

視界が滲む。手から零れたキファードレイが、その姿をとどめられなくなり、ネックレスへと戻った。

『お、オイ！ テメエ、確りしやがれ！』  
「……ごめん」

弱々しく返答する。戦意を失った優花の姿に、電鋭は穏やかな笑みを見せ、静かに歩みを進めた。

「どうです？ まだ戦いますか？」  
「……」

放心する優花は反応を示さない。キフアードレイモシエイドネリアも言葉を呑み、ただ電鋭を見据えるだけだった。

静かに時が過ぎ、風が優しく吹き抜ける。穏やかな表情の電鋭は、優花の正面に腰を下ろし、静かに口を開く。

「返答しないと云う事は、戦意喪失と見ていいのかな？」  
「……」

やはり返答は無い。小さく頷いた電鋭は、クスリと笑うと踵を翻し、静かにその場を去っていく。

その後姿を見据える優花は、右目から涙を一筋零した。赤い瞳は一層赤くなり、目頭が熱くなる。だが、涙が零れたのはそれ一滴だけで、それ以上涙は出ない。霞む世界に弱々しく瞼を閉じた。闇が全てを包み込み、優花は静かに地面に倒れた。

ほんの数秒程の時間が、優花には長く感じられ、闇の中を彷徨う。そんな中、一際大きく輝く光が優花の前に現れる。不気味な青白い暖かい光。闇から救う様に、光が優花を包み込む。その奥で声がする。気味の悪い不気味な声が。

『望め ……力を 。望め ……強さを 。望め ……』

繰り返される言葉に、優花は静かに口を開く。

「誰？」

静かな声に、不気味な声が言葉を告げる。

『力が欲しくば願え。力が欲しいと。願え。全てを破壊したいと』  
「あなた、何を」

『解放て ……願え ……力を ……強さを！』

眩い光が視界を遮り、優花は意識を失った。

動かなくなつた優花の微妙な変化に、キファードレイがいち早く気付く。微かに漂う殺気が、全ての空気を変える。優しく流れていたはずの風が静まり返り、突如静寂が周囲を包む。

異様な空気に電銃も気付き足を止める。背後から感じる威圧に、電銃の額から一筋の雫が流れた。右手の指先にバチツと電撃が迸り、雷光が空を裂く。それは、電銃が意として行つたものではなく、咄嗟に出た自己防衛だった。だが、眩い光を発しただけで、雷撃は何かの力により消滅していた。

「ど、どういう」

『ククククツ。久方ぶりの空気だ。我ここに降臨する』

不気味な声が周囲にこだまし、突如鋭い風が吹き荒れる。地面が、瓦礫が、壁が、風によって生じた刃により切り裂かれる。その刃は電銃の体をも襲う。皮膚が裂かれ赤い液が滲む。

「クツ」

奥歯を噛み締め、拳を握る。微弱な電流が右腕に集中し、槍を手中に生成していく。余分に電撃を放電した所為か、先程よりも生成に時間が掛かっていた。

通常二、三秒で終わるはずの柄の生成が十五秒掛かり、今も尚刃

を生成している途中だ。漂う殺気と、ただならぬ気配に僅かながら表情を強張らす電鋭は、静かな口調で問う。

「貴様是谁だ？ 彼女はどうした？」

『クククククツ。再びこの地に立てる事。汝に感謝しよう。我、レイドフェレス。汝の鮮血を欲す！』

突如右手に具現化された大鎌が、回転し宙を滑空する。スピードはそれほどまで無いが、風を裂き不気味な音を奏でるその大鎌に、電鋭は視線を奪われていた。その刹那、何処からともなく突風が吹き抜け、鮮血が飛び散った。

## 第八十一話 共喰らい

シトシトと落ちる赤い液が、路面を赤く染める。

静寂が周囲を包み込み、三日月型の大鎌は瓦礫に切っ先を沈めていた。

軽い足音が一つ、大鎌に近付き、長い柄の先を真つ赤な手が握り締める。瓦礫が崩れ、切っ先が姿を見せた。美しく煌びやかに輝くその刃を一振りし、静かに辺りを見回す。腰まで届く長い黒髪が揺れ、赤い瞳が後方に立つ電銃を見据える。

『消え……た、様に見えた』

優花の声でそう述べ、自分の右手に目を落とす。右手には血がべつたりと付着しており、それを舌で舐める。

『フム。中々の味。しかし、我満足出来ぬ。血を欲する』

大鎌を器用に回転させる。鋭い風切り音が響き、突風が吹きぬける。

右膝を地に落としている電銃は、その優花の姿を真つ直ぐに見据えていた。左肩から溢れる大量の血が腕を伝う。肩を貫かれた。優花の右手によつて。それは、全く予期していなかったもので、電銃も逃げるのにワンテンポ遅れた。その為、肩に一撃貰ってしまったのだ。

険しい表情を変えず、深々と呼吸を繰り返す。息を吐く度に左肩から血が溢れ、衣服を一層赤く染める。

「くっつ……。まさか、共喰らいだったとは……。あの目を見て気つくべきだった……」



『共喰らい？ 笑止。我、望むは鮮血のみ』

「黙れ。寄生虫。貴様等など、所詮人の体を蝕む事しか出来ない下等な連中」

『下等？ 笑止。下等は貴様等だ。人を襲い血肉を貪る。生きる為とは言え、その行為は万死に値する』

「万死だつて？ 可笑しな事をベラベラと……。あんまり、調子に乗らないで貰いたいね」

表情を僅かに引き攣らせながら立ち上がる。右腕で稻妻が迸り、槍が鮮やかに空を舞う。手も触れずに回りだす槍を見て、バカにする様な笑みを浮かべる優花は、右手に持った大鎌を頭上に投げる。空中を優雅に舞う大鎌が、静かに優花の顔の横を通り過ぎ地面に突き刺さった。と、同時に周囲に突風が吹き荒れ、美しい黒髪が舞い上がる。

『我、本領発揮。貴様を抹消する』

「抹消？ 出来るのかな？」

『……参る』

優花がそう述べると、左腕に大柄な刃が姿を現す。左腕を包み込み、体と一体となったその刃は、緩やかに風を纏い時折高音の音を響かせる。その刃の矛先を静かに電鋭の方へと向け、右手で大鎌の柄を握り締めた。直後、瓦礫を蹴り電鋭との間合いを一瞬で詰める。

「くっ！」

咄嗟に槍を握り刃を受け止める。衝撃と甲高い音が響き、地面が砕けた。思わぬ衝撃に仰け反る電鋭の首筋にヒヤリとしたモノが当る。その瞬間、前髪に隠れた右目があらわになり、電鋭の姿が消えた。空を切った大鎌をピタッと止めた優花は、振り返り静かに笑う。

『ククククツ。ネタは解消。我、次は逃さん』

金色の瞳を見据える優花の赤い瞳が、不気味な輝きを放つ。それと同時に左腕の刃が更に刃を震わせ、高音の音を響かせる。高音の音が周囲に振動を広げ、次々と瓦礫を破壊していく。

膝を落とし荒い呼吸を繰り返す電鋭の首筋からは血が滲む。

「うつ、くつ……。ハア、ハア」

『息切れ。笑止。これが、五大鬼獣の実力か？』

「ふざけた事を抜け抜けと……」

奥歯を噛み締める電鋭は、静かに右拳を握り締め、深く息を吐き立ち上がる。右手に握った槍を構え、正面に佇む優花を真っ直ぐに見据えた。

大鎌を器用に回転させる優花は、左手の刃で空を一閃する。斬撃が地を裂き、空を貫き電鋭へと迫る。右手に握った槍を振り抜き斬撃を受け止めた。稲妻が迸り、斬撃が碎ける。それと同時に、目の前に現れた優花の左腕が振り下ろされた。咄嗟に後方に飛び退き刃をかわすが、それに合わせる様到大鎌が背後から首筋を目掛け引かれる。素早く槍を背中に沿わせそれを防いだ。

『ククククツ。中々。しかし』

左腕を引くと、その矛先を電鋭へと突き出した。

「ぐああああつ」

悲鳴と飛沫が飛ぶ。鮮やかな真っ赤な飛沫が、地面に散乱し優花の綺麗な顔に血痕を散りばめた。

『クククツ。もう、その右目は使えん』

切っ先が抜かれ、電銃の右目から血が涙の様に溢れる。金髪の髪で傷は隠れているが、確実に切っ先は電銃の右目を抉っていた。その証拠に左腕の刃の切っ先には血がベタリと付着している。

左手で右目を抑える電銃は、左目で優花の姿を睨み距離を取る。しかし、片目だけだと上手く距離感が掴めず、バランスを崩し横転する。その無様な姿を見据える優花は、不適に微笑み静かに口を開く。

『無様な格好だな。五大鬼獣』

「うぐつ……。貴様、何故……」

『その目の事か？』

「貴様……知っていたのか……」

苦痛に表情を歪め、苦しげに息を吐いた。五大鬼獣である自分が、ここまで追い込まれると思ってもいなかった。不測の事態が起きた、それが一番の要因だ。そして、もう一つ電銃が追い込まれる要因となったモノがあった。それは、五大鬼獣としての驕りだ。誰よりも強いと自負があり、それが祟った。

右目を奪われ、攻撃を避ける術を失い、同時に距離感を奪われた。今、優花との距離がどの位なのか、射程距離はどれ位なのか、それだけが頭の中を巡り巡る。

そんな電銃に向って優花が走り出す。距離感の掴めない電銃は、ぎこちないバックステップで距離を取る。だが、次々と繰り出される左腕の突きが電銃の体を蝕んでいく。

「ぐつ！」

甚振る様に皮膚を掠めていく刃。血が霧状に飛び散り、周囲に散乱する。首筋、右肩、二の腕、脇腹、太股、脛ふくらはぎと、次々と刃に傷付けられていく。傷口が広がり更に血が溢れる。

刃を防ごうと槍を振るうが、距離感が掴めず無常むじょうに空を切るだけだった。

電鋭の振るう槍が空を切り、優花の突き出す刃が肉を裂く。繰り返されるこの行為に、ついに電鋭の足も止まる。溜まりに溜まった疲労がそうさせたのだろう。両肩を激しく上下に揺らし、苦しそうに呼吸を繰り返す。

「ハア…ハア……」

「息切れか？ 期待外れだ」

「黙れ……」

『フム。流石、五大鬼獣。死を目前にしても尚、強気の態度。感服した。その敬意を示し、苦しめずに殺してやる』

「そうしてもらえると……ありがたいね」

観念した様に深々と息を吐いた電鋭は、右手に握っていた槍を消した。既に槍を具現化する程体力に余裕は無かった。そして、これ以上五大鬼獣としての自分の名を汚したく無い、と言う思いもあった。自らの驕りが生んだ敗北。それを認め、死を受け入れる覚悟をした。

大鎌が首元に添えられる。三日月型の刃が美しくも不気味に煌き、

『眠れ。永遠に』

柄が引かれ血飛沫が空を彩った。だが、それは電鋭の血ではなかった。

「貴様」

「悪いが、それ以上優花の体で遊ばせねえぞ。クス野郎！」

右腕に纏った漆黒の鱗が刃を抑え、額から流れる血が地上へと落ちる。体中傷だらけで、右耳のひび割れたピアスが不気味に光を帯びた。

「ガッ！ ……ガガガッ」

雑音が響き、ピアスの水晶が光を失った。

奥歯を噛み締める大地は、左手でピアスを取り、ボソリと何かを呟いて地面へと落とした。静かにゆっくりと地上へと落ち行くピアスは、地面に降り立つその前に消滅した。

「グラツトリバー……」

「分かった」

右手の甲に埋め込まれたオレンジの水晶が光を放ち、漆黒の鱗が右腕を侵食する。

驚いた様子の電鋭は言葉を失い、ただ大地を見据えていた。その視線に大地が気付き、視線を電鋭の方へと向ける。

「勘違いすんな。俺はテメエを助けるんじゃないやねえ。これ以上、優花の体で暴れさせないだけだ。これが終わったら、次はテメエの番だ」

ドスの利いた声に、鋭い眼光。それを見て、電鋭が弱々しく微笑み「ああ。分かっている」と告げた。

## 第八十二話 砕けた想い

それは、一瞬の事だった。

突然窓の外に眩い光りが放たれ、轟々しい雷鳴と共にビルが崩壊する。凄まじい稲妻が壁を突き抜け、一瞬にして大地を呑み込んだ。だが、大地は無傷だった。眩い光りの中で、何かが壁となり大地の体を守っていた。

大地が目覚めたのは、丁度その時だった。何が起こっているのか分からず、周囲を見回しグラットリバーに問いかける。グラットリバーにもその現象が何なのか分からず、返答は曖昧なモノとなった。光りが止む頃、その現象の正体に大地とグラットリバーは気付く。右耳に煌くオレンジの水晶。僅かに亀裂が生じ、大地を包む障壁の様なモノが崩れ、大地は降り注ぐ瓦礫に埋もれた。

そして、今大地は優花と対峙していた。正確には、優花の体で暴れるレイドフェレスとなのつた奴と、対峙している。

大きな三日月の刃が回転し空を裂き、左腕の大型の刃は高音の音を奏でる。耳障りな嫌な音に、眉間にシワを寄せる大地は右手首を掴むと、喉の奥から声を吐き出す。

「ハアアアアアッ！」

『だ、大地！ おまつ！』

突然の行動にグラットリバーが叫ぶ。だが、大地は聞こえないのか、深く息を吐く。右腕を侵食していた漆黒の物質が更に侵食を早め、大地の首元まで這い上がっていく。衣服で見えないが、その漆黒の物質は体をも蝕んでいた。

「うつ……うつうつ……」

『無茶だ！ これ以上は』

「うつせえ……。まだ、行ける……。それに……。俺はアイツをクツ！」

表情が引き攣る。激痛が体を襲い、鼓動が速まる。体内を駆け巡る血流が、その速度を上げ更に侵食を早める。

だが、それを優花は待つてはくれなかった。何かを感じ取った様に地を蹴り、右手に持った大鎌を振る。風切り音に遅れ、金属音が響く。漆黒の右手が刃を押さえる。しかし、それを予期していたのか、すぐさま左腕の大型の刃が胸に向って突き出された。

金属音が鳴り響き、キィインと甲高い音が周囲に響く。

『硬いな……』

優花の声で呟く。切っ先が大地の胸に触れたまま動かず、甲高い音だけを響かせる。服が裂け、漆黒の鎧が大地の皮膚を覆っているのが見えた。大地の強気な眼差しに、優花の口元が僅かに緩む。

硬化した漆黒の鎧に亀裂が走る。刃を包む風の高速振動が硬化した漆黒の鎧を貫こうとしていた。

『ククククツ。土属性では風属性に勝つ事は不可能。この刃はもうじき貴様の鎧を砕き、胸を貫く』

「分かってんだよ。土が風に弱いのは。でもな、てめえは分かかってねえんだよ。てめえは、既に俺の術中にはまってんだよ！」

三日月形の刃を払い、右腕で刃を弾く。それと同時に大地の右足が優花の腹を蹴り飛ばした。防ぐ事も出来ず、腹部に蹴り喰らった優花はよろめきながら後退する。

息の上がった状態の大地。疲労は否めなかった。体が本調子で無い状況で、体の半分まで侵食が進めば疲労も溜まる。それに、体が本調子でもここまで侵食を進めた事は無い。この侵食は体に大きな

負担が掛かる為、大地も極力使わない様にしていた。一步間違えば命を失うリスクがあり、最悪体をサポートアームズに乗っ取られる可能性だってある。

それでも、大地にはこうするしかなかった。こうするしか、優花の持つ風属性に対抗する術が無いのだ。

「ハア…ハア……」

『大地。もう無理だ。これ以上は』

「るせえ。これ以外にどうやってアイツをとめろって言うんだ……」  
『でも、これじゃあお前の体がもたない』

大地を気遣うグラットリバーだが、その言葉は耳に届かなかった。刃が空を裂いたからだ。大地もグラットリバーも、刃が振り下ろされるまで優花の接近に気付けなかった。左肩口から血が吹き出、大地はよろめく。激痛が走り、表情が歪む。

視界に不適に笑う優花の顔が映る。右手の大鎌が大地の首を刈るかの如く振り抜かれた。

奥歯を噛み締め力強く地を蹴り後方へと逃れるが、踏み込んだ優花の左腕の刃が首元へと伸びる。甲高く耳に残る嫌な音が周囲に一瞬響いた。切っ先が大地の首元に触れたが、すぐに弾かれた。

その現象に一旦距離を取る優花は、僅かに眉間にシワを寄せる。グラットリバーの表皮が、先程よりも硬くなっていた。

小さく息を吐く優花は、口元に僅かながら笑みを浮かべる。

『面白い……。面白いぞ。人間』

「テメエを楽しませるつもりはねえ」

『我、汝の血を欲す！』

「黙って、とつとと優花に体を返しやがれ！」

優花と大地が同時に地を駆けた。大鎌が地面を抉り、大型の刃が



大地に向って伸びる。切っ先を見極め、素早く右拳を振り抜く。刃の平を殴り外へと弾くと、大地はそのまま体を反転させ後ろ蹴りを見舞う。

腹部に蹴りが決まり、優花の体が飛ぶ。だが、地面に刺さった大鎌が優花の体を支える。

『来るぞ！ 大地！』

「分かつてる！」

左腕の刃を突き出そうとする優花を、見る事無く大地の右拳が地面を叩いた。その衝撃が地面を押し潰し、周囲一帯に爆風が吹き荒れる。地面が砕けた事により突き刺さっていた大鎌の刃が地から抜け、優花の体が宙へと舞う。

その状況を大地は待っていた。

「呪文が使えるのは、封術師だけじゃねえ。詠え！ グラットリバー！」

『これ以上は無理だ。お前の身が』  
「かんけえねえ。今しかないんだ。早くしろ！」

大地の怒声にグラットリバーは返答する事無く、静かに呪文を唱え始めた。

『我 地を司る者なり。揺ぎ無く佇む地を割き、今汝を滅ぼす』

「地を喰らえ！ 地獄の う！」

大地の声が途切れ、口から血が吹き出る。

『だ、大地！』

異変に気付いたグラットリバーが声を張り上げた。ふら付く大地はもう一度吐血すると、静かに視線を腹部へと落とす。そこに何か光るのが見えた。

「うつ……。何故……。ぐふっ」

『大地！ 確り　ッ！』

大地の両膝が地に落ち、同時にグラットリバーにも異変が起こる。右手の水晶に亀裂が走り、グラットリバーの意識が薄れていく。

『クツ……。ソツ……。俺はまだ……』

大地の体を包んでいた漆黒の鎧が一瞬で砕け、大地の体が地面に平伏す。その背中に深々と刺さるのはあの大鎌だった。

静かに地上へと降り立った優花は、平伏す大地の前へと歩みを進め、

『無様だな。人間』

「だま……。れ……。優花に……。体を……。かえ……。せ……」

朦朧とする意識でそう言葉を返すと、僅かに笑い声が聞こえた。

『いいだろう。この体を返してやる。貴様の命に免じてな』

その言葉と同時に体から刃が抜かれた。血が流れ出るのを感じ、大地の意識は遠退いていく。遠退いていく意識の中で、声が聞こえた。優花の声だった。だが、それは悲鳴の様な泣き叫ぶ声だった。

## 第八十三話 癒し

爆風で巻き上がった土煙。

その衝撃の大きさを物語る様に、周囲の建物の壁が抉れていた。

瓦礫だけが山積みになり、建物は絶妙なバランスでその身を留めている。

静まり返ったその場に、緩やかに流れるそよ風が、土煙を薄めていく。亀裂の入った地面は衝撃で陥没していた。

瓦礫の上に佇む小さな少年風童は、周囲を見回しゆっくりと息を吐く。美しい金色の髪が頭を動かす度に優雅に揺れる。緑色の瞳が辺り一帯を隅々まで見渡す。周囲には全く人の気配がしない。吹き飛んだとは考え難い事から、逃げられたのだと判断した風童は、膨れっ面で背中から翼を広げる。

「ふざけやがって。人を最弱呼ばわりしといて、そそくさと逃げやがった。見つけたらポッコボコだ！」

翼が大きく空をかき突風を巻き上げながら、風童の体を空へと浮き上がらせる。上空へと舞い上がった風童はゆっくりと優しく翼で空をかきながら、周囲一帯を見回す。

建物の中に身を潜める円。

右肩に滲む鮮血。先程の風童が放った衝撃波から逃れる時に、吹き飛んできたガラス片が右肩に直撃した。ガラス片は抜いたが、それにより出血が止まらなくなっていた。

肩で息をする円は静かに瞼を閉じると、そのまま動かなくなった。傷の痛みを堪える為か、少しでも体力を回復する為か分からないが、ゆっくりと鼻から空気を吸い、潤んだ唇の間から静かに息が吐き出

される。その度にゆっくりと上下に動く胸に左手を乗せ、右手は力なく床に寝かされていた。

右耳で揺れ動く十字架のピアスの水晶が微かな光りを放ち、綺麗な女性の声が聞こえてくる。

「大丈夫？ まどちゃん」

「……………」

返答は無く、静かな呼吸だけが聞こえる。円のサポートアームズであるエディは、彼女の体を気遣い言葉を呑んだ。

円は風童に「五大鬼獣で最弱で自分より劣る」と宣言したが、実際に交戦して分かった。奴は圧倒的なまでに円より強い。動きの一つ一つがそう物語っていた。あの銃弾を全て止め、終いには円の得意とする双剣の太刀を、掠る事無くかわして見せた。

円とて弱いわけじゃない。これまでも、あの双剣の太刀で幾度と無く鬼獣を倒してきた。それを簡単に。円にとっては屈辱だったのかも知れない。絶対の自信を持っていたからこそ、その太刀を全てかわされたと言っるのは。

静かに聞こえる円の吐息が止まり、瞼が開かれた。外から聞こえる瓦礫を踏み締める音に、緊張が走る。息を呑む円は、ゆっくりと立ち上がり物陰へと身を潜めた。

「エディ。モード銃」

「分かったわ」

静かにそう答えたエディが光りを放ち、円の両手に真っ白な銃が現れる。グリップを握り締め、トリガーに指を掛けた。右手は血で染まり指先からポトリと赤い雫が落ちる。

瓦礫が崩れ微かな足音が耳に届く。グリップを握る手に力が入り、口の中が極度の緊張で乾いていた。右手の人差し指が震えているの

に、円は気付いた。死への恐怖からか、ただ単に血を流しすぎたからか分からないが、自分自身を落ち着かせる為に、深く息を吸い込み、ゆっくりと吐く。少しだけ落ち着いたのか、指の震えが止まると同時に足音も止まった。

静寂がその場を包み込む。穏やかな風が崩れた壁の穴から入り込んだ。

どれ位続いたか分からない静寂を、瓦礫を踏み締める音が破った。ガラス片を踏んだのか、パキッと何かの割れる音が聞こえる。その音が徐々に近付き、円は物陰から飛び出し銃口を向けた。

と、同時に彩の声が響く。

「ワツ！　ちょ、ちよつとまっ　　！」

間の抜けた彩の声に、じと目を向ける円は、静かに銃を下ろし深いため息を吐いた。それから、安心したのか、ゆっくりと腰を下ろし銃を床へと置いた。だが、すぐに鋭い眼差しを彩の方へと向けると、棘のある声で言う。

「あんた、何でここにいる」

「何でって、そりゃねえ」

笑顔で返答する彩に対し、冷たい視線を向ける円は、左手に持った銃の先を彩に向ける。

「いい。あんたじゃ足手まとい。大体、その役立たずのサポートアイテムで何が出来るって言うの？」

『だ、誰が、役立たずですか！』

「お前だ。お前」

「って、ウイנקロードをバカにしないでよ！」

「じゃあ、あんたが役立たずだ！　とつとつここから離れる！」

「うるさい！ 何であんたに命令されなきゃいけないのよ！ 私が何処に居ようと私の勝手でしょ！」

声を荒げる二人に対し、エディが小さなため息を漏らし、静かに言葉を挟む。

『こんな事ややってる場合じゃないでしょ？ 彩ちゃん。お願い。まどちゃんの傷を見てあげて』

「え、エディ。何勝手な事」

『勝手な事じゃないわ。その傷じゃあまともに戦えないでしょ？』  
「う、うるさい。こんな傷程度で、あんな奴に遅れは取らない」

強気に答える円は、立ち上がり自信満々に腕を組んでみせる。だが、すぐに肩に痛みが走り、表情を歪めた。

呆れた様に息を吐く彩は、目を細め静かに言う。

「傷、見てあげる」

「べ、別に見なくていいって言ってる」

口調がいつもより早く、慌てているのが分かる程だった。素直じゃないのだ。

静かにため息を漏らす彩とエディ。こんな時位素直になれば良いのに、と彩は密かに思いつつ具現化したウィンクロードを翳す。

「傷見せないなら、そのままやっちゃうけどいいよね？」

『ええ。構わないわ。やっちゃって』

「ちよ、ちよっと！ 勝手に話を進めないで！」

円まどかの言葉を見捨てる様に、彩が言葉を続ける。

「あーっ。でも、私水属性の呪文は使わないって決めてるんだけど……」  
「だったら、傷を見せるとか言うな。大体、あんたに何が」  
「まあ、同期のよしみだし、特別に今日はその決まりを解禁して見せよう」

ニコツと笑みを浮かべる彩。その顔を睨む円は、まどか仏頂面で口を尖らせ文句を言う。

「言っておくけど、傷を治してもあたしのあんたに対する評価は変わらないし、これを貸した何て思わない事よ」

「分かってる。それに、悔しいけどアイツと対等に戦えるのは円まどかだけだと思っし、私に出来るのはこれ位だから」

「な、何、急に、その」

突然の事に戸惑う。正直、彩がこんな事を言う何て思ってもいなかった。育成生時代から彩の事を知っているが、当時はこんな風の人に頼る事など無かった。あの当時は色々あったから、周りの人を信じられたかったと、言う事もあるのだろうが、この変わり様には驚くしかなかった。

そんな円を尻目に、呼吸を整える彩は、静かに力を集中する。背丈程の大きな杖を胸の前に抱き、瞼を閉じゆっくりと唇が動き出す。

「水は 全てを癒す。零れる水滴は、優しく暖か」

彩の足元に青白い光りが生じ、杖の頭に付いた水晶までも青白い光りを放つ。風も無いのに舞い上がる彩の髪。まるで水中にいるかの様に、髪が広がっていく。

そして、彩の周りに球体の青白い光りがポツポツを現れ、その場を眩く照らす。

神秘的なその光景に、思わず息を呑む円とエディ。武明もこの程度の呪文は使えるが、それとは全く次元の違うまるで最上位の術を見ている様な気分だった。

周囲に集まる青白い球体が徐々に一つに纏り、圧縮され小さな粒が円の頭上へと出来上がった。すると、彩の瞼が静かに開かれ、唇が僅かに動く。

「 滴れよ。蓮の葉の雫 」

その声に反応する様に、円の頭上へと出来上がった小さな光りの粒が、雫が落ちるかの様に円の頭へと滴れた。



## 第八十四話 プランA

「ハア…ハア……。これが、最後の一本と……」

地面へと一本の杭を打ち付け、額に溢れる汗を拭う。奇抜な服装とサングラス姿の武明は、小さく息を吐き周囲を確認する。風童の気配は無い。

安心した様に胸を撫で下ろす武明は、ふと空を見上げ息を呑む。

「みい〜つけた」

幼く気味の悪い声と共に、地面へと押し付ける様に風圧が武明の体を襲った。

「ぐああああっ」

「クスクス。もっと苦しめよ」

更に風圧を強める。地面は風圧で陥没して行き亀裂が無数に広がる。地面へと押し付けられ、武明の体からは血が滲む。呼吸が苦しく、意識が遠退く。薄れ行く意識の中、右手の中指と親指を力一杯に擦れ合わせた。パチンと微かな音が聞こえ、風童に向って火柱が上がる。

突然の事に思わず風を止め、その場から離れるが、その動きを止める様に更に斜め下から火柱が上がる。計算された様に風童の左翼を直撃した。

「クツ！ 直撃！」

表情を僅かに引き攣らせながら、風童の体は地上へと落ちた。

風圧から解き放たれた武明は、荒々しく呼吸を繰り返し、ようやく体を起す。体中がズキズキと痛む。

「ゲホツ、ゲホツ……。やばっゲホツ、かった」

何度か咳を繰り返して、周囲を見回す。火柱はもう収まっているが、風童の姿見当たらない。どこかに隠れていると、言う事は無いだろう。そもそも隠れる理由が無い。あの強さなら不意打ちをしなくても十分な実力があるからだ。

ひび割れたサングラスを捨て、おぼつかない足取りでその場を立ち去る。この場に居るのは危険だと判断したのだ。これでも数多くの修羅場は潜ってきた武明だが、これ程身の危険を感じたのは初めてだった。死さえ、脳裏に浮かぶ程だ。

「ヤベエ……。マジ、死ぬかもな……」

不意にそんな事を呟きながら、崩れかけの壁を伝ってゆっくりとだが足を進める。早く円まどかと合流しなければならぬが、あの様子を見る限り風童にやられた可能性が脳裏に過り、この後の事を少なからず考えた。考えたが結局打開策など無く、逆に最悪な結果ばかりが浮かび上がる。

足を止め小さく息を吐き出し、その場に座り込む。深く息を吸い込み、心を静める様に息を吐いた。

「どうすりゃいいんだ。俺等より格上の奴だっただけ消されてるんだぞ……。そんな奴にどうやって……」

頭を抱える武明は、もう一度空を見上げた。

「どうするつもりだよ。円まどか」

ボソツとそう呟き視線を足元に落とすと、聞き覚えのある声が耳に届く。

「なっ、何であんたまで怪我してんのよ！」

杖を持った彩の姿を目視し、武明は安堵の息を吐いた。とりあえず、一人ではないと言う事が、少しでも冷静さを取り戻させる。落ち着いた事により、武明の口調も少しだけ乱暴になった。

「うるせえな。お前みたいに、逃げ回ってたわけじゃねえんだよ」

「誰が逃げ回ってるって？」

「おめえだ、おめえ」

「あんたね……。口だけは達者ね。つてか、サングラスはどうしたわけ？ そのキラキラの澄んだ目を私に向けないで」

「うるせえ。好きでこんな目をしてんじゃねえんだから」

視線を外し瞼を閉じる。武明は自分の目が嫌いだった。この目の事で幼い時に色々あったからだ。だから、普段はサングラスで目が見えない様にしている。こんな乱暴な口調なもの、この目を隠すサングラスに合わせて、そうしているだけだった。

無然とする彩は、杖を翳し静かに唇を動かす。

「水は 全てを」

「待て待て。てめえの力を借りなくても、それ位の術は使えるんだよ」

「ムツ 。何よ。人が親切に」

「うつせえ。大体、てめえは無駄が多いんだよ。毎度毎度言うがな、水属性の呪文は」

「あーっ、もううるさい！ あんたが言いたい事は分かってるわよ。」

私だって、育成学校出てるんだから！」

怒声を響かす彩に対し、小さくため息を漏らす武明。同じ封術師だから分かる。水属性の呪文を使う時の彩の力配分が明らかにおかしい、と言う事に。一度、育成生時代に見たあの広範囲に広がる水の結晶が、今でもその脳裏に焼きついていた。

水属性は攻撃よりも治癒・防衛に特化した属性の為、どれだけ力を練り込んでも術者に危害は無い。ただ、その他の術は別だ。力配分を間違えれば命を落とす術だってある。一応、武明も彩の事を気遣っているのだ。

無然とする彩は、杖を下ろす。杖の頭に付いた水晶が青白い光りを放ち、ウインクロードが口を開く。

『あの……彩様。円殿まどかからの伝言は伝えなくてもよろしいのでしょうか？』

「ああ。そう言えば」

「おい！ お前等、円まどかに会ったのか？」

『ねえ、お姉ちゃんは無事なの？ どうなの？』

「って言うか、伝言で何だ？」

『今、何処にいるの？』

次々と繰り出される武明とセルフィの問いに、彩がキレた。

「うるさい！ そんないつぺんに答えられるか！ つうか、何でセルフィまで会話に加わってんのよ！」

『あたしだって、お姉ちゃんの事心配だもん！ っていうか、彩こそ何で役にたたないのに、お姉ちゃんと一緒だったのよ！』

「や、や」

『役に立たないとは何ですか！ さ、彩様は』

「うるせえ！ それより、伝言を言え！ 話が進まねえだろ！」

武明の一声で、ウインクロードとセルフィは黙り込んだ。心を静める様に深呼吸を二度、三度繰り返した武明は、真つ直ぐ彩の目を見据える。その澄んだ目が妙に気持ち悪く感じた彩は、怯えた様に「なによ」と、小さく呟き一步後退した。自分の目の事を思い出した武明は、目を隠す様に背を向け言葉を続ける。

「それで、伝言つて何だ？」

「とりあえず、それはウインクロードから説明させる」

「覚えてねえのかよ！ 相変わらず、物覚えが悪いな……」

背を向けたまま腕を組んでため息を吐く。自分自身のもの覚えの悪さを分かっている為、何も言い返せない彩は、ただ目尻を震わせ口元を引き攣らせていた。杖を握る手の感覚から、彩の怒りを察知したウインクロードは、僅かに声を震わせながら円まじかからの伝言を伝える。

『ま、円まじかからの伝言は、プランAを実行。合図があり次第行動を開始しろ、との事でした』

「プランA？ 何の事だ？」

「知らないわよ。あんたと円まじかの作戦じゃないの？」

『あたし達、プランとか立てた事無いよね』

セルフィの言葉に「ああ」と、答えた武明は渋い表情を見せた。何と無く円まじかの真意を理解した。それは、長くパートナーをしていたから分かる。円まじかは一人で風童と戦うつもりなのだ。奥歯を噛み締める武明は、小さく舌打ちをして彩の方へと視線を向けた。彩もその表情に事情を少なからず理解し、目の色を変え答える。

「円まじかと別れたのが、十分位前からまだそんなに遠くまで行って無

いと思う」

「行くぞ！ 間抜け！」

「ま、まま、間抜け！ あんた、それが人にモノを」

「急げ、バカ！」

「ば、バカって！」

怒りもあつたが、とりあえず状況を把握し言葉を呑んだ彩は、「こつち」と呟き走り出した。武明もそれに続き走り出す。出来れば、<sup>まだか</sup>円と風童が会つ前に合流できる事を、願いながら。

## 第八十五話 同期の三人

円の元へと向う彩と武明。

風童との再会だけは避けて欲しいと願う。

だが、既に。

「クスクス。次は逃がさない」

「逃げる気なんて無い」

両者は遭遇していた。

静かに流れる風が、二人の髪を撫でる。

鮮やかに揺れる腰まで届く群青の髪。耳の十字架のイヤリングが、金色の光りを放ち小さな手に双剣が現れる。美しい白刃を鮮やかな手並みで、ゆつくりと回す。刃を回す度に吹き抜ける風が、塵を巻き上げる。

幼さの残る顔に笑みが浮かび、金色の髪が足元から吹き上がる風により逆立つ。風は塵を巻き上げ風童の姿を隠す。

刹那、放たれる無数の斬撃。だが、白刃は何事も無いかの様に斬撃を受け流し、後方で爆音だけが響く。

「この程度の斬撃は受けなれている。何度放つても無駄だ」

「そう。じゃあさ、これはどう？」

風童の声が止むと同時に、突風が吹き抜けた。それは何でも無いただの風で、ただ円の長い髪を靡かせただけの様に見えた。だが、群青の髪の揺れが収まる頃、血飛沫が上がり円の手から白刃が落ちた。

「うつつ……何が……」

衣服が裂け、左脇腹と右肩から血が流れる。深い傷は、何か鋭利なモノで切りつけた様な傷だった。痛みには表情が歪み、膝が震える。右腕に力が入らず、左手の白刃を地面に突き立て体を支える。その光景に、風童が小さく笑う。

「クスクス。今の凄かったでしょ？ カマイタチって言うんだよ」  
「クツ……エディ。モード銃<sup>ガン</sup>」

エディは何も言わずその姿を銃へと変えた。真つ白な銃を左手に一丁持ち、真つ直ぐに銃口を向ける。風が止み、舞っていた塵が地上へと落ち、風童の姿が円の視界へと現れた。ブカブカの衣服に塵が付いているが、気にせずゆっくりと背中の翼を広げた。美しい両翼が風を掻き、風童の体を空へと持ち上げる。小柄な体は簡単に空へと浮き上がり、更に暴風を地上に吹き散らす。

「うぐっ……」

突風に煽られる円は、何とか両足を踏み込みその場に留まっている。だが、人一倍小柄な円の体は徐々に後退していく。いつ飛ばされてもおかしくない。

『まどちゃん。このままじゃあ  
「分かってる。今、何とかする」』

突風にブレる銃口を何とか風童の方へと向けた円は、引き金に掛かった指をゆっくりと引いた。銃声が雷鳴の様な轟音を奏で、空を閃光が駆ける。それからは一瞬だった。

周囲が眩い光りに包まれ、衝撃波が広がる。次々と建物が崩れる音が聞こえ、円の体は衝撃で吹き飛ばされた。気付いた時は、エデ



イの具現化が解け瓦礫に埋もれていた。

「エディ……」

『大丈夫。周囲に気配は無い』

「そう……。また……負けたの……」

悔しそうにそう延べ、拳を握った。相手が五大鬼獣とは言え、傷一つ付ける事が出来きなかった。自分の不甲斐無さに奥歯を噛み締めた。その思いを悟り、エディは何も言わなかった。

どれ位時が過ぎたのか分からない。ただ、体から血が抜けていくのだけは分かった。頭が朦朧とし、瞼が重い。感覚も麻痺して傷の痛みも感じない。流石にこれはヤバイと円も思ったのか、弱々しくエディの名を呼んだ。

「エディ……。死ぬわ」

『なっ、と、突然何を』

「何か、自分の体の事だから……良く分かる……」

「ってか、死なないわよ！ その程度で」

突然、彩の声が聞こえ瓦礫が崩れた。朦朧とする意識の中で、二つの顔が見える。一つは彩で間違いない。もう一つは、誰だ。ハッキリしない頭に、様々な人の顔が浮かぶ。だが、どれもその人物とは当てはならない。

頭の中が真っ白になり、遂に円が口を開く。

「お前……誰だ……」

その言葉が武明の胸にザクリと刺さり、「お、おまつ」と動揺を隠せない声を上げた。その声で、円もようやくその人物が武明と気付いたのか、僅かに口元に笑みを浮かべ、

「お前……サングラス……無いと……変だな」

「だ、誰が変だ！ 大体、プランAって何だよ！」

「兎に角……逃げる……だ」

「はあ〜っ。馬鹿馬鹿しい」

彩が頭を左右に振り、呆れた様にため息を吐く。そもそも、この閉鎖された空間では逃げ場などない。逃げ切れたとしても、何れにしろ探し出されて殺されてしまうだろう。それを考えると、逃げるという行為がどれ程無謀であるかな事なのかを、彩は円に力説した。しかし、ひん死の円にその言葉は届いておらず、ただうわ言の様に「分かった」とだけ答えていた。その間武明が一人静かに水属性の術で円の治療を行う。本当は彩がする方が早いのだが、現在彩も手が放せない。水の膜を周囲に張り、光りを屈折させ姿を隠す役割をしているからだ。彩の今の力で何処まで隠しきれているのかは不明だが、今の所風童に気付かれている様子は無い。

小さく息を吐く彩は、両手に握った杖の先を見据え、ボソリと呟く。

「ねえ。守は大丈夫かな？」

『私には何とも言えません。今出来るのは、無事を祈る位です』

「そうだよね……。でも、狼電も行ったつきり戻ってこないし……」

不安で落ち着かない。それでも、守の無事を信じ、自分を落ち着かせる様に深呼吸を繰り返す。いつの間にか、守をちゃんとしたパートナーとしてみていた。それは、色んな戦いがあつて、その都度守の背中を見てきたからだろう。彩自身がその事に気付いているかは、分からない。だが、ウインクロードは分かっていた。今の彩が守を必要としている事を。

ある程度円の傷が塞がった所で、武明が根を上げた。傷付いた状

態ではやはり体力の消耗が激しかったのだろう。息を荒げ激しく胸を上下させる。

「も、もうダメだ……」

『七割、八割がた治療は済んだけど……。まだちゃんと傷が塞がってないよ。お兄ちゃん』

「わ、わかつ、てる。でも、も、もつ……」

息切れ中の武明の言葉は聞き取り辛かった。その為、セルフィが『エツ？ 何』と、聞き返した。だが、返って来た言葉はやはり聞き取り辛く、セルフィは困った様に彩の方へと言葉を振る。

『ねえ、彩。お兄ちゃんが何て言ってるか分かる？』

「へっ？ 武明が？ さあ……。って、あんたの方が付き合い長いでしょ！」

『付き合いの問題じゃないのよ。全く、これだから理解力の無い人は』

「悪かったわね。理解力無くて！ そもそも、あんたの理解力が無いから、言葉も上手く聞き取れないでしょ！」

不服そうにそう述べる彩に対し、セルフィは甘えた様な声で、『あたしはいいの。だって、まだ子供だもん』と、軽い口調で言う。言葉を失う彩は、引き攣った笑みを浮かべる。

「ウィンクロード。あれって、どの位？」

『そ、そうですね。確か、私と同じ位かと』

コソコソと話す彩とウィンクロードに、セルフィの声が飛ぶ。

『そこ！ あたしの年齢について詮索しない！』

「だったら、素直に二百歳越えてますって言えればいいのに」

『ウインクロード。お前、役立たずの分際で!』

「あら。遂に本性がでちゃった?」

からかう様な口調の彩に、セルフィは『うるさい!』と一喝する。

『ヤクタターズがうるさいのよ! この出来損ない共め!』

と、暴言を吐き捨て、逃げる様に光りを失った。ぶつけ様の無い怒りだけが残され、彩は握った拳を武明の腹部へと突き立て、武明の「うっ」と言う短音の声だけが僅かに聞こえた。

## 第八十六話 雷鳴と火炎

静かな翼の羽ばたきと共に、青桜学園上空に一つの陰が現れる。白銀の羽の一枚一枚が美しく、不気味な輝きを見せていた。

不適な笑みを浮かべ、青桜学園を眺める陰は静かに「フフフツ」と笑い、ゆっくりと屋上へと降り立つ。金色の髪が揺れ、翼が弾ける様にして消えた。

「ここに、存在する」

『けど、まだ力が弱いわ』

「まだ、目覚めてないのだろう。まあ、力づくでも目覚めさせるけどね」

穏やかに笑みを浮かべる。だが、その笑みの裏に見え隠れする憎しみ。

周囲の騒がしさとは裏腹に、静まり返った青桜学園内。ここだけ何かを守られている。そんな感じさえする。亀裂の入った屋上の床を見つめ、不気味に笑う。

「ここに五大鬼獣も来てみたいだね。でも、あれの存在には気付かなかつた様だ」

『その様ですね』

「まあ、俺達以外が気付く事は無いさ。さあ、回収するぞ」

そう延べ、足を進める。青桜学園に在る何かを回収する為に。

地面が砕け、黒煙が上る。周囲に漂う焦げ臭い。地面を抉った跡が確りと残り、僅かに火の粉が周囲に散ばっていた。吹き抜ける風

が黒煙を払い、その中から一つの影をあらわにする。

弾ける雷撃。静かなる殺気が感じられる。

重々しく体を動かした火猿は、ただならぬ殺気に威嚇する様子を逆立てる。本能がそうさせたのだ。自分と同等か、それ以上の力を瞬間的に感じ取り、それがそうさせたのだろう。

全身の毛が炎と化し、火猿の体を炎が包む。鋭い眼差しだけを黒煙の向こうに居る人物へと向け、咆哮を轟かせた。衝撃が広がり、足元の地面が割れ、破片が飛ぶ。

その光景を見据え静かに笑う。そして、低く渋い声は火猿の咆哮の中でも、ハッキリとした声でその場に居た者の頭に入り込んだ。

「五大鬼獣が聞いて呆れるな」

「貴様……。低級鬼獣じゃねえな」

「何を言う。自分の目が信じられないのか？」

ジリツと右前足を前に出し、色鮮やかな青白い毛が美しく靡き、毛先で電撃が弾けた。赤黒い目がゆっくりと火猿の方へと向けられ、口元に僅かに笑みが浮かぶ。深い傷痕の残る体に、どれ程の雷を帯電しているのか分からないが、毛と言う毛が光りを放つ様に煌びやかに輝きだす。

地面に突き刺さるフロードスクウエアは、その眩い光りを以前にも記憶していた。いつ、どこで見たかは、ハッキリと覚えていないが、その美しい輝きと対峙し衝突した経験だけはハッキリと残っていた。

『な……。なんだ……。一体……』

困惑するフロードスクウエア。そんなフロードスクウエアの柄を弱々しくも握った守は、まだクラクラする頭を振り狼電の方へと目を向けた。鮮やかで美しい輝きを放つ狼電に目を奪われそうになる

が、それに絶え静かに口を開く。

「ハア…ハア……。ろっ……。でん……。お前」

「喋るな。今は体力の回復に専念しろ」

「分かってる……。でも」

「いいか、今の俺にコイツを倒す力は無い。かと言って、お前やその小娘をここで死なせるには惜しい。特にお前はな」

意味深な言葉を発する狼電は、静かに息を吐き出し、火猿を威嚇する様に牙をむき出しにする。その行為が僅かに火猿を後退りさせた。

右足を痛めたのか、歩き方がぎこちない守は、狼電の側まで足を進め、火猿の方へと目を向ける。激しく燃え上がる火猿の体から発せられる高温の熱が、その背後の風景を歪んでみせていた。桁違いの迫力に呑み込まれそうになる守は、ギリギリの位置で自我を保つ。これ以上踏み込めば、狼電と火猿の放つ重圧に押し潰されてしまうと、本能的に感じていたのだろう。

何とか冷静さと判断力を保っている守は、背後に倒れる愛まなに目を向ける。意識を失ったままだ。外傷は無いが、これ以上この場に居させるのは危険だ、と判断し、奥歯を噛み締める。その守の気持ちを悟った様に狼電は低音の声を発する。

「俺が奴の気を逸らしてやる。その間に、あの小娘を連れてここを離れる」

「な、何言ってるんですか！ それじゃあ」

「俺は一度契約した。契約者を守る事が、契約した鬼獣のあり方だ」  
「それは残念です。俺は、あなたの契約者じゃない」

気持ちは裏腹に強気な言葉を吐く。精一杯強がって見せるが、狼電は変わらぬ口調で告げる。

「策はある。奴を倒す事は出来無いが、深手を負わす事は可能だ」  
「可能性があるならやりますけど……。俺は思っんです。そこまで期待されても」

「お前、気づいて無いのか……。まあいい。それより、早くここを離れる。巻き添え食らって死ぬぞ」

何処か余裕のある笑みを浮かべて見せた狼電は、「行け」と守を鼓舞し、地を蹴る。地面が砕け、青白い閃光と残像を残す。残像はすぐに消え、雷鳴が轟き衝撃が爆音と共に広がった。土煙が舞い、火猿の姿が見えなくなる。これで、火猿の視野は完全に守と愛を見失った。

咆哮と爆音、地響きが重なりあう。狼電が火猿と激しくぶつかり合っている　と、言う感じではなく、火猿が一人で暴れている様に感じる。その証拠に、雷鳴はあれ以来聞こえてこない。

狼電が作ったこの状況に感謝し、守は右足を引き摺りながら愛を抱えその場を去った。とりあえず、安全な場所に愛を連れて行く事だけを考えていると、何処からか声がする。

『ごめんなさい。あなたにまで迷惑を掛けてしまってます』

その声が彼女のサポートアームズの物であると、すぐに気付いた守は、穏やかに微笑み返答する。

「気にしないで下さい。俺は迷惑だ何て思ってますんから」  
『優しくすると、付け上がるぞ』

ようやく口を開いたフロードスクウェア。冷静さを取り戻したのか、フロードスクウェアはいつもと変わらぬ口調で更に言葉を続ける。



『それよりもだ。アイツの策は成功するとおもうのか？』

「成功させる。それしか方法が無いんですから」

『前向きなのは良いが、その足でまともに動けるのか？』

「動ける動けないの問題じゃないんです。無理にでも動かしますよ」

守の言葉に終始呆れるフロードスクウェアは、大きなため息と共に言葉を吐く。

『お前はバカか？』

「な、何だよ。急にバカ呼ばわりして……」

『言いたい事は分かります。愛ちゃんの事よね』

『そうだ。この娘は、幸い封術師だ。それに、水属性も持っている様だからな』

「それが、一体どうしたって言うんですか？」

小首を傾げる守は右足を引き摺りながら、ゆっくりと階段を下る。

一方、呆れた様にもう一度ため息を吐くフロードスクウェア。幾ら育成学校に通っていなかったとは言え、ここまで属性の事を知らないとは思っていなかったのだろう。そもそも、属性を知る事が、ガーディアンとしても封術師としても基礎中の基礎になっている。

今の守は基礎を飛ばして実践に出ているが、良く今まで鬼獣と戦ってこれたものだ。今まで生きてこれた事を不思議に思いながら、フロードスクウェアはもう一度深々とため息を吐いた。

愛のサポートアームズであるセイラは小さく笑う。その声はフロードスクウェアにも、守にも聞こえていなかったが、愛のもう一つのサポートアームズがそれに気付き声を掛ける。

『どうかした？ セイラ』

『いえ。少し昔の事を思い出して』

『昔の事？』

『ええ』

含み笑いをするセイラに対し、僅かながら不服そうなヴィリーが、  
『よくわかんない』と子供っぽく言い、そのまま黙り込んだ。

先程まで笑っていたセイラだったが、すぐに声色を変えヴィリー  
に問う。

『愛ちゃんは大丈夫？』

『平気だよ。もう随分落ち着いたみたい』

『そう。良かったわ。それで、どれ位で目を覚ましそう？』

『そんな事僕に聞かれても……』

困った様にそう述べるヴィリーは、今にも泣き出しそうな声だった。その為、セイラもそこまで強く言う事が出来なかった。そんなセイラに、ヴィリーは告げる。何か強い気配がこちらに向ってきて居る事を。

## 第八十七話 蒼い炎

爆炎が土煙を払う。

燃え上がる木々を背に、火猿が右腕をかざす。炎弾が手の平に構成される。轟々しい音が空気を焼き、酸素を吸収し更に巨大に膨れ上がっていく。不適な笑みを浮かべ、狼電を見据える。

表情を変えず、小さく息を吐く狼電は足に雷撃を纏う。これが、先程の高速移動のタネだった。迸る雷撃が地を砕き、狼電の姿が一瞬で火猿の視界から消える。またしても残像だけが残されていた。感覚を研ぎ澄ます火猿。それが野生的本能だったが、それより先に閃光が空を裂き、落雷が火猿を襲った。

「グツ……………」

表情を僅かに強張らせ、火猿の右膝が地に落ちる。落雷を受け体に電流を帯びていた。後方に佇む狼電は、膝を付く火猿に目を向けたまま、近づく気配を警戒する。狼電の推測からその力は水属性。しかも、五大鬼獣である火猿と同等と見て、それが水嬌であると判断する。足元で雷撃が迸り、視線は真つ直ぐ火猿だけを見据えていた。

痺れる体を動かし狼電の方へと眼差しを向ける。口からむき出しの二本の牙から唾液を滴らせ、右手で地面を砕く。

「貴様……………。それ程の力を持っていながら、何故奴等に手を貸す……………」

狼電は返答しないまま、静かに口から息を吐く。周囲の草木が風に揺れ、時を刻む様に一つの足音が背後に迫る。言うまでも無い。水嬌の到着だ。火猿・水嬌の両者を相手にすれば、分が悪いのは目

に見えていたが、狼電はあくまで強気な姿勢で口を開く。

「水嬌まで居る……と言う事は、他のも五大鬼獣と見ていいのだな」

何も言わず水嬌が頷く。気配の大きさと数から、既に分かっていた事だったが、突如現れたもう一つの気配により、その確信も不確かなものとなってしまった。それは、あまりにも大きすぎる力で、明らかに五大鬼獣を上回るものだったからだ。

だが、水嬌の先程の行動で、この中に五大鬼獣が揃っていると云う確信を得て、不気味な笑いを発する。

「ククククツ……。どうしてだろうな……。貴様等が揃う時は必ずろくでもない事が起きる」

「それは、私も同感です。五大鬼獣が集まれば、必ずそこに災いが訪れる。遠い昔から言われてきた事です」

「なら、何故集まった？ 昔の様な事を引き起こすのか？ 多くの同胞と大勢の無関係な人の命を奪ったあの悲劇を……」

狼電の表情に僅かに陰り、鼻筋にシワを寄せる。背後に佇む水嬌に、その表情を読み取る事は出来ないが、どの様な顔をしているかは手に取る様に分かる。水嬌も狼電と同じ気持ちだったからだ。

鬼獣とて、皆が皆人を殺すわけではない。ほんの一部の鬼獣が人を襲い、それが結果として他の鬼獣を巻き込み、多くの封術師やガーディアンに狙われる。平和に暮らしたい。それだけを望む鬼獣は多く、水嬌もその一人だった。

暗い表情を浮かべる二人に対し、腹の底から笑い声を吐き出す火猿。口元から吹き出る白煙が、彼の体内に眠る炎を呼び覚ます。

「クハハハッ！ ふざけた事を抜かせ！ 全ては奴等が 封術師とガーディアンが招いた悲劇！ それを、五大鬼獣が集まったか

らだと！ よくそんな事を抜かす」

怒りと憎しみが混ざり合い、火猿の体から熱気が溢れる。怒りこそが火猿の力。憎しみこそが火猿の本当の力を引き出す起爆剤。全てが作用し、今日覚める。いや、本来の火猿の姿を取り戻す。轟々しい炎が青白く変化し、火猿を蒼き炎が包み込む。その姿は火の魔人 いや、業火の魔人と言うべきだろう。

ただならぬ殺気に、狼電は本能的に危険を察知たのか、雷火の如く火猿から距離を取る。水嬌も同じ様に火猿から距離を取り、その禍々しい姿を真つ直ぐに見据えた。

「どうやら完全に目を覚ました様ですね。もう止められませんか」  
「惨劇を繰り返すか……。それもまた運命か……」

ため息混じりで呟く狼電。その目は何を思っているのか、儚げに火猿を見据える。

燃える業火。全てを焼き払うだろう。街も、人も、鬼獣も、何もかもを。その炎に触れれば、全てが灰になる。そう分かっている、逃れる術が無い。

静かに目を伏せ、考え込む様に頭を項垂れる。電撃が一つ、また一つと弾け、狼電を青白く眩い光りがもう一度包み込んだ。赤黒い瞳が真つ直ぐに火猿を見据え、地を雷撃が破壊する。

「何をするつもりか予測は出来ませんが、一応聞いておきます。何を  
するつもりです？」

「全てを奴にぶつける」

予測していた言葉だったが、それを聞くとやはり自然とため息が零れた。と、同時に笑ってしまう。

訝しげに視線を向ける狼電は、小さく鼻で笑い低い声で言う。

「笑っている場合か？ 言っておくが、貴様の力も貸してもらおう」

「……残念だけど、それは出来ない」

「当然の返答だな」

「分かっていて、その言葉を言った真意を聞かせてもらいたいです」

やや不服そうに眉毛を吊り上げる。そんな水嬌に、僅かに口を動かす狼電。声は出ていなかったが、狼電の言葉は水嬌にハッキリと伝わった。

目の色を変え、右手から水が溢れる。だが、その水は手の平から零れる事無く、綺麗な球体を形成していく。球体の水を胸元に運び、更に両手で力を加える。加速的に膨らむ球体は、ものの数秒で水嬌を包むほどの大きさへと変わった。

「これ位でいいですね」

「流石は五大鬼獣。それ位朝飯前と言うわけだな」

「貴方にそう言われると、何だか嫌味に聞こえるのは何故ですか」

「俺は純粹に褒めただけだ。そう聞こえるのは、貴様が素直じゃないからじゃないのか？」

狼電の体から更に電撃が放出され、線香花火の様にバチバチと稲妻が弾けあつた。

二人の会話の最中、息を吐いた火猿が太い脚を一步前進させた。

重々しい一步に、地面が砕け亀裂が走る。吐き出された息は高温の熱気を帯、周囲の温度との差から白煙へと変わっていた。鼻筋に出来たシワ。怒り狂った目。完全に我を忘れている。

火属性の鬼獣には良くありがちな状況だが、火猿の場合は別格だ。普段の力から一気に跳ね上がる。未だ嘗てあの蒼い炎を纏った鬼獣は居らず、それ故に火猿は現在五大鬼獣に君臨して居る事になる。その力が例え不安定なものだとしても。

動き出した火猿に注意を払いながら、狼電は身を低く構える。爪は確りと地面を噛み締め、いつでもスタートが切れる状態だった。全ての準備が整い、後は合図を待つだけ。その合図を出すのは他でもない火猿自身。そうとは知らず、静かに開かれた口から熱風と共に咆哮が轟く。

「グオオオオオッ！」

「水嬌！」

「はい！」

咆哮とほぼ同時だった。地を蹴った火猿が二人の間合いに一瞬で入り、水嬌の作り出した球体の水が火猿を包む。だが、火猿の纏う蒼い炎が全てを消し去り、右拳が振りぬかれた。

爆音と突風が吹き荒れ、瓦礫が宙を舞う。いつの間に離れたのか、火猿の間合いから逃れる狼電と水嬌。顔色一つ変えない二人に対し、火猿は静かに地面に刺さった右拳を持ち上げる。蒸発した水が火猿の周囲に水蒸気となり張り巡らされ、白い湯気が火猿の視界を僅かに狭めていた。

「私の役目は果たしました。後は任せます」

「ああ。すまなかつたな。五大鬼獣同士で」

「関係ない。私は静かに暮らしたい。それだけです」

それだけ述べ、水嬌は階段を足軽に下っていく。その背中を見送った狼電は、視線を火猿の方へと戻し、静かに口を動かした。その声は誰にも届かず、発した雷光が火猿を包む水蒸気を糧とし、暴発する様に轟音と雷火を周囲に広げた。

## 第八十七話 蒼い炎（後書き）

更新が滞り、すいません。

毎度毎度、本当に申し訳ありません。長い目で気長に待っていた  
だけると、ありがたいです。これからも、よろしくお願いします。



## 第八十八話 守と愛と

眩い光りと轟々しい雷鳴。

その後、一瞬静寂が生まれる。静寂と言うより間が空いたと言わべきなのだろうが、その一瞬が近くに居た守に長く感じた。まるで時が止まった様にも感じた。

だが、時は動き出す。豪快な爆音と衝撃、粉々の土屑を周囲へと広げながら。

目の前を飛び交う様々な塵がスローに映る。その中に一つの影が見えた。それは、美しく煌びやかな銀髪を揺らす、少し大人びた少女の様な顔付きの女性だった。一瞬目を疑う守は「エツ」と、小さく声を上げ右手で目を擦る。だが、それは錯覚ではなく、間違いなく綺麗な女性だった。

「エツ、エツ、エエエツ！」

驚き声を上げる守はその女性を、咄嗟に受け止め様と両手を広げた。その時、小さく「あつ」と、女性が声を上げ、守の顔面に右膝が減り込んだ。重心が後方へと傾き、守の体が仰向けに倒された。

『ま、守！ 大丈夫か！』

「はうっっ……だ……い……」

そこまで言っ守は力尽きた。鼻から血を流して。

意識を失い数分、守が目を覚ますと銀色の髪を垂らした女性が、顔を覗き込んでいた。何かを言おうと思うが、あまりに顔が近過ぎて頭が働かない。逆に恥ずかしさに顔が真っ赤に染まる。

慌てて口をパクパクしていると、女性の潤んだ唇から吐息が漏れ、か細い声が耳に届いた。

「貴方が火野守……ですね？」

「あ、あの、その……」

「どうかしましたか？ 顔が赤いようですが」

『顔が近いんだよ』

守の変わりにフロードスクウェアがそう言うと、女性は「そうですか」と呟き顔を離す。上半身を起き上がらせ、心を静める様に深く息を吐き出す。女性にあそこまで顔を接近させられたのは初めてで、心臓が鼓動を早めていた。

うるたえる守を見据える女性は、不思議そうに小首を傾げる。何故、守があんなにうるたえているのか、分からなかったからだ。

女性に背を向けたまま、深呼吸を続ける守は、胸元で揺れる剣のネットクレスを握り小さな声で言う。

「ま、まずいですよ！ この人 じゃない。彼女、五大鬼獣ですよ！」

『何だ。気付いてたのか。お前にしては珍しいな。何か感じたのか？』

「感じたつてもんじゃないですよ！ やばいですって！」

やけに興奮気味の守。あの女性から何かを感じ取った様だ。その成長に僅かながら喜びを感じるフロードスクウェアだったが、それとは裏腹に守が両手をジタバタとさせながら何やら意味不明な言葉を発していた。

「あ の が で 」

わけの分からない言葉を発し続ける守。何かを伝え様としている様だが、イマイチフロードスクウェアには伝わっていないかった。

様子を窺っている女性は、守の行動をジツと見つめ、時折悩ましい吐息を漏らす。その吐息が、更に守を追い詰めていく。

そんな守に代わり、落ち着いた口調でフロードスクウェアが口を開いた。

『それで、どういっつもりだ？』

「なんです？ その突然の物言いは」

わけが分からないと言う感じで首を左右に振った。全く戦意を感じさせない彼女に対し、強い警戒心を向けるフロードスクウェア。幾ら戦意をみせないからと言って、油断するわけには行かないのだ。パートナーを危険から護る事も、サポートアームズとしての使命だからだ。

フロードスクウェアの放つ強い殺気に、女性はもの悲しげな瞳を向ける。その目がフロードスクウェアに訴えかける。『何故、敵意を向けるのか』と。

沈黙する両者。そこで、ようやく守がちゃんとした言葉を発した。

「す、すいませんでした！」

突然の土下座。それは、とても素早く綺麗な土下座だった。呆気に取られるフロードスクウェアは言葉を失い、女性の方は微かながら戸惑っている様だったが、すぐに小首を傾げ怪訝そうに問う。

「何故、謝るのですか？」

「そ、それは……その　そう！　取り乱してしまって！」

『何だそれりゃ……。まあいい。とりあえず、話をしろ。戦意が無いと言っ事は、何か話があるのだから？』

守の馬鹿さ加減にいつものフロードスクウェアらしく、そう述べ

る。コクリと僅かに頷く女性は、小さく息を吐いてからゆっくりと言葉を選ぶように語りだす。

「貴方はアレを知っていますか？」

アレと問われ首を傾げる。それが、普通の反応だった。もちろん、フロードスクウェアも何の事だかさッパリ分かって居らず、苛立った声で、

『話をする気があるのか？』

「ええ。そのつもりです」

相変わらず考えの読めない表情。それでも、時折見せる人間の様な穏やかな目が、守を真っ直ぐに見据える。

その瞳を見据え、ふと何かを思い出し、腕を組み考え込む。静かな時間が過ぎ、守の唸り声だけが聞こえる。フロードスクウェアはこんな時の守の勘の鋭さを知っているから、女性の方はフロードスクウェアの適合者である守の力量を見定める為。理由は様々だが、取る行動は一つ。見守るだけだった。

と、そこで草がざわめき、同時にフロードスクウェアが具現化される。切っ先が女性の顔の横を過ぎ、冷気が銀髪の髪を撫でた。刃が僅かに凍り付き、『冷たいだろ！』とフロードスクウェアが声を上げるが、それを無視して女性の視線が、自分に向かって敵意を向ける相手へと向けられた。

「ハア…ハア……。クツ……。なんで……。なんで……」

苦しそくに呼吸をする愛が、鋭い眼差しを守に向ける。右手に握られた蒼い銃から煙硝が上がり、右目が青白い光りを纏う。

『邪魔すんじゃねえよ』

幼い子供の声が聞こえ、愛の右目の光りが消える。

穏やかな笑みを向ける守は、フロードスクウェアの具現化を解く。それは敵意が無いと言ふ事を証明する為に行つた行為だったが、愛にはそう見えなつた。

「フツ……フフフツ……。私じゃ相手にならないって言いたいわけ……」

「いや、そうじゃなくてですね」

「なら、具現化しなさい。そして、ソイツを護ればいいじゃない！」

銃声が轟き、銃口から弾丸が放たれた。弾丸は真つ直ぐに女性の額に向うが、女性は全く反応を示さない。気付いていないわけじゃない。むしろ、気付いているからこそ、その場を動かずただ愛を見据える。

全てが静まり返り、氷が碎ける音と共に血飛沫が舞う。血が凍り、結晶となり地面に散乱していた。

呼吸を荒げる愛は奥歯を噛み締め、怒りに満ちた目を真つ直ぐに向ける。その矛先は女性の前に立つ守にだった。左脇腹から出血したのか、衣服に血液が染み出していた。服の裾は凍りつき、流れる血がそれを溶かして地上へ落ちる。

苦痛に表情を歪める守は、右手で傷口を押さえながらも、穏やかに笑みを見せ様と、無理に笑い愛に言葉を投げかける。

「て、敵意は……ないんですよ……。まずは……話を聞きま……しよ」

その守の態度が愛には不快だったのか、更に目付きが鋭くなり、右手に握つた銃の銃口に青白い光りを集める。

「鬼獣なんか庇って……。それで、私が諦めるとでも思うわけ？  
馬鹿じゃねえの」

今にも引き金を引いてしまいそうな勢いの愛に、守は苦悶の表情を浮かべる。

『どうするつもりだ？ 次のはやバそうだぞ』

「分かってますよ。でも……」

「私なら大丈夫です。貴方に庇ってもらわなくても」

女性がそう述べると、守が僅かに笑った気がした。それに首を傾げる女性に対し、フロードスクウエアの声が聞こえる。

『別にお前の為にやってるんじゃない』

「それじゃあ、何の為に？」

『あの娘の為だろ？』

「気付いてたんですか？」

『コイツの勘と判断力は他の誰よりも優れている』

自慢話をする様なフロードスクウエアに対し、呆れた様のため息を漏らした女性は、静かに呟く。「勘ですか？」と。その言葉にフロードスクウエアも『ああ。勘だ』と恥ずかしそうに答えた。

## 第八十九話 素直に

白い息が吐き出され、赤い雫が指先から落ちる。

向かい合う守と愛の間に流れる沈黙と風。穏やかに揺れる両者の髪。右手に握られた蒼い銃の先に集まる青白い光が、銃口へと圧縮されていく。

手が微かに震える。それでも、銃口を真つ直ぐに守の方へと向け、引き金に掛かった指に力が入る。

苦痛に歪む表情とは裏腹に、守の思考は至つて冷静だった。ガーディアンになつてからの多くの経験から、この程度の傷程度で戸惑う程やわな思考回路ではないのだ。

フルに活動する守の思考回路は次々と現状を打ち出していく。相手の状況、自分の状況、周りの状況。全てが頭の中で分析され、事細かく情報を纏めていく。

(現状は最悪。傷は浅い。しかし、争いは避けたい)

頭の中で次々と言葉を重ね、忙しくこの場を収める策を並べていくが、どれもシュミレーションの結果却下されていく。

最初に出された策は『気を逸らす』と言う策だったが、彼女の気を逸らす事が出来ずあえなく銃撃を直撃。次に出された策は『とりあえず突っ込む』だ。一見無策の様に見せて不意を突く。などと考えたがやはりあつちが一枚上手であえなく発砲。その次がと、次々にシュミレーションの中の守は愛によって倒されていく。

それは、あくまで守の脳内でのデータを基に行ったもので、実際にやれば成功するかも知れない。だが、やれば成功するじゃダメなのだ。今ここで愛と敵対するわけには行かないし、守自身もこれ以上の傷を負うわけには行かない。

意を決した守は考えるのをやめた。こう言う場合、ゴチャゴチャ

と考えるよりも直感で動く方が、良い結果が生まれる可能性が高い。そう考えたからだ。

小さく息を吸い、大きく吐く。神経を研ぎ澄まし、真っ直ぐ見据えた愛に静かに言葉を語る。

「キミは何故戦うんです。鬼獣が敵だからですか？ それとも  
「うるせえ！ 黙れ！ 今すぐ、その口を塞いでやろうか！」

突然声色が変わる。だが、これが本来の愛の口調なのだろう。その口から次々と吐き出される言葉は、刺々しく毒ついた敵意の現れた言葉ばかりだった。

「てめえが鬼獣をどう思おうが勝手だ！ だが、それをウチ等にまで押し付けんじゃねえ！」

「別にそんな風に思ってるわけじゃない。ただ、鬼獣の中には平和に暮らしたい鬼獣だって」

「うっせえ！ それが、押し付けてるって言うんだよ！ 鬼獣が平和に暮らしたい？ フザケルな！ アイツと同じ様な事言いやがって、なめんなボケ！」

奥歯を噛み締める愛の手に力が込められた。引き金が引かれる。そう思った瞬間、何処から風を切る音が聞こえた。それに気付いたのは守だけではなく、水嬌もフロードスクウェアも瞬時に声を上げる。

「危ない！」  
『守』

二人の声が重なると同時に、守の手にフロードスクウェアが具現化される。片手で持つには不釣り合いなその大きな剣を、左手だけで



構え腰を落とす。と、同時に水嬌が右手を空へと翳した。その行動にすぐに愛が身構える。だが、それも無駄に終わった。何が起るわけでもなく、水嬌が手を下げたからだ。

周囲に変化は無く、水嬌が何を行ったのか守と愛には分からない。しかし、サポートアームズであるフロードスクウェア、セイラ、ヴィリーの三人はすぐに異変に気付く。

『お前』

『姫！ 周囲に水の膜が！』

「退路を断とうつてか……。いいぜ。やってやろうじゃねえか」

愛の目が水嬌へと向けられ、圧縮された蒼い光が遂に放たれた。それと同時に地を駆けた守。冷気を放つその弾丸へと、自ら迫り刃を一闪。爆音が僅かな間を空け轟き、守の体が宙へと投げ出された。その手から弾かれた大剣が大きく弧を描き、愛の右横へと突き刺さる。

呼吸を荒げる愛は戸惑っていた。守が自ら弾丸へと突っ込んできたからだ。

そんな愛に、横から声が投げかけられる。

『不思議そうだな』

地面に突き刺さったフロードスクウェアだ。具現化されたままのフロードスクウェアに目を向ける愛は、持っていた銃を下ろし空を見上げて瞼を閉じる。今の気持ちを抑える為に行ったその行動に、フロードスクウェアは更に言葉を続けた。

『そろそろ来るぞ。衝撃に備える』

フロードスクウェアの言葉に「エッ？」と間の抜けた返答をして

気付く。風を切る音に。何かが来る。そう思った時には飛沫の飛ぶ音と共に、衝撃が襲う。地面に突き刺さったフロードスクウェアが愛を庇う様に衝撃を防ぐ。

『ゲツ……………』

「どうして……………」

『わりいな。余計なお節介で。けどな、それがアイツだ』

「うるさい……………。何なのよ……………。まるで、私が……………」

言葉を呑み拳を握る。自分がどうすればいいのか、その答えは出ているがどうしても素直にそれを受け入れられない。俯く愛の耳に届いたのはセイラの声だった。

『……………愛ちゃん。もう、いいでしょ?』

大人びた声に、愛が唇を噛み締める。

『あの子の言っている事の意味を理解出来ないわけじゃないでしょ?』

「分かってる。分かってるけど……………」

『なら、今する事も分かるでしょ?』

セイラの言葉に僅かに頷く。それでも、まだ踏ん切りが付かない。その愛の背中を押したのは、やはりセイラだった。

『愛ちゃん。晃も、武明も、円も、皆やれる事をやってる。特に晃は……………』

「分かってる! 分かってるのよ。そんな事は……………」

『なら、行動するだけでしょ』

「……………」

全てを見透かした様なセイラの言葉に俯いた愛は、右手に握った銃を持ち上げる。銃口が真っ直ぐに衝撃の向うに向けられ、引き金がかれた。

甲高い発砲音。

衝撃を貫く蒼い弾丸。

蒼い弾丸から漂う冷気が、風を凍らせ衝撃を瞬時に相殺する。続け様に轟く銃声が、次の弾丸を外へと放ち、螺旋を描きながら漂う冷気と白煙を貫き、水の膜を一瞬で凍らせ更にその先へと消えていった。

衝撃が収まり漂う土煙に、冷気が混ざる。立ち尽くす愛は小さく長く息を吐き出し、ゆっくりと水嬌の方へと目を向けた。二人の視線が交わったのはほんの一瞬で、愛の視線はすぐに水嬌の足元でグツタリとする守の方へと向けられた。

意識を失っているのか、動く素振りすら見せない守に、小さくため息を漏らした愛は、呆れた様な眼差しを向けながら、ボソリと水嬌に告げる。

「ソイツが目え覚ましたら伝えといて。ありがとう……って」

これでもかと言わんばかりに赤面する愛は、その場を逃げる様に立ち去った。相当恥ずかしかつたのだらう。顔は熱く、火が出るんじゃないかと思うほどだった。

そんな愛の後姿を見つめ、水嬌は僅かに微笑んだ。自らの子を見る母親の様に。

青桜学園校門前に佇む一人の少年。右手には刀身の細い鍔の無い剣を持っていた。

乱れる呼吸に、白髪混じりの赤黒い髪が呼吸に合わせて静かに揺

れる。上二つまでボタンをあけたシャツの胸倉を左手で握り、呼吸を落ち着ける様に静かに息を吐き出す。

その少年の目の前に、一つの影が校舎内から現れた。穏やかな笑みと異常な殺気を纏ったその瞳が少年を真っ直ぐに見据える。

「キミもここに来ていたんだね。桜嵐晃君」

「あんたを止める為にここに居る。これ以上、罪を重ねるのは止める」

晃の声と共に風が足元から吹き上がり、髪を逆立て瞳の色が赤く染まる。不適な笑みと共に現れたそれは、風を切る不気味な音を奏で、

『さあ、始めようぜ。ここで決着を付けてやるっ』

低い声が荒々しく吹き荒れ、刃が薄気味悪く輝きを放つ。

## 第九十話 一人じゃない

「何よ……これ」

目の前に広がる光景に、愛が驚きの声を上げた。

大量の血痕と砕かれた道路。瓦礫と化した建物。

ここで何があったのか想像できないが、誰かが負傷しそれでも戦っているのは分かる。散ばった血痕がまだ生暖かい。

右手の人差し指でそれを確かめた愛は、怪訝そうな表情を浮かべ周囲を窺う。先程飛んできたのは、その戦闘の流れ弾と言った所だろう。複雑そうな表情を見せる愛は、右耳のセイラに言葉を投げかける。

「何か感じる？」

『近くで強い気配を感じるわ。でも……』

「でも、何？」

『一つの気配が消えかかっているの。結構ヤバイ状況よ』

セイラの言葉に真剣な表情を見せる愛は、左手で指鉄砲を作ると、静かに息を吐き心を静める。そして、右手で一枚のカードを取り出すと、無言のままそれを空へと放った。

「セイラ！」

愛の叫び声と共に、背中に大きな翼が開かれ、突風が周囲に吹き荒れる。羽ばたきと共に宙へと舞い上がった愛は放ったカードに指鉄砲を向け、

「来たれ！」

蝉風せんふう

指鉄砲の先から青白い光りが放たれ、宙を舞うカードを貫く。光りが弾けカードが消滅し、無数のセミが空へと散ばる。重なり合う耳障りな鳴き声に、僅かに青筋を見せ隠れさせる愛は、引き攣った笑みを見せると、右手に作った指鉄砲をセミの方へと向けた。

「うるせえ！ てめえら、とつとと周囲を調べてきやがれ！」

指先に青白い光りを集めそう叫ぶと、宙を舞うセミ達は慌てた様に周囲に散ばった。小さくため息を吐いた愛は、翼を羽ばたかせながら空中を優雅に舞う。周囲に戦闘をしている様子は無いが、戦闘している気配は感じる。何処で戦っているのか、それすら分からなくするほどの強い気配に、冷や汗ばかりが流れていた。そんな愛の気持ちを悟ってか、セイラは静かに問う。

『怖い？』

「そ、そんなんじゃないわ。ただ」

『別に恐怖を感じる事を恥じる事は無いわよ。誰だって死ぬかも知れない戦いは怖い。ワタクシだって、貴女を失ってしまうかもと思うと、怖くて仕方が無いもの』

微かに震えるセイラの声に、愛は優しく答えた。

「ありがとう。でも、私は大丈夫」

『……愛ちゃん』

「安心して。別に怖くないって強がってるわけじゃないから」

『じゃあ、どうして？』

不安そうな声に、愛は顔を数秒閉じ落ち着いた口調で、

「皆がついてる。セイラも、ヴィリーも居る。晃やキルゲルだっている。少し前までの私だったら、きつとこんな事言えなかつたと思う。私は一人じゃない。だから、こんな所では死なない」

『愛ちゃん ……。大人になつたね』

「う、うるさい！」

恥ずかしそうに顔面を真っ赤に染めた。

二人が黙ると、周囲は静まり返つた。翼の羽ばたき。それがとても大きく聞こえ、巻き上げる風が瓦礫を崩す。瓦礫の崩れる音すら掻き消してしまふ翼の羽ばたきに混じり、微かにセミの鳴き声が聞こえた。それが合図だった。

激しい爆音が轟き、地上が揺れる。巻き上がった土煙が視界に入り、そこから一匹のセミが飛んで来た。

「あそこね」

『気をつけて。何か不気味な感じがする』

「ええ。さつきみたいなへまはしないから」

鋭い眼差しと強い意志を胸に、愛は一匹のセミに導かれ、その場所へと急いだ。

「ハア…ハア……」

荒々しい息遣い。口から滴れる赤い液が、地上へと落ちる。赤く染まつた長い白髪から滴れる血液。右腕に握つた刀は刃を折られ、額から突き出た角にも亀裂が走っていた。左肩口から裂けた衣服。白い肌があらわになり、それを血が赤く染める。

傷は深く、息をする度に揺れる肩から血が溢れていた。

「もう、諦めたらどうじゃ？」

渋い声に、不適な笑み。何も言わずそれを見据える女性は、自らを落ち着かせる為に、静かに白い息を吐いた。

弱々しく輝く水晶。刃を砕かれ既に具現化を保つのもギリギリの状態で、サポートアームズが声を発する。

『氷神様……だいじょう……ぶ……ですか』

途切れ途切れの言葉に、氷神が僅かに頷いた。殆ど虫の息の状態に、彼女のサポートアームズであるヴェルは危機感を感じる。このままでは何れ氷神は死を迎えてしまうと。ボロボロの肉体に、鬼獣化した影響で精神的にも既に。

ヴェルの心配を他所に、鋭い眼差しを変えない氷神。口元に見える小さな牙も既に元に戻りつつあった。血を流しすぎた為か、視界が霞む。目の前に対峙するその人物の姿も薄らとしか見えない。それでも、鋭い眼差しを変えず、相手の顔を睨み付ける。

「フオッフオッフオッフ。まだ、そんな目が出るのかのう。これ程まで力の差を見せ付けても尚、挑むと言うのなら」

言葉が途切れ、伏せていた老人の目が開かれる。鋭く鋭利な目付きに、ブラウンの瞳が殺気を帯びていた。圧倒的な威圧感に氷神は一歩足を退く。

直感が危険だと告げる。その場を離れると脳が指令を送る。だが、動き出すより先に、倍以上に膨れ上がった老人の右腕が地面を抉った。瓦礫と共に氷神に迫る拳。動き出しの遅れた氷神に、それをかわす術は無く、瓦礫と拳を体を受け空中へと投げ出された。

「ぐっっ」



「まだまだじゃ」

声と同時に左拳が氷神の体を地面へと叩き付けた。

「ぐはっ！」

地面が砕け陥没する。口から吐き出された血は宙を舞い、氷神の体は地面に減り込む。全身から力が抜け、完全に動きを停止した氷神を見据え、静かに拳を持ち上げる。具現化されていたヴェルは水晶だけの姿になり、鬼と化していた氷神の姿も普通の女性の姿へと戻っていた。

血塗れの白装束。弱々しく上下する胸。

静かに息を吐いた老人は、その肉体を元の姿へと戻す。これで、全てを終わらせた。そう思ったからだ。だが、その瞬間に轟く銃声。弾丸が老人の額を貫き、地面へと突き刺さった。

空から降り立つ愛。背中の大きな白翼の羽ばたきが風を巻き上げ、砂煙を舞い上がらせる。

『愛ちゃん。相手は五大鬼獣よ。気をつけて』

「分かってる。それより、彼女は？」

『大丈夫そう。衰弱してるけど』

「そう。なら、私達でどうにかするしかないみたいね」

表情はいつになく真剣だが、体は僅かに震えていた。それは、彼女のサポートアームズであるセイラやヴィリーだけが感じる程の僅かな振るえだった。彼女が感じる恐怖。それは、火猿と対峙した時とは比べ物にならない程の恐怖だった。足が竦み、ここからすぐ逃げ出したい。

再生されていく相手の顔を見据える。口元に浮かぶ笑みが、不気味で更に愛の恐怖心を掻きたてる。

背中に具現化されていた白翼が消え、右手に一丁の蒼い銃が具現化された。その銃口が真っ直ぐに老人へと向けられ、愛の唇が静かに動く。

「私は雪国 愛。これ以上好き勝手させない」

「フオツフオツフオツ。強がらなくともよい。お嬢さん。ワシとて、無駄に戦いとうわけじゃない」

「なら、そこを動くな。すぐに終わらせる」

力強い眼差し。トリガーに掛かった指が、静かにそれを引く。甲高く響く銃声。弾丸が老人の左肩を貫き、続け様に間接を打ち抜いていく。だが、老人の体は何事も無い様に再生を続け、愛の前に立ちただかった。

## 第九十一話 幕を引くのは…

黒いドーム状の膜の中で行われる数々の戦い。

ある者は力に目覚め、ある者は命を失った。

多くの血が流れ、多くの物が破壊された。

人々の悲鳴もいつしか消え、爆音と地響きだけがその中で轟き渡る。

そして、全ての事に始まりと終わりがある様に、この戦いも遂に幕を閉じ様としていた。その幕を下ろす役は一人の少年。幕引きの場所は 青桜学園。この現象の始まりの場所。

その場所で、左膝を地に着き額から血流する少年。右手に握られた鏢の無い刀身の細い剣先に、微量の血液が付着し、それがシトシトと地面へ滴れる。白髪混じりの赤黒い髪が風に揺れ、赤みを帯びた瞳が前髪の合間から見え隠れする。

「残念だけど、時間切れだよ」

「クッ！」

少年の視線の先に佇む男の右手がスツと持ち上がり、手の平に光りが満ちる。

『テメエ、考えてる暇はねえだろ！』

「分かってる。分かってるよ。キルゲル」

少年が呟き立ち上がると、右手に握った剣が風を纏う。土煙を巻き上げ、けたたましい風音を轟かせ、全てを呑み込む様に渦を巻く。少年の髪が逆立ち、衣服が乱れる。

「あれだけの力の差を見せ付けたのに、まだやるのか？」

「僕は諦めが悪いんでね」

『私の邪魔をする者は誰であろうと消す』

「口で何と言おうとも、その体ではまともに戦えまい」

不適な笑みを向け、少年を見据える男は手の平で輝く光を圧縮する。

「君じゃ、俺には勝てない」

『それは、貴様の属性が“光”だからか？』

一瞬驚いた表情を見せたが、男は何食わぬ顔で口を開く。

「知っていたのか。まあ、流石と言うべきか。でも」

男の声が途切れ、その背後に一つの人影が浮かぶ。腰まで届く長い髪が揺れ、美しい顔が土煙の中から浮かび上がる。

「み、皆川！ な、何で！」

「あの二つは引き合っただよ」

『クッ！ まさか！』

右手の中でキルゲルが声を荒げ、その声に男が楽しげな笑みを浮かべる。状況を理解する少年は、キルゲルを握る手に力を込め、足の指先で力強く地を蹴った。一陣の風が吹きぬけ、刃が男の首筋でピタリと止まる。睨み付ける少年に対し、耳打ちするかの様にか細い声で言葉を告げる。

その声は少年の耳にしか聞こえなかった。言葉が終わる頃、少年の握っていた剣は地面を砕いていた。碎石が舞い上がり、少年の目の前に居た男が空高く舞い上がっていた。その背中に美しい白銀の翼を生やし。金髪の髪が翼を一掻きする度に揺れ、見下す様な目で

少年を見据える。

「クフフフツ……。心が乱れているよ」

「黙れ！ お前だけは」

「晃君？」

突然発せられた女性の声。穏やかな声。澄んだ大きな目が真っ直ぐに晃を見据える。状況をまだ理解できていないのか、周囲を見回す。そして、晃の右手に握る剣に気付き、驚いた様に口を押さえ、

「あ、晃君……それ」

切っ先に僅かに付着する血。それを指差す皆川奈菜は、一步後退する。瞳孔の開ききつた目を見据え、晃は小さく息を吐く。

「ゴメン。今は説明できない。でも」

『来るぞ！』

キルゲルの言葉で晃が奈菜を突き飛ばす。それと同時に突風が吹きぬけ、晃の体が地上を転げる。土煙が直線を描き、晃の体が土煙の中に隠れた。地上を見下ろす男の手から無数の光の弾丸が土煙の中へと放たれる。爆音が轟々しく鳴り響き、激しく地上が揺れる。

「晃君！」

奈菜がそう叫んだが、その声も爆音へと掻き消された。

閃光が収まり、土煙だけが漂う。静かに口から吐き出される息と共に、疾風が右頬を裂いた。

「クツ！」

『我、望む。貴様の死を!』

土煙の中から低音の音が響き、土煙が一瞬で吹き飛ぶ。赤黒い瞳が男を見据え、禍々しい雰囲気撒き散らす。

「晃……君?」

いち早く異変に気付いたのは奈菜だったが、それが何なのかは分からなかった。

静かに右足を踏み出し、右手を引き、剣を顔の横に水平に構える。剣を包む風の音が晃の耳元で響き、微かに腰を落としたかと思うと、その場から一瞬で消えた。だが、男はその動きを予測していたのか、右手にいつの間にか眩い光で作られた剣を握っており、突如背後に現れた晃の斬撃を軽く受け止める。

「全く、いい加減にしてくれないか」

晃の剣を弾き、無防備になった腹部に蹴りを見舞う。地上で爆音が響き、土煙の中からもう一度晃が飛び出す。男はその行動を鼻で笑うと、手に持っていた剣を晃へと投げつける。鋭い切っ先を見据える晃は、それを紙一重でかわし、もう一度空に飛ぶ。

「君の行動には飽き飽きだ。来い! 水虎! 馬駆炎!」

空へと投げ出された二枚のカードから召喚された二体の鬼獣。一体は水の体の虎。もう一体は蹄ひづめに炎を灯した馬。

地上へと降り立った晃は剣を構え直し、ゆっくりと顔を上げる。その目が見据える先は一点。空中を優雅に舞う一人の男のみ。

「久し振りの外の空気だ」

雄雄しく水虎が言葉を発し、それに馬駆炎が静かに口を開く。

「状況は……分かった」

「へッ……。奴を喰らう。それだけだ！」

水虎が一直線に走り出す。その牙をむき出しにして。だが、その様子をただ見据えるだけの晃は、ゆっくりと歩みを進める。そして、水虎と交錯するその刹那、疾風が吹き抜ける音が聞こえ、水飛沫を巻き上げその体消滅した。

「き、貴様！」

『邪魔だ。消えろ』

晃が右手の剣を一振りすると、疾風が駆け馬駆炎を一瞬で引き裂いた。二枚のカードだけが宙を舞い、静かに地面に落ちる。ゆっくりと視線が上がり、もう一度右手の剣が顔の横に水平に構えられた。

『これで』

そこで、晃の言葉が止まり、風が収まる。静かに笑う男がその視線を校門の方へと向けた。

「役者が揃ったみたいだ」

『クツ！　こんな時に』

両者の反応はまちまちだった。焦りを見せる晃。余裕の男。

そんな両者の視線を浴び、校門に佇み一つの影がゆっくりと歩みだす。ボサボサの黒髪が揺れ、両手に大剣が握られていた。多少体格が小柄に見えるのは、その手に握られた剣の大きさの所為だろう。

『アイツは』  
「月下神社で見かけた彼　みたいだけど……」  
『なら、アイツが原因か』

低く凜々しい声に少年の顔がゆっくりと空へと向けられた。少年の視線に男は穏やかに微笑み、丁寧に会釈する。

「初めまして。火野守君。そして、フロードスクウェア」  
『知り合いか？』

「今、初めましてって、言ってたでしょ」  
『そうか？』  
『てめえら、何しにきやがった！』

守とフロードスクウェアの会話に突如割り込む怒声。その怒声に会話をやめる守は、右足を一步前に出し、緩んだ表情から一変し真剣な表情へと変わった。いつもの穏やかさは無く、鋭い眼差しが前方の二人を真っ直ぐに見据える。だが、それもすぐに元に戻る。一人の少女の声により。

「火野君！」  
「うおっ！　な、なな何でみ、皆川さんが！」  
『ば、馬鹿！　動揺してる場合じゃ』  
『邪魔だ。消えろ！』

突然視界に割り込んだ晃の顔。一瞬の事に驚く守とフロードスクウェアに、晃が右足を一步踏み込み間合いを更に詰め、右手に握られた細身の刃が振り抜かれる。

「クッ！」



『デメエツ!』

咄嗟に身を引き刃をかわしたが、続け様に突きが守の腹部に向って放たれる。反射的にフロードスクウエアの平で刃を受け止めた。澄んだ金属音と僅かに迸る火花。二人の対照的な剣が、一度離れてからもう一度ぶつかり合う。

刃が交錯し火花が散り、晃は素早く距離を取る。足元から土煙が巻き上がり、両者が対照的な剣を構えなおす。

「あ、晃君! やめて!」

晃の背後から響く奈菜の声に、僅かに守が表情を曇らせる。だが、晃は表情一つ変えず、切っ先を守へと突き立てる。

「や、止めてください!」

紙一重で刃を右へとかわすが、その脇腹に晃の左膝が減り込んだ。

第九十一話 幕を引くのは…（後書き）

## 第九十二話 守対晃

地面を転げ、土煙が立ち込める。

細身の剣を構え佇む晃は、静かに息を吐き土煙の中を見据える。静かに呼吸を整える晃は一度顔を伏せると、先程までとは正反対の穏やかな表情を見せた。

土煙の中で蹲る守。受身を取る事が出来ず、完璧なまで綺麗に膝を腹に受けてしまった。呼吸が出来なくなる程苦しく、すぐに体を起す事が出来ず、苦悶の表情を浮かべ立ち上がった時に、首元に切っ先を突き付けられていた。

「君が 火野守君か……。初めまして ではないね。確か、会うのは三度目かな？」

「うっ……ぐっ。……さ、ん……度目？」

苦しみながらも不思議そうに聞き返す。静かな空間の中、二人の視線が交わり、晃がゆっくりと頷く。

「そう。三度目だ」

彼の言葉に守は苦しいながらも思考回路をフル回転で働かせ、晃の事を思い出す様に脳内で時間を遡る。だが、どう思い出しても晃と会うのはこれが二度目、月下神社とこの青桜学園の二度。

深く長い息遣いの守は、ゆっくりと摺り足で右足を前に出すと、苦しそうな表情をしながらフロードスクウェアを下段に構える。切っ先が地面に触れ、フロードスクウェアが『イテッ』と声を上げた。しかし、その緊張感の欠けた声に守は反応しない。いつもの守なら一言何かあってもいいはずだが、それ程までに余裕が無いと言う事なのだろう。

沈黙し向かい合う二人。首元に切っ先を突き付けられながらも、全く退く様子を見せない守。一方、もの悲しげな瞳を向ける晃。そして、その二人を見据える奈菜と空中に舞う一人の男。男の口元には薄らと笑みが浮かび、二翼の翼が大きく空を掻く。

『どちらが、勝つと?』

「本命は、桜嵐晃かな。でも、俺的には」

クスリと笑い、男は守を見据える。

守、晃の両者の呼吸が重なり、五回目の息継ぎと同時に刃が動く。予備動作無しに突き出された晃の突き。それを間一髪で守は避ける。刃が僅かに首を掠め、鮮血が滲む。表情が微かに引き攣るが、怯む事無く左足を踏み込みフロードスクウエアを振る。切っ先が地面を抉り、砂塵を巻き上げながら刃が空を一閃した。

巻き上がった砂塵を真つ二つに裂いた鋭い一撃だったが、守の手に手応えは無い。僅かに切っ先に何か触れたと、フロードスクウエアは感じたが、それを口にする事は無かった。

二人の合間に舞う砂塵を貫く細い刃。先程よりも鋭い突きを刃の腹で受け流す。

「クッ!」

『イテッ! 守! 何してんだ!』

「遅い!」

先程と同じ様にくの字に曲がった膝が、守の腹を抉る。

「ッ!」

身を退き直撃を避けた守だったが、晃の方が一枚上手だった。くの字に曲がった膝が一瞬の内に伸ばされ、守の顎を蹴り上げた。首

が伸び、守の足が地上から離れ、地面に背中から倒れる。

地面に横たわる守の顔に、切っ先が向けられた。

終焉。短く激しい二人の戦いは晃の圧勝で幕を引こうとしていた。仰向けのまま動かない守の右手に握られた大剣フロードスクウェアは、鏢の水晶を光らせ低い声で問う。

『目的は何だ？』

『テメエには関係ねえ』

『止める。キルゲル』

『うるせえ！ テメエもテメエだ。とつとと』

『僕等の目的はアレの回収だ。無駄な戦いは』

『クフフツ……グハハハハツ！』

二人の会話を裂く様に笑い声が響き、晃とキルゲルが怪訝そうな表情を向ける。反響する笑い声が止み、殺気がゾワツと背筋を凍らせる。思わず右足を一步退き、守の顔に向けていた刃を構えなおしていた。ほんの一瞬だが、殺されると錯覚した。

上空を舞う男もその殺気に気付いていた。体が僅かに硬直してしまっ程の殺気に、先程までの笑みが消えていた。鋭い眼差しが向けられ、右手に光の結晶が現れる。

『た、達樹さん！ まだ時は』

『イヤ……今が、その時だ。今しか ツ！』

達樹と呼ばれた男の声が途切れ、腹部から血が流れる。体が大きく傾き、地面へと落下した。爆音と衝撃が広がり、土煙が舞い上がる。

広がった土煙が守と晃の方まで届き、横たわる守の体を隠し、晃の膝下までを土煙が覆った。怪訝そうな表情の晃は、爆音の方へと視線を向ける。刹那、凄まじい風が吹き抜け、腹部に僅かな痛みを

感じた。

「クツ！」

『晃！ 正面！』

「ッ」

衝撃が晃を襲う。咄嗟に振り抜いた細い刃は弾かれ、晃の体が地面を転がる。腕が痺れる程の衝撃に、晃の表情が強張った。

座り込む晃を見据える守。その目はいつもと違う、奇妙な印象があった。右手に握られたフロードスクウェアが、ゆっくりと持ち上がる。切っ先が天を向き、鋭い一撃が振り下ろされた。

「うおっ！」

素早く地面を転がり、それをかわした晃は、すぐさま体勢を整える。

『また来るぞ！』

「チッ！」

守の右足が踏み込まれ、右手のフロードスクウェアが振り抜かれる。太い刃が風を裂く。それに合わせる様に、晃も右足を半歩踏み込み、キルゲルを振り抜く。細い刃が太い刃と激しくぶつかり合い、強い衝撃と爆風、火花を広げた。

「うくっ」

『晃！』

細い刃が地面へと突き刺さった。首元に突き付けられた太い刃に血が流れる。

「止めとけよ。僕に君と戦う理由は無い」

腹部に突き刺さった晃の右拳から力が抜ける。口の端から零れる血が、ボトリとフロードスクウェアの上へと落ちた。膝から地面に崩れた守の手からフロードスクウェアが落ち、重々しい不気味な音を立てた。その大剣はすぐに消滅し、元のネックレスへと戻った。守が意識を失ったから、そうなったのだろう。

小さく息を吐き、守の首に吊るされ揺れるフロードスクウェアを真っ直ぐに見据える。小さな赤い水晶が色あせていた。

「ハア…ハア……」

深く吐き出される息と共に、口から血が吐き出された。

地面に落ちた右膝に、右手が乗り、左手が腹部に刺さるモノを握る。染み出した血がそれを伝い、左手に触れた。

歪んだ表情と共に向けられた視線の先に、一つの影が浮かぶ。黒いロングコートを羽織り、フードを被った人物の手に弓が握られ、右手が矢を引いていた。光り輝く矢が、弓に埋め込まれた水晶に触れる。

『ウチ等の土地でこれ以上の悪さはやめて欲しい』

妙に落ち着き、それでいてのんびりとした口調。だが、その声に怒りが込められているのは分かった。

苦痛に表情を歪める達樹は、腹部に刺さった矢を抜き、それを握り締め不適に笑う。

「君らは、傍観者のはずじゃなかったかな？」

「違う……。私達は、監視役　ただ、それだけ」  
「人はそれを、傍観者と呼ぶん　ッ！」

いつの間に背後に忍び寄っていたのか、後ろから首筋に刃を当てられていた。刀身は短めの脇差と言った所だろう。息を呑み、視線を僅かに後ろに向ける。背後に居る者も、目の前に立つ者同様、黒いロングコートに身を包み、フードを被っていた。僅かに見える黒髪が、静かに揺れ凜とした落ち着きのある声が耳元で聞こえる。

「傍観者……。そう呼ぶのは、構わない。だが、私達は傍観者である前に人間だ。これ以上は　」

『……マスター。我等はあくまで監視役だ。これ以上の言葉は無用』

淡々とした口調でそう述べたのは、彼女のサポートアームズ。低く渋い声。それが、達樹に引き攣った笑みを作らせた。

前方には矢を向ける者。後ろには首筋に刃を当てる者。完全に身動きを封じられた達樹は、何かをポケットから落とした。球体の水晶の様な綺麗な美しい輝きを放つ　それは、サポートアームズに付く水晶によく似た　モノだった。



## 第九十三話 扉と鍵

ゆっくりとそれは地上へと落ち、澄んだ音を響かせ、奇妙な力の波紋を町中に広げた。

たった一瞬の波長が球体内に広がり、全てのモノに告げる。それが、ここ青桜学園にあると言つ事を。

そして、各地に散っていた力の全てが集結する。自らの欲を満たそうとする者、力を求める者。私利私欲の為に集まる鬼獣達に、青桜学園は囲われていた。空を覆うのは属性もバラバラの鬼獣。火を吐く奴が居れば、雷撃を迸る奴も居る。地上にも属性の違う多くの鬼獣が威嚇する様に喉を鳴らす。

守との戦いを終えた晃は、僅かに息を吐き地面に刺さったキルゲルを抜く。周囲の異変と先ほど感じた波長に表情を強張らせる。疲労が見て取れる晃に、キルゲルは静かに口を開く。

『テメエ、自分のやるべき事を、忘れたわけじゃねえだろうな』

「分かつてるよ。僕のやるべき事は」

『なら、とつとと動け。時間はねえ』

乱暴な口調と厳しい言葉に対し、晃は穏やかに笑い頷く。

「なら、まずは」

細い刃を地スレスレに構え、ゆっくりと息を吐きながら足をくの字に折る。低空の姿勢から視線だけを久遠達樹の方へと向け、その背後に立つフードを被った奴を目視した。何も言わずただ視線を向けただけの晃は、唇を僅かに動かす。何を口にしたのか分からないが、その後二度頷き眼を閉じる。

その背後で蠢く無数の鬼獣達が、恐る恐る間合いを詰める様に迫

る。バラバラの足音と揺れ動く気配に、晃は小さく息を吐く。  
フードを被った二人は、晃と達樹を警戒しながらも周囲を囲う鬼  
獣を見回す。

「貴様、何をした」

達樹の背後に立つ者が凜々しい声でそう聞く。だが、返答は無く、  
肩だけが揺れる。

『マスター！』

「クッ！」

サポートアームズの声で咄嗟にその場を飛び退く。それに遅れて、  
上空から降り注ぐ大量の炎弾が地面を砕き、土煙を巻き上げた。紅  
蓮の炎が揺れ、達樹の姿を見失う。小さく舌打ちをすると同時に脇  
差を構える。

地面に転がる水晶を手にとった達樹は、不適な笑みを浮かべ、そ  
れを懐へと隠す。同時に無数の矢が達樹の体を襲う。先ほどのフー  
ドを被った連中の攻撃だろうが、今回は具現化された背中の子  
翼がそれを防ぐ。

「残念だけど、君らと遊ぶ程暇じゃないんだ」

飛び立とうと翼で空を掻く。だが、それを許さぬ様に鋭い一撃が  
達樹を襲う。それは、紅蓮の炎と土煙を裂いた不気味な黒い影だっ  
た。表情が一瞬強張り、身を引きそれをかわす。

「クッ！」

『達樹さん！』

美しい女性の声で達樹が自分に迫る一つの影に気付く。

『おせえんだよ!』

乱暴な口調と同時に見せた晃の大人びた顔。白髪混じりの赤黒い髪が揺れ、赤みを帯びた黒い瞳が力強く達樹を見据える。右足が踏み込まれ、間合いが 思うより先に閃光一閃。疾風が駆け、白銀の羽が数枚散る。遅れて大量の血が地面へとドボドボと零れた。

「クツ……流石と、言う所か……」

苦痛に歪む達樹の顔を見据える晃。その手に握られたキルゲルの細い刃には、血が付着していた。右肩から血が流れる。先程の腹部の傷もあり、その場に大量の血を零す。

ゆったりとした剣の構えをする晃は、強い眼差しを変えない。一方で一つの足音が近付き、静かに声が聞こえる。

「貴様は誰だ」

凜々しくも厳しい口調。晃を警戒しているのだろう。視線は達樹に向けたまま、晃も静かに答える。

「僕は桜嵐晃。隣り町に住んでる。そして、アイツを追って来た」

「そうか……」

『テメエらは誰だ？ 怪しげな服装みてえだが?』

刺々しくキルゲルが尋ねる。答えは返ってこず、右手に握られた刀を静かに構える。装飾品の様に美しい刀。金色に輝く鍔に、刃の付け根に光る黄色の水晶が印象的だった。キラリと煌いた刀を構えず、真っ直ぐに達樹の方に視線を向ける。

その時、悲鳴が響いた。

「キヤツ！」

「皆川！」

悲鳴に振り返ると、皆川奈菜が鬼獣に囲まれていた。ここに奈菜が居た事を忘れていた。それは、忘れては行けない事だったのに。奥歯を噛み締め駆け出す。それと同時に背後で不適な笑い声と、眩い光が。光に包まれる世界。恐ろしい程の静寂に、光の世界が音を立って崩れ落ちる。そして、聞こえるのは翼の羽ばたきと甲高い笑い声。

「クハハハハッ！ 残念ながら、全ては俺の手の中に落ちた。鍵も扉も全て！」

「チツ！ セイバー」

『残念ながら、我の刃は届かん』

セイバーが静かに答えると、奥歯を噛み締め上空を舞う達樹に視線を送る。

右手に握られた水晶が輝き、左腕には意識を失った奈菜が抱えられていた。眉間にシワを寄せる晃は、その姿を見据えキルゲルを下段に構える。

「行くぞ」

『無理だ。届くわけねえだろ！』

「やってみなきや　！」

晃は言葉を言い掛け、それを呑み込む。見えたからだ。黒い空に走った青白い光と轟々しく輝く一つの存在を。音も無く現れたそれは、一瞬にして晃の視界から姿を消し、眩い雷火と共に地上へと飛

来した。それに数秒遅れ、轟々しい雷鳴を轟かせ、宙を舞う鬼獣と達樹を一瞬にして地上へと叩き落していた。

「グツ……な…何が……」

何が起ったのか、理解する間も無く雷撃を受けた達樹は、地面に這い蹲り顔を上げた。左腕に抱えていたはずの奈菜の姿は無く、白銀の翼も黒焦げている。地上に落ちた無数の鬼獣達も弱ってはいるが、命に別状は無くゆっくりと体を起す。

そして、その視線の先に輝く青白い雷光。銀色に輝く毛並みがその姿を勇ましく見せる。古傷の残るその体つきはしなやかで、鋭い眼差しの奥にギラつく赤黒い瞳が周囲の鬼獣をけん制する様にゆっくりと動き出す。

足元に寝かされた奈菜。達樹に一撃加えた時に奪ってきたのだろう。全ての鬼獣をけん制した後、彼女の体を抱える様に背中に乗せ、静かに歩みを進める。

あまりの光景に呆然とする晃。フードを被った二人も何が起ったか理解するのに時間が掛かっていた。

「グツ……俺の……邪魔を」

痺れる体を無理矢理起き上がらせた達樹の手の中で光が満ちる。

それはやがて刃を形成し、剣と成す。鋭い切っ先、柄頭から伸びる提げ緒が金色に輝き、その先に水晶が煌く。深い呼吸の後、背中の翼を羽ばたかせ、突風を巻き上げる。砂塵が周囲を包み、晃も、フードを被った二人も、飛び立つ達樹を固唾を呑んだまま見据えた。

走れば刃も届く距離だったが、それをしなかつたのは、達樹が放つ異様な殺気が体を締め付ける様な錯覚を覚えたからだ。それにも関わらず、歩みを止めぬ一体の鬼獣は、奈菜の体を守る側へと置くと、ゆっくりと振り返り、空を見上げた。

「上には気をつけるよ」

ボソリと口にした鬼獣の見据える先は、達樹ではなく、達樹の更上空。蒼く燃える巨体の影。五大鬼獣の一人、火猿の姿だった。業火の如く燃え上がる炎が爆発する様に周囲に居た鬼獣を蒼い炎で包み、焼き払う。灰と炭だけが空から降り注ぎ、乾いた音が周囲に響く。やがて、その音も止み、静まり返ると、ゆっくりと火猿の口が開かれた。

「アレを……返せエエエエツ！」

咆哮が達樹と、地上に居た者を襲う。地面が砕かれ、碎石が舞う。そして、蒼い炎を纏った火猿が彗星の様に地上へと落下する。

## 第九十四話 五大鬼獣 参戦

地上が揺れた。

衝撃が広がり、土煙が舞う。爆風が蒼い炎を周囲に広げ、周りの鬼獣を焼き払う。

爆風と炎から守と奈菜の二人を、体を張って庇う雷撃を迸る鬼獣。その背後にいつ来たのか、一人の女性が佇み、かざした右手が水の膜を生み出す。周囲を焼き払う炎を鎮火し、水蒸気が辺りを真っ白に包み込んだ。

霧状の中で皆が眼を凝らす。最悪の視界。聞こえる風の音。それは力強い翼の羽ばたき。一瞬で周囲に緊張が走り、上空へと視線が向く。が、白い霧を払った翼の羽ばたきは、達樹のモノでは無く、一人の少年の起こした羽ばたきによるモノだった。

小柄な金髪の少年が、背中から生えた翼を静かに羽ばたかせ、地上を見下ろす。

「おっかしいな？ 本当なら、ここで電鋭がズドンって、稲妻を落とすんだけど……まあ、いいや。アハハハッ」

場の空気を読まず、楽しげに笑う少年は、ゆっくりと手の平に風を圧縮する。だが、それを制止する声が地上から響く。

「風童。やめんか」

「ゲッ、燃土。いたのお？」

いつの間にか現れた老人に、引き攣った表情を見せる。圧縮していた風を散布させ、何事も無かった様に頭の後ろで手を組み口笛を吹く。

燃土と呼ばれた老人は、ゆっくりと息を吐くと、静かに視線を女

性の方へと向けた。

「水嬌。ソイツは何じゃ？」

「見ての通り。狼電よ」

サラリと受け答える水嬌と呼ばれた女性は、美しい銀髪を右手で撫でた。一方、狼電と呼ばれた鬼獣は、右前足を踏み込むと、威嚇する様に全身の毛を逆立てる。

「グルルルッ！」

「クツクツクツ……。五大鬼獣まで、来てしまったか……。俺の完璧な計画が、丸つぶれだ」

「ヴウウウッ……。ヴウウウッ……」

拳の下から聞こえてきた声に、喉を鳴らし息を吐く火猿。自らの身を焦がす蒼い炎が揺らめく。どれ程の戦いをしていたのか、その肉体には鋭利な刃物による切り傷が残され、薄らと血が滲んでいた。白い息が口から漏れ、火猿の体が揺らぐ。鋭い光の線が右肩を貫きながら。

「グガアアアッ！」

「！」

「ッ」

「チッ！ 生きたいなら、集中しろ！ 一瞬たりとも気を抜くな！」

火猿の悲鳴の様な声が轟く中、狼電がそう叫ぶ。その声に、晃もフードを被った二人組みも気を張り、武器を構える。一方で、水嬌、燃土、風童の三人も目付きを鋭くし、悶える火猿の向うに視線を向けていた。

砕けた地面が崩れ、ゆっくりと体が起き上がる。服が多少燃え、



その肉体が黒焦げた肌を露出する。右目に宿る金色の光。胸元で揺らぐネックレス。右手の中指のリング。左腕のブレスレット。いつ付けたのか不明だが、各々が美しい輝きを見せていた。

「クツクツクツ……。キミ達は……俺の怒りに触れた。大人しくしていればいいものを……」

『大人すれば、楽に死ぬる。そういいてえのか？ 戯言を抜かせ！』

晃のサポートアームズ、キルゲルが皮肉たつぷりにそう述べると、失笑の後に冷やかな視線と感情の抜け切った声で答える。

「そつだ。人は何れ死ぬ。なら、楽な方がいいだろ？」

「ふざけるな！ 人の死には意味がある。天命を全うし死ぬ者、誰かを守る為に死ぬ者。決して無駄に奪っていいモノじゃない！」

怒声を響かせる晃の額に、薄らと青筋が浮かぶ。奥歯が軋み、キルゲルを握る拳に力が籠る。今にも斬り掛かりそうな勢いの晃を、制止したのはフードの二人組みだった。いつ晃の横に着いたのか分からないが、一方は刀を、一方は右手を。

二人によって抑えられ何とか突っ込むのを留まっている。右手に込められた力を直に感じるキルゲルは、その身を風に包む。

不適な笑みを浮かべる達樹が右手をかざす。中指のリングが輝き閃光が晃の心臓に目掛けて突き進む。

「水嬌！」

「貴方に言われなくても分かっています」

水嬌が素早く右手をかざすと、水の膜が晃とフードの二人組みを包む。その光景を目の当たりにし、余裕の笑みを浮かべる達樹は、馬鹿にした様に、

「光の前で、水の壁など無意味だ」

「それは……どうかしら？」

甘く微笑む水嬌の視線に、達樹が気付く。悶えていた火猿が消えている事に。だが、その瞬間には水の膜が弾け、水蒸気が周囲を真っ白に染めた。

「ウオオオオツ！ 殺す！ 貴様は！」

血走った眼が一瞬だけ水蒸気の中で見え、閃光は白い霧の中に消えた。光は水蒸気の細かな水滴により屈折し、眩い光だけを昇達へと届けただけだった。

「クツ！ 邪魔だ！」

左腕のブレスレットに右手が触れると、赤い光が左手の平に現れる。

「破壊しろ！ 爆龍！」

「ヴオオオオオツ」

突如轟く咆哮。共に紅蓮の龍が地を抉り、碎石と土煙を巻き上げ白い霧へと突っ込む。

「何だアレ。あんな鬼獣ボク、見た事無いよ」

「舐めるな！ 人間が！」

水蒸気の中で佇む火猿が、大きな手で龍の開いた口を掴む。咆哮を至近距離で受ける火猿だが、それに負けじと自分も大声を張り上

げた。

「ヴオオオオツ！」

「グオオオオツ！」

両者の咆哮がぶつかり合う。だが、その気合と裏腹に、爆龍の勢いは止まらず、火猿の体が後方へと押されて行く。確りと地面に固定された両足の裏には、土が山になり詰まっており、爆龍の力の強さを表していた。

火猿と爆龍の二人を見据え、達樹が笑みを浮かべた。その笑みに気付いた者は居らず、達樹はヒッソリと次の行動へと移る。左腕に添えられていた右手がゆつくりとネックレスに触れ、今度は翡翠の光が生まれる。

「暴れまわれ。嵐蝶」

ウツキバタ

達樹の手が広げられ、現れる無数の蝶。羽が翡翠の光の粉を撒き散らし、空へと飛んでいく。目的は。

「な、何だよお。こいつ等」

風童が悲鳴の様な声を上げる。周囲を囲むのは無数の嵐蝶。完全に孤立してしまった風童に、小さな羽を羽ばたかせる嵐蝶が一斉に襲い掛かる。鱗粉が暴風を生み、風童の小柄の体を襲う。

「グウウウツ……」

喉を鳴らす風童の体を鋭い風が裂き、血飛沫が地上へと降り注ぐ。切り裂かれながらも空中で体勢を保つ風童は、眉間にシワを寄せ頬を膨らませる。

「ウーッ！ うざいんだよ！ お前等！」

両翼を羽ばたかせ、手の平をかざすと、風が渦巻き吸い込まれていく。それは嵐蝶も例外ではない。渦の中へと吸収されていく嵐蝶達だが、そこで異変が起る。渦が小さくなり、風が静まっていた。異変にすぐさま気付いた風童は、かざした手を下ろし、その場を離れる。と、同時に激しい爆音と共に圧縮された風が周囲の物を破壊する勢いで波紋を広げた。

校舎の窓ガラスが一瞬にして全て砕け散り、校舎内に散乱する。人は居ないのか、悲鳴などの声は聞こえてこなかった。

「生徒は、いないのか？」

ボソリと呟く晃に、弓を持った方が答える。

「残念ながら、生徒を逃がしている時間はありませんでした。ですので、今はただ眠らせているだけです」  
「そう……」

やはりボソリと答え俯く。唇だけが微かに動き、それに返答する様に右手の剣の水晶が光る。僅かに頷き、静かに息を吐く。瞼を閉じ、ゆっくりと開かれる。誰にも気付かれず、左足を一步引き、両手でキルゲルの柄を握ると、その視線を達樹の方へと向けた。

## 第九十五話 圧倒的

冷たい風が頬を撫でる。

白髪混じりの赤黒い髪が吹き上がる風で静かに逆立つ。キルゲルの柄から奇妙な触手が現れ、晃の右腕を侵食していく。音もなく静かに。

苦痛に奥歯を噛み締める晃は、食い縛った歯の間からゆっくりと息を吐く。

その異変に初めに気付いたのは、達樹だった。そして、口元に笑みを浮かべると同時に、右手のリングに触れる。

「来たれ。雷轟鬼」

ボソリと呟くと同時に雷鳴が空を裂く。静けさが漂い割れた地面が僅かに黒焦げている。黒煙をその身に纏い、額から伸びる一本の角に真紅の体。蒼い瞳が周囲を確認する様にゆっくりと動き出し、裂けた口が不気味な笑みを作り出す。綺麗に整った歯の端に見え隠れする鋭利な牙。

口が静かに開かれ、空気が吸われる。ジジジッと、蒼い閃光が雷轟鬼の両足を蠢く。

「我、降臨したるは雷火の如し、咆哮は雷鳴の如し、その動きは

」

皆の視界から雷轟鬼が消滅。残された土煙が風で揺らぎ、狼電の背後に音もなく現れ、

「閃光の如し」

「ッ！」

背後から聞こえた声に驚き振り返る。右足で踏み付けるのは、火野守。左手に抱えるのは皆川奈菜。いつそこに現れたのか、全く分からない程の無音に表情を強張らす一同は、瞬時に交戦に備える。だが、雷轟鬼は左手に抱えた奈菜を見据え、静かに視線を狼電の方へと向けた。威嚇する狼電は右前足をジリツと前に出し、淡々とした口調で尋ねる。

「何者だ……貴様」

「我、望むは　強者との戦い。汝の力量……見る」

風の音が僅かに聞こえ、雷轟鬼の姿が消える。真剣な表情で周囲を警戒する狼電の嗅覚が何かの臭いを嗅ぎ取り、その場を飛び退く。同時に地面が砕け、雷轟鬼の姿が視界に映った。右拳が地面に減り込み、顔がゆつくりと狼電を追う。

狼電の鋭い眼差しが、雷轟鬼の蒼い瞳と交わる。無表情で見据える雷轟鬼に、狼電は咆哮を吐く。

「ガアアアアッ」

喉から吐き出した咆哮が衝撃波となり、雷轟鬼を襲うが、それを右手の振りだけで相殺し、何の前振りもなくその場から消える。

「クッ！」

咆哮を止め、空中に浮いたまま周囲に気を張る。だが、何処にも雷轟鬼の気配が無い。そして、先程感じた臭いも。と、その時、水嬌の声が響く。

「後ろです！」

「！」

驚きと同時に、咄嗟にその場から離れる。そのスピードは常人には見えぬスピードだが、雷轟鬼はその動きに反応し、一瞬で狼電との距離を縮め、右足が狼電を地面へと蹴り飛ばした。

衝撃と爆音、爆風が周囲に広がり、砕けた地面が碎石を散乱させた。

空中で佇む雷轟鬼は、狼電の姿を見る事なく、背を向け達樹の方へと足を進める。あの一撃で力量を判断したのだろう。

だが、その足が止まる。瓦礫の崩れる音と、迸る雷撃の音に。

「クツ……ざけるな……」

「駄目です！ 狼電！」

水嬌が叫ぶと同時に弾けた稲妻が、雷轟鬼へと向う。だが、それを鼻で笑うと、右手一本で受け止めた。

「威力は上級……だが、その状態ではそれも 半減。汝の力は我に及ばぬ」

「ならば、これでどうじゃ！」

突如背後から聞こえた声に、雷轟鬼が瞬時に反応する。しかし、それより先に重々しい一撃が雷轟鬼の頭部を襲った。

「打撃レベルはそこそこ。属性は土……強敵？」

僅かに首を傾げた雷轟鬼の額から血が流れる。だが、それを気にせず、不意打ちをした燃土の顔を見据える。そして、左手に持った奈菜を 手放した。

「皆川！」

それに瞬時に反応したのは晃だった。落下する奈菜を受け止める為に駆け出すが、それよりも先に達樹がその横を翼を広げ飛び立っていった。そして、奈菜を受け止め、晃を見下す様に視線を向ける。

「カギは頂いたよ」

『チツ！ 何してやがんだ！ 五大鬼獣が揃いも揃って……』

「仕方ないさ。俺の生み出した鬼獣はそいつ等五大鬼獣よりも強い鬼獣を……生み出した……だと？」

フードを被った二人組みの刀を持った方がそう口にした。その声に、微笑みすぐに言葉を続ける。

「さて、世代交代の時間かな？」

「ふ……ざ……けるなアアアツ！」

咆哮と同時に爆龍の体を地面へと叩き付けた火猿が、その身に蒼い炎を纏った。

その上空では、一つに纏った巨大な嵐蝶を相手に、風童が楽しげな笑い声を上げる。

「フフフツ……ハハハハツ！ 面白いじゃん。世代交代……上等じゃん。やれるもんならやってみるよ！」

サラサラの金色の髪を逆立て緑の瞳を真っ直ぐに向ける。体を覆うは暴風。鋭く甲高い音を響かせ、飛び交う碎石を切り刻む。それに負けじと、嵐蝶も翼を羽ばたかせ風を生むが、それを吸収し、更に力を蓄える。

爆龍、嵐蝶の無様な姿に、小さく首を振った達樹。そして、何か



を言う訳でも無く静かにため息を吐く。

刹那、轟音が響き、地面が揺れた。衝撃は土煙を巻き上げ、その中に蒼い閃光が消えた。何かが砕ける。そんな嫌な音が聞こえ、遅れて悲鳴の様な声が響いた。その場に居た誰も視線がその悲鳴の元へと向く。

「嘘……だろ」

驚きの声を上げたのは風童。そして、その視線の先には、体を粉々に砕かれた燃土の姿があった。地面が黒く焦げ、陥没している。空中に佇む雷轟鬼は、その燃土を見下し静かに口を開く。

「汝は弱者だ。消えろ」

手の平に雷が集中する。眩い光に、迸る電撃。

『晃！』

「分かった。行くぞ」

『同調率上昇』

触手が更に晃の腕を侵食し、その刃を鋭く大きく変化させていく。風が静まり、キルゲルの刃が僅かに振動する。

『完全同調完了。敵を 破壊する！』

キルゲルその言葉と共に、晃が両足で地面を蹴る。突風が晃の両足を押し上げ、体が空高く舞う。

「雷轟鬼」

「承知」

宙へと舞った晃に向け左手を差し出すが、突如人差し指と中指の間が裂け血飛沫が舞う。いつ斬られたのか分からぬ程の刃の振りに、雷轟鬼が口を開く。

「迅速の太刀捌き……力量を」

「貴様の相手は俺だ！」

背後から飛びかかってきたのは狼電。血にまみれ、美しい銀色の毛を揺らし、雷轟鬼の首筋に噛み付き、地上へと引き摺り下ろす。雷轟鬼が地上へと落ちた事により、二人きりになった晃と達樹の両者が対峙する。小さく息を吐く達樹に対し、表情を変えない晃が静かに切っ先を向けた。

「終わりにしよう」

「それじゃあ、キミが死んでくれるのかい？」

「そうだね……。その場合、貴方も道連れにするけど」

真剣な顔付きで、冗談とも言える言葉を吐く晃に、達樹の顔も真剣に変わる。

静けさの中で向かい会う両者。キルゲルを構える晃は、空中に浮いたままゆっくりと右足を前に出す。

「キミは強い。そのサポートアームズも。でも」

達樹が右手に生んだ光の刃が宙を裂き、晃に襲い掛かる。しかし、それをキルゲルで一閃し、鋭い眼差しを向け、

「キルゲル！」

と、  
叫んだ。

## 第九十六話 青桜学園

一瞬の出来事だった。

風を切る鋭い一閃が瞬き、血飛沫が舞う。白銀の羽が散り、空中に一つの影が浮かぶ。大きな翼を羽ばたかせる達樹の姿が。

不適な笑みと右腕に担がれた奈菜。そして、左手に握られた不気味な水晶が輝く。

地面に横たわる晃は、苦痛に顔を歪めながら、ゆっくりと体を起す。右横腹から溢れる血が制服を赤く染め、咳き込み吐血する。奥歯を噛み締め顔を上げ、宙に浮く達樹を見据える。

綺麗な緑の瞳が嘲笑う様に晃を見下ろす。その目を見据える晃は、痛み能耐えながら立ち上がり、静かに唇を動かす。何を口にしたのか分からないが、その言葉にキルゲルは僅かに水晶を輝かせただけだった。

フードを被った二人組みは、武器を構えたまま二人を見据えていた。

「セイバー。今の見えた？」

刀を持った方が、自分のサポートアームズであるセイバーにそう問いかけた。その問い掛けに、すぐに返答はなく、暫しの間が空いてから渋い声が答える。

『我には見えなかった。何が起こったのかも』  
「きつと、彼も」

弓を持った方がそう呟き、晃の方へと視線を向けた。

「はあ…はあ…」

三つの呼吸と三つの足音が重なる。

「ここが…あなたの通う学校？」

腰まで届く群青の髪を右手で掻き揚げる円が、蒼い瞳を横に並ぶ彩に向ける。膝に手を付く彩は肩口まで伸ばした髪を揺らし、呼吸を整えていた。その後方には奇抜な服装のサングラスを掛けた武明が、大きく肩を揺らす。

三人とも傷だらけで、衣服にも血が付着していた。これでも治療を施したのだろう。三人とも既にサポートアームズを具現化する事も出来ないほど疲弊していた。

ようやく呼吸が整ったのか、膝から手を放した彩は『青桜学園』と刻まれた門を見据え、静かに答えた。

「そう…。ここが、青桜学園よ」

「んで、何で奴等がここに？」

「知らないわよ！ 何で私が」

「デメエらうつせえよ！」

突如背後から聞こえた乱暴な声に、三人が息を合わせた様に振り向くと、肩に血にまみれた女性を担いだ一人の少女がたっていた。この近くでは見た事の無い制服を、血で真っ赤に染めたその少女を見据え、彩が引き攣った笑みを浮かべた。だが、彩以外の二人は表情を変えず、当たり前前の様にその少女に返答する。

「無事だったの」

「あつたりめえだろ。それより、ソイツ誰だ？」

口の悪い少女が眉間にシワを寄せ彩を睨む。その威圧感たっぷり  
の態度に、圧倒される彩はタジタジしながら円と武明の背中に隠れ  
る様にしながら発言する。

「わ、わた、私は水島彩……です」

妙に畏まった態度の彩に、相変わらず表情を変えない少女は、傷  
付いた女性を肩から下ろすと、そのまま歩みを進める。円と武明の  
二人は道を開ける様に左右に別れると、彩が慌てふためく。そんな  
彩の肩を掴んだ少女は、その顔を真っ直ぐに見据える。

ややつり目がかかった強い目付きが彩を見据え、口元に薄らと笑み  
を浮かべた。

「お前、あれの相方か？」

「……あれ？」

戸惑い気味に答えると、少し嬉しそうな表情で肩を二度叩き、何  
かに同意する様に静かに呟く。

「お互い大変だよな。うんうん」

「何の話をしてるか分からないけど、本題に移りたいんだけど」

「本題？ 何それ」

とぼけた様な声を上げる少女が、円の方へと顔を向けると、冷や  
かな視線が返された。だが、あくまでとぼけた態度を取る少女は、  
右手を頬に沿え軽く首を傾げてみせる。そんな二人を腕組みをしな  
がら静かに見据える武明に、彩は歩み寄り小声で問う。

「あの人と知り合いなの？」

「んっ？ ああ。雪国の事か。知り合いだな。一応」

「それじゃあ、彼女も」

「ああ。封術師だ。しかも、俺とお前より遙かに高いレベルのな」

意外にサラッと流す様にそう答えた。武明の性格を知っている彩としては、意外だった。武明が自分よりも才能がある人を素直にそう言うなんて思っても居なかったからだ。そんな武明に代わり、彼のサポートアームズであるセルフイが軽い口調で、

『お兄ちゃん、愛まなにいつも罵倒されてるよね』

と、付け加えた。すると、武明が慌てて叫ぶ。

「よ、余計な事を言うな！」

『ブーツ。余計じゃないもん。彩が、「エツ、武明が人を褒めてる」みたいな顔で見てたから教えたただけだもん！』

「うるせえよ。んな事、別に言わなくていいんだよ！」

「まあまあ。二人とも落ち着いて」

苦笑しながら武明を宥める彩。

そんな二人を尻目に、円は愛に対し冷静な口調で問う。

「あなたも五大鬼獣とやりあったの？」

「ンン。別にやりあったって程でもねえな。火猿には圧倒されだし、燃土の方は対峙してすぐ消えちゃったし」

『五大鬼獣の内二体と鉢合わせる何て、愛ちゃん強運ね』

円のサポートアームズであるエディが、軽い口調でそう述べた。

その綺麗な女性の声に対し、愛のサポートアームズで在るセイラが大人びた声で返答する。

『エディ。二体じゃなくて、三体よ。水嬌とも会ってるから』  
「あなた、良く生きて居られたわね……」

啞然とする円。五大鬼獣の内三体と鉢合わせて命を落とさず、目の前に殆ど無傷で居るのだから。

そんな円に対し、少々不満そうな表情を見せた愛は、後ろの二人を一度目視してから、刺々しい口調で聞く。

「で、あんたは倒したんでしょね？ まさか、三人も居て完敗したとか言わねえよな」

「うるさい……。あの二人は戦力外よ。実質あたし一人で戦ってたわけだし……」

「カーッ。言い訳かよ。つたく」

乱暴な口振りに、円の額に青筋が浮かぶ。流石に愛の態度が頭にきた様で、円も少々刺々しい口調で言い返す。

「何よ。あんたも結局手も足も出なかつたんでしょ！」

「なっ！ 何だと！」

「何よ！」

激しく睨み合う両者を止めたのは、青桜学園のグラウンドの方から聞こえた爆音だった。

凄まじい突風が校門まで届き、鉄格子が軋む。四人の髪が乱れ、衣服の裾が激しく揺れる。遅れて流れてきた土煙に、四人は背を向け腕で目を覆う。

「クッ！ 何だよ！ 一体！」

「多分、五大鬼獣が暴れてるんでしょ」



愛の問いに答えたのは円だった。落ち着いた口調だが、多少焦りの様なモノを感じる。それ程までに五大鬼獣の力を思い知ったのだらう。

土煙がようやく収まり、彩が一目散に校門を潜る。それに遅れ、愛・円・武明と続いた。

目の前に広がる光景に、四人は漠然としていた。何が起こったのか理解できなかったからだ。グランドはメチャクチャに陥没し、そこに横たわっているのは守と晃、五大鬼獣の四体。そして、佇むのは背中から白銀の翼を生やした達樹と、不気味な雰囲気を漂わせる雷轟鬼。明らかにおかしいその状況に、いち早くサポートアームズを具現化する。

「テメエら！ 何者だ！」

「クツクツクツ……。全く、次から次へと」

達樹の口から漏れる薄ら笑いに、愛が蒼い銃の引き金を引く。乾いた銃声が数発聞こえ、青白い弾丸が空を貫く。螺旋を描き迫る弾丸を見据える達樹は、雷轟鬼に目で合図を送った。すると、雷轟鬼が弾丸の前に移動し、それを指で弾く。小さな破裂音だけを残し、弾丸は消滅した。

小さく息を吐く愛の背後では、いつ具現化したか分からないが双剣を構えた円が地を駆ける。それを援護する様に、武明が数本の鉄杭を投げ、呪文を唱える。

「吹き抜ける炎風は、止まる事無く全てを燃やす」

「呪文を使われるのは面倒だな……」

ボソリと呟くと、雷轟鬼が静かに頷く。右手を武明の方へと向けると、その手の平の中で稲妻が弾け圧縮される。雷轟鬼に向って駆ける円は、その視界を遮る為に切っ先を地面に付けた。土煙が上が

り武明の姿がその奥へと消える。と、同時に雷轟鬼に向って円が切りかかった。

## 第九十七話 全力

鋭い斬撃が一筋の閃光を閃かし、空気を刃が一閃する。揺らぐ事なく綺麗に真つ直ぐ横一線に振り抜かれた刃も、雷轟鬼の前では無意味だった。それは、円自身が疲弊していた所為もあるのだろうが、刃は人差し指一本で受け止められる。

瞬間的に両者の視線が交わり、刹那に円の体が後方へと飛ぶ。それは、雷轟鬼が行ったモノではなく、円自身が行った行動だった。同時に、双剣から二丁拳銃へと変化したエディの銃口から、無数の弾丸が放たれる。

乾いた破裂音　それが、大気を震わせ、銃口から上がる硝煙が緩やかに揺れた。衝撃で地面を転げる円は、二丁拳銃を双剣へと戻し、それを地面に突き刺し勢いを殺す。

だが、円の視線の先には、無傷の雷轟鬼が佇む。表情一つ変えず、真紅の体を揺らし一步円に近付く。

「エディ。モード大剣」

冷静に叫ぶ円に返答はなく、地面に突き刺さった双剣が一瞬で大剣へと変わる。円の身長を遙かに越える大きさの大剣を振り上げ、口元に笑みを浮かべると同時に右足を踏み込む。

「滴れよ！」

「轟け！」

二つの声が重なる。

「蓮の葉の雫！」

「雷鳴一閃！」

乾いた銃声と共に舞い上がる土煙を貫き、蒼い弾道が一直線に雷轟鬼に迫る。それに遅れて、円が雷撃を纏った大剣を振り下ろした。雷鳴が轟き地面を砕きながら雷撃が雷轟鬼へ迫る。

その雷撃が蒼い弾丸と触れ、威力と速度を何倍にも膨れ上がらせ、雷轟鬼へと直撃した。激しい爆音と衝撃が広がり、土煙だけが舞い上がる。広がった衝撃に吹き飛ぶ円は、大剣をすぐさま双剣へと戻し、地面にそれを突き刺した。

残りの体力を全て注いだ一撃に、それなりの手応えを感じた円は、口元に僅かながら笑みを浮かべていた。だが、その笑みもすぐに凍り付く。土煙の中で無傷で立ち尽くす雷轟鬼の姿によって。

「そんな……」

愕然とする円の手から双剣が消え、地面に拳が落ちた。具現化する体力も無くなるほどショックを受けていた。完璧な連携からの一撃ですら、傷を付けられなかったのだから。

「悲観する事は無い。汝の一撃は強力。だが、我に、雷撃は効かぬ」  
雷轟鬼がそう口にし、手の平で稲妻を弾けさせる。そんな雷轟鬼の耳に、僅かだが武明の声が聞こえた。

「焼き払え！ 炎翼の羽ばたき！」

武明を隠す土煙を貫き、風に煽られた炎の様に雷轟鬼に炎が迫る。だが、その炎を目にした雷轟鬼は、小さく息を吐き、

「我に、その程度の」

「全てを裂け！ 疾風の牙！」

遅れて聞こえたのはまたしても愛の声。その声と同時に雷轟鬼に迫っていた炎に突如渦が生まれ、勢いと火力に更なる力を加える。それからは一瞬。螺旋を描いた炎が地を駆け、雷轟鬼を呑み込んだ。激しい炎が雷轟鬼を包み込む。炎が揺らぎ、雷轟鬼の姿が霞む。

土煙が消え、愛と武明の姿があらわとなる。その姿を炎の中で見据える雷轟鬼が、不適に笑った。その笑みはその場に居た者の体を硬直させる。

「紅蓮は炎……否。紅蓮は血　鮮血なり」

「雷轟鬼。終わらせろ」

「承知」

雷轟鬼の姿が消えた。炎だけを残して。

そして、次に姿を見せたのは、円の前だった。

「なっ！」

「円！」

驚く円。叫ぶ武明。具現化　する余裕も無く、雷轟鬼の音が円の耳に届く。

「人は死をもって愚かさを知る。そして、人は死を知り、無力さを知る」

「逃げ」

「死を知れ」

「円！」

雷撃が刃と化し貫く。その胸を。鮮血が迸り、地面に体が崩れ落ちた。

「人とは儂く、愚かだ……」

「グツ……ガハッ」

吐血したのは、晃だった。胸を押さえる左手は自らの血で真っ赤に染まり、吐き出す息は弱々しい。驚く円は、晃の背に手をあて声を掛ける。

「お、桜嵐！ お前……」

「グツ……。だいじよ　ぐふっ……」

血を吐いた晃が、すっと体を起す。その右手に煌く細い刃が、静かに風を纏い、腕を侵食していた触手が更に活発に動き出した。刹那に距離を取る雷轟鬼に、口から血を流しながら晃が微笑む。絶望的な状況でも、それを感じさせない晃に自然と戦闘態勢に入る。

『晃、一撃だ。あと一撃が限界だ』

「分かって……。これで……決着を、着ける」

晃の目が真っ直ぐに雷轟鬼の背後に佇む達樹を睨む。奥歯を噛み締め、深く息を吐く。体は既に限界。この一撃に全てを注ぐ。そんな思いを胸に、晃はゆっくりと右手の刃を構える。

激痛など気にせず、口から静かに息を吐く。意識が刃へと集中し、研ぎ澄まされた神経が全てを鮮明に映し出す。

「行くぞ」

『ああ。これで終わりだ』

腰を落とし、膝を曲げる。その行動に雷轟鬼が身構え、

「汝の強さ、見極める」

「残念だが、お前の相手をするつもりは 無い！」

その言葉と共に晃が駆け出す。晃の動き出しに合わせる様に、雷轟鬼の姿が消える。だが、晃の足は止まらない。それ所か、更に加速し一直線に達樹へと迫る。刹那、背後に現れた雷轟鬼が、その首筋に拳を振り下ろす。だが、拳は残像を貫き地面へと突き刺さった。

「なっ！」

驚く雷轟鬼の視界に晃の背が映る。その背中に左手を伸ばそうとした刹那、晃の体が反転し遅れて右足が雷轟鬼の左頬を蹴り抜いた。衝撃に雷轟鬼の顔が右に弾け、体が大きく傾く。それを見る事無くすぐに晃は達樹の方へと駆け出す。不適な笑みを浮かべる達樹は、ゆっくりと左手を前に出す。

「忘れたのかい？ キミは俺に敗れ ！」

「人は常に成長する」

突き出された左腕をすり抜け、晃が達樹の懐へと入った。驚く暇も与えず、細い刃が奈菜を抱える右腕を脇から刃を入れ切断する。

達樹の腕が鮮血を巻きながら吹き飛び、抱えられていた奈菜の体 that 落ちる。地面に落ちる前に奈菜の体を受け止めた晃は、一瞬だけ視線を達樹の方に向けた。だが、達樹の表情はいつもと変わらない。それ所か、いつも以上に落ち着いている様に見えた。

腕を切断されて悲鳴すら上げない達樹を、不気味に思いすぐにその場を去る。十分に距離を置いてから、奈菜を地面へと下ろした晃は、左手で胸を押さえた。

「はぁ……はぁ……再生……速度が……落ちてる……」

『もう限界みたいだな』  
「ああ……」

弱々しく頷いた晃の視界は霞んでいた。呼吸をする度に大きく揺れる肩。額から流れた血は既に凝血し、黒ずんでいる。膝が悲鳴を上げる様に小刻みに震え、両腕が項垂れ力なく揺れ動く。天を仰ぐ様に空をゆつくりと見上げる晃は、静かに長く息を吐き出した。

数秒の静寂だが、それがとても長く感じる。それ程まで周囲は緊迫していた。

息を呑む彩は、横たわる守の横に座り込んでいた。目の前で繰り広げられる戦いに、腰を抜かしていたのだ。

「どうして……同じ封術師やガーディアンが……」

驚きそう口にした彩に、掠れた声が返答する。

「鬼獣にも……平和を求めるモノが居る様に、封術師やガーディアンの中にも、争いを望むモノが居るんですよ……」

「ま、守！ あ、あんた大丈夫？」

「エエ……、割と平気です」

首を二度振り、守がゆつくりと体を起す。体に痛みはあるが、それに耐えながら立ち上がる。胸元で揺れるフロードスクウェアを握り締め、苦しそうに呼吸をする守は、静かにそれを具現化した。



## 第九十八話 守の笑顔

眩い光が右手から溢れ、そこに長い柄と太く大きな刃を形成した。腕と肩に押し掛かる重みに、守の体が傾きその大きな刃が地面を叩く。碎石と土煙が舞い、切っ先が深く地面に突き刺さる。

肩で息をする守の膝が、僅かに落ちた。肩が重く、腕がだるい。体中ズキズキと痛みが疼き、フロードスクウエアを支えに立っているだけでも辛い程だった。今まで溜めに溜め込んだ疲れが、ここに来て一気に守の体に襲い掛かっていた。震える膝に力を加え、背筋を伸ばす。天を仰ぐ様に漆黒の空を見上げる守は、両肩を静かに揺らし自らを落ち着かせる為に深く息を吸い込んだ。

空を見上げる守の背を見据える彩は不安だった。短いと言え一緒に戦ってきて守の事は良く理解していた。どんなに無謀な事でも、どんなに可能性の無い戦いでも、決して諦めず、自らの体を呈してでも誰かを守る。それを知っているから、守が何をしようとしているのか気になった。

「守……」

「大丈夫ですよ。心配しなくても」

そつと視線を落とした守が、静かに答えた。地面に突き刺さったままの自分の背丈程の大剣の柄を握り締め、ゆっくりと横顔を彩に見せる。疲弊している為、僅かに陰りが見える横顔だったが、それを隠す様に優しく微笑む。その笑みに不本意ながら胸をキュンとさせた彩は、耳まで真っ赤にして、

「べ、別に、あ、あんたを心配してるわけじゃないから！」

そう怒鳴った。

小さく「分かってますよ」と、守が呟き、視線が前を向く。その先に居るのは、右腕を失った達樹と、足元に奈菜を置き空を見上げる晃の二人。離れた所で動かない雷轟鬼は、拳を握り晃を睨み、校門の側に佇む愛と武明は苦しうに肩を揺らしていた。体力は先程の呪文で限界を迎え、二人ともサポートアームズの具現化を保てず、手に持っていた武器が消滅する。

苦しうに顔を歪めた愛は、膝に手を置き横目で武明を見た。武明も相当疲れているのか、言葉を発する事なく、口を開けたまま荒く呼吸を繰り返す。

その場に居る誰もが限界だった。封術師、ガーディアン、五大鬼獣。全てを出し切り動けぬ者達の中で、異様な空気を纏い佇む達樹そして、空を見上げ心を静める晃と、落ち着いた面持ちの守。

その合間に生暖かい風が吹きぬけ、突如として凄まじい金切り音が響き、町を覆う暗黒の膜に波状の衝撃が広がる。その衝撃が不動だった膜を大きく歪め、不安定な形へと変化させた。

突然の事に驚く彩は、その場でアタフタとする。だが、守と晃の二人は意外と落ち着き払い、その現象に何も感じていない様だった。

「落ち着いてください。水島さん」

冷静な守の一言に、彩は動きを止めるが、泳いだ眼で守を見据え、

「な、な、何でそんなに落ち着いているの！」

「まあ、慌てた所で、俺には何も出来ませんから」

「け、けど」

一層慌てる彩を他所に、落ち着いた守は暫し笑みを浮かべていた。だが、その笑みもやがて消え、静かに息を吐き出すと同時に、顔つきが真剣なモノへと変わる。それに即座に気付いたフロードスクウエアは、守にしか聞こえない声で問う。

『行くのか』

「ええ。体は……限界ですけどね」

『どっちを叩く？ 流石に両方とは行かないだろ？』

「そうですね……」

フロードスクウェアの言葉に、齒切れ悪く答えた守は、晃と達樹の両方をじっくりと観察する。

黒い膜に覆われた空を見上げる晃が、不意に吐息を吐き出し顎を引く。視線が自然と前を向き、強い覚悟と意思を持った瞳が守の方へと向いた。

晃が何を覚悟し、何を思うのか守には分からない。だが、それは伝わった。晃のその眼差しを見れば。その思いと覚悟に答える為に、守は地面からフロードスクウェアを抜き、その重々しい大剣を構えた。

突如動き出した守に、慌てていた彩が冷静さを取り戻し、その背中に問う。

「何……する気」

「まあ、最終決戦……みたいな感じですかね？」

「無茶する気？」

「しませんよ。俺だって、自分の命が大切ですから」

背を向けたままだが、今守がどんな顔をしているのか想像できた。その表情は絶対に笑みを浮かべてる。いつもそうだったからだ。どんな時も人を不安にさせない様に笑ってみせる。その笑みがどれだけ人を不安にさせ、苦しめているかも知らずに。それでも、守の笑みには何処か期待が出来た。何かしてくれるんじゃないか、と。

漆黒の膜に流れる衝撃が一層激しさを増す。薄い膜は今にも割れそうな勢いで大きく波打ち、甲高い金切り音が激しく音を轟かせる。

その光景を黙って見据える達樹が、静かに俯き口元に僅かながら笑みを浮かべ、突如として大きな笑い声を響かせた。

「な、何？」

『何事ですか？』

声を上げたのは彩とウィンクロード。そして、守も晃もその声の方へ訝しげな眼を向ける。狂った様に笑う達樹が、その二人の視線を受け、吐き捨てるかの如く荒げた声で言い放つ。

「この膜が破られた時、全てが終わる。全てが」

『終わるのはテメエだ』

達樹の声を遮るキルゲルの声。それに続く様に今度はフロードス  
クウエアが口を開く。

『お前が何を目的とし、何を起こそうとしているのか知らないが、これ以上この町で好き勝手をさせるわけがないだろ』

「自分の状況も分からないで、喚くな。役立たず共が」

今までと明らかに変わった態度に、守と晃がそれぞれの武器を構える。危機感を感じたのだろう。右足を踏み込む守は、膝の震えを堪える様に奥歯を噛み締めた。一方、晃も左手で胸を押さえ、苦しそうに右手のキルゲルの切っ先を達樹の方へと向ける。

二人の行動にもう一度狂った様に笑い出すと、左腕をスツと差し出し、

「やれ。雷轟鬼。こいつ等を潰して、鍵を奪え！」

「承知。我、屈辱を晴らす」

静かに立ち上がった雷轟鬼の鋭い眼差しが晃を見据える。怒りと憎悪が混じった雰囲気に、僅かに晃が引き攣った笑みを浮かべた。先程の蹴りが相当雷轟鬼の怒りに触れた様だ。沈黙する雷轟鬼の足がゆっくりと一歩ずつ前に踏み込まれていく。その視線は捉えるのは晃の姿だけで、守を一度たりとも見る事はなかった。そんな雷轟鬼に、背後から達樹の怒声が飛ぶ。

「雷轟鬼！ 左だ！」

「！」

達樹の声に左を向くと、その視線に飛び込む一つの影。それが、無音で刃を振るい鋭い閃光が空を裂く。咄嗟に身を引き刃をかわす雷轟鬼だが、切っ先だけがその首筋を掠め取った。僅かに皮膚が裂け、少量の鮮血が飛ぶ。

突然の奇襲によるめく雷轟鬼。その視線の先に映るのは守。手には振り抜いたばかりの大剣が、切っ先を後ろへと向けていた。大剣を振りぬき、前掛りになった無防備な守に、雷轟鬼の左拳が襲い掛かる。

「グッ！」

単音の声を上げたのは雷轟鬼。その拳に深く刃が突き刺さり、鮮血が舞う。先程まで振り抜かれていたはずの刃が何故、拳に刺さっているのか、雷轟鬼には理解出来ない。だが、次の瞬間、突き刺さっていた刃が消え、光と共にもう一度守の手に現れた事で全てを理解する。守が具現化と解除の両方を上手い具合使い分けしていると言っ事に。

## 第九十九話 胸を貫く刃

晃と雷轟鬼の間に立つ守の手から、具現化されたフロードスクウエアが光と共に消滅する。

肩で息をする守が真っ直ぐに雷轟鬼を見据えた。

右拳から血を流す雷轟鬼は、そんな守の視線を見据え、更に怒りを募らせる。人間如きに、その身を傷付けられた事。それが、雷轟鬼のプライドも傷つけたのだろう。

怒りに滲んだその表情に、守の後ろに立つ晃が静かに微笑む。その手に握った刃を逆手に握り、ゆっくりと空へと振り上げる。真っ直ぐ下を向いた刃は、足元に横たわる奈菜の胸に向く形となった。その状態のまま動かず、唇だけを動かす晃は、瞼を閉じ更に刃を振り上げる。

そうとは知らず、両肩を大きく揺らす守は、胸の位置で揺れるフロードスクウエアを握り締め、静かに笑みを浮かべる。堂々として何か考えがある様な、そんな笑みを見せる守に、雷轟鬼も少なからず動揺していた。その動揺を見逃さず、守が右足を踏み込む。同時に行われたフロードスクウエアの具現化。刃が形成されるまで一瞬直後に切っ先が雷轟鬼の皮膚に触れ、遅れて雷轟鬼の体が回避運動を行う。

切っ先が先程よりも深く入り、胸の中心から右方向へ掛けて、赤い線を描いた。普通の鬼獣なら、きつとこの一撃で終わっているはずだ。だが、雷轟鬼は普通ではない。間違いなく、五大鬼獣を凌ぐ力を持っている。その証拠が、あの回避力。僅かに切っ先を掠めただけで済んだのは、その回避力があつたからだ。

フロードスクウエアの具現化が解け、守が膝に手を付く。

「クッ……」

『大丈夫か？』

「平気ツスよ。まだまだ、これからですから」

無理に笑ってみせる守だが、その疲労は相当の物だった。立っているだけでも辛いだろう状況で、具現化を何度も繰り返す。それはもう、守の気力がなせる業だろう。

ふら付く体を支える様に両足に力を込める。意識はまだはつきりしており、守はまだ戦えると判断し、力強く雷轟鬼を見据えた。

そんな守に、声が響く。彩の焦ったような声が。

「守！ 奈菜ちゃんが！」

彩の声が届き、その視線を奈菜の居る方へと向けた。

視線に映ったのは、奈菜の胸に向って切っ先を向ける晃の姿だった。一瞬、思考が乱れる。何が起こっているのか、状況を整理しようとするが、それより先に足音と共に風を切る音が耳に届く。遅れて聞こえるのはフロードスクウェアの声。何を言っているのか理解する前に、守の腹を雷轟鬼の左拳が決る。

腹部を襲う衝撃が背中から突き抜け、守の体がくの字に曲がり吹き飛ぶ。地面を激しく転げ、動きを止めた守は、咳き込むと同時に吐血する。肋骨を何本かやられ、気力までもをそぎ落とされた。

蹲る守の背後で聞こえる雷轟鬼の遠吠えが、大気を揺らす。震える漆黒の膜が更に震え、今にも裂けそうな勢いだ。

激痛に悶絶する守は、遠吠えの放つ振動に更なる苦しみを味わいながらも、体をゆっくりと起き上がらせる。完全にガス欠状態の守を心配するフロードスクウェアは、守にしか聞こえない小さな声で問う。

『もういいだろ。何で、お前だけがこんなに傷付き苦しみながら戦うんだ。お前は元々、ガーディアンじゃないんだ。戦う必要も無いだろ』

フロードスクウェアの意見は当然だった。だが、守はその言葉に  
対し、頑なに首を振り続け、苦しそうな笑みを浮かべ答える。

「別に……俺だけが、傷：付いてる……わけじゃない、ですよ。皆  
……傷付き、ながら……戦い続けてるんですよ……」

分かりきっていた事だった。守がそう答えるのは。それでも、フ  
ロードスクウェアには守を止めなければならない。このままでは、  
間違いなく死を迎える事になるからだ。今、ここで守を死なせるわ  
けには行かない。いや、守はここで死んでいい人物ではない。そう  
フロードスクウェアは直感していた。だからこそ、フロードスクウ  
エアもそこで退かず言葉を続ける。

『だからって、お前はこんな所で命を落とすつもりなのか！ 俺は  
そんなの認めない』

「な、に……言って……るん、です？ 俺は、は、じめから……い  
の、ちを落とす……気は、ない……ですよ」

『お前、バカか！ 死ぬ気は無くても、その体で戦えば、間違いな  
く命を落とす！』

それでも、守は頑なに首を振り、自らの意思が固い事を伝える。

両者の意見がぶつかり合う中で、雷轟鬼の遠吠えが止む。

突如として世界が変わった様に静まり返った。何かの前触れの様  
な静けさに、その場にいるサポートアームズ全てが、

『守！』

『彩様！』

『晃！』

『愛ちゃん……』



「姫！」

「マスター！」

「お兄ちゃん！」

「まどちゃん！」

「氷神様！」

同時に自らの主の名を呼ぶ。それは、自らの主に危険を知らせるのと、同時にその場からすぐに去る様にと伝えた言葉だった。だが、その場に居た誰もが動かなかつた。いや、その場に居た殆どがもう動く気力すら尽きていた。

そして、遂に異変が起きる。漆黒の膜に亀裂が走り、風が漏れる音が町中に響く。漏れると、言う発言は間違っているのだらう。正確には入り込んでいると、言うべきなんだらう。空気が入り、膨れて行く漆黒の膜。これが、破裂した時、果たして町はどうなるだらう。そう考えるだけで、恐ろしくなる。

奥歯を噛み締め、苦しみに耐える守が、右手でフロードスクウェアを掴み、

「やつ、ぱり……俺は、見過ごせない……。誰かが、やら、なきや……行けない事、だから」

優しく微笑み、腹部に走る激痛に耐えながらゆっくりと歩みを進める。一歩歩けば血を吐き出し歩みを止め、またゆっくりと一歩踏み出す。歩くたびに腹部の痛みが増し、守の表情も一層険しくなる。やはり、これ以上は動く事は無理と判断したフロードスクウェアは、静かに言葉を発した。

「お前、死ぬぞ。これ以上は無理だ！」

「それでも」

「キミは、簡単に命を捨てられるんだね」

守の言葉を遮ったのは、晃の声だった。静かだが何処か怒りの籠った声に、守の足が止まる。二人の視線が交わった。穏やかながらも、強い意志と怒りを宿した目が守をジッと見据え、静かな声が更に言葉を紡ぐ。

「キミは随分と周りから信頼されているみたいだけど、キミは何とも思わないのか？」

「……」

「返答しないと話す事は、何とも思っていないと見る。キミは自分の死がどう周りに影響するか、考えた事は無いのか？」

『何が言いたい！ ハッキリ言いやがれ！』

晃の声に、フロードスクウェアが叫ぶ。その声に対し、落ち着いた態度で晃が返答する。

「今、キミがやろうとしている事は無意味だ。無駄に命を捨てる事になるだけだ」

「なら……キミが、やろうと、している事は……意味が、ある……のか？」

「そうだね……。少なくともキミのしようとしている事よりは、意味のある事だよ」

『その娘の命を絶つ事が……か？』

フロードスクウェアの言葉に、一瞬晃の表情に陰りが見える。だが、すぐに表情は元の落ち着いた表情に変わり、

「それじゃあ、試してみようか」

と、告げ、振り上げた剣を奈菜の胸に振り下ろす。

「止める！」

守の制止に耳を貸さず、刃は胸を貫く。鈍い音と血飛沫が僅かに舞う。目の前の光景に、膝を落とし、項垂れる守。一方、刃を突き立てた晃も膝を落とし、その場で動かなくなった。

## 最終話 また、戻って来いよ〜再会を約束して〜

静まり返った青桜学園の屋上に守は居た。

町を覆っていた漆黒の膜は消滅し、空は夕焼けに染まり、町を寂しく照らしている。崩れかけの建物。崩れた建物。瓦礫、血痕、泣き声、悲鳴。町は惨劇と化していた。

その光景を目の当たりにし、守は強く拳を握り締めた。

結局、あの時守には何も出来なかった。町の人を守る事も、一人の少女を守る事も。そして、思い知った。自分がどれ程無力なのか。小さく息を吐き、胸元で静かに揺れるフロードスクウェアを手に取り、

「無力……ですね」

「……だな」

水晶が僅かに赤く光り、フロードスクウェアが静かに答える。

『だが、お前は良くやった。俺はそう思う』

「でも……結局、誰も守れなかった……」

俯いた守がぐくもった声でそう答えた。この時、フロードスクウェアは守の涙を初めて見た。どんな時でも笑ってみせる守の涙が、静かに頬を伝いフロードスクウェアの上に零れ落ちる。

静かに流れる時の中、思い返すのはあの時の光景。奈菜を貫いた刃が弾け、光の柱が上り漆黒の膜を突き破った。その瞬間に漆黒の膜は分解される様に消滅。最悪の事態は免れたが、元凶である達樹には逃げられてしまった。

その後の事は守もフロードスクウェアも良く覚えていない。守はショックで何も考えられず、フロードスクウェアも半分意識を失っ

ていたから。気付いた時には屋上におり、既に空が夕焼けに染まり始めていたのは覚えている。

小さく吐息を吐いた彩は、夕焼け空を見上げた。

色々考える事があるが、一番考えなければならぬ事が、この先の事だった。自分の担当の地区で、これ程の被害を出したとなれば、間違いなく責任問題となる。

組織の調査隊に連れて来られた簡易テント。円や武明、愛も一緒だった。五大鬼獣や他の人達は、調査隊や組織のメンバーが来る前に、消えていた。誰かが連れ去ったか、自力で去っていったのかは定かじゃないが、とりあえず無事なのは確かだろう。

もう一度小さく吐息を吐く彩は、ふと愛の方に視線を向けた。先程からずっと俯いたまま黙っている。

「大丈夫かな？」

ボソツと呟く。誰に話し掛けたわけでも無いが、その言葉に円が返答した。

「大丈夫よ。あんたが心配すること無いわよ」

「でも……」

『彩ちゃんが心配しても、しょうがないのよ。それに、愛ちゃんだって、分かっているのよ。彼が、こう言う選択をした理由を』

円のサポートアームズのエディがそう述べた。円の言う通り、彩が心配する事では無いが、何故か愛の事が気になった。それは、彼女のパートナー晃が、守と似ていたからそう感じたのだろう。自然と愛の前に立っていた。

「何？」

「彼の事」

「別に、アイツとはそういう関係じゃない。単なるパートナーではないから」

「でも……何だか、寂しそう」

彩の声に、複雑そうな表情を見せた愛が、薄らと笑みを見せる。その笑みがやはり寂しげに見え彩は、「ごめん」と小さな声で謝った。その言葉に対し、軽く首を振った愛は、冷やかな目を向け静かに答える。

「言っただろ。アイツは単なるパートナー。そんな関係じゃない。アイツがどうなろうと、私には関係ない。ただ……」

口籠った愛は、小さく鼻を噉った。やはり、彼女にとって彼の存在は 大きかったのだろう。

彼女のパートナー桜嵐晃は死んだ。あの戦いの最中、皆川奈菜に剣を突き立てて、光の柱が漆黒の膜を消し去ると同時に。胸から流れた血。脈など初めから無かった様に体は冷たくなり、彼の体は動かなくなっていた。彼の突き立てた剣も、奈菜の胸から完全に消え去り、残ったのは僅かな光の粒子だけだった。

その時は、何が起こったのか分からなかったが、達樹の言葉と愛の態度でその場に居た誰もが気付いた。彼の行った行動がなんだったのか。

達樹の言った言葉　クツ！　バカな事を　。そのまま拳を震わせ雷轟鬼と共にその場を離脱。と、同時に愛の冷やかな笑い声が響き、「お前……本当にバカな奴だよ」と、涙声で言ったのを、彩は覚えていた。

もし、あれが守だったら、と考えると、涙が滲んだ。何故、そうなったのか彩自身分からなかった。涙ぐむ彩に気付いたのか、愛が

小さな笑い声を上げる。

「クスツ……なんで、あんたが泣いてんだよ。あんた、アイツの事知らないだろ？」

「な、泣いてなんかない。ただ、少し悲しくなっただけ」

「ふうん。もし、自分のパートナーがそうなら……なんて、考えたのか？ まあ、あんたのパートナーも、アイツと似た所あるかな」

先程よりも少しだけ和らいだ笑みを浮かべる愛に、怒った様に顔を真っ赤にして怒鳴る。

「べ、別に、そんな事考えてないわ！ ちょ、ちょっと目にゴミ……が……」

そこまで言って言葉を詰まらせた。愛のあまりの切なそうな表情に。何を考え、何を思っているのか、彩には分からない。だから、黙る事しか出来なかった。

黙りこくる彩に気付いた愛は、もう一度笑みを見せる。無理に作った様な笑みだったが、今までで一番明るい笑顔だった。

何も出来ず、俯く彩。こんな時、どんな言葉を掛ければいいのか、考える。“泣いてもいいんだよ” “無理にしないで” “大丈夫だよ” 浮かんでくる言葉は、似た様な言葉ばかり。戸惑い口籠る彩に、言葉を続けたのは愛だった。

「あんたも……大変よね」

「へっ？」

「ああ言う連中は、残された人の気持ちとか考えないから……」

その言葉に「やっぱり」と呟くと、愛は首を軽く振り「違っわよ」

と続け、一度吐息を吐き、更に言葉を続ける。

「アイツの事……好きだった奴が居るのよ」

「へえ〜っ」

「もちろん、私じゃないから」

そう付け加えた愛が、彩の疑いの眼差しを真っ直ぐに見据える。

その目に僅かに照れ笑いを浮かべた彩は、「違うの?」と呟く。呆れた様に目を細める愛は、「違うわよ」と多少ドスの利いた声で言い、更に言葉を続ける。

「まあ、私も嫌いではなかったわ。パートナーとしては、結構頼りになったから。でもね……彼女はアイツの事をずっと思い続けていたから、きつとショックを受けると思う。家族も悲しむ……特に妹さん達は」

愛の切なげな表情が、彩の胸を打つ。家族 想い人 。守にも、そんな人が居る。だからだろう。守がもしもそうならと考え、複雑な気持ちになった。そんな彩の気持ちに気付いたのか、愛は無理に作った笑みでもう一度告げる。

「私は……平気だからさ。あんたは、あんたのパートナーの所に行つてやんな。きつと、色々と凹んでると思うからさ」

「……ごめん。色々……」

「良いって。私の方こそ、ごめん。色々、気い使わせて」

最後まで無理に作った笑みを見せた愛に、軽く頭を下げ彩はその場を去った。その時、愛が小さく言った「ありがとっ」と、言う言葉が胸にしまい。



昇降口を開くと夕闇に染まった空が目の前に広がった。冷たい夜風が優しく頬を撫で、肩で息をする彩の口の中をカラカラに乾かす。走った為乱れた着衣とセミロングの黒髪を整え、ゆっくりとした足取りでフェンスにもたれ掛かる守の方へと進む。

頂垂れる様に俯いた守が、足音に気付き静かに視線を上げる。

「こ、ここに居ただね」

ぎこちなくそう言って笑みを浮かべる彩に、守はゆっくりとフェンスから体を離し、少々よろめきながら笑う。

「ハハハ……心配掛けちゃいましたか？ すいません。急に居なくなっ……」

何処かおかしい。そう思ったのは、喋り方のせいだろう。フラフラと僅かに上半身を揺らす守に、彩は言葉を掛ける。

「守……大丈夫？」

「ええ……俺は、割と」

『平気そうに見えるか？』

口を挟んだのはフロードスクウェア。その言葉に「えっ？」と、驚きの声を上げたのは彩。少しの間の沈黙。そして、また、言葉が発せられる。

「ごめん……俺、何も出来なくて……」

僅かに上擦った声に、彩は俯き静かに答える。

「……ううん。そんな事無いよ」

「そんな事あるんだよ！ 今日、改めて分かった。俺は、無力。誰も守れない……って」

「けど」

『無力なのは、初めから分かってただろ』

彩の言葉を遮り、フロードスクウェアがそう述べた。奥歯を噛み締める守が、静かに拳を震わせる。そんな守に、フロードスクウェアは言葉を続けた。

『あの時、お前が言ったんだ。俺とお前は、最低最弱のコンビだって……。俺達は確かに無力だが、俺もお前もまだ可能性がある。これから先、強くなる可能性が』

「俺は……強くなっている、そう思ってた。でも、それは間違ってた……。俺は、あの時から何も変わってなかった。弱いままだったんだよ！」

二人の声が屋上に響き、冷たく乾いた風が吹き抜ける。また、言葉が詰まり、静寂が周囲を支配した。流れる風だけが音を奏で、その場を優しく包み込む。

どれ位の時が過ぎ様とした頃だろう。俯いた守が静かに口を開く。

「ごめん……。俺」

「守はさ、強くなってるよ……。きっと、もう私なんかよりもずっと……。だからさ、自分が弱いとか言わないでよ。ねえ」

寂しげな笑みを浮かべる彩が、この時眩しく見えたのは守だけだろう。胸に刻まれる晃の言葉と、今の彩の笑顔。胸が締め付けられる様に苦しくなり、守は俯き謝る。

「ごめん……水島」

「うっん……私こそゴメン、何の力にもなれなくて……」

「俺は、間違ってたんだな……自分が犠牲になってでも、誰かを守れば良いって、思ってたけど、違うんだな」

「んっ？ どう言う意味？」

不思議そうな顔をする彩に、守がゆっくりと歩み寄り、少し乱暴に頭を撫でた。その行動に驚き、戸惑う彩に、僅かながら優しい笑みを浮かべ、

「結局。何かを犠牲にして守っても、誰かが悲しむ。そう言う事ですよ」

彩の頭を撫でた手が、ゆっくりと守の頭の後ろに回され、いつもの様な穏やかな笑みが生まれた。その笑みに安心した様に吐息を吐いた彩は、嬉しそうに笑った。

この日、多くの命が奪われ、多くの血が流れた。その戦いに幕を下ろしたのは一人の少年。彼の行った行動は、一人の少女をいや、少女の中に存在する鍵を、自らのサポートアームズを使い封じる事。それは、“共喰らい”であり、初代ガーディアンマスターと命を共にした、彼のサポートアームズのみが、行う事の出来る封印の方法だった。

その方法は、“共喰らい”である彼のサポートアームズを、彼女の胸の奥に存在する鍵に突き立てる事。そして、代償は 彼の中に存在するサポートアームズのみ……のはずだった。だが、少年はサポートアームズを失うと同時に、自らの役目を果たした様に命を落とした。

理由は簡単な事だった。彼のサポートアームズである“共喰らい

”が、心臓の役割を果たしていたからだ。だから、サポートアームズを失った少年の体には、心臓は無くただ冷たく冷え切っていた。彼は知っていたのだらう。最後に光の中で呟いた。「ありがとう」と。

数日が過ぎ。

「そうですね……。戻るんですか」

玄関口で守がそう呟くと、荷物を詰めたバッグを足元に置いた彩が、寂しげに笑う。

「うん。やっぱり、前回みたいな事があったから……。多分、その事だと思う」

『まあ、静かになって良いじゃないか』

『な、何ですか！ その言い方は！ もう少し』

「こんな時に喧嘩は止めましょうよ」

ニコヤかに仲裁に入る守に、フロードスクウェアもウィンクロードも黙り込む。彩は今日この町を去る。やはり、あの事件が原因なのだろう。担当していた地区であんな大掛かりな事件を起こされたんだ。処分が無いはずが無い。覚悟はしていたが、彩は少しだけ涙目で笑う。

「今までありがとね」

「いえいえ。俺の方こそ、色々と教わりましたから」

「エへへ……そう言ってもらえると、嬉しいよ」

照れ臭そうに笑う彩の頭を、守が少々乱暴に撫でる。

「俺はお前のパートナー、だろ？ また、戻って来いよ」

「うん。分かっている。まあ、最低最弱のパートナーだけどね」

「酷い言われ様だな」

「フン。本当の事じゃないですか」

「んだと！ テメエ！」

「だから、喧嘩は」

「うるせえ！ 馬鹿にされて、黙ってられっか！」

「本当の事を言っただけが悪いんですか！」

結局、最後までフロードスクウェアとウインクロードは揉めていた。出会った時から変わらず、結局二人はこう言う関係なのだ。

小さく「クスッ」と笑った守。それにつられて「フフッ」と笑う彩。二人の笑い声は、フロードスクウェアとウインクロードの声に消されたが、その笑顔だけは消える事は無かった。そして、彩は再会を約束し守と別れた。

**最終話** また、戻って来いよ〜再会を約束して〜（後書き）

『ガーディアン』を最後まで読んでくださり、ありがとうございます。

作者の崎浜秀です。

番外を抜けば、丁度百話。連載を始めて三年位になるでしょうか？連載を始めた時から読み続けてくれた方が居れば、嬉しい限りです。

途中、更新をストップしたりしましたが、ここまで続けてこれたのは、読者の方がいてくれたからだと思います。ありがとうございます。

感想や評価も励みになり、勉強にもなりました。これから、書くであろう作品に活かせる様頑張りたいと思います。

まだまだ力量も足りず、読み難い作品だったと思いますが、最後まで読んでくださった方には感謝しています。

一応、続編を書く意欲はあります。その時は是非、よろしく願います。

最後にもう一度、最後まで読んでくださり、ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8166a/>

---

ガーディアン

2011年10月3日02時03分発行